松山市文化財調査報告書 105

－松山市道中村桑原線関連遺跡－

束本遺跡6次調査地
桑原遺跡2次調査地
桑原遺跡4次調査地

2005

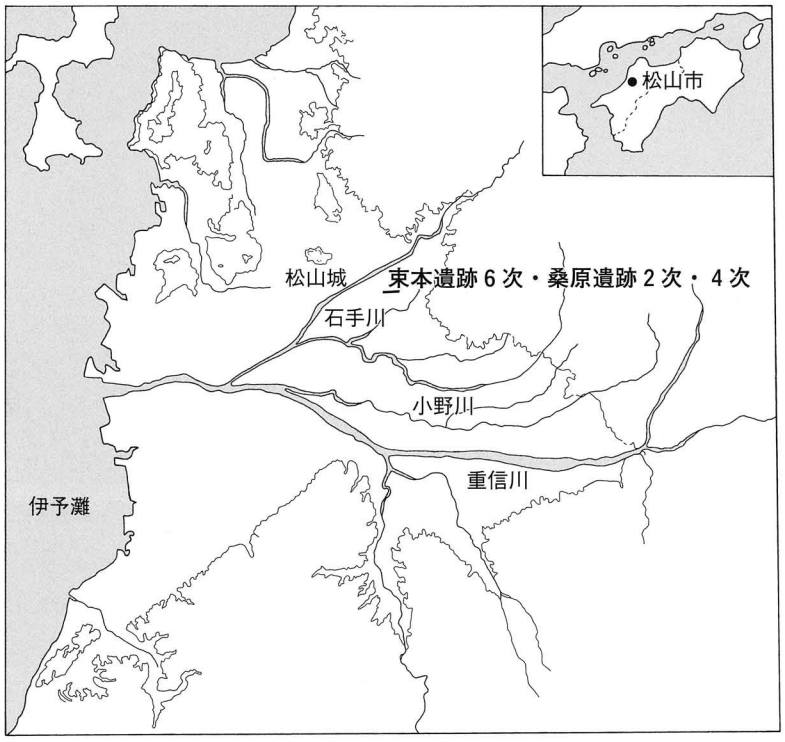
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

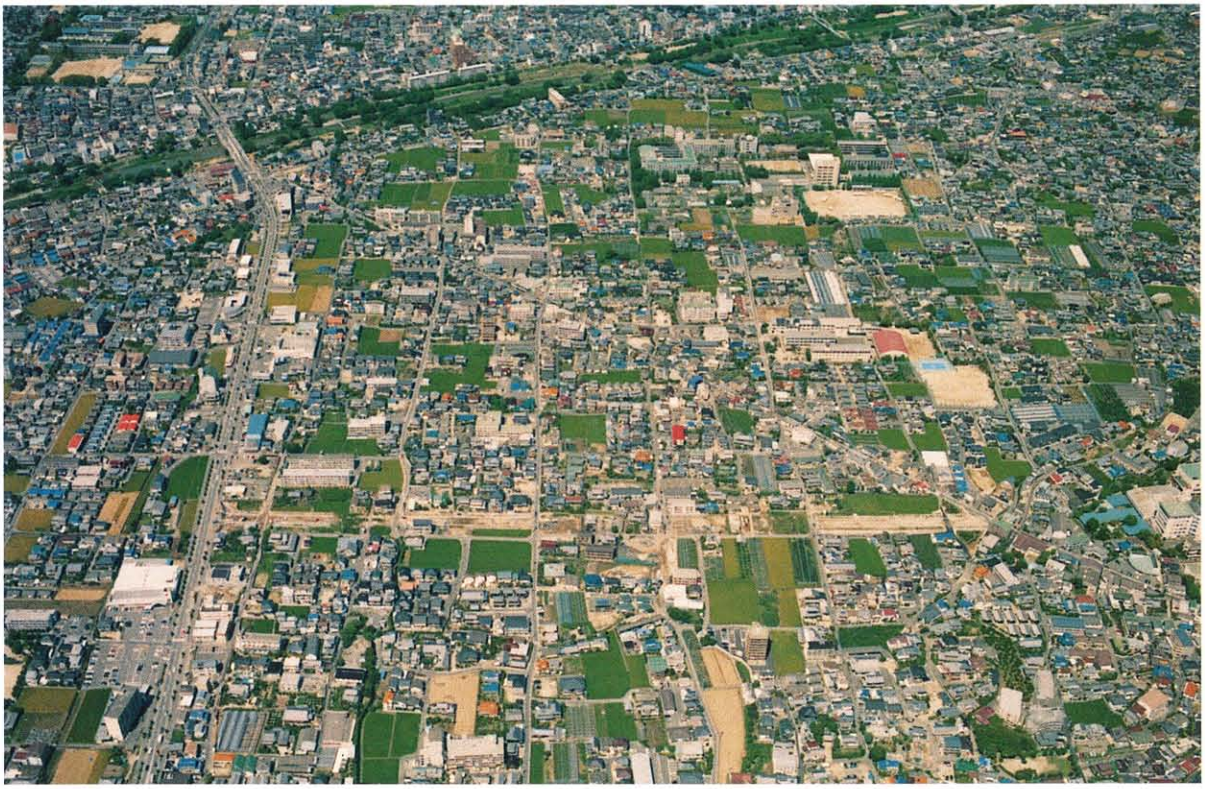
－松山市道中村桑原線関連遺跡－

東本遺跡6次調査地
桑原遺跡2次調査地
桑原遺跡4次調査地



2005

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



1．調査地遠景（航空写真、南より）

序

本書は、平成11年度から平成14年度までに、市道中村～桑原線１工区の道路改良工事に伴って実施した束本遺跡６次調査、桑原遺跡２次調査、桑原遺跡４次調査の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

本遺跡の所在する桑原地区は、石手川南岸に位置し平地部には弥生時代～古墳時代の集落が数多く存在し、丘陵部には古墳が数多く確認されています。なかでも樽味高木遺跡からは「船」の絵が描かれた弥生土器片が出土し、束本遺跡４次調査では弥生時代後期の周堤帯を伴う円形竪穴式住居址が見つかっています。そして樽味四反地遺跡７次調査、８次調査では古墳時代初頭の西日本最大級となる掘立柱建物址が見つかるなど重要な発見が相次いでおり、松山平野内で注目される地域となっています。

今回報告する束本遺跡６次調査、桑原遺跡２次調査、桑原遺跡４次調査からは弥生時代～中世までの多種に及ぶ遺構・遺物が見つかっています。特に束本遺跡６次調査の弥生時代後期の竪穴式住居址からは、鍛冶に関係する鉄片などが出土し、集落内における鉄器生産に関連する資料を得る事ができました。その他、桑原遺跡４次調査の４区で見つかった自然流路からは、弥生時代から中世までの土器、石製品、木製品など貴重な遺物が大量に出土しました。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、ひいては文化財保護・教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成17年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・（財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成11年11月～平成14年９月までに実施した松山市道中村桑原線１工区建設に伴う事前調査報告書である。

2．遺構の実測は、担当調査員および岡崎政信、栗林和孝、保島秀幸、峰本幸代、広田美知子が行った。遺構の撮影は、担当調査員と大西朋子が行った。

3．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、自然流路：ＳＲ、掘立柱建物址：掘立、倒木跡：倒木である。

4．本書にかかわる図面の作成は、相原浩二、武正良浩、吉岡和哉、岩本美保、村上真由美、木下奈緒美が行った。

5．遺物の接合および復元は青野茂子、徳田弘子、西川千秋、松本美代子、渡部英子、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子、村上真由美、岩本美保、木下奈緒美が行い、実測・製図は村上真由美、岩本美保、木下奈緒美が担当した。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位はすべて真北である。

8．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査及び報告書作成においては、愛媛大学下条信行、田崎博之、村上恭通の諸先生方には御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

10．本調査における基準点測量と航空写真撮影は、（株)国際航業に業務委託した。

11．本調査における自然科学分析は、（株)古環境研究所に業務委託した。

12．写真図版は、遺構の撮影を担当調査員と大西朋子が行い、遺物の撮影と図版作成は大西朋子が行った。

13．本書の執筆は相原浩二、武正良浩が分担執筆した。本書の編集は相原浩二が行い、栗田茂敏、武正良浩、吉岡和哉の協力を得た。

本　文　目　次

第１章　はじめに ―――――――――――――――――――――――― [相原]
　１．調査に至る経緯 ……1
　２．刊行組織 ……2

第２章　遺跡の概要 ―――――――――――――――――――――― [相原]
　１．地理的環境 ……3
　２．歴史的環境

第３章　調査の概要 ―――――――――――――――――――――― [相原]
　１．調査の経緯 ……7

第４章　束本遺跡６次調査地　　１区の調査 ―――――――― [相原]
　１．調査の経緯 ……11
　２．層位 ……13
　３．遺構と遺物 ……14
　４．小結 ……26

第５章　束本遺跡６次調査地　　２区の調査 ―――――――― [相原]
　１．調査の経緯 ……35
　２．層位 ……37
　３．遺構と遺物 ……40
　４．小結 ……52

第６章　桑原遺跡２次調査地 ―――――――――――――――― [相原]
　１．調査の経緯 ……63
　２．層位 ……65
　３．遺構と遺物 ……66
　４．小結 ……72

第７章　桑原遺跡４次調査地　　１区の調査 ―――――――― [相原]
　１．調査の経緯 ……79
　２．層位 ……81
　３．遺構と遺物 ……83
　４．小結 ……88

第８章　桑原遺跡４次調査地　　２区の調査 ――――― [相原]
１．調査の経緯 ……93
２．層位 ……95
３．遺構と遺物 ……98
４．小結 ……110

第９章　桑原遺跡４次調査地　　３区の調査 ――――― [武正]
１．調査の経緯 ……117
２．層位 ……118
３．遺構と遺物 ……122
４．小結 ……141

第10章　桑原遺跡４次調査地　　４区の調査 ――――― [相原]
１．調査の経緯 ……153
２．層位 ……155
３．遺構と遺物 ……157
４．小結 ……188

第11章　桑原遺跡４次調査地　　５区の調査 ――――― [武正]
１．調査の経緯 ……205
２．層位 ……207
３．遺構と遺物 ……208
４．小結 ……211

第12章　自然科学分析 ……215

第13章　まとめ ――――――――――――――― [相原] ……241

挿　図　目　次

第１図　調査対象地位置図（縮尺１：４,０００）……1
第２図　調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺１：２５,０００）……4
第３図　調査地と調査区位置図（縮尺１：４,０００）……7
東本遺跡６次調査地　－１区の調査－
第４図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……11
第５図　遺構配置図（縮尺１：１５０）……12
第６図　北壁土層図（縮尺１：４０）……13
第７図　ＳＢ101測量図（縮尺１：６０）……15
第８図　ＳＢ101炉測量図（縮尺１：４０）……16
第９図　ＳＢ101出土遺物測量図（縮尺１：６０，１：１０，１：５）……17
第10図　ＳＢ101出土遺物実測図（１）（縮尺１：４）……18
第11図　ＳＢ101出土遺物実測図（２）（縮尺１：４，１：２，１：１）……19
第12図　ＳＢ102測量図（１）（縮尺１：４０）……21
第13図　ＳＢ102測量図（２）（縮尺１：４０）……22
第14図　ＳＢ102出土遺物測量図（縮尺１：４０）……22
第15図　ＳＢ102出土遺物実測図（１）（縮尺１：４，１：２，１：１）……23
第16図　ＳＢ102出土遺物実測図（２）（縮尺１：２）……24
第17図　ＳＰ183測量図（縮尺１：１０）……25
第18図　ＳＰ183出土遺物実測図（縮尺１：３）……25
東本遺跡６次調査地　－２区の調査－
第19図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……35
第20図　遺構配置図（縮尺１：２００）……36
第21図　２西区西壁土層図（縮尺１：４０）……37
第22図　２西区南壁土層図（縮尺１：４０）……38
第23図　２東区東壁・南壁土層図（縮尺１：４０）……39
第24図　ＳＲ201測量図（縮尺１：２００）……41
第25図　ＳＲ201土層図（縮尺１：５０）……42
第26図　ＳＲ201 ３層出土遺物実測図（１）（縮尺１：４，１：２，１：１）……44
第27図　ＳＲ201 ３層出土遺物実測図（２）（縮尺１：３）……45
第28図　ＳＲ201 ２層出土遺物実測図（１）（縮尺１：３）……46
第29図　ＳＲ201 ２層出土遺物実測図（２）（縮尺１：３）……47
第30図　ＳＲ201 １層出土遺物実測図（縮尺１：３）……48
第31図　２東区遺構配置図（縮尺１：１００）……49
第32図　ＳＫ201測量図（縮尺１：１０）……50
第33図　ＳＫ201出土遺物実測図（縮尺１：３）……50

第34図　ＳＫ208，204，202，ＳＰ218測量図（縮尺１：６０，１：２０）……51
第35図　ＳＫ208，204，202，ＳＰ218出土遺物実測図（縮尺１：３，１：１）……52
第36図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……53

桑原遺跡２次調査地

第37図　調査地位置図（縮尺１：２,０００）……63
第38図　遺構配置図（縮尺１：１５０）……64
第39図　西壁土層図（縮尺１：４０）……65
第40図　ＳＤ１測量図（縮尺１：５０）……67
第41図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（縮尺１：３）……68
第42図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（縮尺１：３，１：１）……69
第43図　ＳＫ２測量図（縮尺１：４０）……70
第44図　ＳＫ２出土遺物実測図（縮尺１：３）……71
第45図　ＳＫ１測量図（縮尺１：４０）……71
第46図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺１：３）……72
第47図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……72

桑原遺跡４次調査地　－１区の調査－

第48図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……79
第49図　遺構配置図（縮尺１：１５０）……80
第50図　北壁土層図（縮尺１：４０）……82
第51図　ＳＫ101測量図（縮尺１：４０）……84
第52図　ＳＫ101出土遺物実測図（縮尺１：３，１：４）……84
第53図　ＳＫ102測量図（縮尺１：２０）……85
第54図　ＳＫ103測量図（縮尺１：４０）……86
第55図　ＳＫ103出土遺物実測図（縮尺１：３，１：４）……86
第56図　ＳＰ103，115測量図（縮尺１：１０）……87
第57図　ＳＰ103，115出土遺物実測図（縮尺１：３）……87
第58図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……88

桑原遺跡４次調査地　－２区の調査－

第59図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……93
第60図　遺構配置図（縮尺１：１６０）……94
第61図　南壁土層図（縮尺１：５０）……96
第62図　中世以降の遺構配置図（縮尺１：１６０）……97
第63図　掘立201測量図（縮尺１：６０）……98
第64図　掘立201出土遺物実測図（縮尺１：３）……98
第65図　ＳＰ2144，2145，2152，2169測量図（縮尺１：２０）……99
第66図　ＳＰ2144，2145，2152，2169出土遺物実測図（縮尺１：３）……99
第67図　ＳＫ207測量図（縮尺１：２０）……100
第68図　ＳＫ207出土遺物実測図（縮尺１：3,1：２）……100

第69図　ＳＫ208，209測量図（縮尺１：３０）……101
第70図　ＳＫ208，209出土遺物実測図（縮尺１：３）……101
第71図　ＳＤ203～ＳＤ212測量図（縮尺１：８０）……102
第72図　ＳＤ203，208，209，212出土遺物実測図（縮尺１：３）……103
第73図　古墳時代以前の遺構配置図（縮尺１：１６０）……104
第74図　ＳＫ211測量図（縮尺１：２０）……105
第75図　ＳＫ211出土遺物実測図（縮尺１：３）……105
第76図　ＳＤ201測量図（縮尺１：８０，１：４０）……107
第77図　ＳＤ201出土遺物実測図（縮尺１：４，２：３）……108
第78図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：４，１：３）……109
桑原遺跡４次調査地　－３区の調査－
第79図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……117
第80図　遺構配置図（縮尺１：１５０）……119
第81図　南壁・西壁・東壁土層図（縮尺１：８０）……121
第82図　ＳＫ316測量図（縮尺１：２０）……122
第83図　ＳＫ316出土遺物実測図（縮尺１：３，１：２，１：１）……122
第84図　掘立302測量図（縮尺１：４０）……123
第85図　掘立302出土遺物実測図（縮尺１：３）……124
第86図　掘立303測量図（縮尺１：４０）……124
第87図　掘立303出土遺物実測図（縮尺１：３）……124
第88図　掘立304測量図（縮尺１：４０）……125
第89図　掘立305測量図（縮尺１：４０）……126
第90図　掘立306測量図（縮尺１：４０）……127
第91図　掘立307測量図（縮尺１：４０）……128
第92図　掘立308測量図（縮尺１：４０）……129
第93図　掘立309測量図（縮尺１：４０）……130
第94図　掘立310測量図（縮尺１：４０）……131
第95図　ＳＡ301，302測量図（縮尺１：８０）……132
第96図　ＳＫ317，318測量図（縮尺１：２０）……133
第97図　ＳＫ319測量図（縮尺１：２０）……134
第98図　ＳＫ319出土遺物実測図（縮尺１：３）……134
第99図　ＳＫ320，322測量図（縮尺１：２０）……135
第100図　ＳＫ322出土遺物実測図（縮尺１：３，１：２）……135
第101図　ＳＫ323測量図（縮尺１：２０）……136
第102図　ＳＫ323出土遺物実測図（縮尺１：３）……136
第103図　ＳＤ313，314出土遺物実測図（縮尺１：３，１：２）……137
第104図　ＳＰ3476測量図（縮尺１：１０）……138
第105図　ＳＰ3476出土遺物実測図（縮尺１：３）……138

第106図 ＳＰ出土遺物実測図（１）（縮尺１：３）……139
第107図 ＳＰ出土遺物実測図（２）（縮尺１：２）……140
第108図 グリッド出土遺物実測図（縮尺１：３）……141
第109図 出土地点不明遺物実測図（１）（縮尺１：３，１：２）……142
第110図 出土地点不明遺物実測図（２）（縮尺１：３）……143
第111図 出土地点不明遺物実測図（３）（縮尺１：２）……144
桑原遺跡４次調査地　－４区の調査－
第112図 調査区位置図（縮尺１：２,０００）……153
第113図 遺構配置図（縮尺１：１５０）……154
第114図 北壁土層図（縮尺１：４０）……156
第115図 ＳＲ401測量図（１）（縮尺１：５０）……158
第116図 ＳＲ401測量図（２）（縮尺１：５０）……159
第117図 ＳＲ401下層遺物測量図（縮尺１：１００）……160
第118図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（１）（縮尺１：４）……162
第119図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（２）（縮尺１：４）……163
第120図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（３）（縮尺１：４）……164
第121図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（４）（縮尺１：４）……165
第122図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（５）（縮尺１：４）……166
第123図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（６）（縮尺１：４）……167
第124図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（７）（縮尺１：４）……168
第125図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（８）（縮尺１：４）……169
第126図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（９）（縮尺１：４）……170
第127図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（10）（縮尺１：４）……171
第128図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（11）（縮尺１：４）……172
第129図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（12）（縮尺１：４）……173
第130図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（13）（縮尺１：４）……174
第131図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（14）（縮尺１：４）……175
第132図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（15）（縮尺１：２）……176
第133図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（16）（縮尺１：４，１：６）……177
第134図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（17）（縮尺１：１，１：２）……178
第135図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（18）（縮尺１：４）……180
第136図 ＳＲ401下層出土遺物実測図（19）（縮尺１：４）……181
第137図 ＳＲ401中層出土遺物実測図（縮尺１：１，１：３）……182
第138図 ＳＲ401上層出土遺物実測図（１）（縮尺１：４，１：３）……183
第139図 ＳＲ401上層出土遺物実測図（２）（縮尺１：１，１：３）……184
第140図 ＳＲ401上層出土遺物実測図（３）（縮尺１：２）……185
第141図 掘立401測量図（縮尺１：３０）……186
第142図 ＳＰ411測量図（縮尺１：１０）……187

第143図　ＳＰ411出土遺物実測図（縮尺１：３）……187
第144図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……188
桑原遺跡４次調査地　－５区の調査－
第145図　調査区位置図（縮尺１：２,０００）……205
第146図　遺構配置図（縮尺１：１００）……206
第147図　東壁・西壁土層図（縮尺１：８０）……207
第148図　ＳＫ526, 527測量図（縮尺１：２０）……208
第149図　ＳＫ528測量図（縮尺１：２０）……209
第150図　ＳＫ531測量図（縮尺１：２０）……210
第151図　ＳＫ531出土遺物実測図（縮尺１：３）……210
第152図　ＳＫ534測量図（縮尺１：４０）……211
第153図　グリッド出土遺物実測図（縮尺１：１, １：２, １：３）……212
第154図　出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……213
自然科学分析
第155図　東本遺跡６次１区ＳＢ102植物珪酸体分析結果（１）……217
第156図　東本遺跡６次１区ＳＢ102植物珪酸体分析結果（２）……218
第157図　東本遺跡６次１区ＳＢ102植物珪酸体分析結果（３）……219
第158図　東本遺跡６次１区ＳＢ102花粉分析結果（１）……221
第159図　東本遺跡６次１区ＳＢ102花粉分析結果（２）……222
第160図　桑原遺跡４次４区ＳＰ411土師皿内植物珪酸体分析結果（１）……225
第161図　桑原遺跡４次４区ＳＰ411土師皿内植物珪酸体分析結果（２）……225
第162図　桑原遺跡４次４区ＳＰ411土師皿内植物珪酸体分析結果（３）……226
第163図　桑原遺跡４次４区ＳＰ411花粉分析結果……228
第164図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401種実同定結果……231
第165図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401モモ核計測値……232
第166図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401出土種実……233
第167図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401樹種同定結果（１）……237
第168図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401樹種同定結果（２）……238
第169図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401樹種同定結果（３）……239
第170図　桑原遺跡４次４区ＳＲ401樹種同定結果（４）……240

表　目　次

東本遺跡６次調査地　－１区の調査－
表１　ＳＢ101出土遺物観察表　土製品……27
表２　ＳＢ101出土遺物観察表　玉類……29

表３　ＳＢ101出土遺物観察表　石製品
表４　ＳＢ101出土遺物観察表　鉄製品
表５　ＳＢ102出土遺物観察表　土製品
表６　ＳＢ102出土遺物観察表　石製品……30
表７　ＳＢ102出土遺物観察表　玉類
表８　ＳＢ102出土遺物観察表　鉄製品
表９　ＳＰ183出土遺物観察表　土製品……32
東本遺跡６次調査地　－２区の調査－
表10　ＳＲ201　３層出土遺物観察表　土製品 ……55
表11　ＳＲ201　３層出土遺物観察表　玉類
表12　ＳＲ201　３層出土遺物観察表　石製品……56
表13　ＳＲ201　３層出土遺物観察表　土製品
表14　ＳＲ201　２層出土遺物観察表　土製品
表15　ＳＲ201　１層出土遺物観察表　土製品 ……58
表16　ＳＫ201出土遺物観察表　土製品……59
表17　ＳＫ208出土遺物観察表　土製品
表18　ＳＫ205出土遺物観察表　土製品
表19　ＳＰ218出土遺物観察表　銭貨
表20　ＳＫ202出土遺物観察表　銭貨……60
表21　出土地点不明遺物観察表　土製品
桑原遺跡２次調査地
表22　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品……73
表23　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品……74
表24　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品……75
表25　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品
表26　出土地点不明遺物観察表　土製品……76
桑原遺跡４次調査地　－１区の調査－
表27　ＳＫ101出土遺物観察表　土製品……89
表28　ＳＫ101出土遺物観察表　石製品
表29　ＳＫ103出土遺物観察表　土製品
表30　ＳＫ103出土遺物観察表　石製品
表31　ＳＰ103出土遺物観察表　土製品……90
表32　ＳＰ115出土遺物観察表　土製品
表33　出土地点不明遺物観察表　土製品
桑原遺跡４次調査地　－２区の調査－
表34　掘立201出土遺物観察表　土製品……111
表35　ＳＰ2144出土遺物観察表　土製品
表36　ＳＰ2145出土遺物観察表　土製品

表37　ＳＰ2152出土遺物観察表　土製品
表38　ＳＰ2169出土遺物観察表　土製品
表39　ＳＫ207出土遺物観察表　土製品……112
表40　ＳＫ207出土遺物観察表　鉄製品
表41　ＳＫ208出土遺物観察表　土製品
表42　ＳＫ209出土遺物観察表　土製品
表43　ＳＤ203出土遺物観察表　土製品
表44　ＳＤ208出土遺物観察表　土製品
表45　ＳＤ209出土遺物観察表　土製品
表46　ＳＤ212出土遺物観察表　土製品
表47　ＳＫ211出土遺物観察表　土製品……113
表48　ＳＤ201出土遺物観察表　土製品
表49　ＳＤ201出土遺物観察表　石製品
表50　出土地点不明遺物観察表　土製品
表51　出土地点不明遺物観察表　石製品……114
桑原遺跡４次調査地　－３区の調査－
表52　ＳＫ316出土遺物観察表　土製品……145
表53　ＳＫ316出土遺物観察表　玉類
表54　ＳＫ316出土遺物観察表　鉄製品
表55　掘立302出土遺物観察表　土製品
表56　掘立303出土遺物観察表　土製品
表57　ＳＫ319出土遺物観察表　土製品
表58　ＳＫ322出土遺物観察表　土製品
表59　ＳＫ322出土遺物観察表　鉄製品……146
表60　ＳＫ323出土遺物観察表　土製品
表61　ＳＤ313出土遺物観察表　土製品
表62　ＳＤ313出土遺物観察表　石製品
表63　ＳＤ313出土遺物観察表　銭貨
表64　ＳＤ314出土遺物観察表　土製品……147
表65　ＳＰ3476出土遺物観察表　土製品
表66　ＳＰ出土遺物観察表　土製品
表67　ＳＰ出土瓦観察表……148
表68　ＳＰ出土遺物観察表　鉄製品
表69　グリッド出土遺物観察表　土製品
表70　出土地点不明遺物観察表　土製品
表71　出土地点不明遺物観察表　玉類……149
表72　出土地点不明遺物観察表　土製品
表73　出土地点不明遺物観察表　銭貨……150

桑原遺跡４次調査地　－４区の調査－
表74　ＳＲ401下層出土遺物観察表　土製品……189
表75　ＳＲ401下層出土遺物観察表　石製品……197
表76　ＳＲ401下層出土遺物観察表　玉類……198
表77　ＳＲ401下層出土遺物観察表　木製品
表78　ＳＲ401中層出土遺物観察表　土製品……199
表79　ＳＲ401中層出土遺物観察表　玉類
表80　ＳＲ401上層出土遺物観察表　土製品……200
表81　ＳＲ401上層出土遺物観察表　銭貨……201
表82　ＳＲ401上層出土遺物観察表　鉄製品
表83　ＳＰ411出土遺物観察表　土製品
表84　ＳＰ411出土遺物観察表　鉄製品……202
表85　出土地点不明遺物観察表　土製品
桑原遺跡４次調査地　－５区の調査－
表86　ＳＫ531出土遺物観察表　土製品……214
表87　グリッド出土遺物観察表　土製品
表88　グリッド出土遺物観察表　鉄製品
表89　グリッド出土遺物観察表　銭貨
表90　出土地点不明遺物観察表　土製品

図　版　目　次

巻頭図版１．調査地遠景（航空写真、南より）
束本遺跡６次調査地　－１区の調査－
図版１　１．１区，２区全景（西より）
図版２　１．遺構検出状況（西より）
図版３　１．北壁土層（南より）　２．ＳＢ101検出状況（北より）
図版４　１．ＳＢ101遺物、炉検出状況（北東より）　２．ＳＢ101炉内遺物出土状況（北より）
図版５　１．ＳＢ101完掘状況（北東より）　２．ＳＢ102遺物出土状況（西より）
図版６　１．ＳＢ102焼土検出状況（北より）　２．ＳＢ102完掘状況（北東より）
図版７　１．ＳＢ102内ＳＫ102土層（南より）　２．ＳＰ183遺物出土状況（東より）
図版８　１．１区完掘状況（西より）
図版９　１．ＳＢ101出土遺物①
図版10　１．ＳＢ101出土遺物②
図版11　１．ＳＢ101出土遺物③
図版12　１．ＳＢ102出土遺物①

図版13　１．ＳＢ102出土遺物②
図版14　１．ＳＢ102出土鉄器Ｘ線写真、ＳＰ183出土遺物（109）
東本遺跡６次調査地　－２区の調査－
図版15　１．２区遺構検出状況（東より）　２．２西区ＳＲ201検出状況（東より）
図版16　１．ＳＫ201遺物出土状況（東より）　２．中世以降の遺構完掘状況（東より）
図版17　１．ＳＲ201掘削状況（東より）　２．ＳＲ201土層（南東より）
図版18　１．ＳＲ201 ３層出土遺物
図版19　１．ＳＲ201 ２層出土遺物
図版20　１．ＳＲ201 ２層出土遺物（162～165.171.175.179）、ＳＲ201 １層出土遺物（180～183）、
ＳＫ201出土遺物（198.199）、ＳＰ218出土遺物（204）、ＳＫ202出土遺物（205）
桑原遺跡２次調査地
図版21　１．調査前風景（南東より）　２．遺構検出状況（南東より）
図版22　１．ＳＤ１、ＳＫ２検出状況（東より）　２．ＳＤ１遺物出土状況（東より）
図版23　１．ＳＤ１南壁土層（北東より）　２．ＳＫ２遺物出土状況（南より）
図版24　１．ＳＤ１、ＳＫ２完掘状況（南より）　２．完掘状況（東より）
図版25　１．ＳＫ２出土遺物（253.254.259.263.266）、ＳＸ１出土遺物（267.268.270～272.277.278）
図版26　１．ＳＤ１出土遺物
桑原遺跡４次調査地　－１区の調査－
図版27　１．調査前風景（西より）　２．北壁土層（南より）
図版28　１．遺構検出状況（西より）
図版29　１．遺構完掘状況（西より）
図版30　１．ＳＫ101出土遺物（284～287）、ＳＫ103出土遺物（288～290）
桑原遺跡４次調査地　－２区の調査－
図版31　１．調査前風景（西より）　２．第Ⅴ層上面遺構検出状況（西より）
図版32　１．ＳＫ208遺物出土状況（南より）　２．ＳＫ207検出状況（東より）
図版33　１．ＳＫ207土層（北より）　２．ＳＫ207完掘状況（北より）
図版34　１．遺構完掘状況（中世）、第Ⅵ層上面ＳＤ201検出状況（南より）
２．ＳＫ211遺物出土状況（西より）
図版35　１．ＳＤ201完掘状況（南より）　２．完掘状況（西より）
図版36　１．ＳＤ201出土遺物（317.318.321～323.326）、ＳＰ2169出土遺物（301）、
ＳＫ207出土遺物（304）、ＳＫ211出土遺物（316）
桑原遺跡４次調査地　－３区の調査－
図版37　１．調査前風景（南東より）　２．遺構検出状況（東より）
図版38　１．ＳＫ316完掘状況（北より）　２．ＳＫ319完掘状況（北より）
図版39　１．ＳＰ3476遺物出土状況（南より）　２．完掘状況（東より）
図版40　１．ＳＫ316出土遺物(356～358)、ＳＤ313出土遺物(380)、出土地点不明遺物(433～435.450)
桑原遺跡４次調査地　－４区の調査－
図版41　１．４西区遺構検出状況（南東より）　２．４西区北壁土層（南より）
図版42　１．ＳＰ411遺物出土状況（南より）　２．４西区中世以降の遺構完掘状況（北より）

図版43　１．４西区ＳＲ401掘削状況（西より）　２．４西区ＳＲ401下層出土遺物（西より）
図版44　１．４西区ＳＲ401測量風景（西より）　２．４西区ＳＲ401完掘状況（北より）
図版45　１．４東区調査前風景（西より）　２．４東区掘削状況（西より）
図版46　１．４東区遺構検出状況（北より）　２．４東区ＳＤ401完掘状況（西より）
図版47　１．４東区掘立401検出状況（南より）　２．４東区ＳＲ401遺物出土状況（西より）
図版48　１．４東区ＳＲ401遺物出土状況（西より）　２．４東区ＳＲ401遺物出土状況（北より）
図版49　１．４東区ＳＲ401遺物出土状況（北東より）　２．４東区ＳＲ401土層（南より）
図版50　１．４東区ＳＲ401完掘状況（北東より）　２．４東区完掘状況（西より）
図版51　１．ＳＲ401下層出土遺物①
図版52　１．ＳＲ401下層出土遺物②
図版53　１．ＳＲ401下層出土遺物③
図版54　１．ＳＲ401下層出土遺物④
図版55　１．ＳＲ401下層出土遺物⑤
図版56　１．ＳＲ401下層出土遺物⑥
図版57　１．ＳＲ401下層出土遺物⑦
図版58　１．ＳＲ401下層出土遺物⑧
図版59　１．ＳＲ401下層出土遺物⑨
図版60　１．ＳＲ401下層出土遺物⑩（701.713）、ＳＲ401中層出土遺物（715.727.728）、ＳＲ401上層出土遺物（763.764）、ＳＰ411出土遺物（772～774）

桑原遺跡４次調査地　－５区の調査－

図版61　１．調査前風景（南東より）　２．遺構検出状況（北より）
図版62　１．西壁土層（南より）　２．ＳＫ534完掘状況（東より）
図版63　１．遺構完掘状況（北より）　２．現地説明会風景

第１章　はじめに

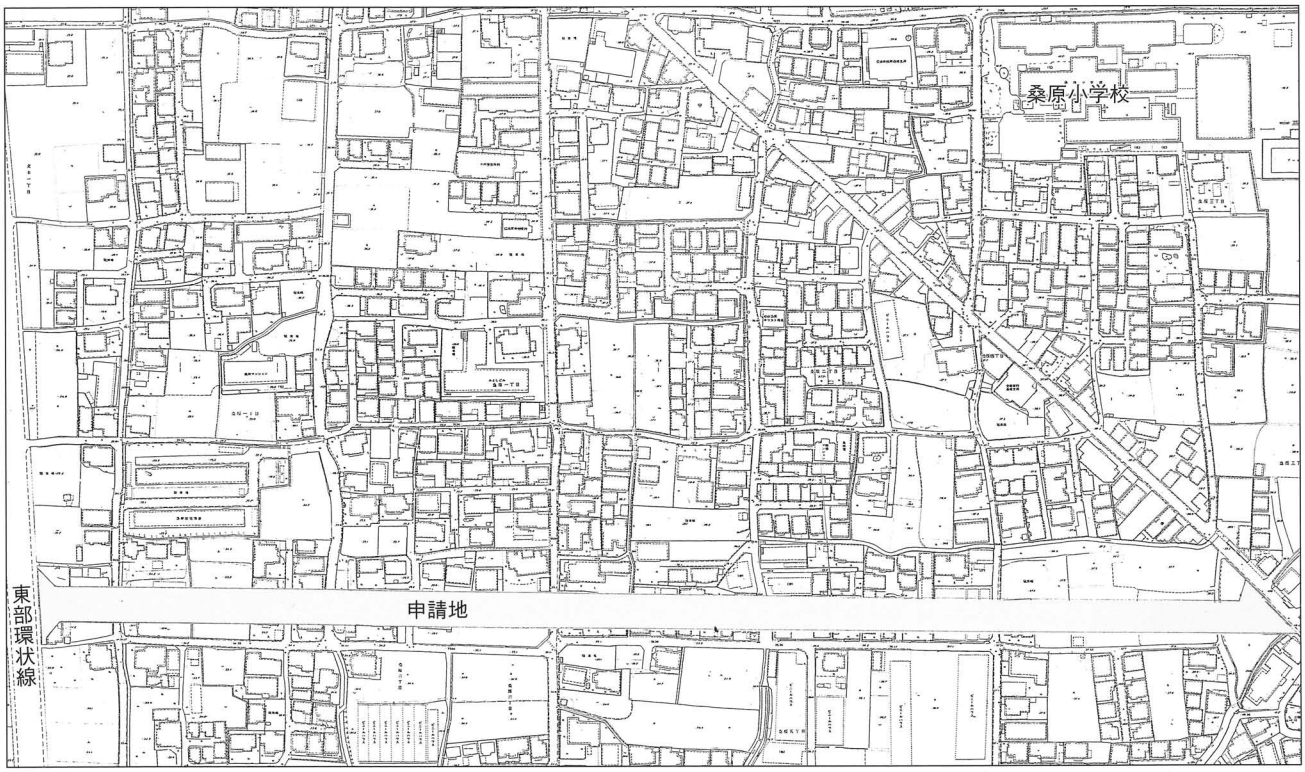
１．調査に至る経過

1999（平成11）年５月25日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道中村～桑原線（松山市東本町～桑原町）道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

確認願いが申請された束本１丁目外は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.82　束本遺物包含地』『No.157　桑原遺物包含地』内にあり、周知の包蔵地として知られる。申請地周辺はこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古墳時代にかけての集落関連遺構が確認されており、松山平野の主要な遺跡地帯として知られている。

文化教育課では、確認願いが申請された地点について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、試掘調査を実施する事となった。試掘調査は、建設工事の工程や既存建物の立ち退き状況によって数回に分けて実施した。1999（平成11）年９月、申請地の東端にあたる桑原３丁目359-1外と申請地西端の束本１丁目117-6外の２ヶ所において１回目の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構・遺物が検出され、弥生時代～中世に至る集落関連の遺跡があることを確認した。

この結果を受け文化財課、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと道路建設課の三者は発掘調査について協議を行い、本格調査を実施する事となった。調査は、弥生時代～中世の集落構造の解明と範囲確認を主目的とし、1999（平成11）年11月～2002（平成14）年９月迄に野外調査を実施した。



第１図　調査対象地位置図（S=1: 4,000）

2．刊行組織

（平成17年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	久保　浩三
	企画官	石丸　修
	企画官	丹生谷博一
	企画官	仙波　和典
文化財課	課長	篠原　忠人
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	石丸　允良
	事務局次長	池田　政勝
埋蔵文化財センター	所長	杉田　久憲
	専門官兼学芸係長	早瀬　忠幸
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	管理係長	岸本　照修
	調査担当	栗田　茂敏・相原　浩二・武正　良浩
		吉岡　和哉・大西　朋子

第２章　遺跡の概要

１．地理的環境

松山平野は県下最大の平野であり、主に重信川によって形成された扇状地である。その支流の一つである石手川は、高縄山に源を発し平野の北東部を南西方向に向け横断しながら小野川と重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。この石手川は溝辺町周辺から南西に向かって大規模な扇状地を形成する。その扇状地の石手川左岸、標高34ｍ～38ｍに今回の調査地は立地する。

束本遺跡、桑原遺跡が立地する扇状地面は、約23,000年前の姶良（ＡＴ）火山灰の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定されている。しかし、この火山灰層直上に火山灰混じりの砂礫層が堆積していることから、この地で姶良火山灰の降下・堆積後に短期間の洪水のような現象が起こったと推測される。しかし、その後は小河川の流路に沿って、部分的に小規模な洪水や砂礫の堆積が起こったが、石手川本流による激しい洪水に襲われることなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったと推定されている〔平井幸弘1989〕。

２．歴史的環境

本遺跡一帯は桑原地区と称され、数多くの遺跡が存在する。古代この地区は「和名抄」による温泉郡五郷のうちの桑原郷で、後世桑原郷は桑原村、正円寺村、樽味村、松末村、三町村、東野村、畑寺村、新百姓村（現束本町）、小坂村、枝松村、中村の十一ヶ村に区分されている。

これまでの調査で弥生時代～古代にかけての竪穴式住居址・土坑・溝などの集落遺構が検出され同地区における集落の存在と規模が明確になり始めている。ここでは、近年に調査された遺跡を中心に桑原地区の遺跡の展開を概説する。

旧石器時代

当地区に限らず、松山平野全域においても、これまでに旧石器時代の明確な遺構は発見されていない。しかし、樽味遺跡・樽味四反地遺跡においてはポケット状に堆積したＡＴ火山灰土を確認し、束本遺跡４次調査地ではＡＴ火山灰の一次堆積層を確認している〔高尾和長1996〕。

縄文時代

束本遺跡４次調査地では、縄文時代早期にあたる6,300年前のアカホヤ火山灰層が検出されている。このアカホヤ火山灰層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかっている。また、アカホヤ火山灰降下以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから同調査地では、縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている。このほか、樽味立添遺跡・桑原田中遺跡からは刻目突帯をもつ土器が各１点が出土している。

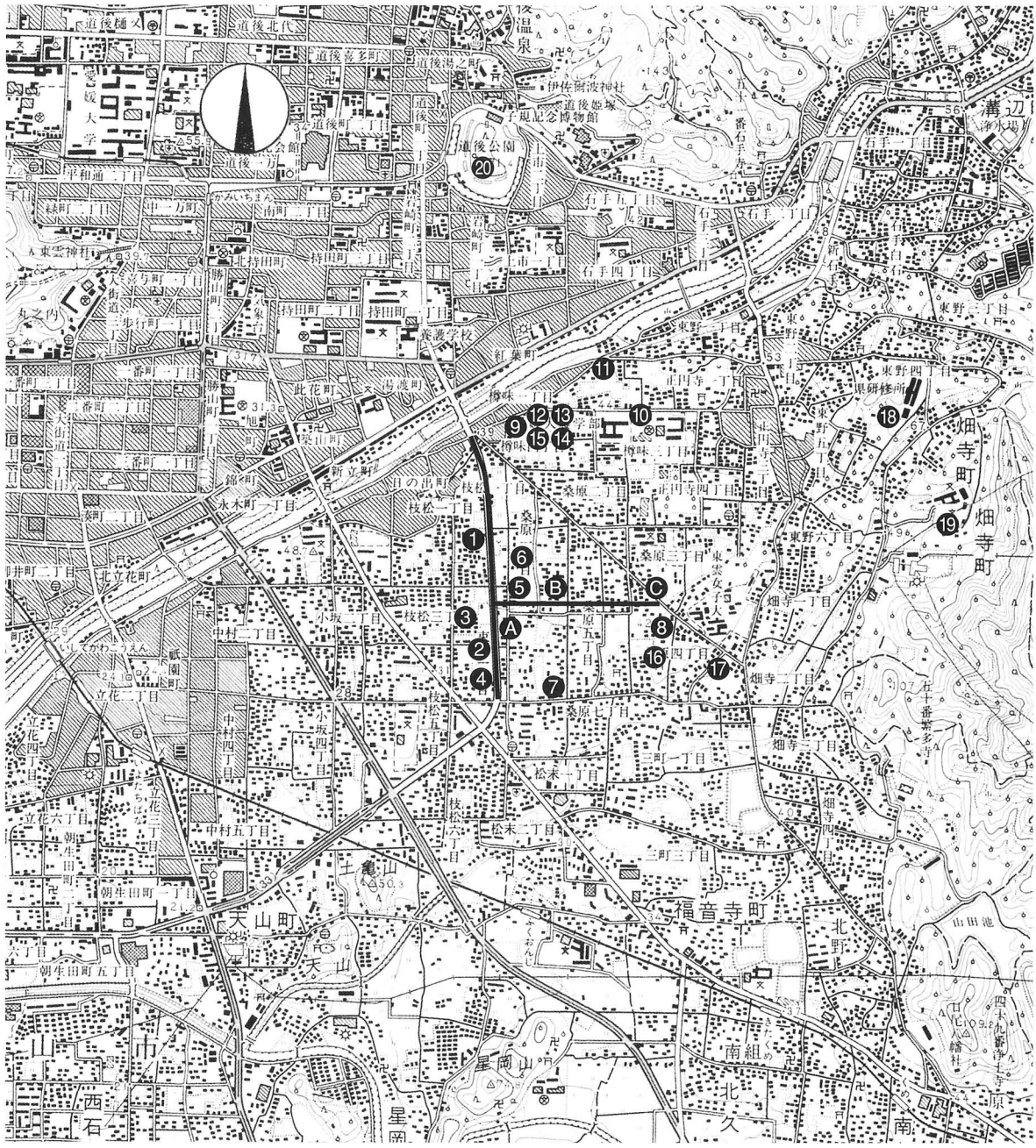
弥生時代

前期では、樽味遺跡より前期前半の土坑（ＳＫ５）と溝（ＳＤ４）、樽味高木遺跡からは前期後半の土器を検出し、桑原田中遺跡２次調査地でも土器片を検出している。

中期では、樽味高木遺跡１～３次調査地から中期後半の土器が出土している。特に２次調査地の

ＳＢ１と３次調査地のＳＸ１からは資料性の高い土器が出土している。樽味四反地遺跡５次調査地のＳＢ８からは弥生時代中期後半～後期初頭の遺物が出土している。

後期では、調査地北部の樽味高木遺跡２次調査地からは後期の竪穴式住居址、樽味四反地遺跡２～５次調査地から弥生時代後期末の竪穴式住居址を検出しており、この地域に弥生時代後期～後期末にかけて集落が広がっていたことを示すものである。遺物では樽味立添遺跡の包含層中より『貨泉』の出土がある〔梅木謙一1989〕。また、樽味高木遺跡３次調査地からは「船」を描いた線刻（絵画）土器が出土している〔梅木謙一1992〕。また、調査地の北側に隣接する束本遺跡５次調査地では円



Ⓐ束本遺跡６次調査地
❶束本遺跡４次調査地
❷枝松遺跡４次調査地
❸枝松遺跡３次調査地
❹束本遺跡
❺桑原稲葉遺跡
Ⓑ桑原遺跡４次調査地
❻桑原高井遺跡
❼桑原田中遺跡
❽桑原本郷遺跡
❾樽味四反地６・８次調査地
❿樽味遺跡
Ⓒ桑原遺跡２次調査地
⓫樽味立添遺跡
⓬樽味高木２次調査地
⓭樽味高木３次調査地
⓮樽味高木遺跡
⓯樽味四反地遺跡４次調査地
⓰経石山古墳
⓱三島神社古墳
⓲東野お茶屋台遺跡
⓳畑寺竹ヶ谷古墳群
⓴湯築城跡

第２図　調査地周辺の主要遺跡分布図（S=1: 25,000）

形竪穴式住居址５棟、方形竪穴式住居址２棟が検出されている。これら住居址は、方形竪穴式住居址１棟を除く全てにベッド状施設が付設されている。円形竪穴式住居址であるＳＢ５は、炭化材や焼土の検出状況から焼失住居と考えられている。

西部、南部においても集落址が検出されている。調査地の西側に隣接する、束本遺跡４次調査地からは大型・中型・小型の竪穴式住居址を検出している。大型住居であるＳＢ203では周堤帯を検出し、ＳＢ302からは破鏡が出土している〔高尾和長1996〕。束本遺跡２次調査地では、竪穴式住居址２棟と掘立柱建物址や土坑が検出されている。枝松遺跡３次調査地では、貼り付けによる高床部をもつ竪穴式住居址が検出されている。桑原稲葉遺跡では、円形と方形の竪穴式住居址１棟を検出している。

調査地南部の桑原高井遺跡では、竪穴式住居址５棟のほか土坑が検出されている。住居址には円形と方形の二種類があり、これらは壁体に沿って周溝がめぐる。このうち、２号住居址は平面形態が六角形を思わせるような円形を呈する。柱穴は中心部に１本と壁体に沿って６本の計７本からなり、ベッド状施設を付設している〔森光晴1980〕。

古墳時代

古墳時代では、樽味四反地遺跡６次調査地で弥生時代後期末～古墳時代初頭の区画溝と柵列を伴うと考えられる総柱構造の大型掘立柱建物址１棟を検出している〔小玉亜紀子1999〕。さらに、南側に隣接する同８次調査地からも総柱構造の大型掘立柱建物址１棟が検出されている〔加島次郎2003〕。この他に、６次調査地からは古墳時代中期～後期初頭頃の竪穴式住居址を多数検出し、これらの住居址からは滑石製の臼玉やガラス小玉、瑪瑙製の勾玉が出土している。桑原遺跡３次調査地からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝１が検出されている。樽味高木遺跡の竪穴式住居址や土坑からは５世紀代の須恵器・土師器の甕・壺・高坏などが出土している。また、桑原本郷遺跡では、５世紀後半の方形竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、さらに包含層より滑石製の臼玉100点余りが須恵器と共に出土している〔栗田茂敏1987〕。樽味立添遺跡からは10数棟の竪穴式住居址と掘立柱建物址（古墳時代後期以降）を検出し、樽味四反地遺跡５次調査地においても６棟の竪穴式住居址を検出している〔高尾和長1998〕。桑原遺跡５次調査地では、溝から６世紀代と考えられる斎串や木錘などが出土している。

桑原地区では、集落関連遺構だけではなく前方後円墳である経石山古墳と三島神社古墳の２基が古くから知られている。経石山古墳は全長48.5ｍを測り、５世紀末に時期比定されている〔森光晴1980〕。三島神社古墳は全長45ｍを測り、初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ。出土遺物より６世紀前葉に比定されている〔森光晴1986〕。この三島神社古墳は、発掘後に削平され消滅している。

また、桑原地区の東側丘陵部には東野お茶屋台古墳群、畑寺竹ヶ谷古墳群、畑寺古墳群が存在する。東野お茶屋台古墳では周溝から５世紀後半の須恵器が出土している。東野お茶屋台遺跡５次調査地では、７世紀初頭の横穴式石室が調査されている。畑寺竹ヶ谷古墳においても周溝内から須恵器や直刀が出土している。畑寺古墳群内にある６世紀中頃～後半の畑寺６号墳では、内部主体は不明ながら埴輪列を検出している〔河野史知1997〕。

古代・中世

樽味四反地遺跡５次調査地のＳＲ１からは７～８世紀の土器と共に須恵器の硯４個体が出土している〔高尾和長1998〕。硯は、松山平野では希少な資料であり注目される。樽味四反地遺跡では10

世紀代に比定される溝ＳＤ１・ＳＤ２が検出されている。また、樽味遺跡のＳＤ１・ＳＤ２からは14世紀後半、ＳＤ３・ＳＫ５からは15世紀代の土師器が出土している。特にＳＤ１は集落境界の溝として位置づけられている。なお、樽味遺跡一帯は14～16世紀にかけて当地方で権力を握っていた河野氏の支配範囲に入っていたのではないかと考えられている〔宮本一夫1989ｂ〕。

また、桑原地区は中世河野氏から重視された出雲房宗賢が居住し、地名を姓として桑原城を築き、子孫もまた河野氏譜代の旗頭として統治したところとされている。

〔参考文献〕

梅木　謙一　1992「樽味立添」「樽味高木」「樽味四反地」「桑原西稲葉１・２次」「桑原田中」「経石山古墳」「枝松３次」『桑原地区の遺跡』　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木　謙一　1994「樽味高木２・３次」「樽味四反地２・３・４次」「桑原田中２次」『桑原地区の遺跡Ⅱ』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田﨑　博之　1993「樽味遺跡２次調査報告」『樽味遺跡Ⅱ』　愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ・愛媛大学埋蔵文化財調査室

梅木　謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』　松山市教育委員会

森　　光晴　1980「東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」『松山市文化財調査報告書』、「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史　資料編　考古』　松山市教育委員会

松村　淳　　1989「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会

岡田　俊彦　1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田　茂敏　1987「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』　松山市教育委員会

平井　幸弘　1989「鷹子遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

平井　幸弘　1989「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ自然科学．９』　愛媛大学

宮本　一夫　1989a「道後平野における弥生時代開始時期の動向」
1989b「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に－」『鷹子・樽味遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室

西尾　幸則　1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史　資料編考古』　愛媛県史編纂委員会

高尾　和長　1996『東本遺跡４次調査地・枝松遺跡４次調査地』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

高尾　和長　1998「樽味四反地遺跡５次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野　史知　1997「畑寺６号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小玉亜紀子　1999「樽味四反地遺跡６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報11』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

加島　次郎　2003「樽味四反地８次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報15』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市史料集編集委員会　1980『松山市史料集第一巻　考古編Ⅰ』

松山市史料集編集委員会　1986『松山市史料集第二巻　考古編Ⅱ』

愛媛県教育委員会　1987『愛媛県中世城館跡－分布調査報告－』

第３章　調査の概要

１．調査の経緯

調査地は、松山東部環状線に接する束本１丁目117-６から東に向かい、市道桑原130号線につきあたる桑原４丁目359-２までの全長650ｍ、道路幅員18ｍ、調査対象面積は11,700㎡である。調査にあたっては、道路部分の土地の買収や家屋の撤去に伴って試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された地点について順次本格調査を行なった。

遺跡名については、字名を付けないこととし、これまでに束本町内では１次～５次の調査が行われ、桑原町では１次の調査が行われている。したがって今回の調査地は束本町内を束本遺跡６次調査地、桑原町内を桑原遺跡２次・４次調査地として調査を進めた。ただし、束本遺跡６次調査地の２区は桑原町となるが調査の都合上、束本遺跡６次調査地とした。

各遺跡名の位置と調査地番、面積、調査期間は以下に記した。

第３図　調査地と調査区位置図

●束本遺跡6次調査地

調査地番　　1区　束本1丁目117-6、118
　　2区　桑原6丁目767、766-1、765-1

調査面積　　900m²（1区328m²、2区572m²）

調査期間　　2000（平成12）年3月6日～同年6月30日

●桑原遺跡2次調査地

調査地番　　桑原4丁目359-1、359-2

調査面積　　230m²

調査期間　　1999（平成11）年11月29日～同年12月17日

●桑原遺跡4次調査地

調査地番　　1区　桑原4丁目715-1、715-4
　　2区　桑原4丁目718、718-1
　　3区　桑原5丁目9-12、9-8
　　4区　桑原5丁目9-2、9-41
　　5区　桑原5丁目10-10、10-11

調査面積　　1,348m²（1区205m²、2区420m²、3区271m²、4区300m²、5区152m²）

調査期間　　2000（平成12）年7月6日～2002（平成14）年9月13日
　　1区　2000（平成12）年7月6日～同年7月27日
　　2区　2000（平成12）年7月28日～同年12月1日
　　3区　2001（平成13）年4月6日～同年8月17日
　　4区　2002（平成14）年4月16日～同年9月13日
　　5区　2001（平成13）年8月22日～同年9月28日

第４章

束本遺跡6次調査地

－１区の調査－

第４章　１区の調査

１．調査の経緯

１区は調査対象地の西端にあたり、調査前は造成地である。１区の調査面積は328m²である。以下、調査工程を略記する。

2000（平成12）年４月24日より重機により表土等の掘削を開始する。

５月１日～５月12日、遺構の検出作業を開始し、周堤帯を伴う円形竪穴式住居址１棟と方形竪穴式住居址１棟の他、柱穴などを検出する。調査区に国土座標に載った５mのメッシュ杭を設定し、遺構配置図を作成する。高所作業車を利用し遺構検出状況の写真撮影を行う。

５月15日　竪穴式住居址ＳＢ101、102など遺構の掘り下げを開始する。

５月18日　ＳＢ101出土遺物の測量。ＳＢ102の焼土精査を行い焼土の分布状況を測量する。

５月23日　ＳＢ101主柱穴、床面、炉、周堤帯の精査を行う。

５月29日　ＳＢ101の調査を終了し、写真の撮影を行う。

５月30日　ＳＢ102の焼土除去作業と遺物検出作業を開始する。埋土中より鉄片を検出する。

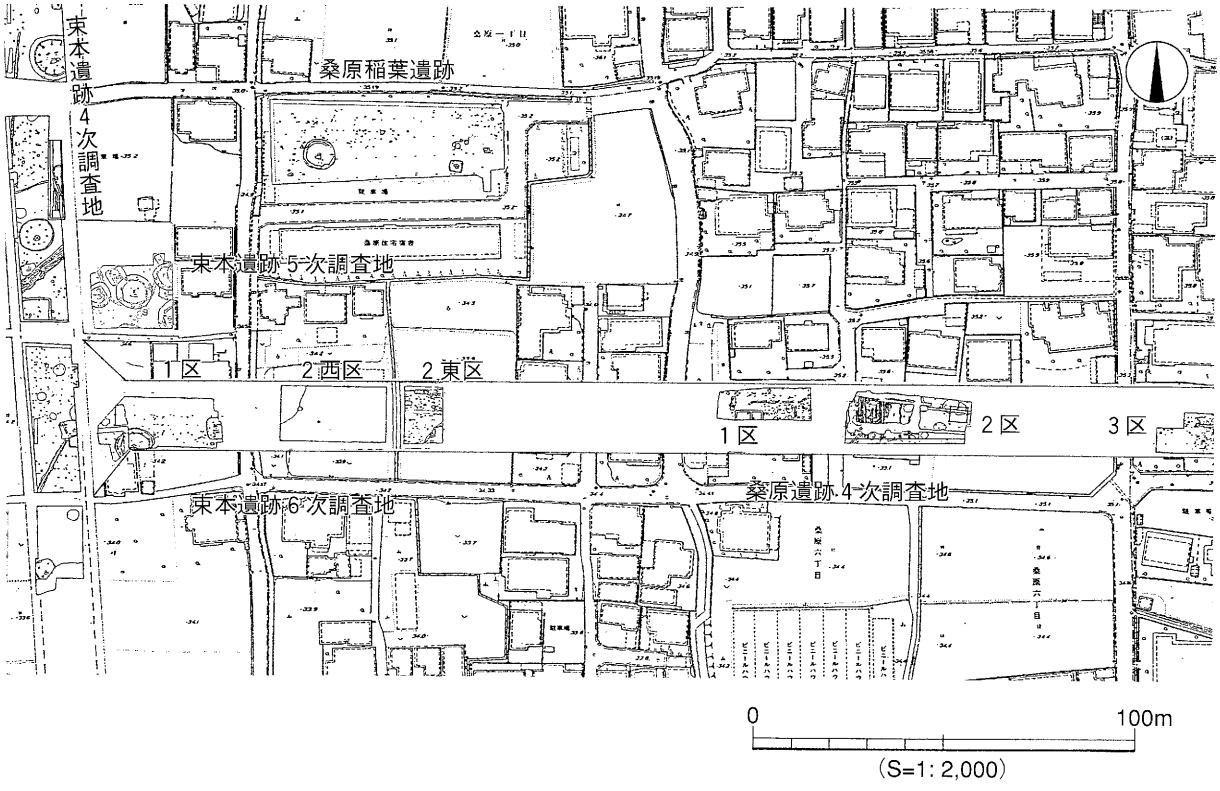
６月６日　ＳＢ102の床面の精査を行う。

６月20日　ＳＢ102の調査を終了し、写真の撮影を行う。

６月22日　竪穴式住居址を除く遺構の完掘と測量図の作成を終了する。

６月24日　一般市民を対象とした現地説明会を開く。

６月26日　ＳＢ101の貼り床の除去作業を行う。



第４図　調査区位置図

X:92215
X:92225
D
C
B
A
現代坑
現代坑
現代坑
A（土層図ポイント）
B
SK104
SB101
SP183
SK103
SB102
SK102
SK101
1
2
3
4
5
6
7
Y:-65710
Y:-65700
Y:-65690
0
5m
(S=1: 150)

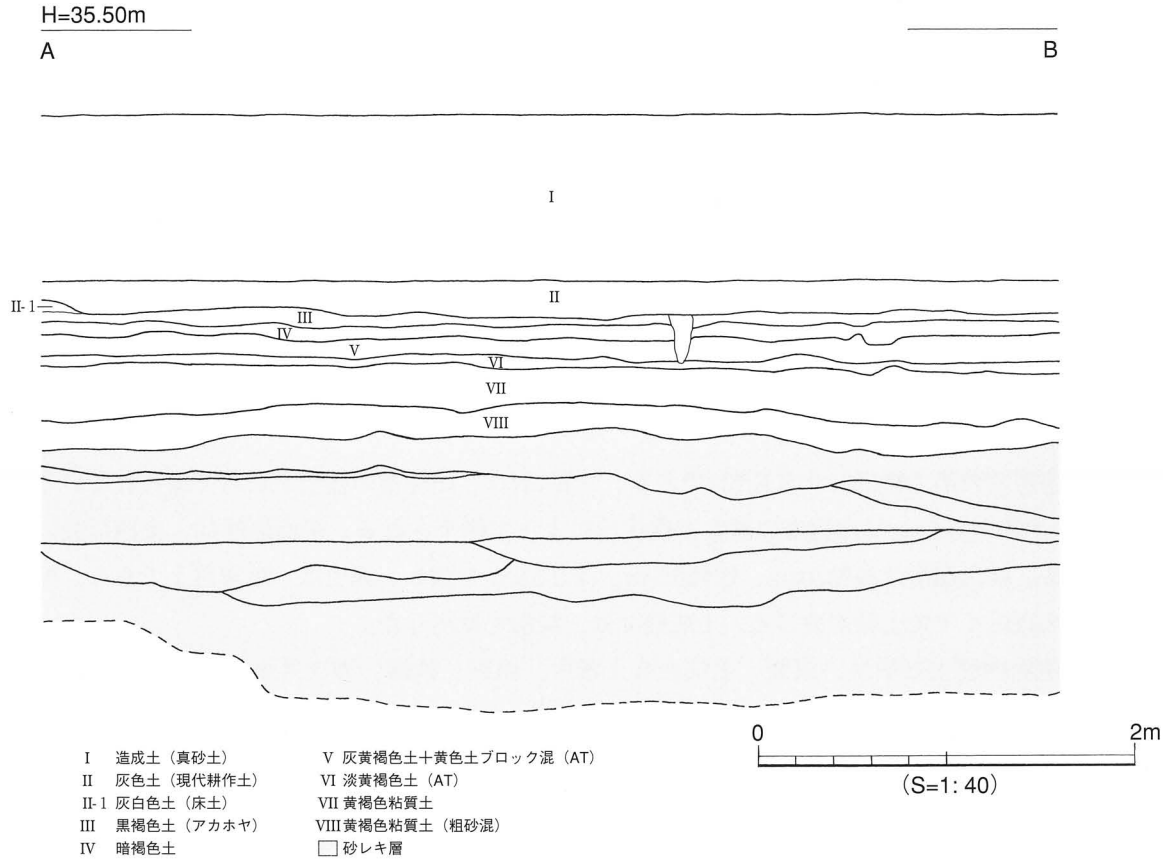
第 5 図　遺構配置図

6月27日　ＳＢ101の周堤帯の盛土の除去作業を行う。
6月29日　ＳＢ101の測量終了後、１区の全体清掃を行う。
6月30日　高所作業車を利用し１区遺構完掘写真の撮影を行い現場作業を終了する。

２．層位（第６図）

本調査区の基本土層は、第Ⅰ層現代の造成土、第Ⅱ層灰色土（現代耕作土）、第Ⅱ－１層灰白色土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層灰黄色土（黄色土ブロック混）、第Ⅵ層淡黄褐色土、第Ⅶ層黄褐色粘質土、第Ⅷ層黄褐色粘質土（粗砂混）である。層厚は第Ⅰ層88cm、第Ⅱ層12cm～20cm、第Ⅱ－１層２cm～６cm、第Ⅲ層４cm～10cm、第Ⅳ層６cm、第Ⅴ層10cm～14cm、第Ⅵ層３cm～８cm、第Ⅶ層18cm～30cm、第Ⅷ層14cm～22cmを測る。このうち第Ⅲ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層は東本遺跡４次調査の土層分析結果より火山灰と考えられる。第Ⅲ層は、アカホヤ火山灰で調査区の北西部にみられるが調査区中央部付近から東側と南側は削平のため遺存しない。第Ⅴ層、第Ⅵ層はＡＴ火山灰の２次堆積層である。

遺構の検出は、第Ⅳ層暗褐色土上面で行い弥生時代と中世以降の遺構を検出した。検出した遺構は竪穴式住居址２棟、土坑１基、柱穴57基である。これらの遺構は本来、第Ⅲ層より上部からの掘りこみである。



第６図　北壁土層図

３．遺構と遺物

〔１〕弥生時代

１）竪穴式住居址（ＳＢ）

検出した２棟の住居址は、弥生時代後期の住居址である。平面形態は円形と方形の２種類がある。円形の物は大型で、方形の住居は中型である。

ＳＢ101（第５・７～９図、図版３～５）

１区の南西隅に位置する。平面形態は、南側の一部が調査区外となるために全容は明らかではないが検出状況から円形を呈するものと考えられる。規模は直径10.00m、壁高は0.15m～0.30mを測る。この住居の特徴には炉を２カ所もつ他、周堤帯が付設される。

周堤帯は幅0.50m～1.20m、厚さ最大で0.30mが遺存し、住居外側を0.30m程度掘り下げた部分に盛り土によって築造されている。盛り土は、２層ないし３層に分層できる。

主柱穴はＳＰ１～ＳＰ６までの６本を検出した。これらの柱穴は、周堤の盛り土を切って住居内側に掘り込まれていた。平面形態は、円形のものと楕円形を呈するものがある。規模は直径0.40m～0.50m、深さ0.45m～0.60mを測る。柱穴間は、2.20m～2.80mを測る。柱痕跡は、検出できなかった。

炉址は、住居中央のやや南側に位置する。南側の浅い土坑（炉１）と北側の深い土坑（炉２）がある。炉１は、約1/2が調査区外となり全容は不明である。平面形態は、長方形を呈するものと考えられる。検出規模は長軸1.73m、短軸0.60m、深さ0.05m～0.15mを測る。深さは、西側にむかって浅くなる。炉壁沿いには、北側から東側にかけて幅15cm～20cm、深さ２cm～５cmの小溝が巡る。炉底全面から、厚さ１cm～２cmの炭層を検出した。炉２の平面形態は、不整形である。検出規模は長軸85cm、短軸60cm、深さ30cmを測る。埋土は、茶褐色土で炉底近くでは焼土を含む。炉底からは、炭層を検出した。その他の施設としては、周壁溝、貼床、土坑１基を検出した。

周壁溝は、周堤帯を挟むように外側と内側に検出した。規模は外側、内側とも幅９cm～25cm、深さ３cm～10cmを測る。外側の周壁溝は、住居の北西側と東側の一部では途切れる。内側の周壁溝は、主柱穴ＳＰ３～ＳＰ６の断面精査の結果、柱穴を切っていることを確認した。この周壁溝は、住居の東側では他の部分より幅が広くなっている。

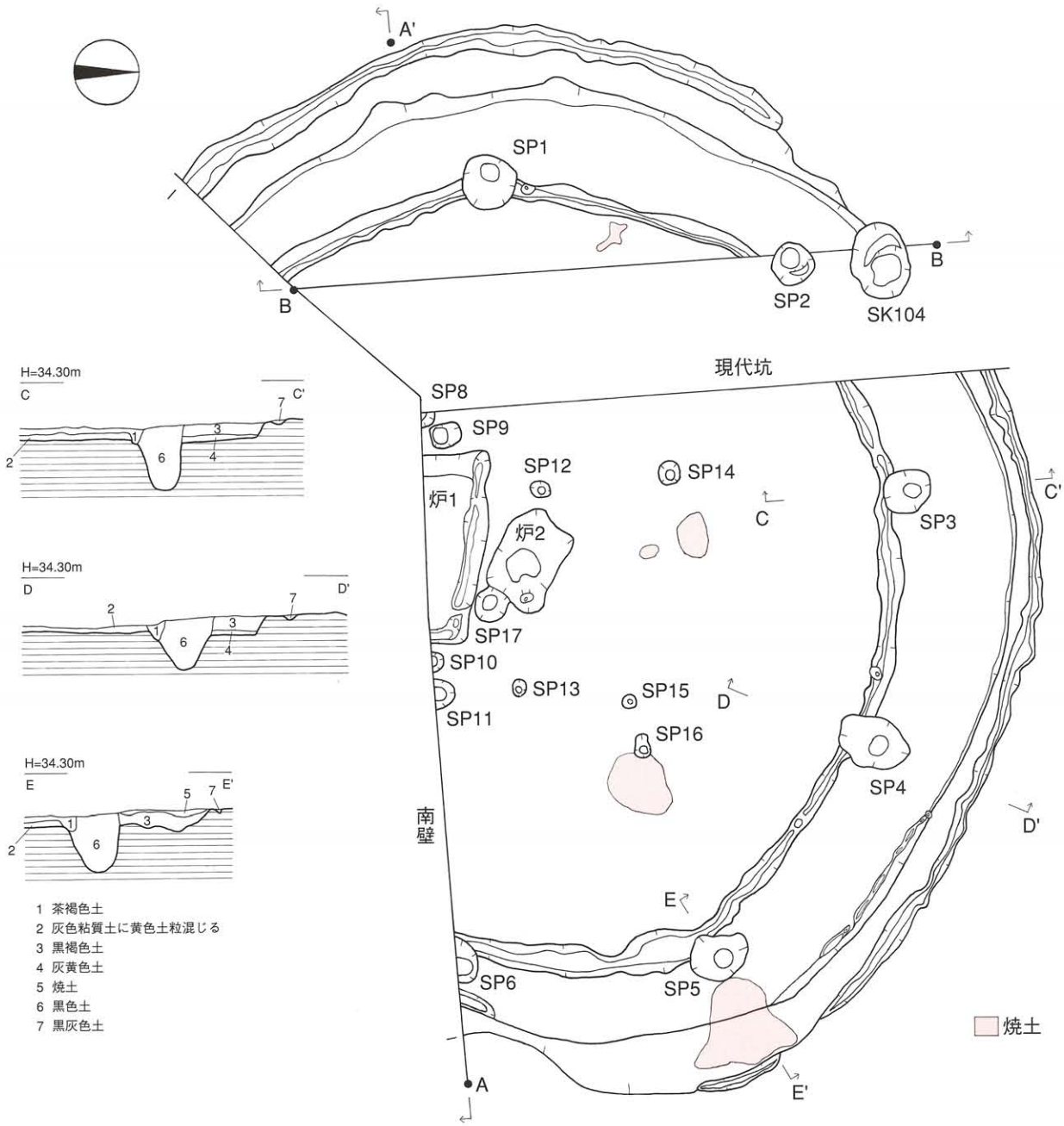
貼床は、厚さ１cm～８cmを測り炉の周囲を除く住居全体にみられた。また、住居内に４カ所と周堤帯に１カ所の焼土を検出している。

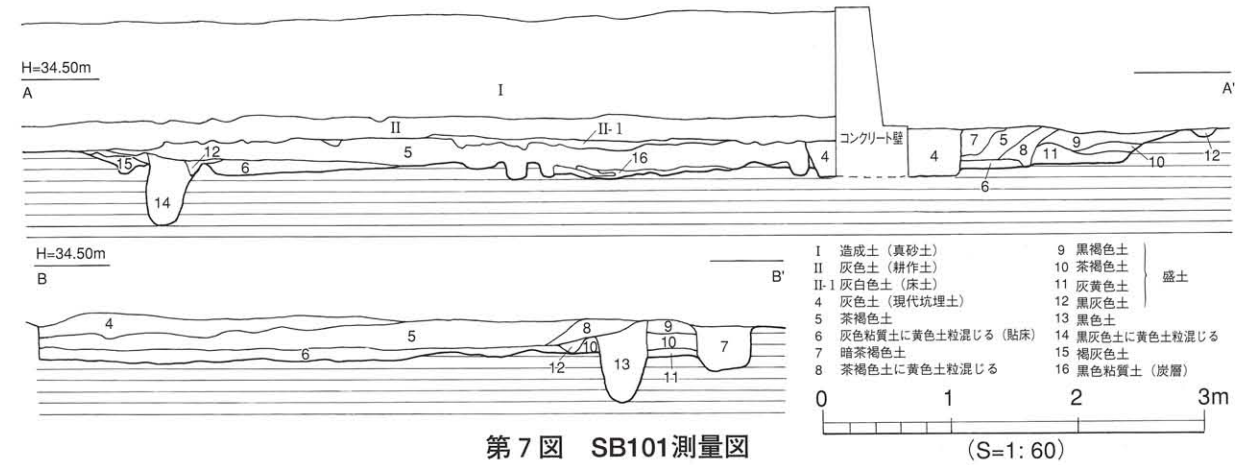
土坑は、住居北西部で検出したＳＫ104である。ＳＫ104は、周堤帯の盛土を切って掘られている。東側約2/3が上部から1/2～1/3程度の深さで現代坑によって削平される。平面形態は、東西に長い楕円形を呈する。検出規模は長軸70cm、短軸52cm、深さ35cmを測る。埋土は、暗褐色土である。埋土中には、土坑底近くで焼土粒が混じる。土坑底では、炭層を検出した。

遺物は、住居内埋土と炉址、床面、土坑から土器片、砥石、鉄鏃、ガラス小玉のほか桃核とみられる種子が出土している。

出土遺物（第10・11図、図版９～11）

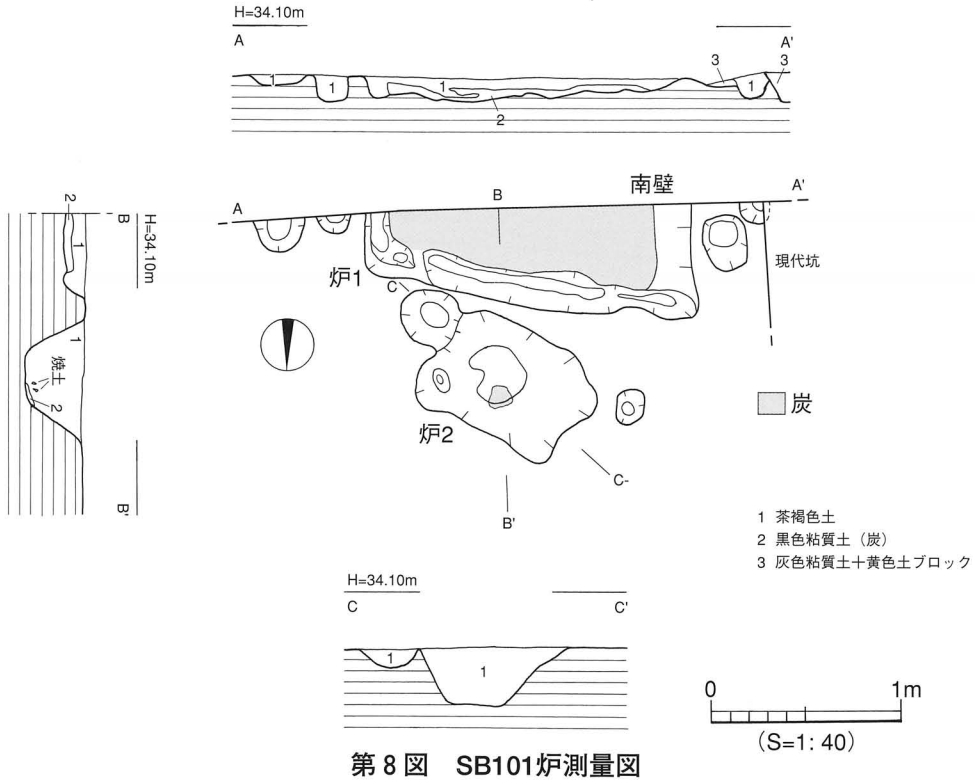
甕形土器（１～12）　１の口縁部は緩やかに外反する。口縁端部外面はヨコナデによりやや拡張される。２の口縁端部はナデによりわずかに凹む。口縁部内面にハケメ調整を施す。３の口縁端部は断面「コ」字状を呈する。４は口縁部片で内面に横方向のハケメ調整を施し外面には縦方向のハ





第7図　SB101測量図

(S=1: 60)



第８図　SB101炉測量図

ケメ調整を施す。端部は内外面のナデにより沈線状に凹む。５～７の口縁部は「く」字状に外反し端部は丸味のある断面「コ」字状を呈する。外面の調整は肩部から口縁部にかけてタタキ痕を残す。内面はハケメ調整を施す。７の口縁部外面には指頭痕を残す。８の口縁部外面は肩部から口縁部にかけてハケメ調整を施す。内面口縁部にもハケメ調整を施す。９～12は底部片である。９の底部は上げ底。10の底部は丸みをもち突出し不安定な平底である。11の底部は小さく突出する平底である。底面にタタキ目を残す。12の底部は丸みのある小さな尖り底である。

壺形土器（13～23）　13の口縁部は外反する。調整は内外面ともハケメ調整を施す。14は直立する頸部に大きく外反し水平に開く口縁部をもつ。口縁端部は下方に肥厚する。15は長頸壺で頸部に沈線文を施す。16～22は複合口縁壺である。16の口縁接合部は「コ」字状を呈する。拡張部には波状文を施す。17～21の口縁接合部は「く」字状を呈する。17の拡張部は無文である。18の拡張部には波状文を施す。口縁端部は丸くおさめる。19の口縁拡張部は短く内傾してのびる。口縁端部はわずかに凹む。20は炉２からの出土である。接合部端面には上下２列の半裁竹管文を施し、口縁拡張部には波状文を施す。22は頸部の外反が弱く拡張部が直立気味に立ち上がる。23は底部片である。丸みのある小さな底部でやや突出する。

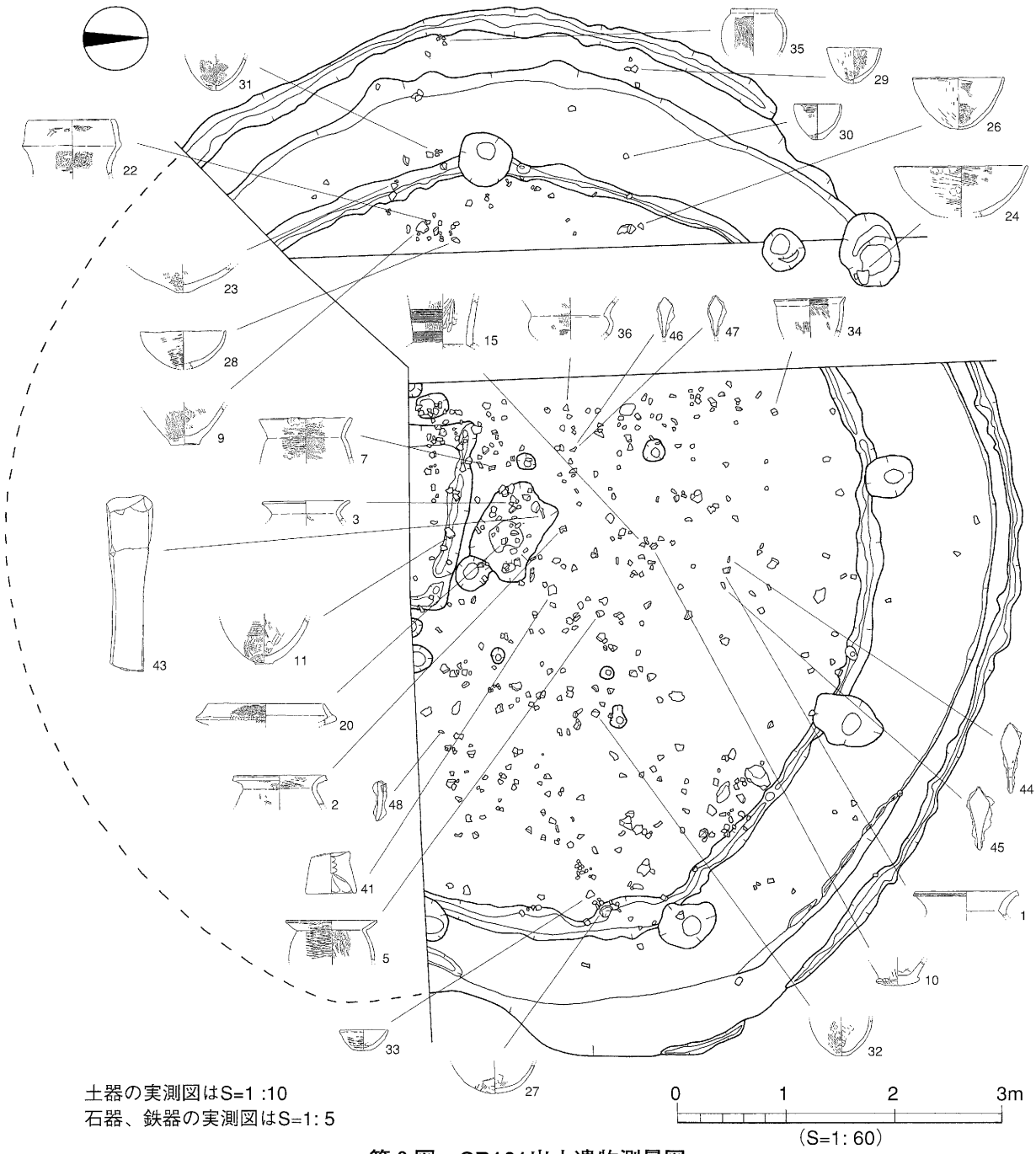
鉢形土器（24～36）　24～28は内湾して立ち上がる口縁。底部は不安定な丸底である。外面にタタキ目を残す。24は住居内ＳＫ101より出土したものである。24の口縁端部は面をなす。26の口縁端部は丸くおさめる。29は内湾気味に立ち上がる口縁で端部は尖り気味に丸くおさめる。底部は丸い。30の底部は小さな平底。31の底部は丸みをおびた小さな平底である。32は小さな平底、33は椀タイプのものである。34の口縁部は短く外傾し、口縁部内面に稜をもつ。口縁端部は尖り気味。35の胴

部は丸く、口縁部は直立して短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。36は肩部が張り外反する長い口縁のものである。肩部と口縁部の内面接合部には、接合痕跡を残し明瞭な稜をなす。

高坏形土器（37・38）　37は口縁部片で外反して開く口縁部。内外面ともヘラミガキを施す。38は脚部で裾は大きく開く。外面にヘラミガキを施す。

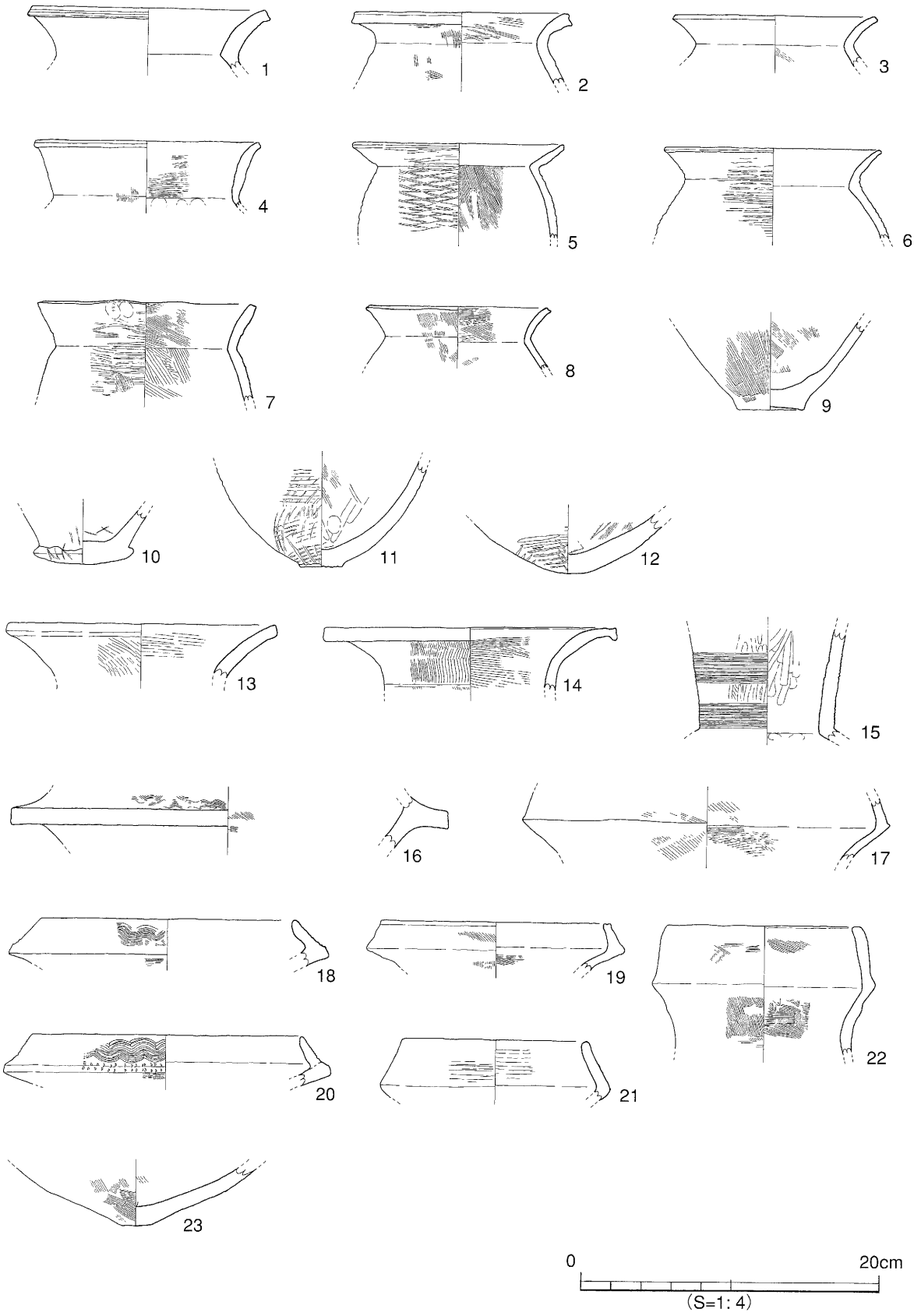
器台形土器（39）　39は脚部片で、円孔を穿つ。

支脚（40・41）　40は角状突起をもつ支脚の底部片である。41の底部は上げ底で、受部は凹んで傾斜する。

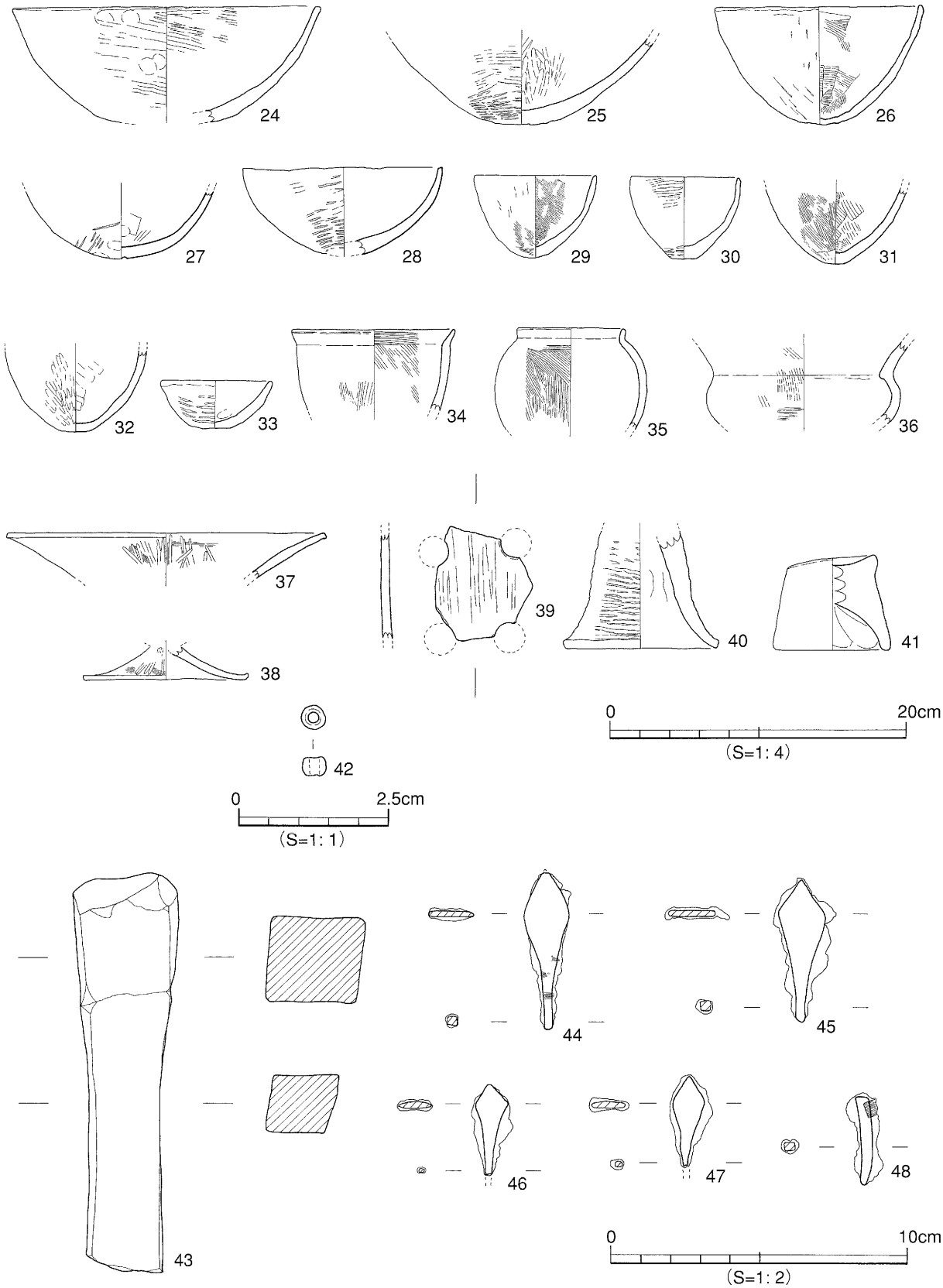


土器の実測図はS=1 :10
石器、鉄器の実測図はS=1: 5

第 9 図　SB101出土遺物測量図



第10図　SB101出土遺物実測図（1）



第11図　SB101出土遺物実測図（２）

ガラス小玉（42）　住居西側で周堤帯検出作業時に出土したものである。色調は青色を呈する。
砥石（43）　色調は黄白色を呈する。材質は砂岩である。
鉄鏃（44～47）　44～47は有茎式の鉄鏃である。44には木片が付着している。
不明品（48）　棒状の鉄片である。一部に木片が付着する。錐状工具の可能性も考えられる。
時期　出土遺物より弥生時代後期末に埋没したものと考える。

ＳＢ102（第５図・第12～14図、図版５～７）

１区の東端に位置する。全容は、東側の一部が調査区外となるために明らかではない。平面形態は、検出状況から隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、全容のわかる西側は一辺が5.20m、北側は2.50m、南側は3.00mの検出長を測る。壁高は0.14m～0.28mを測る。内部施設としては柱穴、土坑、周壁溝を検出した。床面は、貼床を検出しないことから住居掘削底面と考えられる。

柱穴は、主な柱穴として８基（ＳＰ１～ＳＰ８）を検出した。ＳＰ１～ＳＰ４は、掘削方法に特徴をもつ。住居底面から直径30cm～50cmの範囲で深さ６cm～12cmを円錐状に掘ったのち、さらに隅丸長方形状に30cm～40cmの深さで掘り下げている。平面・断面形態とも漏斗状を呈する。ＳＰ５・６の平面形態は隅丸長方形、ＳＰ７は円形を呈する。ＳＰ８の平面形態は楕円形を呈する。深さはＳＰ１～ＳＰ７が44cm～52cm、ＳＰ８は６cmを測る。柱穴埋土から遺物は出土していない。住居内で検出したその他の柱穴については平面形態が円、楕円形を呈し直径４cm～14cm、深さ５cm未満の柱穴である。埋土は黒色土、褐色土である。主柱穴については、掘られた深さよりＳＰ１～ＳＰ７が考えられる。

土坑は２基（ＳＫ101・ＳＫ102）を検出している。ＳＫ101は、ＳＰ１に切られるため全容は不明である。ＳＫ101の検出規模は東西方向42cm、南北方向48cm、深さ８cmを測る。埋土は、黒色粘質土である。ＳＫ101から遺物は出土していない。ＳＫ102は住居床面で検出したものである。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径90cm、深さ62cmを測る。埋土は赤褐色粘質土で、住居内で見つかった他の遺構埋土とは異質である。ＳＫ102から遺物は出土していない。

周壁溝は、住居の壁体に沿って巡るが南西隅では途切れる部分がある。検出規模は幅12cm～20cm、深さ２cm～４cmを測る。このほか、この住居内には床面から埋土にかけて多量の焼土を検出した。

焼土は、住居内にあるＳＰ１とＳＫ101を中心とした周囲に帯状となって巡る。検出規模は幅50cm～160cm、厚さは最大で18cmを測る。焼土中から遺物は出土していない。

遺物は、住居床面と埋土中より土器片の他、石包丁、砥石、管玉、鉄鏃、鉄片が出土している。鉄片については、ほとんどが住居内埋土を洗浄した結果、見つかったものである。

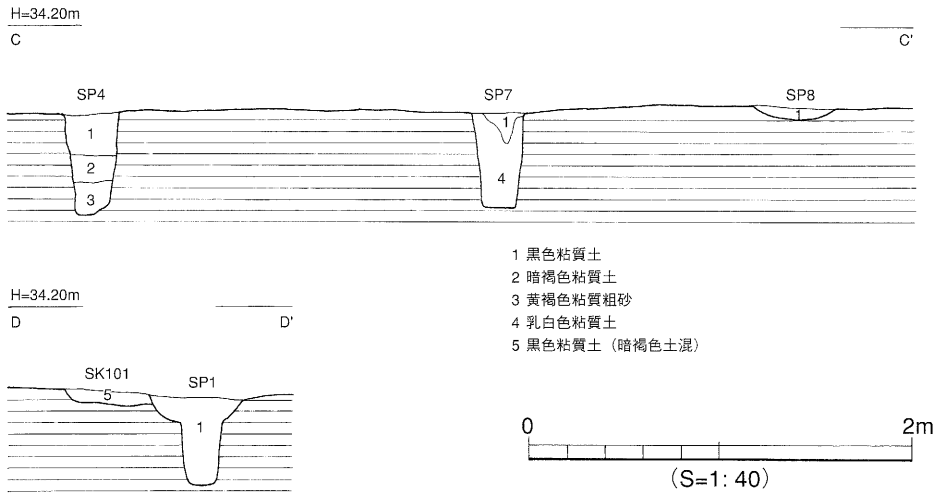
出土遺物（第15・16図、図版12～14）

甕形土器（49～53）　49･50は口縁部片。49は口縁端部外面がやや肥厚する。50は口縁端部が肥厚し上方にのびる。51～53は底部片で小さな平底である。

壺形土器（54～56）　54は頸部片。斜位の刻目凸帯文を貼付する。55は複合口縁の口縁部片。接合部外面に刺突文、口縁拡張部外面に２条の凹線を施す。56は長頸壺の頸部片である。口縁端部は丸くおさめる。外面にヘラミガキが施されている。

鉢形土器（57～60）　57は底部から内湾して上方にたちあがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。底部は小さな平底である。58～60は屈曲する口縁部を有するものである。58は外反して開く口縁部。

第12図　SB102測量図（1）



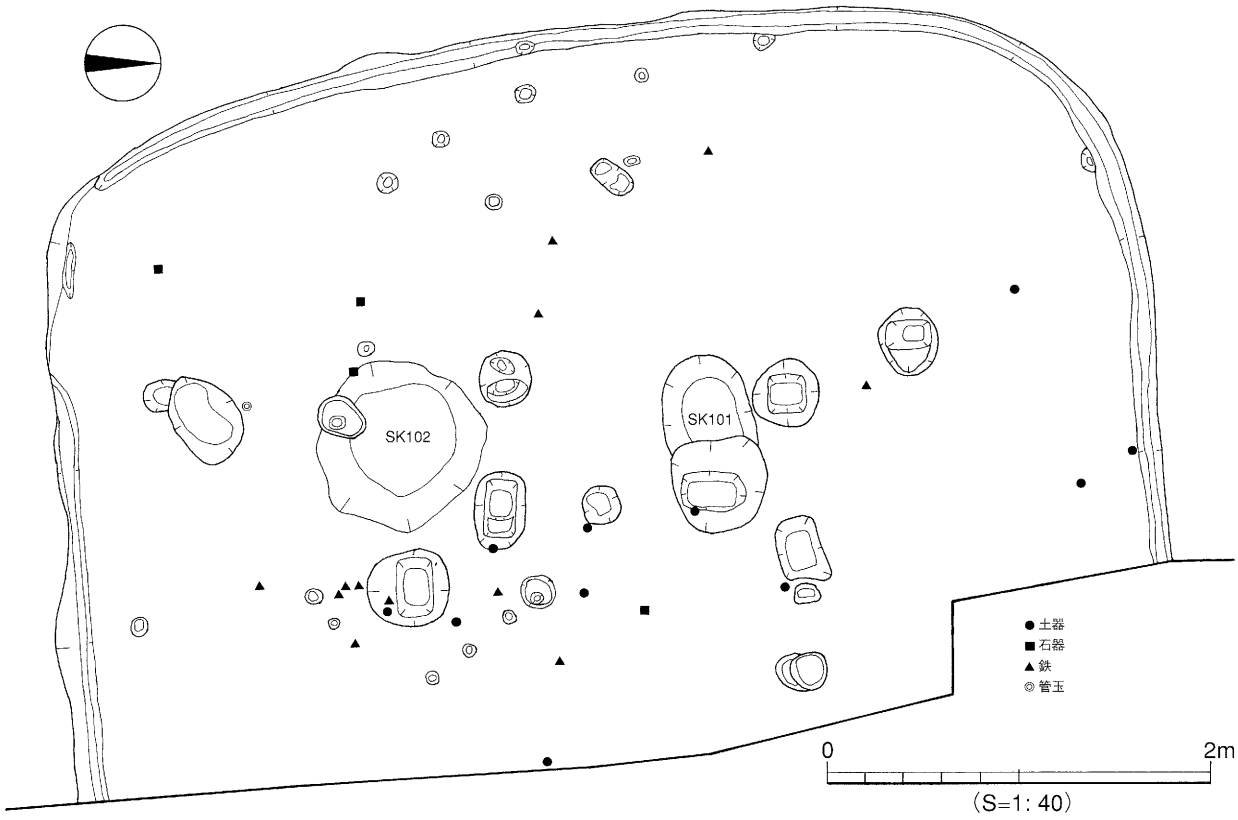
第13図　SB102測量図（2）

口縁端部は丸みをもつ。59の底部は小さく突出するタイプで、胴部は偏球形を呈する。内外面ともヘラミガキを施す。60は外反して開く口縁部。口縁端部は丸みを帯びる。底部は欠失。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。

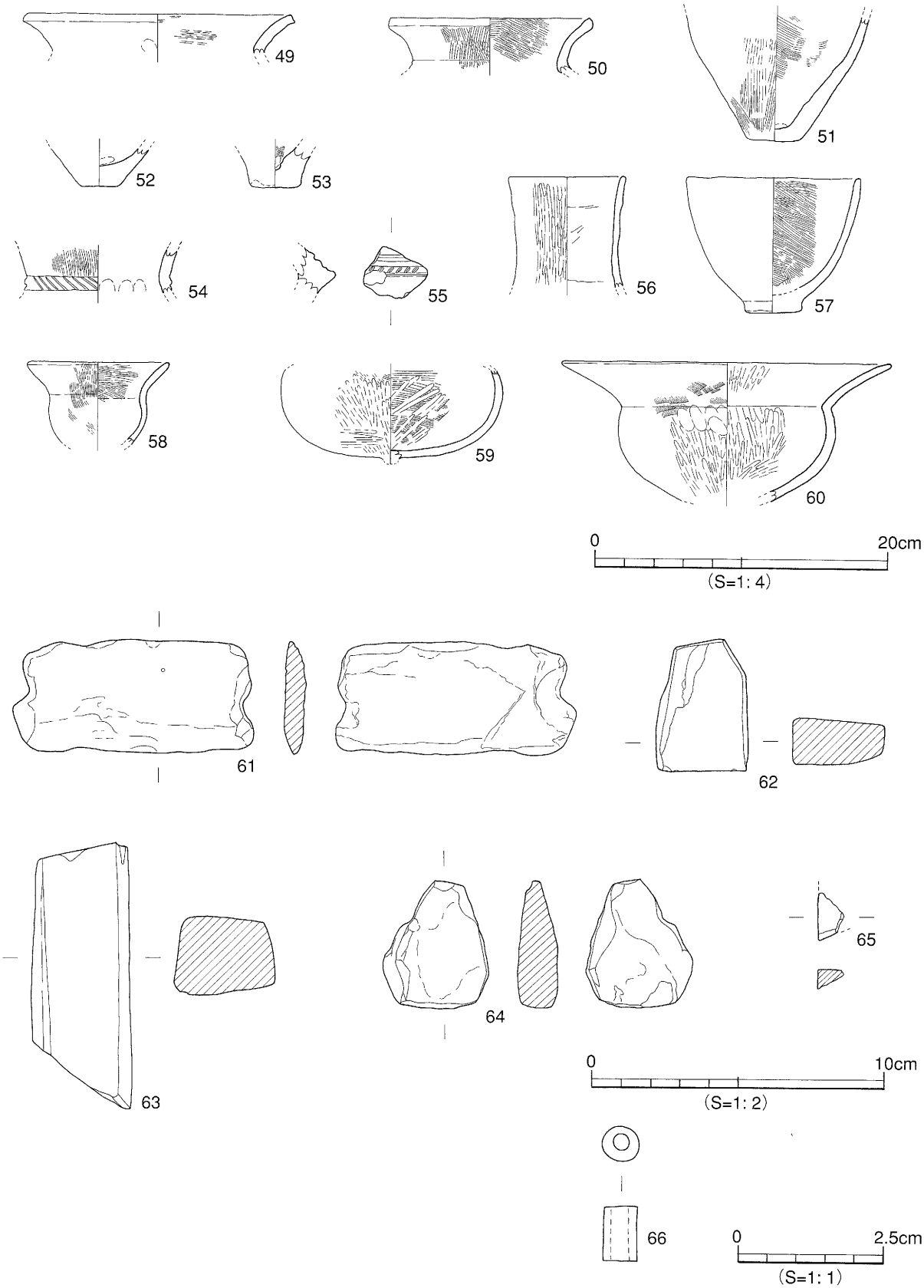
石包丁（61）　直線刃のもので両端に抉りが施される。材質は、結晶片岩。

砥石（62～65）　62～64は堆積岩。京都鳴滝産に類似する。65は小片である。色調は黄白色を呈する。材質は砂岩製。

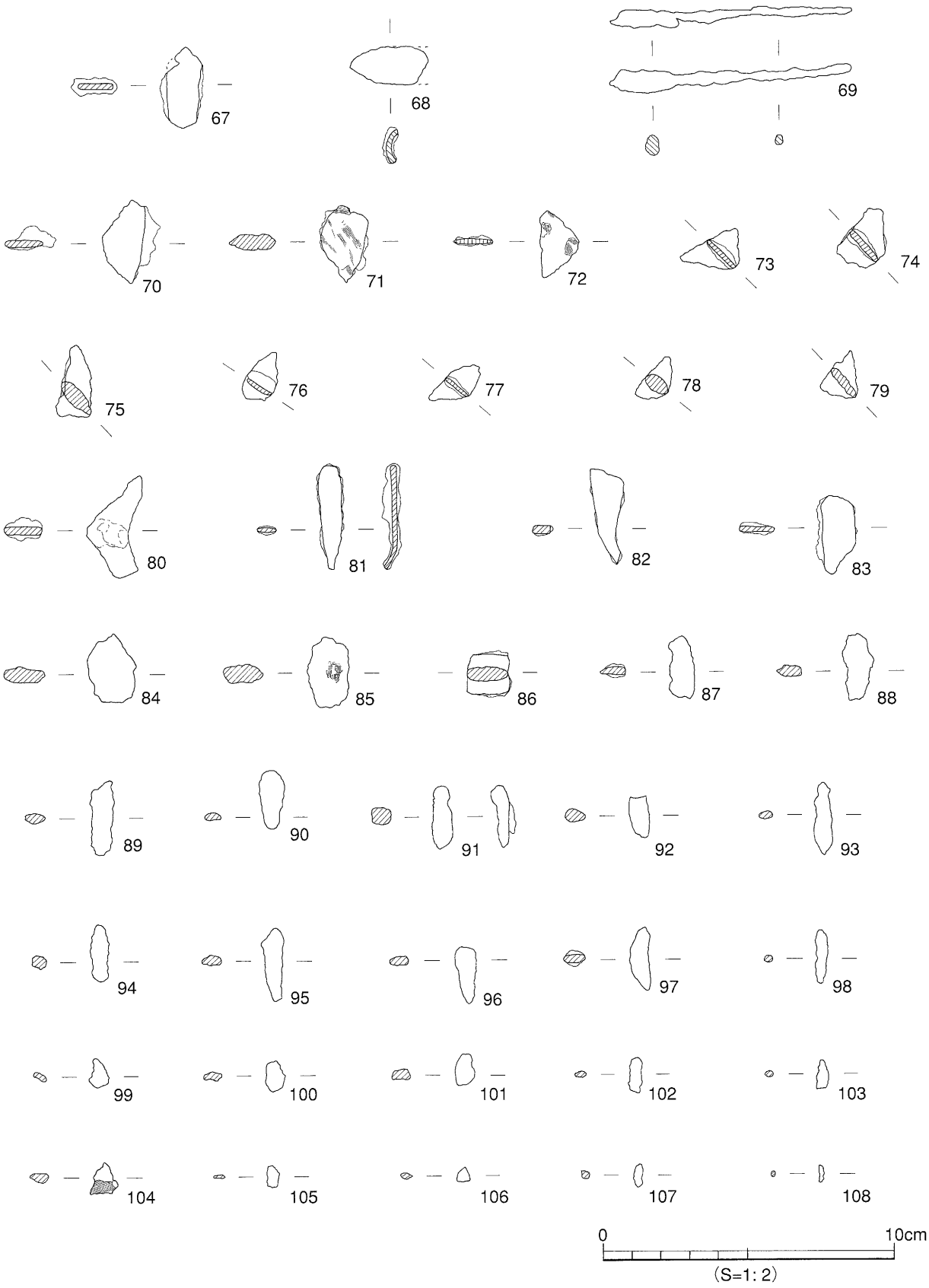
管玉（66）　緑色を呈する碧玉製の管玉である。直径0.6cm、長さ0.9cm、重さ0.52gを測る。



第14図　SB102出土遺物測量図



第15図　SB102出土遺物実測図（1）



第16図　SB102出土遺物実測図（2）

鉄鏃（67）　鏃身部片である。

鉈（68）　切先片である。

釣針軸（69）　釣針の軸と考えられる破片である。遺存長8.3cmを測る。

鉄片（70～108）　72～79は三角状鉄片である。80は二又状鉄片である。87～98は棒状を呈する。99～108は小片である。104には木片の付着が認められる。

時期　出土遺物より弥生時代後期末には埋没したものと考える。

〔２〕中世

１）柱穴

ＳＰ183（第17図、図版７-2）

調査区中央部のやや西側に位置する。平面形態は、円形を呈する。規模は直径26cm、深さ21cmを測る。埋土は、褐灰色土である。柱穴底より、ほぼ完形の土師器坏１点が出土した。

出土遺物　109は口径11.3cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切り。板状圧痕を残す。

時期　出土遺物より15世紀後半～16世紀前半。

〔３〕その他の遺構

１）土坑

ＳＫ103（第５図）

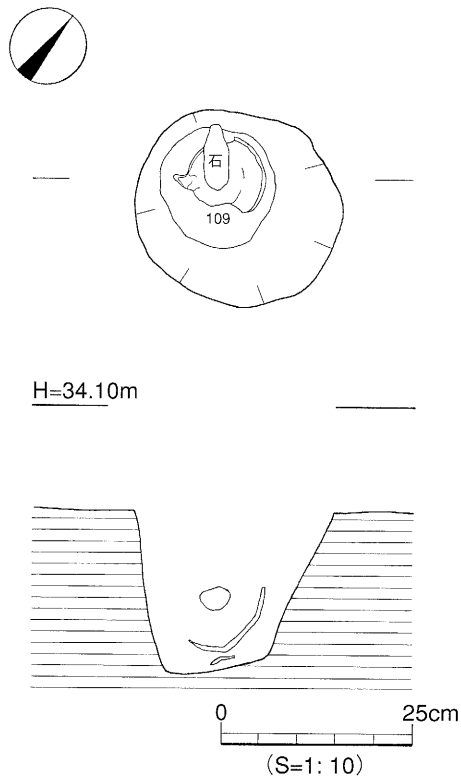
ＳＫ103は調査区南東部、ＳＢ102の南側に位置する。平面形態は、隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸95cm、短軸72cm、深さ12cmを測る。埋土は、ＳＰ183と同じ褐灰色土である。遺物は、出土していない。

時期　ＳＰ183と埋土が同じ事により15世紀以降と考える。

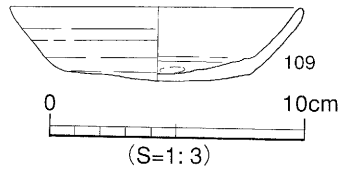
２）柱穴

柱穴は50基余りを検出している。掘立柱建物の復元はできていない。検出した柱穴の規模は直径８cm～35cm、深さ４cm～20cmを測る。埋土は、褐灰色土である。遺物は、どの柱穴からも出土していない。

これらの柱穴の時期については、埋土がＳＰ183と同じ事により15世紀以降と考えられる。



第17図　SP183測量図



第18図　SP183出土遺物実測図

4．小結

本調査区では、弥生時代と中世の遺構・遺物を検出した。

（1）層位

本調査区では東本遺跡4次調査で確認されたアカホヤ火山灰、ＡＴ火山灰を検出した。第Ⅲ層がアカホヤ火山灰、第Ⅴ、Ⅵ層がＡＴ火山灰にあたる。第Ⅲ層は、調査区の北西部に厚さ4cm～10cmが堆積する。東本遺跡4次調査では、アカホヤ火山灰の下層から石器と焼土を検出している。本調査区においては、アカホヤ火山灰である第Ⅲ層下層からの遺構・遺物は検出しなかった。しかしながら、東本遺跡4次調査地から東側の火山灰の堆積状況を確認したことは一つの成果といえる。

（2）弥生時代

本調査区で検出した弥生時代の遺構は、円形の大型住居1棟、方形の中型住居1棟である。なお、住居規模の区分については、東本遺跡4次調査の報告書に従った。

円形の大型住居ＳＢ101は、幅0.50m～1.20mの周堤帯をもつ直径10.00mの住居である。南側が調査区外のため未検出である。内部施設は6本の主柱穴を検出し、住居内には二つの炉と考えられる土坑がある。炉の構造は、炉1が隅丸長方形で浅く、炉2は不整形で深い。二つの炉は、異なる形態を示している。

方形の中型住居ＳＢ102は、埋土に多量の焼土が含まれるという特徴をもつ。遺物には土器片、石器、管玉、鉄片がある。石器には、京都の鳴滝岩に類似する砥石が出土している。鉄片には、鉄器制作中に生じる鏨で切断されたと思われる三角状鉄片、二又状鉄片、棒状鉄片が出土している。これら出土遺物よりＳＢ102は、鉄器製作の工房址である可能性が高い。

この二つの住居の時期は、ＳＢ101・ＳＢ102とも弥生時代後期後葉から末葉の遺物が出土している。よって住居の埋没時期を弥生時代後期末葉に時期比定でき、同時期に並存していたものと考えられる。

（3）中世

調査区で検出した中世の遺構には柱穴ＳＰ183がある。柱穴内からは、完形の土師器坏1点が出土している。遺物の出土状況から、柱穴内祭祀に関わるものであろう。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　　（　）：推定復元値。

調　整　欄　　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
　　（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（1～3）→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。
　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1　SB101　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(15.5) 残高　4.0	外反する口縁。口縁端部は面をもち、2条の沈線を施す。	(口端)ナデ→施文 (口)ヨコナデ	ナデ	橙色	石・長(1~3) ◎		9
2	甕	口径(14.3) 残高　4.8	外反する口縁。口縁端部は肥厚する。口縁部端面はナデにより凹む。	(口端)ナデ (口)(胴)ハケ(10本/cm)→ナデ	(口)ハケ(10本/cm)→ナデ (胴)ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石(1~11) 長(1~4) ◎		9
3	甕	口径(13.5) 残高　3.4	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	(口)ナデ (胴)ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい橙色	長(1) ◎		9
4	甕	口径(14.8) 残高　4.5	口縁部は直口気味に立ち上がり、端部付近で外反する。端部に1条の沈線を施す。	(口端)ナデ (口)ハケ(10本/cm)→ナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	橙色	石・長(1~3) 金 ◎		9
5	甕	口径(14.1) 残高　6.3	口縁部は外上方に開く。口縁部と胴部の境は内外面とも明瞭な稜をなす。	タタキ(2~3本/cm)	(口)ナデ (胴)ハケ(15~16本/cm)	明赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1~3) ◎		9
6	甕	口径(14.4) 残高　6.0	口縁端部は丸く仕上げる。	タタキ(3~4本/cm)	ナデ	明褐色 橙色	石・長(1~3) ◎		9
7	甕	口径(14.0) 残高　6.5	やや外反する口縁部。端部に面をもつ。	タタキ(3本/cm)→ハケ(12本/cm)(指頭痕あり)	(口)ハケ(10本/cm) (胴)ハケ(5~6本/cm)	にぶい黄橙色 橙色	長(1~3) 金 ◎		9
8	甕	口径(11.9) 残高　4.2	外反する口縁部片。口縁端部は指押さえにより端部が凹む。	ハケ(13本/cm)	(口)ハケ(13本/cm) (胴)ハケ(13本/cm)→ナデ	浅黄橙	石粒(1~2) ◎		9
9	甕	底径　4.5 残高　6.0	底端部を指でつまんでいることによりやや上げ底。立ち上がりをもつ。	(胴)ハケ(8~9本/cm) (底)ナデ	ハケ(8~9本/cm)→ナデ	橙色 明赤褐色	石・長(1~4) ◎		9
10	甕	底径　6.8 残高　3.7	丸味をおびた平底。底端部は突出している。	ナデ(工具痕あり)	ナデ(工具痕あり)	灰褐色 黒色	石・長(1~3.5) 金 ◎		9
11	甕	底径（2.8） 残高　7.2	小さな平底。底面にもタタキ痕あり。	タタキ(2~3本/cm)	ハケ(9本/cm)→ナデ上げ(指頭痕あり)	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		9
12	甕	残高　4.1	丸味のある尖底。	タタキ(2本/cm)	ハケ(11本/cm)→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		9
13	壷	口径(18.0) 残高　3.6	外反する口縁部破片。端部は丸味をおびた面をもつ。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(4本/cm)→ナデ	ハケ(4本/cm)→ナデ	にぶい黄橙	石・長(1~2) ◎		10

SB101　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	壺	口径(19.5) 残高 4.3	そり気味に外反する口縁。端部は下外方に垂下する。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm)	橙色	石・長(1~4) ◎		10
15	壺	残高 7.5	やや外傾する細長い頸部片。上に11条、下に9条の横沈線文を施す。	ハケ(6本/cm) →ヘラミガキ →施文	ナデ→工具によるなで上げ(指頭痕あり)	褐色 明褐色	石・長(1~2) ◎		10
16	壺	残高 3.4	複合口縁。口縁拡張部片。櫛描波状文を施す。	(拡)ナデ→施文 (頸)ヨコナデ	ハケ(10本/cm) →ナデ	にぶい橙	石・長(1~4) ◎		10
17	壺	残高 4.2	複合口縁。口縁拡張部片。	ハケ(6~7本/cm) →ナデ	ハケ(6~7本/cm) →ナデ	浅黄橙 にぶい橙	石・長(1~3) ◎		
18	壺	口径(16.9) 残高 3.1	複合口縁。口縁部に7条の櫛描波状文を施す。	(拡)ナデ→施文 (頸)ハケ(13本/cm) →ナデ	ナデ	浅黄橙	石・長(1~4) ◎		10
19	壺	口径(15.3) 残高 3.2	複合口縁。無文。	(口端)ナデ (口)ハケ(9本/cm) →ナデ	(口上)ナデ (口下)ハケ(9本/cm)→ナデ	にぶい橙色 明褐色	石・長(1~2) ◎		10
20	壺	口径(18.1) 残高 3.4	複合口縁。口縁部に8条の櫛描波状文、接合部に2列の半裁竹管文を施す。	(拡)ナデ→施文 (頸)ハケ(8本/cm) →ナデ	ナデ	黄橙色 浅黄橙	石(1~6) 長(1~2) ◎		10
21	壺	口径(12.0) 残高 4.0	複合口縁。口縁端部は丸味をおびている。無文。	ハケ(4本/cm) →ナデ	ハケ(4本/cm) →ナデ	にぶい橙色	長(1~3) ◎		10
22	壺	口径(13.0) 残高 8.6	複合口縁。無文。頸部は直立気味に立ち上がり、拡張部は直立気味に立ち上がりやや内湾する。	(口端)ナデ (胴)ハケ(13本/cm) →ナデ	ハケ(13本/cm) →ナデ	灰褐色 灰黄褐色	石・長(1~3.5) 金 ◎		10
23	壺	底径 (1.9) 残高 4.0	小さな平底。	ハケ(7本/cm) →ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	石・長(1~3) ◎		10
24	鉢	口径 20.8 残高 7.8	やや内湾気味に上外方向へ立ち上がる。口縁端部は面をもつ。	(口端)ナデ (胴)タタキ(3本/cm) (指頭痕あり)	ハケ(4本/cm) →ナデ	橙色	石・長(1~3) ◎		11
25	鉢	底径 3.6 残高 5.9	不安定な丸底。底部より上外方向へ立ち上がる。	タタキ(3本/cm)	ヘラミガキ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~5) ◎		
26	鉢	口径(14.0) 器高 8.0	内湾気味に立ち上がる口縁。不安定な丸底。	(口端)ナデ (胴)ヘラケズリ →ナデ	ハケ(5~6本/cm) →ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		10
27	鉢	残高 4.6	不安定な丸底。内湾気味に立ち上がる。	タタキ(3本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	工具によるナデ (指頭痕あり)	橙色	石・長(1~3) ◎		11
28	鉢	口径(13.4) 残高 5.9	内湾気味に立ち上がる口縁。	(口端)ナデ (胴)タタキ(2本/cm) →ナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1~4) 金 ◎		
29	鉢	口径 (8.0) 器高 5.6	底部より内湾気味に立ち上がる口縁。端部は尖り気味に丸くおさめる。	(口)ナデ (胴下)ハケ(9~10本/cm)→ナデ	ハケ(9~10本/cm)	橙色	石(1~3) 長(1~4) ◎		10
30	鉢	口径 (7.2) 底径 1.7 器高 5.6	底部より内湾気味に立ち上がる口縁。端部は尖り気味に丸くおさめる。小さな平底。	(胴)タタキ(4本/cm) →ナデ (底)ナデ	ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
31	鉢	底径 1.4 残高 5.3	小さな丸味をおびた平底。	(胴)ハケ(6~11本/cm) (底)ナデ	ハケ(5本/cm)	赤褐色	石・長(1~2) 金 ◎		11
32	鉢	底径 (1.6) 残高 5.5	小さな丸味をおびた平底。	(胴)ミガキ (底)ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
33	鉢	口径 (7.3) 底径 1.9 器高 3.3	底部より内湾気味に上外方向に立ち上がる口縁。やや平らな丸底。	(口)ナデ (胴)タタキ(3本/cm) (底)ナデ	ナデ	橙色 明赤褐色	長(1~2) 金 ◎		11
34	鉢	口径(10.8) 残高 5.5	外傾する口縁部。口縁部内面に稜をもつ。	(口)ナデ (胴)ハケ(6本/cm) →ナデ	(口)ハケ(6本/cm) (胴)ハケ(6本/cm) →ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		11
35	鉢	口径 (7.1) 残高 6.9	口縁は短くわずかに外傾する。端部は丸味をおびている。	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm)	ナデ	明黄橙色 赤褐色	石・長(1~3) 金 ◎		11
36	鉢	残高 5.6	肩を張る胴部から外上方へ開く口縁部。	ハケ(6本/cm) →ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		11
37	高坏	口径(21.4) 残高 3.1	坏部片。外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口端)ナデ (胴)ハケ(12本/cm) →ヘラミガキ	ハケ(6本/cm) →ヘラミガキ	にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		

SB101　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
38	高坏	底径(11.0) 残高 2.2	ゆるやかに広がる裾部。	ハケ(8本/cm) →ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		
39	器台	残高 7.7	脚柱部片。円孔の痕跡が4ヶ所残る。	ヘラミガキ	ハケ(8本/cm) →ナデ	明赤褐色	長(1~2) ◎		
40	支脚	底径(10.0) 残高 8.0	外に広がる裾部片。中空。	㊥ナデ ㊦タタキ(3本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~2) 金 ◎		
41	支脚	底径 (7.6) 器高 6.5	やや凹みのある受け部。上げ底。	ナデ	強い指ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	石・長(1~2) ◎		

表2　SB101　出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
42	小玉	完形	ガラス 青色	0.3	0.4	0.2	0.05		11

表3　SB101　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
43	砥石	ほぼ完形	砂岩	13.7	3.6	3.0	168.90		11

表4　SB101　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
44	鉄鏃	ほぼ完形	鉄製	5.4	1.5	0.3	4.39	木片付着	11
45	鉄鏃	ほぼ完形	鉄製	4.9	1.6	0.3	7.20		11
46	鉄鏃	ほぼ完形	鉄製	(3.1)	1.1	0.2	1.90		11
47	鉄鏃	ほぼ完形	鉄製	(3.1)	1.1	0.2	2.18		11
48	錐	不明	鉄製	3.0	0.4	0.3	2.453	木片付着	11

表5　SB102　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
49	甕	口径(17.8) 残高 2.7	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	ナデ(指頭痕あり)	ハケ(11本/cm) →ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		12
50	甕	底径 3.5 残高 8.6	口縁端部は肥厚し上方にのびる。	㊧ハケ(7本/cm) →ナデ ㊦ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~3) ◎		12
51	甕	口径(13.4) 残高 3.7	平底。	㊐ナデ ㊐ ハケ(7~8本/cm)	ハケ(7~8本/cm)	にぶい褐色	石・長(1~3) 金 ◎		12
52	甕	底径 (2.4) 残高 2.6	小さな丸味をおびた平底。	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	橙色	長(1) ◎		12
53	甕	底径 (3.0) 残高 2.7	小さめの平底。	ナデ	ハケ(8本/cm) (指頭痕あり)	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		12
54	壺	残高 3.2	頸部片。刻目凸帯文。	㊧ハケ(7本/cm) ㊧ナデ→施文	ナデ(指頭痕あり)	にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		12

SB102　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
55	壺	残高 3.1	複合口縁。口縁拡張部片。刺突文が施される。	ヨコナデ →施文	ナデ	にぶい橙色	長(1) ◎		12
56	壺	口径 (7.8) 残高 7.6	直口気味に立ち上がる頸部をもつ。口縁端部は丸味をおびている。	(口端)ナデ (口)ヘラミガキ	ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		12
57	鉢	口径(11.8) 底径 3.9 残高 9.3	やや内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部は丸い。	ナデ	ハケ(7~8本/cm)	灰黄褐色	石・長(1~5) 金 ◎		12
58	鉢	口径 (9.5) 残高 5.6	外反する口縁。端部は丸味をおびている。肩部が張る。	(口端)ナデ (口)ハケ(8本/cm) (胴)ハケ(8本/cm)→ナデ	(口)ハケ(8本/cm) (胴)ハケ(8本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1~2) ◎		12
59	鉢	残高 6.1	偏球な胴部。	ハケ(10本/cm) →ヘラミガキ	ハケ(8本/cm) →ヘラミガキ	にぶい橙色 橙色	石・長(1) ◎		12
60	鉢	口径(22.5) 残高 9.6	外上方に大きく開く口縁部。	(口端)ナデ (口)ハケ(12本/cm)→ナデ (胴)ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1~4) 金 ◎		12

表6　SB102　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
61	石庖丁	完形	結晶片岩	8.2	3.8	0.7	43.71		13
62	砥石	完形	堆積岩 (京都・鳴滝岩?)	4.5	3.1	1.6	39.17		13
63	砥石	完形	堆積岩 (京都・鳴滝岩?)	9.0	3.4	2.7	152.60		13
64	砥石	完形	堆積岩 (京都・鳴滝岩?)	4.4	3.6	1.4	29.52		13
65	砥石	1×2cmの破片	砂岩	(3.2)	(1.6)	(1.3)	7.75		13

表7　SB102　出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
66	管玉	一部欠損	碧玉 暗オリーブ灰色	0.9	0.6	上 0.25 下 0.35	0.52		13

表8　SB102　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
67	鉄鏃	鏃身部	鉄製	(2.8)	1.2	0.2	2.83		13
68	鉋	切先のみ	鉄製	(2.7)	1.3	0.2	2.02		13
69	釣針軸	欠損	鉄製	(8.3)	0.8	0.5	2.28		13
70	鉄片	不明	鉄製	2.9	1.4	0.3	2.53		13
71	鉄片	不明	鉄製	2.6	1.5	0.6	1.91	木片付着	13
72	三角状鉄片	完形	鉄製	2.3	1.3	0.2	1.13		13
73	三角状鉄片	完形	鉄製	2.1	1.4	0.2	1.13		13

SB102　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
74	三角状鉄片	完形	鉄製	2.1	1.3	0.2	1.22		13
75	三角状鉄片	完形	鉄製	2.5	1.4	0.5	2.04		13
76	三角状鉄片	完形	鉄製	1.9	1.0	0.1	1.12		13
77	三角状鉄片	完形	鉄製	2.0	1.0	0.1	0.58		13
78	三角状鉄片	完形	鉄製	1.8	0.9	0.5	0.72		13
79	三角状鉄片	完形	鉄製	1.6	1.3	0.3	0.61		13
80	二又状鉄片	完形	鉄製	3.5	1.3	0.3	2.72		13
81	鉄片	不明	鉄製	3.6	0.8	0.2	1.52		13
82	鉄片	不明	鉄製	3.3	0.7	0.3	1.81		13
83	鉄片	不明	鉄製	2.7	1.2	0.2	2.04		13
84	鉄片	不明	鉄製	2.4	1.4	0.6	2.07		13
85	鉄片	不明	鉄製	2.4	1.4	0.6	3.33	木片付着	13
86	鉄片	不明	鉄製	1.4	1.4	0.5	2.19		13
87	鉄片	不明	鉄製	2.1	0.9	0.3	0.70		13
88	鉄片	不明	鉄製	2.3	0.8	0.4	1.24		13
89	鉄片	不明	鉄製	2.6	0.7	0.4	0.76		13
90	鉄片	不明	鉄製	2.0	0.9	0.3	0.87		13
91	鉄片	不明	鉄製	2.2	0.7	0.6	1.20		13
92	鉄片	不明	鉄製	1.4	0.7	0.4	0.51		13
93	鉄片	不明	鉄製	2.5	0.5	0.3	0.45		13
94	鉄片	不明	鉄製	2.0	0.5	0.5	0.70		13
95	鉄片	不明	鉄製	2.6	0.7	0.4	0.96		13
96	鉄片	不明	鉄製	2.0	0.7	0.3	0.50		13
97	鉄片	不明	鉄製	2.2	0.7	0.3	0.92		13

SB102　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
98	鉄片	不明	鉄製	1.8	0.3	0.2	0.23		13
99	鉄片	不明	鉄製	1.0	0.5	0.2	0.14		13
100	鉄片	不明	鉄製	1.1	0.7	0.3	0.19		13
101	鉄片	不明	鉄製	1.1	0.7	0.4	0.29		13
102	鉄片	不明	鉄製	1.2	0.4	0.2	0.17		13
103	鉄片	不明	鉄製	1.0	0.3	0.2	0.07		13
104	鉄片	不明	鉄製	1.2	0.9	0.4	0.26	木片付着	13
105	鉄片	不明	鉄製	0.8	0.4	0.1	0.05		13
106	鉄片	不明	鉄製	0.5	0.4	0.2	0.07		13
107	鉄片	不明	鉄製	0.8	0.3	0.3	0.12		13
108	鉄片	不明	鉄製	0.6	0.1	0.2	0.02		13

表9　SP183　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
109	坏	口径 11.3 底径 7.2 器高 3.0	底部より、上外方向へ立ち上がる。口縁端部は丸い。不安定な平底。	㊀ヨコナデ ㊁回転糸切り →板状圧痕	ヨコナデ (指頭痕あり)	灰白色	石・長(1~2) ◎		14

第５章

束本遺跡6次調査地

－２区の調査－

第５章　２区の調査

１．調査の経緯

２区は、１区から市道と水路を挟んだ東側に位置する。調査地の標高は東端で33.0m、西端で34.0mを測る。調査前の現況は、耕作地である。調査地の東側には、調査地を南北に縦断する水路と畦道があり東西に分断されている。このことから２区は、水路と畦道より西側を２西区、東側を２東区とに区分けを行い調査を行った。以下、作業工程を順次略記する。

2000（平成12）年３月６日　２西区、２東区を重機による掘削を開始する。

３月10日　重機による掘削を終了する。遺構検出作業を行い柱穴、土坑、自然流路を検出する。

３月13日　遺構検出状況の写真撮影を行う。

３月14日　検出した中世の遺構の精査を行う。

３月15日　ＳＫ201の遺構・遺物の測量作業と写真撮影を行う。

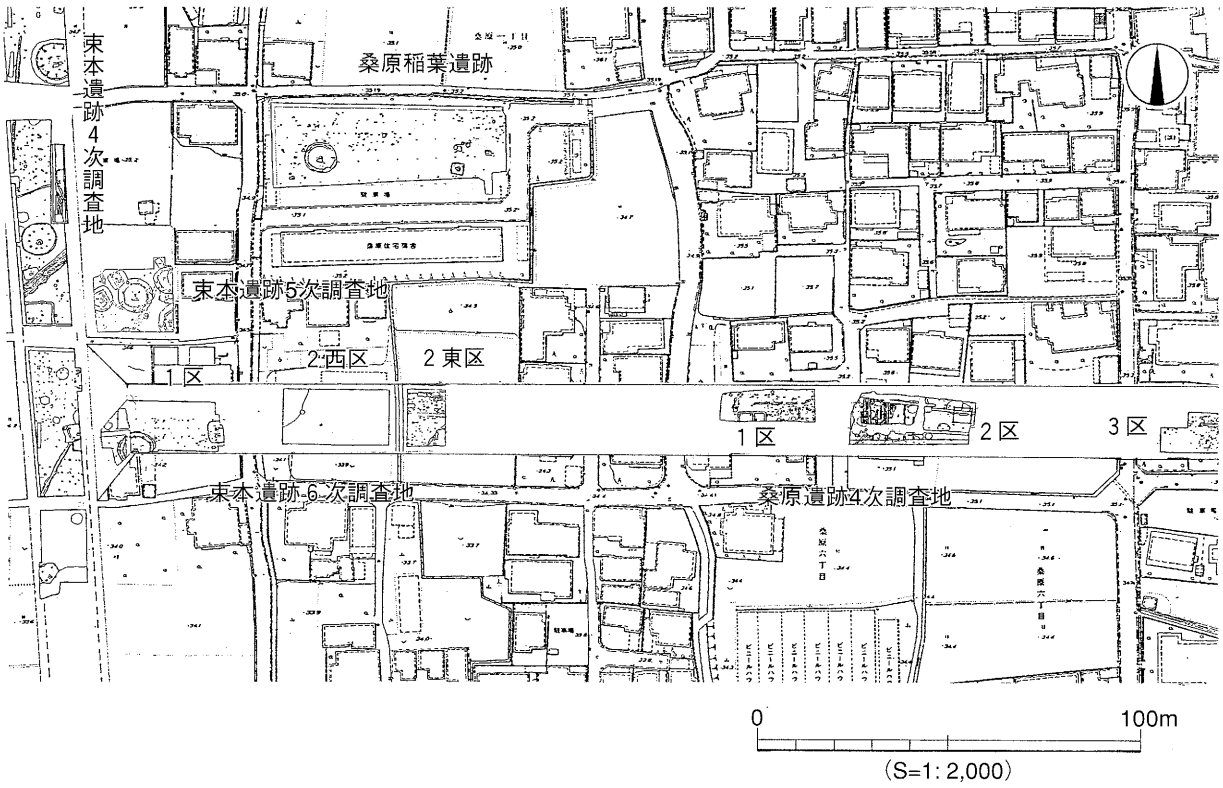
３月17日　柱穴や土坑の完掘後、人力によって自然流路ＳＲ201の掘削を開始する。

４月12日　ＳＲ201の土層図作成を開始する。

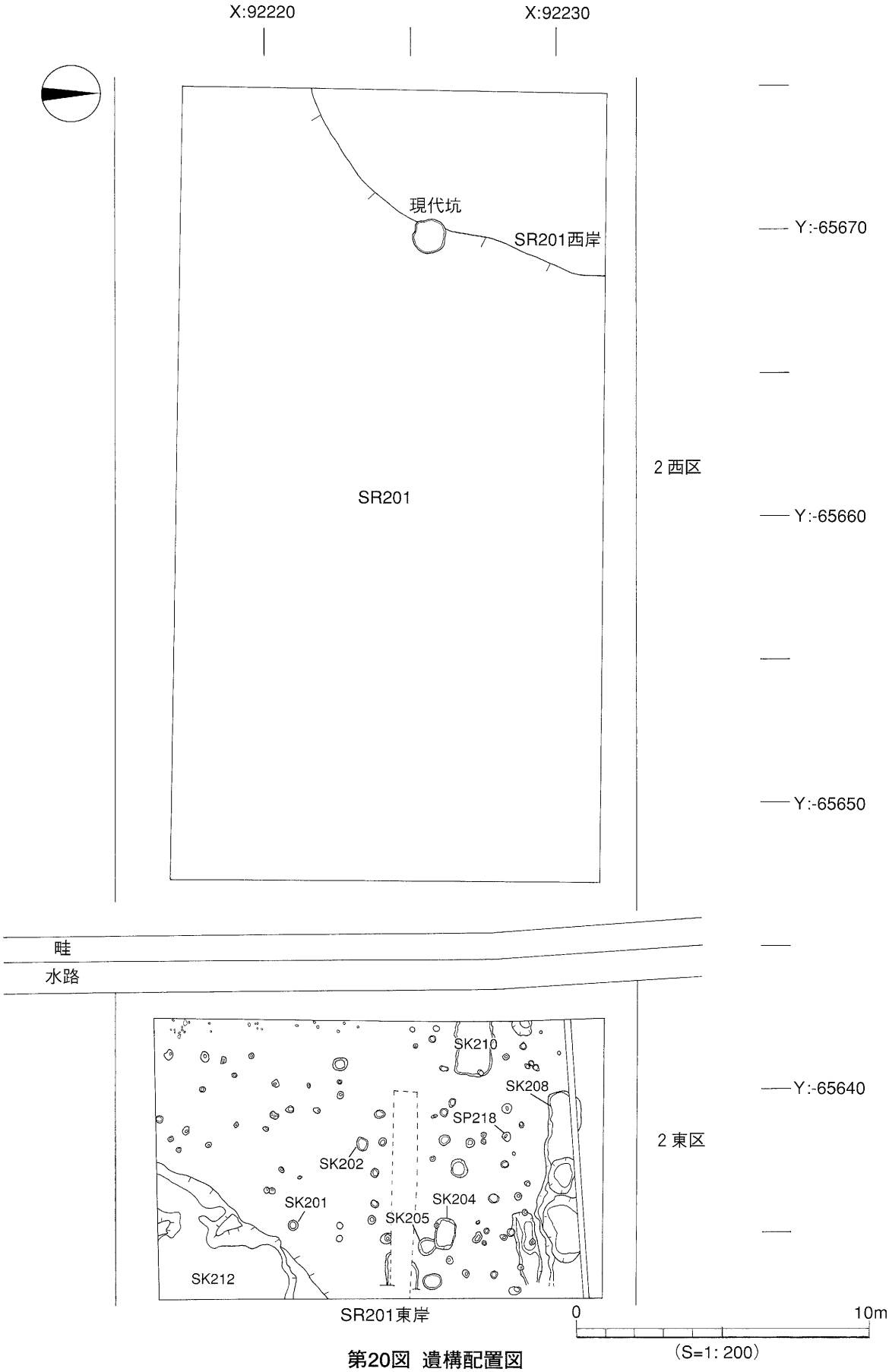
４月17日　ＳＲ201の掘削を終了する。

４月18日　完掘状況の写真撮影を行なう。

４月19日～４月21日　２区の埋め戻しを行い２区の調査を完了する。



第19図 調査区位置図

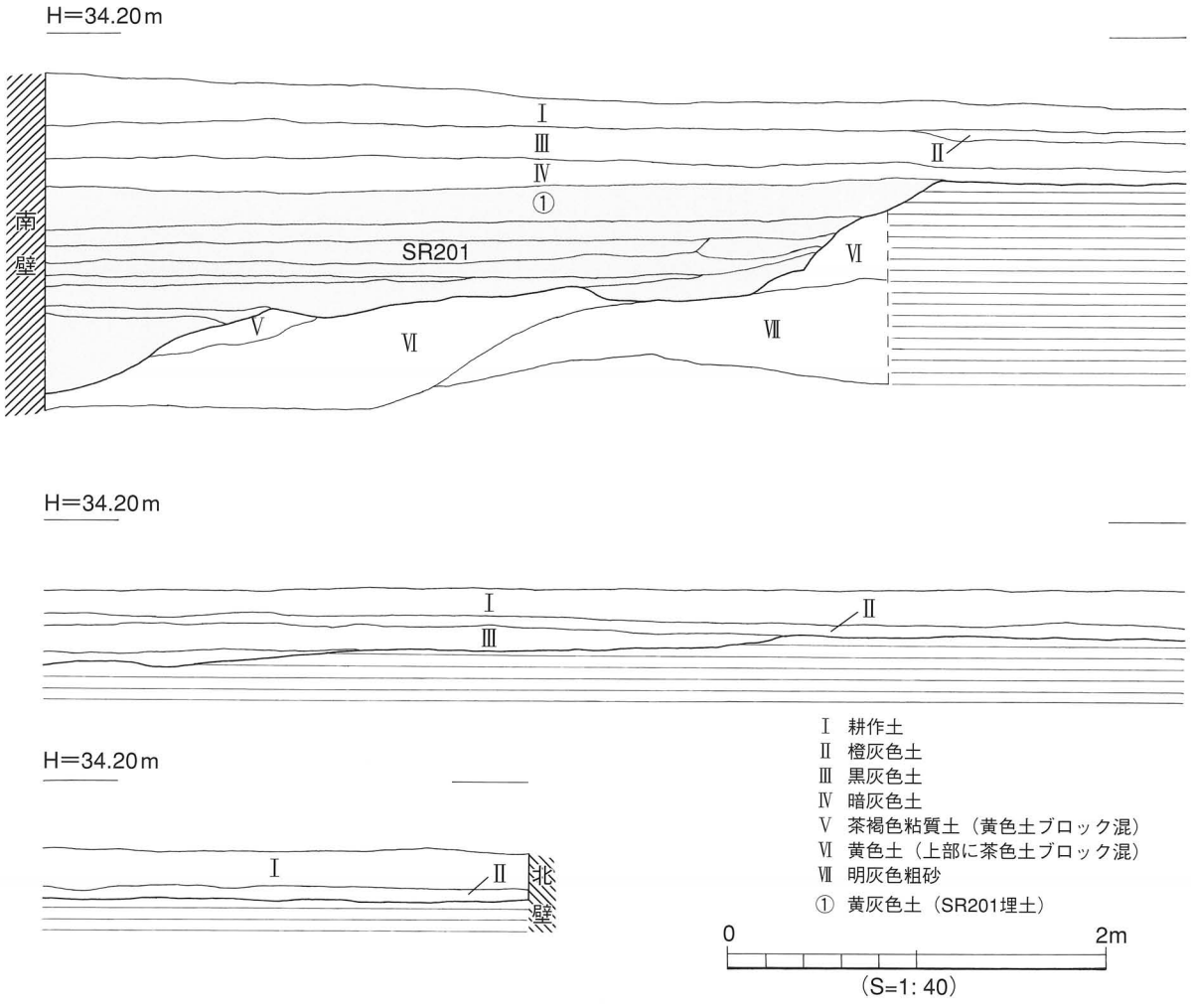

X:92220
X:92230
現代坑
SR201西岸
Y:-65670
SR201
2西区
Y:-65660
Y:-65650
畦
水路
SK210
SK208
SP218
SK202
SK201
SK204
SK205
SK212
Y:-65640
2東区
SR201東岸
0
10m
(S=1:200)

第20図 遺構配置図

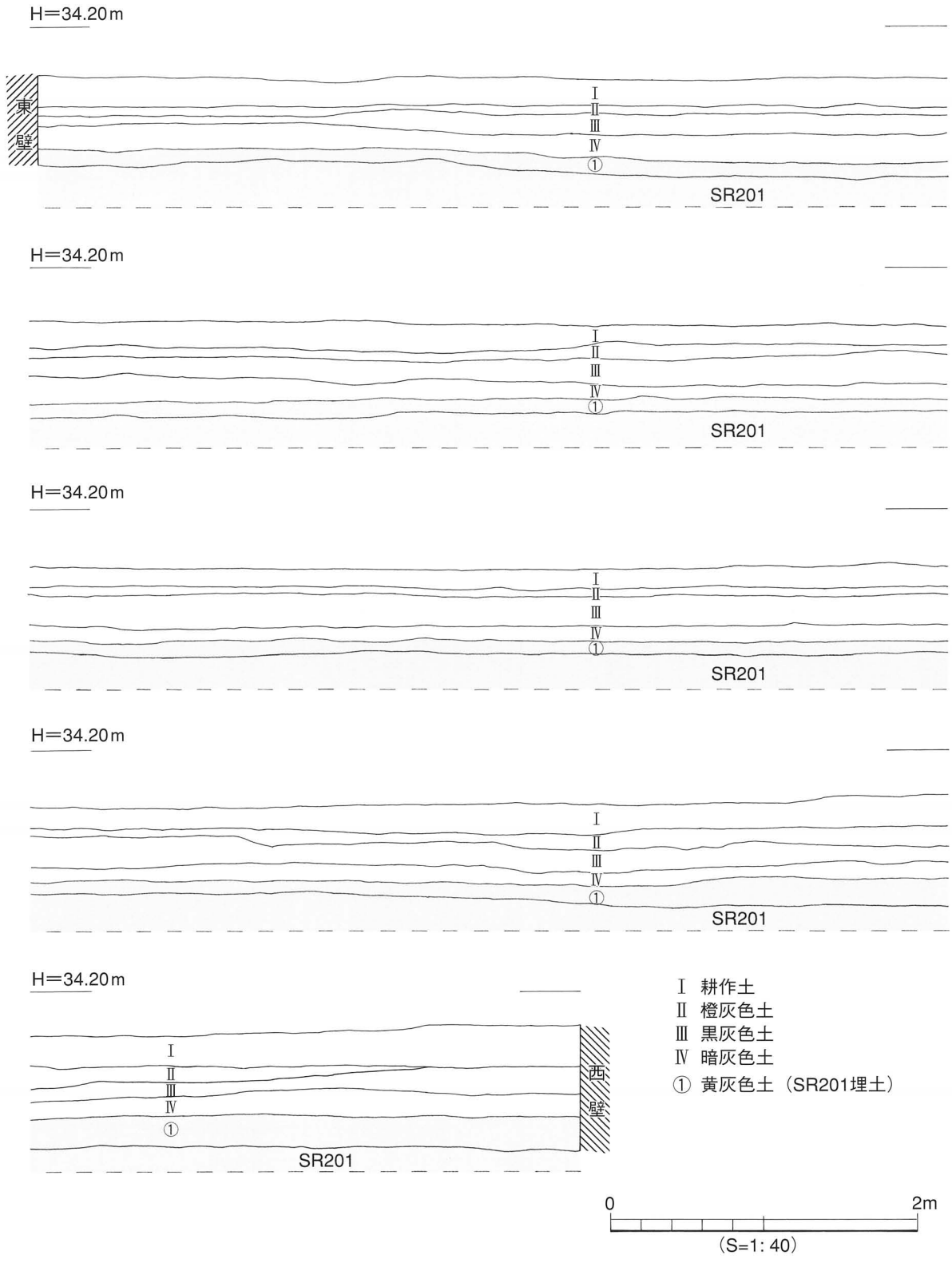
2．層位（第21～23図、図版17-2）

調査区の基本層序は第Ⅰ層現代の耕作土、第Ⅱ層橙灰色土、第Ⅲ層黒灰色土、第Ⅳ層暗灰色土、第Ⅴ層茶褐色粘質土（黄色土がブロック状に混じる）、第Ⅵ層黄色土（上部に茶色土がブロック状に混じる）、第Ⅶ層明灰色粗砂である。第Ⅱ層は現代の床土にあたり、調査区全域に見られる。第Ⅲ層は層厚５cm～20cmを測る。２西区では全体に見られるが、２東区では西側で途切れる。第Ⅳ層は層厚４cm～18cmを測る。２西区の西側を除いた全域に見られ、中世の遺物を包含する。第Ⅴ層、第Ⅵ層はＡＴ火山灰の２次堆積層と考えられる。第Ⅶ層以下は砂礫層となっている。

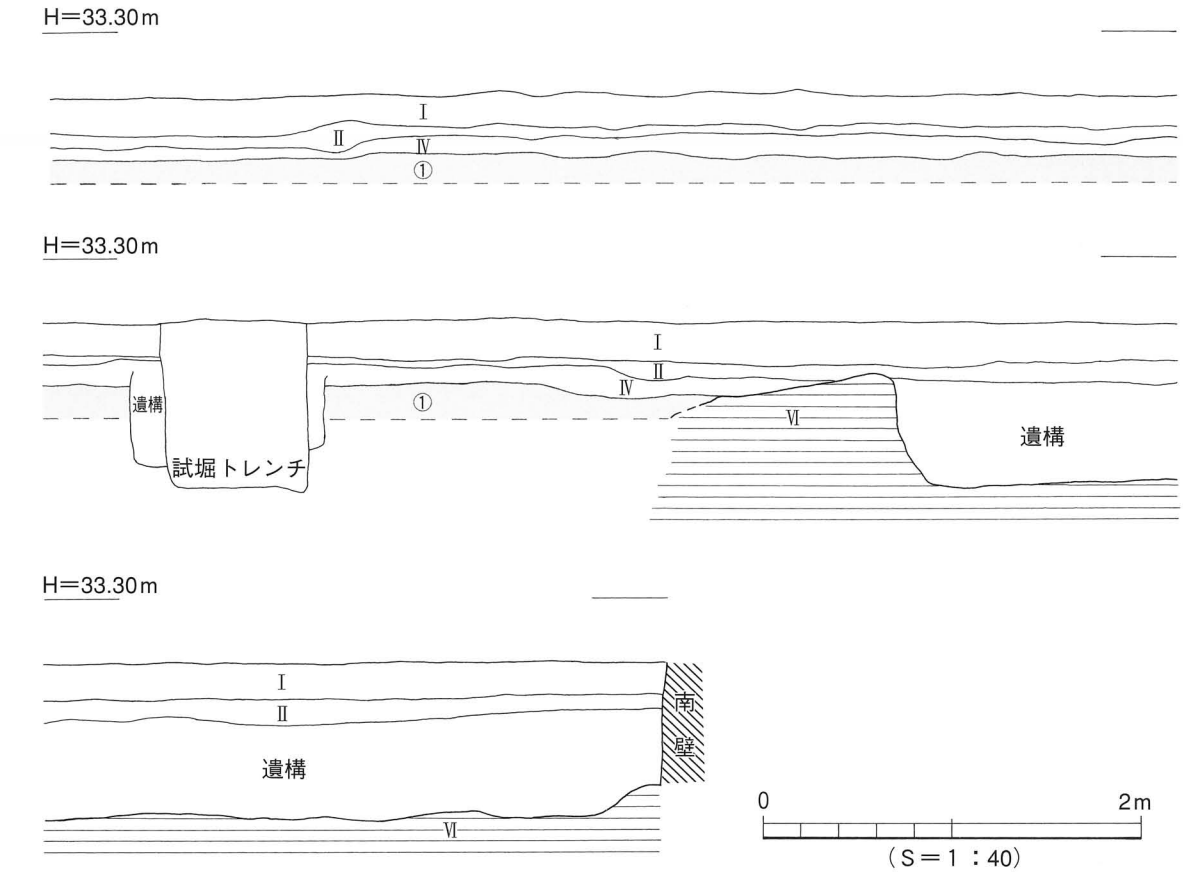
遺構の検出は、基本的に第Ⅴ層上面で行った。その結果、２西区の北西部と２東区の南東部を除いた調査区のほぼ全域が自然流路（SR201）上になる事が判明した。さらに２東区においては、この自然流路の埋土である①層黄灰色土の上面で遺構を検出した。２東区で検出した遺構は自然流路１条、土坑14基、柱穴69基である。



第21図　２西区西壁土層図



第22図　2 西区南壁土層図



第23図　2 東区東壁・南壁土層図

３．遺構と遺物

〔１〕弥生時代～中世

この時期に該当する遺構は自然流路１条である。

１）自然流路（ＳＲ）

ＳＲ201（第24・25図、図版15-2・17）

ＳＲ201は、２西区の北西部と２東区の南東部の一部を除いた調査区のほぼ全域を占める。第Ⅴ層、第Ⅵ層を切り北東方向から南西方向に向かって流れる。掘削は、調査上の都合により検出した流路中央部を幅４m程度のトレンチ状に掘削を行った。検出規模は幅37.50m、深さは最深で1.50mを測る。

土層は、上層から１～３層に分層した。１層は黄灰色土で層厚６cm～24cmを測る。２層は茶褐色土で層厚４cm～41cmを測る。３層は砂礫層である。層厚は最大で130cmを測る。細砂・粗砂・砂礫・微砂・粘質土で構成される。３層中には、黒色粘土やブロック状となったＡＴ火山灰が含まれる。

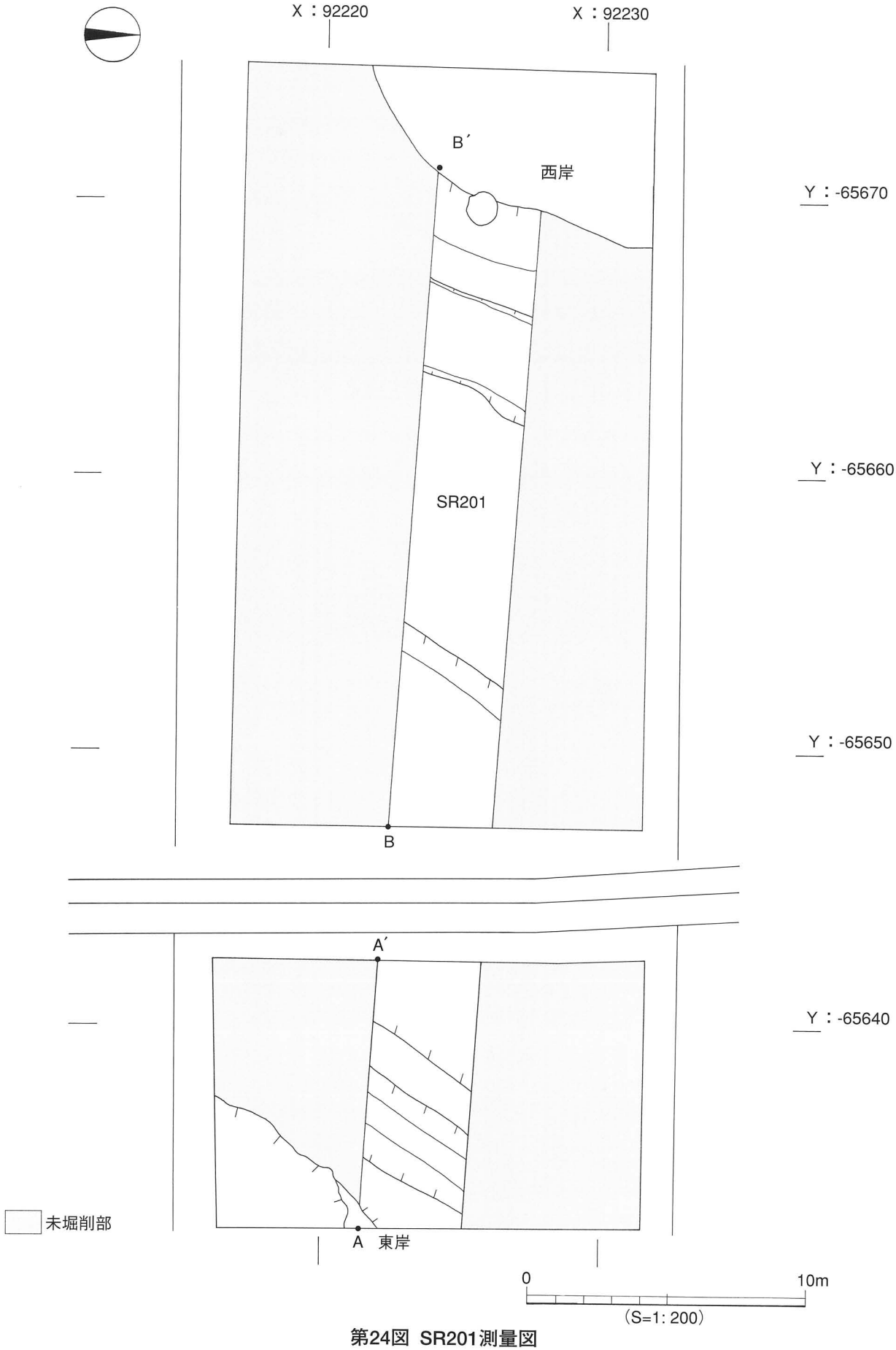
遺物は、１～３層中で弥生時代～中世の遺物が出土した。３層中からは弥生土器、須恵器、勾玉、石器が出土している。２層中からは須恵器、土師器、緑釉陶器が出土している。１層中からは須恵器・土師器が出土している。

３層出土遺物（第26･27図、図版18）

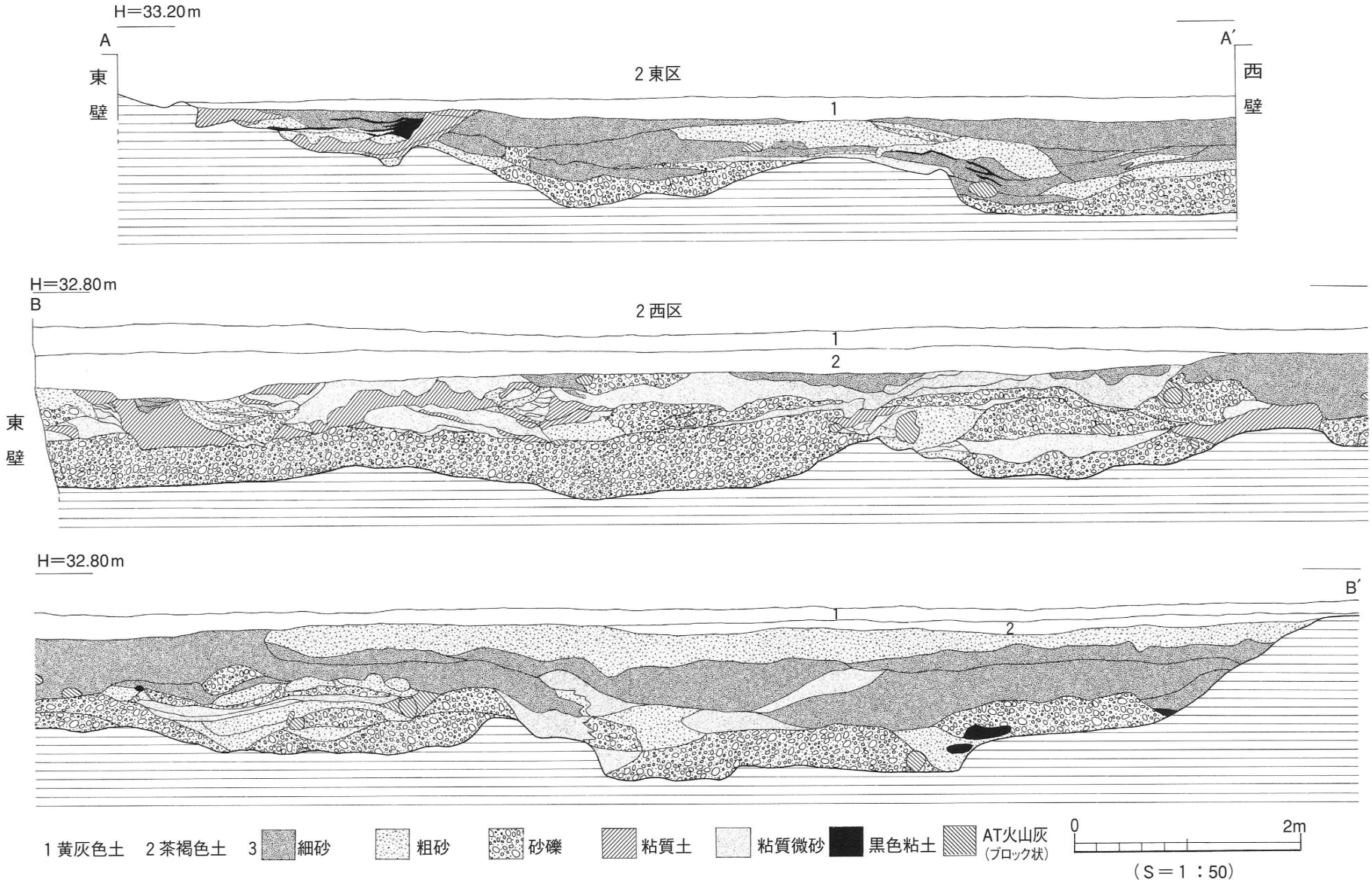
110～119は弥生土器である。110は底部片である。くびれる底部でやや上げ底である。調整は内外面ともナデ調整である。底部内面に指頭痕を残す。111は平底の底部。調整は内外面ともナデ調整である。底部内面に指頭痕を残す。112は底部片でやや内に凹む小さな平底。調整は内外面とも磨滅のため不明である。113は平底の底部で器壁が厚い。調整は内外面ともナデ調整である。114・115は丸みを帯びた小さな平底である。調整は内外面ともナデ調整である。116はわずかに突出した小さな平底である。調整は外面に工具によるナデ調整を施し、内面はナデ調整である。117は高坏の脚部と坏部の接合部片である。調整は内外面ともナデ調整である。118は角付きの支脚片である。受部中央に孔が穿たれる。調整は外面ハケのちナデ調整を施す。内面はナデ調整で指頭痕を残す。119は円柱状の支脚で受部は中央部が円形に凹む。底部には溝状の凹みが見られる。調整はナデ調整である。

120は土製の勾玉である。長さ4.0cm、径1.7cm、孔径0.2cm、重さ16.46gを測る。121は残存1/2の石包丁で両端に抉りをもつものである。材質は緑色片岩製である。122・123は石鏃で材質はサヌカイトである。

124～134は須恵器である。124・125は坏身で、124の受部は上方に短くのびる。立ち上がりは内傾し口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。色調は灰色を呈する。125の受部は水平に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。色調は灰白色を呈する。126は坏の口縁部片である。口縁端部は丸い。口縁端部内面の直下に凹線が１条巡る。色調は灰白色を呈する。127・128は高台付きの坏である。127の高台端面は丸く、128の高台端面は水平に接地する。129・130は長頸壺である。129は胴中位の文様帯に刺突文が施される。130の脚端部は外に肥厚する。端面は水平に接地する。131は脚付壺の脚部と考えられるものである。脚端面は中央部が凹む。調整は内外面ともヨコナデ調整である。色調は灰白色を呈する。脚端面は水平に接地する。132～134は甕である。132は外反して立ち上がる口縁部。口縁



第24図 SR201測量図



第25図 SR201土層図

端部近くで外に肥厚して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。色調は外面が灰色、内面は灰白色を呈する。133は外反する口縁部。口縁端部はやや肥厚し端面は丸くおさめる。口縁部外面はカキメ調整が施される。内面は回転ナデ調整である。色調は外面が灰白色、内面は灰色を呈する。134は外反する口縁部。口縁端部は肥厚して丸い。口縁部外面はカキメ調整が施される。内面は回転ナデ調整である。色調は外面が赤灰色、内面が明褐灰色を呈する。

2層出土遺物（第28・29図、図版19・20）

135～141は須恵器である。135は坏身である。受部は上方に短くのびる。色調は灰色を呈する。136は高坏で坏部と脚部の接合部片である。色調は灰色を呈する。137は壺の底部片である。高台端部は丸みを帯びた面をもつ。色調は外面が鈍い黄橙色、内面は明褐色を呈する。138～141は坏である。138は輪高台。高台端面は丸い。色調は灰色を呈する。139の色調は外面が暗青灰色、内面は灰色を呈する。140は推定底径7.3cmである。底部は糸切りである。色調は内外面とも灰白色を呈する。141の底部はヘラ切りと思われる。色調は灰色を呈する。

142・143は近江系緑釉陶器である。142は胴部片で外面に沈線が施されている。143は底部片である。高台底部内面に明瞭な段を有する。

144～147・162～170・181～183は土師器の椀タイプのものである。146・181～183は内黒の土師器椀である。146は推定口径14.9cmを測る。口縁部が外反する。口縁端面は丸い。内面はヘラミガキされる。181は口縁部が外反する。口縁端部は丸い。内面はヘラミガキが看取される。182は底部片で高台端部は面をもつ。183は底部片で高台部が欠損する。内面はヘラミガキされる。180は瓦器椀である。推定口径13.3cmを測る。口縁端部近くの内面に沈線が巡る。

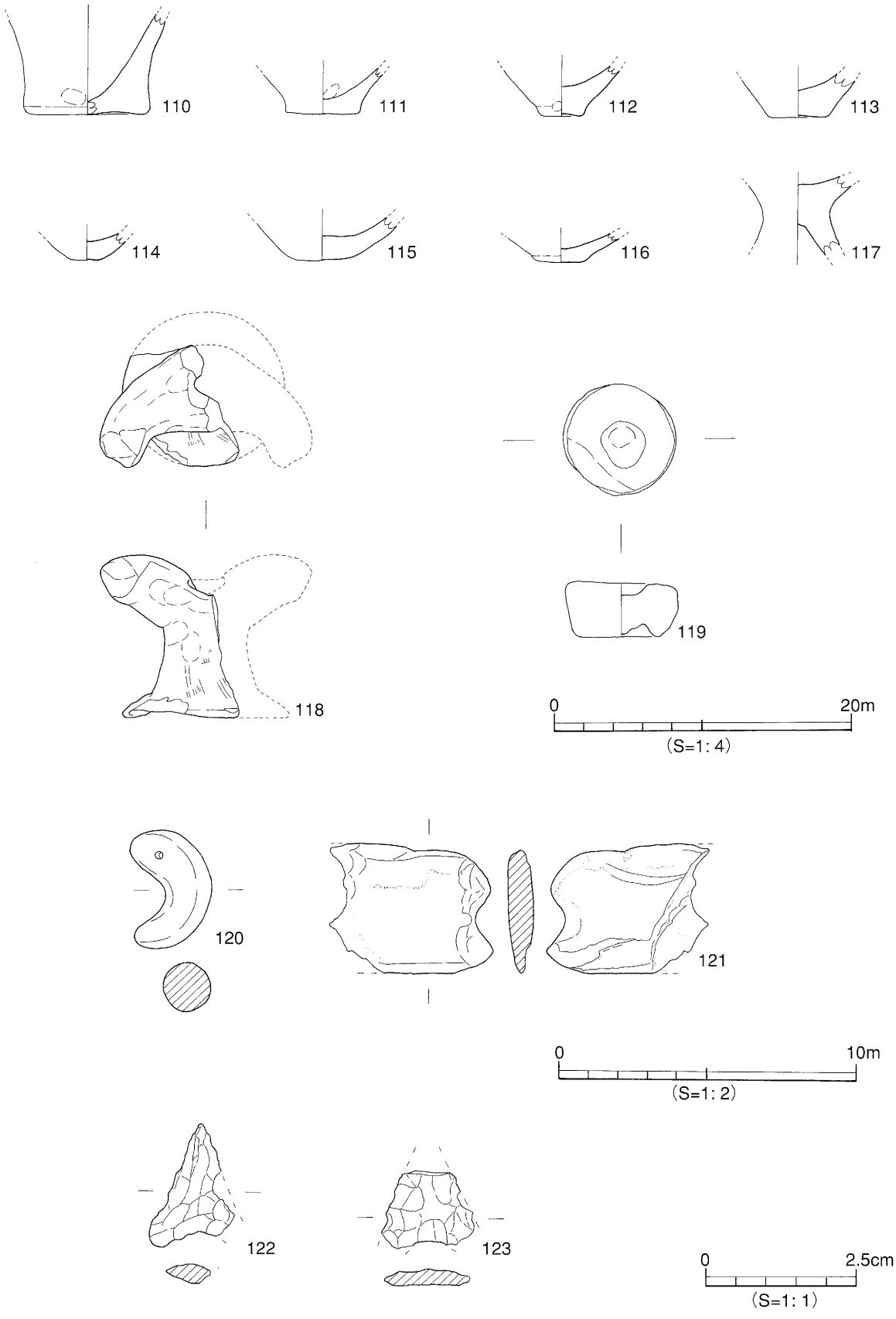
148～156・171～179は土師器坏である。底部の切り離しは148・150～153・156・172～174が回転ヘラ切り、175・179が回転糸切りである。

157～161は土師器皿である。157～159は完形品である。157は口径9.3cm、器高1.5cmを測る。調整は内外面ともナデ調整。底部外面はナデ調整される。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。158は口径10.3cm、器高2.4cmを測る。調整は内外面ともナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。159は口径10.0cm、器高2.1cmを測る。調整は内外面ともナデ調整である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は内外面とも鈍い橙色である。160は推定口径7.7cm、残高1.4cmを測る。調整は内外面ともナデ調整である。底部外面もナデ調整される。色調は内外面とも灰白色を呈する。

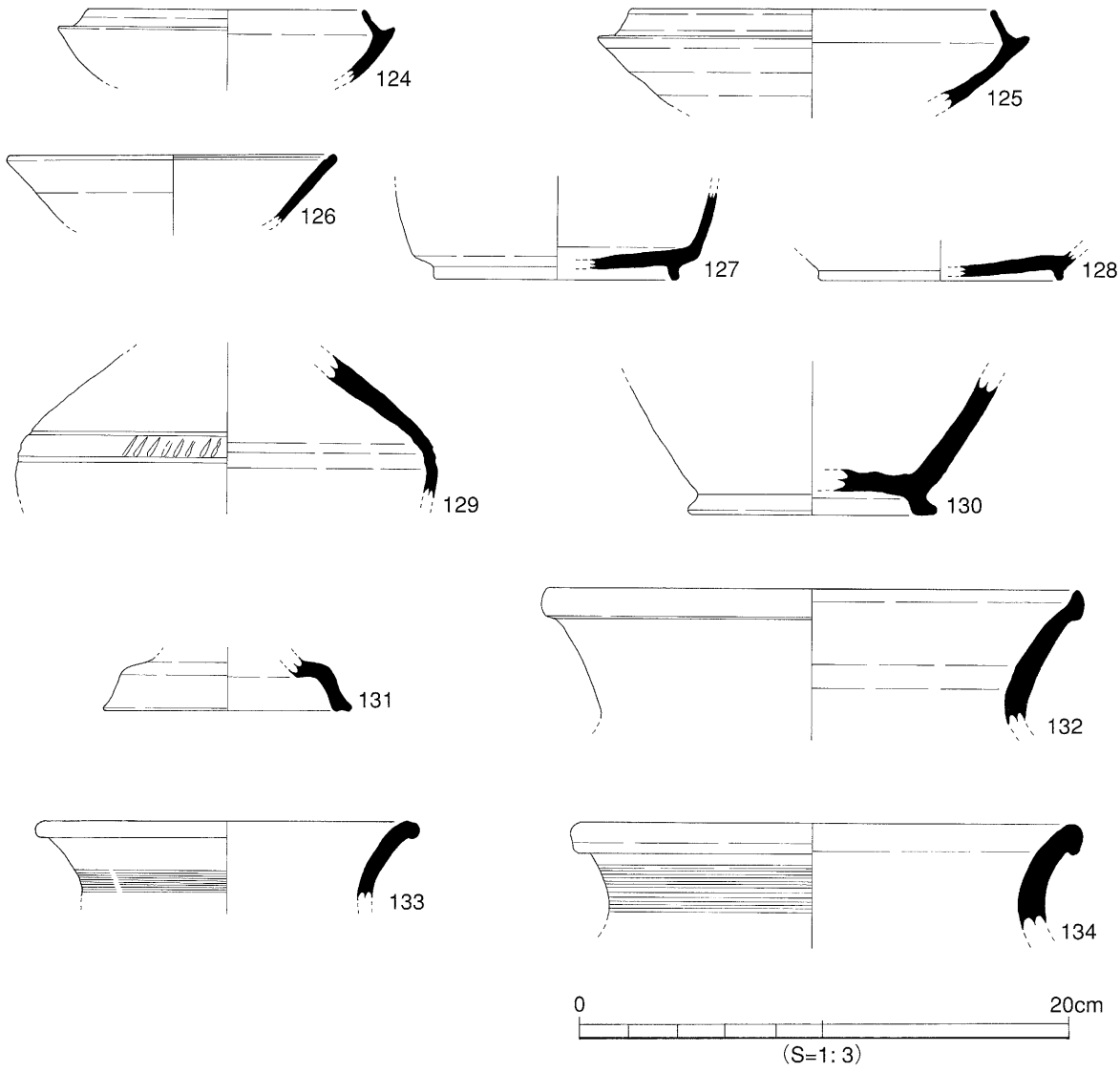
1層出土遺物（第30図、図版20）

184は須恵器こね鉢の口縁部片である。口縁部は上方にのびて端部は丸い。調整は内外面とも回転ナデである。色調は内外面とも灰白色、口縁部は暗灰色を呈する。

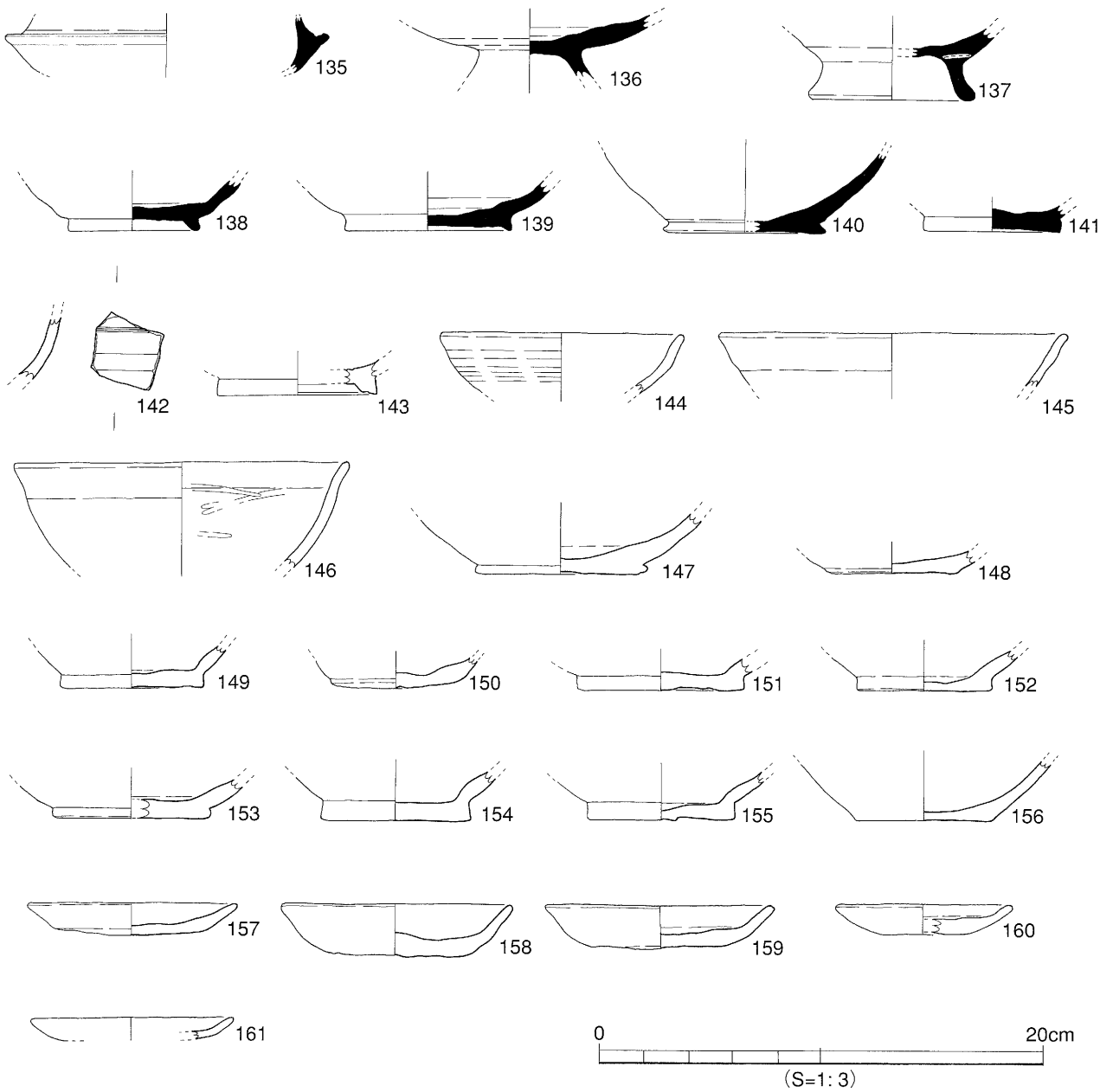
185～194は土師器椀である。185は外反する口縁部片である。調整は内外面とも摩滅のため不明である。色調は内外面とも灰白色を呈する。186は口縁部片で、口縁端部は丸い。調整は内外面ともナデである。色調は内外面とも灰白色を呈する。187の高台端部は尖り気味に丸い。調整は内外面ともナデである。色調は外面が鈍い橙色、内面は橙色である。188・189の高台端部は丸い。190は内黒の土師器椀である。高台端部は丸い。色調は外面が灰白色、内面は黒色である。191の高台端部は丸い。調整は内外面とも摩滅のため不明である。192の高台端部は丸く、少し外に張る。調整は内外面とも



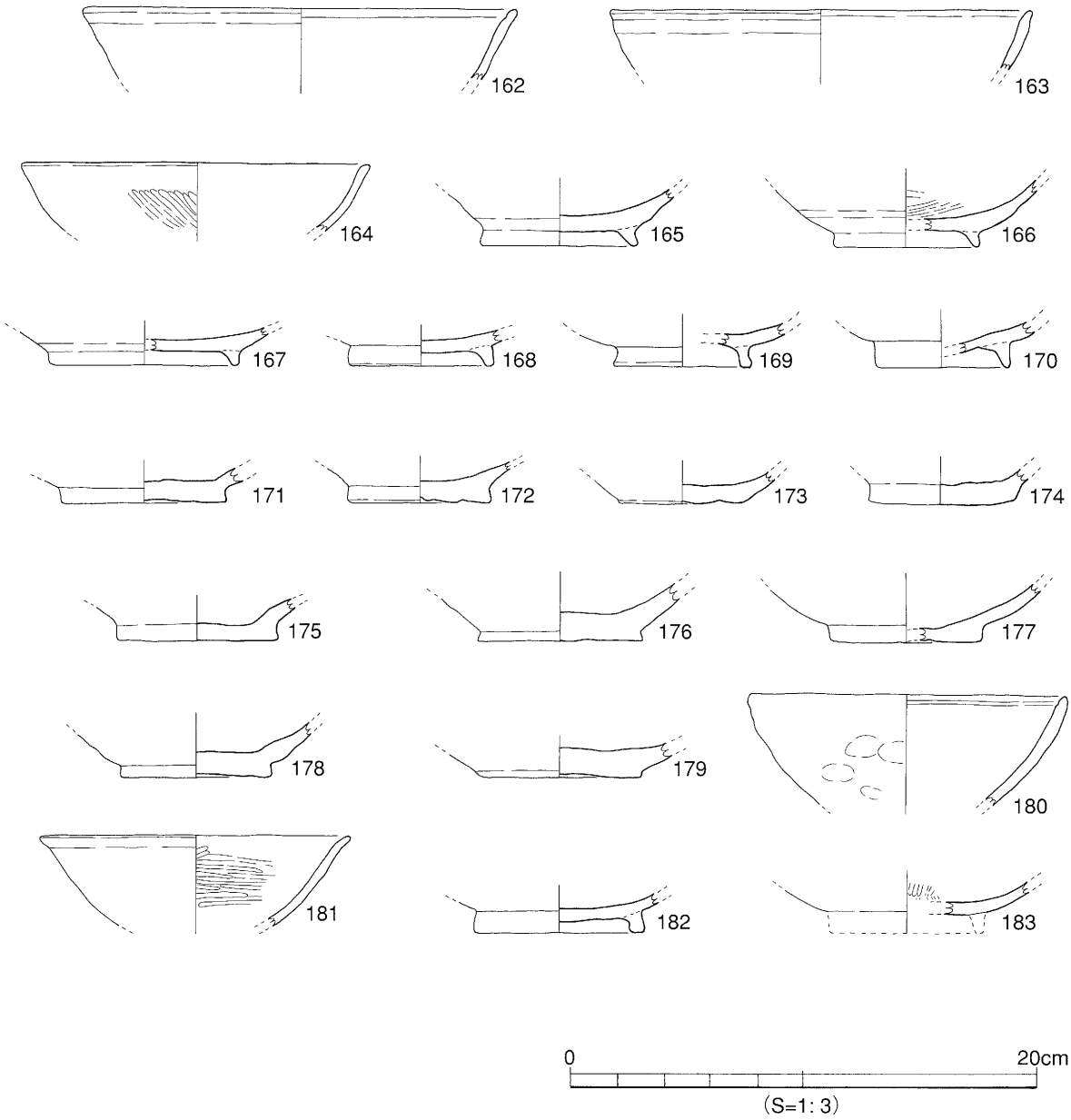
第26図 SR201 3層出土遺物実測図（1）



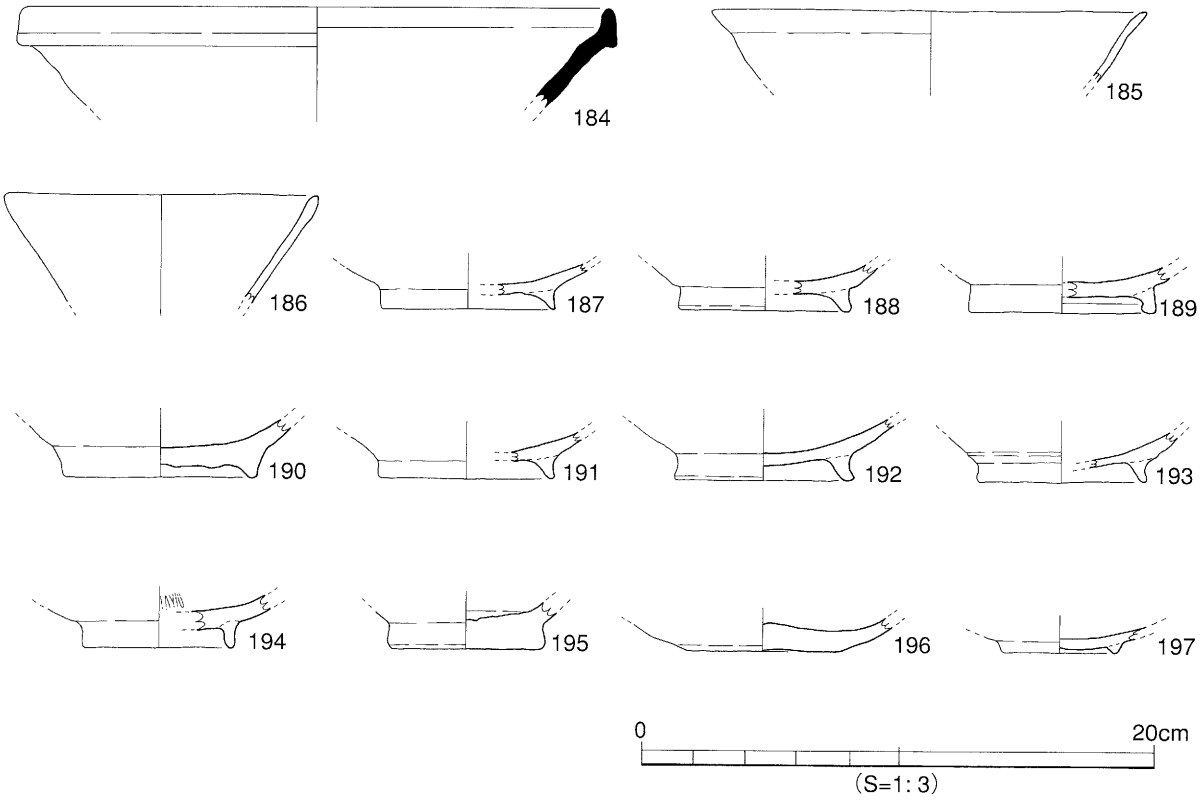
第27図 SR201 3層出土遺物実測図（2）



第28図 SR201 2層出土遺物実測図（1）



第29図 SR201 2層出土遺物実測図（2）



第30図 SR201 1層出土遺物実測図

ナデ調整である。193の高台端部は丸い。色調は外面が灰白色、内面は淡黄色である。194は内黒の土師器椀である。高台端部は丸い。調整は外面ナデ調整、内面はミガキが施される。色調は外面が灰白色、内面は褐灰色を呈する。195は平高台である。調整は内面ナデ調整、外面はヨコナデ調整である。底部調整は摩滅のため不明。色調は外面が橙色、内面は明黄褐色を呈する。196は底部内面の中央部が盛り上がる。調整は内外面ともナデ調整である。色調は外面が淡黄色、内面は灰白色。197は瓦器椀の底部片である。

時期　出土遺物より13世紀～14世紀には埋没したものと考える。

〔2〕中世

中世の遺構は、2東区のＳＲ１埋土上で検出した遺構である。検出した遺構は、遺物を出土するものが少ない。以下、遺物の出土があった遺構について記述する。

1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ201（第31・32図、図版16-1）

ＳＫ201は、2東区の南東部で検出した土坑墓である。平面形態は、円形を呈する。検出規模は直径35cm、深さは7cm～12cmを測る。土坑内の北側底部より、人間の歯牙を検出した。遺物は、完形の土師器坏が2点出土している。

出土遺物（第33図、図版20）

198は口径9.8cm、底径5.3cm、器高3.5cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸い。

底部の切り離しは、回転糸切りである。199は口径9.8cm、底径5.3cm、器高2.9cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸い。底部の切り離しは、回転糸切りである。

時期　出土遺物より15世紀と考える。

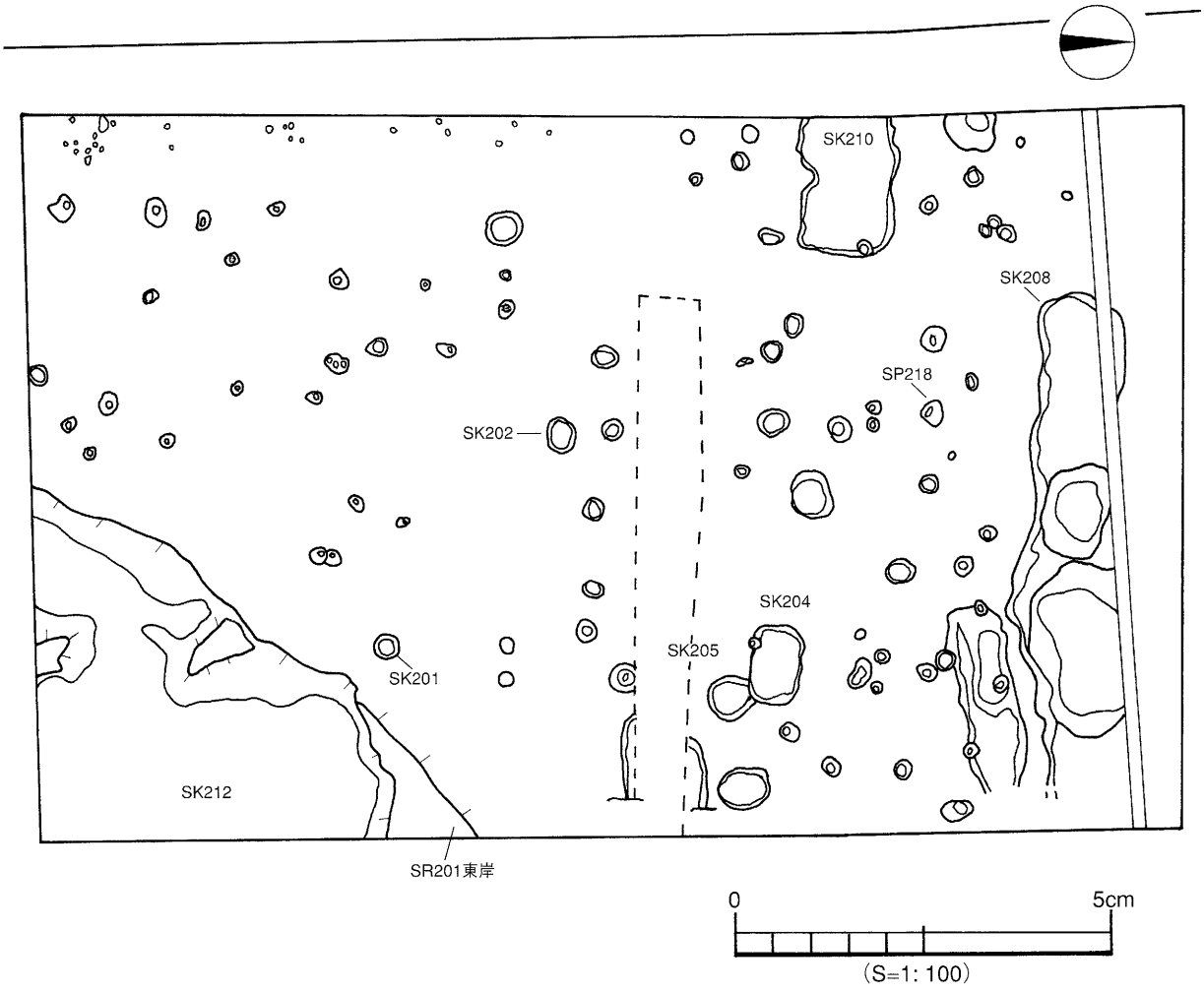
ＳＫ208（第31・34図）

ＳＫ208は、調査区の北東部で検出した。遺構の北側は、現代の配水管が通るため掘削する事ができなかったため全容は不明である。平面形態は、東西に長い溝状を呈する。検出規模は東西6.78ｍ、南北の最長で1.50m、深さ８cm～15cmを測る。埋土は茶褐色土である。遺物は、小片が多く図化できるものが少ない。

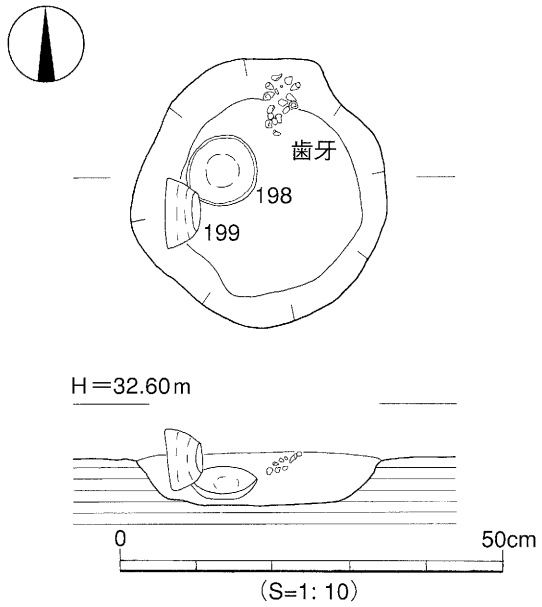
出土遺物（第35図）

200は羽釜の口縁部片である。口縁端部に隆帯が貼り付けられる。201は坏の底部片で底部の切り離しは回転糸切りである。

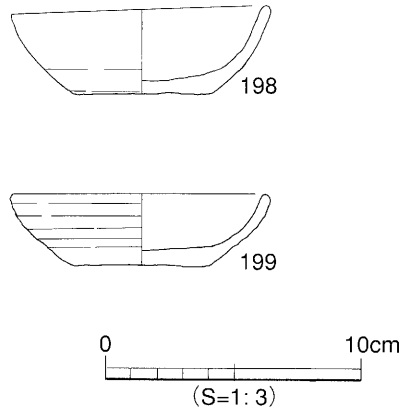
時期　出土遺物より13世紀と考える。



第31図　２東区遺構配置図



第32図 SK201 測量図



第33図 SK201 出土遺物実測図

ＳＫ204（第31・34図）

調査区の中央部東側で検出したものである。平面形態は、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸108cm、短軸68cm、深さ24cmを測る。埋土は茶褐色土と茶褐色砂質土（黄色土混じる）である。遺物は、土器片が数点出土したのみである。

出土遺物（第35図）

202は土師器椀である。推定口径11.6cmを測る。口縁部は外反する。口縁端部は丸い。色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色である。203は壺の底部片と考えられるものである。底部外面には糸切り痕を残す。色調は灰白色を呈する。

時期　出土遺物より11世紀～12世紀と考えられる。

ＳＫ202（第31・34図）

２東区の中央部で検出したものである。平面形態は、円形を呈する。検出規模は直径40cm、深さ６cmを測る。埋土は茶褐色土である。遺物は古銭が出土している。

出土遺物（第35図、図版20）

205は「熙寧元寶」で初鋳年1068年である。

時期　出土遺物より11世紀後半以降。

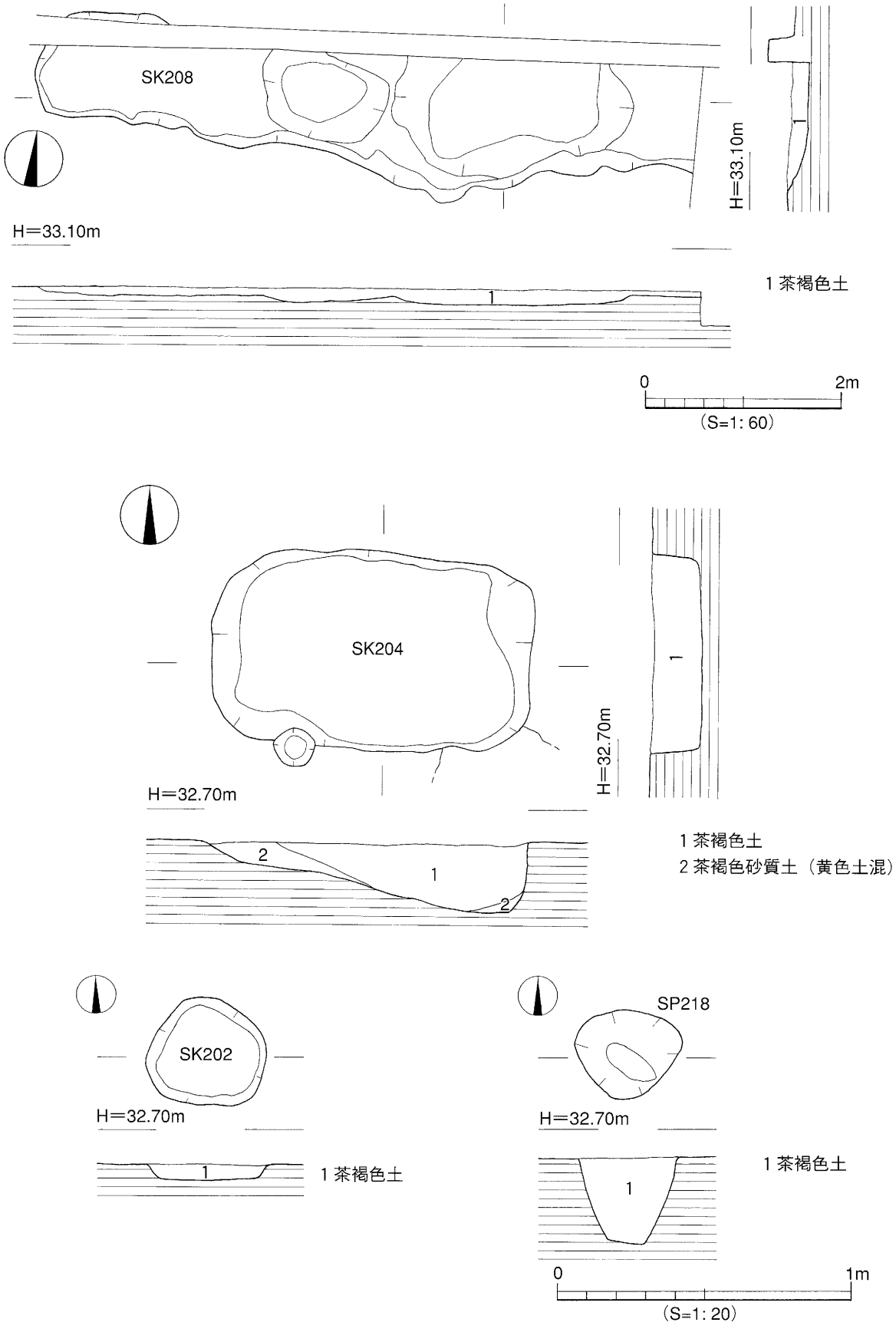
２）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ218（第31・34図）

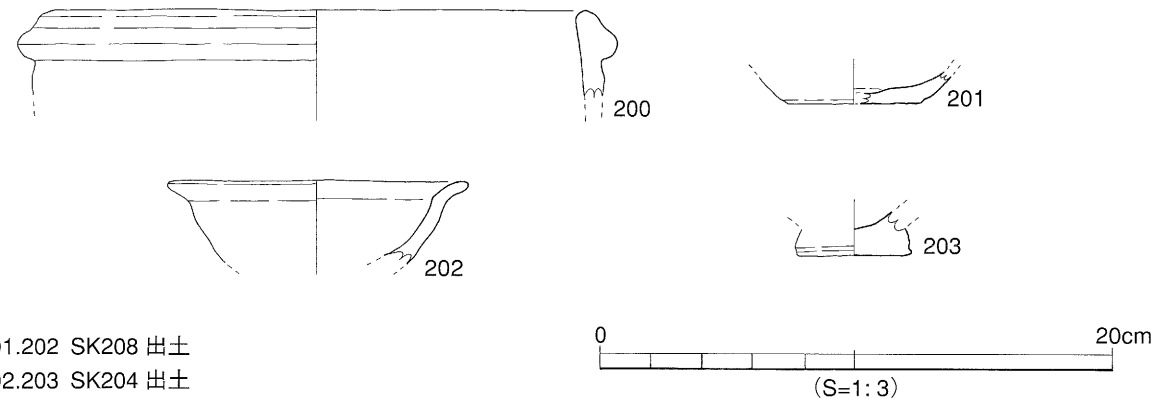
２東区の北側で検出した柱穴である。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径36cm、深さ30cmを測る。埋土は茶褐色土である。遺物は古銭が出土している。

出土遺物（第35図、図版20）

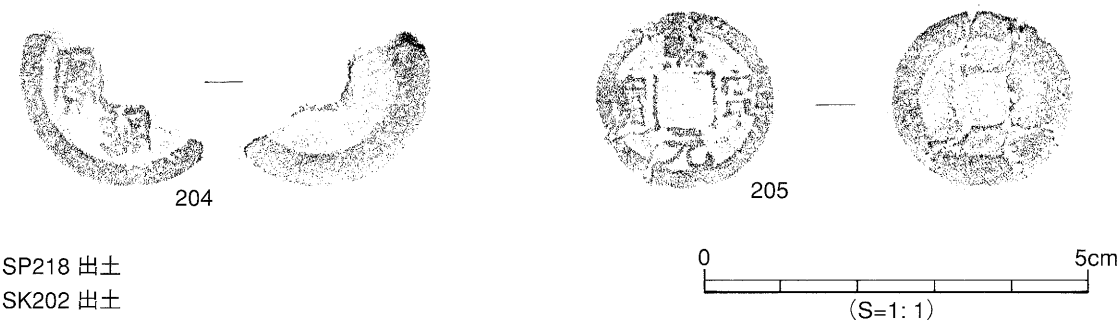
204は1/2の残存である。残存する「通寶」の字体より「元豊通寶」と考えられる。初鋳年は1078年。



第34図　SK208.204.202.SP218測量図



201.202 SK208 出土
202.203 SK204 出土



204 SP218 出土
205 SK202 出土

第35図 SK208.204.202.SP218 出土遺物実測図

時期　出土遺物より11世紀後半以降。

〔3〕出土地点不明遺物（第36図）

206～218は、主に第Ⅳ層掘削時と2東区の遺構検出時に出土した遺物である。11世紀から15世紀に比定される土器が出土した。

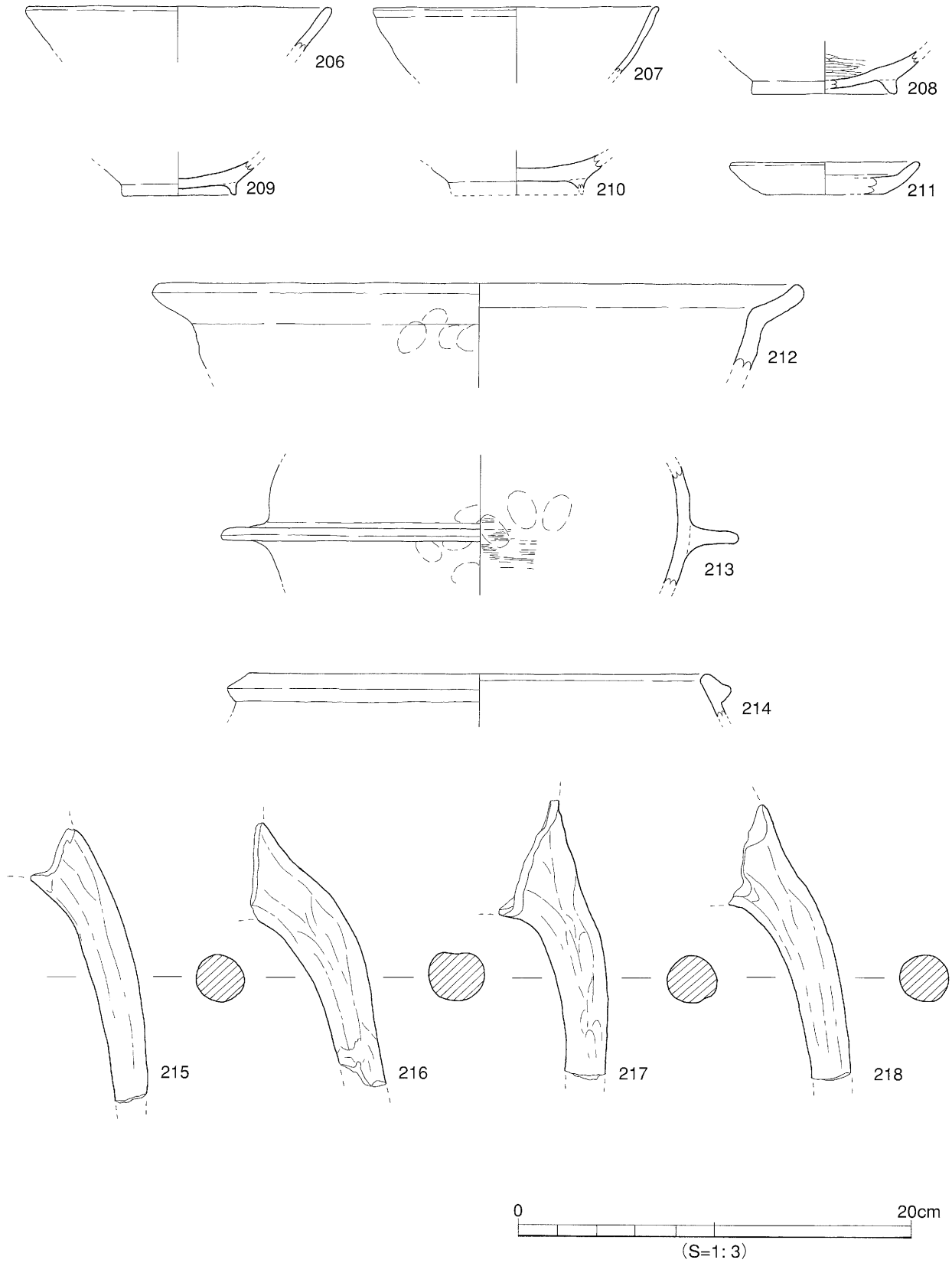
206は土師器椀の口縁部片である。207は瓦器椀である。208は土師器椀の底部片。内面はヘラミガキされる。209・210は土師器椀の底部片である。211は土師器皿である。212は鍋である。口縁部は屈曲して内湾気味に上方にのびる。胴部と口縁部境の外面には指頭痕を残す。推定口径32.3cmを測る。213は羽釜で胴中位部に鍔がつく。214は羽釜で口縁端部外面直下に隆帯が貼付される。215～218は羽釜にとりつく脚である。

遺物の時期は206・208～210が11～12世紀、207・211は13世紀、212は13世紀後半から14世紀前半。213は14世紀後半。214は15世紀。215～218は14～15世紀に比定される。

4．小結

（1）弥生時代～中世

この時代の遺構は自然流路ＳＲ201である。ＳＲ201の最下層である3層は砂礫層で構成され、水



第36図　出土地点不明遺物実測図

流を伴う堆積層である。この3層中からは弥生時代後期～8世紀代の遺物が出土している。これらの出土遺物よりＳＲ201が機能していた時期は弥生時代後期～8世紀頃と考えられる。その後2層の茶褐色土が堆積するが、層中には砂層の堆積がみられず2層堆積時には、ＳＲ201の機能は失われてきたものと考えられる。2層中からは、10世紀後半に比定される近江系緑釉陶器のほか、10世紀後半～13世紀の遺物が出土している。このことから、ＳＲ201は10世紀後半頃にはその機能を失い、そして中世には完全に埋没してしまったものと考える。

（2）中世

2東区では、ＳＲ201の埋土上面で土坑や柱穴を検出した。遺物が出土し時期比定できるものはＳＫ201、202、204、208、ＳＰ218である。これらの遺構は、出土遺物より11世紀から15世紀に比定できるものであった。このうち15世紀の土坑墓であるＳＫ201は平面形態が円形を呈し、規模は直径35cmを測る。同様な遺構は、本調査地の北50ｍにある桑原稲葉遺跡においても数基が検出されており「首塚」と報告されている。このことから本調査地周辺には、この様な土坑墓が数多く営まれている可能性が高いと考えられる。

遺物の出土がなかった遺構については、埋土色が茶褐色土と暗灰色土とに分けられる。茶褐色土を埋土にもち時期比定できる遺構はＳＫ202、204、208、ＳＰ218がある。これらの遺構の時期は、11世紀後半～13世紀に比定される。そして暗灰色土を埋土にもつものには、ＳＫ201があり15世紀に比定される。このことから本調査地では、時期による埋土色の違いが確認できた。今後は、周辺で調査された遺構の埋土色との対比を行いたい。

遺物観察表　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。

遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　(　):推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。

(　)の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1～3)→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表10　SR201　3層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
110	甕	底径 (8.0) 残高 6.9	くびれの底部。やや上げ底。	ナデ	ナデ (指頭痕あり)	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~7) 多 ◎		
111	甕	底径 5.1 残高 3.1	平底。	ナデ	ナデ (指頭痕あり)	淡黄色 浅黄橙色	石・長(1~5) ◎		
112	甕	底径 3.0 残高 3.4	やや内に凹む小さな平底。 わずかに立ち上がりをもつ。	摩滅のため不明	摩滅のため不明 (指頭痕あり)	橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) 多 ◎		
113	甕	底径 (3.9) 残高 3.0	平底。器壁厚い。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明褐灰色	石・長(1~3) ◎		
114	甕	底径 2.0 残高 1.8	丸味をおびた小さな平底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	長(1) ◎		
115	甕	底径 4.6 残高 3.0	丸味をおびた平底。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	長(1~3) ◎		
116	甕	底径 3.5 残高 2.0	わずかに突出した丸味をおびた平底。	工具によるナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1~3) ◎		
117	高坏	残高 5.4	円柱状の脚柱部。器壁は厚い。	ナデ	ナデ	橙色 明赤褐色	長(1~3) ◎		
118	支脚	底径(10.9) 器高 11.1	受け部突起2ヶの内1ヶ残存。中空。	ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ (指頭痕あり)	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~4) 褐色粒 ◎		18
119	支脚	口径 7.3 底径 5.3 器高 3.8	受け部は中央に凹みをもつ。底部は溝状の凹みが残る。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~4) ◎		18

表11　SR201　3層出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
120	勾玉	完形	土製 橙色	4.0	1.7	0.2	16.46		18

表12　SR201　3層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
121	石包丁	1／2	緑色片岩	(5.5)	(4.4)	0.8	30.52		18
122	石鏃	一部欠損	サヌカイト	2.2	1.5	0.3	0.61		18
123	石鏃	約2／3	サヌカイト	1.3	1.5	0.3	0.67		18

表13　SR201　3層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
124	坏身	口径(11.2) 残高 3.0	やや上方に短くのびる受部に内傾する立ち上がり。口縁端部は、尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1)		
125	坏身	口径(14.7) 残高 4.1	短く水平な受部。内傾する立ち上がり。口端部は、丸い。焼きが甘い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石(1~2) 密 ○		
126	坏	口径(13.2) 残高 2.8	外傾する口縁。口端部は丸い。内面上方に凹線が1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) 密 ◎		
127	坏	底径 (9.6) 残高 3.6	高台付。高台端部は丸い。焼きが甘い。	ナデ	ナデ	灰白色	長(1) 多 ○		
128	坏	底径 (9.9) 残高 1.2	高台付。高台端面は水平に接する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	微砂粒 密 ◎		
129	長頸壺	残高 5.9	扁球形の胴部。胴中位に2条の凹線。凹線の間に刺突文。	回転ナデ →施文	回転ナデ	灰白色	微砂粒 黒い石粒 ◎		
130	長頸壺	底径(10.0) 残高 5.7	端部は面をもち水平に接する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	微砂粒 密 ◎		
131	壺	口径(10.2) 残高 2.2	脚付壺。脚端面は水平に接し凹みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	長(1~3) 密 ◎		
132	甕	口径(21.3) 残高 5.6	口縁部は外反して立ち上がり、端部はやや肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰白色	石(1~2) 密 ◎		
133	甕	口径(15.0) 残高 3.2	口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸く肥厚する。	㊐回転ナデ ㊓カキメ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(1~2) 密 ◎		
134	甕	口径(21.0) 残高 4.3	口縁部は外反して立ち上がり、端部は肥厚し下方にのびる。	㊐回転ナデ ㊓カキメ	回転ナデ	赤灰色 明褐灰色	長(1) 黒い石粒 ◎		

表14　SR201　2層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
135	坏身	残高 2.5	受部は、上方に短くのびる。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ →ヨコナデ	灰色	長(1~3) 密 ◎		
136	高坏	残高 2.8	坏と脚の接合部片。	㊍回転ヘラケズリ ㊎回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(1~4) ◎		
137	壺	底径 (7.5) 残高 3.3	高台付。端部は丸味をおびた面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 明褐色	石・長(細粒) 金 ○		
138	坏	底径 (5.8) 残高 2.3	高台付。高台端面は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) 密 ◎		
139	坏	底径 (7.6) 残高 2.3	高台付。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 灰色	石(1~5) 長(1~4) ◎		19
140	坏	底径 (7.3) 残高 3.6	平高台。内湾気味に立ち上がる。	㊎回転ナデ ㊏糸切り	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) 密 ◎		19
141	坏	底径 6.0 残高 1.2	平高台。	㊎回転ナデ ㊏回転ヘラ切り (工具痕あり)	回転ナデ	灰色	長(1) 密 ◎		

SR201　2層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
142	椀	残高 3.5	内湾気味に立ち上がる。外面に2条の沈線を施す。近見産。	ヘラケズリ	ナデ	緑色	微砂粒 密 ◎	近江系緑釉	19
143	椀	底径 (7.2) 残高 1.6	高台付。内面に1条の沈線を施す。高台端部に段をもつ。近見産。	ヨコナデ	ヨコナデ	緑色	微砂粒 密 ◎	近江系緑釉	19
144	椀	口径(10.7) 残高 2.7	口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 明褐灰色	微砂粒 密 ◎		19
145	椀	口径(15.5) 残高 2.4	口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ○		19
146	椀	口径(14.9) 残高 4.8	黒色土器。口縁部は外反し、端部は丸い。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊑ヘラミガキ	淡黄色 灰色	石・長(1) ◎		19
147	椀	底径 7.6 残高 2.7	平高台。高台端部はわずかに外に突出する。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ナデ	にぶい橙色	石・長(1) ◎		19
148	坏	底径 6.1 残高 1.0	平底。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ナデ	橙色	微砂粒 ◎		19
149	坏	底径 6.4 残高 1.9	平高台。	㊑ナデ ㊎摩滅の為不明	ナデ (指頭痕あり)	橙色	石・長(1~2) ◎		
150	坏	底径 5.8 残高 1.4	丸味をおびた平底。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1) 褐色粒 ◎		
151	坏	底径 (7.4) 残高 1.5	平高台。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ナデ	橙色	長(1~2) ◎		
152	坏	底径 (6.0) 残高 1.8	平高台。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ナデ	橙色	微砂粒 ◎		
153	坏	底径 (6.7) 残高 1.8	平高台。高台端部は丸い。	㊑ナデ ㊎回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色	長(1) 褐色粒 ◎		
154	坏	底径 (6.8) 残高 2.3	平高台。	摩滅の為不明	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 ◎		
155	坏	底径 (6.5) 残高 2.2	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
156	坏	底径 (6.0) 残高 2.7	平底。底部より外傾して立ち上がる。	㊑ヨコナデ ㊎回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色	石・長(1~2) 褐色粒 ◎		
157	皿	口径 9.3 底径 7.0 器高 1.5	丸味をおびた平底。ゆるやかに外傾して立ち上がる。口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	浅黄橙色	微砂粒 ◎		19
158	皿	口径 10.3 底径 6.4 器高 2.4	丸味をおびた平底。外傾して立ち上がる。縁部は丸い。	㊐ナデ ㊎回転ヘラ切り	ナデ	浅黄橙色	石・長(1) 金、褐色粒 ◎		
159	皿	口径 10.0 底径 6.0 器高 2.1	丸味をおびた平底。口縁はわずかに外反する。	㊐ナデ ㊎回転ヘラ切り	ナデ	にぶい橙色	微砂粒 ◎		19
160	皿	口径 (7.7) 底径 (4.2) 残高 1.4	丸味をおびた平底。口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白色	長(1) ◎		
161	皿	口径 (9.0) 残高 1.0	土師皿の口縁部片。端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
162	椀	口径(18.6) 残高 3.1	口縁は外傾して立ち上がる。口縁内面にナデによる凹線が巡る。	ナデ	ナデ	灰白色	微砂粒 ○		20
163	椀	口径(18.1) 残高 2.6	外傾して立ち上がる口縁部片。端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 明褐灰色	微砂粒 ◎		20
164	椀	口径(14.8) 残高 3.0	内湾気味に立ち上がる口縁部片。	㊐ナデ ㊑ヘラミガキ	ナデ	灰黄褐色 灰白色	微砂粒 ◎		20
165	椀	底径 6.3 残高 2.5	高台付。高台端部は丸い。	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		20

SR201　2層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
166	椀	底径 (6.2) 残高 2.9	高台付。高台端部は丸い。底部よりゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎		
167	椀	底径 (8.0) 残高 1.6	高台付。高台端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石(1~2) 長(1) ◎		
168	椀	底径 (6.1) 残高 1.6	高台付底部片。高台端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡橙色 褐灰色	石・長(1) ◎		
169	椀	底径 (5.8) 残高 1.9	高台付。高台端部は面をもつ。	㊥ヨコナデ ㊦ナデ	ヘラミガキ	淡黄色	微砂粒 ◎		
170	椀	底径 (5.5) 残高 2.0	高台付。高台端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 浅黄橙色	長(1) 褐色粒 ○		
171	杯	底径 7.0 残高 1.5	平高台。	㊥ナデ ㊦回転ヘラ切り	ナデ	褐灰色	石・長(1~2) ◎		20
172	杯	底径 6.0 残高 1.8	平高台。回転ヘラ切り痕が顕著。	㊥ヨコナデ ㊦回転ヘラ切り	ナデ	浅黄橙色 灰白色	微砂粒 ◎		
173	杯	底径 5.4 残高 1.4	平底。回転ヘラ切り痕が顕著。	㊥摩滅の為不明 ㊦回転ヘラ切り	摩滅の為不明	橙色	長(1) 金 ○		
174	杯	底径 6.2 残高 1.6	平高台。	㊥ナデ ㊦回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい赤橙色	長(1) 黒い石粒 ◎		
175	杯	底径 6.8 残高 1.8	平高台。底部より外反気味に立ち上がる。	㊥ナデ ㊦回転糸切り	ナデ	灰白色	石・長(1~2) 褐色粒 ◎		20
176	杯	底径 (7.0) 残高 2.5	平高台。外傾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰白色	長(細粒) ◎		
177	杯	底径 (6.5) 残高 2.5	平高台。ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	砂粒(1) 褐色粒 ◎		
178	杯	底径 (6.3) 残高 2.4	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 淡黄色	石・長(1~2) ○		
179	杯	底径 6.7 残高 1.5	平底。回転糸切りが顕著。	㊥ナデ ㊦回転糸切り	ナデ	明褐灰色 灰白色	石・長(1~2) ◎		20
180	瓦器 椀	口径(13.3) 残高 4.8	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁内面に1条の沈線が巡る。	ナデ	ナデ	灰色	微砂粒 ◎		20
181	椀	口径(13.1) 残高 3.9	黒色土器。外反する口縁。端部は丸い。	ナデ	㊧ナデ ㊥ヘラミガキ	黒色	長(1~3) ◎		20
182	椀	底径 (7.2) 残高 1.7	黒色土器。高台付。高台端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 黒色	微砂粒 ◎		20
183	椀	残高 1.4	黒色土器。高台部分が欠損した底部片。	ナデ	ヘラミガキ	浅黄橙色 黒色	微砂粒 ◎		20

表15　SR201　1層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
184	こね鉢	口径(22.5) 残高 3.9	東播系のこね鉢の口縁部分。外傾する立ち上がり。口端部は肥厚し直口して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) ◎		
185	椀	口径(16.9) 残高 2.7	外反して立ち上がる口縁部片。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(1) ○		
186	椀	口径(12.2) 残高 4.3	外傾して立ち上がる口縁部片。端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白色	微砂粒 ◎		
187	椀	底径 (6.8) 残高 1.8	高台付。高台端部は尖り気味に丸い。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	微砂粒 ◎		

SR201　1層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
188	椀	底径 (6.6) 残高 1.8	高台付。高台端部は丸い。	ナデ	ヨコナデ	灰白色	長(細粒) 金 ◎		
189	椀	底径 (7.1) 残高 1.8	高台付。高台端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	長(1~3) ◎		
190	椀	底径 (7.6) 残高 2.3	黒色土器。高台付。高台端部は丸い。底部外面は強いヨコナデにより凹凸がある。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 黒色	石・長(1~2) 金 ◎		
191	椀	底径 (6.7) 残高 1.8	高台付。高台端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 淡黄色	微砂粒 △		
192	椀	底径 (6.8) 残高 2.4	高台付。高台端部は丸く、少し外に張る。	ナデ	ナデ	灰白色	長(1~2) ◎		
193	椀	底径 (6.5) 残高 2.0	高台付。高台端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 淡黄色	微砂粒 △		
194	椀	底径 (6.0) 残高 2.1	黒色土器。高台付。高台端部は丸い。	ナデ	ミガキ	灰白色 褐灰色	石・長(細粒) ◎		
195	坏	底径 (5.8) 残高 1.9	平高台。	㈱ナデ ㈹摩滅の為不明	ヨコナデ	橙色 明黄褐色	微砂粒 ◎		
196	坏	底径 6.1 残高 1.3	平底。底部内面中央が盛り上がる。	ナデ	ナデ	淡黄色 灰白色	石・長(1) 褐色粒 ◎		
197	瓦器椀	底径 (4.4) 残高 1.1	高台付。高台端部は丸い。	ヨコナデ	ナデ	褐灰色	微砂粒 ◎		

表16　SK201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
198	坏	口径 9.8 底径 5.3 器高 3.5	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	㊐㈱ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	長(1) ◎		20
199	坏	口径 9.8 底径 5.3 器高 2.9	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	㊐㈱ヨコナデ ㊎回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	橙色	長(1) ◎		20

表17　SK208出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
200	羽釜	口径 (20.8) 残高 3.5	口縁部片。やや内傾した立ち上がり。外面の口縁端部に隆帯が貼り付けられる。	ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~2) ◎		
201	坏	底径 (5.2) 残高 1.3	平底。	㈱ヨコナデ ㊎回転糸切り	ナデ	にぶい橙色	微砂粒 ◎		

表18　SK205出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
202	椀	口径 (11.6) 残高 3.3	稜をもって外反する口縁部。口端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄橙色 橙色	石・長(1) ◎		
203	壺	底径 4.4 残高 1.7	小さな平高台。	㊎糸切り	ナデ	灰白色	石(1~2) 褐色粒 ◎		

表19　SP218出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭(mm)	孔(mm)	内側(mm)	外縁(mm)	重量(g)	備考	図版
204	元豊通寶	北宋1078	(28.5)	(7.5)	1.8	1.0	1.496	順読	20

表20　SK202出土遺物観察表　銭貨

番号	銭　名	初鋳年	銭(mm)	孔(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
205	熙寧元寶	北宋1068	23.0	7.0	1.5	1.0	1.640	順読	20

表21　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調 (外面)/(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
206	椀	口径(15.4) 残高　2.3	外傾する口縁部片。口端部は丸い。	ナデ	ナデ	淡黄色 灰白色	微砂粒 ◎		
207	瓦器 椀	口径(14.4) 残高　3.5	口縁部片。わずかに内湾する立ち上がり。口端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白色 灰色	微砂粒 ◎		
208	椀	底径　(7.3) 残高　2.2	高台付。高台端部は丸い。	回転ナデ	ヘラミガキ	浅黄橙色	微砂粒 黒い石粒 ◎		
209	椀	口径　(5.7) 残高　1.7	高台付。高台端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(1) ◎		
210	椀	残高　1.7	高台付。高台端部は欠損。	ナデ	ナデ	灰白色 淡黄色	石(細粒) 長(1~3) ◎		
211	皿	口径　(9.5) 底径　(6.0) 残高　1.7	平底。外傾する口縁。 口端部は丸い。	㊀ナデ ㊁回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	長(1) ◎		
212	鍋	口径(32.3) 残高　4.4	稜をもって、わずかに内湾しながら立ち上がる口縁。口端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	㊀ヨコナデ ㊁摩滅の為不明	灰褐色 橙色	石・長(1~3) 多 ◎		
213	羽釜	残高　6.1	胴部より水平にのびる鍔。鍔端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	ハケ(8本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	にぶい橙色	石・長(1~3) 多 ◎		
214	羽釜	口径(23.2) 残高　2.2	口縁部片。内傾した口縁。外面の口縁端部に隆帯が貼付される。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色	石・長(1~3) ◎		
215	羽釜	残高 14.2	土師質。脚部。	ナデ	———	にぶい黄橙色	石・長(1~3) 褐色粒 ◎		
216	羽釜	残高 13.7	土師質。脚部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) 多 ◎		
217	羽釜	残高 14.2	土師質。脚部。	ナデ	———	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ◎		
218	羽釜	残高 14.2	土師質。脚部。	ナデ	———	橙色	石・長(1~3) 多 ◎		

第6章

桑原遺跡2次調査地

第６章　桑原遺跡２次調査地

１．調査の経緯

桑原遺跡２次調査地は、調査対象地の最東端にあたり標高は38.50mを測る。一連の調査地の中では、標高が最も高い調査地となる。調査前の現況は果樹園であった。調査面積は230m^{2}である。以下、調査工程を記す。

1999(平成11)年　11月29日　重機による表土の剥ぎ取りを開始する。

11月30日　人力によって遺構検出作業を開始する。同日、溝などの遺構を検出し、検出作業を終了する。

12月１日　遺構検出状況の写真撮影を行う。遺構の掘り下げを開始する。

12月２日　測量用の仮杭を設定する。

12月３日　ＳＫ１、ＳＤ２、ＳＤ３の遺構測量を行う。

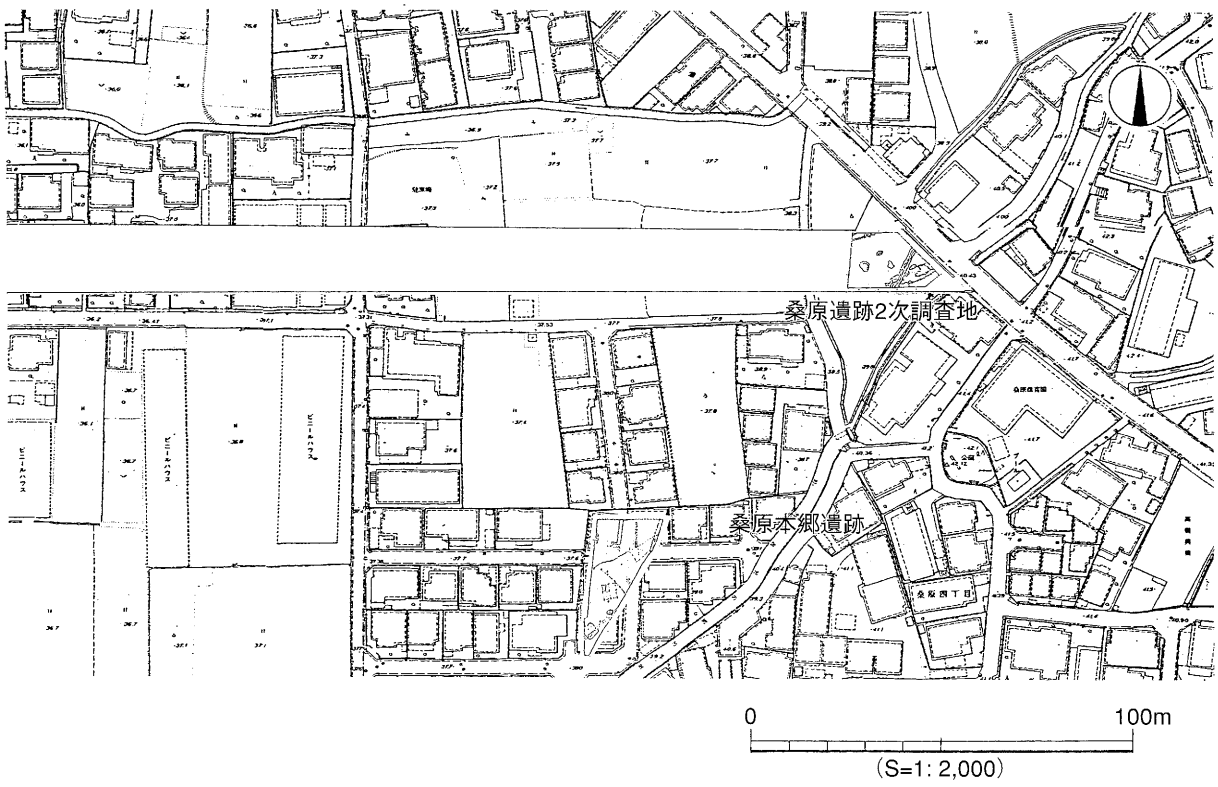
12月６日　ＳＤ１遺物検出作業を開始する。

12月８日　ＳＤ１の遺物測量図を作成する。

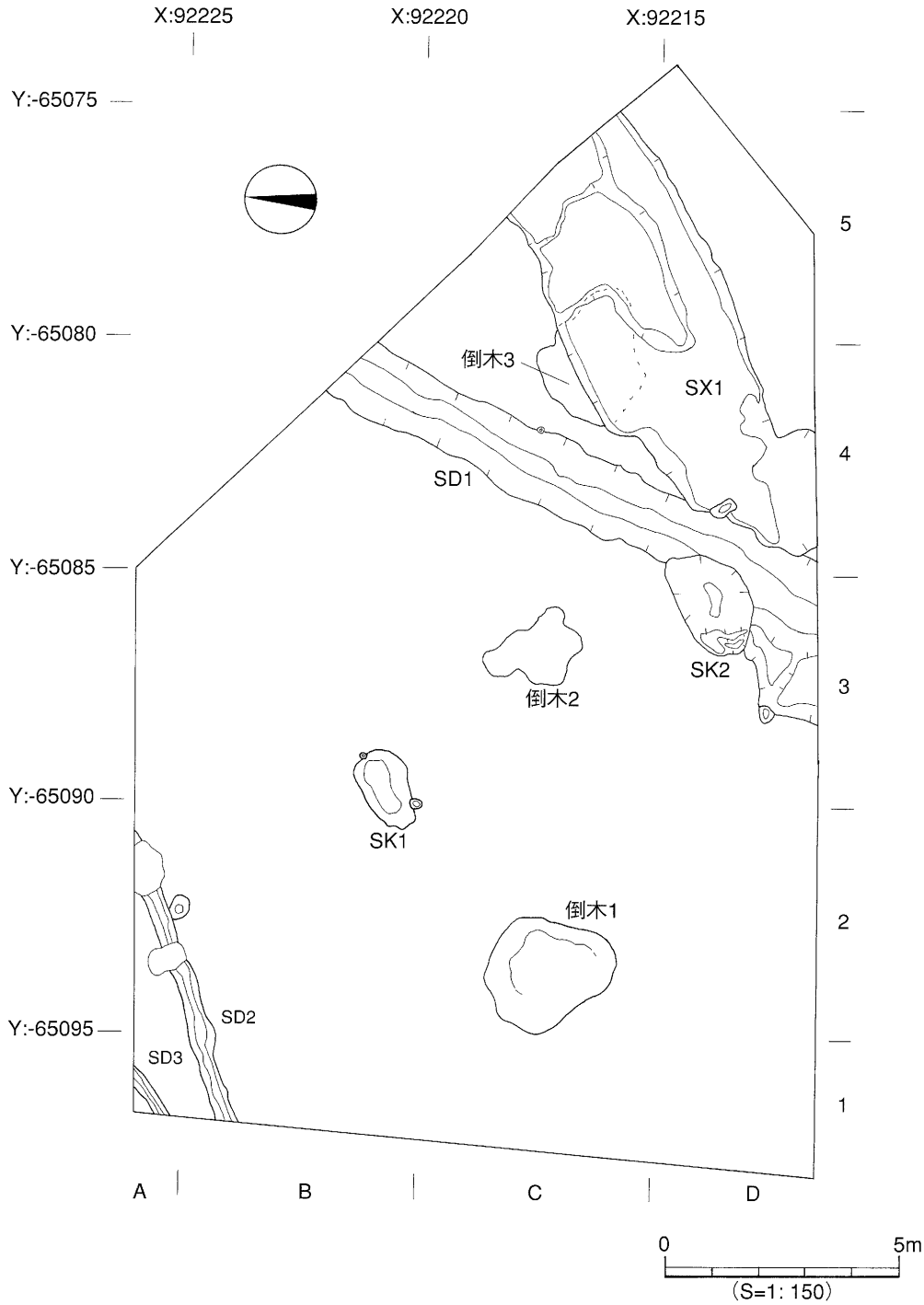
12月９日　ＳＤ１遺物出土状況の写真撮影後遺物の取り上げを行う。

12月10日　国土座標軸の設定を行う。５ｍメッシュのグリッドを設定する。グリッド名称は北から南へA、B、C・・・とし、西から東へ１、２、３・・・とした。同日、調査地と調査区の測量を行う。

12月13日　ＳＫ２の掘り下げと遺構・遺物の測量を行う。



第37図　調査地位置図

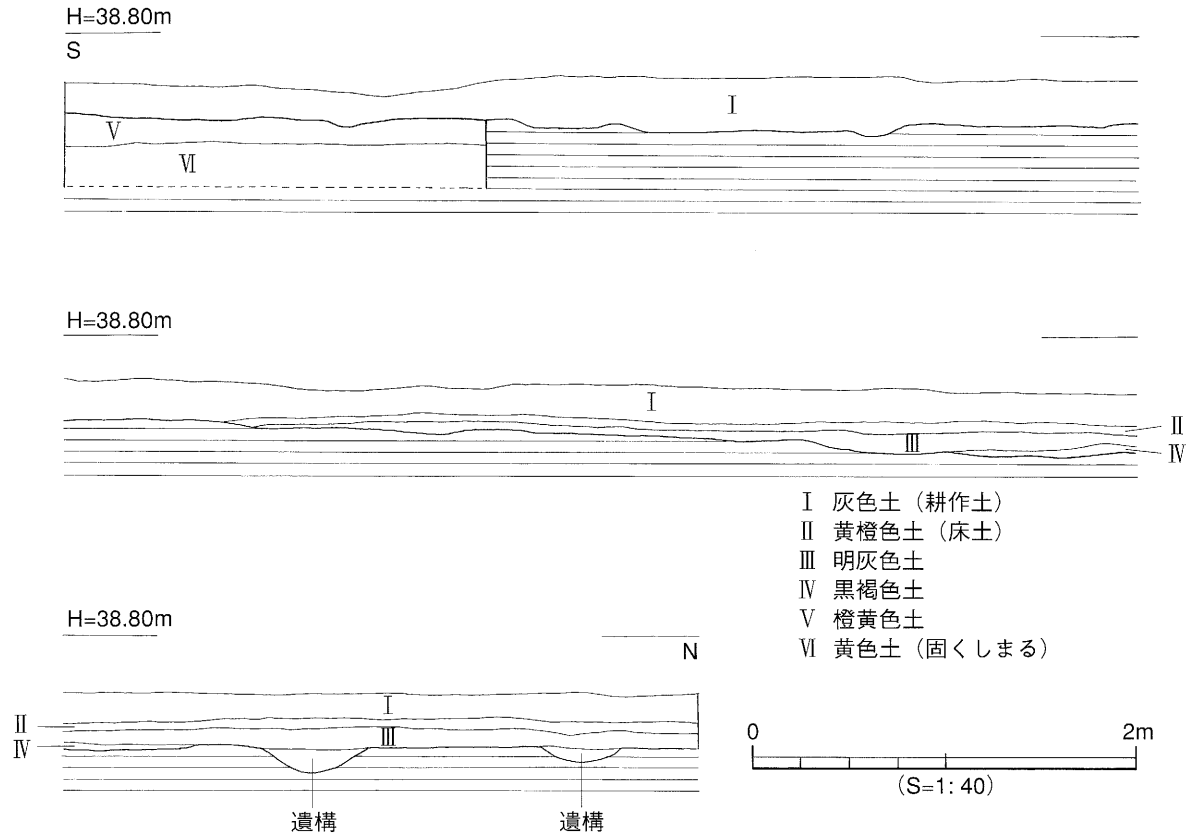

X:92225
X:92220
X:92215
Y:-65075
Y:-65080
Y:-65085
Y:-65090
Y:-65095
倒木3
SX1
SD1
SK2
倒木2
SK1
倒木1
SD2
SD3
A
B
C
D
1
2
3
4
5
0
5m
(S=1: 150)

第38図　遺構配置図

12月14日　ＳＫ２の土層図を作成し、ベルトの撤去を行う。
12月15日　ＳＸ１の測量を行う。
12月16日　遺構・遺物の測量を全て終了、調査区内の清掃を行う。
12月17日　遺構完掘の写真撮影を行い、現場調査を終了する。

２．層位（第39図）

調査地の基本層位は第Ⅰ層灰色土、第Ⅱ層黄橙色土、第Ⅲ層明灰色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層橙黄色土である。第Ⅰ層は、現代の耕作土である。層厚は11cm～30cmを測る。第Ⅱ層は、水田床土である。層厚は３cm～８cmを測る。第Ⅲ層は中世から現代の遺物を包含する。層厚は２cm～９cmを測る。第Ⅳ層は、第Ⅲ層以上に削平されるため部分的に遺存する。層厚は２cm～４cmを測る。第Ⅴ層以下は、地山と呼ばれる層である。遺構の検出は、この第Ⅴ層上面で行った。本調査地ではアカホヤ火山灰、ＡＴ火山灰は検出していない。



第39図　西壁土層図

3．遺構と遺物

検出した主な遺構は土坑（ＳＫ）２基、溝（ＳＤ）３条、性格不明遺構（ＳＸ）１基である、倒木痕跡（倒木）３基である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器が出土している。検出した遺構のうち、出土遺物から時期の判るものに溝ＳＤ１、土坑ＳＫ２、性格不明遺構ＳＸ１がある。

〔１〕中世

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第40図、図版22・23-1・24-1）

ＳＤ１は、調査地を北東方向から南西方向へのびる溝である。調査区の南壁近くで、西側がテラス状となり幅が広がっている。検出規模は長さ11.20m、幅1.25m～3.35m、深さ0.32m～0.50mを測る。埋土は、溝底に粗砂層が厚さ３cm～４cm堆積し、その上には黒色土が堆積している。出土遺物は粗砂層と黒色土中から須恵器、瓦器、土師器、石器が出土している。

出土遺物（第41・42図、図版26）

219～222は土師器椀である。219は推定口径13.4cmを測る。口縁部は短く外反する。口縁端部は丸い。内面はヘラミガキされる。220は推定口径16.4cmを測る。221は底部片である。底部外面に糸切り痕を残す。222は底部片で内面にヘラミガキを施す。

224・225は内黒の黒色土器である。共に底部片で内面にヘラミガキが施される。

226～229は土師器坏である。底部の切り離しは226・227・229が回転糸切り、228は回転ヘラ切りである。

230～232は土師器皿である。230は口径8.7cm、器高1.6cmを測る。内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転糸切りである。231は小片で、底部の切り離しは回転糸切りである。232は推定口径8.4cm、8.4cm、器高1.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。

223・233～244は瓦器椀である。233～235の高台端部は面をもつ。236～239は口縁部片である。240～244は底部片で、240・241・243の高台端部は面をもつ。242の高台端部はわずかに面をもつものである。244の内面見込み部には斜格子状の暗文が施される。

245は瓦器皿である。推定口径9.0cm、器高1.3cmを測る。底部外面に指頭痕を残す。

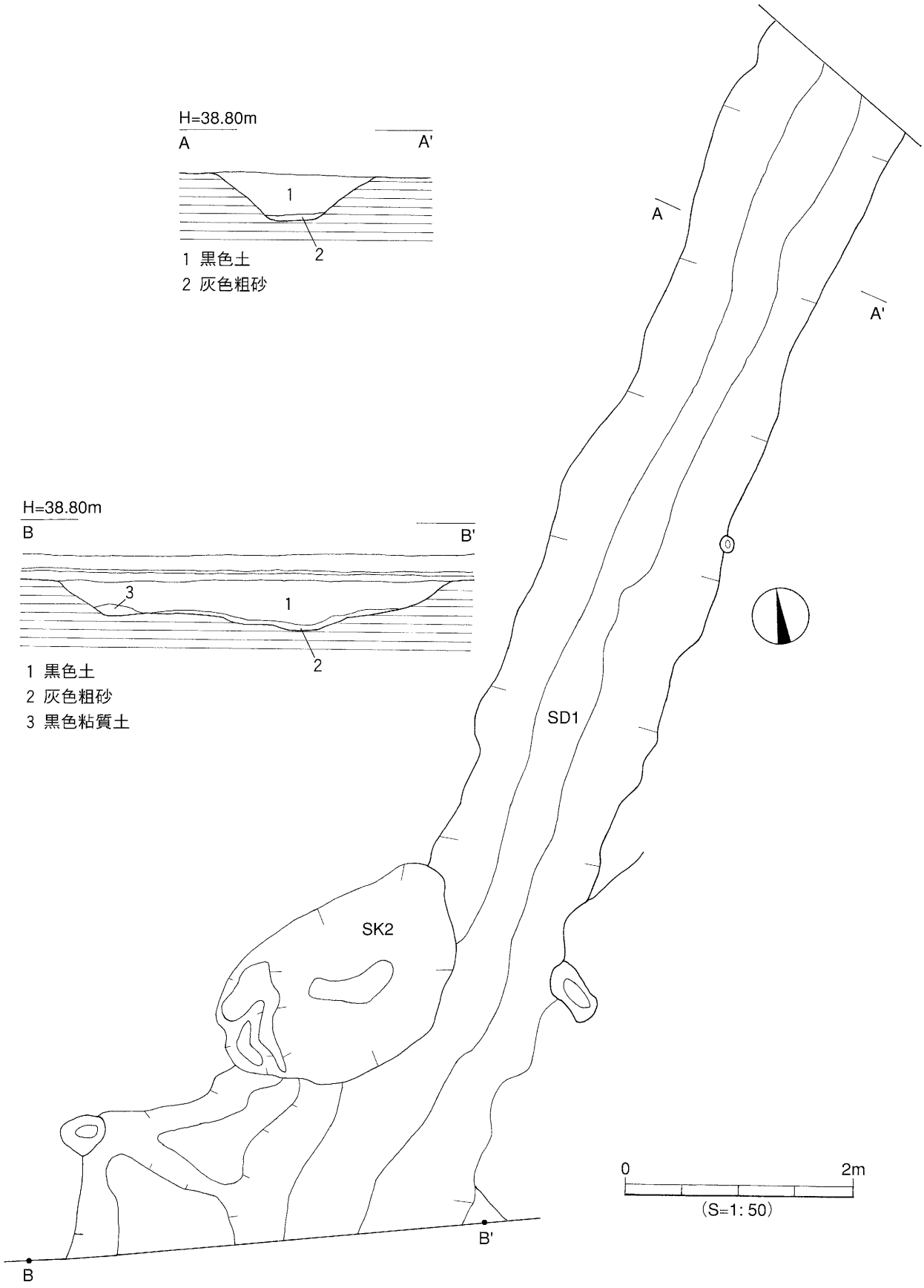
246～248は須恵器である。246は長頸壺の頸部片である。247は壺の底部と思われる。248は壺と思われるが口縁部と底部が欠失し全容は不明である。

249・250は白磁碗である。249は口縁部片で口縁は玉縁となる。250は底部内面見込み部に沈線を施している。

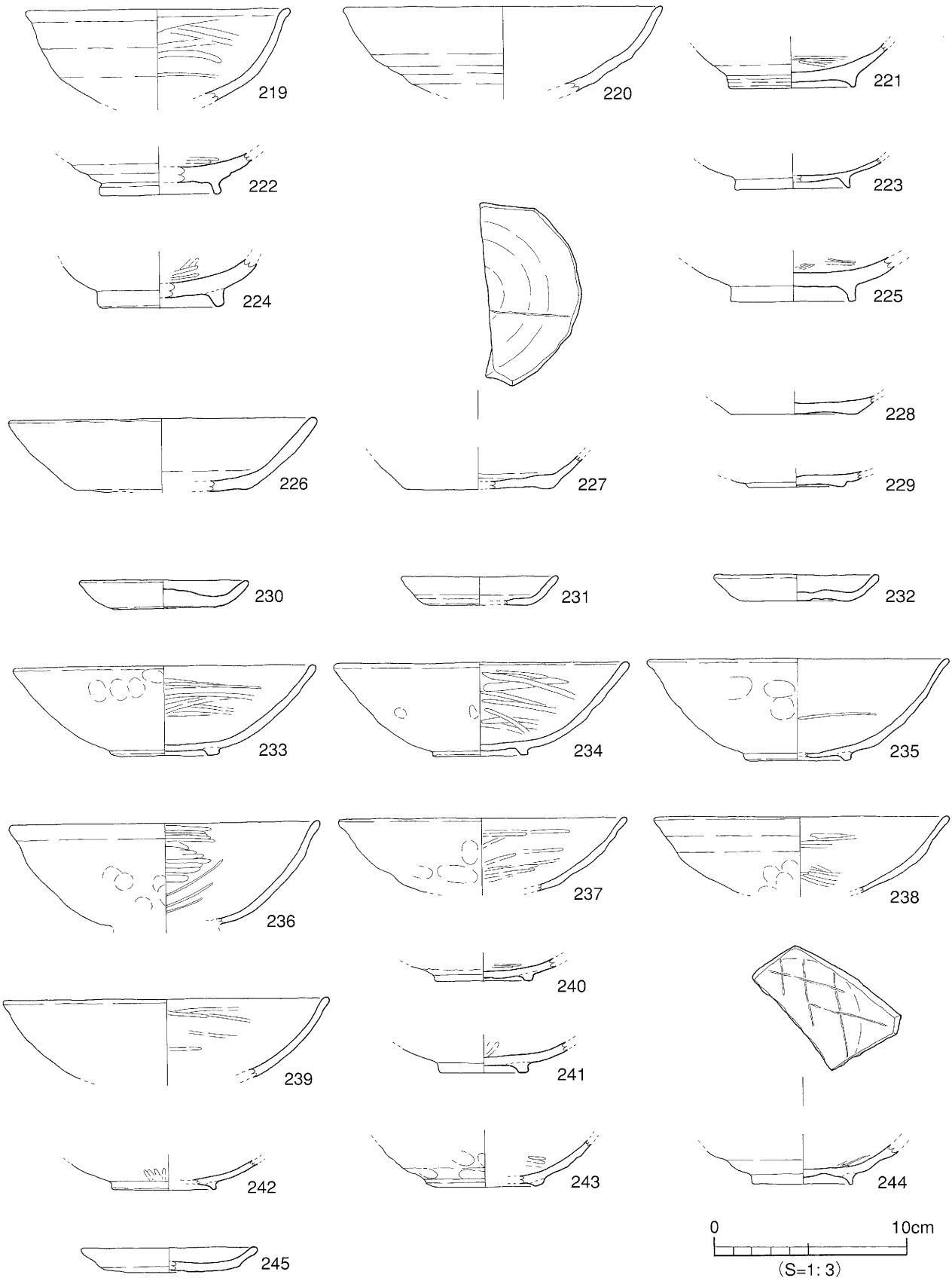
251は羽釜である。口縁部はやや内湾気味に上方にのびる。口縁端部は丸い。鍔は口縁端部より下方に貼付される。

252は石鏃である。残長1.5cm、厚さ0.3cmを測る。材質はサヌカイト製。

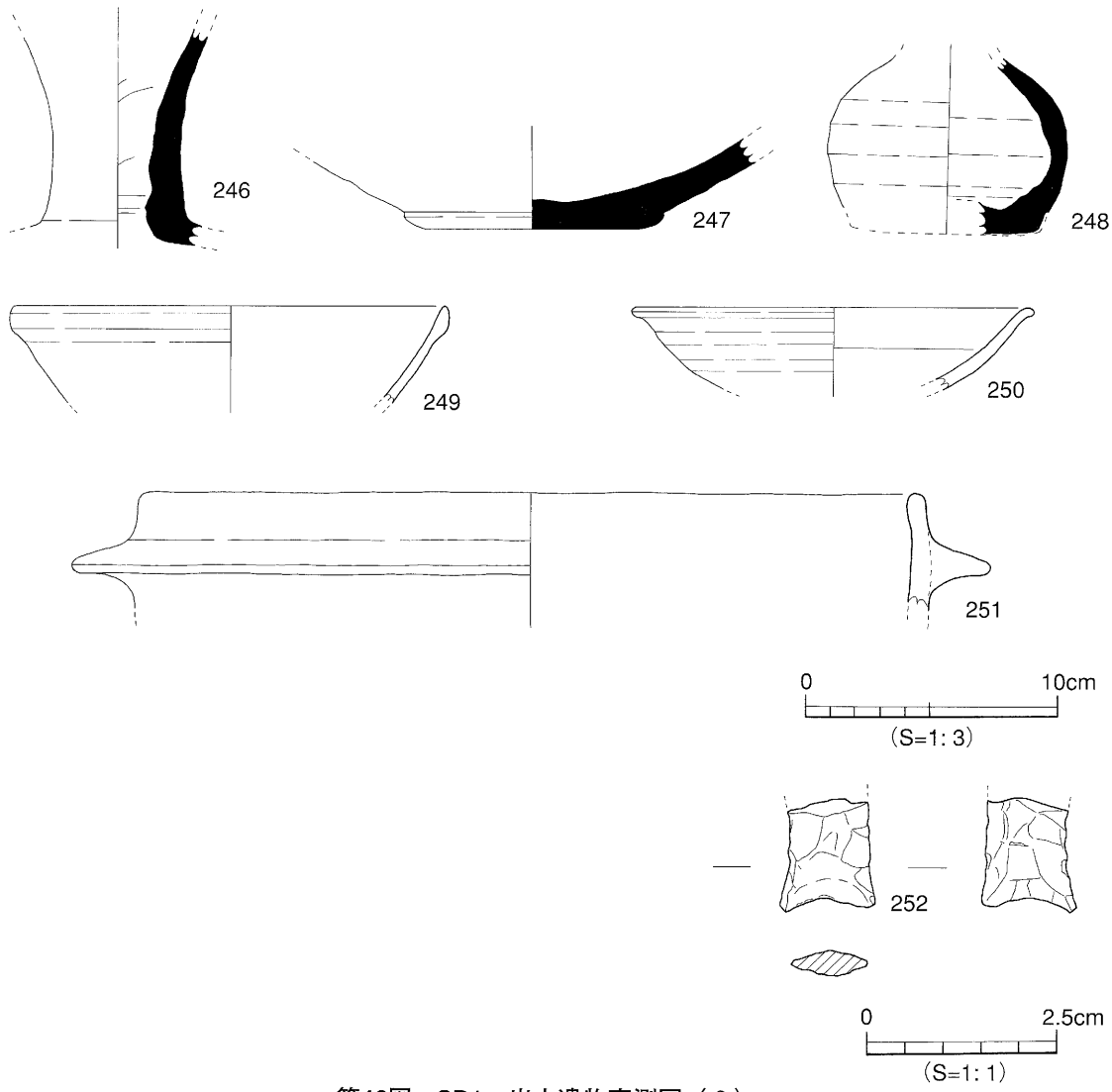
時期　11世紀～13世紀に比定される遺物が出土している。出土した瓦器椀は12後半～13世紀の様相を示す。このことからＳＤ１は13世紀代に埋没したものと考えられる。


H=38.80m
A
A'
1
2
1 黒色土
2 灰色粗砂
H=38.80m
B
B'
3
1
2
1 黒色土
2 灰色粗砂
3 黒色粘質土
SD1
SK2
A
A'
B
B'
0
2m
(S=1:50)

第40図　SD1　測量図



第41図　SD1　出土遺物実測図（1）



第42図　SD1　出土遺物実測図（２）

２）土坑（ＳＫ）

ＳＫ２（第43図、図版22-1・23-2・24-1）

ＳＫ２は、ＳＤ１を切って掘られる。平面形態は東西に長い楕円形を呈する。断面形態はすり鉢状である。西側にはテラス部がある。検出規模は、長軸2.45ｍ、短軸1.50ｍ、深さ0.66ｍを測る。埋土は、３層に分層される。土坑最下層の埋土は、黒色粘質土である。土坑埋土からは、瓦器椀、土師器椀、土師皿、白磁片が出土している。

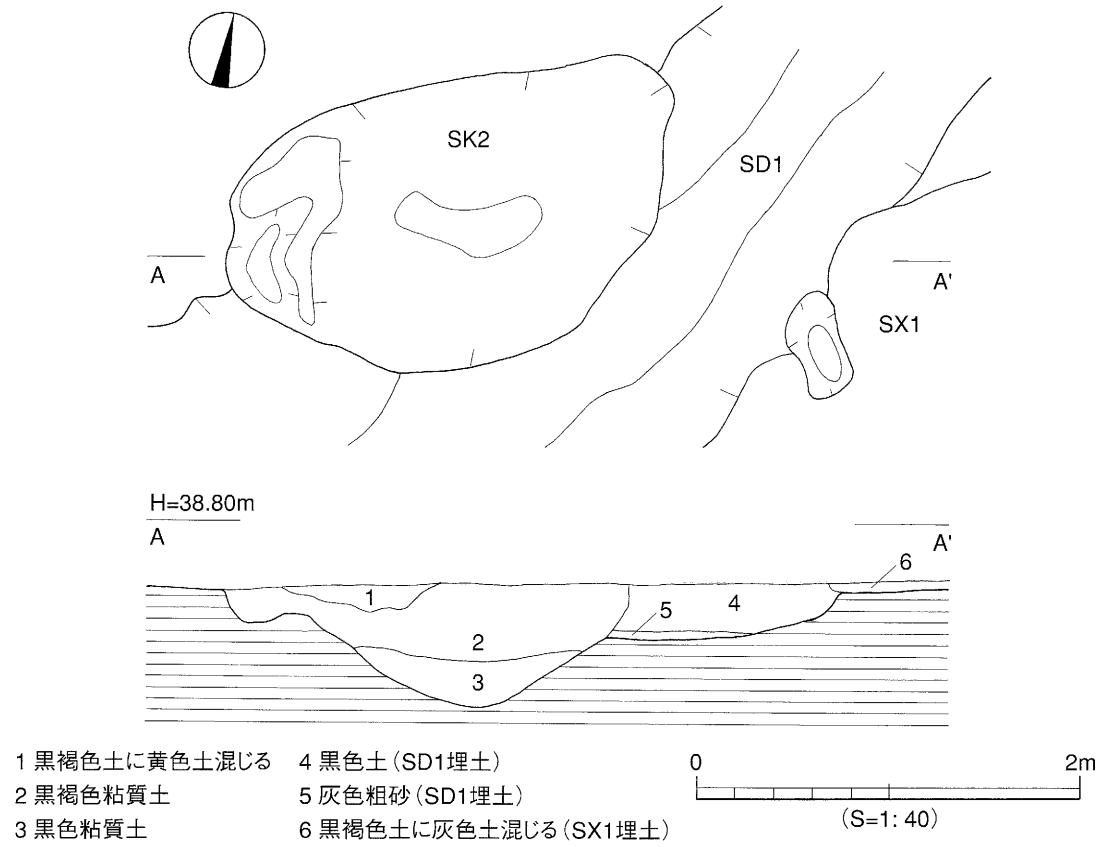
出土遺物（第44図、図版25）

253は土師器椀である。内湾して立ち上がる口縁部で口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデである。底部外面に回転糸切り痕を残す。

254は鉢タイプのもので口縁部は屈曲して短く上方にのびるものである。

255・256は土師器皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。

257～263は瓦器椀である。257～260は底部が欠失する。259の器壁は厚い。261～263は底部片である。263の底部内面には斜格子状の暗文を施している。



第43図　SK2　測量図

264・265は瓦器皿である。264はほぼ完形に近いもので口径9.2㎝、器高2.0㎝を測る。265は口縁部片で推定口径9.1㎝、器高1.5㎝を測る。

266は白磁碗の口縁部片である。口縁部は薄い玉縁となる。底部内面に見込み部に沈線を巡らす。

時期　出土した遺物より12世紀後半～13世紀と考える。

3）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第38・43図）

ＳＸ１は、調査地東側で検出した。土層観察からは、ＳＤ１を切っているものと思われる。東西方向に長く、平面形態は不整形である。埋土は、黒褐色土（灰色土が混じる）である。検出規模は長軸9.7ｍ、短軸2.75ｍ、深さ0.04ｍ～0.10ｍを測る。埋土中より土師器、瓦器、白磁が出土している。

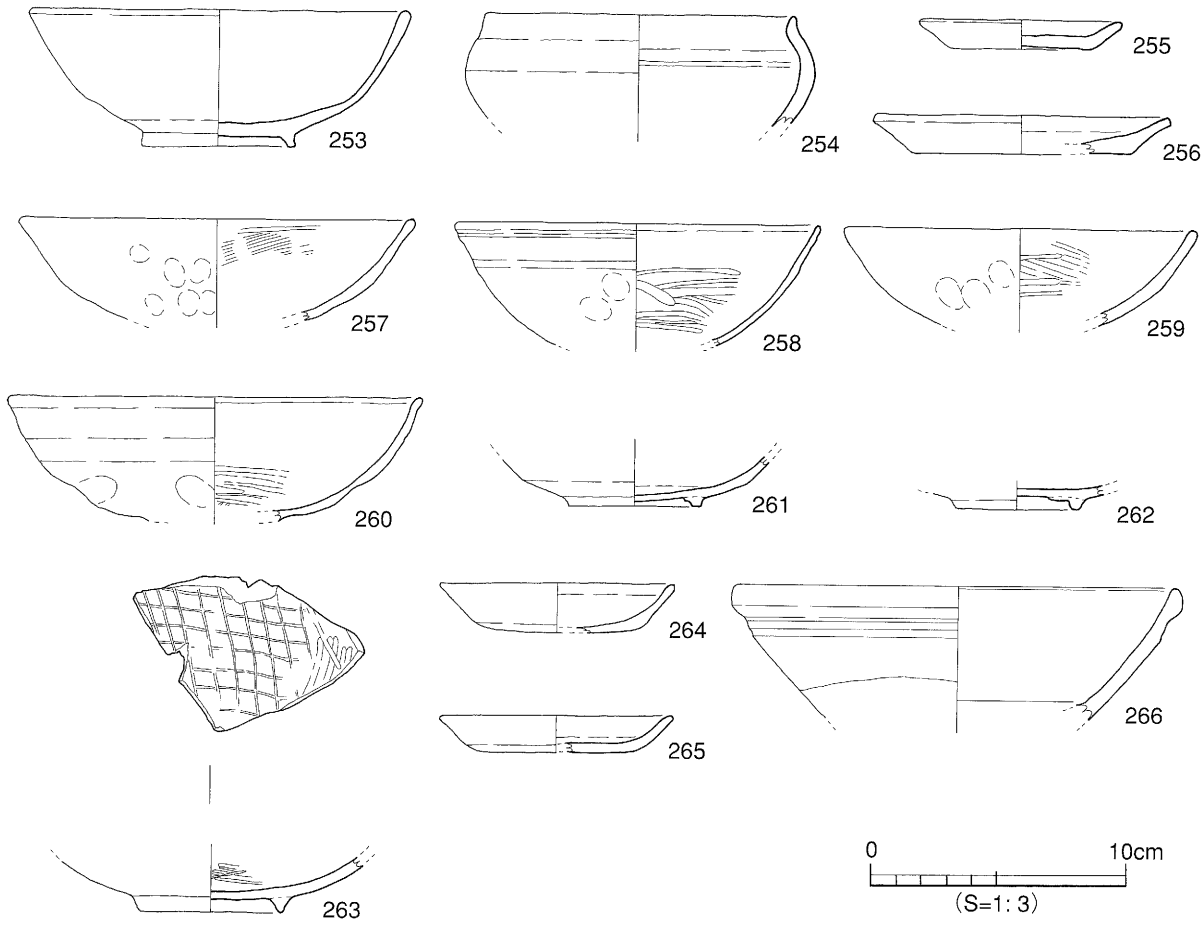
出土遺物（第46図、図版25）

267・268・270・271は土師器椀の底部片である。272～274は土師器坏の底部片である。269・275～277は瓦器椀の底部片である。278は白磁碗の口縁部片で、口縁部は玉縁である。

時期　出土した遺物より13世紀と考える。

〔2〕その他の遺構と遺物

遺物の出土が無かった遺構である。溝、土坑、倒木跡がある。



第44図　SK2　出土遺物実測図

1）溝（ＳＤ）

ＳＤ２（第38図）

ＳＤ２は、調査地の北西部で検出した。検出規模は長さ6.40ｍ、幅0.36ｍ～0.56ｍ、深さ0.10ｍを測る。埋土は、黒色土の１層である。遺物は出土していない。

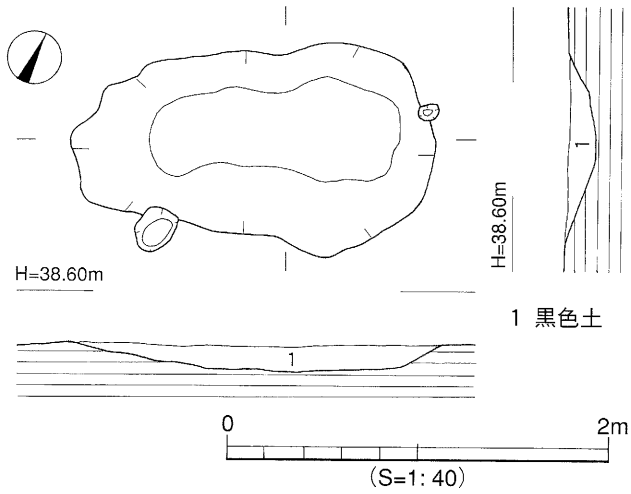
時期　出土遺物が無いため不明。

2）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第45図）

平面形態は、楕円形を呈する。規模は長軸1.90ｍ、短軸1.00ｍ、深さ0.10ｍ～0.14ｍを測る。弥生土器片が１点出土した。

時期　明確な遺物がないため不明とする。

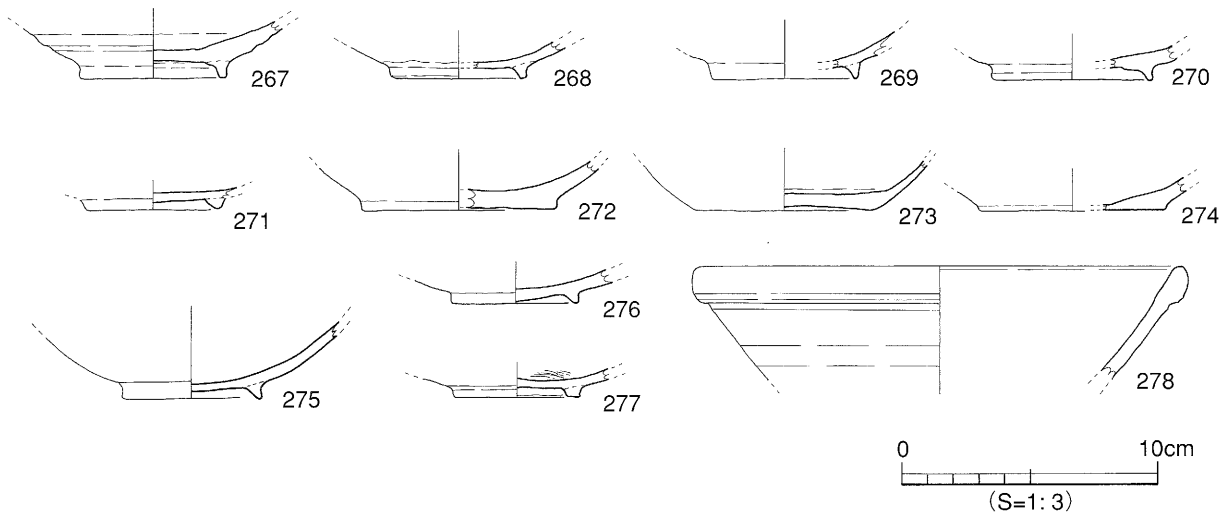


第45図　SK1　測量図

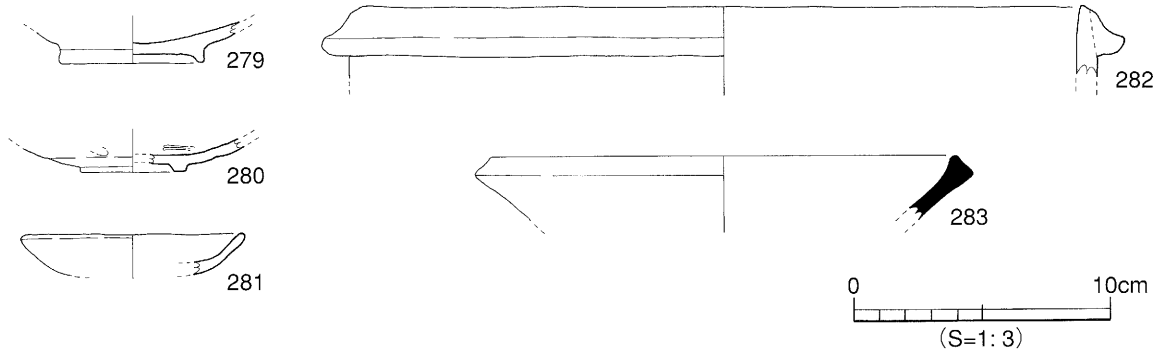
3）倒木跡（倒木）

倒木１～３（第38図）

本調査地では、倒木跡３基を検出した。平



第46図　SX１出土遺物実測図



第47図　出土地点不明遺物実測図

面測量を行い位置図の記録だけにとどめた。

4）出土地点不明遺物（第47図）

279～280は表土掘削時に出土したものである。279は土師器椀。280は瓦器椀。281は瓦器皿。282は瓦質の羽釜。283は東播系こね鉢である。

4．小結

今回の調査では、中世の遺構や遺物を検出した。検出した遺構のうち、注目されるものに土坑ＳＫ２と溝ＳＤ１がある。これらの遺構からは、12世紀後半～13世紀代の土器が出土している。このことより、調査地周辺には該期の集落が営まれていたものと考えられる。今後は、桑原地区における中世集落の構造解明が課題である。また、ＳＫ２とＳＤ１は切り合い関係が認められた。土層断面の精査により、ＳＤ１が埋没したのちＳＫ２が掘られたものである事を確認した。このことから、ＳＫ２とＳＤ１から出土した遺物は、松山平野における12世紀後半～13世紀代の貴重な資料といえる。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表22　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
219	椀	口径(13.4) 残高 4.9	内湾気味に立ち上がる。外反する口縁。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヘラミガキ	淡黄色 灰白色	長(1) ◎		
220	椀	口径(16.4) 残高 4.5	内湾気味に立ち上がる。口端部はわずかに外反し、丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		
221	椀	底径 (6.4) 残高 2.3	高台付。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ナデ →ヘラミガキ	灰白色	長(1~2) ◎		
222	椀	底径 (6.2) 残高 2.1	高台付。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。高台端部は丸い。	ヨコナデ	ヘラミガキ	黒褐色 褐灰色	石・長(細粒) ◎		
223	瓦器 椀	底径(6.0) 残高 1.5	高台付。高台端部は尖りながらわずかに外反する。器壁が薄い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰黄色	微砂粒 黒い石粒 ◎		
224	椀	底径(6.0) 残高 2.5	黒色土器。高台付。内湾気味に立ち上がる。高台端部は丸い。	ヨコナデ	ナデ →ヘラミガキ	浅黄橙色 黒褐色	微砂粒 ◎		
225	椀	底径(6.1) 残高 2.3	黒色土器。高台付。高台端部はわずかに面をもつ。	ナデ	ヘラミガキ	明黄褐色 暗灰色	石・長(1) ◎		
226	坏	口径(15.8) 残高 4.8	平底。内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	㊐㊒ヨコナデ ㊎回転糸切り	ナデ	灰褐色 灰白色	石(1~2) ◎		
227	坏	底径(7.6) 残高 1.8	平底。底部より外傾して立ち上がる。内面にヘラ描きの沈線を施す。	㊒ナデ ㊎回転糸切り	回転ナデ	灰白色 明黄褐色	石・長(1~2) ◎		
228	坏	底径(6.6) 残高 1.0	平底。	㊒ナデ ㊎回転ヘラ切り	ナデ	灰白色 浅黄橙色	長(1~2) ◎		
229	坏	底径(5.0) 残高 0.8	平高台。わずかな立ち上がりの高台。	㊒ナデ ㊎回転糸切り	回転ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(細粒) ◎		
230	皿	口径 8.7 底径 5.8 器高 1.6	平底。強いヨコナデにより内面中央が凸む。内外面共に煤けている。	㊐ヨコナデ ㊎回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎	煤付着	26
231	皿	口径(8.0) 底径(5.1) 残高 1.5	内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	㊐ヨコナデ ㊎回転糸切り	ナデ	浅黄橙色	長(1~2) ◎		

SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
232	皿	口径(8.4) 底径(5.2) 残高 1.4	内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。強いナデにより内外面共に凸凹している。	㊀ヨコナデ ㊁回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1) ◎		
233	瓦器 椀	口径(15.4) 底径(5.5) 器高 4.7	高台付。高台端部は面をもつ。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰色	長(1~2) ◎		26
234	瓦器 椀	口径(15.0) 底径 4.9 器高 4.9	高台付。高台端部は面をもつ。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。口端部は丸くややふくらむ。	ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰色	石・長(1~2) ◎		26
235	瓦器 椀瓦	口径(15.4) 底径(5.5) 器高 5.3	高台付。高台端部は丸みをおびた面をもつ。内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	ヘラミガキ	暗灰色	石・長(1~3) ◎		
236	器 椀	口径(16.0) 残高 5.4	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。外面は指頭痕により凸凹がある。	ナデ (指頭痕あり)	ヘラミガキ	灰色	長(1) ◎		
237	瓦器 椀	口径(14.7) 残高 3.9	口端部はやや外反し、丸い。外面は指頭痕により凸凹がある。	ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰色	微砂粒 ◎		
238	瓦器 椀	口径(15.0) 残高 4.0	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰色	長(1~2) ◎		26
239	瓦器 椀	口径(16.9) 残高 4.2	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。	ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰白色 暗灰色	微砂粒 ◎		26
240	瓦器 椀	底径 5.1 残高 1.2	高台付。高台端部は面をもち水平に接する。	ナデ	ヘラミガキ	褐灰色 灰色	微砂粒 ◎		
241	瓦器 椀	底径 4.6 残高 1.7	高台付。高台端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヘラミガキ	暗灰色 灰白色	石・長(1~2) ◎		
242	瓦器 椀	底径(5.4) 残高 1.5	高台付底部片。高台端部はわずかに面をもつ。	ナデ	摩滅の為不明	暗灰色 灰白色	石(1~2) ◎		
243	瓦器 椀	底径(5.2) 残高 2.4	高台付。内側の高台端部で接地する。	ナデ	ヘラミガキ	暗灰色	微砂粒 ◎		
244	瓦器 椀	底径(5.2) 残高 2.1	高台付。底部内面に斜格子状のヘラミガキ。	ナデ	ナデ →施文ミガキ	暗灰色 褐灰色	微砂粒 ◎		
245	瓦器 皿	口径(9.0) 底径(7.1) 器高 1.3	わずかに外反する口縁。口端部は丸い。	ヨコナデ (指頭痕あり)	ヨコナデ	暗灰色	長(1~3) ◎		
246	壺	残高 8.8	長頸壺の頸部片。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色	長(1~2) ◎	自然釉	
247	壺	底径(10.2) 残高 3.6	平底。底部よりゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰オリーブ色	長(1~6) ◎		
248	壺	残高 7.1	底面は表面剥離の為調整及び器形不明。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(1~2) 長(1~4) ◎		
249	白磁 碗	口径(16.8) 残高 3.8	口縁部片。外傾する立ち上がり。口縁部は断面三角形の玉縁。器面全体に施釉。	回転ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	明オリーブ灰色	微砂粒 褐色粒 ◎		26
250	白磁 碗	口径(15.6) 残高 3.2	外反する口縁部片。見込みに1条の沈線を施す。	回転ナデ →施文 →施釉	回転ナデ →施釉	灰白色	微砂粒 ◎		26
251	羽釜	口径(30.0) 残高 4.7	貼り付けられた鍔は、長く水平に外方向にのびる。口、鍔端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~4)	煤付着	

表23　SD1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
252	石鏃	約1/2	サヌカイト	1.5	1.0	0.3	0.55		26

表24　SK2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
253	椀	口径 14.5 底径 6.0 器高 4.4	高台付。内湾気味に立ち上がる。口端部は肥厚し丸い。	㊀㊁ヨコナデ ㊃回転糸切り →板状圧痕	ヨコナデ	淡黄色	石・長(1~3) ◎		25
254	鉢	口径(12.0) 残高 4.3	口縁部は屈曲して短く上方にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐灰色 灰白色	石・長(1~2) ◎		25
255	Ⅲ	口径(7.9) 底径(5.5) 器高 1.2	平底。わずかに外反する口縁。口端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊃回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 金 ◎		
256	Ⅲ	口径(11.4) 底径(8.6) 器高 1.5	平底。口端部は面をもつ。	㊀ヨコナデ ㊃回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 明褐灰色	石・長(1) ◎		
257	瓦器 椀	口径(15.3) 残高 4.0	内湾気味に立ち上がる。外面は指頭痕や強いナデにより凸凹がある。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ (指頭痕あり)	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(9本/cm) →ナデorミガキ	灰色	石・長(1) ◎		
258	瓦器 椀	口径(14.2) 残高 4.8	口縁外面に強いナデによる凹線が見られる。器壁が薄い。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	暗灰色	石(1~2) ◎		
259	瓦器 椀	口径(13.6) 残高 3.8	内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	灰色	長(1~2) ◎		25
260	瓦器 椀	口径(16.1) 残高 4.9	わずかに外反する口縁。外面は強い指頭痕により凸凹がある。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ (指頭痕あり)	ナデ →ヘラミガキ	暗灰色 灰色	石・長(1) ◎		
261	瓦器 椀	底径(5.3) 残高 2.0	高台付。底部より内湾気味に立ち上がる。高台端部は面をもつ。	ナデ	摩滅の為不明	黒褐色	石(1) ◎		
262	瓦器 椀	底径 4.8 残高 0.9	高台付。高台端部はわずかに面をもつ。	ナデ	摩滅の為不明	灰色 灰白色	微砂粒 ◎		
263	瓦器 椀	底径(5.5) 残高 2.2	高台付。高台は断面三角形。底部内面に斜格子状のヘラミガキ。	ナデ	ナデ →施文ミガキ	灰色	微砂粒 ◎		25
264	瓦器 Ⅲ	口径 9.2 底径 6.5 器高 2.0	わずかに外反する口縁。口端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊃摩滅のため不明	ヨコナデ	暗灰色	石・長(1) ◎		
265	瓦器 Ⅲ	口径(9.1) 底径(6.1) 器高 1.5	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。口端部はやや丸い。	ナデ	摩滅の為不明	暗灰色	長(1~2) ◎		
266	白磁 埦	口径(17.0) 残高 5.2	外傾する立ち上がり。口縁部は断面三角形の玉縁。内面見込みに1条の沈線を施す。	㊀㊁上回転ナデ →施釉 ㊁下回転ナデ	回転ナデ →施釉	灰白色	微砂粒 密 ◎		25

表25　SX1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
267	椀	底径(5.7) 残高 2.2	高台付。高台端部は丸い。強いナデによる稜線が顕著。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色	石・長(1) ◎		25
268	椀	底径(5.2) 残高 1.4	高台付底部片。底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	橙色 淡橙色	石・長(1) ◎		25
269	瓦器 椀	底径(5.6) 残高 1.8	高台付底部片。高台端部は尖り気味におさめる。	ナデ	摩滅の為不明	明黄褐色 灰白色	微砂粒 ◎		
270	椀	底径(6.2) 残高 1.4	高台付底部片。高台端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白色 浅黄橙色	微砂粒 褐色粒 ◎		25
271	椀	底径(5.2) 残高 1.9	高台付底部片。断面三角形の高台。高台端部が面をもつ部分もある。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 暗灰色	長(1~3) ◎		25
272	杯	底径(7.5) 残高 1.9	平底。ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄色 灰白色	微砂粒 ◎		25
273	杯	底径(7.0) 残高 2.0	平底の底部片。外傾して立ち上がる。	㊁ナデ ㊃回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石(1~3) ◎		
274	杯	底径(7.2) 残高 1.3	平底の底部片。	㊁ナデ ㊃回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 灰白色	長(1) ◎		

SX1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
275	瓦器 椀	底径(15.5) 残高 3.0	高台付。高台端部は尖り気味におさめる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	褐灰色 黒褐色	微砂粒 ◎		
276	瓦器 椀	底径(4.9) 残高 1.3	高台付底部片。高台端部は丸い。	ナデ	ヘラミガキ	暗灰色	石(1~2) ◎		
277	瓦器 椀	底径(4.9) 残高 1.1	高台付底部片。高台端部は面をもつ。	ナデ	ヘラミガキ	灰色	微砂粒 ◎		25
278	白磁 碗	口径(18.8) 残高 4.4	口縁部片。口端部は丸い。玉縁に明瞭な稜をなす。	回転ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	明オリーブ灰色	長(1) 密 ◎		25

表26　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
279	椀	底径(5.7) 残高 1.6	高台付。高台端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		
280	瓦器 椀	底径(4.2) 残高 1.3	高台付底部片。高台端部は面をもつ。	ナデ	ヘラミガキ	灰色	石(1) ◎		
281	瓦器 皿	口径(8.6) 残高 1.6	口縁部片。口端部は丸い。	ナデ	ヨコナデ	灰色	微砂粒 ◎		
282	瓦質 羽釜	口径(27.8) 残高 2.8	口縁部片。外面の口縁にやや垂下したタガが巡る。	ナデ	ナデ	灰色	長(1~2) ◎		
283	鉢	口径(18.0) 残高 2.5	東播系のこね鉢の口縁部片。口端部は外上方に肥厚する。	ナデ	ヨコナデ	灰色	長(1~2) ◎		

第７章

桑原遺跡4次調査地

－１区の調査－

第７章　１区の調査

１．調査の経緯

桑原遺跡４次調査地は、調査対象地の中央部にあたる。調査は、調査地の都合により区分けを行い西から１区、２区、３区、４区、５区として調査を行った。

１区は、東本遺跡６次調査地の２区より東へ50ｍに位置する。標高は32.40ｍである。調査前の現況は宅地造成地である。調査は平成12年７月６日～同年７月27日の間に行った。調査面積は205㎡である。以下、調査工程を略記する。

2000(平成12)年　７月６日　重機による表土の掘削を開始する。北壁沿いに幅１ｍの東西方向のトレンチを設定する。トレンチの深さは、土層堆積状況と安全対策を考え地表から下120㎝まで掘削を行った。

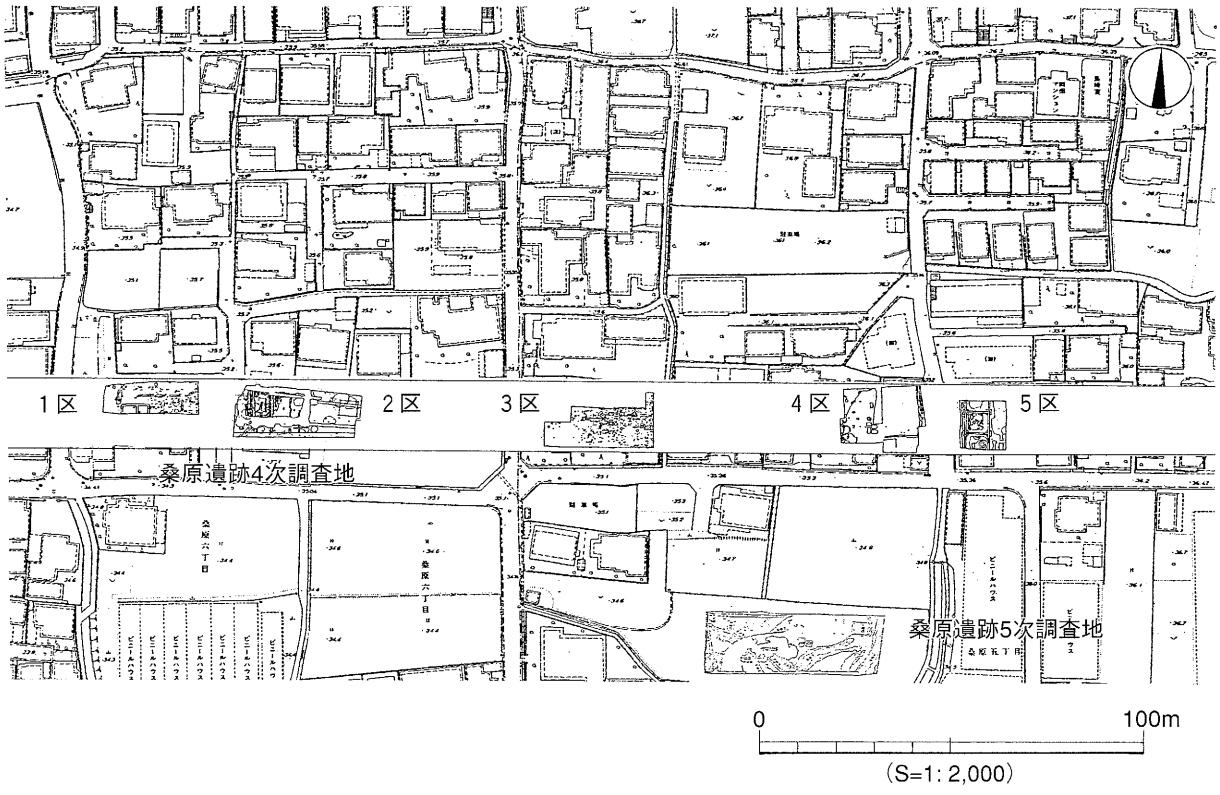
７月７日　遺構検出作業を開始する。

７月10日　遺構確認作業を終了する。測量用の仮杭を設置する。遺構の埋土色を確認しながら平板測量にて遺構配置図を作成する。

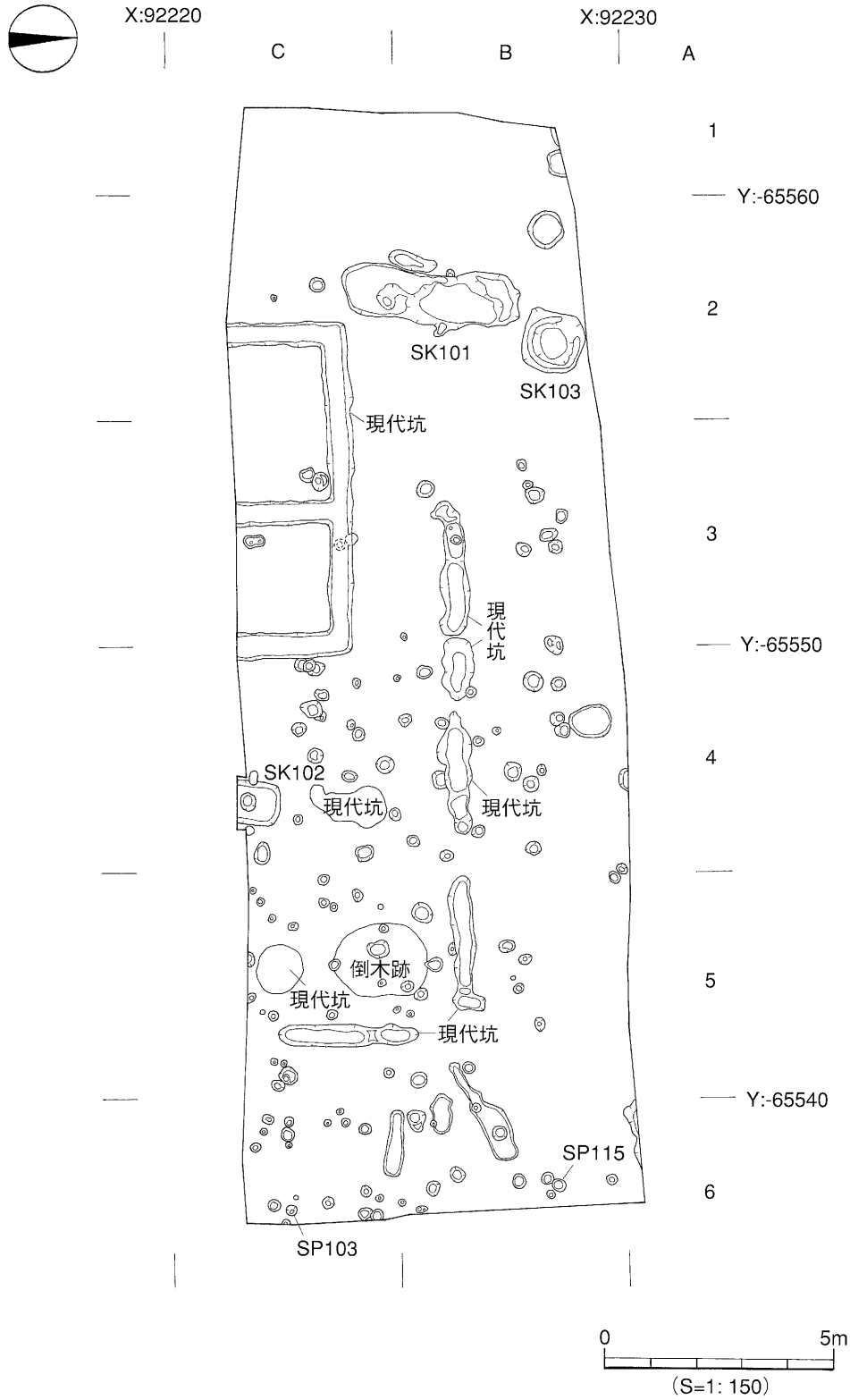
７月11日　遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、ＳＫ101、102と他の遺構の掘り下げを開始する。

７月13日　遺構の上場の測量を順次行う。

７月14日　基準点の設置を行う。国土座標軸に載った５ｍメッシュのグリッドを



第48図　調査区位置図


X:92220
X:92230
C
B
A
1
2
3
4
5
6
Y:-65560
Y:-65550
Y:-65540
SK101
SK103
現代坑
現代坑
SK102
現代坑
現代坑
倒木跡
現代坑
現代坑
SP115
SP103
0
5m
(S=1: 150)

第49図　遺構配置図

設定する。グリッド名称は北から南へA、B、Cとし、西から東へ1、2、3、4、5、6とした。

7月17日　ＳＰ103、115の平・断面の測量を行う。その他の遺構も、掘削の終わったものから順次測量を行う。

7月19日　ＳＫ101の遺構測量を行う。

7月21日　遺構の完掘と測量を終了し、完掘写真撮影のための掃除を行う。

7月24日　遺構完掘写真撮影を行う。撮影終了後、土層確認のため北壁沿いに設定したトレンチを再度掘削する。

7月25日　北壁トレンチ壁面の精査を行う。

7月26日　北壁トレンチの土層図作成作業を終了する。

7月27日　重機にて調査区の埋め戻しを行い、調査を終了する。

2．層位（第50図、図版27-2）

調査区の基本層序は第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層褐灰色土、第Ⅳ層黄色土、第Ⅳ－1層黄褐色粘質土、第Ⅳ－2層灰黄色砂礫、第Ⅳ－3層黄白色粘質土、第Ⅳ－4層明褐色土、第Ⅳ－5層灰色土（粗砂混じる）、第Ⅳ－6層乳白色粘質土、第Ⅴ層黄褐色土、第Ⅵ層黄色砂質土、第Ⅶ層灰色砂礫（礫直径1cm～5cm）である。以下、基本層位の内容を記述する。

第Ⅰ層　　現代のもので主に真砂土である。層厚は4cm～27cmを測る。

第Ⅱ層　　現代の耕作土である。層厚は12cm～28cmを測る。

第Ⅲ層　　中・近世の遺物を包含する。調査区の西隅に堆積する。他の場所では検出されない。層厚は4cm～10cmを測る。

第Ⅳ層と第Ⅳ層－1～6は、周辺の調査成果よりＡＴ火山灰の1次～2次堆積層と考えられる。調査区の西側から東側にかけて厚く堆積する。なお、ＡＴ火山灰については目視の確認のみであり、科学的な分析は行っていないため、明確に1次・2次堆積の判別はできていない。

第Ⅳ層　　調査区の西側だけに見られる。上面で遺構を検出している。層厚は最大で30cmを測る。

第Ⅳ－1層　調査区の西側から第Ⅳ層上から堆積する。調査区の東側では砂層に切られ見られない。上面で遺構を検出している。層厚は最大で55cmを測る。

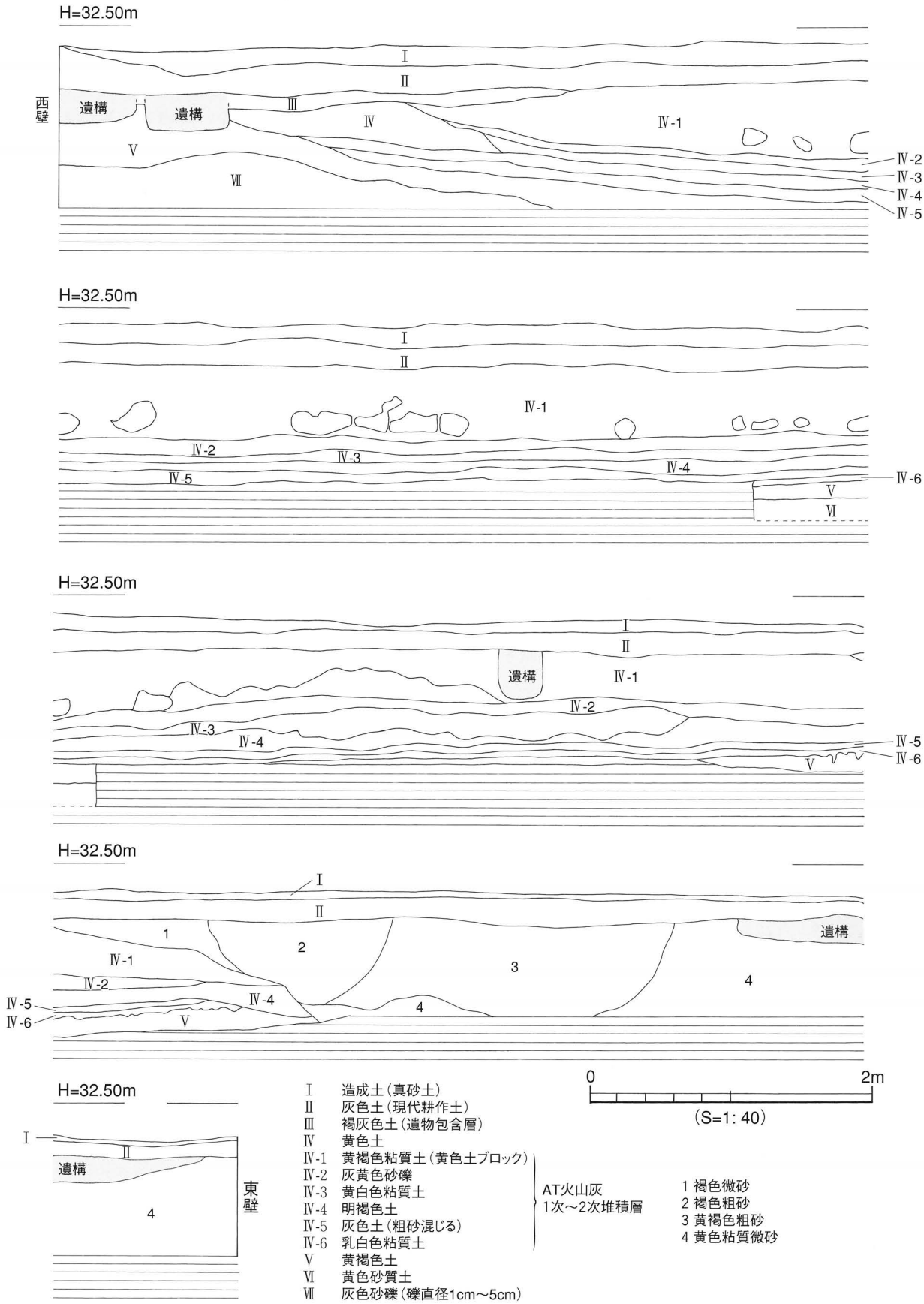
第Ⅳ－2層　砂礫で構成され黄色土が部分的に混じる。調査区の東側で途切れる。層厚は3cm～12cmを測る。

第Ⅳ－3層　粘質土である。調査区の西側から堆積し、調査区の中央部で途切れる。

第Ⅳ－4層　第Ⅳ層と第Ⅳ－5層の間に堆積する。調査区の東側では砂層に切られる。層厚は3cm～20cmを測る。

第Ⅳ－5層　第Ⅳ－4層と第Ⅴ層の間に堆積する。調査区の東側で途切れる。層厚は2cm～10cmを測る。

第Ⅳ－6層　ＡＴ火山灰層と考えられる第Ⅳ層群中の最下層にあたる。調査区中央部から東側にかけて検出したものである。調査区の東側で途切れる。層厚は2cm～4cmを測る。


H=32.50m
西壁
遺構
遺構
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅳ-1
Ⅳ-2
Ⅳ-3
Ⅳ-4
Ⅳ-5
Ⅴ
Ⅶ
H=32.50m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅳ-1
Ⅳ-2
Ⅳ-3
Ⅳ-4
Ⅳ-5
Ⅳ-6
Ⅴ
Ⅵ
H=32.50m
Ⅰ
Ⅱ
遺構
Ⅳ-1
Ⅳ-2
Ⅳ-3
Ⅳ-4
Ⅳ-5
Ⅳ-6
Ⅴ
H=32.50m
Ⅰ
Ⅱ
遺構
1
2
3
4
Ⅳ-1
Ⅳ-2
Ⅳ-4
Ⅳ-5
Ⅳ-6
Ⅴ
H=32.50m
Ⅰ
Ⅱ
遺構
4
東壁
Ⅰ 造成土(真砂土)
Ⅱ 灰色土(現代耕作土)
Ⅲ 褐灰色土(遺物包含層)
Ⅳ 黄色土
Ⅳ-1 黄褐色粘質土(黄色土ブロック)
Ⅳ-2 灰黄色砂礫
Ⅳ-3 黄白色粘質土
Ⅳ-4 明褐色土
Ⅳ-5 灰色土(粗砂混じる)
Ⅳ-6 乳白色粘質土
Ⅴ 黄褐色土
Ⅵ 黄色砂質土
Ⅶ 灰色砂礫(礫直径1cm～5cm)
AT火山灰
1次～2次堆積層
1 褐色微砂
2 褐色粗砂
3 黄褐色粗砂
4 黄色粘質微砂
0
2m
(S=1:40)

第50図　北壁土層図

第Ⅴ層　東側を除く調査区のほぼ全域にみられる。西側から東方向にかけて低くなり谷部となる。この谷部となった第Ⅴ層上面に、ＡＴ火山灰層である第Ⅳ層と第Ⅳ層－１～第Ⅳ層－６が堆積する。層厚は最大で44cmを測る。

第Ⅵ層　北壁中央部の第Ⅴ層下で検出した。層厚は不明である。

第Ⅶ層　北壁の西側で第Ⅴ層下で検出した。東方向に低くなり、トレンチ底より下となる。

この他、調査区の東側には第Ⅳ－１層を切るように砂層が検出された。自然流路の痕跡とも思えたが遺物の出土が無かったことから、調査は行っていない。

遺構の検出面は、調査区の西側は第Ⅳ層上面、それ以外は第Ⅳ－１層上面となる。検出した遺構は土坑３基、柱穴118基である。検出した遺構は、遺物のを出土するものが少なく、遺物から時期比定できる遺構は少ない。これらの遺構は本来、第Ⅲ層以上からの掘り込みと考えられる。

３．遺構と遺物

〔１〕中・近世

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ101（第51図）

調査区の西側で検出した遺構である。平面形態は、南北に長い隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸374cm、短軸120cm、深さ15cm～33cmを測る。埋土は褐灰色土の１層である。遺物は埋土中より土師器、用途不明の円盤状土製品などが出土した。

出土遺物（第52図、図版30）

284・285は鍋である。284の口縁部はゆるやかに外反して水平にのびる。口縁端部は丸い。色調は外面が褐灰色、内面が暗灰色を呈する。285は内湾して立ち上がる胴部から屈曲して水平に短くのびる口縁部。口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。色調は、内外面とも褐灰色を呈する。

286は用途不明の円盤状土製品である。一部が欠損する。直径4.8cm、厚さ0.6cmを測る。

287は石錘と思われる石製品である。長さ10.4cm、幅7.7cm、厚さ1.2cmを測る。材質は緑色片岩。

時期　出土した鍋の形態より16～17世紀と考える。

ＳＫ102（第53図）

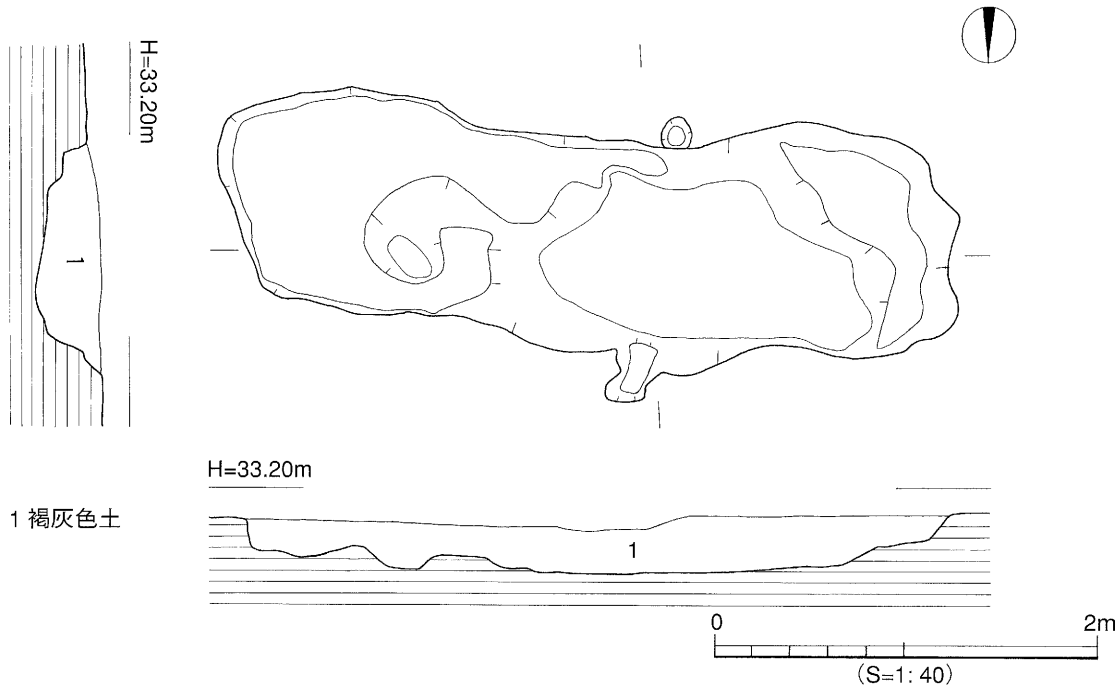
ＳＫ102は、調査区中央部の南壁沿いで検出した遺構である。遺構の南側は調査区外となる。検出状況から、平面形態は、隅丸長方形になるものと思われる。検出規模は南北100cm、東西92cm、深さ８cm～20cmを測る。埋土色は褐灰色土である。土坑の南側には直径36cm、土坑底面からの深さ10cmを測るピット状の掘り込みがある。

遺物は、埋土中から土器の細片が数点出土したのみで時期比定できる遺物の出土は無かった。

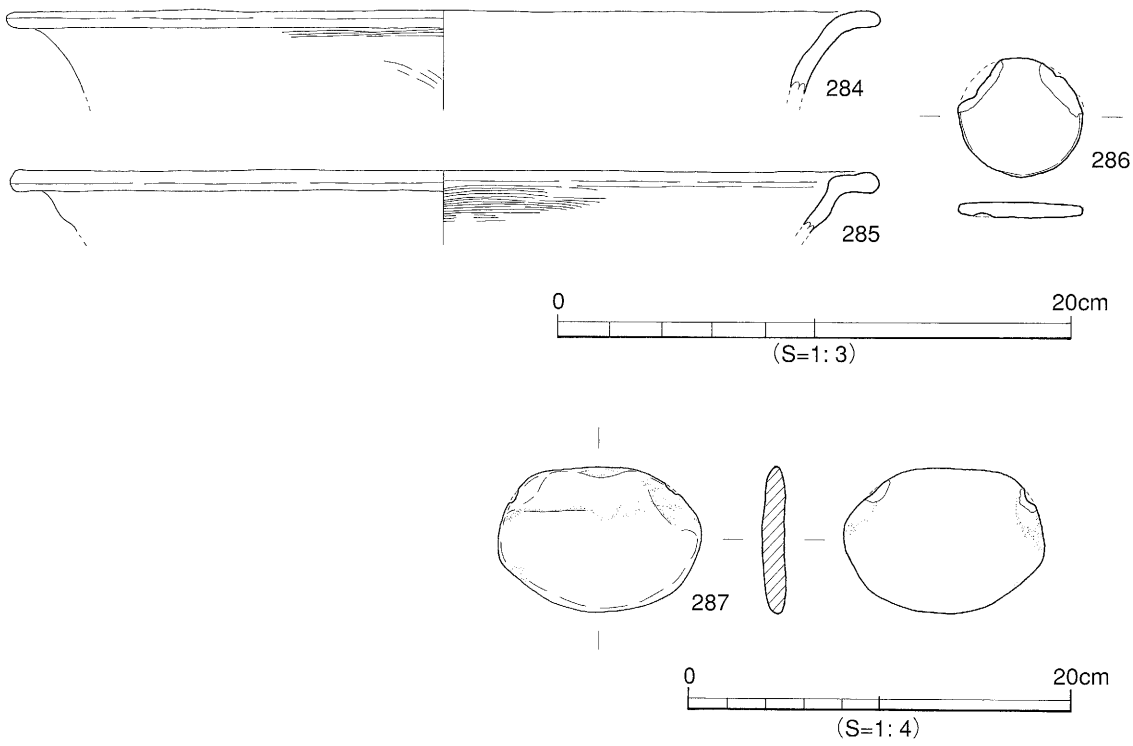
時期　埋土色は、ＳＫ101と同色であるものの出土遺物が無いために時期は不明とする。

ＳＫ103（第54図）

調査区西側での検出で、ＳＫ101の北側に隣接する遺構である。平面形態は、円形を呈する。検出規模は直径280cm、深さ84cmを測る。埋土は二層に分層される。１層は黄灰色土、２層は褐灰色土で



第51図　SK101　測量図



第52図　SK101　出土遺物実測図

ある。1層中には径3cm～10cm程度の礫が多数みられた。土坑の掘り方は、二段掘りとなっている。

遺物は2層中より、土師器、陶器などが出土した。

出土遺物（第55図、図版30）

288は鍋である。内湾して立ち上がる胴部から、屈曲して水平気味に短くのびる口縁部。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。色調は、内外面とも鈍い褐色を呈する。外面には煤が付着する。

289は唐津焼きの皿である。推定口径10.8cm、器高3.2cmを測る。胴部は、高台から緩やかに内湾して立ち上がる。高台は露胎である。底部内面には胎土目が見られる。

290は台石と考えられる石片である。片面に使用痕跡が認められる。材質は砂岩である。

時期　289の唐津焼きより16世紀末～17世紀前半と考えられる。

2）柱穴（ＳＰ）

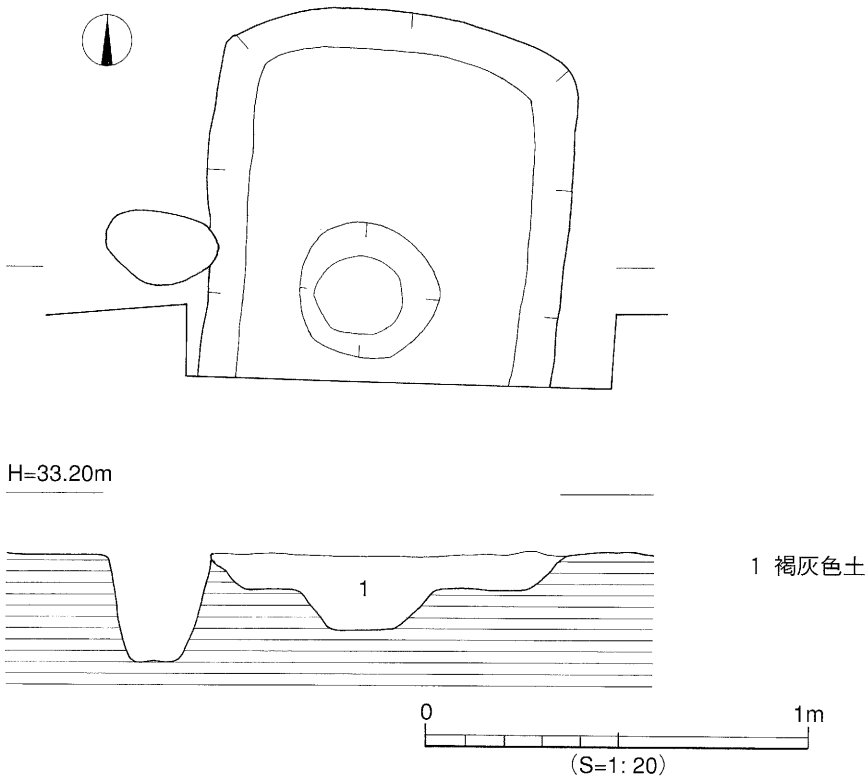
ＳＰ103（第56図）

調査区の南東隅で検出したものである。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径18cm、深さ25cmを測る。埋土色は褐灰色を呈する。柱痕跡は検出していない。遺物は、埋土中より土師器坏の口縁部片が一点出土した。

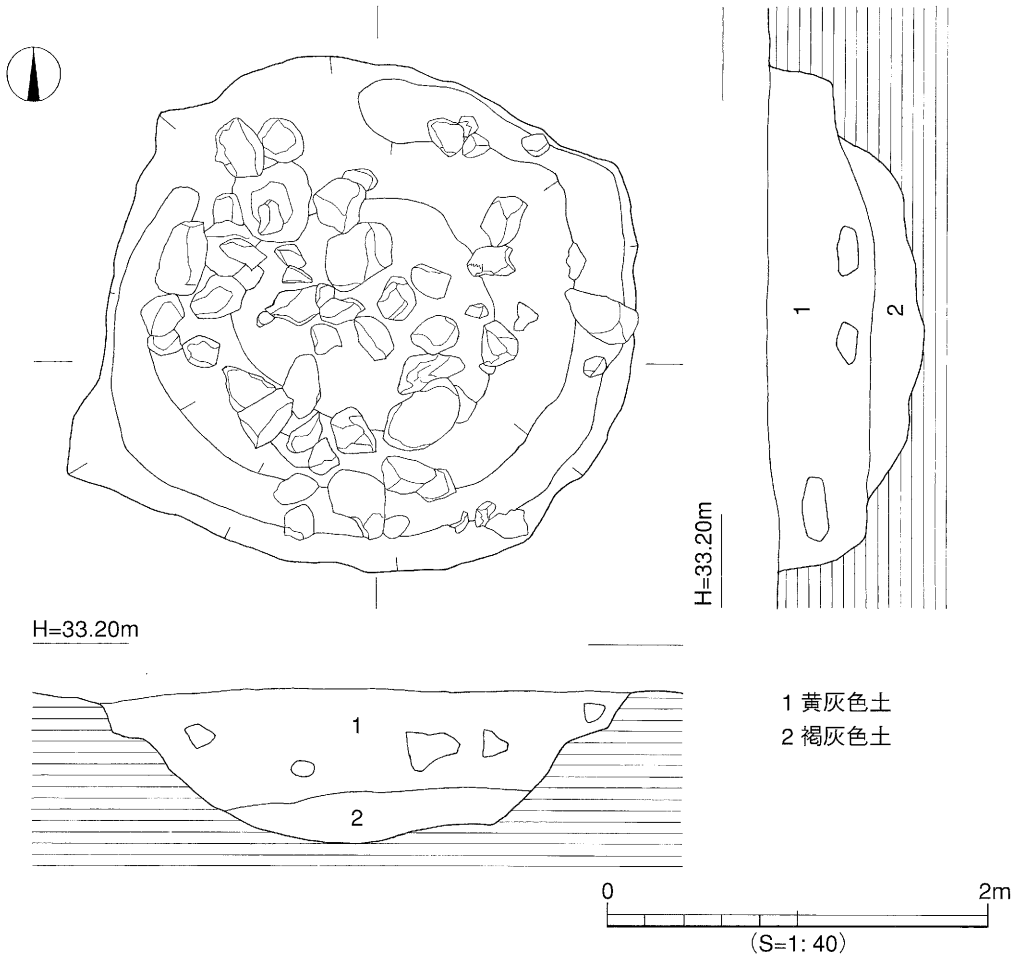
出土遺物（第57図）

291は土師器坏の口縁部片である。推定口径11.5cmを測る。色調は灰白色を呈する。

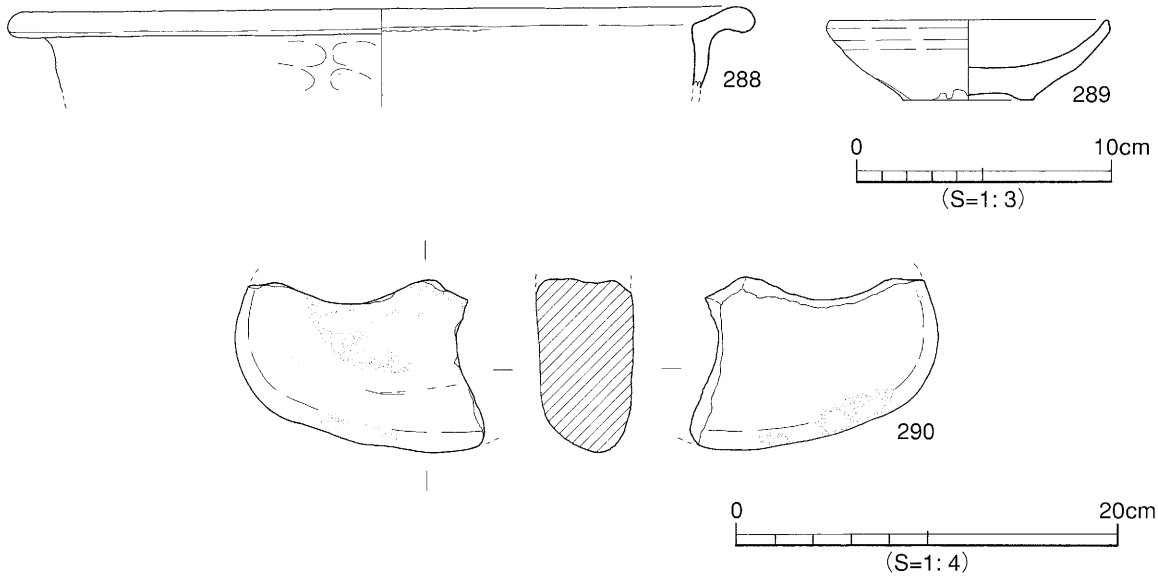
時期　遺物の全容が不明なため明確ではないが14世紀以降か。



第53図　SK102　測量図



第54図　SK103　測量図



第55図　SK103　出土遺物実測図

ＳＰ115（第56図）

調査区の北東隅で検出したものである。平面形態は、円形を呈する。検出規模は直径27㎝、深さ19㎝を測る。埋土は褐灰色土である。柱穴の南よりには、柱痕跡を検出した。検出規模は直径12㎝、深さ19㎝を測る。埋土色は灰色土である。遺物は、柱穴埋土中より土師器の羽釜が出土した。

出土遺物（第57図）

292は羽釜の口縁部片である。推定口径21.7㎝を測る。口縁端部外面に隆帯が貼付される。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。

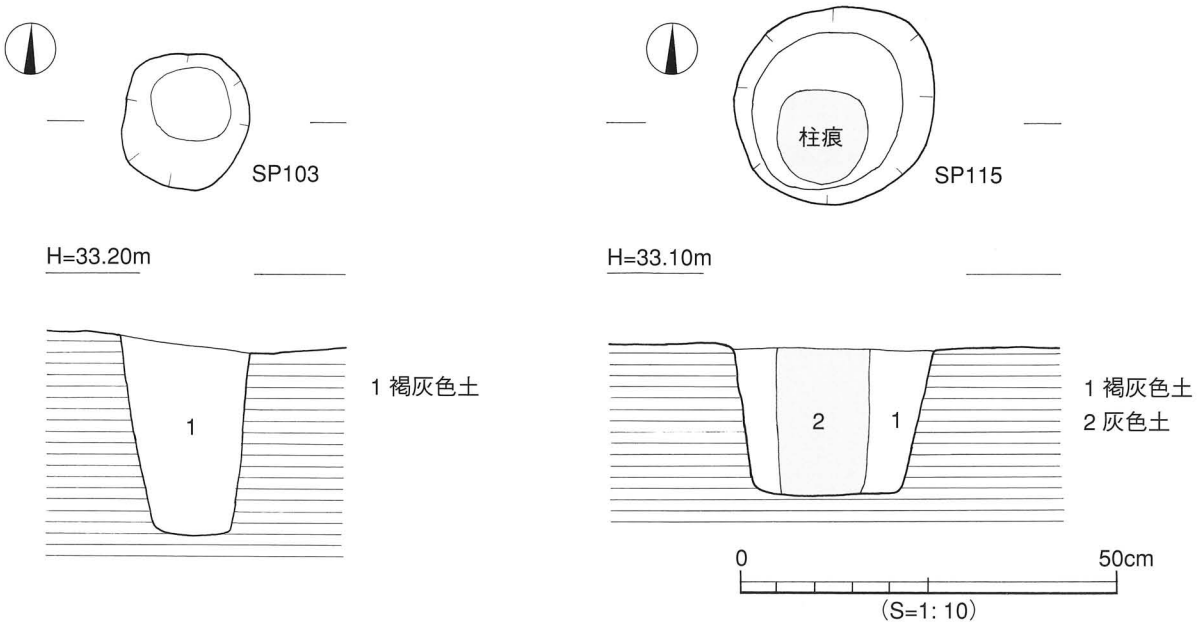
時期　出土遺物より14世紀後半と考える。

3）出土地点不明遺物（第58図）

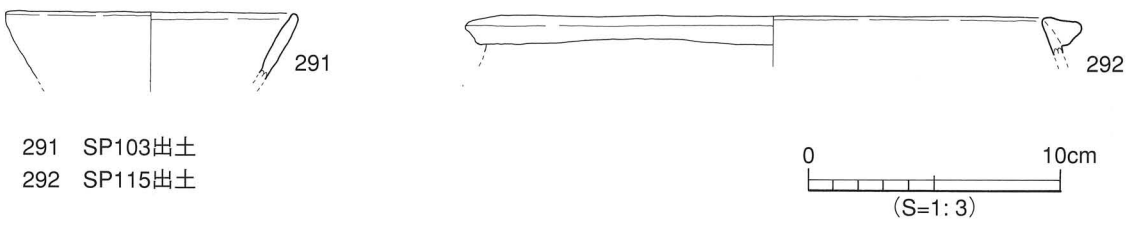
293～295は重機による表土掘削時に出土したものである。

293は土師器椀である。口縁部は短く外反する。色調は、内外面とも鈍い黄橙色を呈する。

294・295は土師器坏である。294は底部から緩やかに内湾する口縁部である。295は底部から直線的に外上方に立ち上がる口縁部である。底部の切り離しは回転糸切りである。

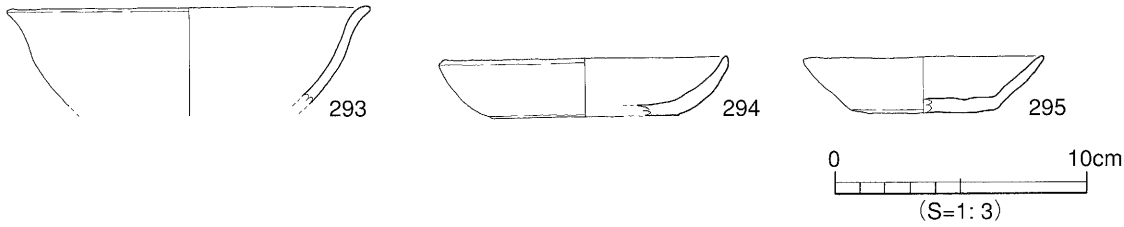


第56図　SP103・SP115　測量図



291　SP103出土
292　SP115出土

第57図　SP103・SP115　出土遺物実測図



第58図　出土地点不明遺物実測図

４．小結

（１）層位

本調査区でもＡＴ火山灰層を検出した。ＡＴ火山灰層は、調査区で確認された第Ⅴ層の上に堆積する。第Ⅴ層は、調査区の西側から東方向に下がることから調査区内で谷地形を形成するものと思われる。調査区の北壁トレンチ壁面の土層精査の結果、この谷部にＡＴ火山灰層が堆積する状況を示すものであった。

（２）遺構

今回の調査では土坑３基、柱穴118基を検出した。検出した遺構は、出土遺物が少なく時期が明確に比定できるものが少なかった。出土遺物から明確に時期比定できる遺構は土坑２基、柱穴１基にとどまる。ここでは、遺物の出土がなかった遺構の時期について考える。

時期比定できた遺構にはＳＫ101､103、ＳＰ115がある。時期はＳＫ101が16世紀～17世紀、ＳＫ103は16世紀末～17世紀前半、ＳＰ115は14世紀後半となる。これらの遺構の埋土色は、褐灰色を呈する。他の出土遺物が無かった遺構についても、殆どの遺構が埋土色は褐灰色を呈する。このことから、褐灰色土を埋土にもつものは14世紀～17世紀頃の遺構と考えられる。

そのほか、本調査区からは古墳時代以前の遺構・遺物は全く確認できなかった。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3mmの砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表27　SK101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
284	鍋	口径(33.0) 残高 3.3	外反する口縁部片。口端部は丸い。	(口端)ナデ (口)ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ	褐灰色 暗灰色	微砂粒 ◎	煤付着	30
285	鍋	口径(33.2) 残高 2.4	内面に稜をもって外反する口縁。口端部は肥厚している。	ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ	褐灰色	石・長(1~2) ◎	煤付着	30
286	円盤	径 4.8 厚さ 0.6	円盤状土製品。	ナデ	―	(表)明褐灰色 (裏)褐灰色	微砂粒 ◎	重量 15.09g	30

表28　SK101出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
287	石錘	一部欠損	緑色片石	10.4	7.7	1.2	192.76		30

表29　SK103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
288	鍋	口径(28.0) 残高 3.2	直口して立ち上がり綾をもって、外傾する口縁。口端部は肥厚し丸い。	ヨコナデ (指頭痕あり)	ヨコナデ	にぶい褐色	石・長(1~2) 褐色粒 ◎	煤付着	30
289	皿	口径(10.8) 底径(5.2) 器高 3.2	唐津焼。底部内面に胎土目あり。	ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	(釉)灰白色 (地)赤橙色	微砂粒 密 ◎		30

表30　SK103出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
290	台石	約1/4	砂岩	(11.8)	(9.1)	5.1	824.0		30

表31　SP103出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
291	坏	口径(11.5) 残高 2.6	口縁部片。外傾して立ち上がる。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 ◎		

表32　SP115出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
292	羽釜	口径(21.7) 残高 1.5	内径して立ち上がる口縁。口端部に隆帯が貼付される。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2)	煤付着	

表33　出土地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
293	椀	口径(14.3) 残高 3.8	口縁部片。内湾気味に立ち上がり口端部でわずかに外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		
294	坏	口径(11.2) 底径(7.3) 器高 2.3	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。	㈰ヨコナデ ㈫回転糸切り	ヨコナデ	橙色	微砂粒 ◎		
295	坏	口径(9.4) 底径(5.8) 器高 2.2	底部より外傾して立ち上がる口縁。平底。	㈰ヨコナデ ㈫回転糸切り	ヨコナデ	淡橙色	長(1) ◎		

第８章

桑原遺跡4次調査地

－２区の調査－

第８章　２区の調査

１．調査の経緯

２区は、桑原遺跡４次調査地の１区より市道を挟んだ東10mに位置する。標高は33.70m～33.85mを測る。調査前の現況は、造成地と耕作地である。調査は2000（平成12）年７月28日～同年12月１日の間に行った。調査面積は420m²である。以下、調査工程を略記する。

2000（平成12）年　７月28日　調査区を確認後、重機により第Ⅳ層上面まで掘削を開始する。

８月１日　第Ⅳ層上面で遺構を検出したため、遺構検出作業を開始する。

４日　第Ⅳ層上面の遺構を平面的に捉える事ができず、全体の検出作業を断念し検出した部分のみの平面測量を行う。

７日　基準点の設置を行う。国土座標軸に載った５ｍメッシュのグリッドを設定する。

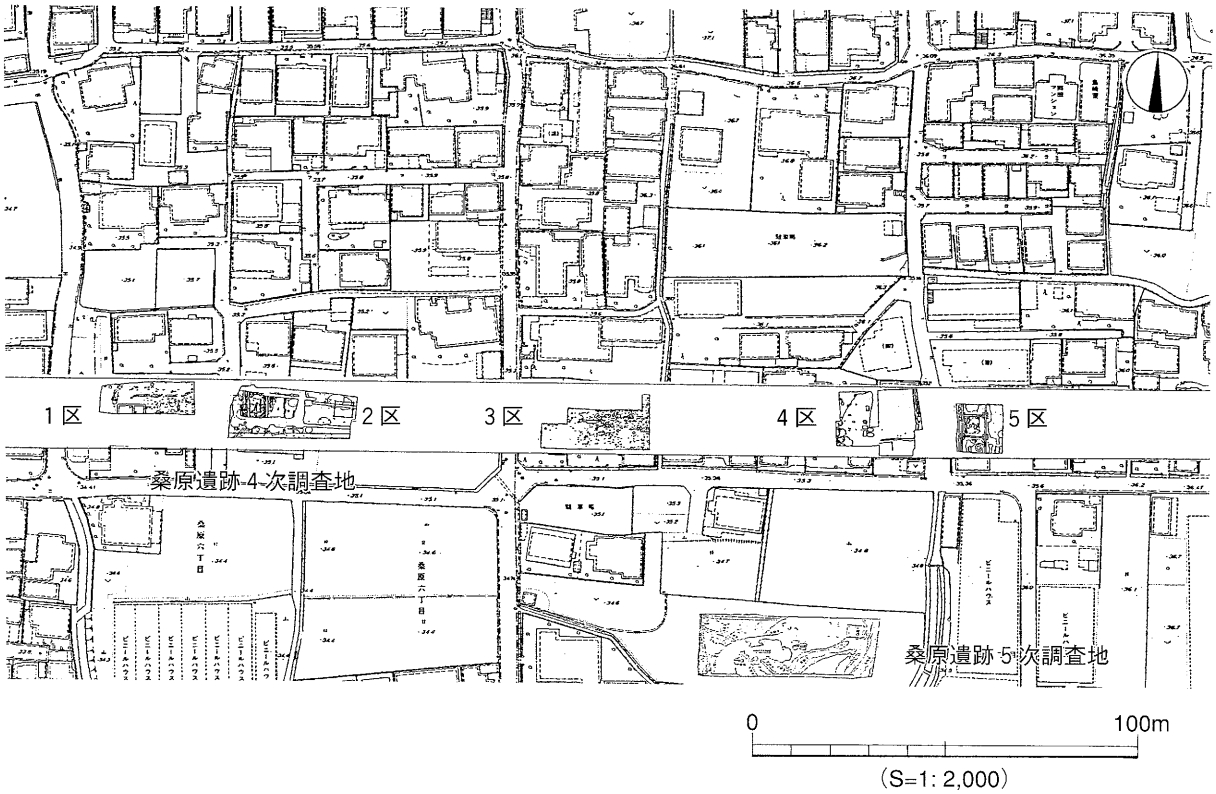
９日　第Ⅳ層の検出した部分の掘削を行い、写真撮影を行う。撮影終了後、遺構の測量を行う。

10日　現代坑（建物跡の基礎部）の掘り下げを行う。

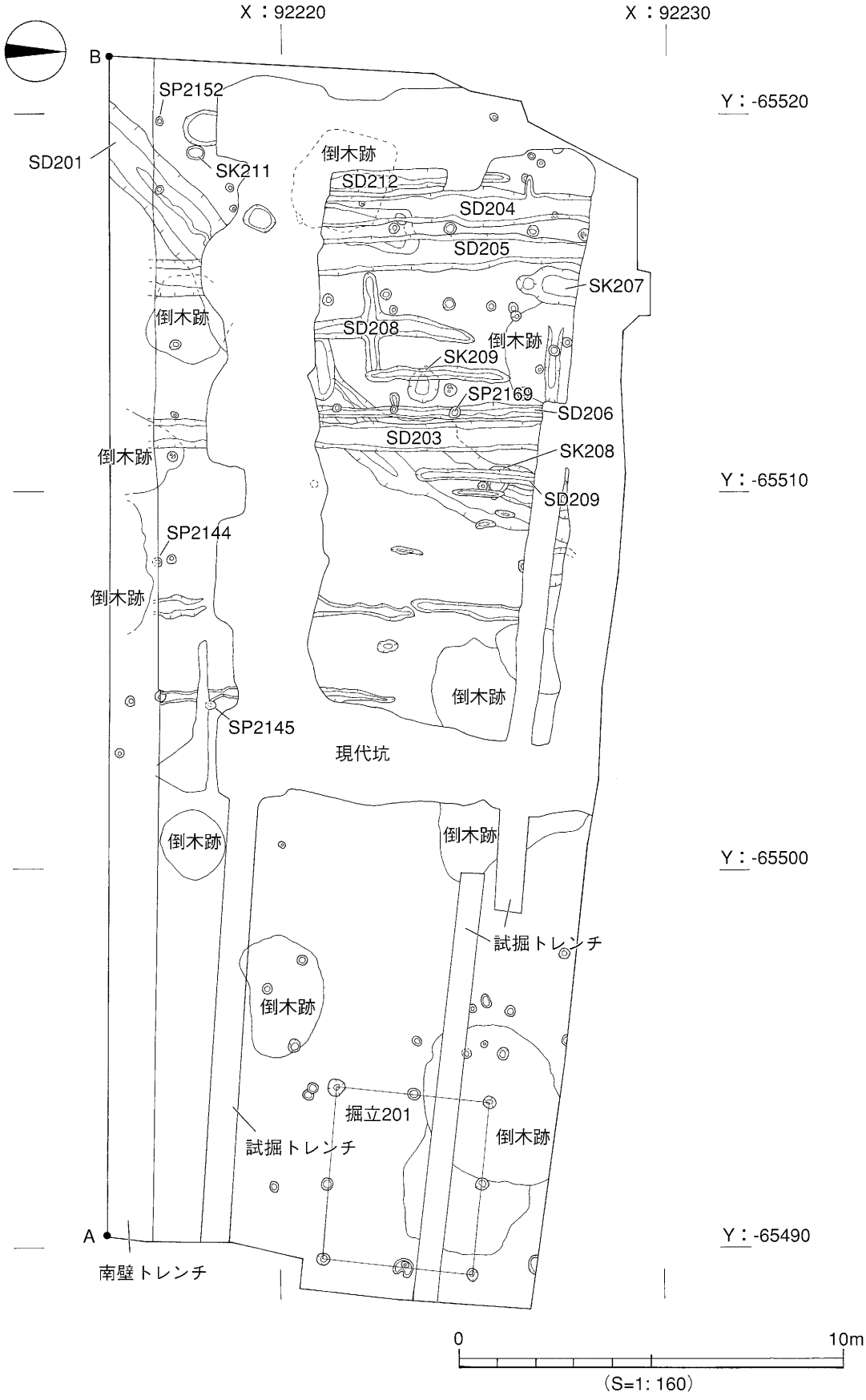
16日　第Ⅳ層を掘り下げ、第Ⅴ層上面と第Ⅶ層の遺構検出作業を開始する。

21日　第Ⅴ層上面、第Ⅶ層上面の遺構検出作業を終了し、遺構検出の写真撮影を行う。ＳＫ207の掘り下げを開始する。

25日　ＳＫ207の遺構測量を行う。



第59図　調査区位置図


X：92220
X：92230
Y：-65520
Y：-65510
Y：-65500
Y：-65490
B
A
SP2152
SD201
SK211
倒木跡
SD212
SD204
SD205
SK207
SD208
倒木跡
SK209
SP2169
SD206
SD203
SK208
SD209
SP2144
倒木跡
倒木跡
SP2145
現代坑
倒木跡
倒木跡
試掘トレンチ
倒木跡
掘立201
試掘トレンチ
倒木跡
南壁トレンチ
0
10m
(S=1:160)

第60図　遺構配置図

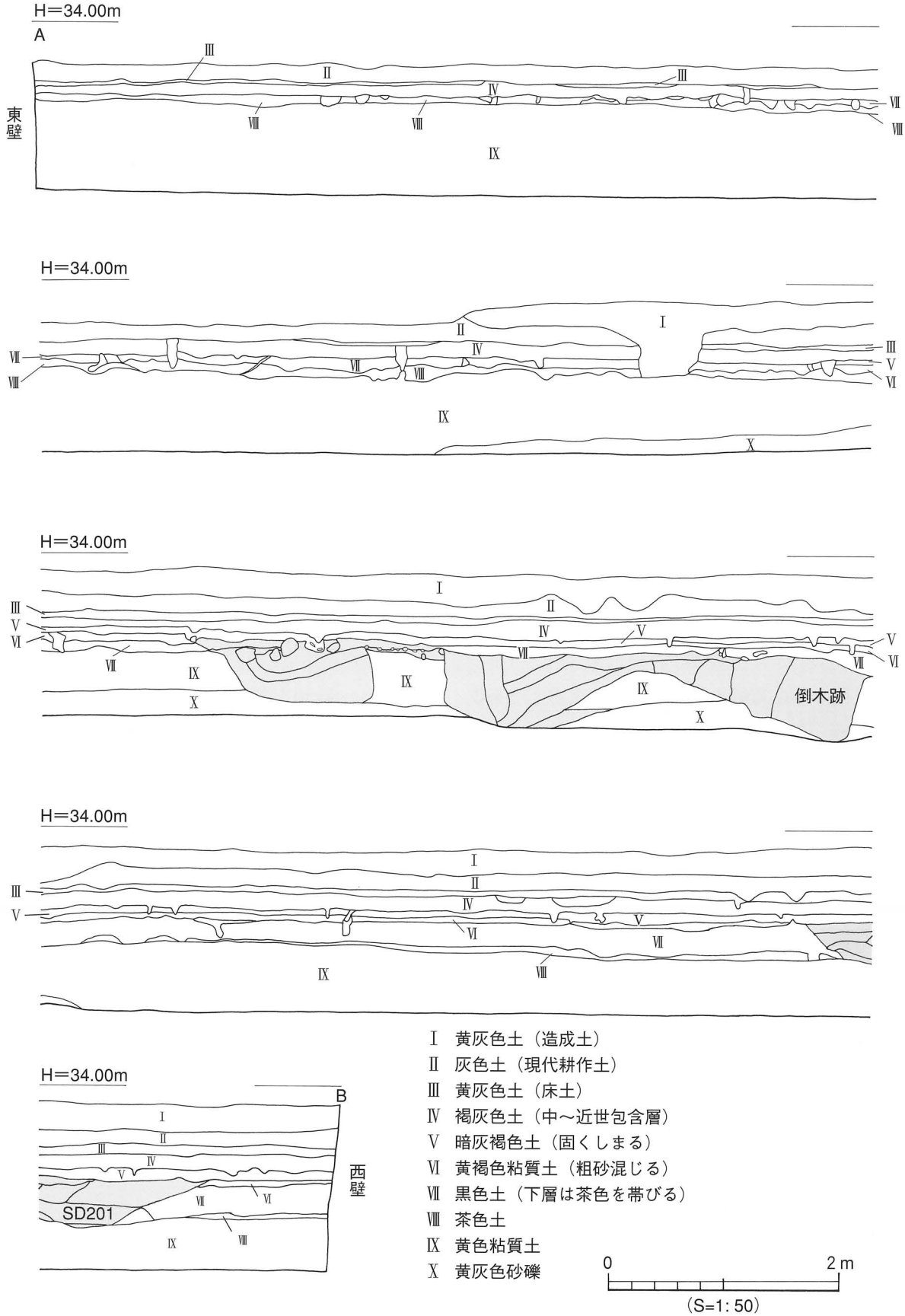
31日　掘立201の掘削を行う。
9月5日　掘立201の遺構測量を行う。
6日　ＳＫ207、掘立201の完掘写真撮影を行う。
7日　調査区西側の第Ⅴ層、第Ⅵ層を第Ⅶ層上面まで掘り下げる。
14日　第Ⅶ層上面でＳＤ201を検出する。
18日　南壁沿いに土層確認用のトレンチを設定する。
28日　ＳＤ201の精査を終了する。
10月16日　第Ⅸ層上面まで、第Ⅶ層以下の掘削を行う。
31日　第Ⅸ層上面で倒木跡を検出。
11月17日　倒木跡や他の遺構の平板測量を行う。
29日　倒木跡の測量を終了する。
12月1日　調査区の完掘状況の写真撮影を行い、現場作業を終了する。

2．層位（第61図）

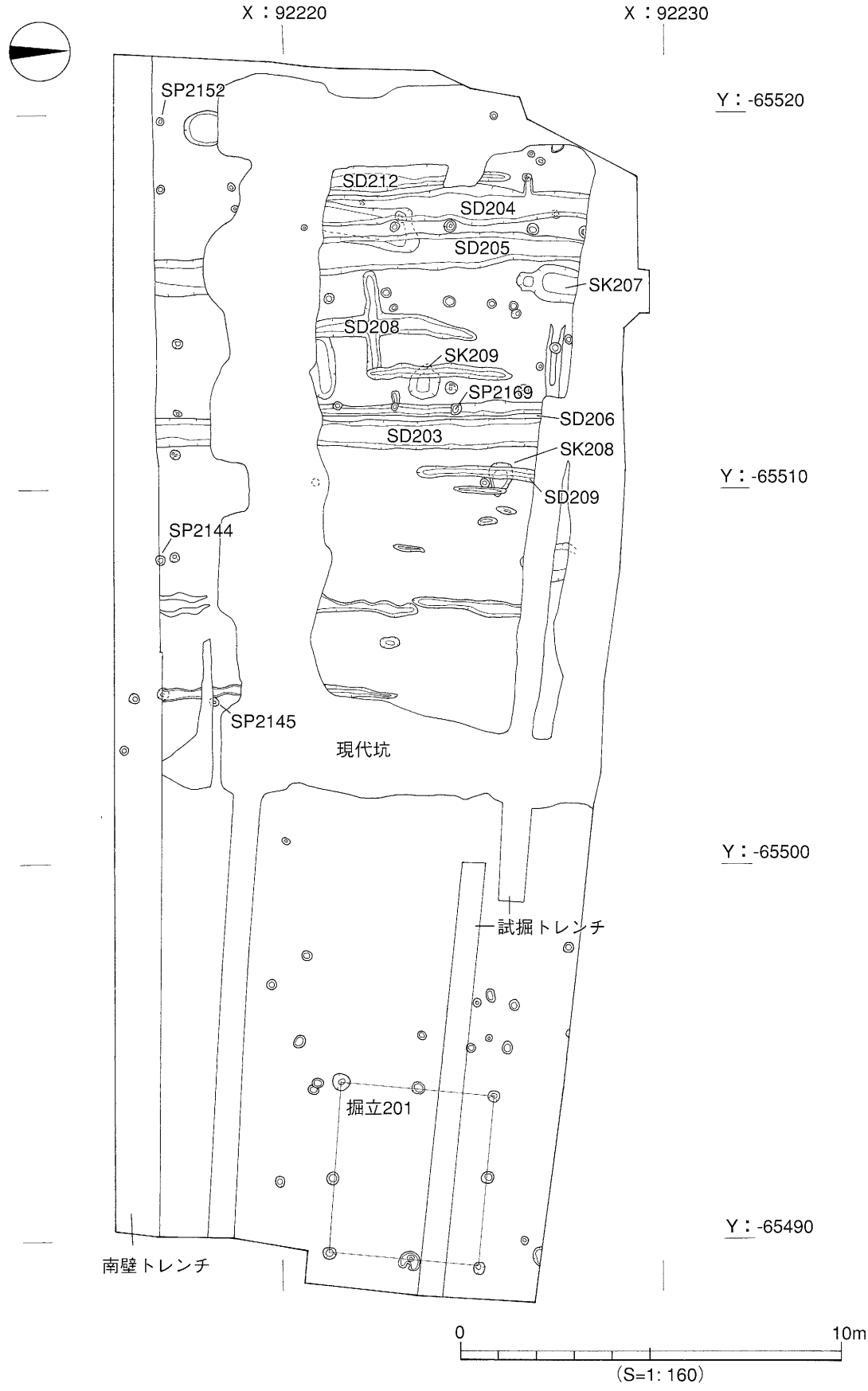
本調査区では第Ⅰ層から第Ⅹ層までの土層を確認した。調査区の基本層序は第Ⅰ層黄灰色土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層褐灰色土、第Ⅴ層暗灰褐色土、第Ⅵ層黄褐色粘質土、第Ⅶ層黒色土、第Ⅷ層茶色土、第Ⅸ層黄色粘質土、第Ⅹ層黄灰色砂礫である。以下、基本層位の内容を記述する。

第Ⅰ層　主に真砂土であり現代の造成土である。層厚20cm～60cmを測る。
第Ⅱ層　現代の耕作土である。調査区全域に見られる。層厚12cm～24cmを測る。
第Ⅲ層　水田耕作の床土と考えられる。主に西側で厚くなる。層厚2cm～9cmを測る。
第Ⅳ層　調査区全域で見られる。中・近世の遺物を包含する。上面で遺構（ＳＤ203～ＳＤ212）を検出した。層厚4cm～20cmを測る。
第Ⅴ層　西側に見られ、調査区中央部よりやや東側で途切れる。上面で遺構（ＳＫ207）を検出した。層厚3cm～10cmを測る。
第Ⅵ層　西側に見られ、調査区中央部よりやや東側で第Ⅴ層と共に途切れる。上面で遺構（ＳＤ201）を検出した。層厚2cm～10cmを測る。
第Ⅶ層　調査区全域で見られる。調査区の西側で厚く堆積し、東側では削平により薄い堆積となる。上面で遺構（掘立201）を検出した。層厚は2cm～22cmを測る。
第Ⅷ層　調査区の西端と東側に見られる。中央部では見られない。層厚2cm～12cmを測る。
第Ⅸ層　粘質土で調査区全域で見られる。層厚は70cm以上を測る。
第Ⅹ層　旧石手川水系の砂礫層と考えれる。調査区中央部での検出である。調査区中央部に土堤状の高まりをもつ。

遺構検出については、最初に第Ⅳ層上面で溝などの遺構を確認した。しかし、第Ⅳ層の土色と遺構埋土色とが同じ色調のため、検出作業において遺構全体を平面的に捉えることができなかった。このため遺構の検出は、第Ⅳ層除去後の第Ⅴ層～第Ⅶ層上面で行った。検出した遺構は掘立柱建物址1棟、柱穴58基、土坑4基、溝13条である。


H=34.00m
A
東壁
H=34.00m
H=34.00m
倒木跡
H=34.00m
H=34.00m
B
西壁
SD201
Ⅰ 黄灰色土（造成土）
Ⅱ 灰色土（現代耕作土）
Ⅲ 黄灰色土（床土）
Ⅳ 褐灰色土（中～近世包含層）
Ⅴ 暗灰褐色土（固くしまる）
Ⅵ 黄褐色粘質土（粗砂混じる）
Ⅶ 黒色土（下層は茶色を帯びる）
Ⅷ 茶色土
Ⅸ 黄色粘質土
Ⅹ 黄灰色砂礫
0
2m
(S=1:50)

第61図　南壁土層図



第62図　中世以降の遺構配置図

3．遺構と遺物

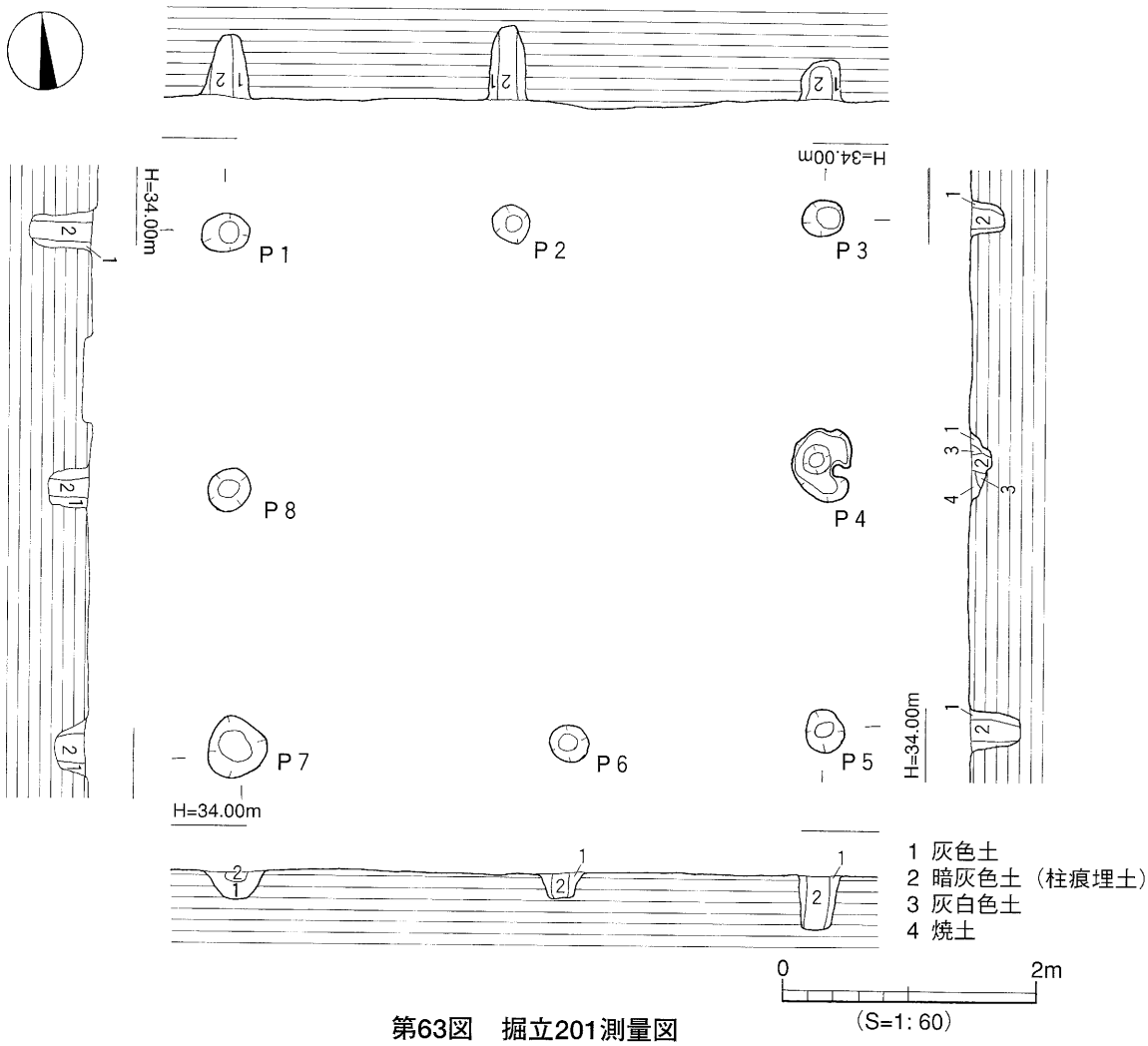
〔1〕中世

1）掘立柱建物址（掘立）

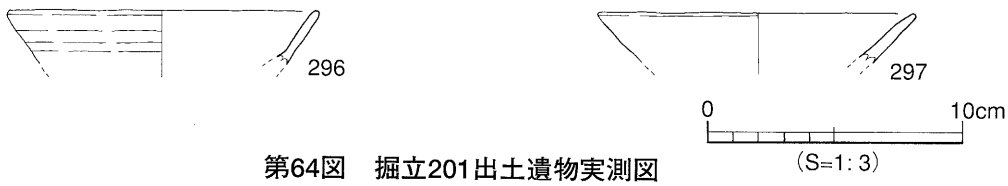
掘立201（第62・63図）

調査区西側で東西２間×南北２間を検出した。桁行長は5.00m、梁行は4.45mを測る。各柱穴間は2.00m～3.00mを測り、柱穴間が最も長いのは南側柱穴Ｐ７とＰ６の間が3.00mを測る。柱穴の平面形態はＰ４は不整形、他は円形を呈する。検出規模は直径25cm～45cm、深さ15cm～50cmを測る。埋土は主に灰色土であるが、Ｐ４の柱穴埋土には焼土も見られた。

検出した全ての柱穴では、柱痕跡を検出した。柱痕跡の平面形態は、全て円形を呈する。検出規模



第63図　掘立201測量図



第64図　掘立201出土遺物実測図

は直径８cm～22cm、深さ15cm～50cmを測る。埋土は暗灰色土である。遺物は、Ｐ４の柱痕埋土より土師器の小片が出土している。他の柱穴からの出土遺物はない。

出土遺物（第64図）

296は土師器坏の口縁部片である。推定口径12.0㎝を測る。297は土師器坏の口縁部片である。

時期　遺物は口縁部片で明確な時期比定はできないが、15世紀以降と考える。

２）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ2144（第65図）

調査区の中央部南側に位置する。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径26㎝、深さ36㎝を測る。

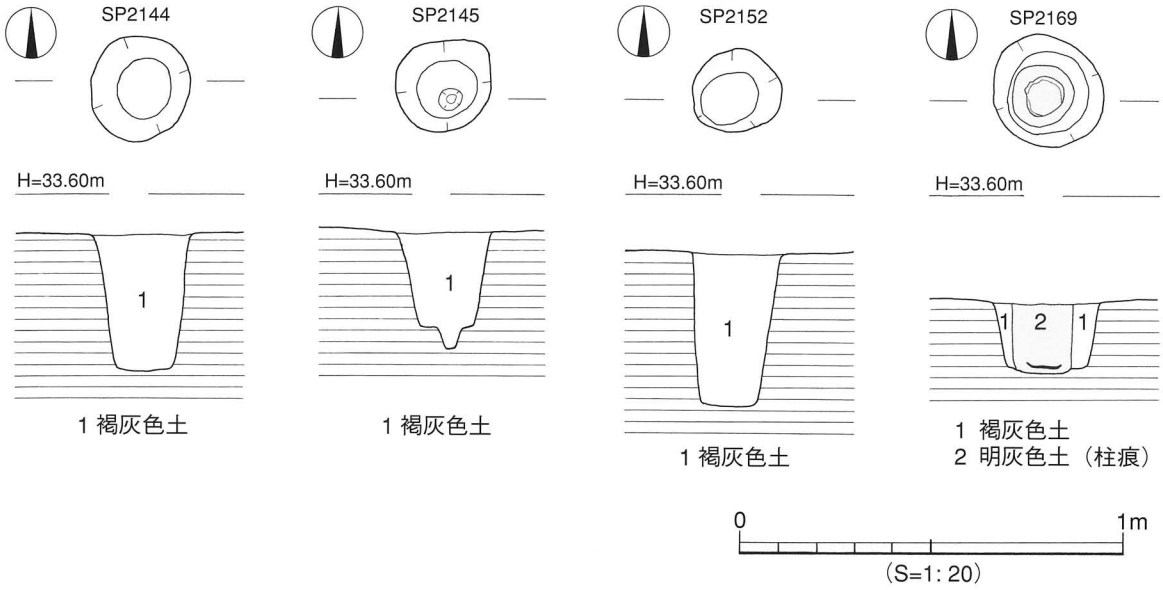
出土遺物（第66図）

298は東播系こね鉢の口縁部片である。口縁部外面は、稜をもって内に立ち上がり面をなす。

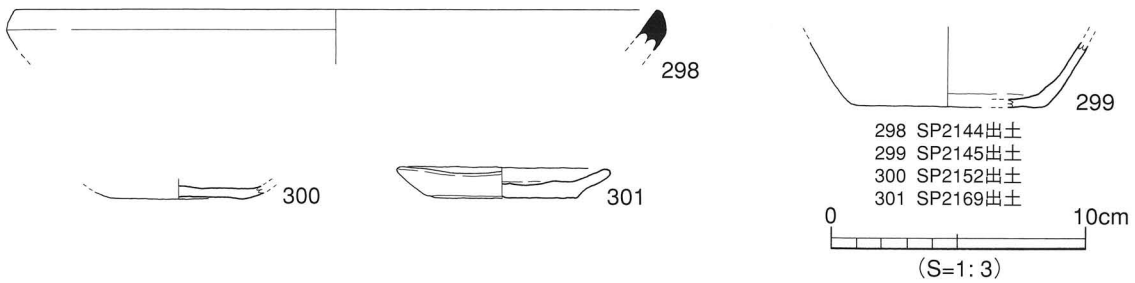
時期　出土遺物より13世紀後半。

ＳＰ2145（第65図）

ＳＰ2144の東４mに位置する。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径25cm、深さ31cmを測る。埋土は褐灰色土である。



第65図　SP2144・SP2145・SP2152・SP2169測量図



第66図　SP2144・SP2145・SP2152・SP2169出土遺物実測図

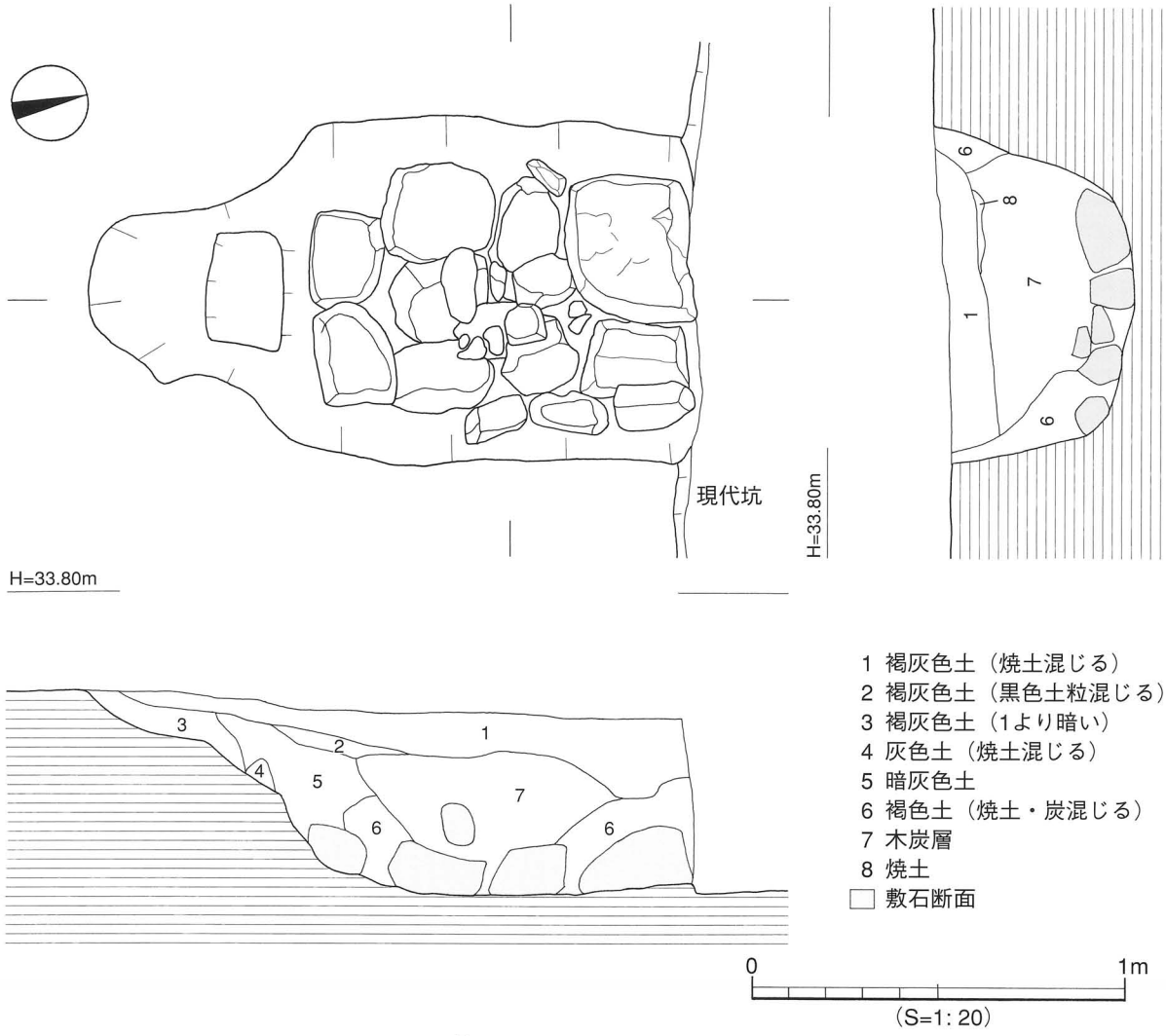
出土遺物（第66図）

299は土師器坏の底部である。底部の切り離しは回転糸切りである。

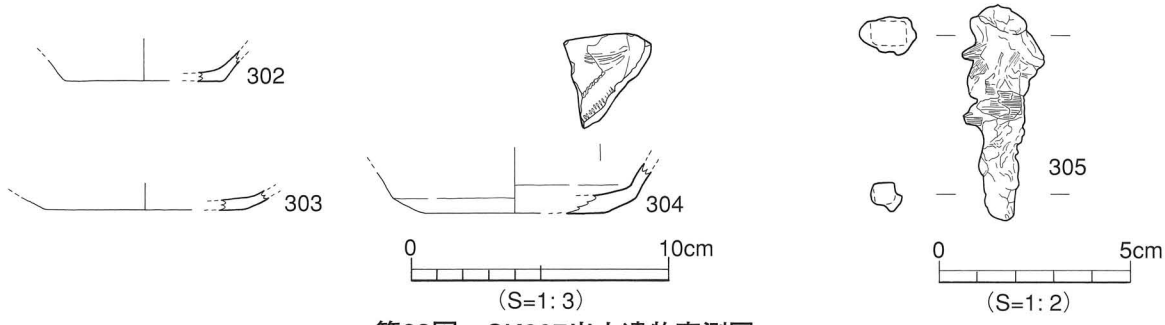
時期　出土遺物より13世紀後半と考える。

ＳＰ2152（第65図）

調査区の南西に位置する。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径23cm、深さ40cmを測る。



第67図　SK207測量図



第68図　SK207出土遺物実測図

出土遺物（第66図）

300は土師器坏の底部片である。底部の切り離しは回転糸切りである。

時期　出土遺物より13世紀以降と考える。

ＳＰ2169（第65図）

調査区中央部の西側に位置し、ＳＤ206に切られる。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径28cm、深さ18cmを測る。埋土は褐灰色土である。柱穴内の中央部には柱痕跡を検出した。柱痕跡の平面形態は円形を呈する。検出規模は直径15cm、深さ18cmを測る。埋土は明灰色土である。遺物は柱痕跡の底面より、ほぼ完形の土師器皿１点が出土した。

出土遺物（第66図、図版36）

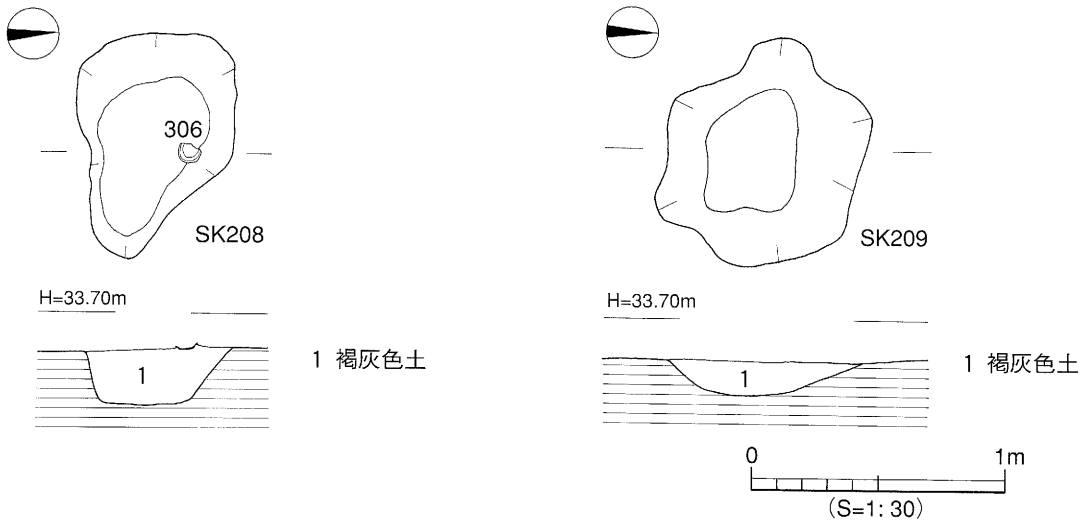
301は口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.3cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。

時期　出土遺物より13世紀後半～14世紀と考える。

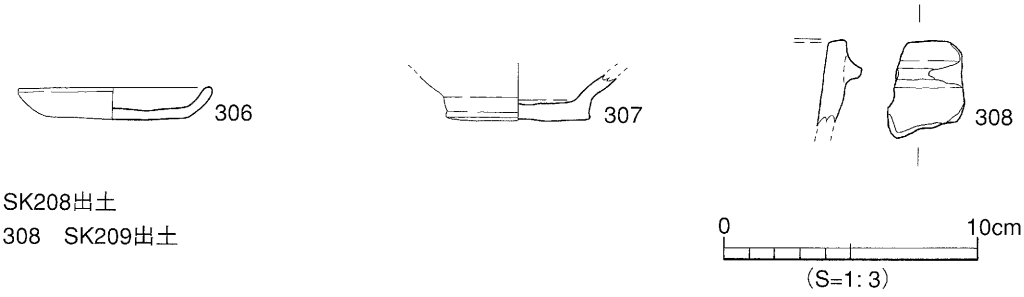
３）土坑（ＳＫ）

ＳＫ207（第67図、図版32-2・33）

調査区の北西部に位置する。北側は現代坑に切られる。土坑南側は窄まって短く張り出し、南壁面は緩い傾斜となっている。検出規模は長軸163cm、短軸92cm、深さ50cmを測る。土坑底には、一辺13cm～40cmを測るやや大振りの長方形・正方形を呈する石が面を揃えて敷かれている。

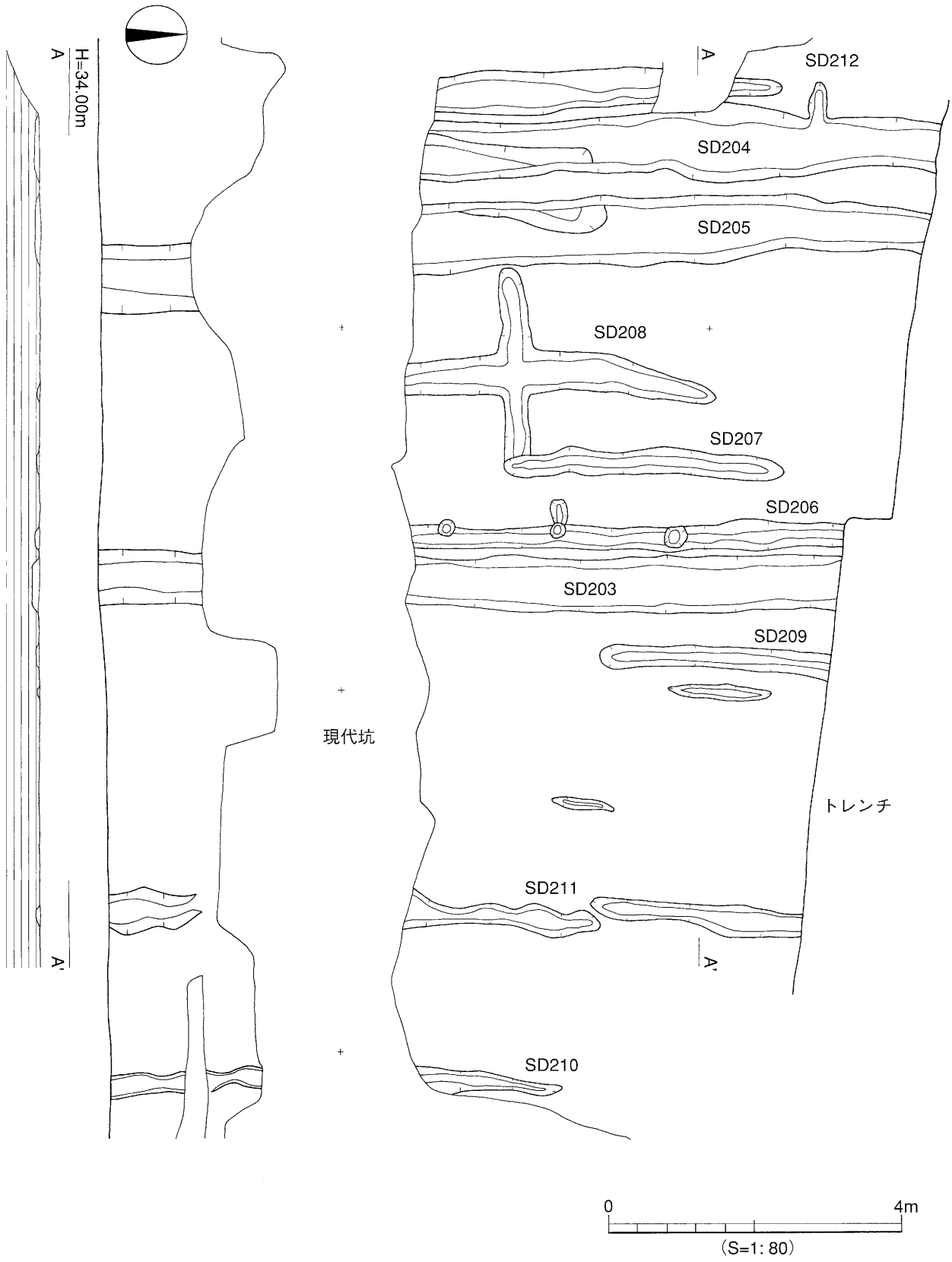


第69図　SK208・SK209測量図



306　SK208出土
307・308　SK209出土

第70図　SK208・SK209出土遺物実測図



第71図　SD203～SD212測量図

土坑中央部には、木炭層が見られた。木炭層は幅74cm、厚さ30cmを測る。その他の埋土中には、焼土や炭が混じっていた。遺物は、埋土中より土師器片、青磁片、鉄釘が出土した。

出土遺物（第68図、図版36）

302、303は土師器坏の底部片である。302の底部は回転糸切りである。304は青磁碗である。内面見込み部に櫛目文が施される。底部外面は露胎となり、糸切り痕が看取される。

時期　出土した青磁碗より15世紀。

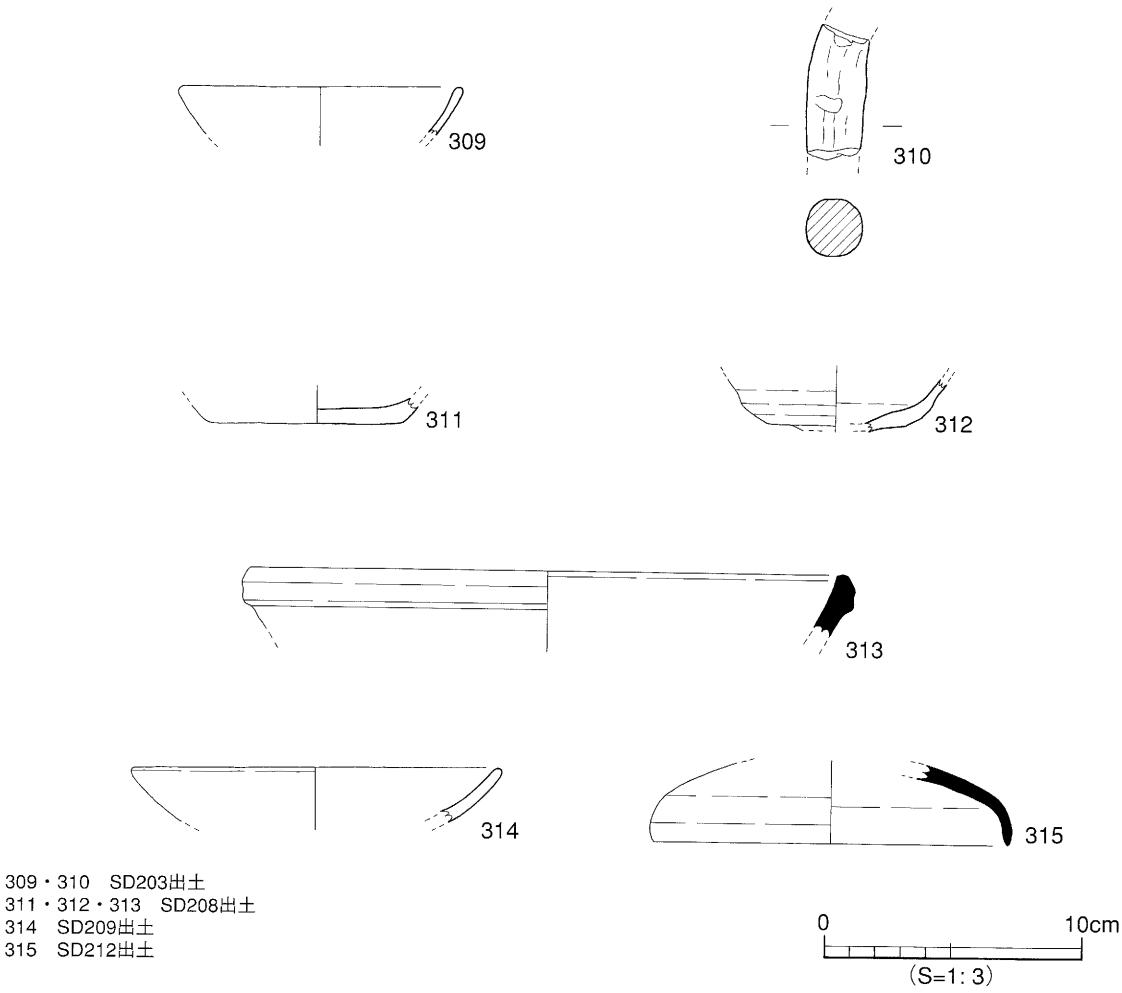
ＳＫ208（第69図、図版32-1）

調査区中央部の西側に位置する。平面形態は不整形である。検出規模は長軸90cm、短軸54cm、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色土である。遺物は、埋土上面で完形の土師器皿が１点出土した。

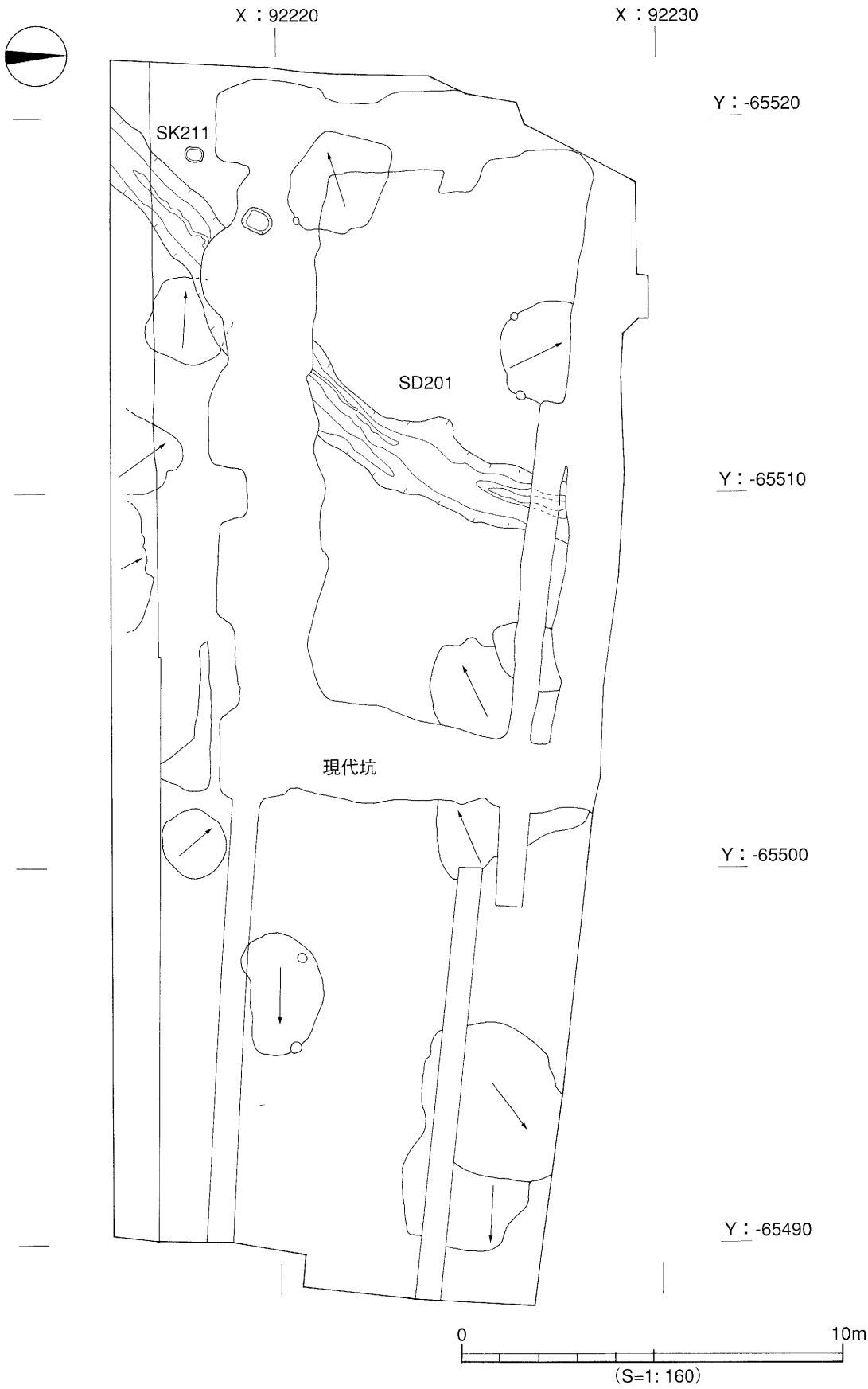
出土遺物（第70図）

306は土師器皿で口径7.3cm、底径5.5cm、器高1.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。

時期　出土遺物より14世紀と考える。



第72図　SD203・SD208・SD209・SD212出土遺物実測図



第73図　古墳時代以前の遺構配置図

ＳＫ209（第69図）

調査区西側の中央部に位置する。平面形態は不整形である。検出規模は長軸94cm、短軸76cm、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色土である。遺物は埋土より土師器片が出土した。

出土遺物（第70図）

307は土師器坏の底部片である。底部の切り離しは、回転ヘラ切りである。308は羽釜の口縁部片である。隆帯は口縁端部よりやや下に貼付する。

時期　308の羽釜の形態より13世紀後半～14世紀と考える。

4）溝（ＳＤ）

検出したＳＤ203～ＳＤ212の溝は、本来第Ⅳ層上面で検出される遺構である。南北方向に掘られるものが多く、溝の埋土は全て灰色を呈する。埋土色から同時期の溝といえる。以下、遺物が出土した溝について記述する。

ＳＤ203（第71図）

調査区の西側に位置する。南北方向の溝である。検出規模は長さ10.16m、幅0.80m、深さ0.12mを測る。溝の両端は調査区外となる。

出土遺物（第72図）

309は土師器坏の口縁部片、310は脚付き釜の脚部片である。

ＳＤ208（第71図）

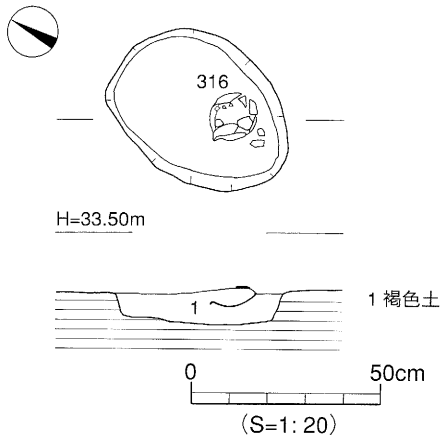
調査区西側の中央部に位置する。南北方向の溝と東西方向の溝があり、平面形態は十字形を呈する。検出規模は長さ南北4.20m、東西2.80m、幅0.30m～0.60m、深さ0.04m～0.08mを測る。

出土遺物（第72図）

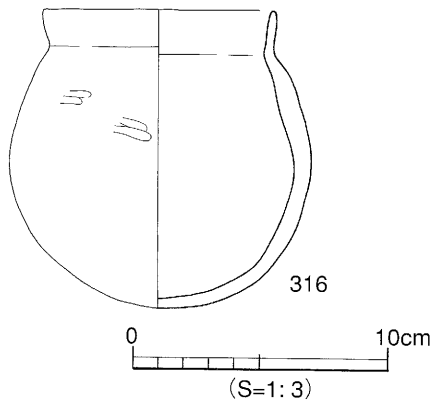
311は土師器坏の底部片。底部の切り離しは摩滅の為不明。312は土師器坏の底部片。底部の切り離しは静止の糸切りである。313は東播系こね鉢の口縁部片である。

ＳＤ209（第71図）

ＳＤ203の東に隣接する南北方向の溝である。北側からのびて調査区内で途切れる。検出規模は長さ3.20m、幅0.30m、深さ0.05mを測る。



第74図　SK211測量図



第75図　SK211出土遺物実測図

出土遺物（第72図）

314は土師器坏の口縁部片である。推定口径14.3cmを測る。

ＳＤ212（第71図）

調査区の西端に位置する。一部を現代坑に切られる。検出規模は長さ4.70m、幅0.20m～0.60m、深さ0.04mを測る。

出土遺物（第72図）

315は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境が不明良なもので、口縁端部は丸くおさめる。

溝の時期　これらの溝からは古墳時代から中世の遺物が出土している。最も新しいと思われる312の土師器坏は16世紀に比定される。よって、これらの溝は16世紀頃の遺構と考える。

〔２〕古墳時代

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ211（第73・74図、図版34-2）

第Ⅵ層上面で検出した遺構である。調査区の南西隅に位置する。平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸52cm、短軸36cm、深さ10cmを測る。埋土は褐色土である。遺物は埋土中より土師器の壺が１点出土した。

出土遺物（第75図、図版36）

316は口径9.0cm、器高11.8cmを測る。緩やかに内湾して立ち上がる胴部から直立気味に短くのびる口縁部。底部は丸い。

時期　出土遺物より古墳時代前期と考える。

〔３〕弥生時代

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ201（第73・76図、図版34-1・35-1）

第Ⅵ層上面で検出した溝である。調査区内を北方向から弧を描いて南西方向に流れる。検出規模は長さ15.6m、幅1.28m～2.58m、深さ0.38mを測る。溝底には、厚さ20cm程度の粗砂層が堆積する。出土遺物は埋土中より弥生土器が出土している。

出土遺物（第77図、図版36）

甕形土器（317～320）

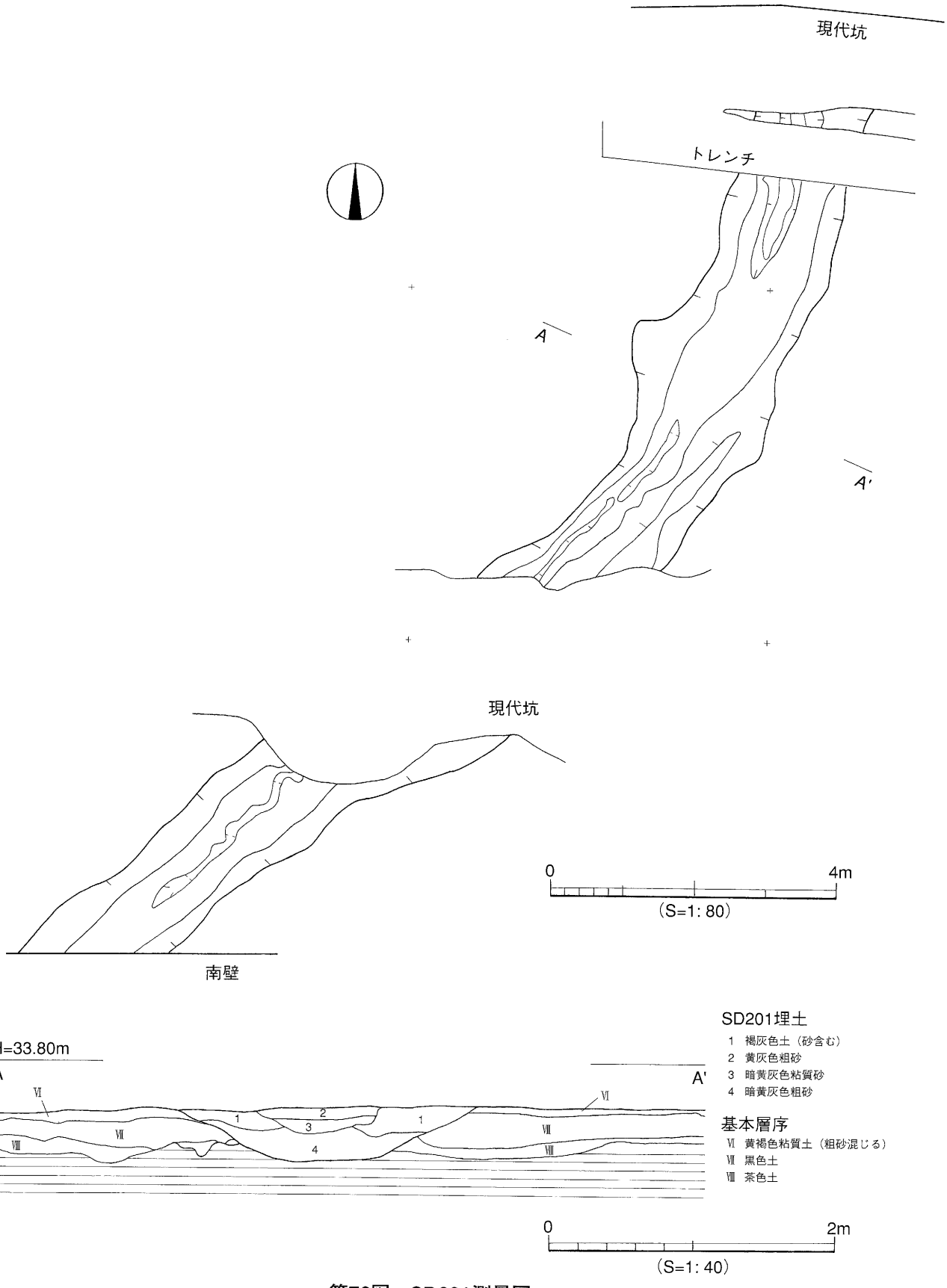
317は口縁端部に凹線文と頸部に押圧の突帯文が施される。318の胴部はタタキ調整される。319・320は底部片である。

壺形土器（321）

321は口縁端部に円形浮文が貼付される。322は口縁端部に波状文が施される。323は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。

鉢形土器（324）

324は底部片で突出する小さな平底である。



第76図　SD201測量図

高坏形土器（325）

325は脚部片である。

石鏃（326）

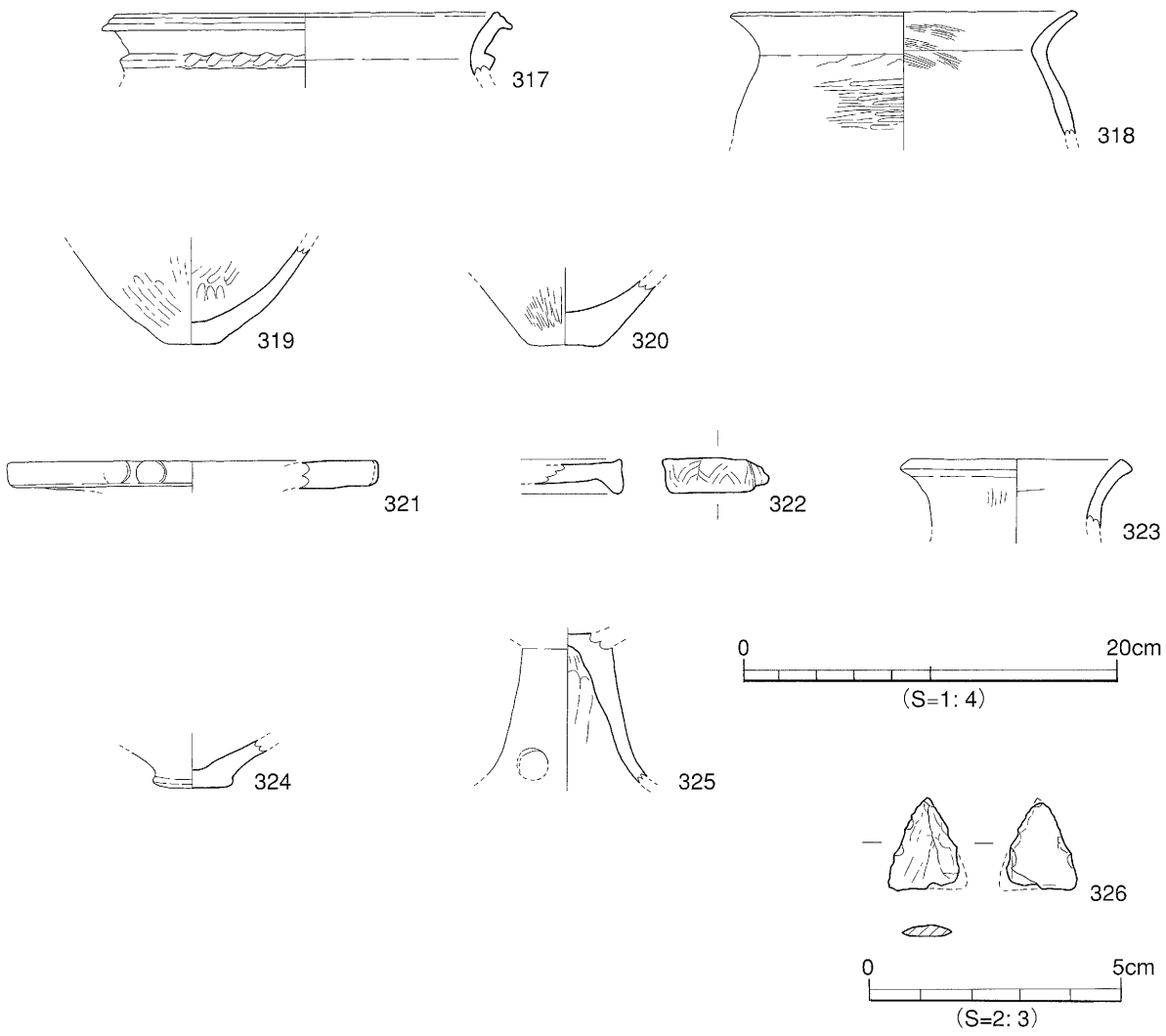
326は残長1.9cm、厚さ0.2cmを測る。材質はサヌカイトである。

時期　出土遺物より弥生時代後期終末には埋没したものと考える。

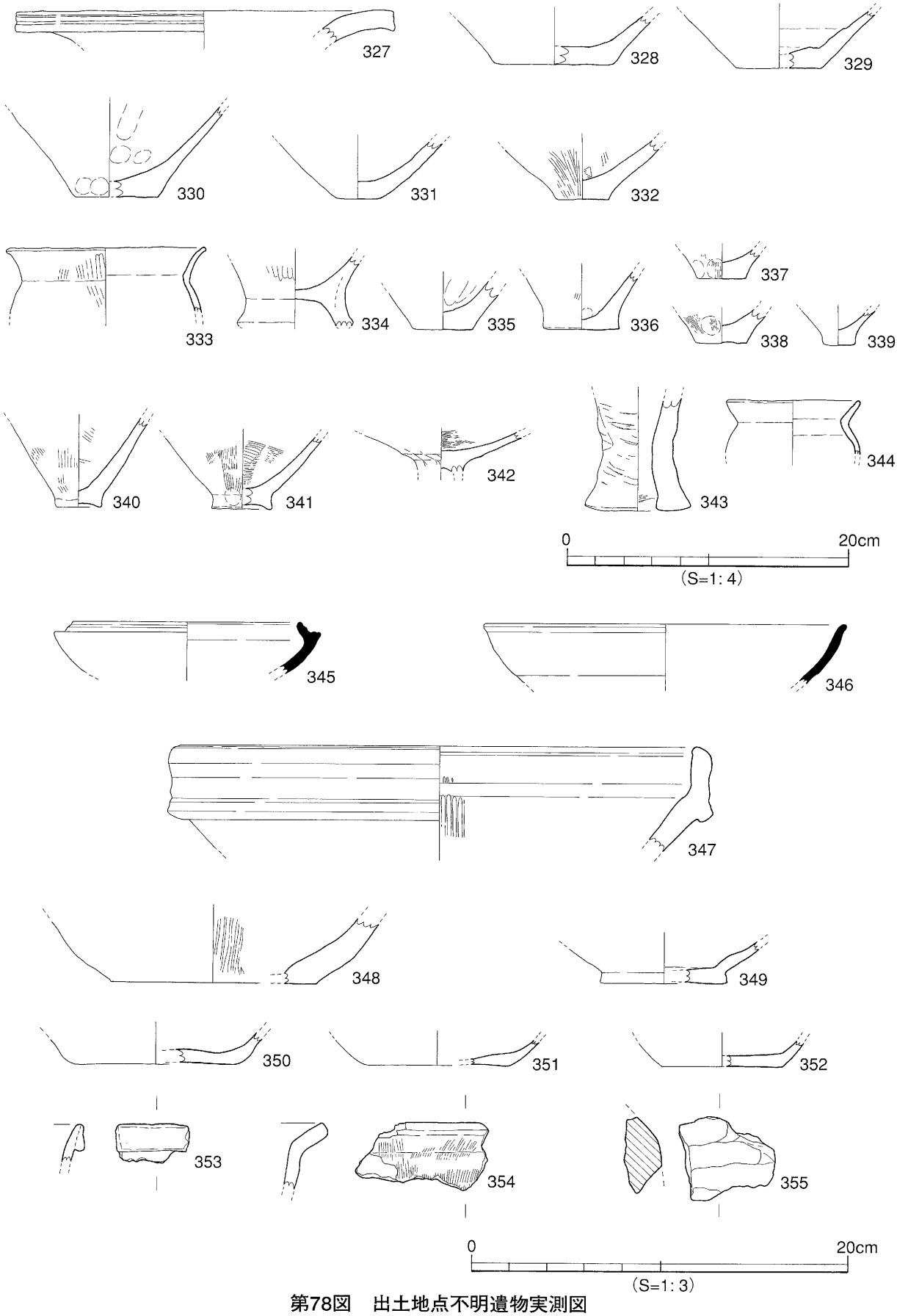
〔4〕その他の遺構と遺物

1）倒木跡（第73図）

本調査区では、12基の倒木跡を検出した。平面形態は、円形と楕円形を呈する。弥生時代の溝であるＳＤ201に切られるものもある。検出規模は160cm～490cmを測る。今回の調査では、半掘を行い土層断面と平面図の測量を行った。さらに倒壊方向が判るものはその方向を記録した。本調査区においては、倒壊方向は東西方向と北方向となり、南方向へ倒壊したものは見られない。遺物は、全ての倒木跡からは出土していない。



第77図　SD201出土遺物実測図



第78図　出土地点不明遺物実測図

２）出土地点不明遺物（第78図）

（１）弥生時代

327～344は主にＳＤ201検出作業時に出土した遺物で、中期後葉～後期後半の遺物が出土している。遺物は、小片が多く器形全体を知れるものがない。

327～332は壺形土器である。327は口縁部片である。口縁部は水平に開く。口縁端部に２条の凹線を施している。328～332は底部片である。333～338は甕形土器である。333の口縁部は外反する。334～341は底部片である。342は高坏の坏部と脚の接合部片である。343は中空の支脚である。受部は欠失している。344は壺形土器である。内湾して立ち上がる胴部から外上方にのびる口縁部である。

（２）古墳時代以降

345～355は主に第Ⅳ層掘削時に出土した遺物である。古墳時代～中世の遺物が出土している。

345は蓋坏の坏身である。立ち上がりは内傾して短くのびる。端部は丸くおさめる。受部は水平に短くのびる。346は須恵器の椀と考えられる口縁部片である推定口径19.0cmを測る。347は備前焼すり鉢の口縁部片である。口縁部は直立して長くのびる。348は備前焼すり鉢の底部片。349～352は土師器坏である。349は底部の切り離しは摩滅のため不明である。350～352は底部片で底部の切り離しは回転糸切りである。353は羽釜の口縁部片である。端部直下に隆帯が貼付される。354は鍋の口縁部片である。外上方に開く口縁部である。口縁端部は面をもつ。355は砥石である。残長6.8cmの小片で、材質は砂岩である。

４．小結

本調査区では弥生時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を確認することができた。また、１区で検出したＡＴ火山灰は本調査区では確認する事はできなかった。

弥生時代：弥生時代の遺構は、後期終末に埋没した考えられる溝ＳＤ201のみであり、本調査区においては弥生時代の遺構は希薄な地帯となっている。

古墳時代：古墳時代の遺構は、前期に比定される土坑１基（ＳＫ211）を検出したのみである、弥生時代と同様に古墳時代の遺構も希薄な地帯といえる。

中世：中世の遺構は、出土遺物や埋土により時期比定できるものに掘立柱建物址１棟、柱穴４基、土坑３基、溝10条がある。

掘立柱建物址は、２間×２間の小規模な建物である。時期は15世紀～16世紀に比定される。

柱穴は、柱穴（ＳＰ2169）の柱痕跡より、完形の土師器皿が１点出土している。出土状況から柱穴内祭祀の一例を示すものと思われる。時期は13世紀～14世紀に比定される。

土坑は、注目するものにＳＫ207がある。土坑底には、大振りの石を敷いて床面としている。土坑埋土内には、木炭層のほか焼土も見られた。この様な検出状況から、ＳＫ207は炭窯と考えられる。時期は15世紀に比定される。

溝（ＳＤ203～ＳＤ212）は南北方向のものが多く、埋土は全て灰色土である。中世の耕作痕跡と考えられる。時期は16世紀に比定される。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表34　掘立201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
296	坏	口径(12.0) 残高　2.1	口縁部片。口端部は丸い。外面はナデによる稜線が明瞭。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色	長(1) ◎		
297	坏	口径(12.3) 残高　2.0	口縁部片。外傾する立ち上がり。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	微砂粒 ◎		

表35　SP2144出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
298	鉢	口径(25.0) 残高　1.6	口縁部片。口縁部外面は、稜をもって内に立ち上がり面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) ◎		

表36　SP2145出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
299	坏	底径　(7.4) 残高　2.6	平底。底部より外傾に立ち上がる。	㊀摩滅のため不明 ㊁回転糸切り	ナデ	灰白色 浅黄橙色	微砂粒 ○		

表37　SP2152出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
300	坏	底径　(5.2) 残高　0.5	平底。底面の回転糸切り痕が顕著である。	㊀ヨコナデ ㊁回転糸切り →板状圧痕	ナデ	橙色	長(1) 黒い石粒 ◎		

表38　SP2169出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
301	皿	口径　8.2 底径　6.0 器高　1.3	平底。外傾する立ち上がり。口縁端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊁回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	長石(1) ◎		36

表39　SK207出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
302	坏	底径 (6.3) 残高 1.2	底部片。内湾気味に立ち上がる。	㈣ヨコナデ ㈤回転糸切り	ヨコナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎		
303	坏	底径 (8.0) 残高 0.8	底部片。内面にナデによる稜線が顕著に見られる。	摩滅の為不明	ヨコナデ	橙色	微砂粒 ◎		
304	青磁 碗	底径 (6.9) 残高 2.0	内面見込み部に櫛目文と花文。底部外面は露胎。	㈣ヨコナデ→施釉 ㈤糸切り	ヨコナデ →施文 →施釉	灰オリーブ色 明オリーブ色	微砂粒 ◎		36

表40　SK207出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
305	釘	完形	鉄製	5.7	0.9	0.6	8.90		

表41　SK208出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
306	皿	口径 7.3 底径 5.5 器高 1.4	内湾気味に立ち上がる口縁。口端部は丸い。	㈡ヨコナデ ㈤回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 ◎		

表42　SK209出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
307	坏	底径 (5.6) 残高 1.9	平高台。底部内面は、強いナデによる稜線が見られる。	㈣ヨコナデ ㈤回転ヘラ切り	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) ◎		
308	羽釜	残高 3.4	口縁部片。直口気味に立ち上がる口縁。口縁部から、やや下がった部分に隆帯が貼付される。。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		

表43　SD203出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
309	坏	口径(10.8) 残高 1.9	口縁部片。内湾気味に立ち上がる。口端部はやや肥厚し丸い。	ナデ	ナデ	浅黄橙色	微砂粒 ◎		
310	羽釜	残高 5.4	羽釜の脚部の一部。	ナデ	———	にぶい黄橙色	長(1~3) 多 ◎		

表44　SD208出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
311	坏	底径 (6.6) 残高 1.0	平底。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
312	坏	底径 (5.4) 残高 2.1	平底。底面の一部が板状圧痕により凸む。	㈣ナデ ㈤静止糸切り (板状圧痕)	ヨコナデ	灰白色	長(1~3) ◎		
313	鉢	口径(23.1) 残高 2.5	東播系こね鉢の口縁部片。外面の口縁端部はやや下方に垂下する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	石・長(細粒) ○		

表45　SD209出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
314	坏	口径(14.3) 残高 2.2	ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(細粒) ◎		

表46　SD212出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
315	坏蓋	口径(13.8) 残高 3.1	口縁部は直立気味に下がる。口端部は尖り気味。	㈦回転ヘラケズリ ㈡回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) 密 ◎		

表47　SK211出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
316	壺	口径 9.0 器高 11.8	やや外傾する口縁。口端部は丸い。丸底。底部に黒斑が見られる。	ナデ (ヘラ状工具痕)	ナデ	浅黄橙色 褐灰色	石・長(1) 多 ◎	黒斑	36

表48　SD201出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
317	甕	口径(22.5) 残高 3.4	外反する口縁部。外下方に垂下した口端部は面をもち、2条の凹線が巡る。頸部に刻み目突帯が施されている。	ナデ →施文	ナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1~3) ◎		36
318	甕	口径(18.0) 残高 6.7	「く」字口縁。口端部はわずかに面をもつ。	(口)ナデ (胴)タタキ →ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		36
319	甕	底径 3.0 残高 5.3	小さな平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	(胴)ヘラミガキ (底)ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
320	甕	底径 3.7 残高 3.6	平底。胴部はほぼストレートに広がる。	(胴)ヘラミガキ (底)ナデ	ナデ	褐灰色	石・長(1~4) ◎		
321	器台	口径(19.2) 残高 1.5	受部片。端部は面をもち、円形浮文が施される。	(口端)ナデ →施文 (口)ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		36
322	器台	残高 1.9	受部片。端部が下方に拡張され、端面に3条の波条文が施される。	(口端)ナデ →施文 (口)ナデ	ナデ	橙色 明褐灰色	石・長(1) ◎		36
323	壺	口径(11.2) 残高 3.7	外反気味に立ち上がる口縁。端部は外方向に拡張される。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(6本/cm)→ナデ	ヨコナデ	橙色	石・長(1~2) ◎		36
324	壺	底径 (4.3) 残高 2.6	底部が突出している。底部より外反気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石(1) 長(1~6) ◎		
325	高坏	残高 8.0	脚部片。円孔が1ヶ所残る。	ハケ(6本/cm) →ヘラミガキ	指ナデ (絞り痕あり)	橙色	石・長(1~4) ◎		

表49　SD201出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
326	石鏃	一部欠損	サヌカイト	(1.9)	1.0	0.2	0.58		36

表50　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
327	壺	口径(26.7) 残高 2.3	ゆるやかに外反し、水平にのびる口縁部。口端部の面に2条の凹線が巡る。	(口端)ナデ →施文 (口)ナデ	ナデ	明赤褐色	石・長(1~4) ◎		
328	壺	底径 (8.5) 残高 3.6	平底。底部より外傾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 多 ○		
329	壺	底径 (6.0) 残高 4.1	平底。底部より外傾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	褐灰色 淡黄色	石(1~3) 長(1~5) ◎		
330	壺	底径 (7.0) 残高 6.5	平底。底部よりストレートに立ち上がる。	(胴)摩滅の為不明 (底)ナデ (指頭痕あり)	ナデ (指頭痕あり)	褐灰色	石・長(1~4) ◎		
331	壺	底径 (3.1) 残高 4.1	丸みをおびた小さな平底。やや内湾気味に立ち上がる。	摩滅の為不明	ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
332	壺	底径 (3.7) 残高 4.2	平底。外面にヘラミガキ痕が顕著に残る。	(胴)ヘラミガキ (底)ナデ	ナデ (板状工具痕)	明褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
333	甕	口径(14.0) 残高 4.7	外反する口縁部。口縁部はわずかに面をもつ。	(口端)ナデ (頸部)ヘラミガキ	ナデ	浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
334	甕	残高 5.0	上底の底部。	ナデ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長(1~6) 多 ◎		

出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
335	甕	底径 4.2 残高 3.5	平底。	ナデ	ナデ (指頭痕あり)	褐灰色 灰白色	長(1~2) ◎		
336	甕	底径 5.2 残高 4.2	わずかに立ち上がりをもつ平底。	㊐ハケ(7本/cm) →ナデ ㊎ナデ	ナデ (指頭痕あり)	橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
337	甕	底径 3.5 残高 2.1	小さい平底。	㊐ハケ(8本/cm) →ナデ(指頭痕) ㊎ナデ	ナデ	赤橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
338	甕	底径 3.6 残高 2.5	平底。	㊐ハケ(12本/cm) →ナデ(指頭痕) ㊎ナデ	ナデ	赤橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
339	鉢	底径 2.3 残高 2.5	突出する小さい平底。	ナデ	ナデ	黄橙色 橙色	石・長(1~3) 多 ○		
340	鉢	底径 (3.2) 残高 6.4	わずかに上底の底部。ストレートに立ち上がる。	㊍ハケ(5本/cm) →ナデ ㊏ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ	浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
341	鉢	底径 (4.2) 残高 5.2	くびれをもつ上底の底部	㊍ハケ(8本/cm) →ナデ(指頭痕) ㊏ナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ◎		
342	高坏	残高 2.9	ゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	浅黄橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
343	支脚	残高 8.1	支脚の脚部片。中空。	タタキ →ナデ	ナデ (絞り痕あり)	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
344	壺	口径 (9.3) 残高 3.8	「く」字状口縁。口端部は丸い。	㊀ヨコナデ ㊐ナデ	ヨコナデ	灰白色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		
345	坏身	口径(12.0) 残高 2.8	立ち上がりは短く、内傾する口縁。受け部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) 密 ◎		
346	椀	口径(19.0) 残高 3.2	内湾気味に立ち上がり、口端部はやや外反し丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) 密 ◎		
347	鉢	底径(27.2) 残高 5.6	備前焼のすり鉢。口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1~4) 密 ◎		
348	鉢	底径(10.9) 残高 3.6	備前焼のすり鉢、平底の底部片。内面に5条の櫛描き条線を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰色	長(1~3) 密 ◎		
349	坏	底径 (6.7) 残高 2.3	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 淡黄色	微砂粒 ◎		
350	坏	底径 (8.8) 残高 1.7	平底。内湾気味に立ち上がる。	㊋ヨコナデ ㊏回転糸切り	ヨコナデ	橙色	長(1) ◎		
351	坏	底径 (7.4) 残高 1.4	平底。内湾気味に立ち上がる。	㊌ヨコナデ ㊏回転糸切り	ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		
352	坏	底径 (6.4) 残高 1.4	平底。	㊍摩滅の為不明 ㊏回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) ◎		
353	羽釜	残高 2.0	口縁部片。口端部直下に隆帯が貼付される。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい橙色	石・長(1~2) 多 ◎		
354	鍋	残高 3.6	稜をもって外傾する口縁。	㊀端ナデ ㊁部ハケ(8本/cm)→ナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		

表51　出土地点不明遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
355	砥石	少片	砂岩	(6.8)	(5.5)	(2.7)	96.65		

第９章

桑原遺跡4次調査地

－３区の調査－

第９章　３区の調査

１．調査の経緯

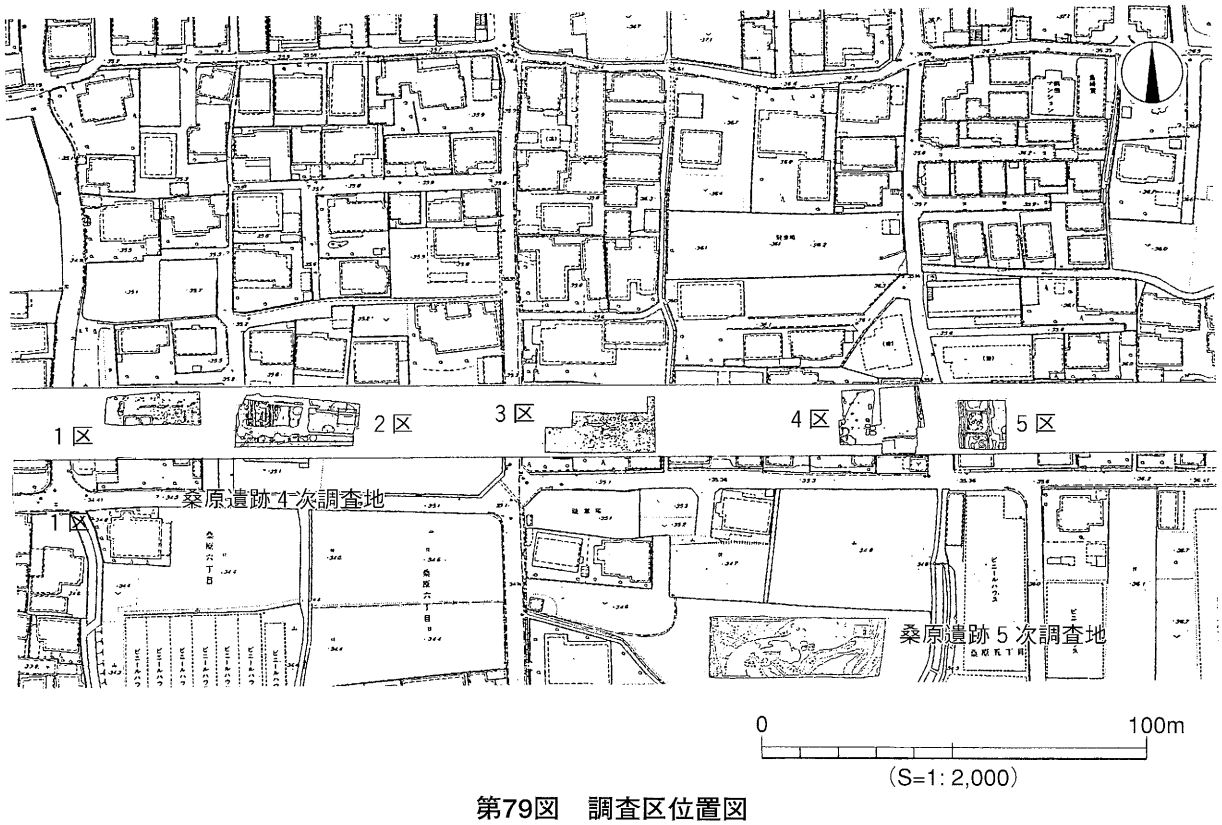
３区は、２区の東、４区の西側に位置し、市道中村桑原線道路改良工事第１工区内における５回目の調査地となる。２区と３区の間は、松山市指定埋蔵文化財包蔵地№83．枝松遺物包含地と同№82．束本遺物包含地の境となる市道桑原52号線が南北方向に延びる。調査区南側は、東西に延びる市道桑原23号線に隣接する。調査区の標高は35.3ｍを測り、調査区の現況は宅地である。なお、旧地権者からの話によれば本調査区が明治初期には既に宅地化されていたことや当時、牛舎が併設されていたということであった。調査地は２区と同様に東西に縦長く、幅21ｍ、長さ35ｍである。対象面積は730㎡であるが、調査地内を安全対策及び排土置き場として２～６ｍ使用したために、調査面積は271㎡となった。

以下、調査工程を略記する。

平成12年９月26日：松山市道路建設課職員の立ち会いのもとに調査地を確認後、第１回目の試掘調査を実施した。数基の土坑が検出され、付近から第109図の管玉（433）が出土した。

平成13年１月17日～19日：立会人のもとに第２回目の試掘調査を実施する。多数の柱穴が確認され、須恵器、土師器、陶磁器が出土した。

４月６日～７日：２日をかけ重機により表土の剥ぎ取りを行う。また、調査区の周りには近隣住宅地へ砂埃が飛散することを防ぐために高さ５ｍのネットを設置した。



第79図　調査区位置図

遺構検出作業は現代層及び現代坑の除去に多くの時間を割いた。遺構検出の結果、大小500基を越える柱穴が確認される。

４月27日：業務委託により調査区内に国土座標軸準拠５ｍメッシュの基準グリッド杭を設定する。グリッド名称は、北から南へＡ、Ｂ、Ｃ・・とし、西から東へ１、２、３・・とする。

５月17日：遺構検出状況の写真撮影を実施する。その後、本格的に遺構の掘り下げや測量を行う。

６月11日：調査区壁の土層を測量を行う。

７月17日：ＳＫ19の測量を行う。

23日～31日：長梅雨による調査工程の遅れを取り戻すべく、遺構の掘り下げ及び測量を急ぐ。

８月７日：調査区内の精査と清掃を行い、遺構完掘の写真撮影を高所作業車を使用して実施。

10日：重機を使用して、調査区東側を深掘りする。作業後、土層図作成及び写真撮影を行う。

13日：愛媛大学の田崎博之教授に調査指導を依頼し、中世期の掘立柱建物跡やＡＴ火山灰について御教示を頂く。

13日～15日：お盆休みのため、通常屋外作業は中断。

16日：安全対策のため、重機を使用して調査区の埋め戻しを実施する。

17日：現場調査を終了する。

８月25日：近隣に位置する桑原遺跡５次調査地と併せて現地説明会を実施する。当調査区の現況は埋め戻しを完了し、更地となっており調査担当者による遺跡解説及び写真パネルと出土遺物の展示のみとした。地域住民及び考古学ファン約70人が見学に訪れる。

２．層位（Ｐ.120：写真、第81図）

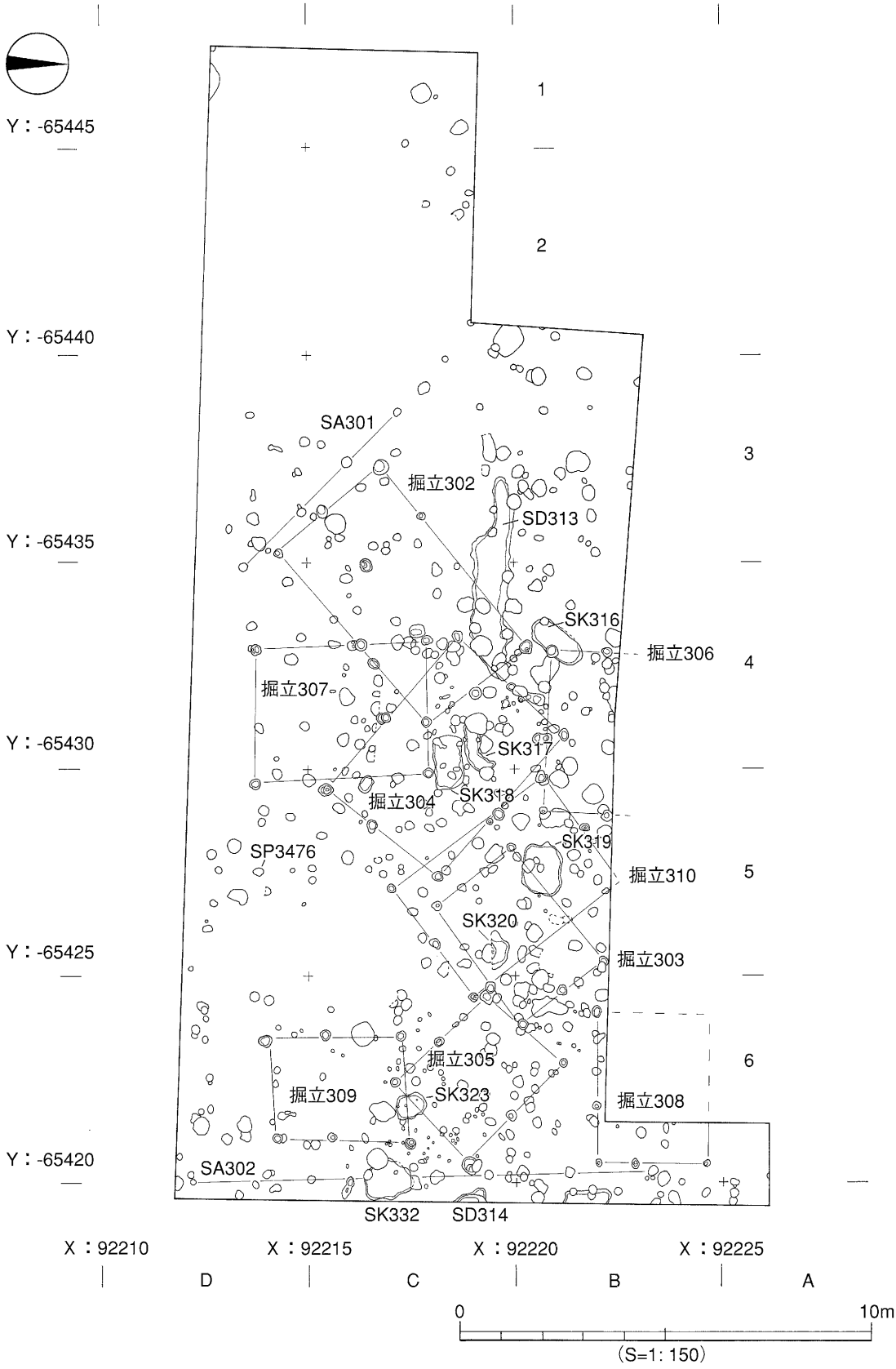
調査区の基本層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層淡黄茶色土、第Ⅴ層緑灰色砂質土（茶色混）、第Ⅵ層黄茶色粘土、第Ⅶ層褐灰色砂礫、第Ⅷ層灰白色微砂、第Ⅸ層緑青色砂礫である。遺構の検出は、第Ⅳ層上面で行った。なお、第Ⅳ層以下から遺物の検出はない。

第Ⅰ層－宅地造成に伴う客土や造成土（真砂土）である。地表下５～43cmまで現代の開発が行われる。

第Ⅱ層－旧耕作土である。厚さ14～43cmを測る。

第Ⅲ層－旧水田床土である。厚さ２～５cmを測る。調査区西側の一部で確認された。

第Ⅳ層－本層は約22,000～25,000年前に南九州の姶良カルデラから噴出した広域テフラ、姶良Ｔｎ火山灰の２次堆積したもので、何らかの作用により調査地外の場所に降下した火山灰が、調査地内に移動して堆積したものと考えられる。1～3mm大の砂の粒子が混入するものを


Y：-65445
Y：-65440
Y：-65435
Y：-65430
Y：-65425
Y：-65420
1
2
3
4
5
6
SA301
掘立302
SD313
SK316
掘立306
掘立307
SK317
SK318
掘立304
SK319
SP3476
掘立310
SK320
掘立303
掘立305
掘立309
SK323
掘立308
SA302
SK332
SD314
X：92210
X：92215
X：92220
X：92225
D
C
B
A
0
10m
(S=1: 150)

第80図　遺構配置図

上層、砂の粒子の混入が殆どないものを下層として分層した。共に色調は黄色を呈する。調査区北東側で部分的に検出し、厚さ５～25cmを測る。

第Ⅴ層－本層は粗粒層と含角礫層が交互に５cm程の平行堆積を繰り返している。

第Ⅵ層－本層は約22,000～25,000年前に南九州の姶良カルデラから噴出した広域テフラ、姶良Ｔｎ火山灰の１次堆積したものと思われる。調査区北東側で部分的に検出し、微弱な土色の違いから２層に分層した。厚さ10～20cmを測る。

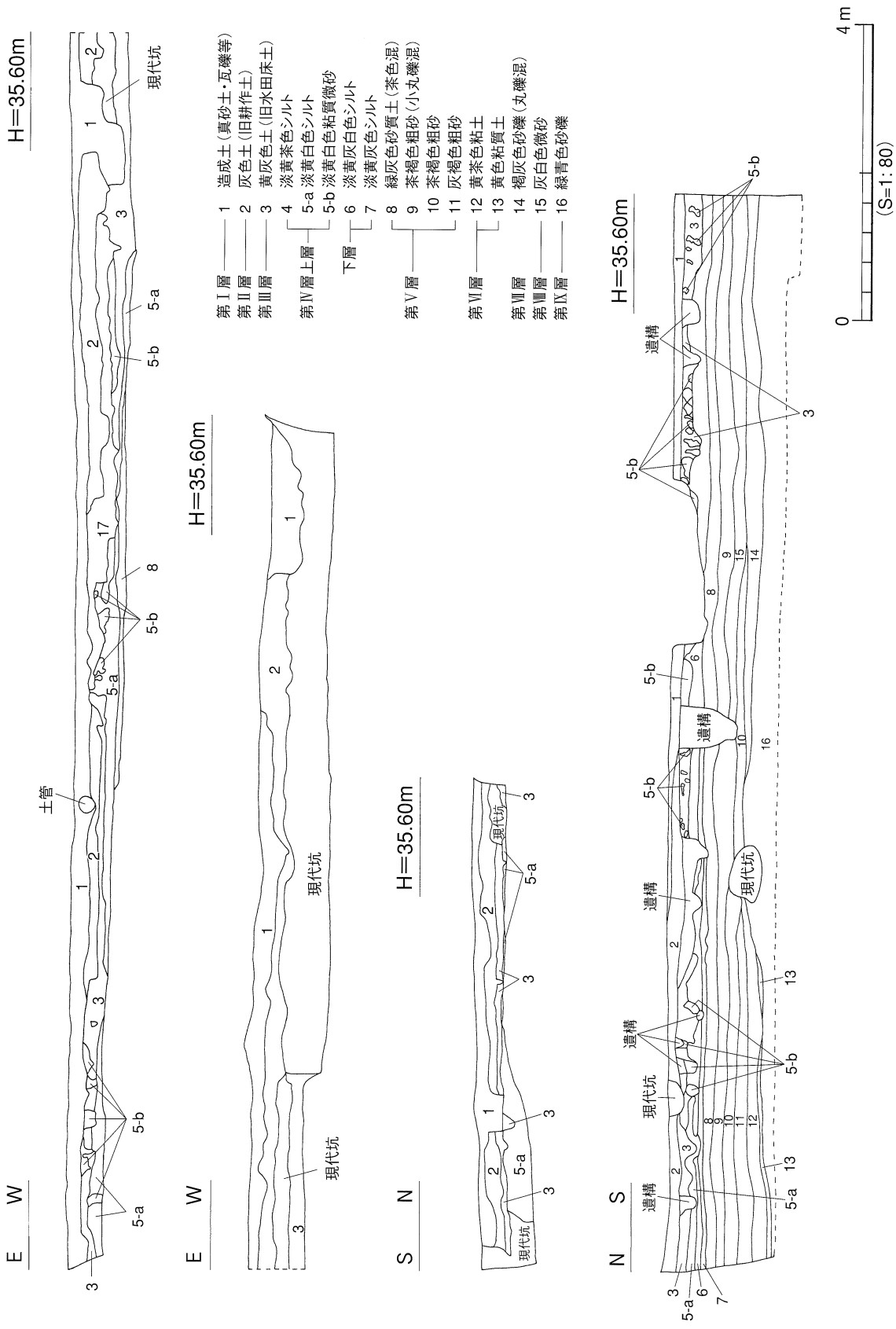
第Ⅶ層－本層は粗砂層と含角礫層が交互に15cm程の平行堆積を繰り返している。

第Ⅷ層－本層は厚さ約20cmを測る。粘性が殆どない微砂質層である。

第Ⅸ層－旧石手川の砂礫層である。拳大の円礫を含む粗砂礫層で、厚さ約50cm位まで確認した。色調は緑青色を呈する。

〔参考文献〕宮内慎一　1996　「層位」『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』　松山市文化財調査報告書54
株式会社　古環境研究所　1996「自然科学分析　Ⅰ.東本遺跡４次調査の土層とテフラ」『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』　松山市文化財調査報告書54

北壁土層（南より）



第81図　南壁・西壁・東壁土層図

3．遺構と遺物

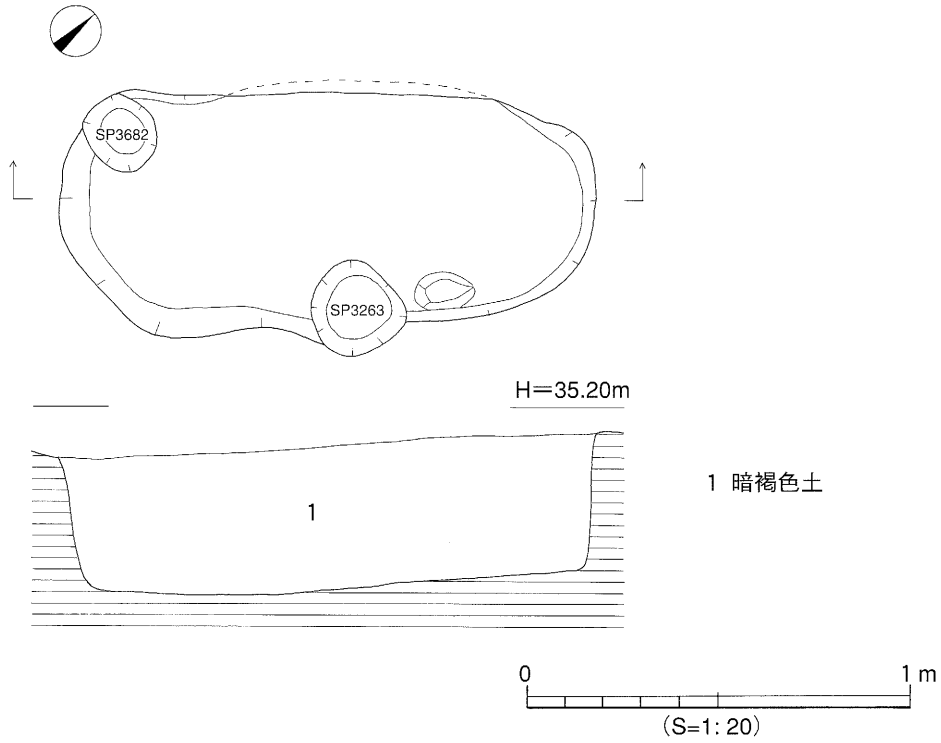
3区の調査では、弥生時代後期後葉、中世～近現代の遺構や遺物を確認した。弥生時代後期後葉の遺構には、土坑1基（ＳＫ316）がある。中・近世の遺構には、掘立柱建物址9棟（ＳＢ302～310）、掘立柱柵列2条（ＳＡ301・302）、土坑22基（ＳＫ313～315、317～335）、溝3条（ＳＤ313～315）、柱穴527基（ＳＰ3170～3697）を検出している。

〔1〕弥生時代

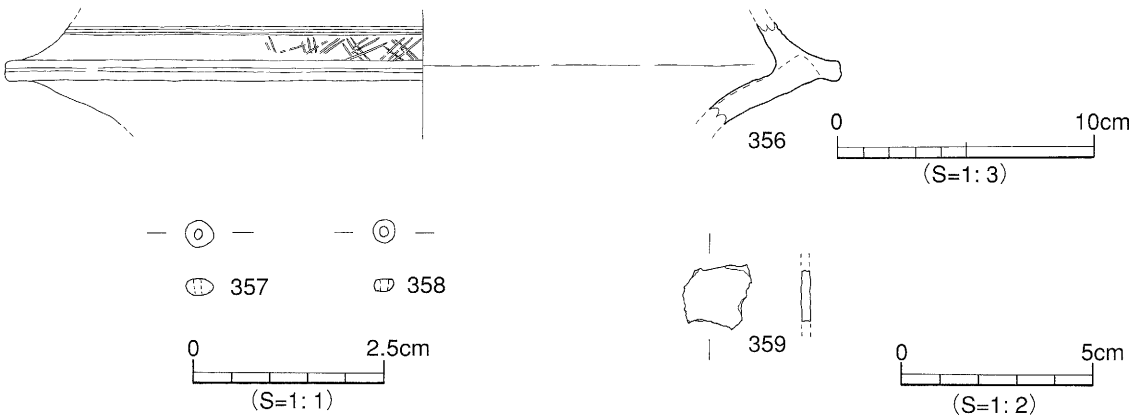
1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ316（第82図、図版38-1）

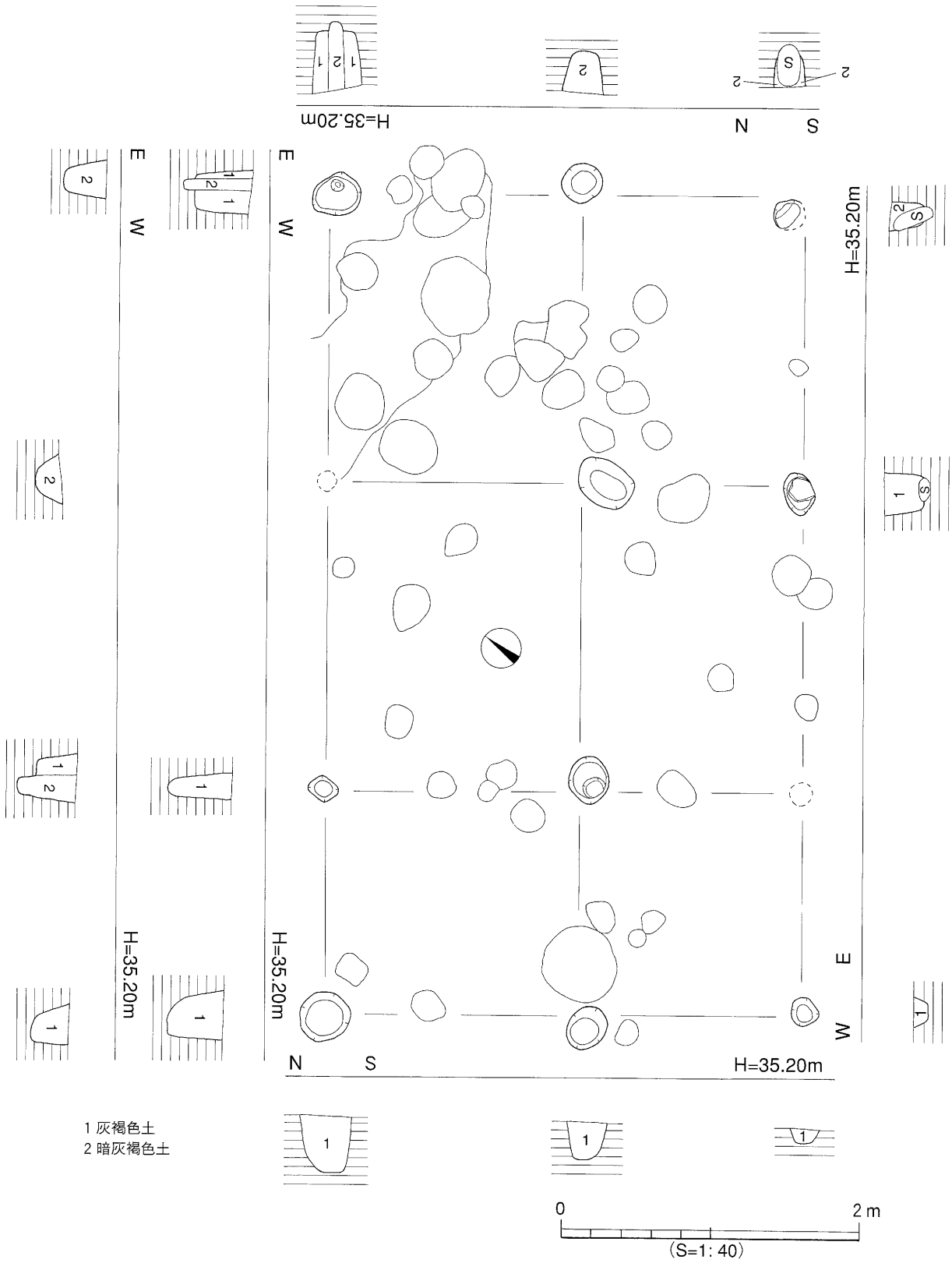
調査区中央部のＢ4区に位置する。ＳＰ3263、ＳＰ3682に切られる。平面形は長楕円を呈し、長軸



第82図　SK316測量図

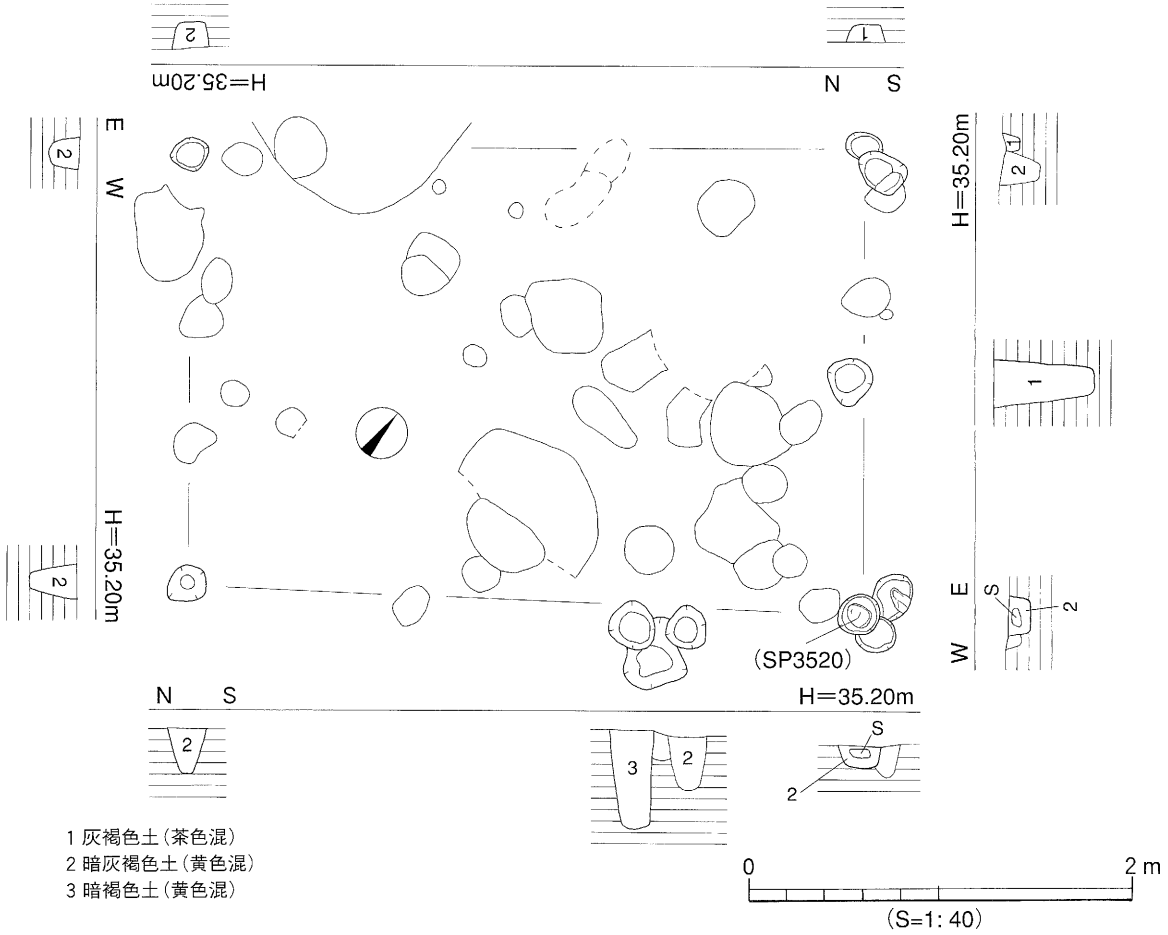


第83図　SK316出土遺物実測図

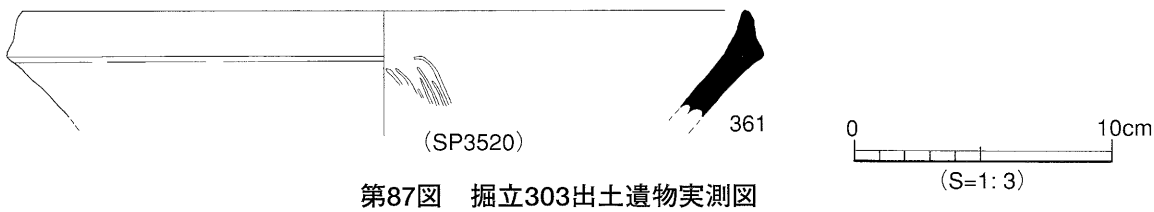


第84図　掘立302測量図

第85図　掘立302出土遺物実測図



第86図　掘立303測量図



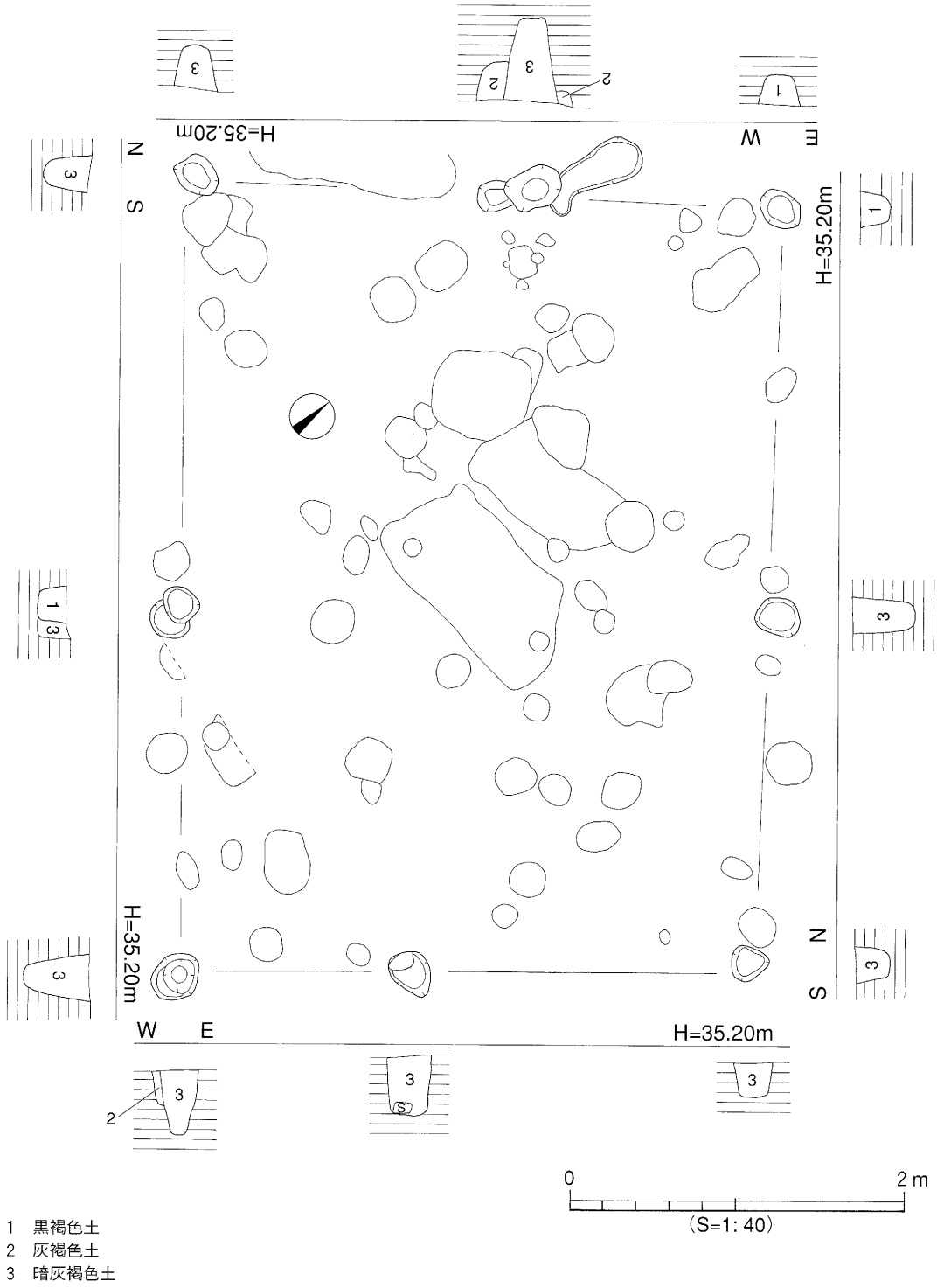
第87図　掘立303出土遺物実測図

142cm、短軸72cm、深さ38cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物（第83図、図版40）

356は複合口縁壺の口縁拡張部である。口縁接合部は端面に1条の沈線が施され、タガ状に仕上げられる。拡張部外面には上から2条以上の沈線、その下に斜格子紋が施される。接合は断面観察より緩やかに外反する口縁部上方端に拡張部下方端が載せられる方法を採っている。357・358は共に完形のガラス製小玉である。色調は紺色、青色を呈す。359は四角形状の鉄片である。

時期　出土遺物から弥生時代後期後葉とする。

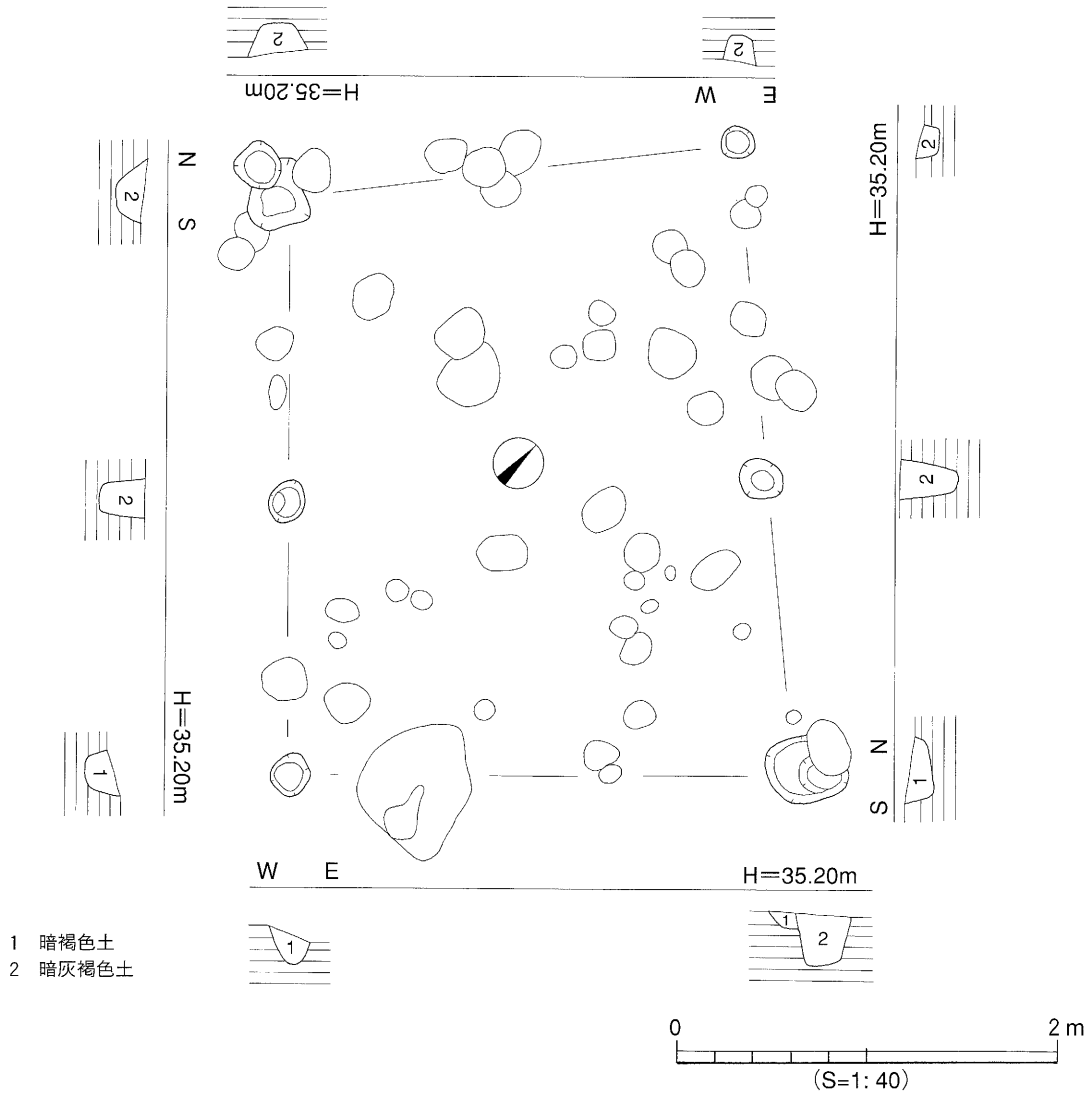


第88図　掘立304測量図

〔２〕中世以降

１）掘立柱建物址（掘立）

本次調査区内からは、500基以上の柱穴（小穴）が検出された。配置関係から考える限りの掘立柱建物を復元し、それらを構成する小穴群の埋土や深さを検討し、掘立柱建物址９棟（掘立302～310）



第89図　掘立305測量図

を確定した。なお、柱穴内からの出土遺物は少ない上に、細片がほとんどである。

掘立302（第84図）

調査区中央部のＣ３・４区に位置する。梁行２間、桁行３間の総柱建物である。柱穴は10基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が3.2ｍ、桁行の全長が5.6ｍ、床面積17.92㎡である。桁行軸線は、真北から50度東へ振る。柱穴の平面形態は円形・楕円形である。柱穴の規模は、径14～40cm、深さ９～49cmを測る。埋土は灰褐色土及び暗灰褐色土を呈する。柱穴内からは土師質土器の羽釜・杯の小片が出土している。

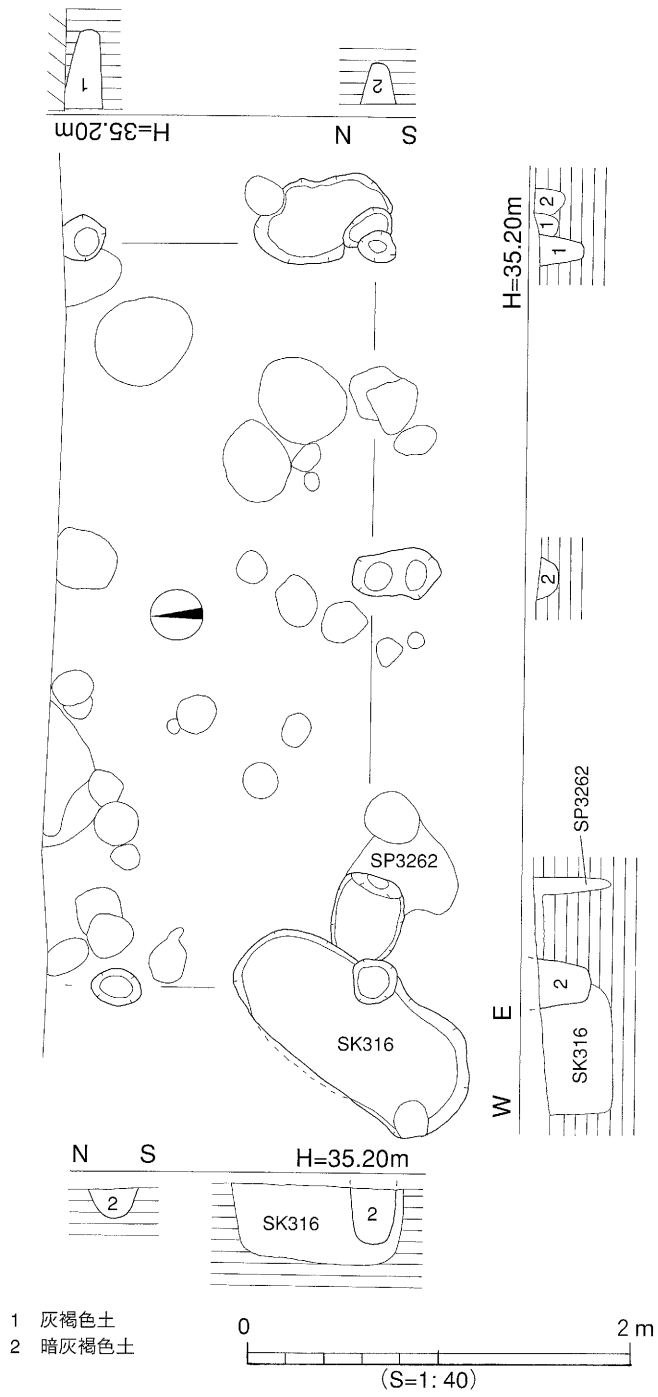
出土遺物（第85図）

360は口縁が内傾する土師質土器の羽釜（鍔部）である。色調は灰白色を呈し、調整は内外面共にナデられている。破断面に残存する粘土紐痕から外面に三足脚が付いていた可能性がある。

時期　出土遺物から14世紀後半以降と考える。

掘立303（第86図）

調査区中央部のＢ５・Ｃ５区に位置する。梁行２間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は７基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が2.4ｍ、桁行の全長が3.5ｍ、床面積8.4㎡である。桁行軸線は、真北から52度東へ振る。柱穴の平面形態は円形・楕円形で、規模は、径14～26cm、深さ９～54cmを測る。埋土は灰褐色土、暗灰褐色土、暗褐色土を呈する。柱穴内からは土師質土器の羽釜、備前焼のすり鉢の小片が出土している。



第90図　掘立306測量図

出土遺物（第87図）

361はＳＰ3520から出土した備前焼すり鉢の口縁部である。備前焼特有の酸化炎焼成による赤茶褐色の焼色は、上下斜めに拡張された口縁外面付近のみで看取される。他は内外面共に青灰色を呈す。内外面共に櫛目状のナデ調整が施される。内面には調整後に施された７本のすり目が残る。

時期　出土遺物より14世紀後半以降と考えられる。

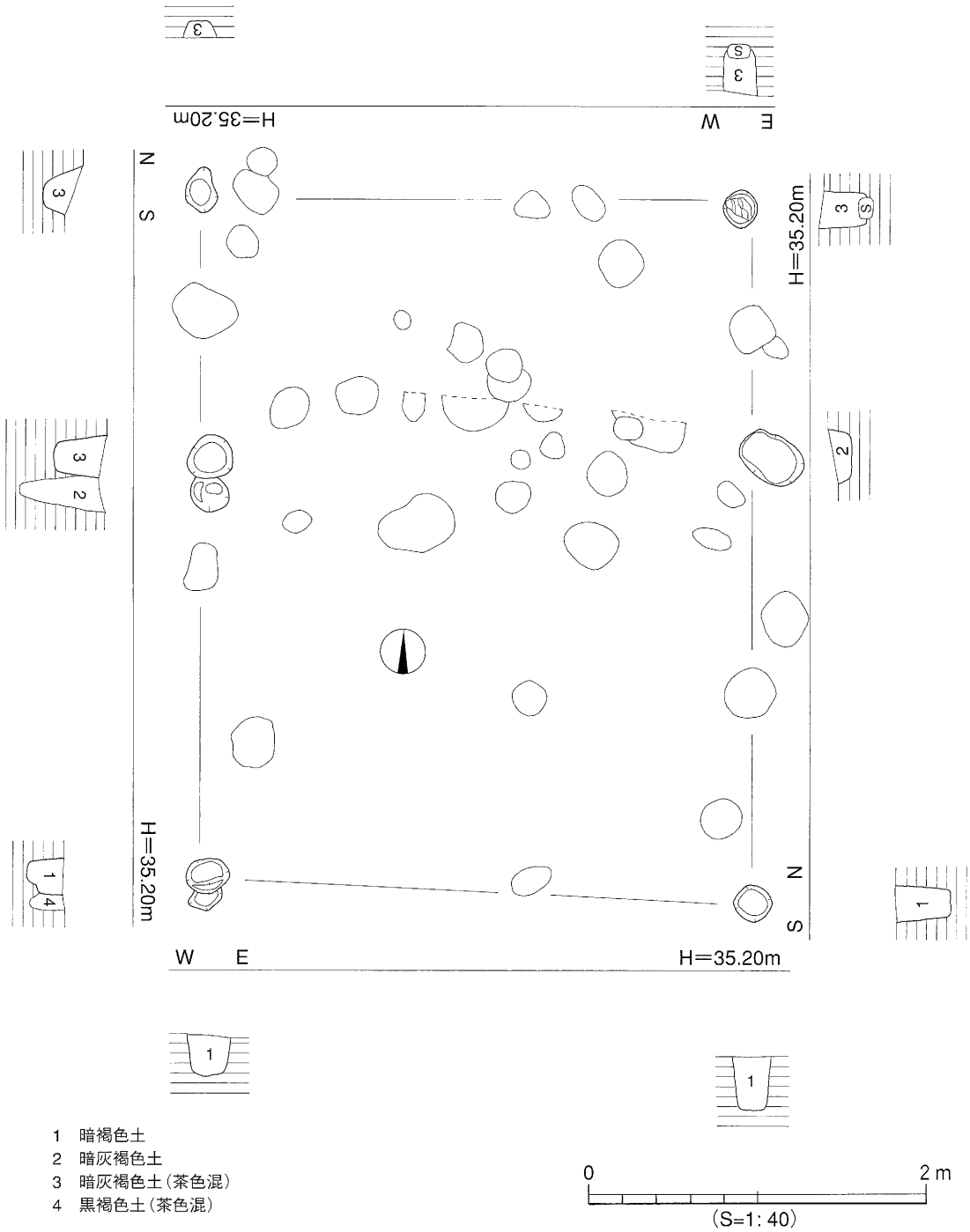
掘立304（第88図）

調査区中央部Ｃ４・Ｃ５区に位置する。梁行２間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は８基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が3.6ｍ、桁行の全長が4.7ｍ、床面積16.92㎡である。桁行軸線は、真北から48度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・楕円形である。柱穴の規模は、径16～31cm、深さ19～40cmを測る。埋土は黒褐色土及び灰褐色土、暗灰褐色土を呈する。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物と柱穴埋土から中世以降と考える。

掘立305（第89図）

調査区中央部のＢ６・Ｃ６区に位置する。梁行２間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は６基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が2.5ｍ、桁行の全長が3.2ｍ、床面積8㎡である。桁行軸線

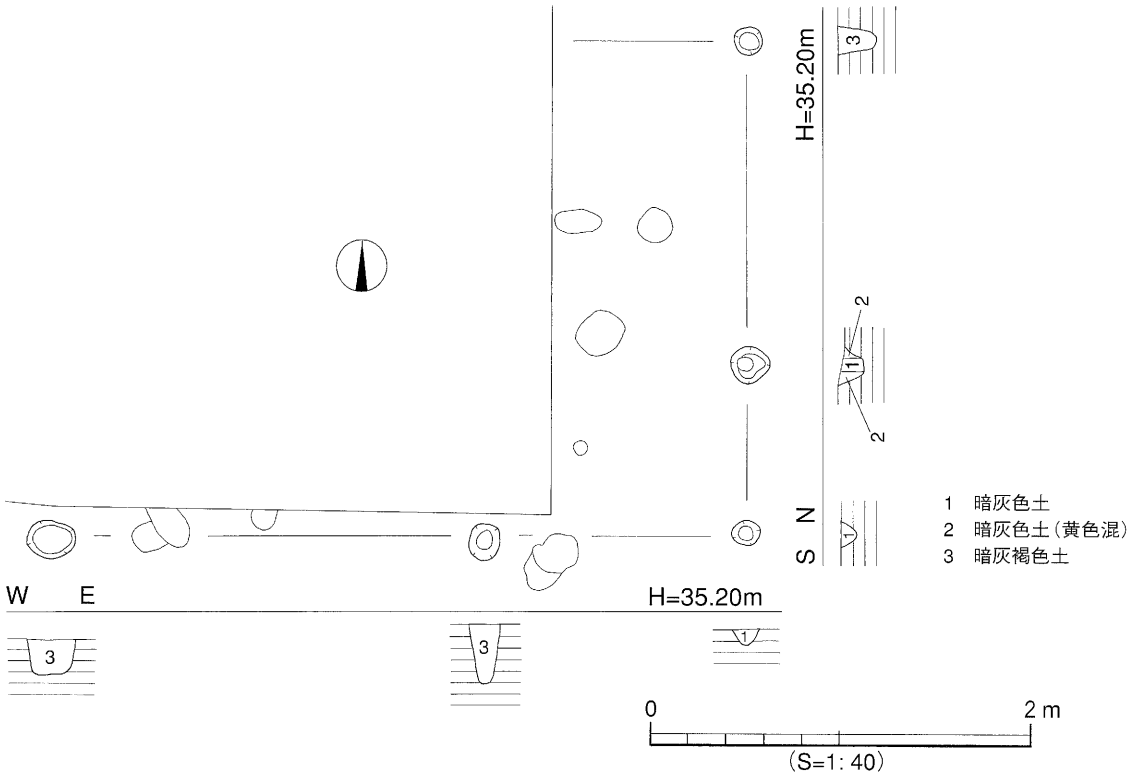


第91図　掘立307測量図

は、真北から西へ45度振る。柱穴の平面形態は円形・楕円形である。柱穴の規模は、径15～37cm、深さ13～35cmを測る。埋土は暗褐色土と暗灰褐色土である。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

掘立306（第90図）



第92図　掘立308測量図

調査区中央部のＢ４・Ｂ５区に位置する。梁行(１＋α)間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は５基を確認している。建物の検出規模は、梁行の全長が1.7ｍ、桁行の全長が4.0ｍ、床面積6.8㎡以上である。桁行軸線は、真北から88度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・楕円形である。柱穴の規模は、径18～40cm、深さ12～43cmを測る。埋土は灰褐色土と暗灰褐色土である。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

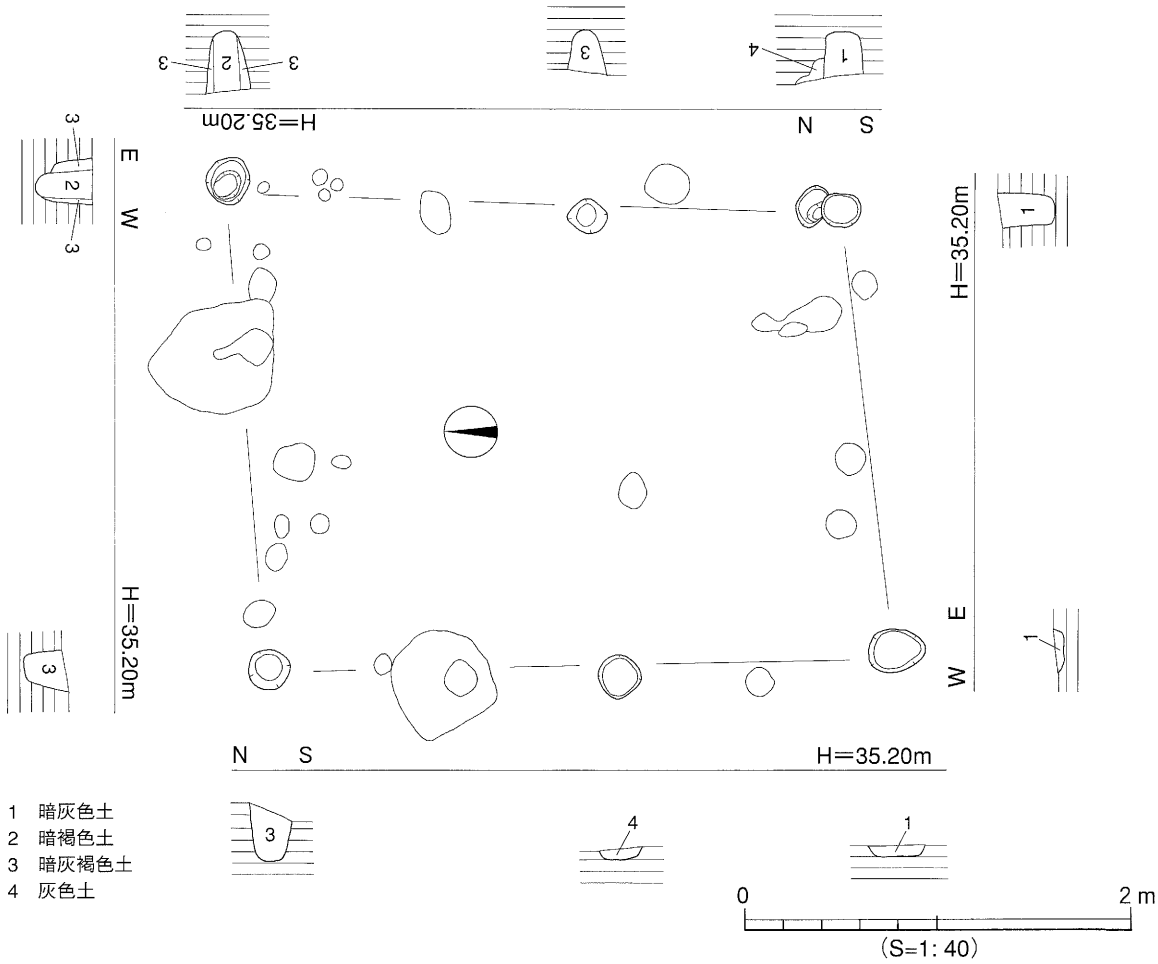
掘立307（第91図）

調査区中央部のＣ４・Ｄ４区に位置する。梁行１間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は６基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が3.0ｍ、桁行の全長が4.2ｍ、床面積7.2㎡である。桁行軸線は、真北から90度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・方形である。柱穴の規模は、径19～37cm、深さ18～49cmを測る。埋土は暗褐色土、暗灰褐色土、暗灰褐色土（茶色混）、黒褐色土（茶色混）である。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

掘立308（第92図）

調査区中央部のＢ６区に位置する。梁行２間、桁行(２＋α)間の側柱建物である。柱穴は５基を確認している。建物の検出規模は、梁行の全長が2.7ｍ、桁行の全長が3.6ｍ、床面積9.72㎡以上である。桁行軸線は、真北から90度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・方形である。柱穴の規模は、径12～24cm、深さ８～32cmを測る。埋土は暗灰色土、暗灰色土（黄色混）、暗灰褐色土である。柱穴内からは図



第93図　掘立309測量図

化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

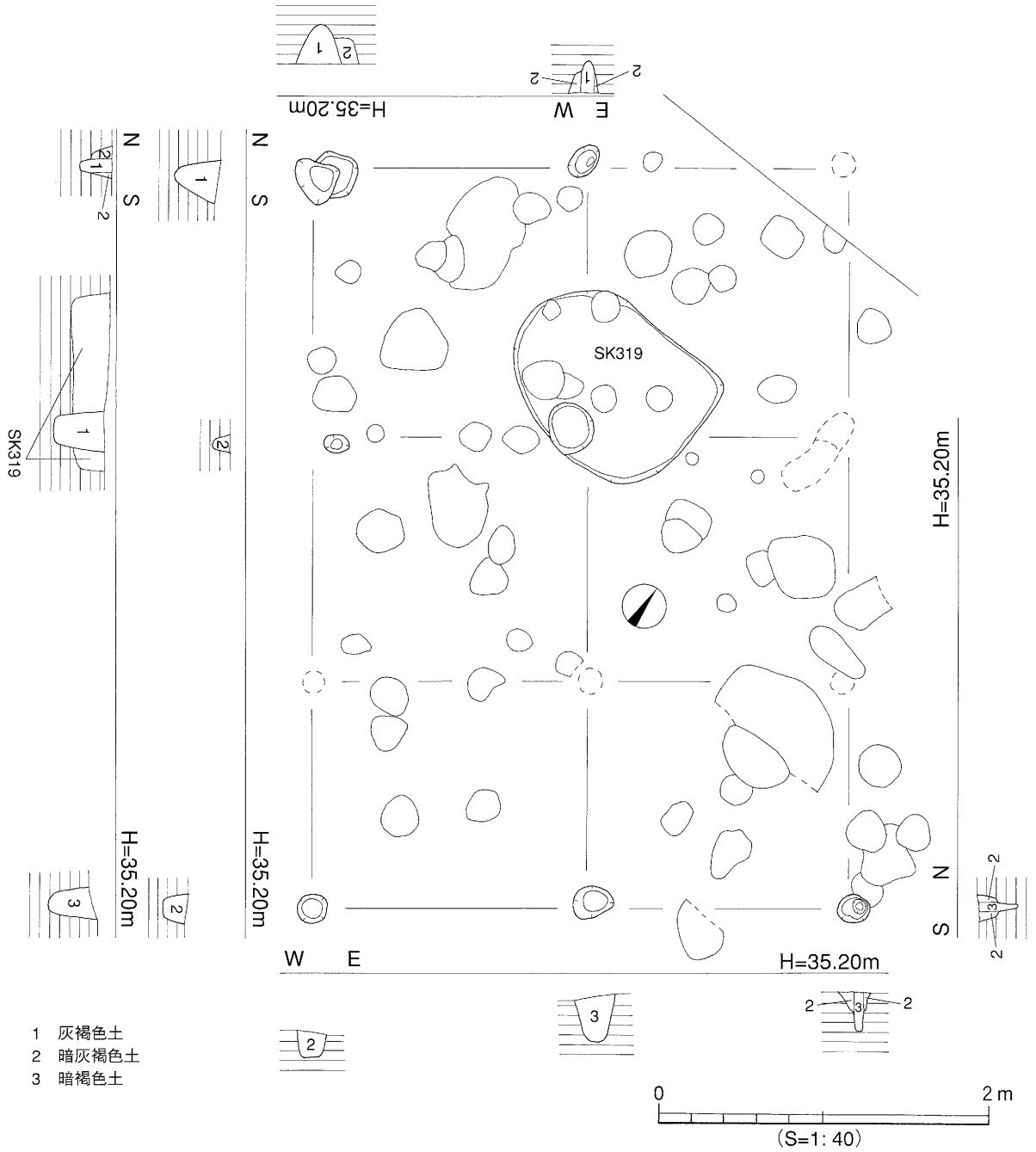
掘立309（第93図）

調査区中央部のＣ６・Ｄ６区に位置する。梁行１間、桁行２間の側柱建物である。柱穴は６基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が2.4ｍ、桁行の全長が3.3ｍ、床面積7.92㎡である。桁行軸線は、真北から３度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・方形である。柱穴の規模は、径20～40cm、深さ６～31cmを測る。埋土は暗灰色土、暗褐色土、暗灰褐色土、灰色土である。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

掘立310（第94図）

調査区中央部のＢ５・Ｃ５区に位置する。梁行２間、桁行３間の総柱建物である。柱穴は８基を確認している。建物の規模は、梁行の全長が3.2ｍ、桁行の全長が4.7ｍ、床面積15.04㎡である。桁行軸線は、真北から36度西へ振る。柱穴の平面形態は円形・方形である。柱穴の規模は、径12～32cm、深さ10～28cmを測る。埋土は灰褐色土、暗灰褐色土、暗褐色土である。柱穴内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。



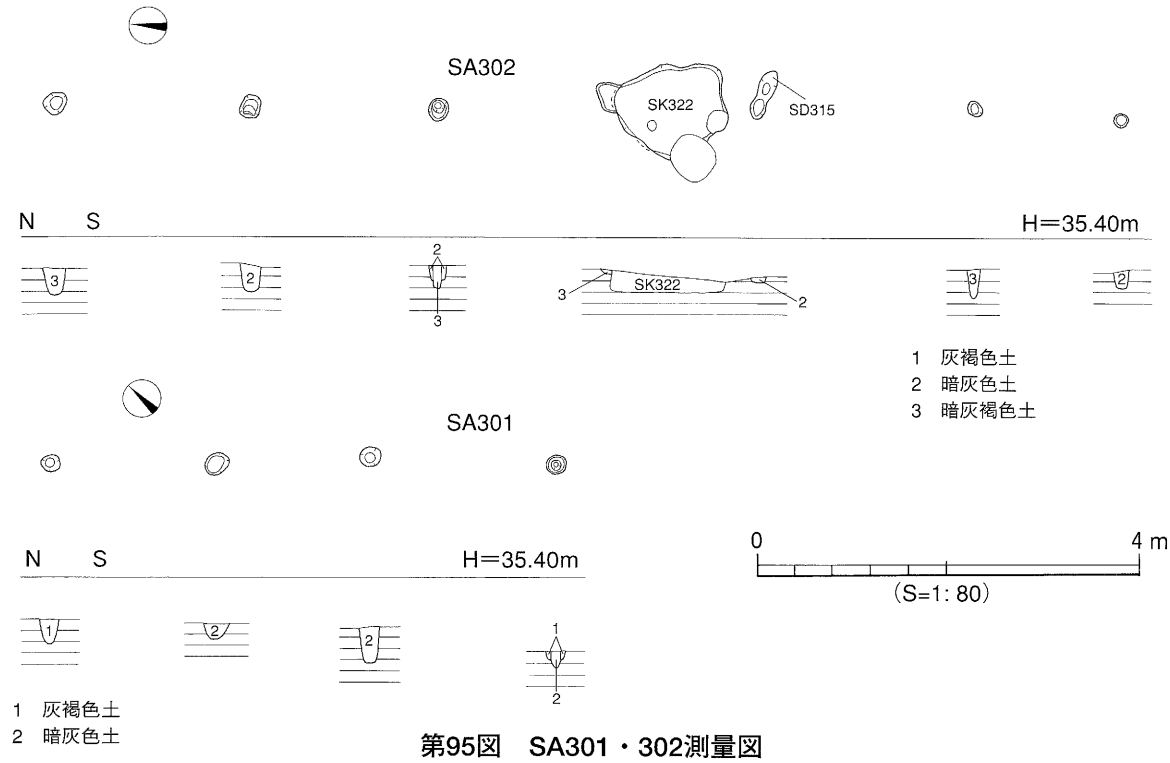
第94図　掘立310測量図

時期　出土遺物及び柱穴埋土から中世以降と考える。

2）掘立柱柵列（ＳＡ）

ＳＡ301（第95図）

調査区南西部のＣ３～Ｄ４に位置する。検出規模は北西から南東方向に5.4ｍを測る。柱間は1.7～2.0ｍを測る。柱穴の平面形は円形である。埋土は灰褐色土及び暗灰色土である。



第95図　SA301・302測量図

時期　柱穴埋土から中世以降と考える。

ＳＡ302（第95図）

調査区南西部のＢ６～Ｄ７に位置する。検出規模は南北方向に６間11.3ｍを測る。柱間は1.5～2.0ｍを測る。柱穴の平面形は円形である。埋土は灰褐色土、暗灰色土、暗灰褐色土である。柱穴内からは図化できない弥生土器の小片が出土している。

時期　出土遺物に弥生土器があるものの、柱穴埋土が中世期に位置付けられる他の遺構埋土に似ていることから中世以降と考える。

３）土坑（ＳＫ）

ＳＫ317（第96図）

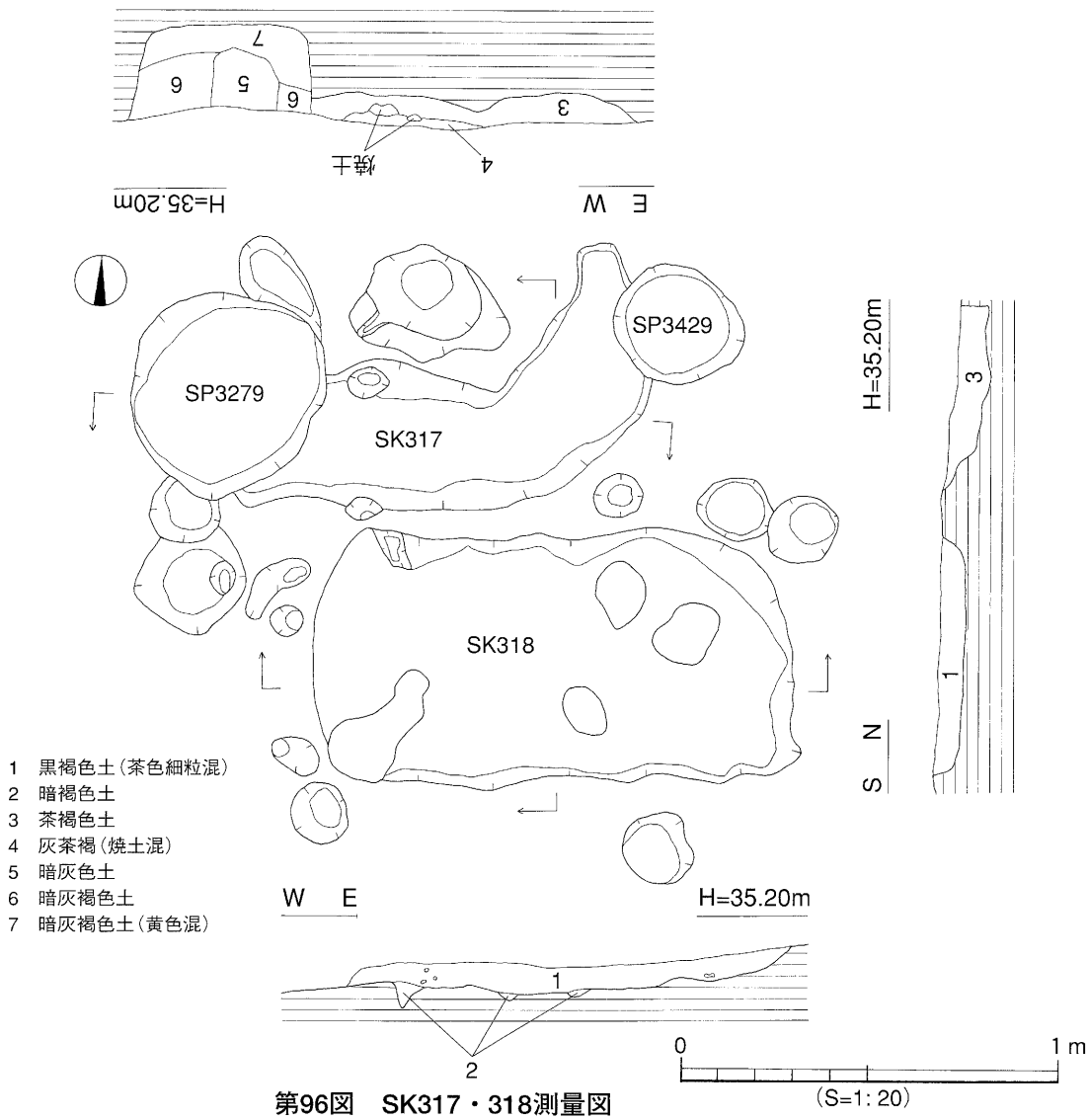
調査区中央部のＣ４区に位置する。ＳＰ3279・3429と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整な長楕円形を呈し、長軸113cm、短軸32cm、深さ９cmを測る。埋土は焼土が混入した茶褐色土である。土坑内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物、遺構埋土及び重複関係から中世と考える。

ＳＫ318（第96図）

調査区中央部のＣ４区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸124cm、短軸64cm、深さ11cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は検出されていない。

時期　時期不明。ただし、遺構埋土から弥生時代以降の可能性がある。



第96図　SK317・318測量図

ＳＫ319（第97図、図版32-2）

調査区北側のＢ５区に位置する。ＳＰ3379～3381・3672と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形を呈し、長軸126cm、短軸92cm、深さ20cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

出土遺物（第98図）

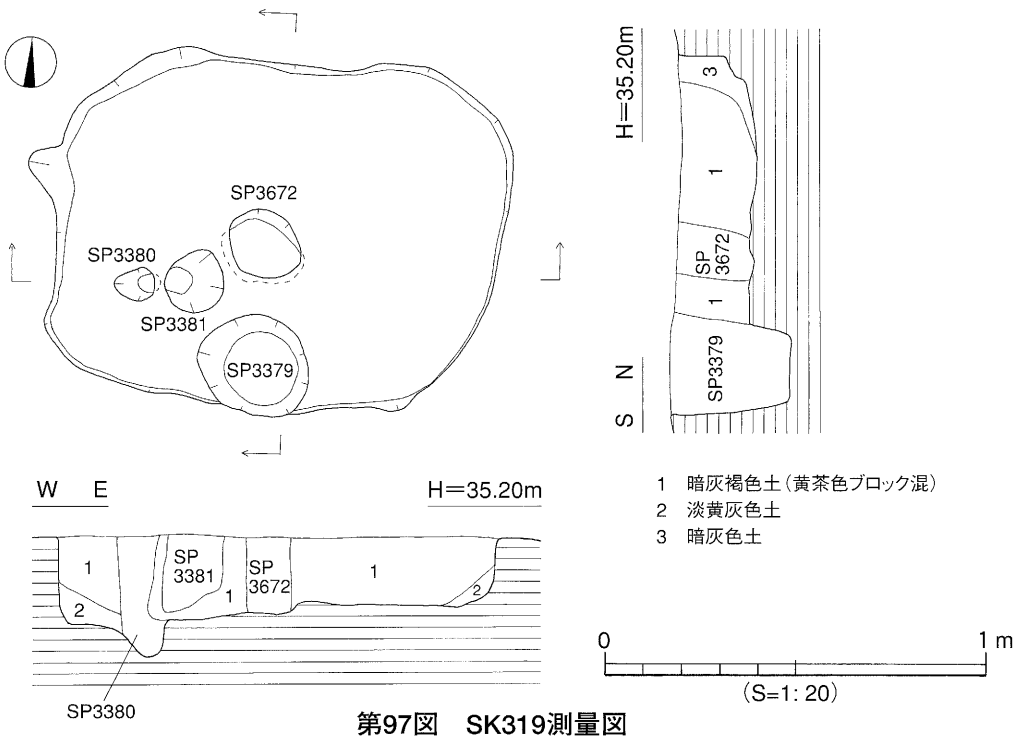
362は土師質土器の杯である。平底から直線的に立ち上がる胴部をなす。外底に回転糸切りの切り離し痕が僅かに看取される。

時期　出土遺物より14世紀後半と考える。

ＳＫ320（第99図）

調査区東側のＣ５区に位置する。ＳＰ3677及び現代坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は円形を呈し、長軸95.0cm、短軸42.0cm、深さ14.0cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。土坑内からは図化できない土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物、遺構埋土及び重複関係から中世と考える。



第97図　SK319測量図

第98図　SK319出土遺物実測図

ＳＫ322（第99図）

調査区東端のＣ６・７区に位置する。ＳＰ3608と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形を呈し、長軸118cm、短軸180cm、深さ22cmを測る。埋土のベースは暗灰色土である。

出土遺物（第100図）

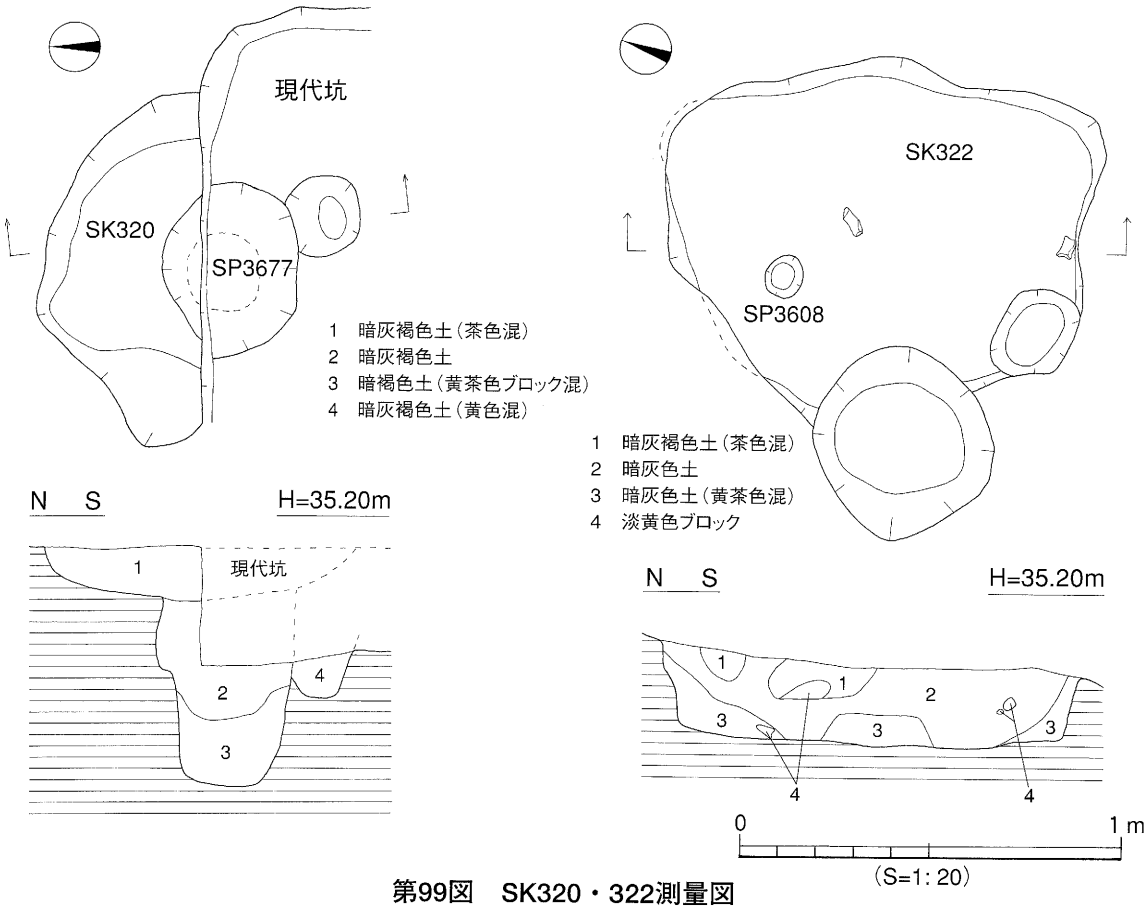
363は弥生時代後期の壺頸部である。色調は内外面共に明赤褐色を呈し、焼成は良好である。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目調整が施される。その後、ナデによる丁寧な仕上げがなされている。頸部にはヘラ状工具による羽状紋タイプの刻目を施した凸帯が貼り付けられる。まず左上方から右下方へ刻みを入れ、その後凸帯上部を押さえ付けるように右上方から左下方へ短く刻みが施されている。364・365は土師質土器の三足付羽釜（口縁部）で、口縁直下に断面三角形のタガが貼り付けられる。外面には煤が付着する。366・367は土師質土器杯である。底部切り離し技法は共に回転糸切りである。366の底部には糸切り痕の他に、細い棒状工具による「起し痕」及び板目状の圧痕が残る。色調はにぶい橙色で砂の混じりは少ない。焼成は極めて良好である。368は鉄滓。重量は14.29ｇを測る。

時期　363は混入品。368は時期不明。他の出土遺物より14世紀後半と考える。

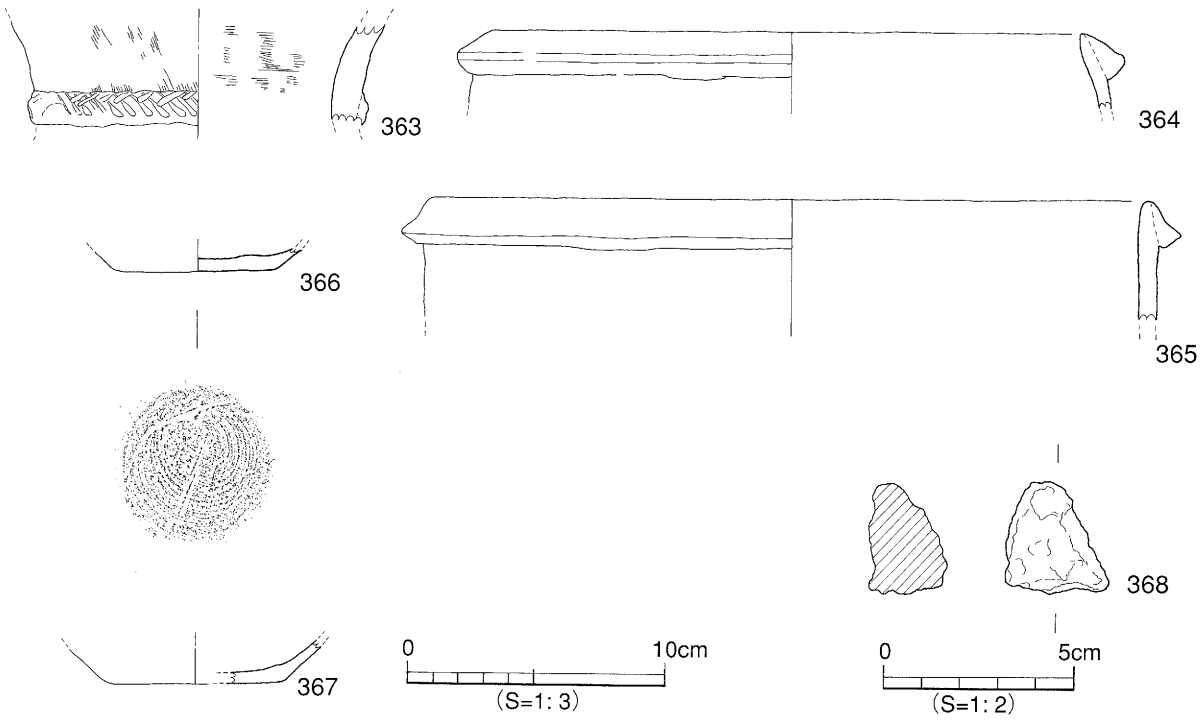
ＳＫ323（第101図）

調査区東側のＣ６区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸72cm、短軸50cm、深さ21cmを測る。埋土のベースは暗褐色土で焼土が混じる。遺構内からは４基の小穴が検出されている。

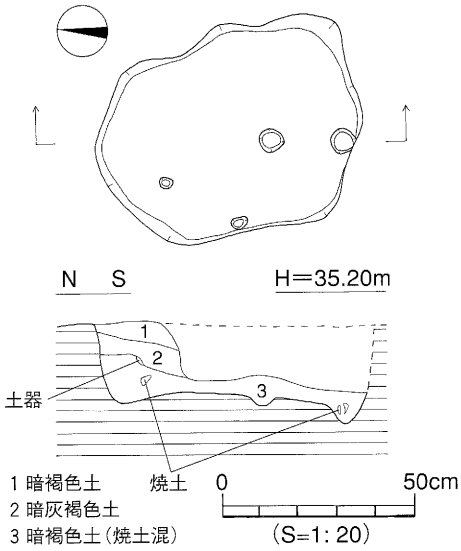
出土遺物（第102図）



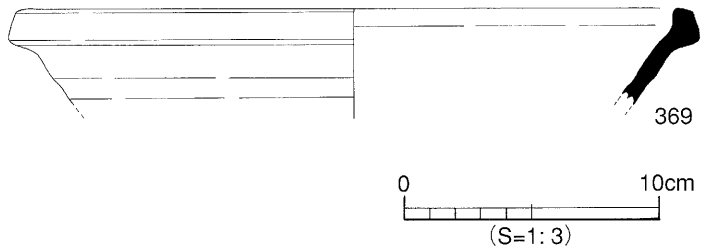
第99図　SK320・322測量図



第100図　SK322出土遺物実測図



第101図　SK323測量図



第102図　SK323出土遺物実測図

369は東播系中世須恵器のこね鉢である。口縁端部は玉縁状に肥厚される。胴部内外面には回転ナデ成形による凹凸がみられる。焼成は軟質である。

時期　出土遺物より14世紀と考える。

３）溝（ＳＤ）

ＳＤ313（第80図）

調査区中央部のＣ３・４に位置する。規模は検出長5.00ｍ、幅0.98ｍ、深さ0.10ｍを測る。埋土は暗灰茶褐色土である。

出土遺物（第103図、図版40）

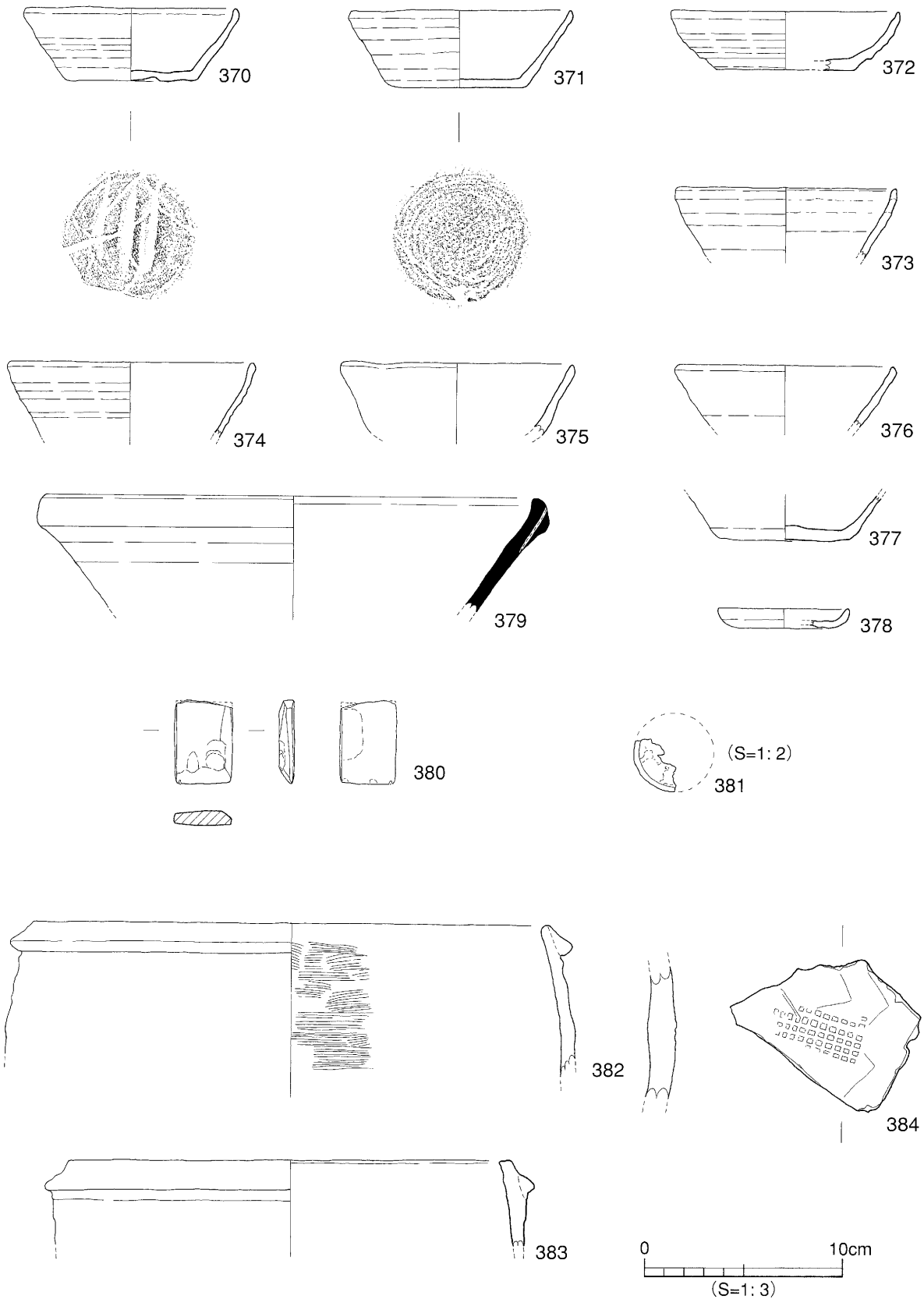
370～377は土師質土器の杯である。370・371は平底から直線的に外傾する体部をもつ。口縁部にはヨコナデ調整を仕上げ段階に施すため、口縁下に弱い稜がつく。底部切り離し技法は共に回転糸切りである。370には板状圧痕を看取する。372は平底から緩やかに内湾する体部をなす身の浅い杯である。強いヨコナデ調整によって外面に数条の稜が残る。377の底部には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。378は土師質土器の皿である。379は東播系中世須恵器のこね鉢で、底部から直線的に斜め上方へのびる口縁体部片。肥厚される口縁端部内側は僅かに凹む。また体部にはロクロ調整痕が顕著に残る。380は全長4.20cm、幅2.90cm、厚さ0.75cm、重さ17.7gを測るほぼ完形の扁平片刃石斧である。長方形状に周縁を研磨し、片面より刃付けを行っている。石材は白色凝灰岩系を用いている。381は判読不明の古銭である。推定銭径は2.7cmを測る。

時期　出土遺物より14世紀後半と考える。

ＳＤ314（第80図）

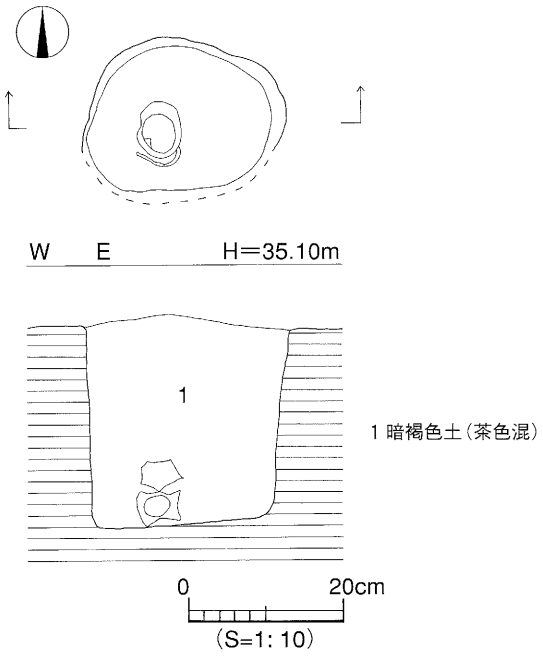
調査区東端のＣ７に位置する。規模は検出長67.0cm、幅20.0cm、深さ50.9cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。

出土遺物（第103図）

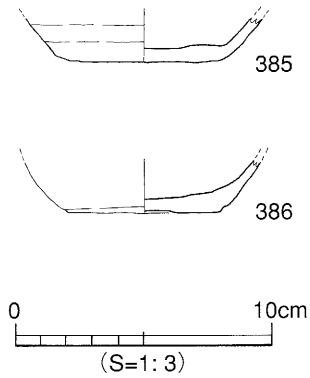


370～381　SD313出土
382～384　SD314出土

第103図　SD313・314出土遺物実測図



第104図　SP3476測量図



第105図　SP3476出土遺物実測図

382・383は土師質土器の三足付羽釜（口縁部）である。382は口唇部に接して断面三角形状のタガが貼り付けられ、外面には煤が付着する。383は口縁端部から若干下がった位置に断面三角形状のタガが貼り付けられ、内外面に煤が付着する。384は須恵器系甕の胴部片。外面にはスタンプ的な格子叩きが施される。内面は板状工具痕と指頭圧痕が残り、粗い仕上げになっている。色調は外面灰黄色、内面赤褐色を呈す。

時期　出土遺物より14世紀後半と考える。

４）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ3476（第104図、図版39-1）

調査区南側のＢ５区に位置する。平面形は円形を呈し、長軸26.0cm、短軸19.0cm、深さ28.0cmを測る。柱痕跡を検出した。柱穴埋土は暗褐色土で、柱痕埋土は暗褐色土に茶色土が混入する。遺物は柱痕跡内より出土した。

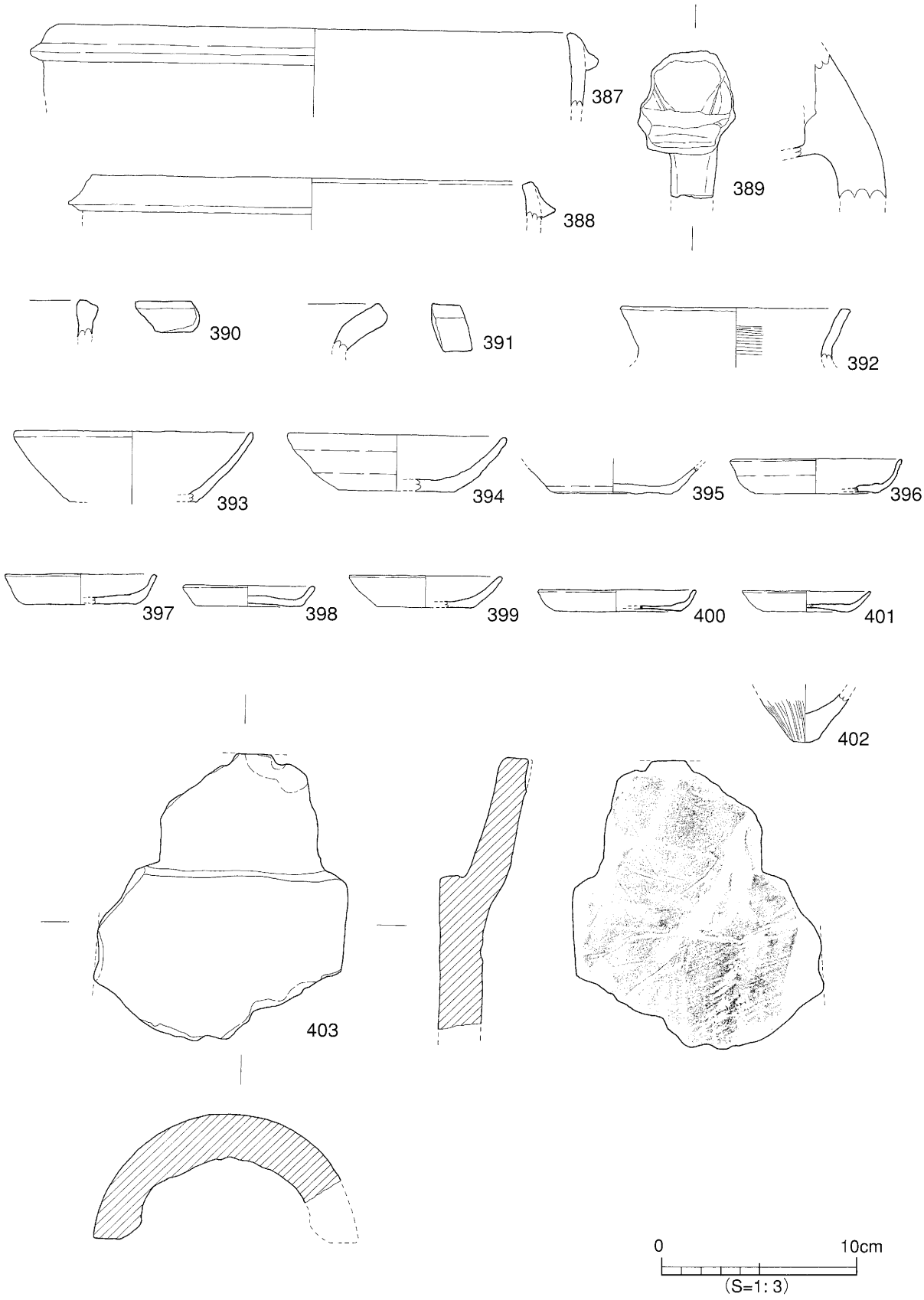
出土遺物（第105図）

385・386は土師器の杯である。385は平底から直線的に立ち上がる胴部をなす。底部の切り離し技法は回転糸切りによる。386は底部から僅かに内反して立ち上がる胴部をなす。底部は回転糸切りの後にナデ調整が施される。

時期　出土遺物より14世紀後半と考える。

他のＳＰ 出土遺物（第106・107図）

土製品　387～391、393～401は土師質土器である。387・388は三足付羽釜の口縁部、389は脚部である。387・388は口唇部に接して断面三角形のタガが貼り付けられる。389の外面には煤が付着する。390は羽釜の口縁端部である。391は鍋である。393～395は杯である。396～401は皿である。392は土師



第106図　SP出土遺物実測図（1）

器甕の口縁部である。402は小型鉢である。極めて丸底に近い平底を呈する。外面に明瞭なハケ目調整が施される。弥生時代後期末に位置づけられるものである。403は瓦質の玉縁式丸瓦である。凹面には斜め方向の緩弧線（コビキ痕）、布目痕、吊り紐痕が残る。凸面の調整はナデ・ミガキによるものか。端面・側面はヘラ切り。

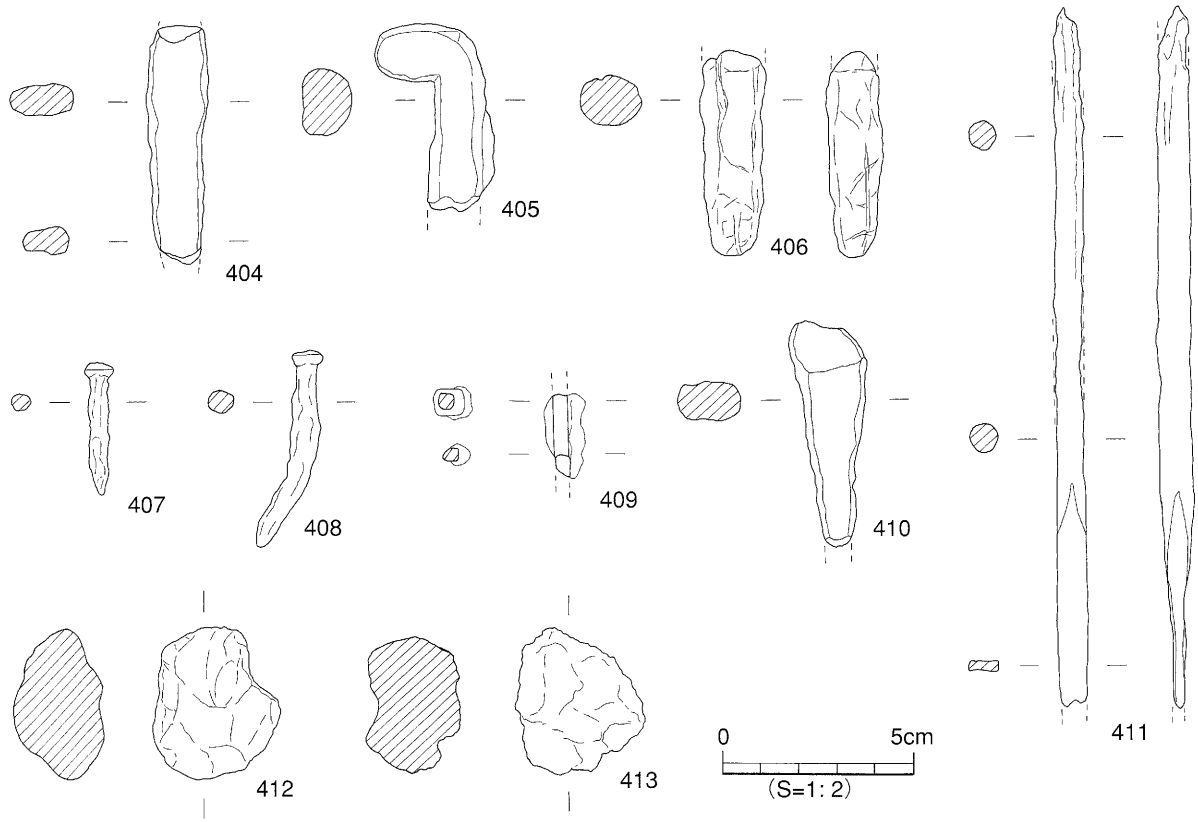
鉄製品　404～410は鉄製の釘である。411は鉄製不明品で、何らかの工具と思われる。412・413は鉄滓。

５）グリッド出土遺物

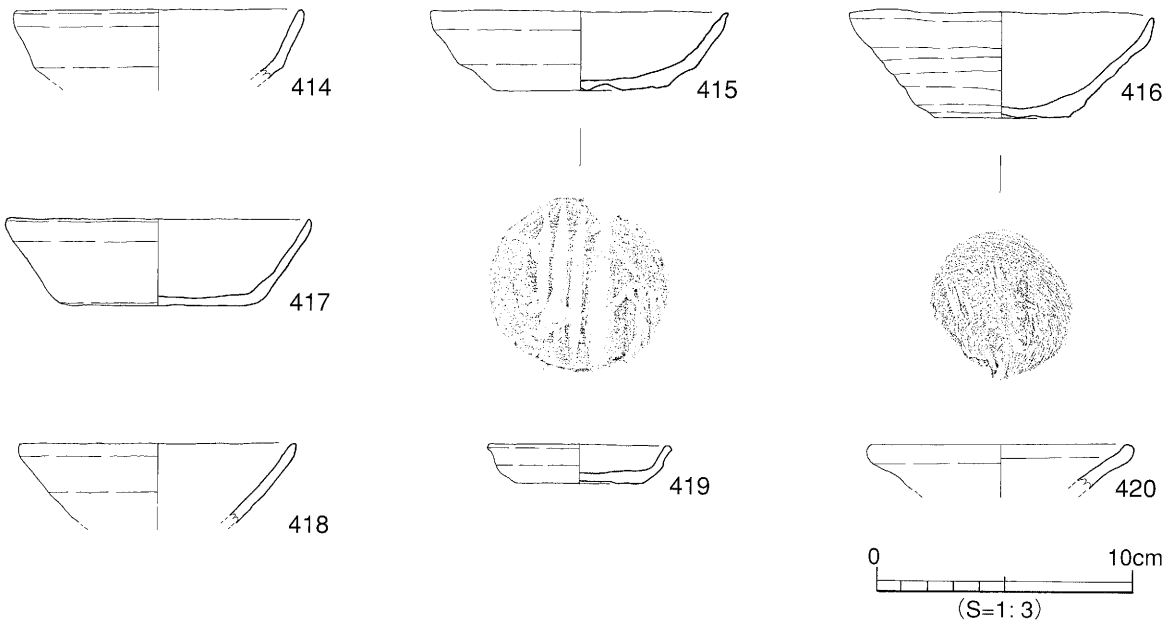
Ｃ３グリッド・Ｃ４グリッドの遺構検出時に出土したものである。

出土遺物（第108図）

414.415.419.420はＣ３グリッド、416～418はＣ４グリッドで出土した。414～418は土師質土器の杯である。414は口縁部片。415～417は復元完形品。415の底部は径6.9cmを測る平底で、回転糸切り痕後の著しい板状圧痕が看取される。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。416の底部は径5.3cmを測る平底で、明瞭な回転糸切り痕が残る。板状圧痕も僅かに看取できる。底部から直線的に立ち上がる体部には調整時のナデにより段が生じている。口縁端部は細く仕上げられる。417の底部は径7.8cmを測る平底を呈し、切り離し技法は回転糸切りによる。色調は乳白色である。419は土師質土器皿の復元完形品である。底部外面には回転糸切り痕が残る。腰部が若干張り、口縁部はやや外反気味に開く。420は唐津系（17世紀前半）の陶器皿である。口縁端部の内面は回転ナデ調整により僅かに凹む。



第107図　SP出土遺物実測図（2）



第108図　グリッド出土遺物実測図

内外面共に施された釉薬は灰釉で黄灰色を呈する。

〔3〕出土地点不明遺物

試掘調査時と重機による表土掘削時及びグリッド設定前に出土した土器である。

出土遺物（第109～111図）

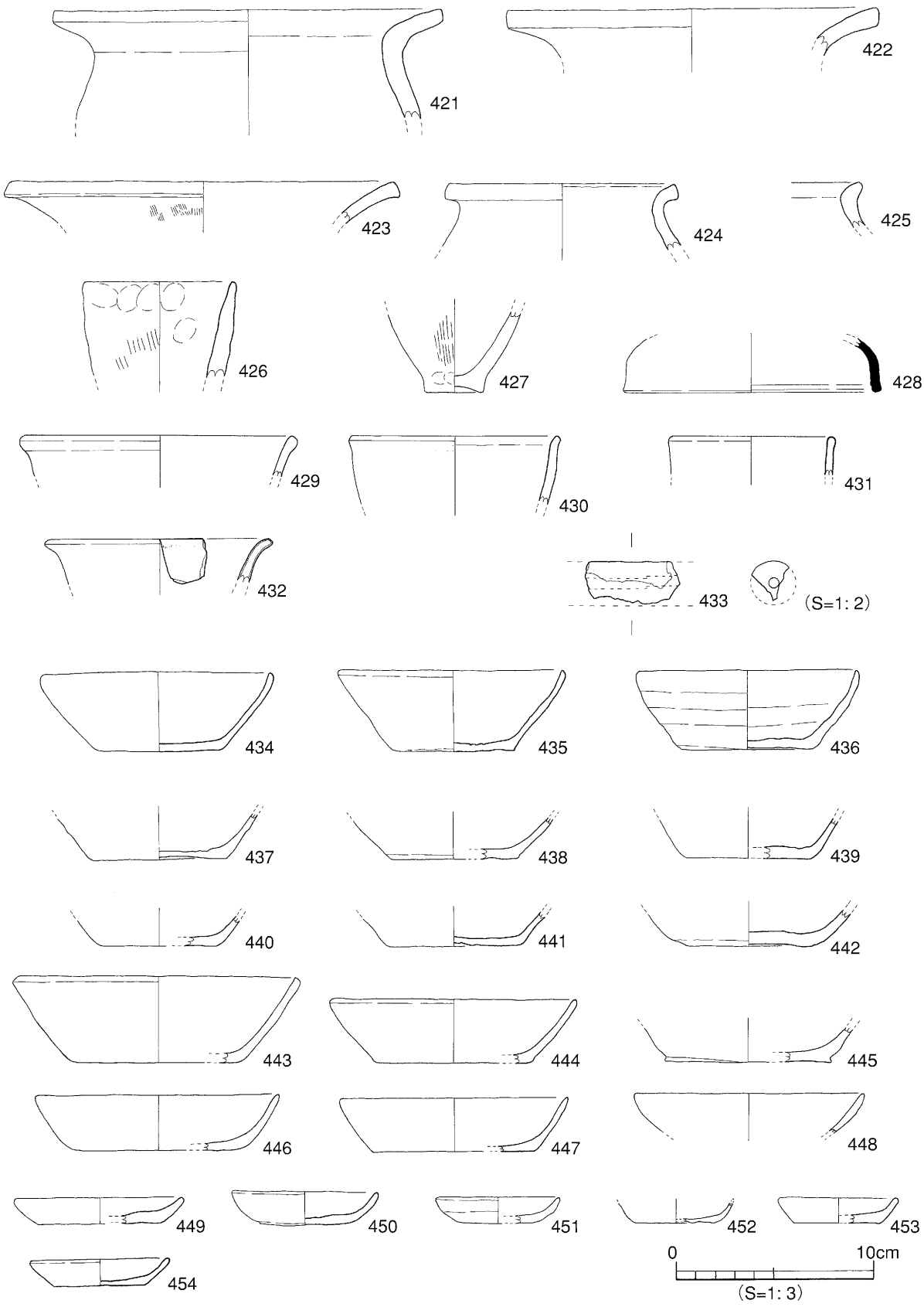
421～427は弥生土器である。428は須恵器で短頸壺の蓋である。6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。429～432は陶磁器である。429・432は15世紀代に位置づけられる青磁碗。430は国産陶磁器碗。口縁外面に2条の鉄釉が線状に巡る。全体の施釉は透明釉である。431は18世紀代の京焼系碗。433は碧玉製の管玉。欠損品ながら重量6.3gを測る。434～448は土師質土器の杯である。449～454は土師質土器の皿である。455～458は東播系須恵器のこね鉢である。456・457は口縁拡張部外面に淡い緑灰色の胡麻ふり状自然釉がかかる。458は片口鉢の注ぎ口部である。459・460は亀山焼系の瓦質甕である。461～463はタガが口縁部より僅かに下がった位置にあり、脚が付属しないタイプの羽釜である。462は瓦質を呈する。464～467は土師質土器の羽釜で三足脚が付属する。468は脚部。469～471は江戸期に位置づけられる焙烙である。472は顔面長4.0cm、幅2.9cm、頭囲12.1cmを測る土人形である。作風は武者人形を呈し、下顎部に髭痕が点描される。内部は中空である。精緻な造りから近現代のものと考える。473は昭和22年発行の小型五十銭黄銅貨。

4．小結

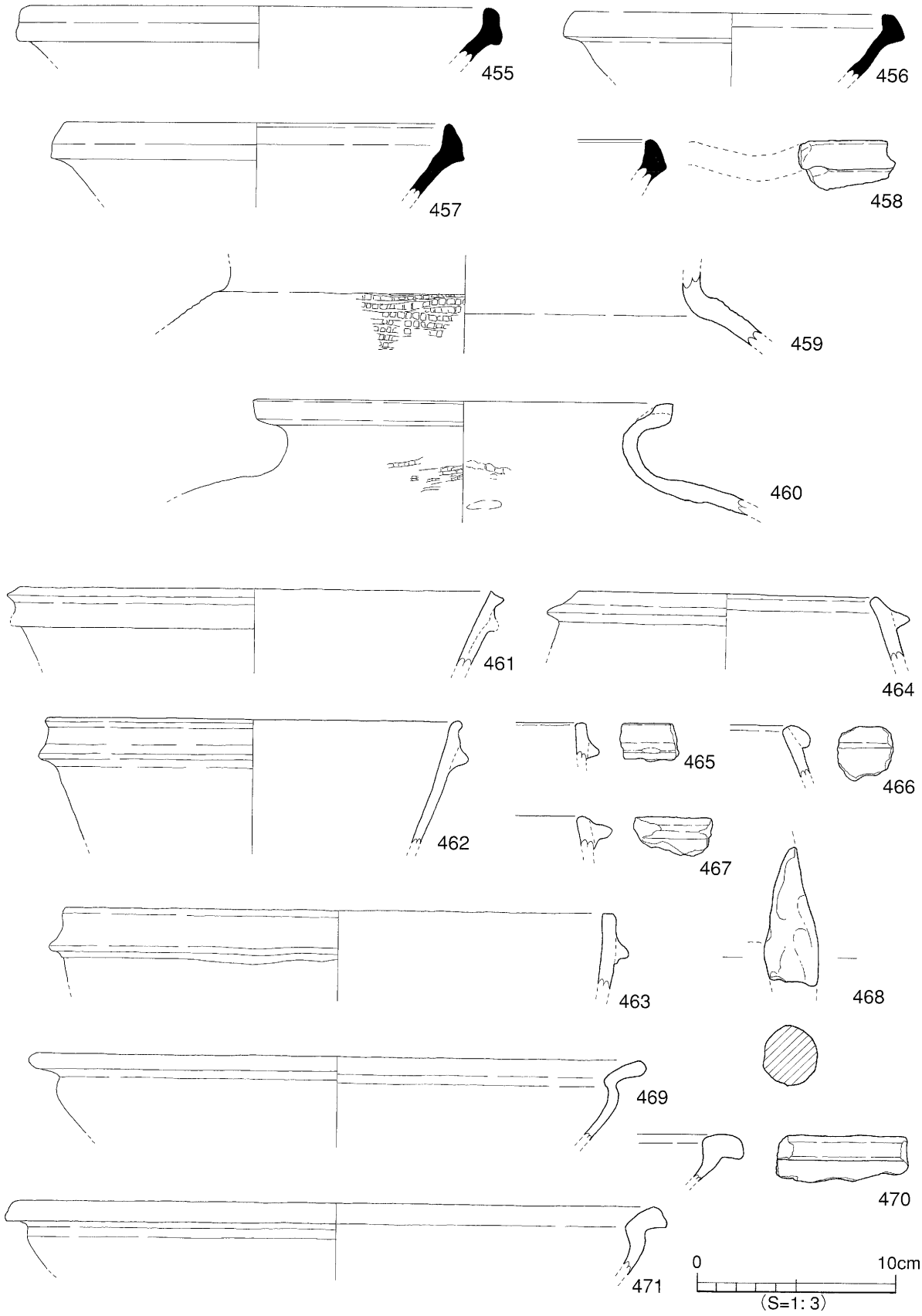
本調査区からは、弥生時代・古墳時代・中世～近現代の遺構・遺物が検出された。

（1）層位

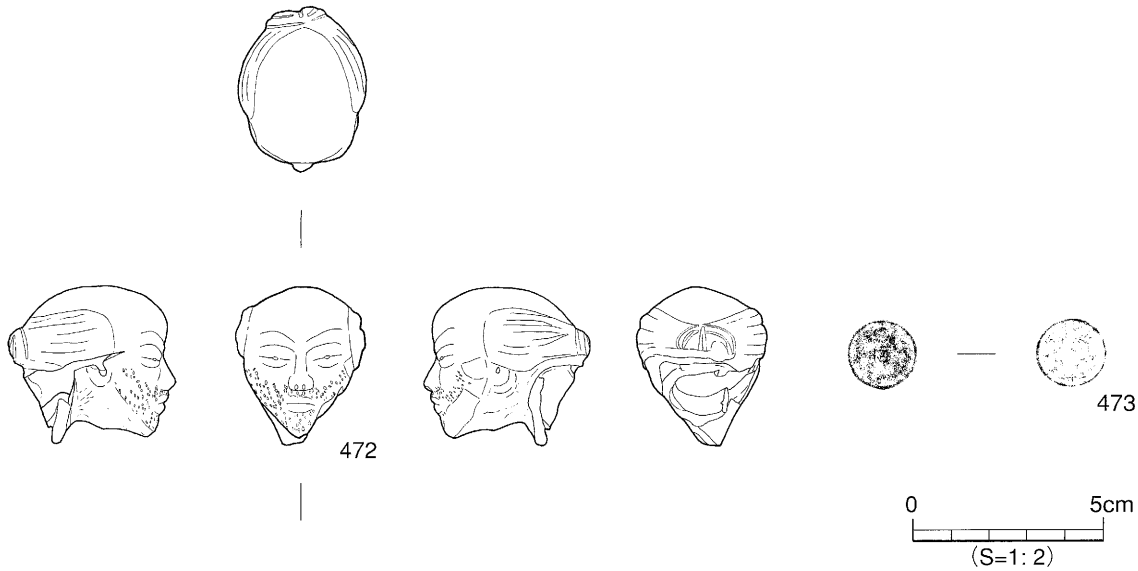
調査区北壁の土層観察により姶良Ｔｎ火山灰の1次及び2次堆積層を確認した。これらは既に噴出年代が明らかにされており、遺構・遺物の年代を決定する示標となっている。本調査区において遺物



第109図　出土地点不明遺物実測図（1）



第110図　出土地点不明遺物実測図（2）



第111図　出土地点不明遺物実測図（3）

の出土はなかったが、松山平野の旧石器文化を検討する上で貴重な資料となるものである。

（２）弥生時代

弥生時代に比定される遺構は土坑（ＳＫ316）１基である。本遺構内からは弥生時代後期後葉に比定される複合口縁壺の一部と着装品の一種であるガラス小玉２点のみが出土している。

この様な遺物の出土状況は、本遺跡が所在する桑原地区において同時期の類例はなく注目される資料である。

（３）中世以降

本調査区で検出された遺構の多くが中世以降に比定される。

［掘立柱建物址・柵列］９棟の掘立柱建物址と２条の掘立柱柵列を復元できた。これらを構成する柱穴内から土器類が僅かに出土しているが、時期決定には至らなかった。ここでは建物と柵列の主軸方向と重複関係からグルーピング及び変遷を試みる。まず、主軸線から①群；掘立306・307・308・309・ＳＡ302、②群；掘立304・305、③群；掘立302・303・ＳＡ301、④群；掘立310に分けた。次に、柱穴の重複関係から①群→④群→②群→③群の変遷を考えた。

［柱穴］ＳＰ3476（第104図）の柱痕内から土師質土器杯385・386が出土した。この柱穴が絡む掘立柱建物址は復元できていないものの、出土遺物の位置から建物廃絶時に行われた柱穴祭祀の可能性を考える。

遺物観察表

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は武正良浩、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：復元推定値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表52　SK316出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
356	壺	残高　4.0	複合口縁。接合部はタガ状で端面に1条の沈線と、拡張部に上から2条以上の沈線、斜格子文を施す。	㊙施文 ㊚ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) 金 ◎		40

表53　SK316出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
357	小玉	完形	ガラス 紺色	0.35	0.2	0.15	0.037		40
358	小玉	完形	ガラス 青色	0.3	0.15	0.1	0.021		40

表54　SK316出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
359	鉄片	不明	鉄製	1.7	1.3	0.25	1.68		

表55　掘立302出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
360	羽釜	残高　2.1	胴部(鍔部)片。	ナデ	ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		

表56　掘立303出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
361	すり鉢	口径(28.2) 残高　4.2	備前焼。内面に調整後、7本のすり目が施される。	櫛目状工具を用いた回転ナデ	櫛目状工具を用いた回転ナデ	赤茶褐色(上部) 青灰色	長(1~3) 密 ◎		

表57　SK319出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
362	杯	底径(　6.9) 残高　1.3	平底。	㊍ナデ ㊎回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		

表58　SK322出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
363	壺	残高　4.0	頸部に羽状文の幅広の凸帯を貼付ける。	ハケ(11~12本/cm)→ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	明赤褐色	長(1) 金 ◎		

SK322出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
364	羽釜	口径(23.2) 残高 2.9	口縁部片。内傾した口縁。外面の口縁端部にやや垂下した断面三角形のタガが巡る。	ナデ	ナデ	にぶい褐色	石・長(1~2) ◎	煤付着	
365	羽釜	口径(27.9) 残高 4.7	口縁端部に断面三角形のタガが巡る。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 にぶい褐色	石・長(1~3) ◎	煤付着	
366	杯	底径(6.2) 残高 0.9	平底。	(胴)ナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ナデ	にぶい橙色	石・長(1) ◎		
367	杯	底径(6.8) 残高 1.7	平底。	(胴)ナデ (底)回転糸切り	ナデ	にぶい褐色 灰褐色	石・長(1) ◎		

表59　SK322出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
368	鉄滓	完形	鉄製	3.0	2.9	2.0	14.29		

表60　SK323出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
369	こね鉢	口径(26.2) 残高 3.8	東播系のこね鉢。端部は肥厚し、内面は回転ナデ成形による凹凸が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 灰白色	石・長(1~2) ○		

表61　SD313出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
370	杯	口径(10.8) 底径 6.7 器高 3.8	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部は丸い。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
371	杯	口径(11.2) 底径 7.0 器高 4.0	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部はやや尖る。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 明灰褐色	石・長(1~2) ◎		
372	杯	口径(11.5) 底径 (6.8) 器高 3.0	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部はやや尖る。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	灰褐色	石・長(1~2) ◎		
373	杯	口径(11.2) 残高 3.5	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸い。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
374	杯	口径(12.4) 残高 3.8	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸い。外面はヨコナデによる稜線が明瞭。	ヨコナデ	摩滅の為不	灰白色	石(1)長(1~4) 密 ◎		
375	杯	口径(11.7) 残高 3.6	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸い。	ヨコナデ	明	明褐灰色 褐灰色	石・長(1~3) ◎		
376	杯	口径(11.2) 残高 3.1	内湾気味に立ち上がる口縁。端部はやや尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
377	杯	口径 6.8 残高 2.3	平底。	(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
378	皿	口径 (6.7) 底径 (5.3) 器高 1.0	内傾する口縁。端部は丸い。 平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) 密 ◎		
379	こね鉢	口径(24.6) 残高 5.7	東播系のこね鉢。	回転ナデ	ヨコナデ	灰白色	長(1~2) 密 ◎	自然釉	

表62　SD313出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残在	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
380	扁平片刃石斧	ほぼ完形	白色凝灰岩系	4.2	2.9	0.75	17.674		40

表63　SD313出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
381	判読不明	不明	(2.7)	不明	1.3	不明	0.48		

表64　SD314出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
382	羽釜	口径(25.7) 残高　7.7	内傾した口縁。外面の口縁端部に断面三角形のタガが巡る。	ヨコナデ	(口端)ヨコナデ (胴)ハケ(7~8本/cm)	橙色	石・長(1~3) 金 ◎	煤付着	
383	羽釜	口径(22.0) 残高　4.4	内傾した口縁。端部内面はつまみ出している。口縁外面に断面三角形のタガが巡る。瓦質。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	石(1~4) 長(1~2) ◎	煤付着	
384	甕	残高　7.6	須恵器の胴部片。外面にはスタンプ的な格子叩きが施される。	タタキ	ナデ (指頭痕あり)	灰黄色 赤褐色	石・長(1) ◎		

表65　SP3476出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
385	杯	底径　6.7 残高　1.8	平底。外面、ヨコナデによる稜線が明瞭。	(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) 密 ◎		
386	杯	底径　5.9 残高　2.1	底部から僅かに内反して立ち上がる。	(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り →ナデ	ヨコナデ	淡橙色	石・長(1) ◎		

表66　SP出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
387	羽釜	口径(26.0) 残高　3.8	直立した口縁。口縁外面に断面三角形のタガが巡る。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	明褐色	石・長(1~3) 砂粒多 ◎	SP3419	
388	羽釜	口径(22.4) 残高　1.9	口縁部片。口縁外部に断面三角形のタガが巡る。	摩滅の為不明	ヨコナデ	明赤褐色	石・長(1~2) 金 ◎	SP3504	
389	羽釜	残高　7.6	土師質。脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎	煤付着 SP3586	
390	羽釜	残高　1.9	口縁部片。口縁端面はやや凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎	煤付着 SP3279	
391	鍋	残高　2.4	土師質。口縁部片。外反する口縁部の端部は「コ」の字状。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい赤褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) 金 ◎	SP3420	
392	甕	口径(11.7) 残高　2.7	外傾する口縁部の端部はわずかに外反する。	ナデ	(口端)ナデ (口)ハケ(8本/cm) →ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎	SP3534	
393	杯	口径(12.3) 残高　3.6	体部~口縁にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	石(1) 金 ◎	SP3197	
394	杯	口径(11.2) 底径　(6.0) 残高　2.9	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	淡橙色	長(1) 金 ◎	SP3539	
395	杯	底径　6.2 残高　1.3	平底。	(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	摩滅の為不明	灰白色	長(1~2) ◎	SP3346	
396	Ⅲ	口径　(8.8) 底径　(6.2) 器高　1.8	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(1) 褐色粒 ◎	SP3405	
397	Ⅲ	口径　(7.8) 底径　(5.8) 器高　1.6	平底。口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	長(1) ◎	SP3420	
398	Ⅲ	口径　(6.8) 底径　(5.4) 器高　1.1	平底。口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り	(口)ヨコナデ (底)ナデ	浅黄橙色	長(1) 金 ◎	SP3214	
399	Ⅲ	口径　(7.8) 底径　(5.0) 器高　1.6	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	長(1) 金 ◎	SP3524	
400	Ⅲ	口径　(8.0) 底径　(6.0) 器高　1.1	平底。口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	淡黄色 にぶい橙色	石(1) ◎	SP3336	
401	Ⅲ	口径　(6.6) 底径　(4.4) 器高　1.1	平底。口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) 褐色粒 ◎	SP3229	
402	鉢	口径　(1.4) 残高　2.5	丸味のある小さな底部。	ハケ(5~6本/cm)	ナデ	にぶい橙色	石(1~3) ◎	SP3625	

表67　SP出土瓦観察表

番号	出土地点	種類	型式	瓦当残度	色調	胎土	焼成	備考	図版
403	SP3453・SP3463	丸瓦	玉縁式	—	灰色	石・長(1~2)	良好		

表68　SP出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
404	釘	欠損	鉄製	6.3	1.6	0.85	15.56	SP3211	
405	釘	欠損	鉄製	4.9	1.3	1.75	43.71	SP3248	
406	釘	欠損	鉄製	5.4	1.6	1.3	17.26	SP3408	
407	釘	完形	鉄製	3.5	0.5	0.45	1.12	SP3337	
408	釘	完形	鉄製	5.2	0.7	0.6	3.43	SP3391	
409	釘	欠損	鉄製	2.3	0.8	0.7	2.12	SP3643	
410	釘	欠損	鉄製	6.0	1.7	1.1	15.11	SP3356	
411	鉄製不明品	欠損	鉄製	18.5	0.7	0.8	42.34	SP3449	
412	鉄滓	完形	鉄製	4.0	3.4	2.3	32.93	SP3263	
413	鉄滓	完形	鉄製	3.4	3.6	2.5	47.88	SP3606	

表69　グリッド出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
414	杯	口径(11.4) 残高 2.7	体部は内湾し、口縁端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい赤橙色	長(1) 密 ◎	C3	
415	杯	口径 11.6 底径 6.9 器高 3.1	内湾する胴部に、口縁端部は尖り気味。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	(口)(胴)ヨコナデ (底)摩滅の為不明	灰白色	石(1~2) ◎	C3	
416	杯	口径 11.8 底径 5.3 器高 4.3	口縁端部は尖り気味。外面、ヨコナデによる稜線が明瞭。	(口)(胴)ヨコナデ (底)回転糸切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ (指頭痕あり)	灰白色	石・長(1) 密・褐色粒 ◎	C4	
417	杯	口径(12.0) 底径 7.8 器高 3.4	平底の底部より直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳白色	石・長(1) 密・褐色粒 ◎	C4	
418	杯	口径(10.9) 残高 3.1	体部~口縁にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	石(1~4) 長(1~2) ◎	C4	
419	皿	口径 (7.2) 底径 (4.8) 残高 1.6	平底。口縁端部は丸くおさまる。	(口)ヨコナデ (底)回転糸切り	摩滅の為不明	浅黄橙色	石・長(1) ◎	C3	
420	皿	口径(10.4) 残高 1.8	唐津系。口縁端部の内面は、回転ナデにより僅かに凹む。	回転ナデ →施釉	回転ナデ →施釉	黄灰色	密 ◎	C3	

表70　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
421	甕	口径(19.4) 残高 5.6	外反する厚い口縁部の端部は「コ」の字状に丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色	石・長(1~4) 多 ○		
422	甕	口径(18.5) 残高 2.5	外反する口縁部の端部は「コ」の字状に丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄灰色	石・長(1~5) 多 ◎		
423	甕	口径(19.3) 残高 2.1	外反する口縁部の端部は「コ」の字状である。	(口端)ナデ (胴)ハケ(8本/cm) →ナデ	ナデ	灰白色	石・長(1~3) 多 ◎		
424	甕	口径(11.3) 残高 3.4	短く外反する口縁部の端部は「コ」の字状に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	石・長(1) 微砂粒 ◎		
425	甕	残高 2.2	短く外反する厚い口縁部片。端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤橙色	石・長(1~2) 多 ○		
426	鉢	口径 (7.5) 残高 4.9	直口口縁。端部は丸い。	ハケ(4本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	ナデ (指頭痕あり)	橙色	石・長(1~5) 金 ◎		

出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
427	鉢	底径 (2.9) 残高 4.1	くびれの上げ底。	㊐ハケ(6本/cm)→ナデ ㊎ナデ(指頭痕あり)	摩滅の為不明	褐灰色 橙色	石・長(1) ◎		
428	蓋	口径(12.8) 残高 2.7	口縁部は直立し、口縁端部内面は凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	明青灰色	長(1) 微砂粒 ◎		
429	青磁 碗	口径(13.5) 残高 2.1	陶磁器。	施釉	施釉	オリーブ灰色	微砂粒 ◎		
430	碗	口径(10.2) 残高 3.5	陶磁器。口縁外面に2条の鉄釉が線状に巡る	施釉	施釉	灰オリーブ色	微砂粒 ◎		
431	碗	口径 (8.2) 残高 2.0	陶磁器。京焼系。	施釉	施釉	淡黄色	微砂粒 ◎		
432	青磁 碗	口径(10.9) 残高 2.3	陶磁器。	施釉	施釉	オリーブ灰色	微砂粒 ◎		

表71　出土地点不明遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
433	管玉	欠損	碧玉 暗オリーブ色	(3.2)	(1.5)	0.4	6.303		40

表72　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
434	杯	口径(11.3) 底径 (6.1) 器高 4.1	平底の底部より直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。	㊀㊁ナデ ㊍回転糸切り(板状圧痕あり)	ナデ	灰白色	長(1) 微砂粒 ◎		40
435	杯	口径 11.1 底径 6.1 器高 4.2	平底より内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。底部内面に強いナデによる沈線。	㊀㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) ◎		40
436	杯	口径(11.1) 底径 (6.6) 器高 4.0	平底より内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。	㊀㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り(板状圧痕あり)	ヨコナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~4) 褐色粒 ◎		
437	杯	底径 (6.8) 残高 2.3	平底。底部内面に強いヨコナデによる沈線。	㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り(板状圧痕あり)	ヨコナデ	にぶい黄橙色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		
438	杯	底径 (6.2) 残高 2.1	平底。底部外面に強いヨコナデによる沈線。	㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	摩滅の為不明	灰白色	石・長(1~2) ◎		
439	杯	底径 (6.2) 残高 2.1	平底。底部内面に強いヨコナデによる沈線。	㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	石(1~5) 長(1) ◎		
440	杯	底径 (4.8) 残高 1.6	平底。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ○		
441	杯	底径 (6.6) 残高 1.7	平底。	㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り(板状圧痕あり)	摩滅の為不明	灰白色	石・長(1) ◎		
442	杯	底径 6.4 残高 1.9	平底。やや肥厚する。	㊁摩滅の為不明 ㊍回転糸切り(板状圧痕あり)	ヨコナデ	灰白色	石・長(1~3) 褐色粒 ○		
443	杯	口径(14.0) 底径 (8.2) 器高 4.4	平底の底部より直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。	㊀㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	石・長(1) ◎		
444	杯	口径(12.2) 底径 (7.4) 器高 3.3	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	㊀㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	ヨコナデ	にぶい黄橙色 明褐灰色	石(1~3) 長(1) ◎		
445	杯	底径 (8.3) 残高 1.8	平底の底部より内湾して立ち上がる。	㊁ヨコナデ ㊍回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 浅黄橙色	石(1~4) 長(1~2) ◎		
446	杯	口径(12.2) 底径 (8.4) 器高 2.8	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄色 灰白色	石・長(1~2) ○		
447	杯	口径(11.3) 底径 (8.0) 器高 2.8	平底の底部より直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖る。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	長(1) ○		

遺物観察表

出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
448	杯	口径(11.5) 残高 2.0	内湾する口縁。端部はやや丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長(1) ◎		
449	皿	口径 (8.5) 底径 (6.0) 器高 1.4	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	㊐ナデ ㊎回転糸切り	ナデ	淡橙色 褐灰色	微砂粒 ◎		
450	皿	口径 7.7 底径 4.6 器高 1.8	平底の底部より、内湾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまる。	㊐ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎		40
451	皿	口径 (6.2) 底径 (4.0) 器高 1.4	内湾気味に立ち上がる口縁端部は丸くおさまる。	㊐ヨコナデ ㊎回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石(1~2) ◎		
452	皿	底径 (4.0) 残高 1.1	平底の底部より、内湾して立ち上がる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
453	皿	口径 (6.0) 底径 (4.3) 器高 1.3	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	㊐ナデ ㊎回転糸切り	ナデ	浅黄橙色	長(1~6) 微砂粒 ◎		
454	皿	口径 (7.0) 底径 (4.5) 器高 1.4	平底の底部より、内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	浅黄橙色	長(1) 多 ◎		
455	こね鉢	口径(23.4) 残高 2.7	口縁部片。口端部は肥厚し、直口して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) 多 ○		
456	こね鉢	口径(16.2) 残高 3.3	口縁拡張部外面に自然釉。	(口端)施釉 ㊍回転ナデ	回転ナデ	明青灰色	長(1) 微砂粒 ◎	自然釉	
457	こね鉢	口径(19.5) 残高 3.8	口縁拡張部外面に自然釉。	(口端)施釉 ㊍回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎	自然釉	
458	こね鉢	残高 2.5	片口鉢の注ぎ口部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	微砂粒 ◎		
459	甕	残高 3.8	亀山焼系の瓦質土器。	㊍回転ナデ ㊊タタキ	ナデ	灰色 灰白色	石・長(1~3) ◎		
460	甕	口径(21.2) 残高 5.8	瓦質土器。外反する口縁部。端部は肥厚する。	㊐摩滅の為不明 ㊍タタキ	㊐摩滅の為不明 ㊍タタキ (指頭痕あり)	灰白色	長(1~2) ◎		
461	羽釜	口径(23.8) 残高 3.8	外傾して立ち上がる口縁。口縁外面に断面三角形状のタガが巡る。	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~3) ◎	煤付着	
462	羽釜	口径(21.0) 残高 6.3	外傾して立ち上がる口縁。口縁外面に断面三角形のタガが巡る。	ナデ	ナデ	暗灰色 黒色	石・長(1~3) ◎	有機物付着	
463	羽釜	口径(27.9) 残高 3.9	口縁端部やや下に断面三角形状のタガが巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎	煤付着	
464	羽釜	口径(15.0) 残高 3.2	内傾して立ち上がる口縁。口縁端部やや下に断面三角形状のタガが巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石(1~5) 長(1) ◎		
465	羽釜	残高 1.9	口縁部片。口縁端部やや下に断面三角形状のタガが巡る。	ナデ	摩滅の為不明	明褐色 明黄褐色	石・長(1~3) 多 ◎		
466	羽釜	残高 2.6	口縁部片。口縁端部は上下に肥厚する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	明褐色 明黄褐色	石・長(1~5) 多 ◎		
467	羽釜	残高 1.7	口縁部片。口縁端部に断面三角形状のタガが巡る。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
468	羽釜	残高 7.1	土師質。脚部。	ナデ	ナデ (指頭痕あり)	橙色	石・長(1~3) ◎		
469	焙烙	口径(31.1) 残高 4.1	短く外反する口縁。端部は丸くおさまる。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰黄色 浅黄色	微砂粒 ◎	煤付着	
470	焙烙	残高 2.4	瓦質土器。口縁端部は上下に肥厚し、「コ」の字状である。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 浅黄橙色	石(1~3) ◎		
471	焙烙	口径(32.0) 残高 3.5	短く外反する口縁。端部は「コ」の字状で丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色	石(1~2) ◎	煤付着	

表73　出土地不明遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
473	五十銭	昭和22年	19.0	—	1.3	1.2	2.463		

第10章

桑原遺跡4次調査地

－4区の調査－

第10章　４区の調査

１．調査の経緯

４区は、桑原遺跡４次調査地の３区より東へ50ｍに位置する。標高は35.40ｍ～35.70ｍである。調査前の現況は宅地造成地である。４区の調査については、調査区の東側にあった桑原集会所の取り壊しが遅れたため調査の都合上、一つの区を西側（４西区）と東側（４東区）とに分けて調査を行った。４東区が桑原集会所の跡地となる。調査は2002（平成14）年４月16日～同年９月13日の間に行った。調査面積は300㎡である。以下、調査工程を略記する。

2002（平成14）年４月16日　４西区を重機による表土の掘削を開始する。

17日　遺構検出作業を開始する。現代坑の掘削を行う。

22日　基準点の設置を行う。国土座標軸に載った５ｍメッシュのグリッドを設定する。

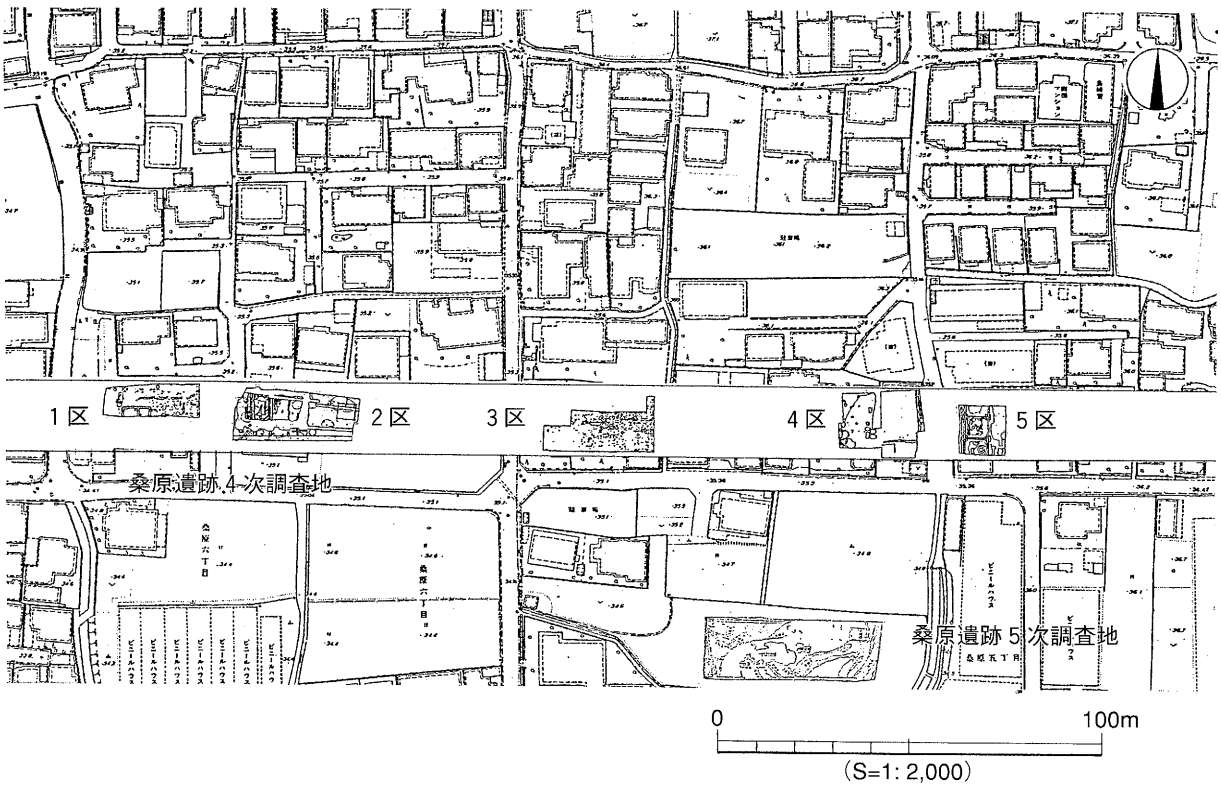
23日　南壁に土層観察用の先行トレンチを設定する。

24日　遺構確認作業を終了し、遺構配置図を作成する。自然流路ＳＲ401（以下、ＳＲ401）や柱穴ＳＰ411（ＳＰ411）などの遺構を検出。

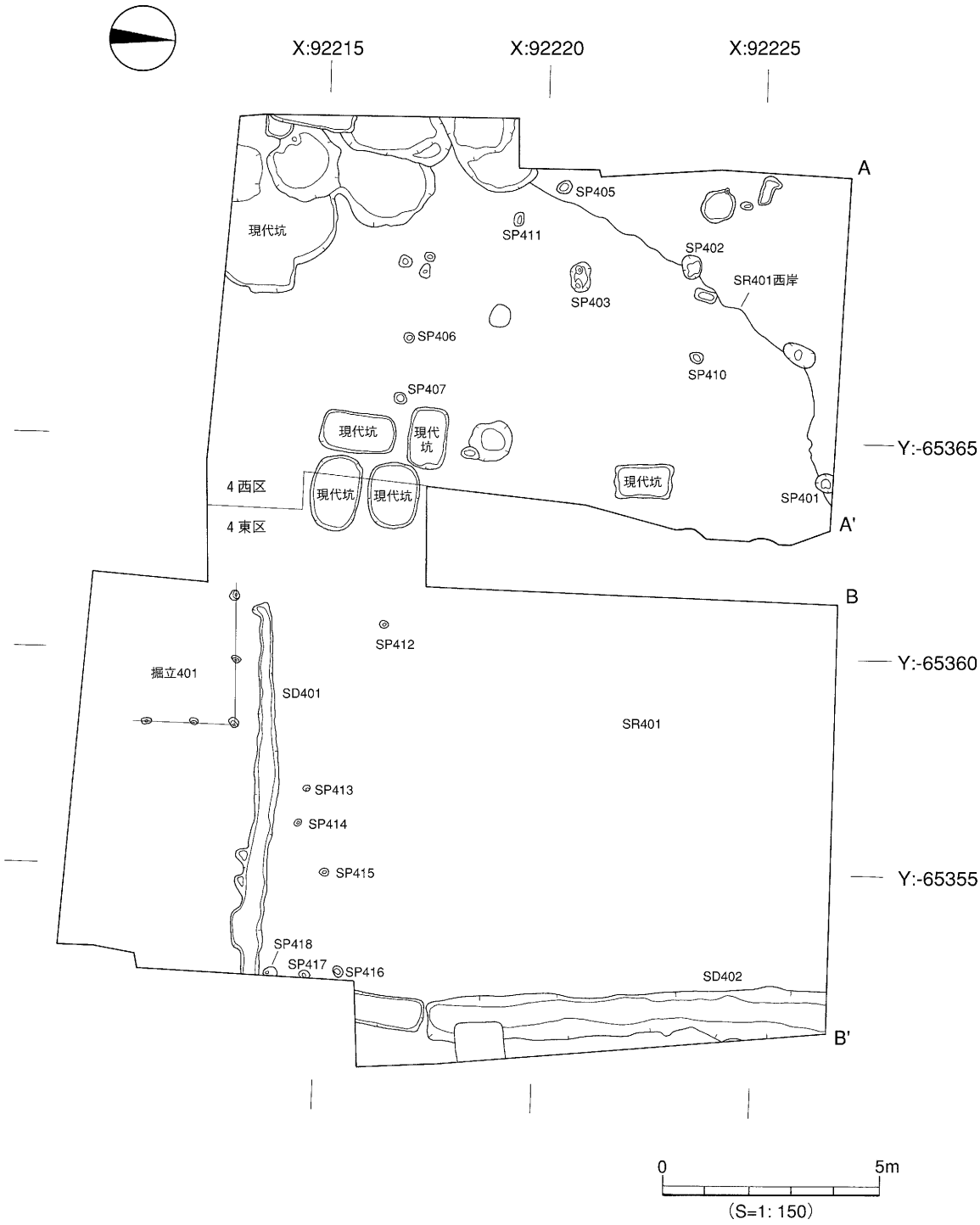
25日　遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺構の掘り下げを開始する。ＳＰ411の測量を行う。

26日　ＳＲ401の上層の掘り下げを開始する。

５月14日　ＳＲ401上層の掘り下げを終了し、中層の掘り下げを開始する。



第112図　調査区位置図


X:92215
X:92220
X:92225
A
A'
B
B'
Y:-65365
Y:-65360
Y:-65355
現代坑
SP405
SP411
SP402
SR401西岸
SP403
SP406
SP410
SP407
現代坑
現代坑
現代坑
現代坑
現代坑
SP401
4西区
4東区
SP412
掘立401
SD401
SR401
SP413
SP414
SP415
SP418
SP417
SP416
SD402
0
5m
(S=1: 150)

第113図　遺構配置図

5月24日　ＳＲ401中層の掘り下げを終了し、下層の掘り下げを開始する。順次、検出した遺物の測量・写真撮影を行う。
6月3日　桑原小学校の児童を対象に見学会を開く。
13日　ＳＲ401下層の掘り下げを終了する。
14日　ＳＲ401完掘写真撮影を行う。遺構測量図を作成する。
20日　遺構測量図を作成し、4西区の調査を終了する。
21日　4東区の掘削を重機により開始する。
7月2日　ＳＲ401上面で掘立柱建物址、溝などを検出する。
5日　南壁・北壁に土層観察用のトレンチを設定する。
8日　愛媛大学付属中学校2年生7名が職場体験学習に来る。
9日　ＳＲ401上層の掘り下げを開始する
11日　ＳＲ401中層の掘り下げを開始する。
29日　ＳＲ401下層の掘り下げを開始する。順次、遺物の測量と検出状況の写真撮影を行う。
8月28日　ＳＲ401の掘り下げを終了し、完掘状況の写真撮影を行う。
29日　ＳＲ401の測量を開始する
9月7日　桑原地区の住民を対象に現地説明会を開催する。
13日　全ての測量を完了し、発掘機材や道具の搬出を行う。調査区の埋め戻しを完了し調査を終了する。

2．層位（第114図、図版41-2）

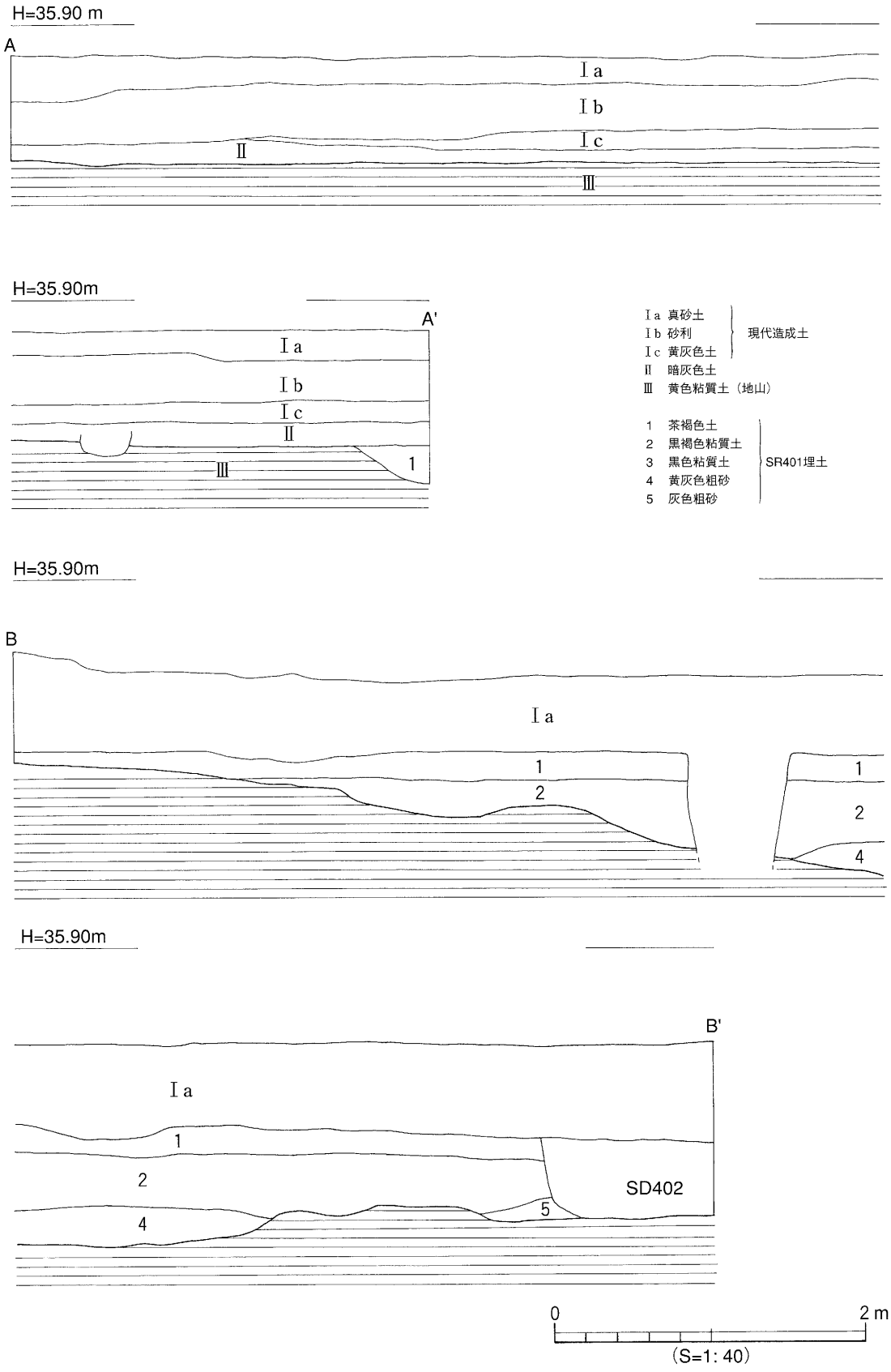
調査区周辺は、約2.2～2.5万年前に噴出・降下したＡＴ火山灰と約6300年前に噴出・降下したアカホヤ火山灰が広範に確認されている地域である。しかしながら本調査区では、それらの堆積は確認できなかった。

調査区の基本層序は第Ⅰ層現代造成土、第Ⅱ層暗灰色土、第Ⅲ層黄色粘質土である。第Ⅰ層は土質の違いによりⅠａ～Ⅰｃの3層に分層した。

Ⅰａ層　真砂土で調査区全体に見られる。層厚は16cm～140cmを測る。
Ⅰｂ層　砂利で4西区に限られる。層厚は22cm～34cmを測る。
Ⅰｃ層　黄灰色土の客土である。4西区に限られる。層厚は2cm～13cmを測る。
第Ⅱ層　4西区に限られる。中世の遺物を包含する。層厚は8cm～16cmを測る。
第Ⅲ層　いわゆる地山と呼ばれる層である。

遺構の検出は、第Ⅲ層上面で行った。その結果、調査区の北西隅を残してほぼ全域が自然流路ＳＲ401に占められる事が判明した。検出した遺構の大半は、この自然流路ＳＲ401上面での検出となる。

検出した遺構は自然流路ＳＲ401の他、掘立柱建物址（掘立）1棟、溝（ＳＤ）2条、柱穴（ＳＰ）18基である。


H=35.90 m
A
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱ
Ⅲ
H=35.90m
A'
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱ
Ⅲ
1
Ⅰa 真砂土
Ⅰb 砂利
Ⅰc 黄灰色土
現代造成土
Ⅱ 暗灰色土
Ⅲ 黄色粘質土（地山）
1 茶褐色土
2 黒褐色粘質土
3 黒色粘質土
4 黄灰色粗砂
5 灰色粗砂
SR401埋土
H=35.90m
B
Ⅰa
1
2
1
2
4
H=35.90m
B'
Ⅰa
1
2
4
5
SD402
0
2 m
(S=1: 40)

第114図　北壁土層図

3．遺構と遺物

本調査では、弥生時代～中世・近世までの遺構と遺物を検出した。以下、時代ごとに遺構と遺物について説明を行う。自然流路ＳＲ401は、調査区の大部分を占め本調査の重要な遺構のため最初に記述する。

〔1〕弥生時代～中世

1）自然流路（ＳＲ）

ＳＲ401（第115～117図、図版41-1・43・44・47-2・48～50-1）

調査区の北東方向から南西方向に流れる。西岸を検出し東岸は調査区外となる。検出規模は南北17.60ｍ、東西（幅）20.40ｍ、深さ0.47～1.40ｍを測る。北側から南側にかけて深くなる。ＳＲ401内には数条の流路痕跡があり、その中で最も深い流路痕跡は、調査区の中央部を北東方向から南西方向に流れる。最も遺物が多量に出土する流路部である。

埋土は６層に分層できる。１層は茶褐色土、２層は黒褐色粘質土、３層は黒色粘質土、４層は黄灰色粗砂、５層は灰色粗砂、６層は茶灰色粗砂である。以下、各層の内容について記述する。

１層：層厚16㎝～72㎝を測る。ＳＲ401の最終堆積層で全体に堆積する。弥生土器や中世の遺物が出土する。

２層：層厚16㎝～36㎝を測る。１層の下に安定的に堆積する。古墳時代後期と古代末～中世の遺物が出土する。

３層：層厚24㎝～44㎝を測る。ＳＲ401内の深い流路痕跡部に堆積する。南側に厚く堆積し、北側には見られない。弥生時代と古墳時代中期までの遺物が出土する。

４層：層厚６㎝～24㎝を測る。３層の下に堆積する粗砂層である。弥生時代と古墳時代中期までの遺物が出土する。

５層：層厚18㎝～34㎝を測る。３・４層が堆積する流路痕跡部の東側に堆積する。３層・４層が堆積する以前の層と考えられる。土器の出土は無く、大型の石包丁１点が出土した。

６層：層厚10㎝～20㎝を測る。５層の下に部分的に堆積する。遺物は出土していない。

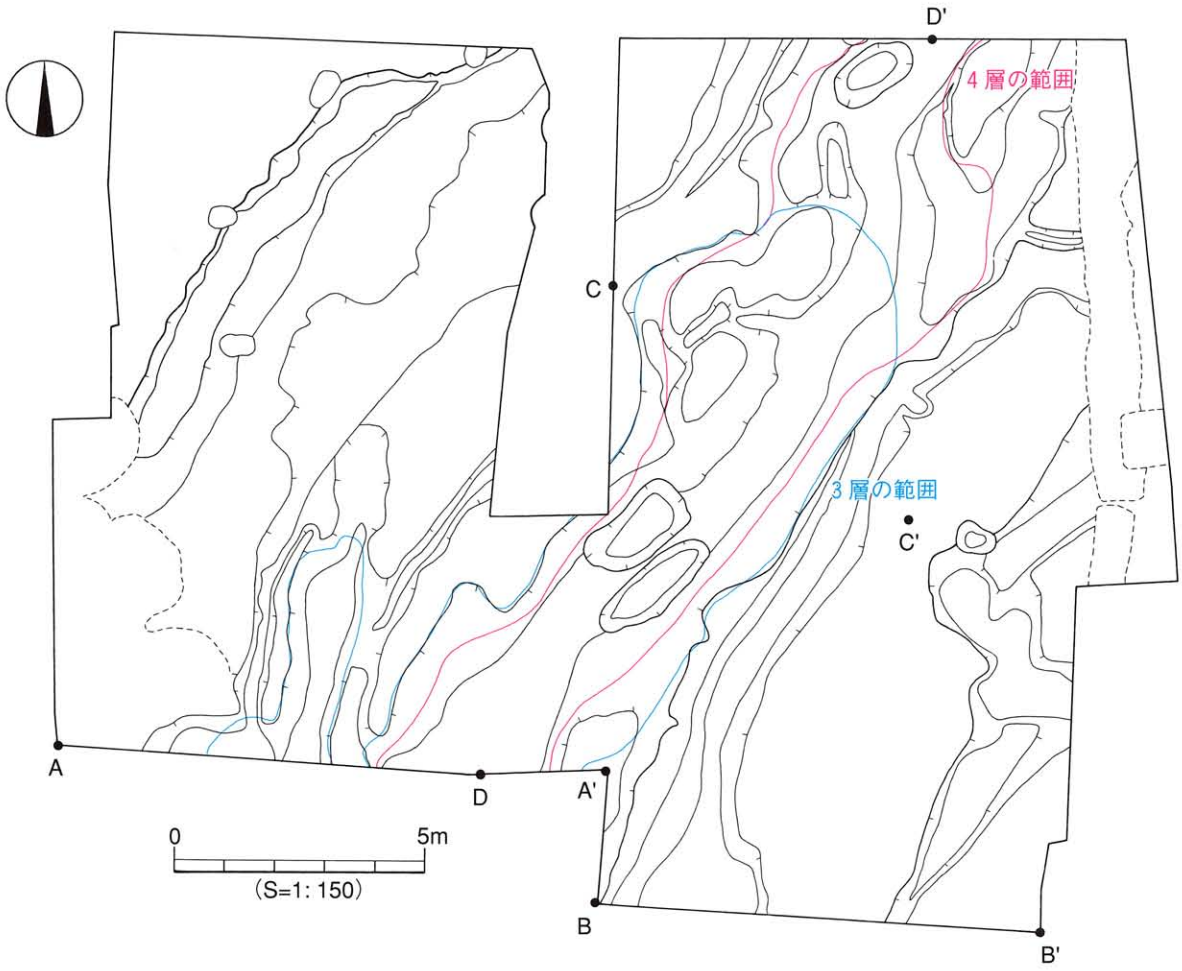
遺物は、調査区の中央部を走る最も深い流路部に堆積した３層と４層からの出土が大多数を占める。両層中からは弥生土器、土師器などが混在して出土した。５層中からは、大型の石包丁を１点出土したのみで他の出土遺物はない。６層からは遺物の出土はなかった。

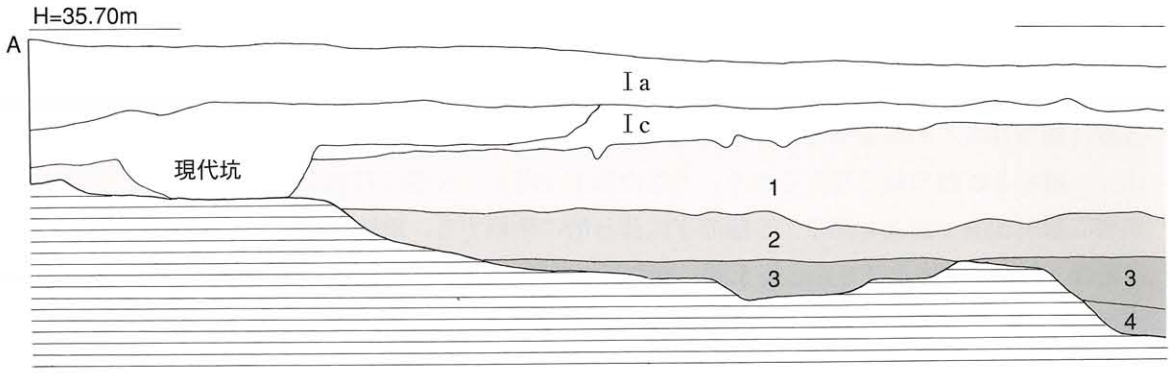
出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製品、木製品、種子などが出土した。

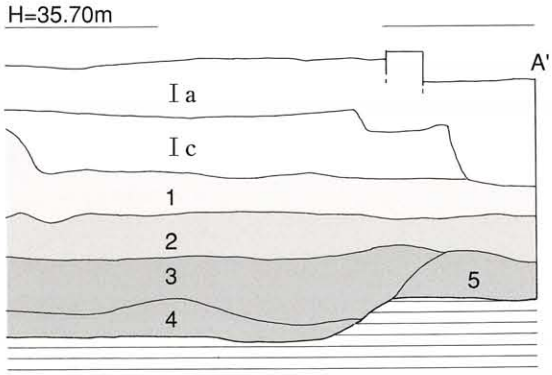
遺物の取り上については、発掘作業において３層と４層からの出土遺物を明確に分別できなかったため３層～５層迄を下層出土遺物として取り上げた。そのため、ここでは２層からの出土遺物をを中層出土遺物とし、１層からの出土遺物を上層出土遺物とした。以下、下層出土遺物から順に出土遺物について記述する。

下層出土遺物（第118～136図、図版51～60）

主に３層、４層からの出土である。この３層、４層はＳＲ401内の最も深い流路部に堆積する。弥生時代中期後半～古墳時代中期までの遺物が混在して出土した。以下、器種ごとに記述する。







Ia 真砂土
Ib 砂利
Ic 黄灰色土
Ⅱ 暗灰色土
Ⅲ 黄色粘質土
1 茶褐色土・・・上層
2 黒褐色粘質土・・・中層
3 黒色粘質土
4 黄灰色粗砂
5 灰色粗砂
6 茶灰色粗砂

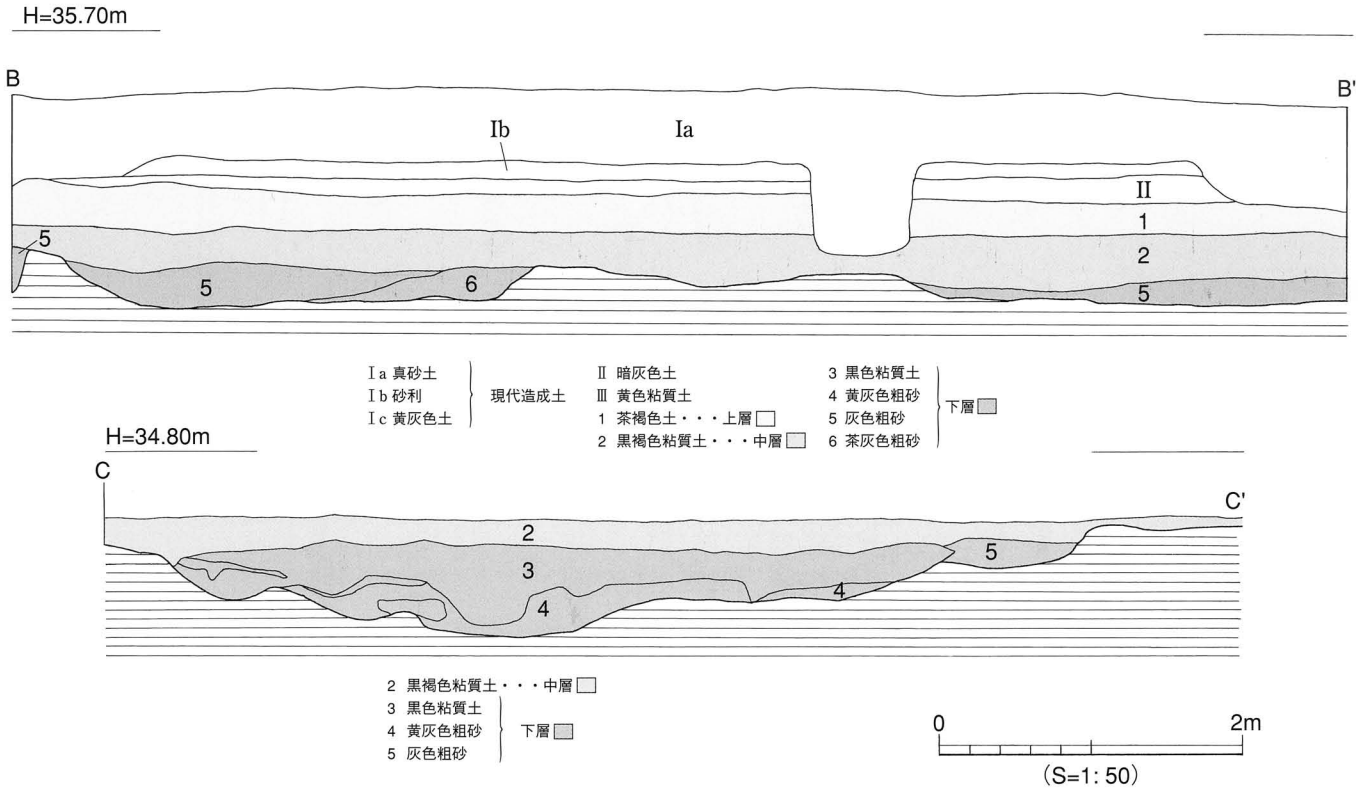
現代造成土

下層

0 2m

(S=1:50)

第115図　SR401測量図（１）



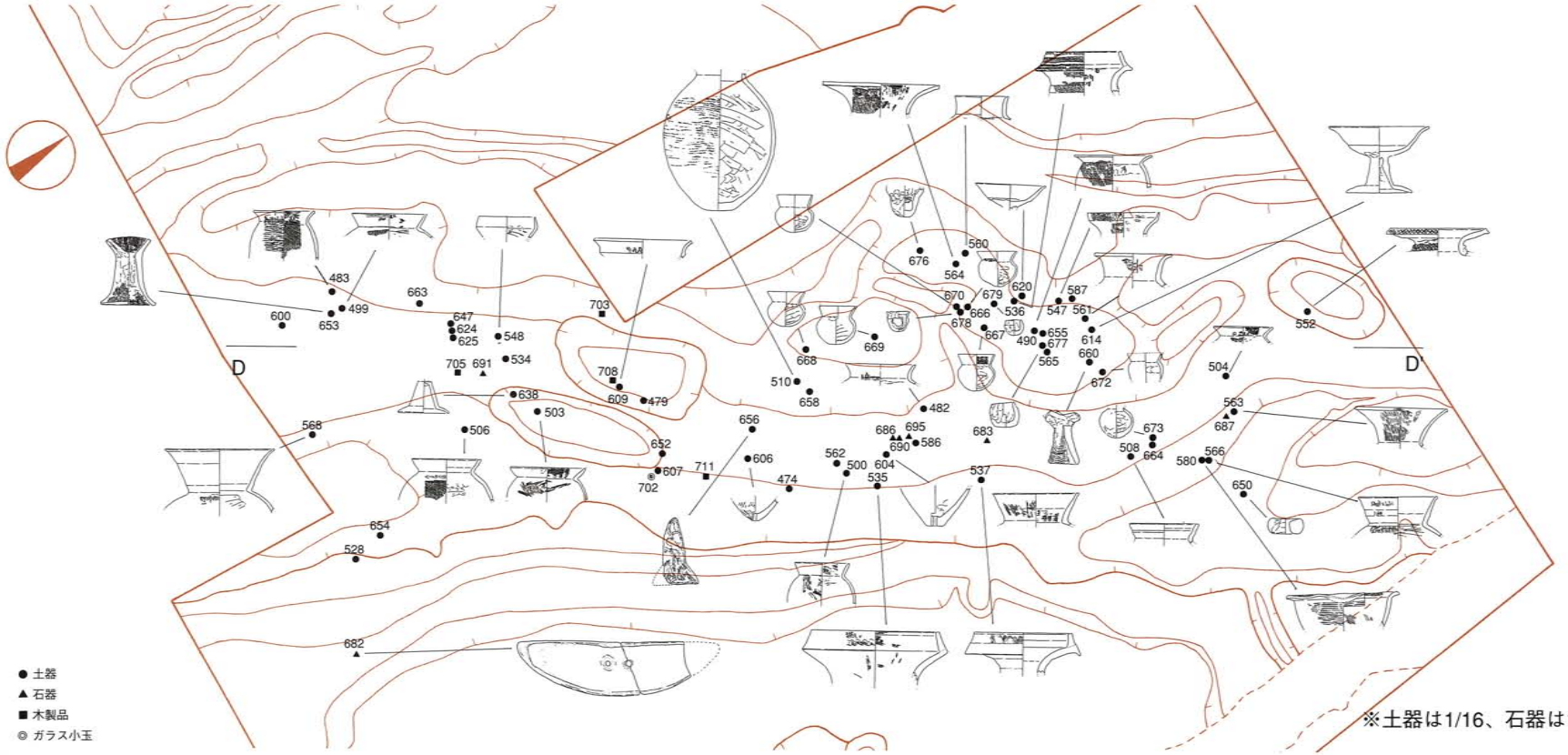
第116図　SR401測量図（２）

（１）土製品

甕形土器(474～533)

474は大型の口縁部片で外反する口縁部。475は頸部に刻目突帯文を貼付する。476は口縁端部に沈線を施す。477～479は外反する口縁部で口縁端部がナデにより凹む。482は口縁部が外湾して開く。頸部と胴部の境に板状工具による小口痕を残す。483～488は外面にタタキ調整を施す甕である。483は胴部～口縁部内面はハケメ調整される。口縁端部は面となる。484は胴部内面はハケメ調整、口縁部内外面はナデ調整される。485・486は口縁部外面にタタキ目を残す。485の胴部内面はハケメ調整される。口縁部内面はハケメ調整のちナデ調整される。486の胴部内面はナデ調整、口縁部内面はハケメ調整である。488の口縁部は内外面ともハケメ調整のちナデ調整である。489～491は外反する口縁部。489は頸部の締まりが弱い。胴部～口縁部の内外面はハケメ調整である。490の胴部外面はハケメ調整される。内面はナデ調整で指頭痕を残す。491の胴部内外面はハケメ調整、口縁端部の外面直下に指頭痕を残す。492は吉備地方からの搬入品と考えられる。

493～501は外反する口縁部。493の胴部内面はヘラケズリである。494の口縁端部は尖り気味。口縁部内面は粗い横方向のハケメ調整を施す。496～500の胴部内面はヘラケズリである。501の口縁部は直線的に外上方にのびる口縁部。口縁部外面はナデ調整、内面はハケメ調整のちナデ調整である。口縁端部は丸い。502～507は内湾する口縁部。502は口縁端部が内に肥厚する。503は口縁部外面に指頭痕を残す。504は口縁端部がやや内に肥厚する。胴部内面はヘラケズリである。505は胴部外面に横方向のハケメ調整を施す。506は口縁端部が内に傾斜する面をなす。507の口縁部は強く内湾して上方に立ち上がる。口縁端部は内に傾斜する面をなす。508は口縁部に段を有する。509は肩の張りが弱い。



第117図　SR401下層出土遺物測量図

胴部外面はナデ調整、内面はヘラケズリである。口縁部内外面に指頭痕を残す。

510～533は弥生土器の胴部～底部にかけての破片である。510は口縁部が欠失している。胴部外面はタタキ調整のちナデ調整、内面はヘラケズリである。513は内外面ともヘラミガキ調整される。514～519は上げ底の底部。

壺形土器（534～575）

534～548は複合口縁壺。534は頸部に断面三角形の2条の突帯を巡らす。535は口縁拡張部に波状文を二段に施す。口縁端部は面をもつ。536は頸部には格子状の刻目突帯文を貼付する。口縁拡張部には半裁竹管文と波状文、口縁端部には半裁竹管文を施す。537・538は口縁拡張部に波状文を施している。537は頸部の締まりが強い。口縁部は下方に拡張される。口縁端部は面をもつ。538の口縁拡張部には波状文の上に8条の沈線を巡らしている。539は口縁拡張部外面がハケメ調整される。540～542は口縁拡張部が短いものである。540の口縁端部は丸く仕上げられる。541は口縁部が短く上方に立ち上がる。口縁拡張部外面に波状文を施す。

544・545は口縁拡張部が垂直気味に立ち上がる。544は口縁拡張部外面が強いヨコナデ調整され、稜をもつ。546は口縁拡張部が内湾して上方に立ち上がる。内面接合部に指頭痕を残す。内外面ともナデ調整である。547・548は口縁拡張部が緩やかに屈曲する。547は口縁部に波状文が施される。調整は外面がハケメ調整のちナデ、内面はナデ調整である。549は口縁部が上下に拡張される。口縁部は垂直に立ち上がる。口縁部外面には、竹管文と波状文を施す。550は外反して立ち上がる口縁部。口縁部内面は横方向のヘラミガキが施される。551は口縁拡張部が外反する。口縁拡張部には波状文が施される。口縁接合部内面に指頭痕を残す。

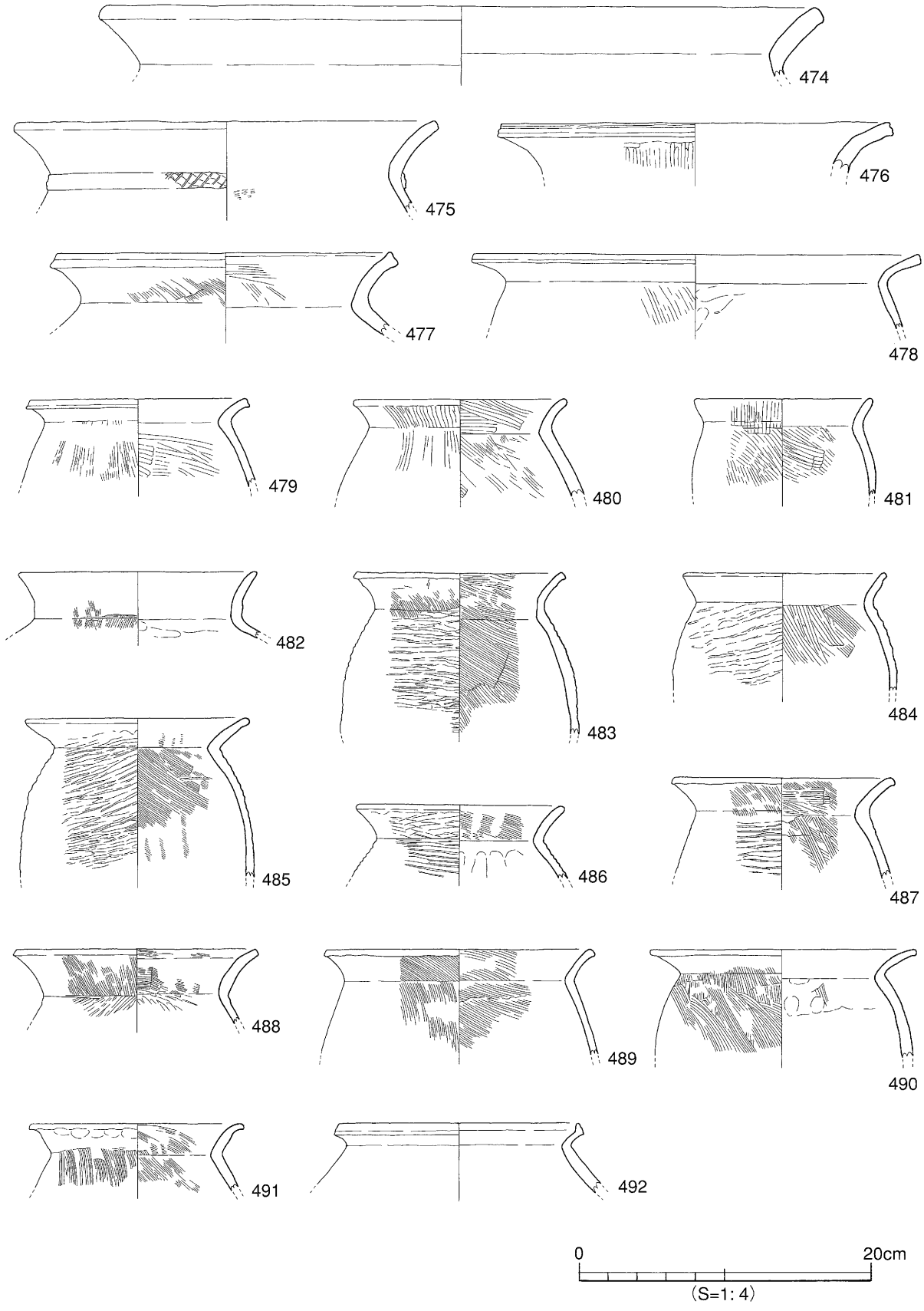
552は口縁部が外上方に大きく開く。頸部に刻目突帯文を貼付する。口縁端部には斜格子状の刻目文を施している。553は水平に大きく開く口縁部。口縁端部は肥厚する。口縁端面には波状文が施される。554は口縁端部を上下に拡張し端面に凹線文を施す。555・556は口縁端部を下方に拡張し、波状文と円形浮文を貼付する。557・558は長頸壺。557は外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。外面はハケメ調整、内面は口縁端部付近に指頭痕を残す。558は口縁端部直下の内面に指頭痕を残す。559・560は直口壺。559の口縁部は垂直気味に立ち上がる。560は垂直気味に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部。

561は外傾する頸部から水平気味に外反する口縁部。562は外反する口縁部。口縁端部は屈曲して下方に短く垂れる。口縁端部は丸い。563・564は外傾する頸部に大きく外反する口縁部である。563は口縁端部は下方に短く垂れる。口縁端部外面に斜格子状文が施される。調整は、内外面ともヘラミガキが施される。564は口縁端面がナデにより凹む。口縁部外面にはヘラ状工具により縦方向の沈線を巡らしている。565～568は外上方に長くのびる口縁部である。565の口縁端部はナデにより凹む。566の口縁端部は丸く仕上げる。胴部内面の調整はヘラケズリである。567の口縁端部は面をもつ。568は強いヨコナデにより口縁外面に稜をもつ。胴部内面の調整はヘラケズリである。569の口縁部は、段を有し外反する。

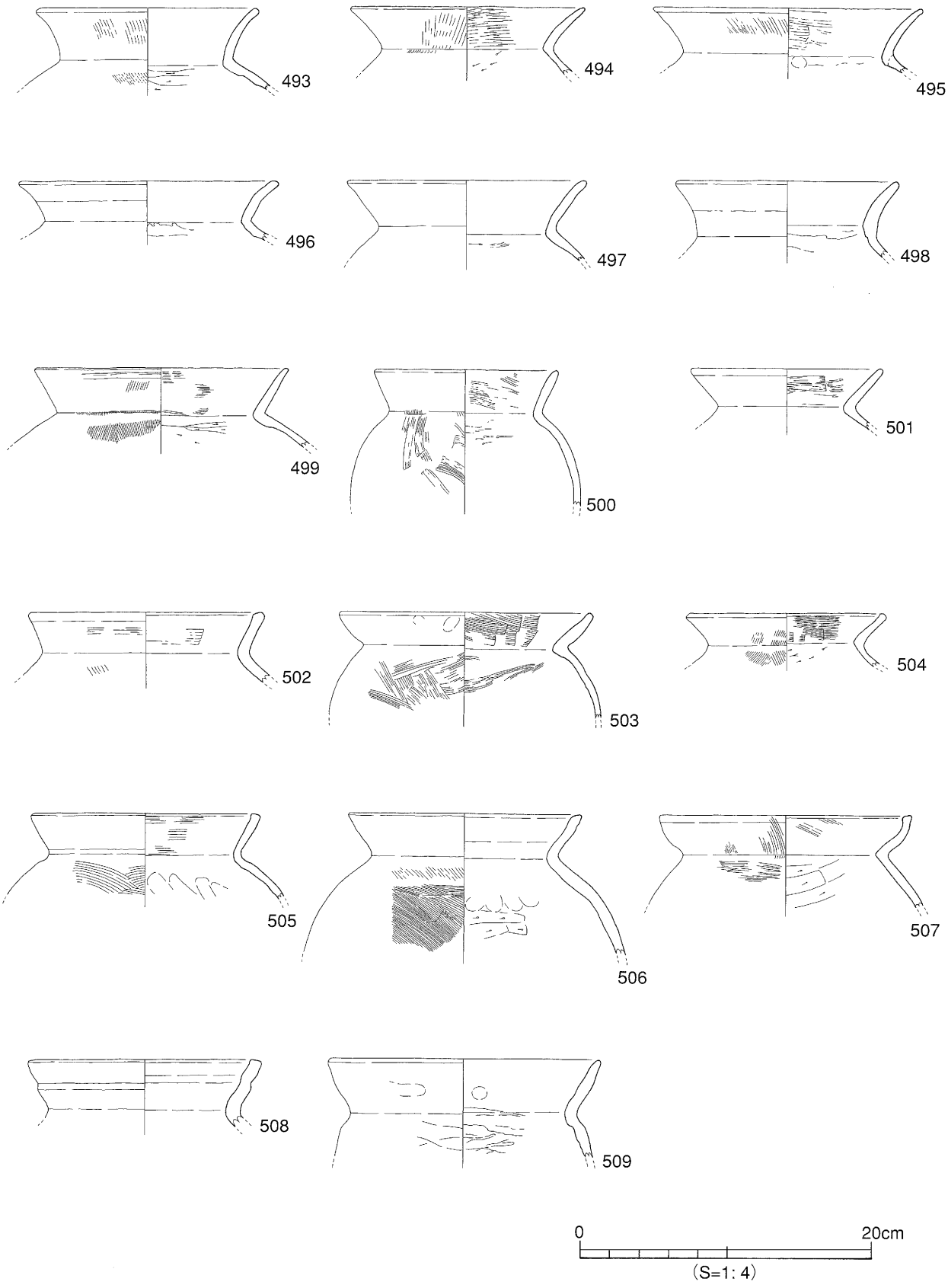
570～575は弥生土器の底部片である。570は器壁が厚い。573は突出する底部。底部外面に指頭痕を残す。575は外面タタキ調整、内面はハケメ調整である。

鉢形土器（576～607）

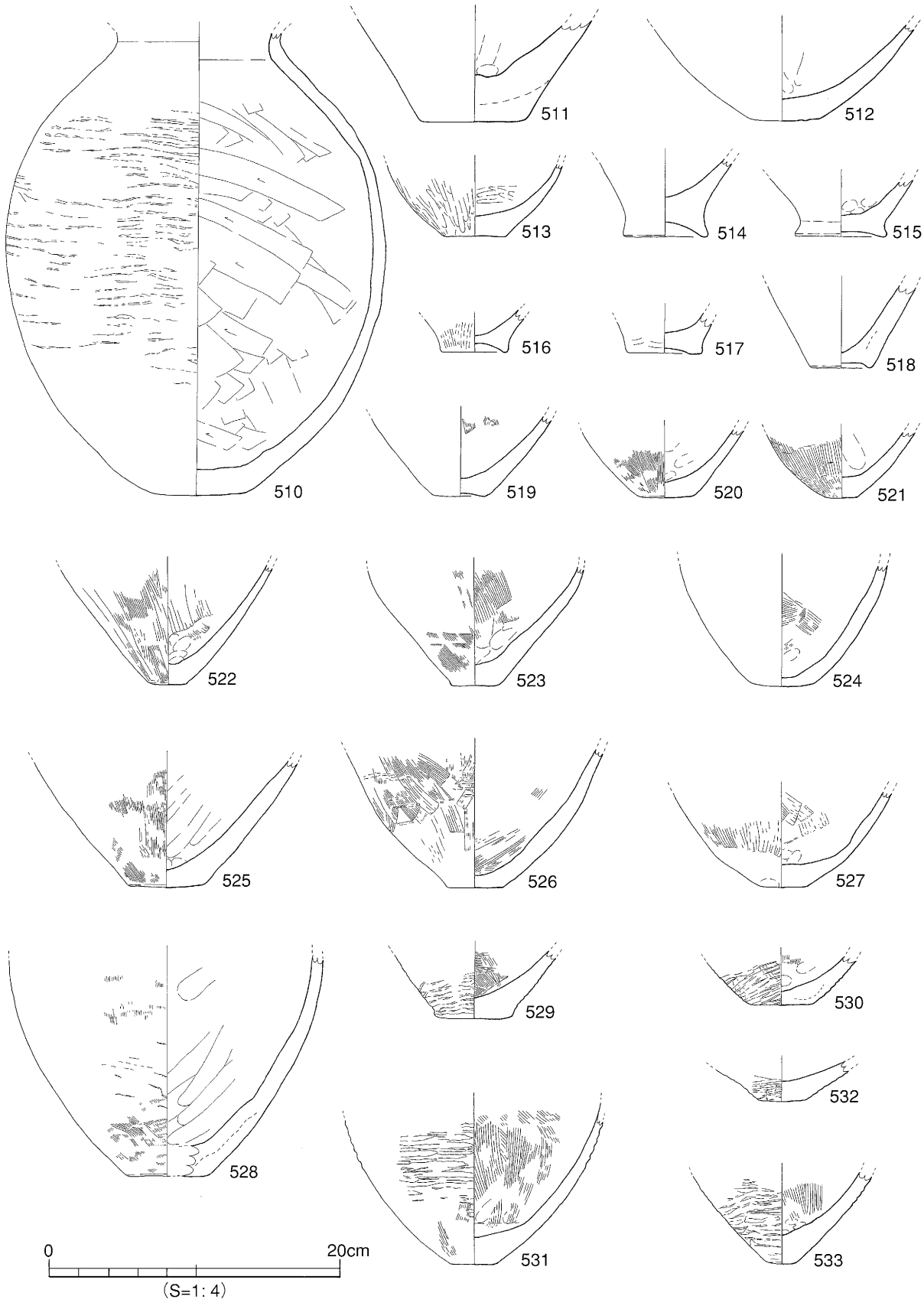
576は大型品。口縁端部はナデにより凹む。577・578は外面ハケメ調整のちナデ調整、内面はハケ



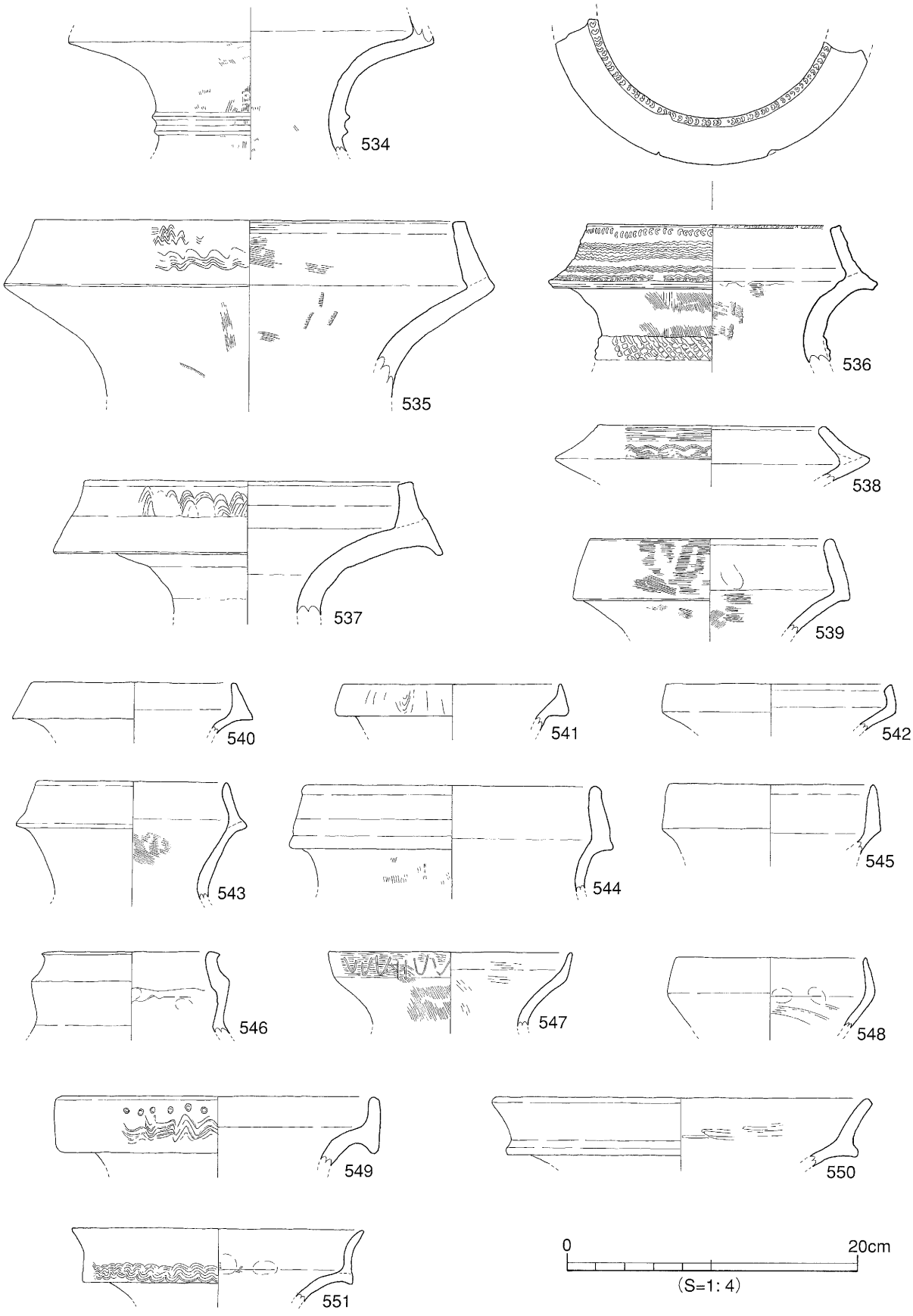
第118図　SR401下層出土遺物実測図（1）



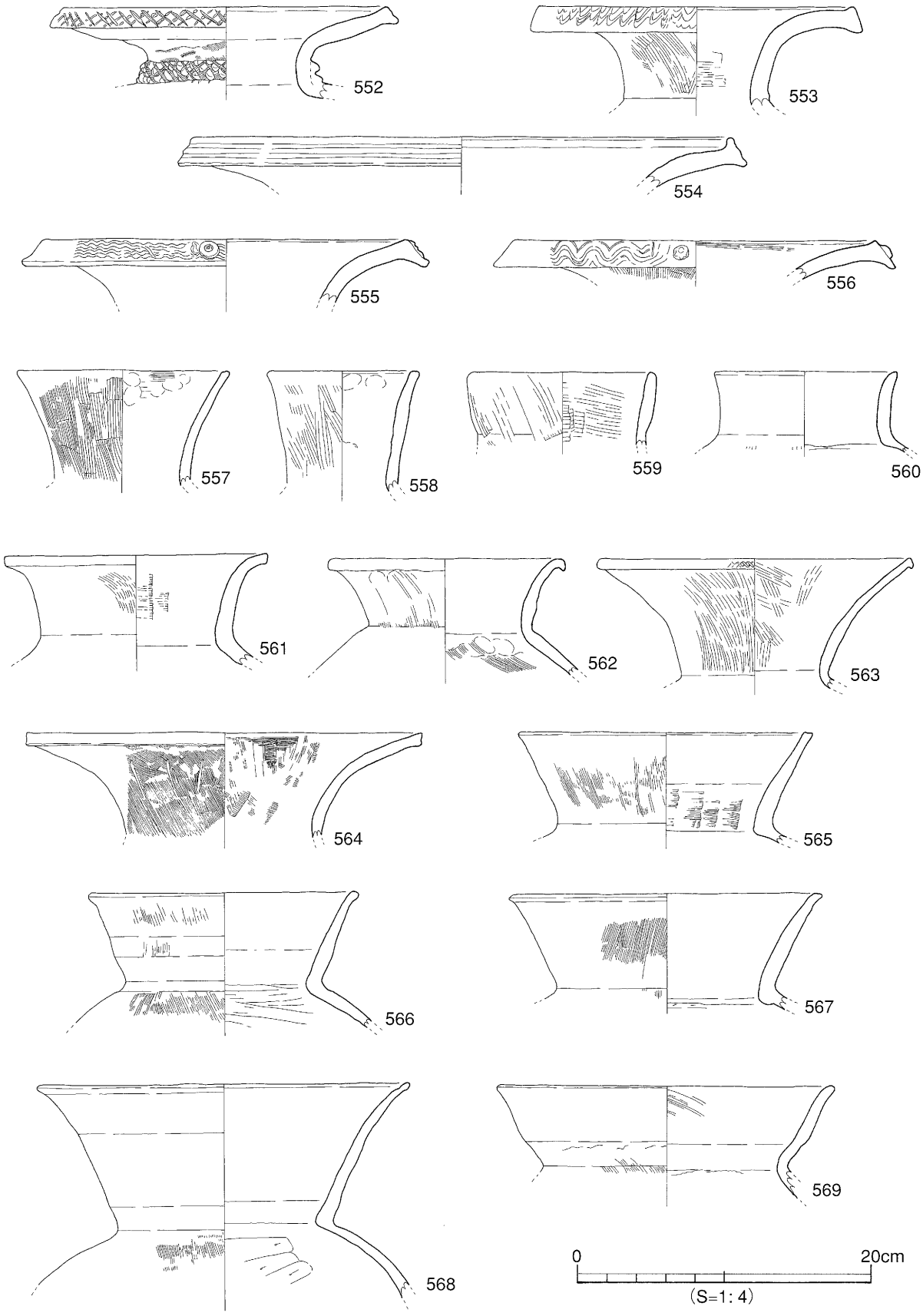
第119図　SR401下層出土遺物実測図（2）



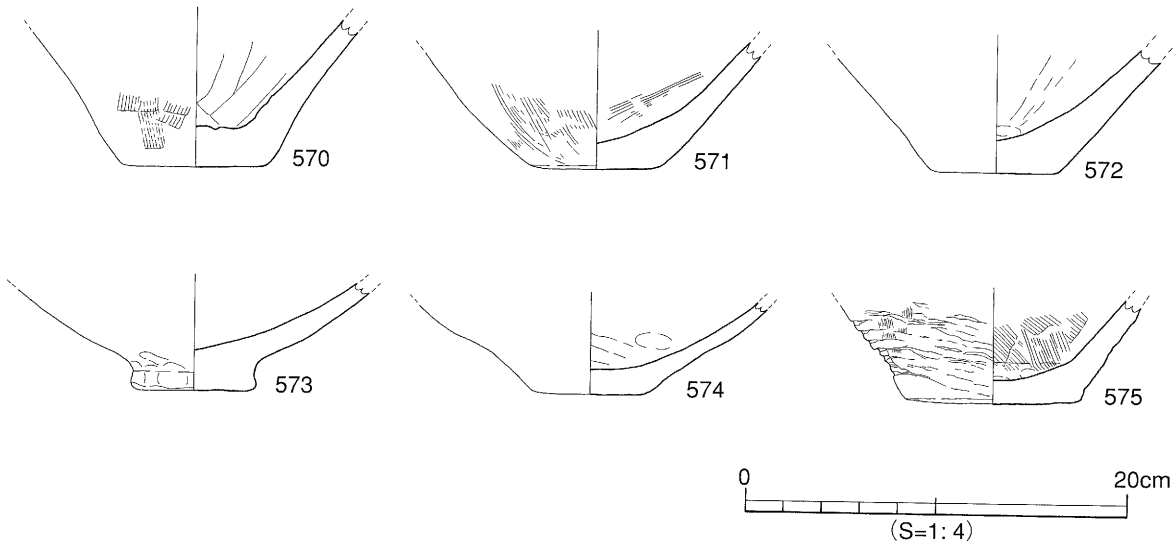
第120図　SR401下層出土遺物実測図（３）



第121図　SR401下層出土遺物実測図（4）



第122図　SR401下層出土遺物実測図（5）



第123図　SR401下層出土遺物実測図（6）

メ調整である。579・580の外面はタタキ、内面はハケメ調整である。580の口縁部は片口状を呈する。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケメ調整のちナデ調整される。581～585はボタン状に小さく突出する底部である。586～591は突出する底部。586は内湾気味に立ち上がる口縁部。内面の調整は、ハケメ調整のちナデ調整である。587は底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部である。588・590は底部外面に指頭痕を残す。592・593はくびれの上げ底である。594～602は丸味をおびた平底である。603は底部は丸く、外面にタタキ目痕を残す。604～607は底部に焼成前に孔を穿たれるものである。604の調整は内外面ともナデ調整である。内面には指頭痕を残す。605の外面はナデ調整、内面はハケメ調整のちナデ調整である。606の調整は外面タタキ、内面はナデ調整である。607の調整は外面はタタキ、内面はハケメ調整のちナデ調整である。

高坏形土器（608～642）

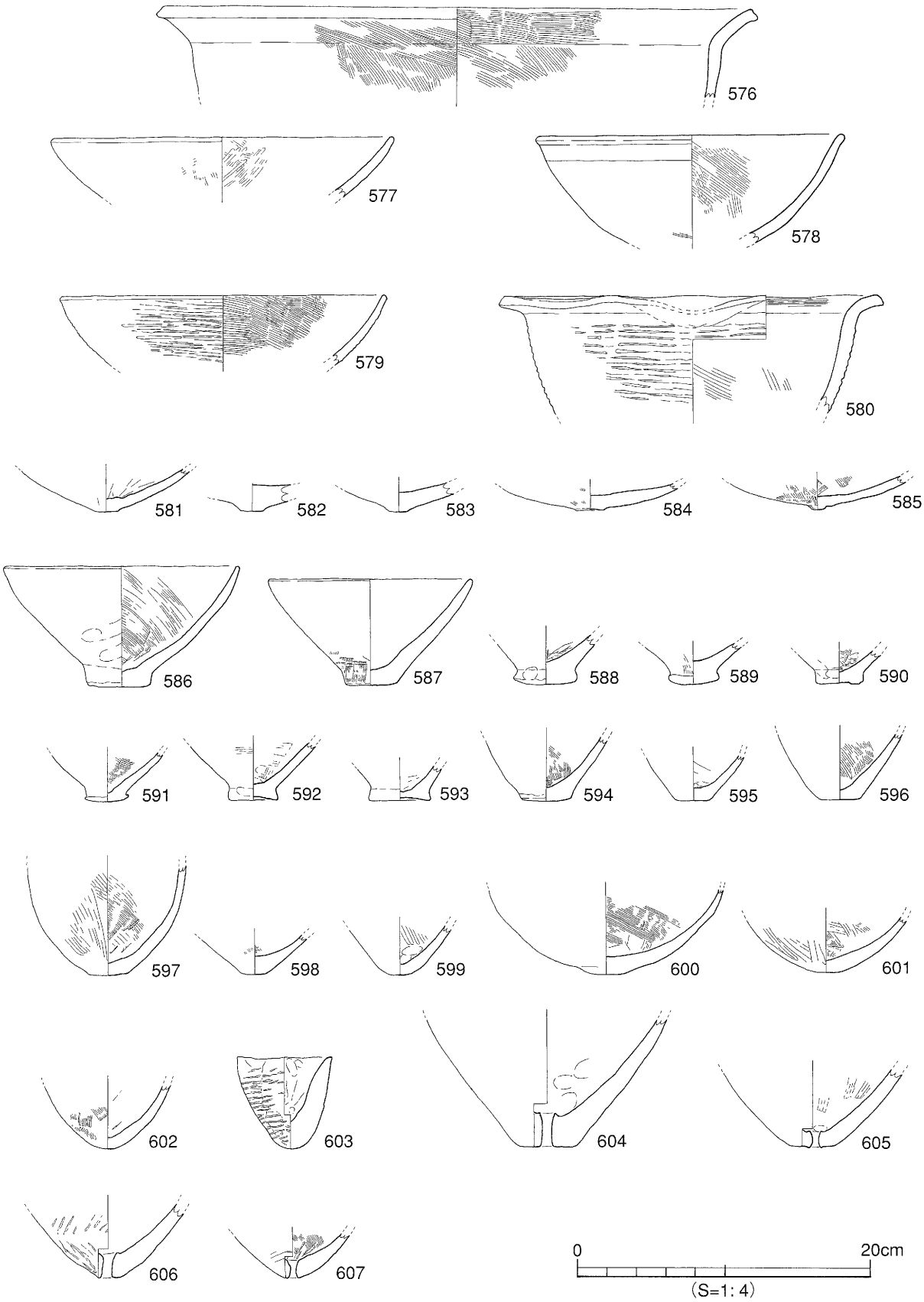
608は口縁部が水平気味に外反する。調整は摩滅のため不明である。609は口縁部が短く外反する。口縁部外面に波状文を施す。

610～617は口縁部が緩やかに外反する。614は完形品。口径23.2cm、器高15.1cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。裾は稜をもって屈曲する。坏部内外面の調整はナデ調整である。615は坏部が深く、接合部で段を有する。口縁端部は丸く仕上げる。616は口縁端部を丸く仕上げる。617は坏部の接合部外面に稜が残る。坏部内面の調整はハケメ調整のちナデ調整である。618～622は直線的に開く口縁部。618は坏部中位に稜をもつ。619は口縁端部を丸く仕上げる。622は口縁端部は尖りながら丸くおさめる。調整は内外面ともナデ調整である。

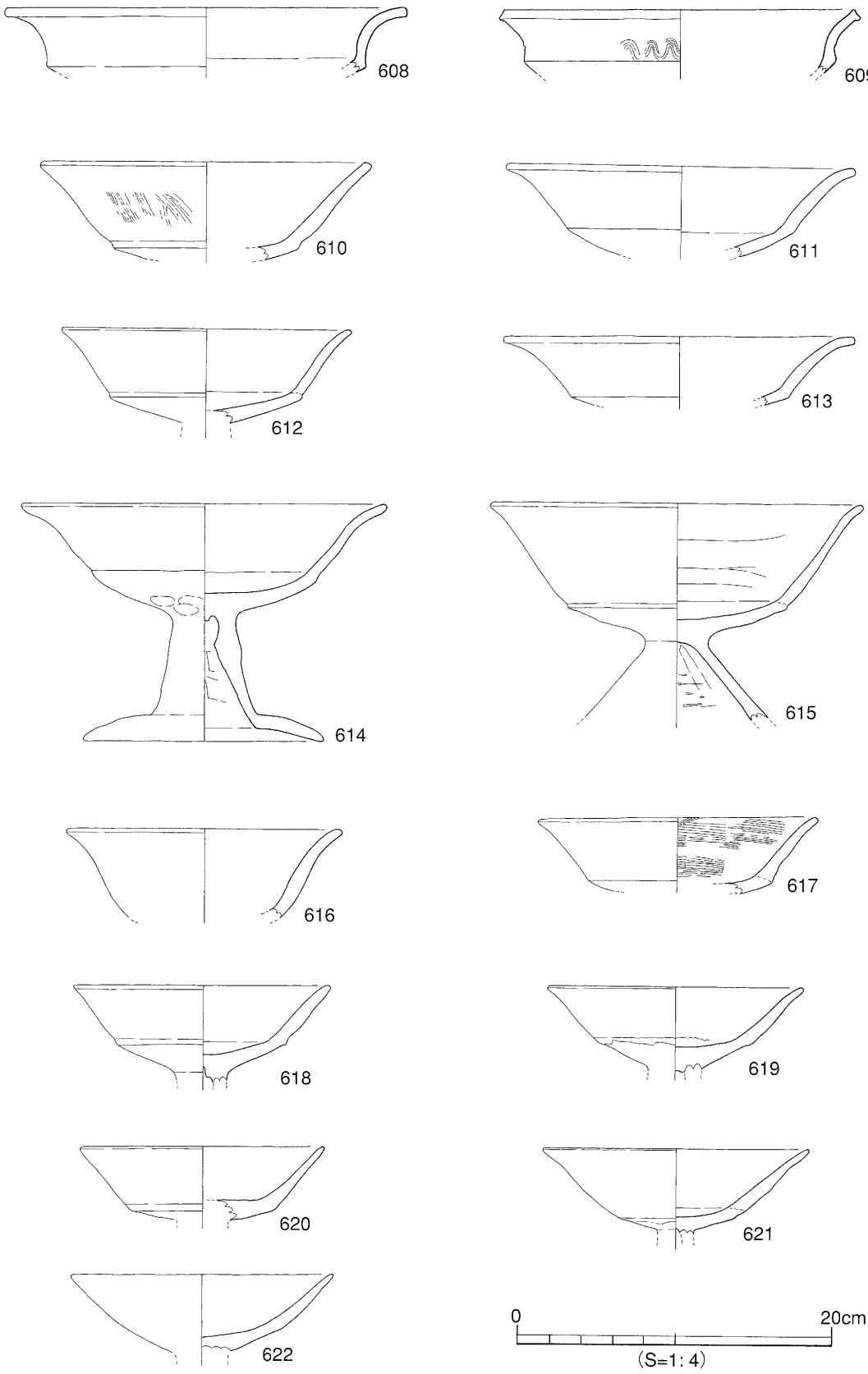
623～642は脚部片である。624は脚柱上位と下位に円孔が施される。627～638は脚柱の裾部境に稜をもって屈曲する。627は脚柱と裾部境に円孔を施す。639は脚柱部には、動物を模したと思われる線刻画が施されている。640～642は脚柱部が細いものである。641・642は裾部が稜をもって屈曲する。

器台形土器（643・644）

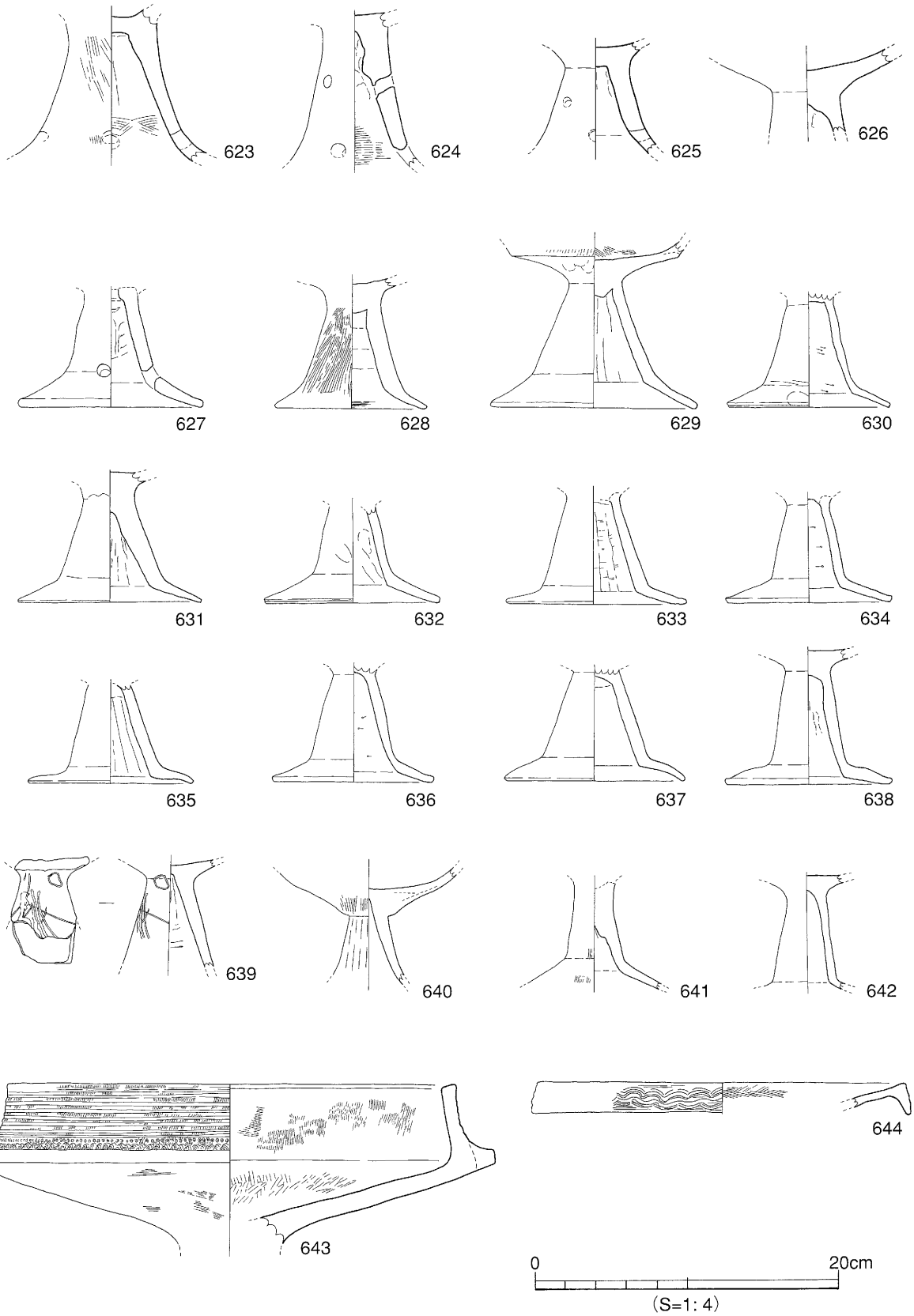
643は口縁部に6条の沈線を施し、竹管文、波状文を施す。受部内面はヘラミガキされる。644は口



第124図　SR401下層出土遺物実測図（７）



第125図　SR401下層出土遺物実測図（8）



第126図　SR401下層出土遺物実測図（９）

縁部が下垂する。口縁端部外面に波状文が施される。

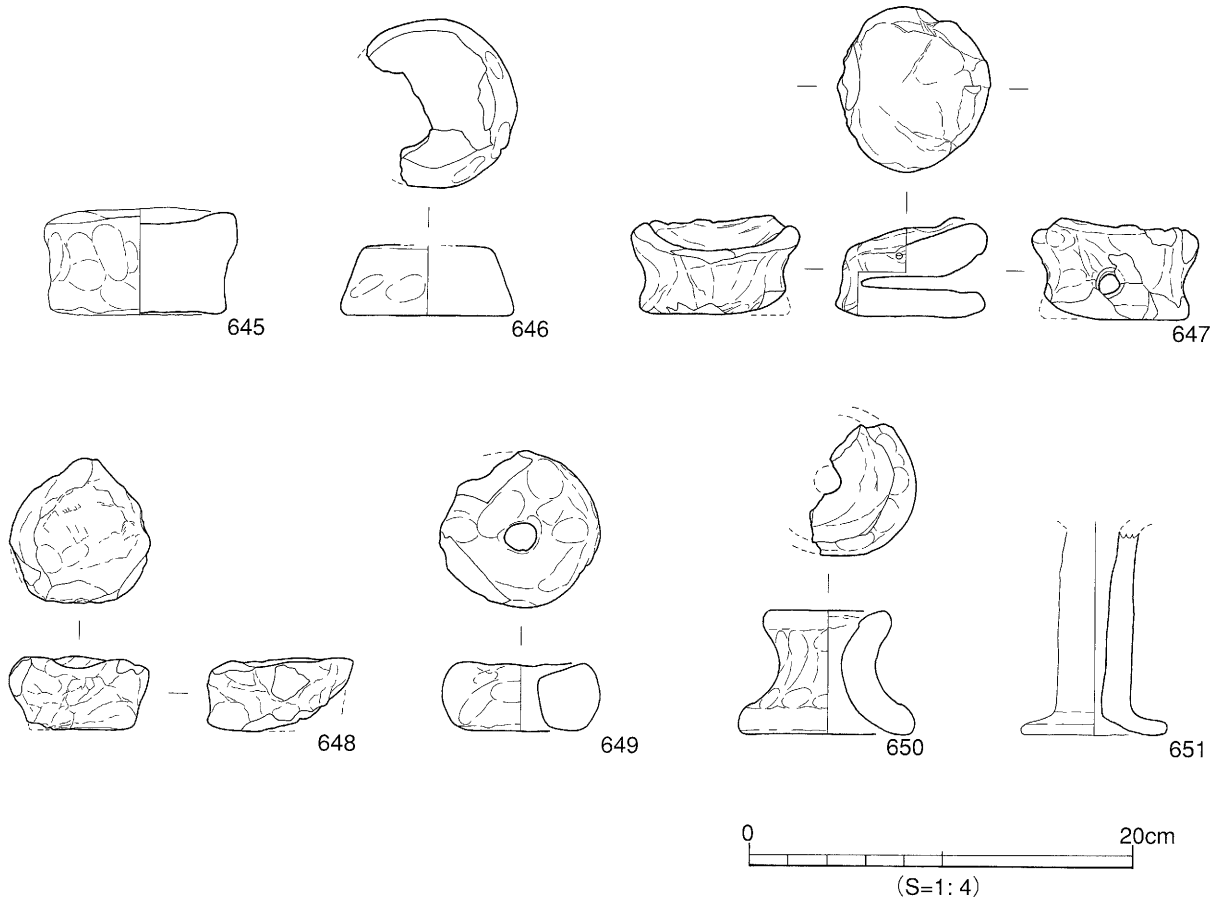
支脚（645～664）

645～649は器高が低い円柱状を呈し受部が凹む支脚である。645は受部径7.6cm、高さ4.2cmを測る。外面に指頭痕を残す。646は底径9.0cm、器高3.7cmを測る。647は側面から未完通の小孔が穿たれる。外面に指頭痕を残す。受部径8.7cm、器高5.3cmを測る。649は中心部に孔が穿たれる。

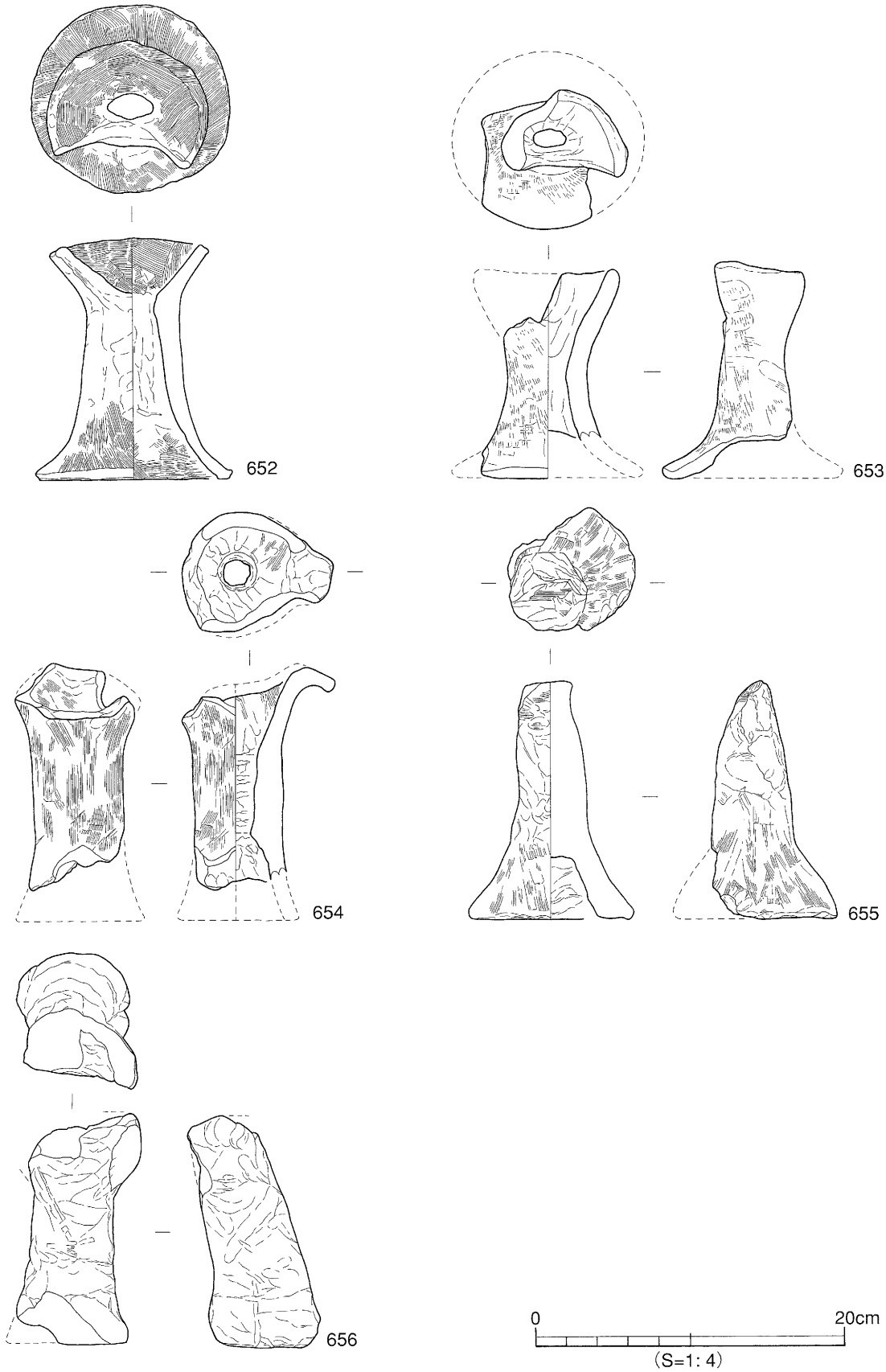
650～654は中空の支脚である。650は底部から内に傾斜して外湾する。651は開いた底部から円柱状に伸びるものである。調整は内外面ともナデ調整である。652～654は受部前面が傾斜する。652は完形品。受部径10.4cm、底径12.8cm、器高15.9cmを測る。外面の調整はハケメ調整のちナデ調整、受部内面はハケメ調整である。653の調整は外面がハケメ調整のちナデ調整、内面はナデ調整である。654の受部は後背部に把手状のつまみがつく。外面の調整はハケメ調整のちナデ調整される。

655は上げ底の底部から上方にのびて受部が扁平となる。口縁端部は先細る。調整はハケメ調整のちナデ調整である。656～664は角状の突起がつくものである。656は中実のものである。外面の調整は指頭痕を残したナデ調整である。

657～661は外面にタタキ痕を残す。657・658は背部に鰭状の突起をもつ。659・660は背部に突起がつく。661～663は角状突起の間に焼成前の円孔が穿たれる。664の受部の突起は断面形が丸く、丁寧なナデを施している。



第127図　SR401下層出土遺物実測図（10）



第128図　SR401下層出土遺物実測図（11）

第129図　SR401下層出土遺物実測図（12）

小型丸底壺（665～672）

665～668は胴部最大径と口径がほぼ同じものである。665は推定口径9.2cm、器高8.3cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。頸部にハケメを残す。666は推定口径8.3cm、器高8.5cmを測る。口縁部内面は、横方向のハケメ調整が施される。667は口径8.7cm、器高8.2cmを測る。調整は、内外面ともナデ調整である。668は口径8.7cm、器高9.0cmを測る。調整は、内外面ともナデ調整である。669は胴部最大径が口径より大きい。口径8.2cm、器高8.6cmを測る。調整は、内外面ともナデ調整である。670は外面ハケメ調整、内面はハケメ調整のちナデ調整である。671は内外面ともナデ調整である。672は胴部形が球形を呈し頸部が窄まる。調整は、内外面ともナデ調整である。

坏（673）

673は底部から内湾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は尖り気味。内外面に指頭痕を残す。推定口径9.8cm、器高3.2cmを測る。

瞿（674）

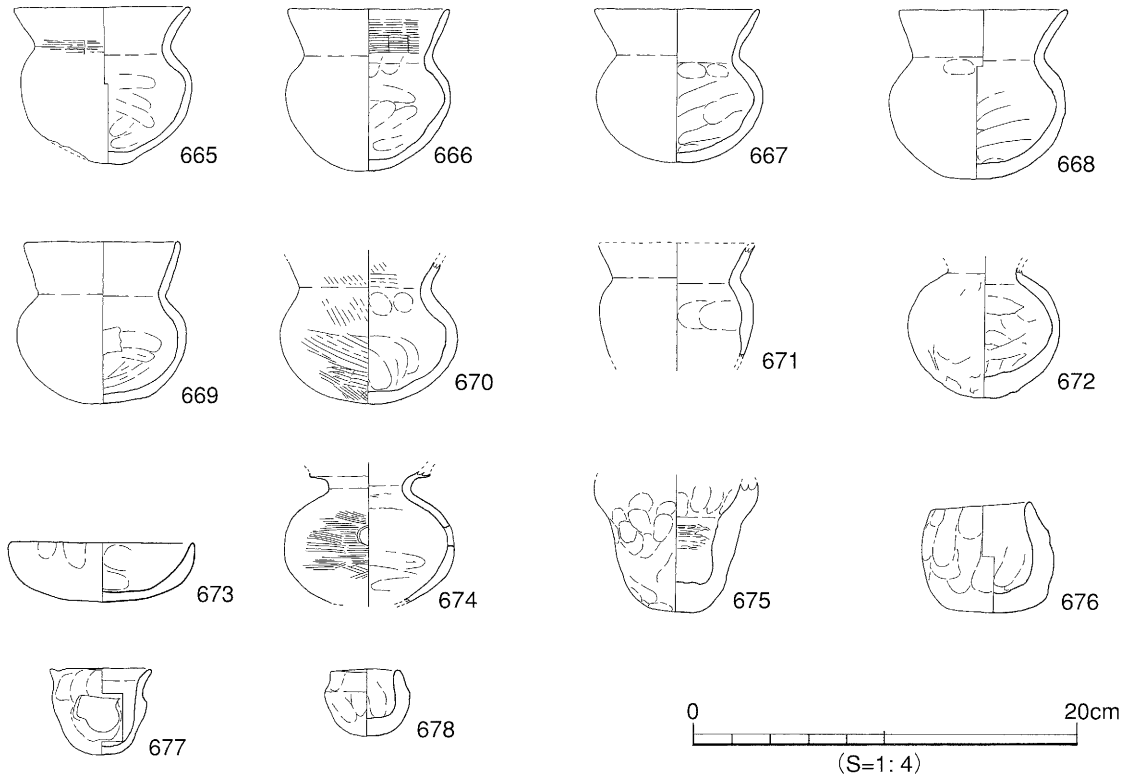
674は赤焼けである。口縁部と底部は欠失する。残高は7.0cmを測る。胴外面はハケメ調整である。

手捏土器（675～678）

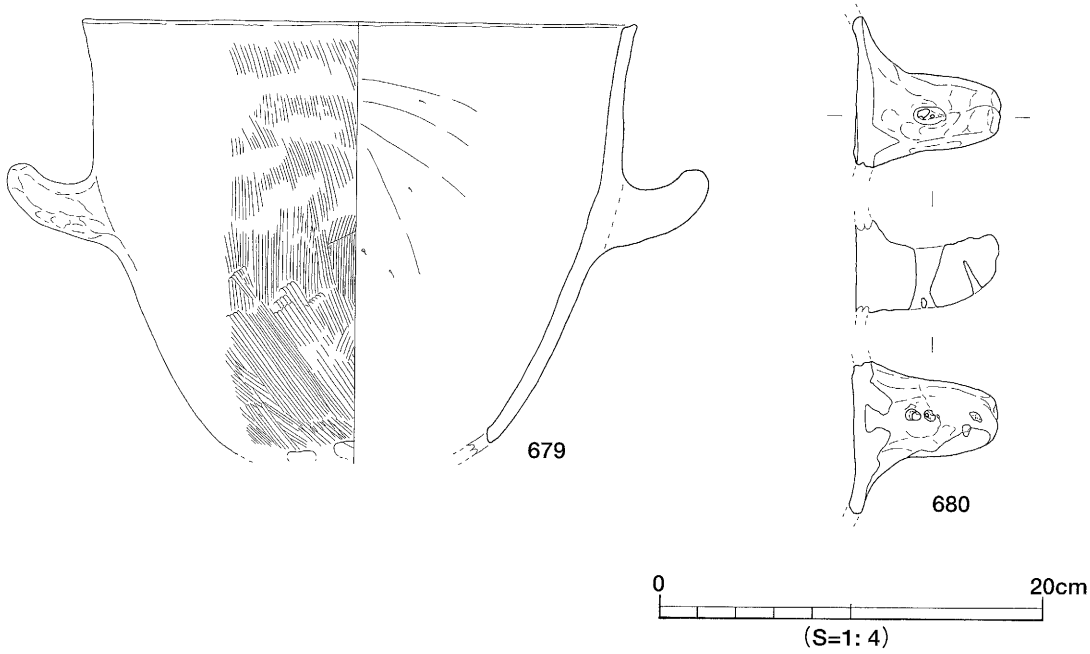
675～678は内外面とも指頭痕を残す。675は器壁が厚い。残高7.0cmを測る。676は口径5.3cm、器高5.9cmを測る。677は口径5.4cm、器高4.6cmを測る。口縁部が外反する。678は口径3.7cm、器高3.6cmを測る。

甑（679・680）

679は把手が胴中位につく。推定口径28.8cm、残高22.6cmを測る。調整は外面が縦方向のハケメ調



第130図　SR401下層出土遺物実測図（13）



第131図　SR401下層出土遺物実測図（14）

整、胴部内面は強いナデ調整、口縁部内面はヨコナデ調整が施される。680は把手部である。貫通する円孔と未完通の円孔が穿たれる。指頭痕を残す。

（2）石製品

石包丁（681～683）

681は5層中からの出土で、直背弧刃形を呈する大型の石包丁である。現存長20.1cm、幅6.3cm、厚さ0.5cmを測る。材質は層灰岩である。北部九州地方からの搬入品と思われる。682は長さ9.0cm、幅4.2cm、厚さ0.9cmを測る。683は長さ13.4cm、幅6.4cm、厚さ1.8cmを測る。自然面を両面に残している。682・683とも研磨段階の未製品と考えられる。

石斧（684・685）

684は柱状片刃石斧である。現存長10.3cm、現存幅3.3cm、厚さ2.3cmを測る。685は扁平片刃石斧である。現存長6.5cm、幅3.2cm、厚さ1.1cmを測る。

砥石（686～688）

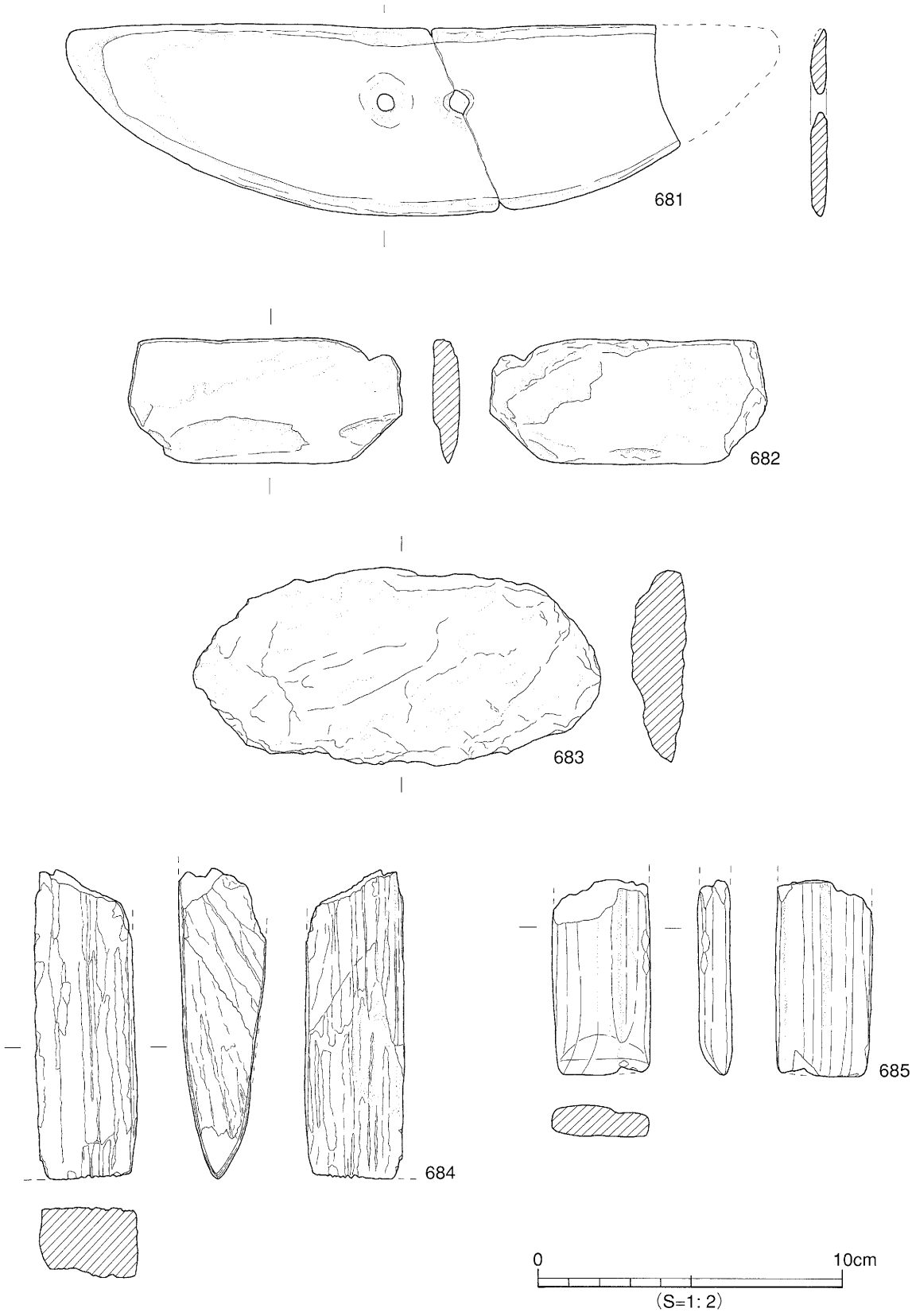
686は重量1.85kgを測る。3面が使用されている。材質は灰色の砂岩質である。687・688の色調は黄白色を呈する。

台石（689・690）

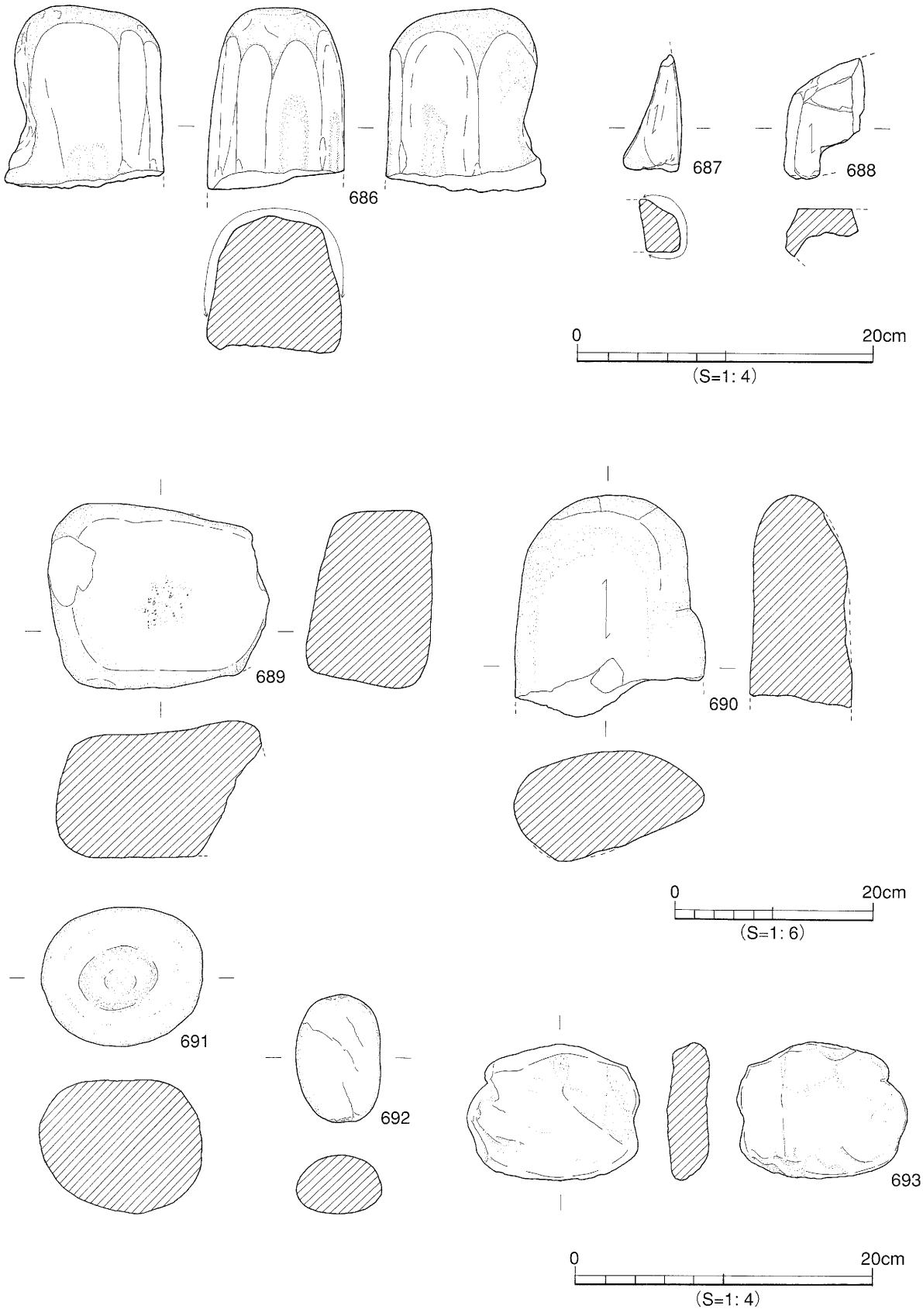
689・690は片面を機能面として使用している。689は打痕を残す。長さ21.8cm、現存幅19.5cm、重さ7.7kgを測る。材質は砂岩である。690は擦り面をもつ。現存長22.5cm、幅19.0cm、重さ6.3kgを測る。材質は砂岩である。

敲石（691・692）

691は片面に使用痕跡を残す。長さ10.8cm、幅9.5cm、重さ1.19kgを測る。692は両端に使用痕跡を残



第132図　SR401下層出土遺物実測図（15）



第133図　SR401下層出土遺物実測図（16）

す。長さ8.8cm、幅5.7cm、重さ254.7ｇを測る。材質は砂岩である。

石錘（693）

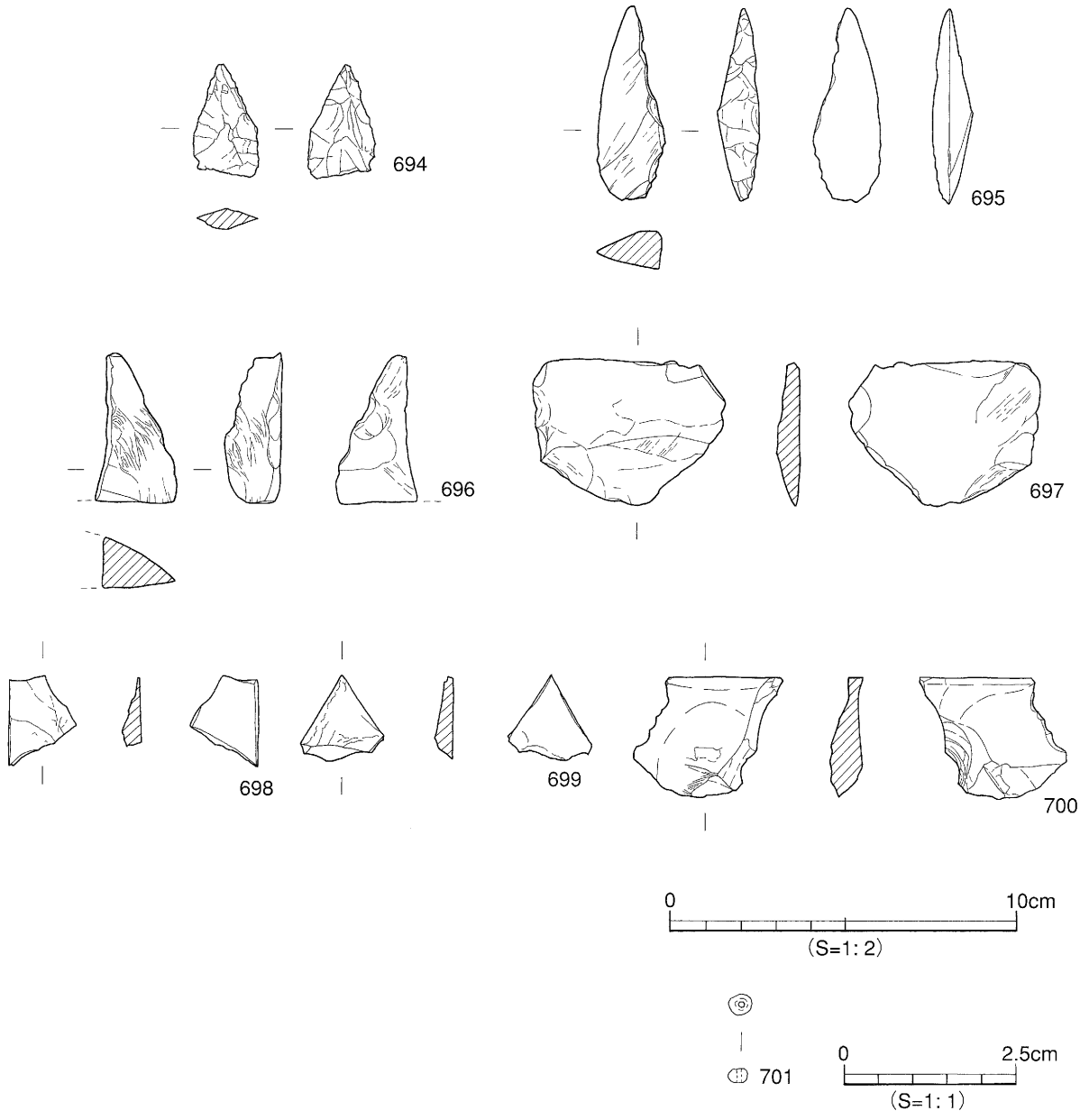
693は扁平な石材の両端に小さな抉りをいれている。長さ11.4cm、幅9.3cm、厚さ2.8cm、重さ454ｇを測る。材質は砂岩である。

石鏃（694）

694は長さ3.4cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測る。材質は赤色チャートである。

ナイフ形石器（695）

695は縦長剥片の鋭利な一辺を刃部としている。背面には調整痕がある。長さ5.7cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmを測る。



第134図　SR401下層出土遺物実測図（17）

剥片（696～700）

698の材質は赤色チャート、695・696・699・700はサヌカイトである。

（3）装飾品

ガラス小玉（701）

701の色調は淡い水色を呈する。直径0.3cm、孔径0.1cmを測る。

（4）木製品

樹種が判るものに702・704・705・707・708・710・713がある。

702～709は杭である。702は長さ77.8cm、幅3.7cm、厚さ4.4cmを測る。3面を削りだして先端を尖らせている。樹皮が部分的に残る。樹種はヒサカキ属である。703は片方を削りだして先端を尖らせている。704・705は板状で厚さが薄いものである。704は長さ40cm、幅2.6cm、厚さ1.8cmを測る。樹種はヒノキである。705は長さ33.9cm、幅2.7cm、厚さ1.4cmである。樹種はコウヤマキである。706は長さ17.2cm、幅4.9cm、厚さ4.7cmを測る。707は現存長15.0cm、幅4.1cm、厚さ3.7cmを測る。樹種はヤブツバキである。708は長さ17.7cm、幅2.6cm、厚さ3.2cmを測る。樹種はサカキである。

710は用途不明品。長さ57.7cm、幅3.2cm、厚さ1.7cmを測る。樹種はヒノキである。

711・712は加工材である。711は現存長13.8cm、幅7.5cm、厚さ6.7cmを測る。712は現存長9.5cm、幅4.0cm、厚さ3.2cmを測る。

713は曲物で底板と考えられる。長さ13.0cm、幅5.0cm、厚さ0.6cmを測る。樹種はヒノキである。

714は先端が鉈状を呈する加工材である。現存長24.3cm、幅1.3cm、厚さ1.2cmを測る。

中層出土遺物（第137図、図版60）

中層からは、6世紀代の須恵器と11世紀代の土師器のほか、臼玉、ガラス小玉が出土しているが出土遺物の量は少ない。

（1）土製品

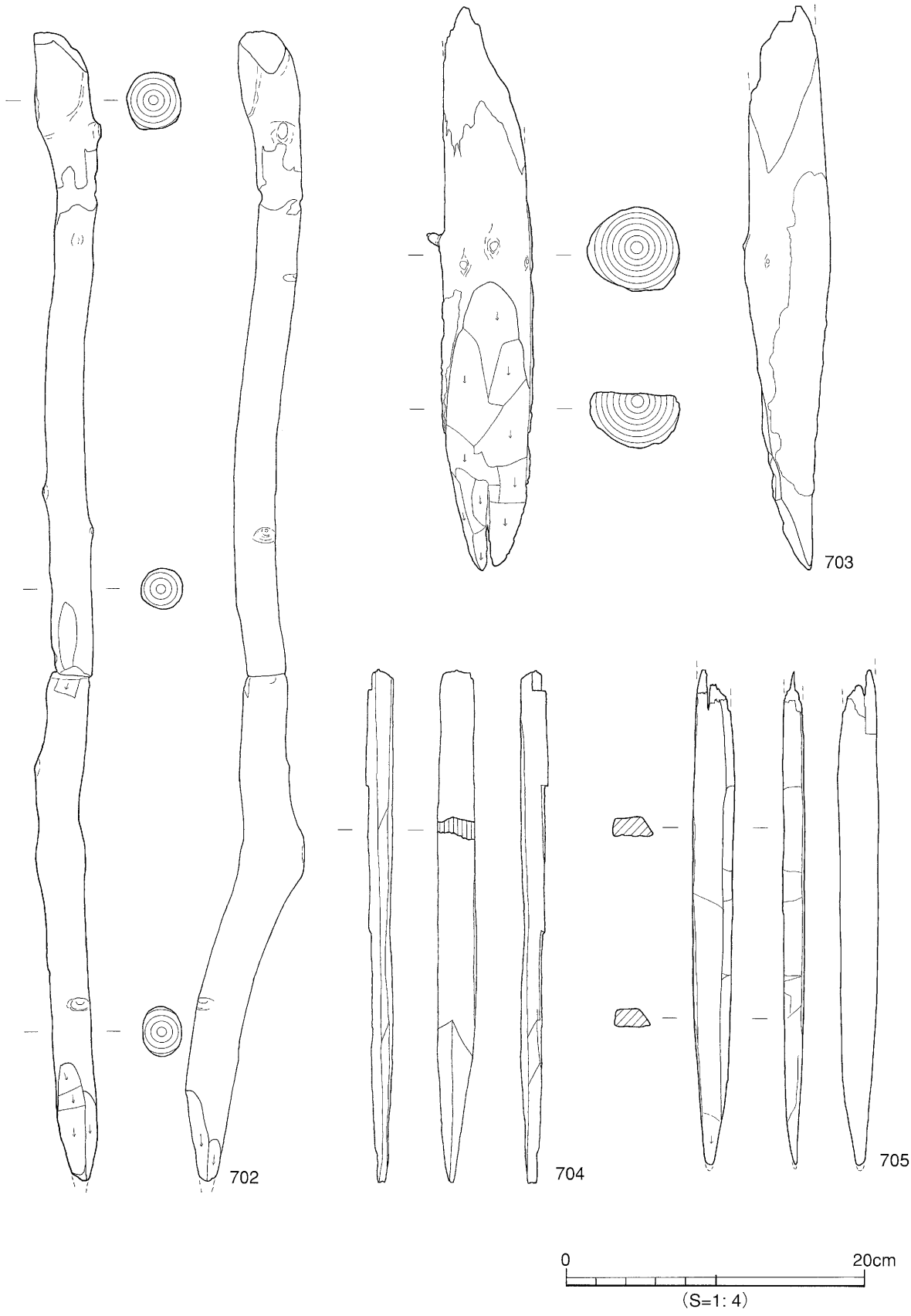
須恵器（715～721）

715～717は坏蓋である。715は口縁部と天井部の境が不明瞭となる。口縁端部は、内に傾斜する面をもつ。口径13.2cm、器高4.3cmを測る。716は天井部が扁平で、天井部と口縁部を分ける稜が丸味を帯びる。口縁端部は、内に傾斜する面をもつ。口径12.8cm、器高4.0cmを測る。717は丸い天井部で天井部と口縁部の境は沈線となる。推定口径13.6cm、器高5.0cmを測る。

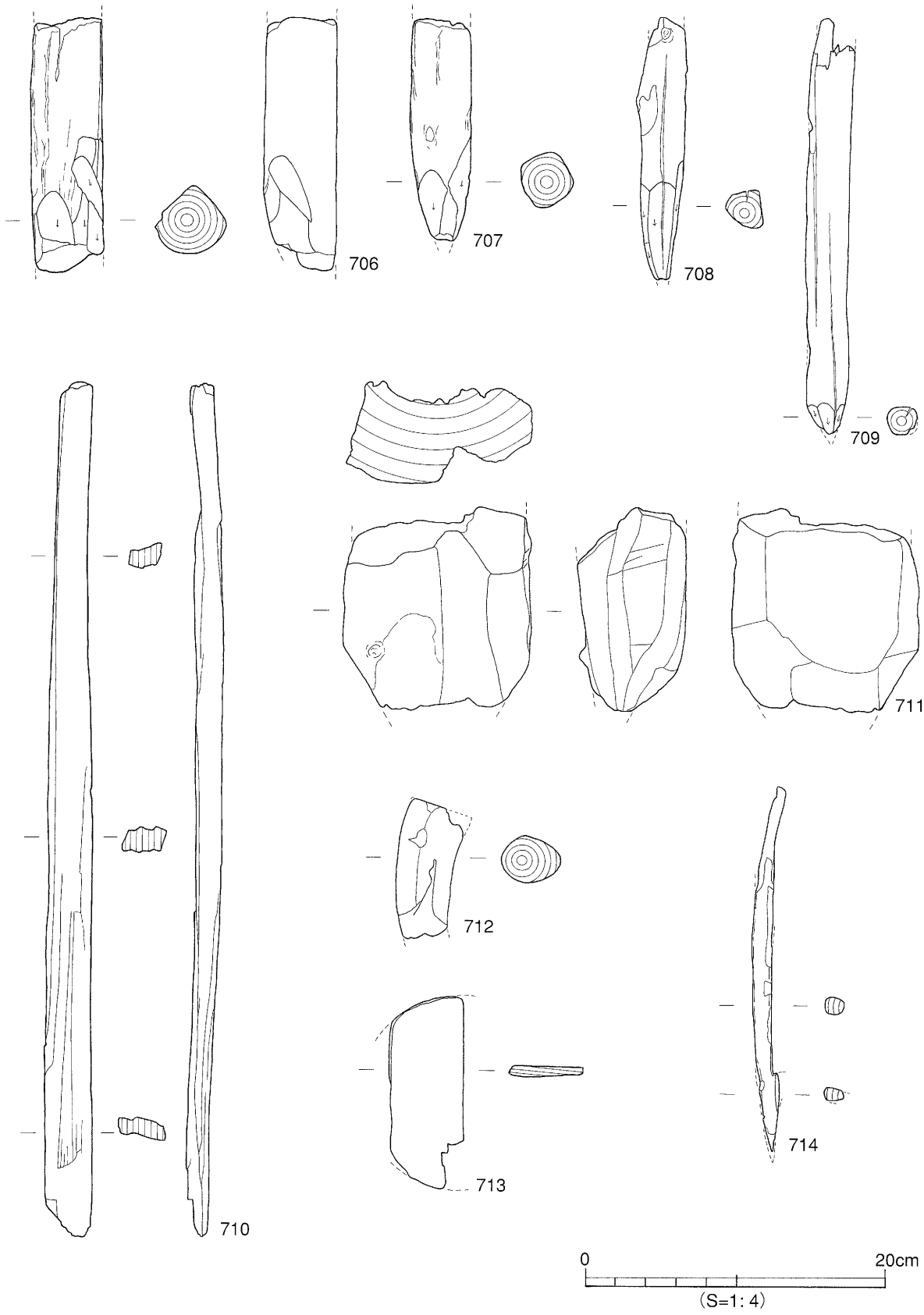
718～721は坏身である。718の立ち上がりは、内に傾斜し端部は面をもつ。受部は水平にのびる。推定口径11.0cm、残高4.7cmを測る。719は立ち上がりが短く端部は丸い。受部は上方にのびる。推定口径13.2cm、残高3.0cmを測る。720は立ち上がりの端部が尖る。受部は上方にのびる。推定口径13.2cm、残高2.7cmを測る。721は受部が短く水平にのびる。体部は扁平で浅い。

土師器坏（722～726）

722は器壁が薄い。底部外面はナデ調整。723は推定底径7.0cm、残高1.9cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。724は底径5.8cm、残高2.8cmを測る。725は底部の切り離しは回転ヘラ切りである。726は推定底径6.5cm、残高1.6cmを測る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。



第135図　SR401下層出土遺物実測図（18）



第136図　SR401下層出土遺物実測図（19）

（２）装飾品

727は滑石製の臼玉である。直径0.4㎝、孔径0.2㎝を測る。

728はガラス小玉である。色調は紺色を呈する。直径0.7㎝、孔径0.2㎝を測る。

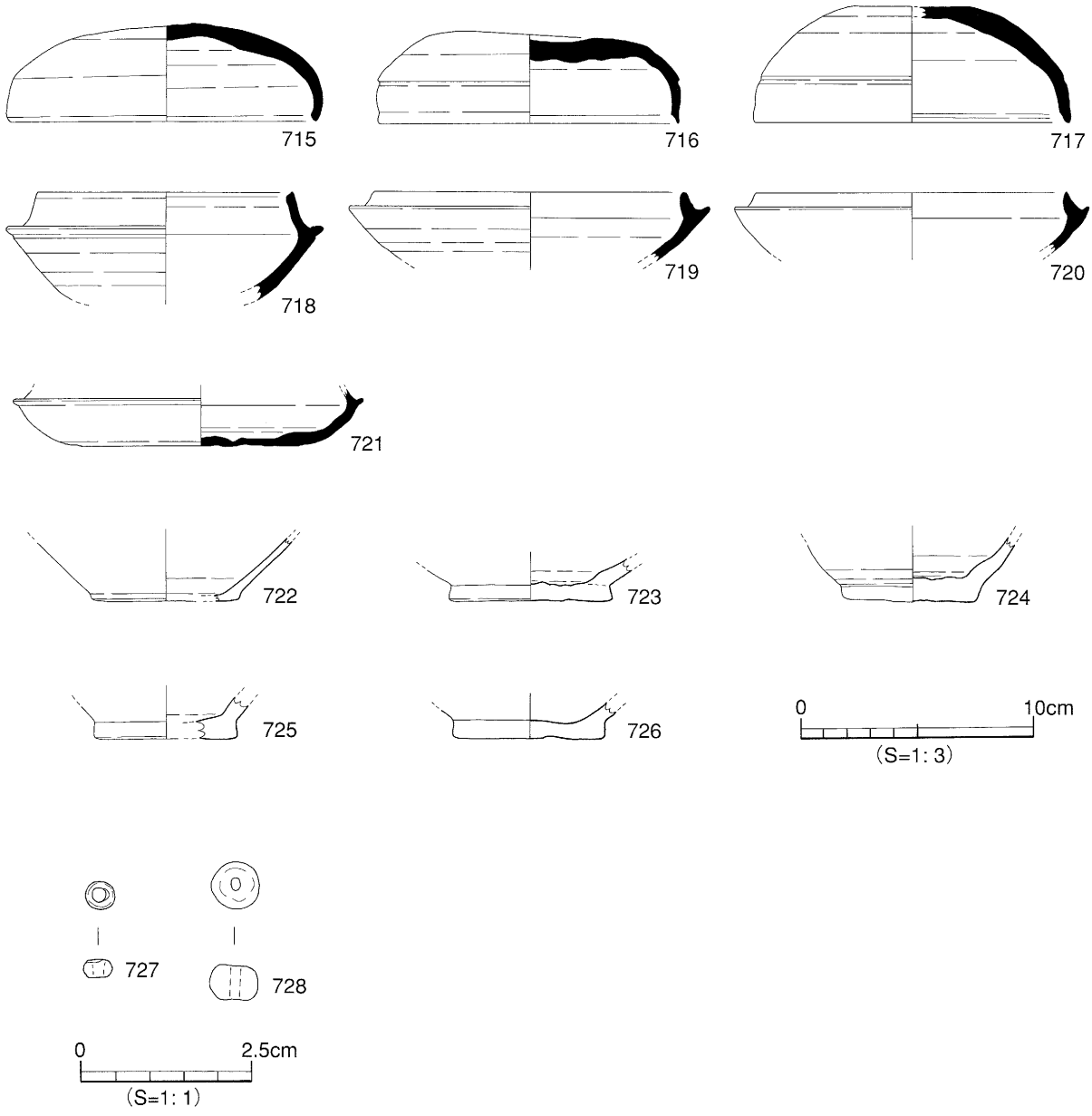
上層出土遺物（第138～140図、図版60）

上層からは、弥生時代～中世までの遺物が出土しているが出土遺物の量は少ない。

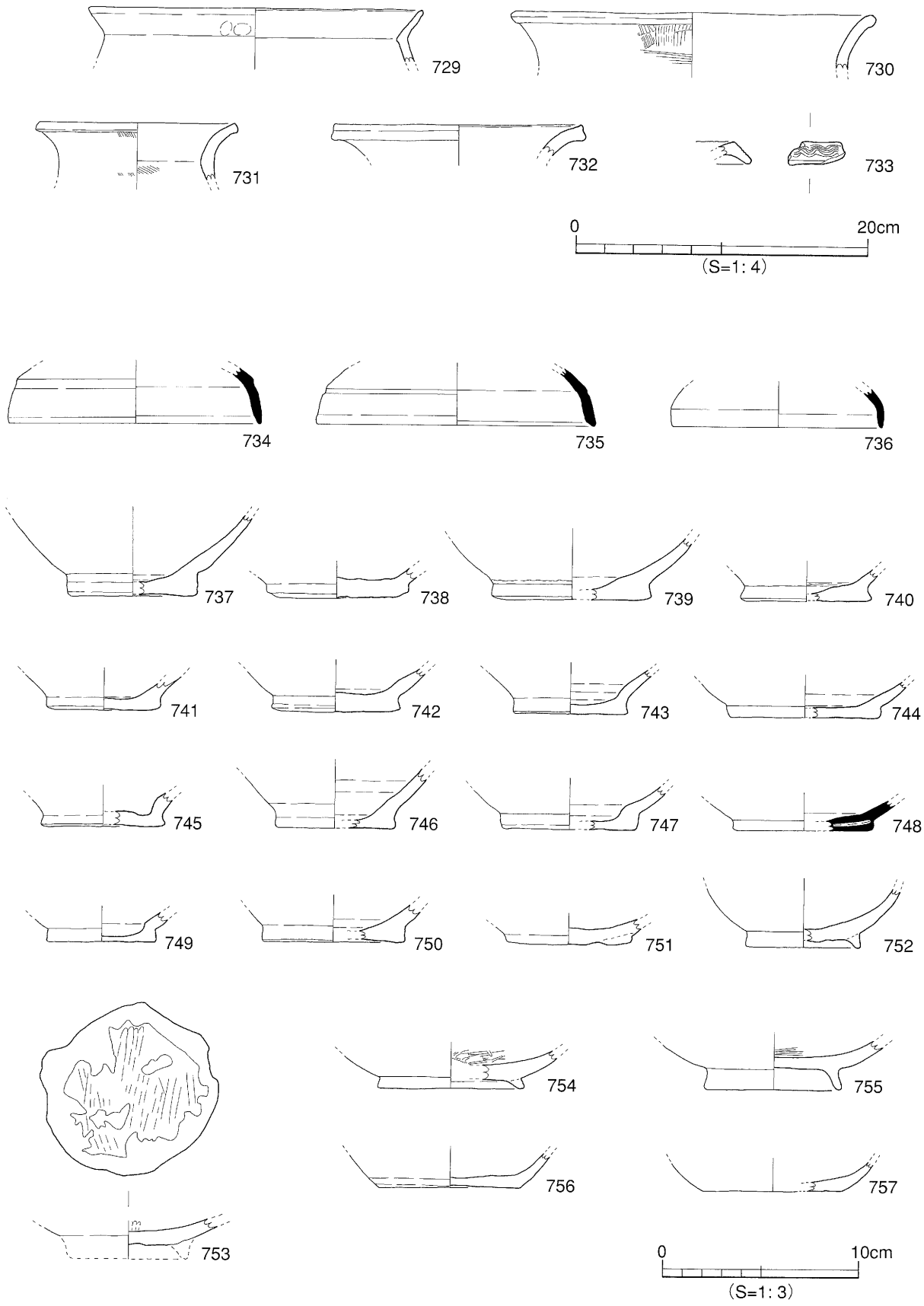
（１）土製品

弥生土器（729～733）

729・730は甕形土器。729は頸部の締まりが緩い。730は口縁部が外反する。731～733は壺形土器。



第137図　SR401中層出土遺物実測図



第138図　SR401上層出土遺物実測図（1）

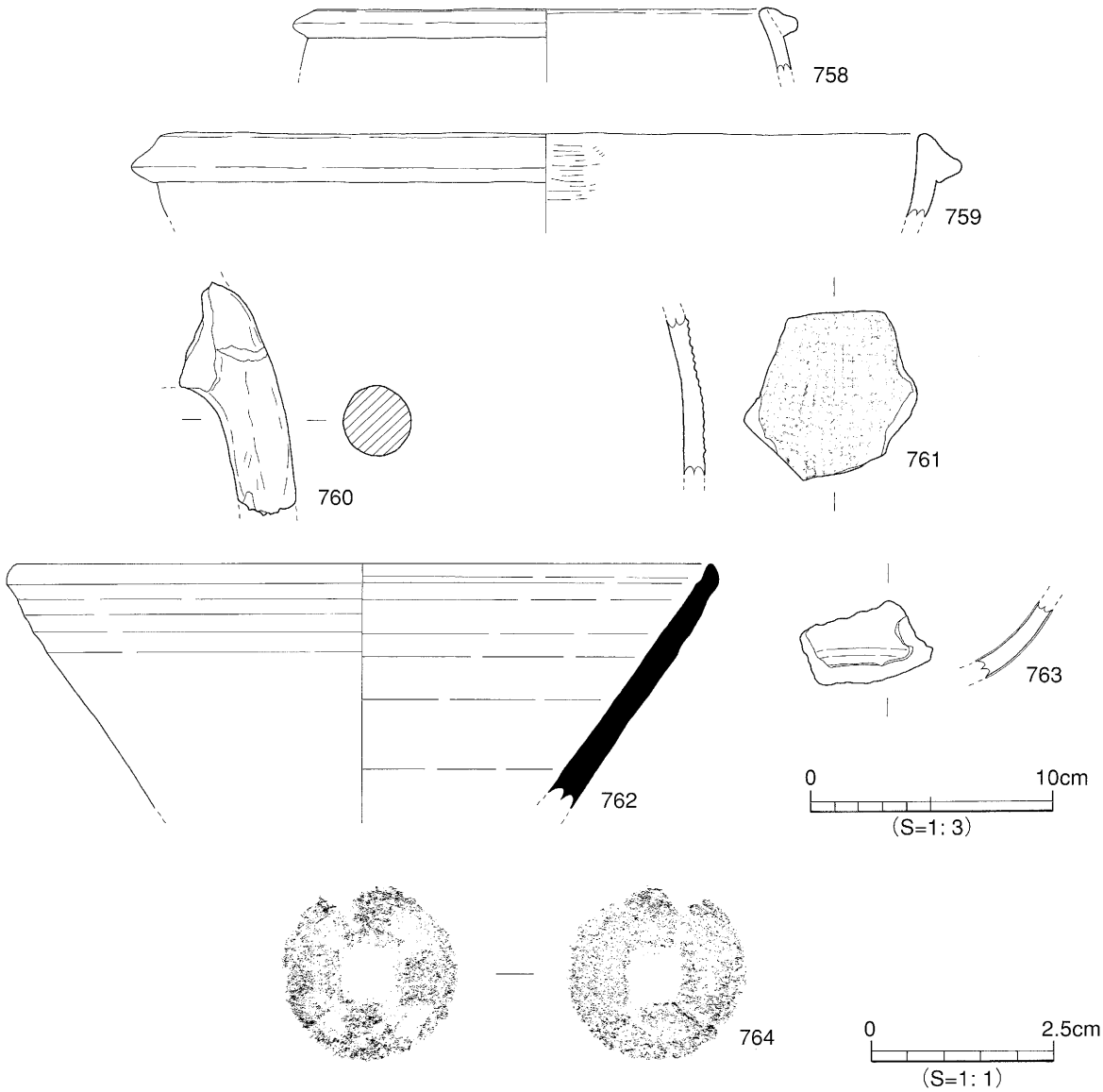
731は短い頸部から外反する口縁部。732の口縁端部は強いナデにより凹む。733は口縁が下垂する。口縁端部に波状文が施される。

須恵器（734～736）

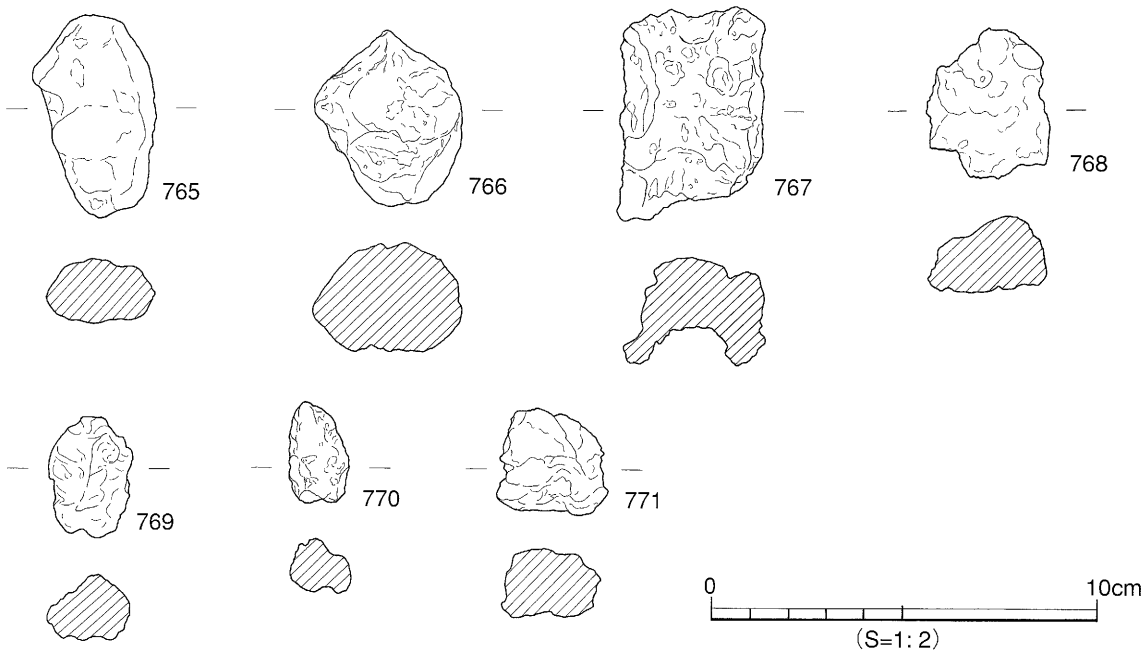
734～736は坏蓋である。734・735は天井部と口縁部をわける稜が丸味を帯びる。口縁端部は内に傾斜する面をもつ。734は推定口径13.0㎝、残高2.9㎝を測る。735は推定口径14.2㎝、残高3.0㎝を測る。736は天井部と口縁部の稜が失われ不明瞭となる。口縁端部は丸く仕上げられる。推定口径10.8㎝、残高2.0㎝を測る。

土師器坏（737～750・756・757）

737～750は底部片である。底部の切り離しは737・738・742・743・745が回転ヘラ切り、756・757は回転糸切りである。748の底部外面はナデ調整される。他の底部の切り離しについては、摩滅のため不明である。



第139図　SR401上層出土遺物実測図（２）



第140図　SR401上層出土遺物実測図（３）

土師器椀（751～755）

751の輪高台はつぶれて扁平となる。752～755は内黒の黒色土器である。

その他（758～763）

758～760は土師器羽釜である。758・759は口縁端部直下に隆帯が貼付される。760は羽釜の脚部片である。761は亀山焼の胴部片で外面に格子状のタタキが施される。762は東播系須恵器こね鉢。763は青磁碗である。

（２）銭貨

764は「天聖元寶」で初鋳年1023年である。

（３）鉄滓

765～771は鉄滓である。766は出土した中では最も重く、重量は45.23ｇを測る。

時期　上層から出土した土師器羽釜の形態より15世紀には完全に埋没したものと考える。

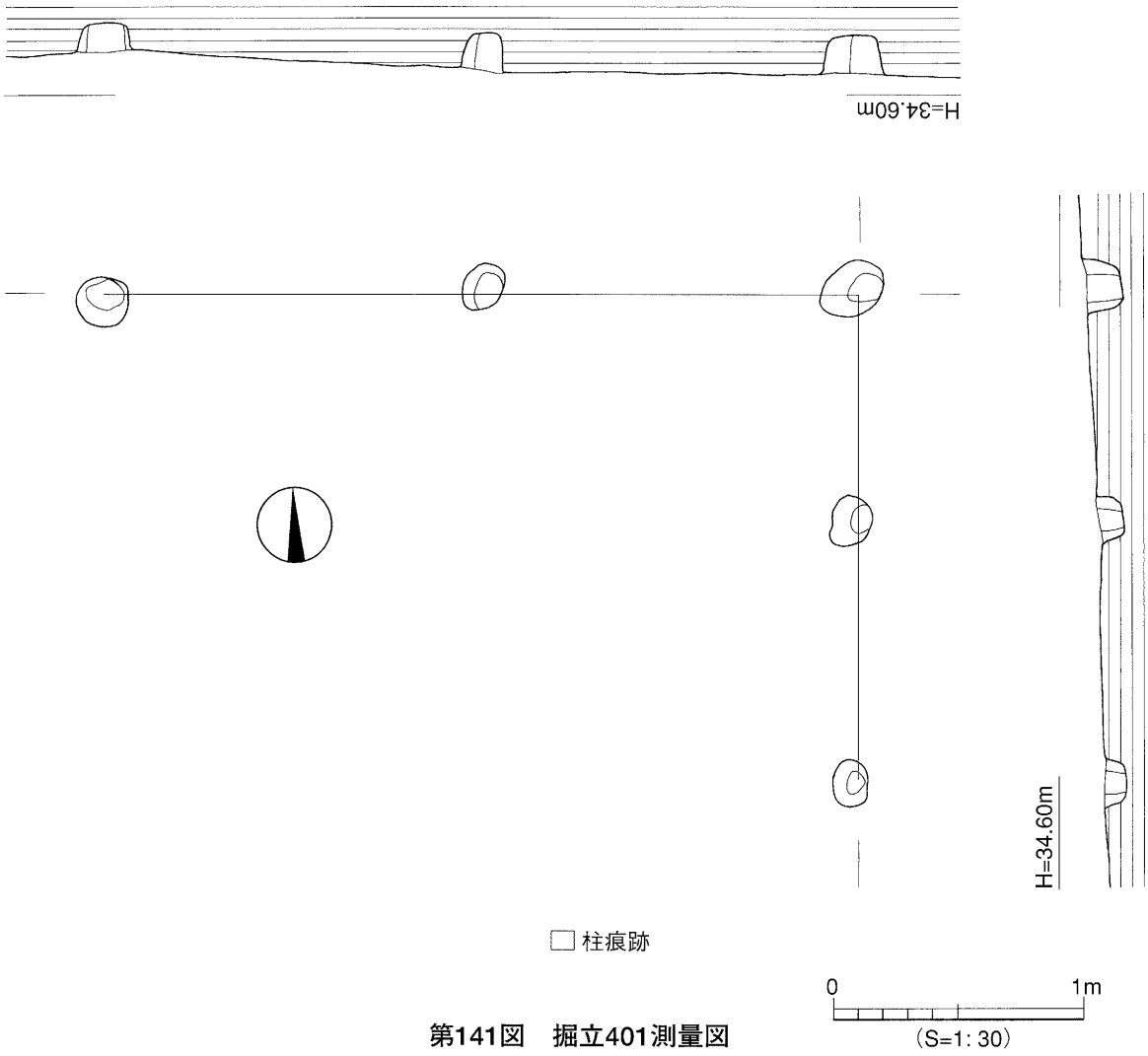
〔２〕中・近世

１）掘立柱建物址（掘立）

掘立401（第141図、図版47-1）

調査区東側、ＳＲ401の１層上面で東西２間×南北２間を検出した。西側と南側は未検出である。桁行長は3.00ｍ、梁行は2.00ｍを測る。柱穴間は桁側が1.50ｍ、梁側が1.00ｍを測る。柱穴の平面形態は円形ないし楕円形を呈する。検出規模は直径15㎝～24㎝、深さ９㎝～16㎝を測る。埋土は褐灰色土である。

検出した全ての柱穴では、柱痕跡を検出した。柱痕跡の平面形態は円形ないし楕円形を呈する。検出規模は直径９㎝～11㎝、深さ９㎝～16㎝を測る。埋土は暗灰色土である。柱穴から遺物は出土



第141図　掘立401測量図

していない。

時期　出土した遺物は無いが、ＳＲ401の１層を切っているため15世紀以降とする。

２）溝（ＳＤ）

ＳＤ401（第113図、図版46-2）

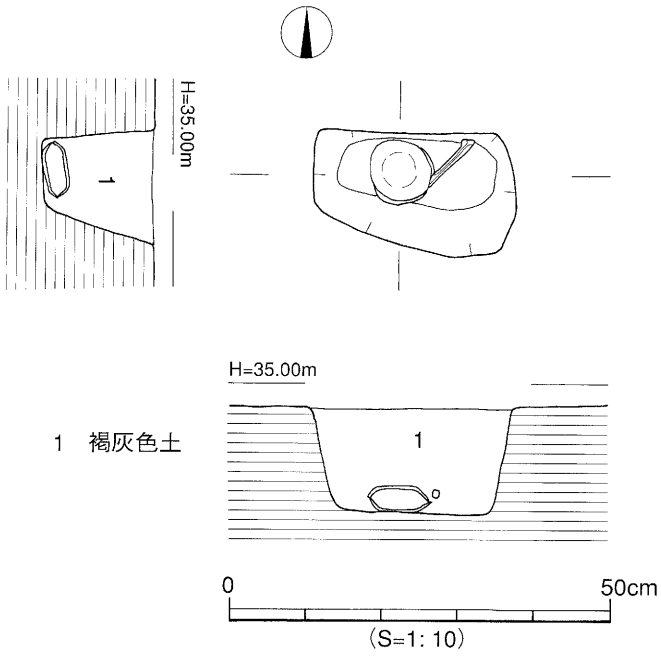
ＳＲ401の１層上面での検出である。西から東へのびて調査区外で北方向へ向きをかえるものと考えられる。検出規模は長さ東西8.80m、南北1.60m、幅0.20m～0.80m、深さ0.20m～0.30mを測る。埋土は、褐灰色粘質土である。遺物は、弥生土器と思われる小片と陶磁器片が出土したのみである。

時期　ＳＲ401との切り合い関係により15世紀以降とする。

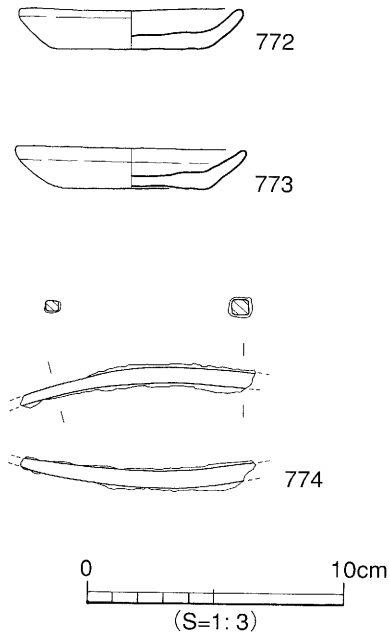
ＳＤ402（第113図）

ＳＲ401の１層上面での検出である。南北方向の溝で北側は調査区外となる。検出規模は長さ9.20m、幅0.90m、深さ0.35mを測る。埋土は褐灰色粘質土である。遺物は出土していない。

時期　ＳＲ401との切り合い関係により15世紀以降とする。



第142図　SP411測量図



第143図　SP411出土遺物実測図

3）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ411（第142図）

調査区西側のＳＲ401上層面での検出である。平面形態はいびつな長方形を呈する。検出規模は長軸26.5㎝、短軸15.0㎝、深さ14.5㎝を測る。埋土は暗灰色土である。遺物は土師皿２点、用途不明鉄製品が出土した。遺物の出土状況は口縁部を合わせ口とし、蓋をした状態で遺構底部に置かれていた。土師皿内の底部には粘土質の土壌を確認したため、土壌を採取し科学分析を行った。

出土遺物（第143図、図版42-1）

772は口径8.7㎝、器高1.6㎝を測る。底部の切り離しは回転糸切りである。773は口径9.0㎝、器高1.7㎝を測る。底部の切り離しは回転糸切りである。774は用途不明鉄製品である。現存長9.2㎝、幅0.6㎝、厚さ0.6㎝を測る。断面形態は四角形を呈する。

時期　出土した土師皿の形態より18世紀と考えられる。

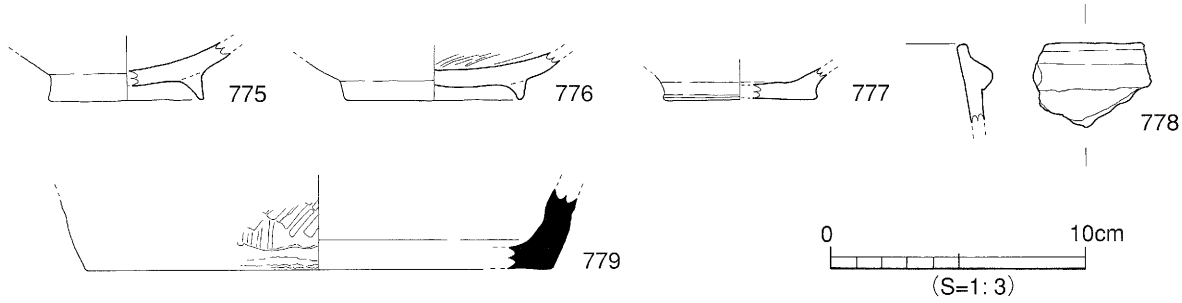
〔3〕その他の遺構と遺物

1）柱穴

本調査で検出した柱穴は18基ある。そのうち遺物が出土した柱穴は18世紀に比定されるＳＰ411だけで、他の柱穴からの出土遺物はなく、明確な時期は確定できなかった。しかし、ＳＰ411を含めた柱穴の埋土はすべて褐灰色土であり、第Ⅲ層上面で検出したＳＰ405を除いた他の柱穴は、15世紀には完全に埋没したと考えられるＳＲ401の上層を切って検出している。このことより、出土遺物の無かった柱穴の大まかな時期は15世紀以降といえる。

2）出土地点不明遺物（第144図）

775～779は排土での表採遺物である。775・776は内黒の黒色土器椀である。777は土師器坏。底部調整は摩滅のため不明である。778は土師器の羽釜。口縁端部のやや下方に隆帯を貼付する。779は甕の底部と考える。須恵質で外面にタタキ目を残す。



第144図　出土地点不明遺物実測図

４．小結

今回の調査では、弥生時代から中世の自然流路１条と中世以降の遺構・遺物を確認した。

（１）弥生時代～中世

この時期の遺構は、自然流路ＳＲ401がある。今回の調査では土層を上層、中層、下層とに分けて調査を行った。下層では砂層の堆積がみられ、弥生時代中期末～古墳時代中期までの遺物が出土している。中層においては、古墳時代後期～11世紀までの遺物が出土し、上層では15世紀までの遺物が出土している。中層と上層には、砂層が見られない。このことから、ＳＲ１は遅くとも弥生時代中期後半には出現し、古墳時代後期～古代末にかけて流路としての機能を失い、次第に埋没していったものと考えられる。そして15世紀には、完全に埋没してしまったものといえる。

ＳＲ401から出土した遺物のうち、注目するものに大型の石包丁がある。材質より北部九州方面からの搬入品と考えられる。一部を欠失しているが、現存長20.1㎝を測る。復元長は23㎝前後となり、松山平野で出土した石包丁では最大級となる。

また、本調査区の南50ｍには桑原遺跡５次調査地がある。桑原遺跡５次調査地では、古代末に埋没したとされる自然流路ＳＲ７、ＳＲ８の２条を検出している。本調査地で検出されたＳＲ401は、位置的状況からＳＲ７、ＳＲ８に続くものである。本調査区では、２条に分かれていないことから、本調査地の南側で分岐するものと考えられる。

（２）中世以降

ＳＲ401上面で検出した掘立柱建物跡、溝、柱穴がある。

掘立401は全容は不明であるが柱間は短く、柱穴規模は小さい事から小規模な建物と考えられる。

15世紀以降の溝ＳＤ401、ＳＤ402は埋土色やその配置により同時期のものと考える。溝底には、砂の堆積が見られないことから、何らかの区画溝と考えられる。

18世紀に比定される柱穴ＳＰ411からは、土師皿２点と鉄製品１点が出土している。出土状況は、土師皿を柱穴底に置き、もう１点の口縁部を合わせ口とし、蓋をした状態で出土した。蓋をされた土師皿内には、目視による内容物の確認はできなかった。遺物の出土状況より、何らかの祭祀が行われたものであろう。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は相原浩二、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（ ）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。
（ ）の中の数値は混　和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3㎜の砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表74　SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
474	甕	口径(49.3) 残高 4.8	口縁部片。わずかに稜をもって外反する口縁。端部は面をもつ。	ナデ	ナデ	灰白色	石・長(1~3) ◎		
475	甕	口径(29.0) 残高 6.4	外反する口縁部片。頸部に刻目突帯文。	ナデ→施文	㊐摩滅の為不明 ㊋ハケ(8本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 灰色	石・長(1~2) ◎		
476	甕	口径(26.8) 残高 3.5	外反する口縁。口縁端部は面をもち、2条の沈線を施す。	㊐端ナデ→施文 ㊐ミガキ	ナデ	黄灰色 灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
477	甕	口径(23.8) 残高 5.7	外反する口縁。口縁部端面は面をもち、ナデにより凹む。	㊐ヨコナデ ㊏ハケ(7本/cm) →ナデ	㊐ハケ(7本/cm) →ナデ ㊋摩滅の為不明	浅黄色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		
478	甕	口径(30.5) 残高 5.1	外反する口縁部片。口縁端面はナデによりわずかに凹む。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ	明黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
479	甕	口径(15.2) 残高 6.1	外反する口縁。口縁端面はナデにより凹み、外下方にわずかに突出する。	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(6本/cm) →ナデ	㊐ヨコナデ ㊋ハケ(4本/cm) →ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
480	甕	口径(14.4) 残高 6.7	内面に稜をもって外反する口縁。	㊐端ナデ ㊏ハケ(5本/cm) →ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ	灰黄褐色 明褐色	石・長(1~5) ◎		
481	甕	口径(12.0) 残高 6.7	やや外反する口縁部片。口縁端部は丸い。	ハケ(5本/cm) →ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
482	甕	口径(16.2) 残高 4.6	外反する口縁。頸部に板状工具による小口痕が多数見られる。	㊐ナデ ㊏ハケ(9本/cm) →ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~5) 金 ◎		
483	甕	口径(14.4) 残高 11.2	外反する口縁。口縁端部はナデにより、わずかに外下方に垂れる。	㊐ナデ ㊏ハケ(7~8本/cm) ㊋タタキ	ハケ(8本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		
484	甕	口径(13.8) 残高 8.1	内面に稜をもって外傾する口縁。	㊐ナデ ㊋タタキ	㊐ナデ ㊋ハケ(5本/cm) →ナデ	灰黄色 灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
485	甕	口径(15.2) 残高 11.0	内面に稜をもって外反する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊐ナデ ㊏タタキ	㊐ナデ ㊋ハケ(11~12本/cm) →ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		51
486	甕	口径(14.0) 残高 5.0	外反する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊐端ナデ ㊏タタキ	㊐ハケ(10本/cm) →ナデ ㊋ナデ(指頭痕あり)	黄灰色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
487	甕	口径(15.2) 残高 7.0	外反する口縁。口縁端部はナデにより、わずかに外下方に垂れる。	(口端)ナデ (口)ハケ(8本/cm)→ナデ (胴)タタキ	ハケ(8本/cm) →ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		
488	甕	口径(16.7) 残高 5.2	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口端)ナデ (口)ハケ(7~9本/cm)→ナデ (胴)タタキ	(口)ハケ(8本/cm) →ナデ (胴)工具によるナデ	にぶい黄橙 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
489	甕	口径(18.4) 残高 7.2	内面に稜をもって、外反する口縁。口縁端部はナデにより外下方に垂れる。	(口端)ナデ (口~胴)ハケ(9本/cm)→ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
490	甕	口径(18.0) 残高 7.5	大きく外反する口縁。口縁端部はナデにより外下方に垂れる。	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm) →ナデ	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm) →ナデ	灰黄褐色 灰黄色	石・長(1~5) ◎		
491	甕	口径(14.6) 残高 4.6	稜をもって外反する口縁。口縁外面に指頭痕が顕著。	(口)ナデ (胴)ハケ(10本/cm) →ナデ	ハケ(10本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	石・長(1~4) ◎		
492	甕	口径(16.9) 残高 4.8	口縁端部は上方に短く立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~4) ◎	搬入品	
493	甕	口径(15.4) 残高 6.7	外反する口縁。口縁端部は丸味をおびる。	ハケ(5本/cm) →ナデ	(口)ナデ (胴)ヘラケズリ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
494	甕	口径(16.3) 残高 4.7	口縁部片。外反する口縁。端部は丸く仕上げる。	ハケ(5本/cm) →ナデ	(口)ハケ(5本/cm) →ナデ (胴)ヘラケズリ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1) 金 ◎		
495	甕	口径(18.6) 残高 4.5	外反する口縁部片。口縁端部は尖り気味。	(口端)ナデ (口)ハケ(5本/cm)→ナデ (胴)ナデ	(口)ハケ(5本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	黒色 橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
496	甕	口径(18.1) 残高 4.2	口縁部片。強いヨコナデによる凹みが見られる。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ヘラケズリ	灰白色	石・長(1~2) ◎		
497	甕	口径(16.4) 残高 5.4	外反する口縁部片。口縁端部は丸味をおびる。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ヘラケズリ	灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
498	甕	口径(15.5) 残高 5.3	器壁の厚い口縁部片。内面の粘土接合痕が顕著。	ナデ	(口)ナデ (胴)ヘラケズリ	灰白色	石・長(1) ◎		
499	甕	口径(17.3) 残高 5.4	内面に稜をもって外反して立ち上がる口縁部片。	ハケ(7本/cm) →ナデ	(口)ハケ(8~9本/cm) →ナデ (胴)ヘラケズリ	にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金・褐色粒 ◎		
500	甕	口径(12.8) 残高 9.4	外反する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm) →ナデ	(口)ハケ(7~8本/cm) →ナデ (胴)ヘラケズリ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
501	甕	口径(13.2) 残高 4.2	明瞭な稜をもって外傾する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ	(口)ハケ(8本/cm) →ナデ (胴)ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
502	甕	口径(16.2) 残高 4.8	外傾しやや内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は内に肥厚する。	(口)ナデ (胴)ハケ(5本/cm) →ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
503	甕	口径(17.4) 残高 7.1	口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸い面をもつ。	(口)ナデ (胴)ハケ(7本/cm) →ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	黒色 オリーブ黒色	石・長(1~2) ◎		
504	甕	口径(13.9) 残高 3.7	口縁部はやや内湾して立ち上がる。口縁端部はやや内に肥厚する。	(口端)ナデ (口~胴)ハケ(8本/cm)→ナデ	(口)ハケ(8本/cm) →ナデ (胴)ヘラケズリ	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
505	甕	口径(15.7) 残高 5.9	口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は面をもつ。	(口)ナデ (胴)ハケ(6本/cm) →ナデ	(口)ハケ(6本/cm) →ナデ (胴)ナデ	黒褐色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		
506	甕	口径(16.0) 残高 9.6	口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は内に傾斜する面をもつ。	(口)ナデ (胴)ナデ(5~6本/cm) ケズリ	(口)ナデ (胴)ナデ・ケズリ (指頭痕あり)	灰黄色	石(1~2) 長(1~4) ◎		
507	甕	口径(17.5) 残高 6.4	胴部との接合部内面に稜をもち内湾して立ち上がる口縁。口縁端部は面をもつ。	ハケ(6~7本/cm) →ナデ	(口端)ナデ (口)ハケ(6~7本/cm)→ナデ (胴)ヘラケズリ	淡黄色	石・長(1~3) ◎		53
508	甕	口径(16.0) 残高 4.7	器壁の厚い口縁部片。強いヨコナデにより凸凹がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		53
509	甕	口径(18.7) 残高 6.8	外傾する口縁。強いナデ、ケズリなどにより器面が凸凹している。	ナデ (指頭痕あり)	(口)ナデ (胴)ヘラケズリ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
510	甕	底径 6.5 残高 32.0	平底。復元により胴部完形。	タタキ→ナデ	ヘラケズリ	暗灰黄色	石・長(1~5) ◎	黒斑?	51
511	甕	底径 6.8 残高 7.1	器壁がかなり厚い平底。ストレートに立ち上がる。	ナデ	ナデ (指頭痕あり)	にぶい橙色 黒褐色	石・長(1~4) ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
512	甕	底径 4.5 残高 6.6	平底。内湾気味に立ち上がる。	(胴)摩滅の為不明 (底)すのこ痕	ナデ上げ	にぶい赤褐色 灰黄褐色	石・長(1~4) ◎		
513	甕	底径 4.1 残高 5.0	平底。外面はミガキ痕が顕著。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐灰色 褐灰色	石・長(1~3) ◎		
514	甕	底径 5.8 残高 5.4	上げ底。くびれをもって立ち上がる。	摩滅の為不明	ナデ	灰黄色 灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
515	甕	底径 6.2 残高 4.0	やや上げ底。小さくくびれ立ち上がる。	(肩)ナデ (胴下)ヨコナデ (底)ナデ	ナデ(指頭痕あり)	黄褐色 黄灰色	石・長(1~3) 金 ◎		
516	甕	底径 4.6 残高 2.9	上げ底。	(胴)ハケ(5本/cm) →ナデ (底)ナデ	ナデ	にぶい橙色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		
517	甕	底径 5.3 残高 2.8	やや上げ底。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		
518	甕	底径 (4.3) 残高 5.6	上げ底。ストレートに立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長(1~4) ◎	煤付着	
519	甕	底径 3.4 残高 5.6	やや中央が凹んだ底部。	摩滅の為不明	ハケ(16~17本/cm)→ナデ	浅黄色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ◎	煤付着	
520	甕	底径 3.8 残高 4.7	平底。底部よりストレートに立ち上がる。	(胴)ハケ(12~13本/cm)→ナデ (底)ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1~3) ◎	黒斑 煤付着	
521	甕	底径 2.2 残高 4.5	丸味のある小さな平底。	(胴)タタキ→ハケ(7本/cm) (底)ナデ	ナデ(指頭痕あり)	灰黄褐色 淡黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
522	甕	底径 2.6 残高 8.2	丸味のある小さな平底。胴部はほぼストレートに広がる。	ハケ(9本/cm) →ナデ	(胴)ハケ(6本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	明黄褐色 浅黄色	石・長(1~2) 金 ◎		
523	甕	底径 3.6 残高 8.2	小さな平底。	ハケ(8~9本/cm) →ナデ	(胴)ハケ(6本/cm) →ナデ (底)ナデ上げ	灰黄色	石・長(1~3) ◎		
524	甕	底径 4.2 残高 8.4	丸味のある平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	摩滅の為不明	(胴)ハケ(7本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	明黄褐色	石・長(1~5) ◎	煤付着	
525	甕	底径 5.2 残高 8.8	平底。底部よりストレートに広がる。	(胴)ハケ(10本/cm) →ナデ (底)ナデ	ナデ上げ (指頭痕あり)	灰白色	石・長(1~3) ◎		
526	甕	底径 3.8 残高 9.6	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	(胴)タタキ→ハケ(7本/cm)→ナデ (胴下)(底)ハケ(11本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ	褐灰色 明黄褐色	石・長(1~4) ◎	煤付着	
527	甕	底径 3.3 残高 6.6	平底。	(胴)ハケ(5本/cm)→ナデ (胴下)(底)ナデ(指頭痕あり)	(胴)ハケ(5本/cm) →ナデ (底)ナデ(指頭痕あり)	浅黄色 灰黄褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
528	甕	底径 (5.6) 残高 15.3	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	(胴)タタキ→ハケ(12本/cm)→ナデ (底)ナデ	ナデ上げ	褐灰色 灰白色	石・長(1~2) ◎		
529	甕	底径 (5.2) 残高 4.8	平底。タタキ痕が放射状に顕著に残る。	(胴)タタキ (底)ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ	浅黄色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
530	甕	底径 (4.2) 残高 3.3	平底。	タタキ	(胴)ハケ(10~11本/cm)→ナデ (底)ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
531	甕	底径 3.2 残高 11.1	小さな平底。底部内面に煤付着。	(胴)タタキ (胴下)ハケ(8本/cm)→ナデ (底)ナデ	(胴)ハケ(8本/cm) →ナデ (底)ナデ(指頭痕あり)	黄灰色 明黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎	煤付着	
532	甕	底径 3.2 残高 2.8	丸味のある小さな平底。ゆるやかに外上方に立ち上がる。	(胴)タタキ (底)ナデ	ナデ	明黄褐色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
533	甕	底径 (2.0) 残高 6.3	やや平らな面をもつ尖底。	(胴)タタキ (底)ナデ	(胴)ハケ(8本/cm) →ナデ (底)ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 褐灰色	石(1~6) 長(1~3) ◎		
534	壺	残高 9.5	複合口縁。頸部に断面三角形の突帯を2条施す。	(頸上)ハケ(8本/cm)→ナデ (頸)ナデ→施文	摩滅の為不明	にぶい黄橙色	石・長(1~5) ◎		
535	壺	口径(29.6) 残高 12.3	複合口縁。5~6条の波状文を2段施す。	(拡)ナデ→施文 (頸)ハケ(11~12本/cm)→ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ	灰白色	石・長(1~4) 金 ◎		
536	壺	口径(17.4) 残高 9.5	口縁拡張部に波状文を施し波状文の上下と口縁端部に半裁竹管文を施す。頸部には格子状の刻目突帯文。	(拡)ナデ→施文 (頸上)ハケ(10本/cm)→ナデ (頸)ナデ→施文	(口端)ナデ→施文 (拡)ナデ (頸)ハケ(12本/cm)→ナデ	明黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		51

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
537	壺	口径(22.8) 残高 9.3	複合口縁。5条の波状文が残る。	㊍ナデ→施文 ㊎ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐色	石・長(1~5) ◎		
538	壺	口径(15.5) 残高 3.8	複合口縁。8条の沈線、8条の波状文を施す。	㊍ナデ→施文 ㊎ナデ	ナデ	橙・黒褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
539	壺	口径(16.6) 残高 6.6	複合口縁。無文。口縁端部は丸く仕上げる。	ハケ(10本/cm) →ナデ	(口端)ナデ ㊍ナデ(指頭痕あり) ㊎ハケ(10本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
540	壺	口径(14.0) 残高 3.5	複合口縁。上方に立ち上がる口縁。口縁端部は丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	明赤褐色	石・長(1~5) ◎		
541	壺	口径(16.0) 残高 3.2	複合口縁。尖りながら上方に短く、立ち上がる口縁。4条の波状文が残る。	㊍ナデ→施文 ㊎ナデ	摩滅の為不明	明褐色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
542	壺	口径(15.3) 残高 3.2	複合口縁。やや内傾する口縁。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石(1~3) 長(1~6) ◎		
543	壺	口径(13.0) 残高 9.2	複合口縁。内傾する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	摩滅の為不明	(口)㊍摩滅の為不明 ㊎ハケ(10本/cm) →ナデ	浅黄色 褐灰色	石・長(1~5) ◎		
544	壺	口径(20.4) 残高 7.4	複合口縁。拡張部外面にヨコナデによる稜が見られる。	㊍ヨコナデ ㊎ナデ	(口)㊍ヨコナデ ㊎ハケ(7本/cm) →ナデ	にぶい褐色 灰褐色	石・長(1~2) ◎		
545	壺	口径(14.3) 残高 4.9	複合口縁。直口気味に立ち上がる口縁。	ナデ	ナデ	褐灰色 灰黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
546	壺	口径(12.2) 残高 5.7	複合口縁。無文	ナデ	ナデ(指頭痕あり)	暗灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
547	壺	口径(16.7) 残高 5.1	複合口縁。1条の波状文。	ハケ(8~9本/cm)→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) 金 ◎		51
548	壺	口径(13.0) 残高 4.9	複合口縁。やや内傾して立ち上がる口縁。口縁端部は丸い。	摩滅の為不明	㊍ナデ ㊎ハケ(5本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ◎		
549	壺	口径(22.6) 残高 4.8	口縁部外面に竹管文、5条の波状文が施される。	㊍ナデ→施文 ㊎ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
550	壺	口径(26.1) 残高 4.7	外反して立ち上がる口縁。口縁端部は面をもつ。	摩滅の為不明	ヘラミガキ	淡黄色 橙色	石・長(1~3) ◎		
551	壺	口径(20.2) 残高 7.0	口縁部外面に6条の波状文が施される。口縁端部付近で外反する口縁。	㊍ナデ→施文 ㊎ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ (指頭痕あり)	灰白色 淡黄色	石・長(1~2) ◎		53
552	壺	口径(23.8) 残高 6.3	口縁端面に斜格子状の刻目文を施す。頸部に刻目突帯文を施す。	(口端)ナデ→施文 (口)㊎ハケ(10~11本/cm)→ナデ→施文	ミガキ	灰白色 浅黄橙色	石・長(1~4) ◎		51
553	壺	口径(22.6) 残高 6.8	ラッパ状に大きく広がる口縁。口縁端面に4条の波状文を施す。	(口端)ナデ→施文 (口)㊎ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
554	壺	口径(38.7) 残高 3.4	口縁部片。口縁端部で上下方に拡張する。端面に2条の凹線が巡る。	(口端)ナデ→施文 (口)ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石(1~4) 長(1~2) ◎		
555	壺	口径(27.8) 残高 4.3	ラッパ状に大きく広がる口縁部片。口縁端部は下外方に垂下する。端面に6条の波状文。2つ並びの円形浮文残る。	(口端)ナデ→施文 (口)ナデ	ナデ	明褐色 褐灰色	石・長(1~3) 金 ◎		
556	壺	口径(27.2) 残高 2.7	口縁部片。口縁端部は下外方に垂下する。口縁端面に5条の波状文、円形(?)の浮文が1ヶ所残る。	(口端)ナデ→施文 (口)ハケ(8本/cm) →ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ	灰黄色 灰白色	石・長(1~2) ◎		
557	壺	口径(14.4) 残高 7.9	長頸壺の口縁部片。わずかに外反する口縁。	(口端)ナデ (口)ハケ(8本/cm) →ナデ	(頸上)ハケ(8本/cm)→ナデ (頸上)ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
558	壺	口径(10.4) 残高 8.3	長頸壺。直口気味に立ち上がる口縁。口縁端部は丸味をおびた面をもつ。	(口端)ヨコナデ ㊎ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
559	壺	口径(12.8) 残高 5.0	直口気味に立ち上がる口縁。口縁端部は丸い。	(口端)ナデ (口)ハケ(5本/cm) →ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ	淡黄色	石・長(1~3) ◎		
560	壺	口径(12.4) 残高 5.5	直口気味に立ち上がり、口端部でわずかに外反する口縁。	(口)ヨコナデ ㊐ハケ(6本/cm) →ナデ	(口)ヨコナデ ㊐ケズリ	灰黄色 淡黄色	石・長(1) ◎		
561	壺	口径(17.8) 残高 7.6	口端部で大きく外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	(口)ナデ ㊎ハケ(7本/cm) →ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ	淡黄色	石・長(1~4) ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
562	壺	口径(16.2) 残高 8.0	外反する口縁部片。口端部は下方に垂下する。	ハケ(9本/cm)→ナデ	㊀ナデ ㊁ハケ(9本/cm)→ナデ	浅黄色	石・長(1~4) ◎		51
563	壺	口径(21.4) 残高 8.9	大きく外反する口縁。口縁端部は下方に短く垂下する。口縁端部に斜格子文がわずかに残る。	㊀ナデ→施文 ㊁ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石(1~6) 長(1~4) ◎		51
564	壺	口径(27.0) 残高 7.2	ラッパ状に大きく外反する口縁。口縁端面はヨコナデにより凹む。ヘラ状工具による縦の沈線を施す。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(11~12本/cm)→施文→ナデ	ハケ(11~12本/cm)→ナデ	灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		
565	壺	口径(20.0) 残高 7.6	外反する口縁。口縁端面は強いナデにより凹む。	㊀㊃ナデ ㊁ハケ(9本/cm)→ナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
566	壺	口径(18.5) 残高 9.3	外傾する口縁。口縁端部でやや外反し端部は丸く仕上げる。	㊀ナデ ㊁ハケ(6本/cm)→ナデ ㊂ハケ(9本/cm)→ナデ	㊁ヨコナデ ㊂ヘラケズリ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) 金 ◎		53
567	壺	口径(21.4) 残高 8.0	外傾する口縁。口縁端面は面をもつ。	㊀ナデ ㊁㊂ハケ(10本/cm)→ナデ	㊁ナデ ㊂ヘラケズリ	明黄褐色 灰オリーブ色	石・長(1~2) 金 ◎		
568	壺	口径 25.5 残高 14.8	稜をもって外傾し長くのびる口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊁ヨコナデ ㊂ハケ(8本/cm)→ナデ	㊁ヨコナデ ㊂ケズリ	灰白色	石・長(1~3) 金 ◎		53
569	壺	口径(23.0) 残高 7.7	外傾する口縁。頸部両面に接合痕が残る。	㊁ナデ ㊃ハケ(6本/cm)→ナデ	㊁ハケ(6本/cm)→ナデ ㊃ナデ	淡赤橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
570	壺	底径 7.6 残高 7.9	器壁の厚い平底。底部よりストレートに立ち上がる。	㊂ハケ(6本/cm)→ナデ ㊄ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長(1~4) 多 ◎		
571	壺	底径 6.6 残高 6.9	平底。	㊂ハケ(5本/cm)→ナデ ㊄ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	灰黄色	石・長(1~3) 多 ◎		
572	壺	底径 6.7 残高 6.6	平底。	ナデ	ナデ上げ (指頭痕あり)	浅黄色	石・長(1~5) 金 ◎		
573	壺	底径 (6.5) 残高 5.8	平高台。高台付け根に指頭痕が顕著に見られる。	ナデ	工具によるナデ (指頭痕あり)	灰白色	石・長(1~3) 金 ◎		
574	壺	底径 5.8 残高 5.0	平底。	摩滅の為不明	指ナデ (指頭痕あり)	淡黄色 灰白色	石・長(1~3) 金 ◎		
575	壺	底径 9.1 残高 5.5	平底。底部より外傾に立ち上がる。	㊂タタキ ㊄ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ(指頭痕あり)	褐灰色 灰黄褐色	石・長(1~3) ◎		
576	鉢	口径(40.8) 残高 6.2	外反する口縁。口縁端面は、ヨコナデによりわずかに凹む。	㊀ヨコナデ ㊁㊂ハケ(7~9本/cm)→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	灰黄色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
577	鉢	口径(23.5) 残高 4.2	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊀ナデ ㊂ハケ(7~8本/cm)→ナデ	ハケ(8本/cm)→ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい赤褐色	石・長(1~2) ◎		
578	鉢	口径(21.0) 残高 7.5	内湾気味に立ち上がり、口縁端部はナデにより外方向に丸く凸む。	㊀ヨコナデ ㊂上ナデ ㊂下ハケ(5本/cm)→ナデ	㊁ヨコナデ ㊂ハケ(5本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
579	鉢	口径(22.3) 残高 4.8	内湾気味に立ち上がる口縁。	㊀ナデ ㊁タタキ	ハケ(8本/cm)→ナデ	浅黄色	石・長(1~4) ◎		
580	鉢	口径(26.2) 残高 8.2	片口状になる口縁。外面はタタキ痕が顕著。	㊀ナデ ㊁タタキ→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長(1~4) ◎		
581	鉢	底径 1.7 残高 2.9	ボタン状に突出する小さい底部。底部内面には放射状に、工具痕が多数残る。	ナデ	工具によるナデ	黒褐色 褐灰色	長(1~2) ◎		
582	鉢	底径 1.5 残高 1.9	ボタン状に突出する小さな底部。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
583	鉢	底径 1.4 残高 2.1	ボタン状に突出する小さな底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰黄色	石・長(1~4) ◎		
584	鉢	底径 2.2 残高 1.8	ボタン状に突出する小さな底部。中央部が凹む。	㊂ハケ(7本/cm)→ナデ ㊄ナデ	摩滅の為不明	褐灰色 灰黄色	石・長(1~5) ◎		
585	鉢	底径 1.2 残高 2.3	ボタン状に突出する底部。	㊂ハケ(6本/cm)→ナデ ㊄ナデ	ハケ(6~7本/cm)→ナデ	黒褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		
586	鉢	底径 4.4 器高 8.4	内湾気味に立ち上がる口縁。突出する平底。	ナデ	ハケ(7~8本/cm)→ナデ	浅黄橙色 灰黄褐色	石・長(1~5) ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
587	鉢	底径 3.5 器高 7.3	突出している平底。底部よりストレートに立ち上がる口縁。	(口)(胴上)(底)ナデ (胴下)ハケ(10本/cm)→ナデ	ナデ	浅黄色 灰黄色	石・長(1~4) 金 ◎		
588	鉢	底径 4.2 残高 3.5	突出している平底。底部内面には工具痕が多数残る。	ナデ(指頭痕あり)	工具によるナデ	暗灰黄色	石・長(1~2) ◎		
589	鉢	底径 3.4 残高 2.9	突出する底部。	(胴)ハケ(7本/cm) →ナデ (底)ナデ	摩滅の為不明	淡黄色 にぶい黄橙色	石・長(1)多 金 ◎		
590	鉢	底径 3.2 残高 2.3	突出する底部。	指ナデ (指頭痕あり)	ハケ(7本/cm) →ナデ	灰黄色 淡黄色	微砂粒 ◎		
591	鉢	底径 2.9 残高 3.4	突出する底部。内面の底部中央が指頭痕により凹む。	(胴)摩滅の為不明 (底)ナデ	ハケ(11本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		
592	鉢	底径 3.2 残高 4.0	突出する底部。底面中央が凹む。	(胴)ハケ(10本/cm) →ナデ (底)ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	黄褐色	石・長(1~5) 金 ◎		
593	鉢	底径 4.2 残高 2.4	くびれをもつ上げ底。底部内面に工具痕が残る。	ナデ	工具によるナデ	灰黄色	石・長(1~2) ◎		
594	鉢	底径 3.4 残高 4.5	丸味をおびた平底。	ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
595	鉢	底径 2.6 残高 3.1	丸味をおびた小さな平底。	ナデ	工具によるナデ	灰白色 淡黄色	石・長(1~3) ◎		
596	鉢	底径 2.8 残高 4.5	小さな平底。底部よりストレートに立ち上がる。	ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ	明黄褐色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
597	鉢	底径 2.6 残高 7.5	不安定な小さな平底。	(胴)ハケ(5本/cm) →ナデ (底)ナデ	ハケ(5本/cm) ハケ(10本/cm) →ナデ	灰白色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
598	鉢	底径 1.8 残高 4.7	丸味をおびた小さな平底。	(胴)ハケ(9本/cm) →ナデ (底)ナデ	ハケ(9本/cm) →ナデ	淡黄色 浅黄色	石・長(1~2) ◎		
599	鉢	底径 1.9 残高 3.4	丸味をおびた底部。	ナデ	ハケ(5本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
600	鉢	底径 3.5 残高 5.9	わずかに突出する底部。底部付近に工具痕が数ヶ所残る。	ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデ	黄灰色	石・長(1~3) ◎		
601	鉢	底径 2.3 残高 3.8	丸味をおびた底部。	(胴)ヘラミガキ (底)ナデ	ハケ(6~7本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
602	鉢	底径 1.6 残高 4.3	丸味をおびた底部。	ハケ(11本/cm) →ナデ	工具によるナデ	浅黄橙色 褐灰色	長(1~2) ◎		
603	鉢	口径 6.4 残高 6.4	ミニチュア土器。	タタキ →ナデ	指ナデ (指頭痕あり)	灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		52
604	鉢	底径 4.0 残高 8.8	底部中央に穿孔。底部よりストレートに立ち上がる。	ナデ	指ナデ (指頭痕あり)	灰黄色	石・長(1~3) ◎		52
605	鉢	底径 (3.0) 残高 5.4	底部中央に穿孔。	ナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	黄灰色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		52
606	鉢	底径 1.5 残高 5.1	底部中央に穿孔。	タタキ →ナデ	ナデ	浅黄色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		52
607	鉢	底径 (1.0) 残高 3.1	底部に穿孔。底部内面に放射状に工具痕が残る。	タタキ →ナデ	ハケ(7~8本/cm) →ナデ	灰白色	石・長(1~4) ◎		52
608	高坏	口径 (25.6) 残高 4.2	外反する口縁。口縁端部は面をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄色	石(1~4) 長(1~2) ◎		
609	高坏	口径 (22.9) 残高 5.1	口縁部片。3条の波状文が残る。	ヨコナデ →施文	ヨコナデ	灰黄色 暗灰色	長(1) ◎		
610	高坏	口径 (21.0) 残高 6.3	外傾する口縁。口縁端部は面をもつ。接合部は段をなす。	(口)ヨコナデ (坏上)ハケ(6/cm)→ナデ (坏下)ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ◎		
611	高坏	口径 (22.2) 残高 5.7	外反する口縁。口縁端部は丸味をおびた面をもつ。	(坏上)ヨコナデ (坏下)ナデ	ヨコナデ	暗灰色 橙色	微砂粒 ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
612	高坏	口径(18.4) 残高 7.0	外反する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊐ナデ ㊎摩滅の為不明	㊎上ナデ ㊎下ヘラミガキ	橙色	石・長(1~2) ◎		
613	高坏	口径(22.3) 残高 4.4	坏部片。外反する口縁。口縁端部は丸味をおびた面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		
614	高坏	口径 23.2 底径 15.2 器高 15.1	坏部は中位に稜をもつ。円柱形の脚柱部。口端部、裾端部ともに丸く仕上げる。	ナデ (指頭痕あり)	㊎ヨコナデ ㊍工具によるナデ ㊏ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~5) ◎		54
615	高坏	口径(23.5) 残高 13.7	坏部は接合部で段をなす。脚部は円すい形。	ナデ	㊎ナデ ㊍工具によるナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~2)		
616	高坏	口径(17.5) 残高 5.6	外反する口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		
617	高坏	口径 17.7 残高 4.9	坏部中位にヨコナデによる稜が残る。	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	ハケ(5~6本/cm) →ナデ	にぶい黄褐色 明黄褐色	微砂粒 ◎		
618	高坏	口径 16.2 残高 6.2	外反する口縁。坏部は中位に稜をもつ。	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		54
619	高坏	口径(16.2) 残高 5.5	外反する口縁。口縁端部は丸い。	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	にぶい橙色	微砂粒 ◎		
620	高坏	口径(15.5) 残高 4.7	坏部片。接合部で段をなす。	㊎上 ㊎下ヨコナデ ナデ	㊎上ヨコナデ ㊎下摩滅の為不明	灰黄褐色	石・長(1~2) ◎		
621	高坏	口径(17.0) 残高 5.5	ゆるやかに外反する口縁。坏部下位に稜をもつ。	㊎上ヨコナデ ㊎下工具によるナデ	㊎上ヨコナデ ㊎下工具によるナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
622	高坏	口径 16.6 残高 4.8	外傾する口縁。口縁端部は尖りながら丸くおさめる。	㊎上ヨコナデ ㊎下ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~3) 金 ◎		54
623	高坏	残高 10.1	脚柱の下位に円孔が3ヶ所残る。4ヶ所あったと思われる。	ハケ(8本/cm) →ナデ	ハケ(8本/cm) →ナデ (しぼり痕あり)	褐灰色 明褐灰色	石・長(1~3) ◎		
624	高坏	残高 10.3	脚柱の上位に円孔が3ヶ所。下位にも円孔が4ヶ所あったと思われるが3ヶ所残存。	ナデ	㊏上ナデ(しぼり痕) ㊏下ハケ(7本/cm)→ナデ	灰白色 灰色	石・長(1~2) ◎		
625	高坏	残高 7.4	脚柱上位に2ヶ所、中位に1ヶ所の円孔が残るが、不規則である。	ナデ	ナデ(しぼり痕あり)	淡黄色	微砂粒 ◎		
626	高坏	残高 5.5	坏と脚の接合部片。	㊎ヨコナデ ㊏ナデ	㊎ナデ ㊍工具によるナデ	明褐色 にぶい黄橙色	微砂粒 褐色粒・多 ◎		
627	高坏	底径(12.2) 残高 8.0	脚部。脚部中位に円孔が3ヶ所残る。	ナデ	㊎工具によるナデ ㊏ナデ	灰白色 明褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
628	高坏	底径(10.0) 残高 8.6	脚部。	㊎㊏ナデ ㊏ハケ(7本/cm) →ナデ	㊎摩滅の為不明 ㊍工具によるナデ ㊏ナデ(6~7本/cm)→ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
629	高坏	底径(13.5) 残高 11.0	円すい状の脚柱部。裾部はゆるやかに広がる。	㊎ハケ(6本/cm) →ナデ ㊏ナデ(指頭痕あり)	㊎ハケ(6本/cm)→ナデ ㊍工具によるナデ ㊏ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長(1~2) 金 ◎		54
630	高坏	底径 10.8 残高 7.3	脚部。裾部端面に1条の沈線が残る。	ナデ(工具痕・指頭痕あり)	㊍工具によるナデ ㊏ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	長(1)・多 金 ◎		
631	高坏	底径 12.1 残高 8.6	脚部。裾端部は丸く仕上げる。	ナデ(工具痕あり)	ナデ(しぼり痕あり)	淡黄色 浅黄橙色	石・長(1~2) ◎		54
632	高坏	底径(11.5) 残高 6.4	脚部片。裾部端面に1条の沈線が残る。	ナデ(指頭痕あり)	㊍工具によるナデ ㊏ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
633	高坏	底径(11.8) 残高 7.3	円すい状の脚柱部。裾部はゆるやかに広がる。	ナデ	㊍工具によるナデ ㊏ナデ	灰黄褐色 明黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
634	高坏	底径(11.0) 残高 7.0	脚部。裾端部は面をもつ。	ナデ	㊍工具によるナデ ㊏ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
635	高坏	底径(11.0) 残高 6.5	脚部。裾端部は丸く仕上げる。	ナデ	㊍工具によるナデ ㊏ナデ	灰黄褐色 明黄褐色	微砂粒 ◎		
636	高坏	底径(10.6) 残高 7.5	脚部。裾端部は丸味おびた面をもつ。	摩滅の為不明	㊍工具によるナデ ㊏ナデ	褐灰色 黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
637	高坏	底径(11.8) 残高 8.3	脚部。	ナデ	(脚)工具によるナデ (裾)ナデ	橙色	石・長(1~2) ◎		
638	高坏	底径(11.0) 残高 8.9	脚部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 淡橙色	石(1~2)・多 褐色粒 ◎		
639	高坏	残高 7.5	脚柱部片。外面に線刻あり。	ナデ→施文	(坏)ナデ (脚)工具によるナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	石・長(1~2) ◎		54
640	高坏	残高 7.8	坏と脚の接合部片。	(坏上)ヨコナデ (坏下)ハケ(6本/cm) (脚)工具によるナデ	(坏)ヨコナデ (脚)工具によるナデ	橙色	石・長(1~2) ◎		54
641	高坏	残高 7.1	脚部。	(脚)ナデ (裾)ハケ(8本/cm) →ナデ	(脚)ナデ (裾)ヨコナデ	灰黄色	石・長(1) 金 ◎		
642	高坏	残高 7.6	脚部。	ナデ	ナデ	明褐灰色	石・長(1~2) ◎		
643	器台	口径(29.6) 残高 10.7	拡張部に6条の沈線。竹管文、4条の波状文を施す。	(拡)ハケ(10本/cm) →ナデ→施文 (受)ハケ(10本/cm)→ナデ	(拡)ハケ(10本/cm) →ナデ (受)ナデ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長(1~4) ◎		52
644	器台	口径(24.3) 残高 2.1	拡張部に6条の波状文。	(拡)ハケ(7本/cm) →ナデ→施文 (受)ナデ(指頭痕あり)	ハケ(7本/cm) →ナデ	灰白色	石・長(1~3) ◎		
645	支脚	受部径 7.6 底径 6.9 器高 4.2	中実、上面に凹みをもつ。平底。	ナデ(指頭痕あり)	――	灰白色	石・長(1~3) ◎		
646	支脚	受部径(6.8) 底径(9.0) 器高 3.7	中実、平底。上面も平らと思われる。	ナデ(指頭痕あり)	――	にぶい黄橙色	石・長(1~4) ◎		
647	支脚	受部径 8.7 底径(7.8) 器高 5.3	中実、上面に凹みをもつ。受部を斜めにカットする。側面に円孔(大・小)が2ヶ所残る。	ナデ(指頭痕あり)	――	灰黄色	石・長(1~4) ◎		52
648	支脚	受部径 7.6 底径(5.6) 器高 3.9	中実、上面に凹みをもつ。舌状の突起が残る。	(受)工具によるナデ (胴)ナデ (指頭痕あり)	――	灰黄色	石・長(1~4) ◎		
649	支脚	受部径(7.4) 底径(6.7) 器高 3.6	中空、円柱状の体部。器壁は厚い。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	淡黄色	石・長(1~5) ◎		
650	支脚	受部径(6.6) 底径(9.0) 器高 6.5	中空、円柱状の体部。胴中位でくびれる。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~7) ◎		
651	支脚	底径 7.6 残高 10.8	中空、細長い円柱状の体部。	ナデ	工具によるナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~4) ◎		52
652	支脚	受部径 10.4 底径 12.8 器高 15.9	中空、受部に「U」字状の傾斜部をもつ。	ハケ(9~10本/cm) →ナデ (裾端)ナデ	(受)(脚)ハケ(9~10本/cm) (脚)工具によるナデ (しぼり痕あり)	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		52
653	支脚	受部径(9.5) 底径 12.4 器高 13.7	中空、受部に「U」時状の傾斜部をもつ。	ハケ(5~6本/cm) →ナデ(指頭痕あり)	ナデ(しぼり痕あり)	淡黄色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		
654	支脚	受部径(8.2) 底径(8.4) 残高 14.6	中空、舌状の垂下する突起が残る。	ハケ(9本/cm) →ナデ	(受)ハケ(9本/cm) (脚)工具によるナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1~3) 金 ◎		
655	支脚	底径(10.7) 器高 15.6	中実の脚。受部端は傾斜する面をもつ。	ハケ(10~11本/cm) →ナデ	ナデ	浅黄色	微砂粒 褐色粒 ◎		52
656	支脚	底径(8.0) 器高 15.2	中実、受け部欠損。	ナデ(指頭痕あり)	――	灰黄色	石・長(1~4) 金・褐色粒 ◎		
657	支脚	底径(10.0) 残高 12.0	角状の突起をもつ受部。背部に鰭状の把手部をもつ。中空。	(角)ナデ (脚)タタキ→ナデ	ナデ(しぼり痕あり)	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
658	支脚	残高 17.1	中空。角状の突起をもつ受部。背部に鰭状の把手部をもつ。	タタキ→ナデ (指頭痕あり)	ナデ(しぼり痕あり)	灰白色 灰色	石・長(1~3) ◎		52
659	支脚	底径 7.1 残高 12.0	中空。角状の突起をもつ受部。背部に突起をもつ。	(角)ナデ (脚)タタキ→ナデ	ナデ(しぼり痕あり)	灰白色	石・長(1~4) ◎		52
660	支脚	残高 14.1	中空。角状の突起をもつ受部。背部に突起をもつ。	タタキ→ナデ	ナデ(しぼり痕あり)	褐灰色	石(1~3) 長(1~5) ◎		
661	支脚	残高 11.5	中空。角状の突起をもつ受部。	タタキ→ナデ (指頭痕あり)	(脚上)ナデ(しぼり痕あり) (脚下)ハケ(6本/cm)→ナデ	淡黄色 灰色	石・長(1~3) ◎		

SR401下層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
662	支脚	底径 10.0 残高 13.2	中空、角状の突起があったと思われる。	ナデ(指頭痕あり)	㊧ナデ(しぼり痕) ㊦ハケ(6本/cm) →ナデ	にぶい橙色 橙色	石(1~3) 長(1~5) ◎		52
663	支脚	残高 11.2	中空、角状の突起をもつ受部。背部に把手部があったと思われる。	㊥ナデ ㊧タタキ→ナデ (指頭痕あり)	工具によるナデ	浅黄橙色	長(1) ◎		
664	支脚	残高 10.0	角状の突起をもつ受部片。	ナデ(指頭痕あり)	———	灰黄色	石・長(1~3) ◎		
665	壺	口径 (9.2) 器高 8.3	小型丸底壺。外反する口縁。口縁端部は丸い。	㊐ハケ(7本/cm) →ナデ ㊥㊦ ナデ	㊐ナデ ㊥㊦ 指ナデ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長(1~3) 金・褐色粒 ◎	黒斑	55
666	壺	口径 (8.3) 器高 8.5	小型丸底壺。	㊐ヨコナデ ㊥㊦ナデ (指頭痕あり)	㊐ハケ(7本/cm) →ナデ ㊥㊦ 指ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~4) 金・褐色粒 ◎		55
667	壺	口径 8.7 器高 8.2	小型丸底壺。胴部は球体のように丸味をおびる。	㊐ヨコナデ ㊥㊦ 指ナデ	ナデ(指頭痕あり)	浅黄橙色 淡黄色	石・長(1~3) ◎		55
668	壺	口径 8.7 器高 9.0	小型丸底壺。内面に強い指ナデが見られる。	㊐ヨコナデ ㊥㊦ ナデ	㊐ナデ ㊥㊦ 指ナデ	にぶい橙色	石・長(1) ◎		55
669	壺	口径 8.2 器高 8.6	小型丸底壺。	㊐ヨコナデ ㊥㊦ ナデ	㊐ヨコナデ ㊥㊦ ナデ	灰黄色	石・長(1~4) 金 ◎	黒斑	55
670	壺	残高 7.6	小型丸底壺。	ハケ(4本/cm) →ナデ	㊐ ハケ(4本/cm) →ナデ ㊥㊦ 指ナデ(指頭痕あり)	にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		55
671	壺	残高 6.1	小型丸底壺。	㊐ヨコナデ ㊥ 指ナデ	㊐ ヨコナデ ㊥ ナデ	灰色	石・長(1) 金 ◎		
672	壺	残高 6.9	小型丸底壺。頸部径がかなり小さい。胴部は球体のように丸味をおびる。	ナデ(工具痕あり)	指ナデ	灰白色 褐灰色	石・長(1~4) 金 ◎		55
673	坏	口径 (9.8) 底径 (4.5) 器高 3.2	内湾して立ち上がる口縁。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ(指頭痕あり)	灰黄色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 多・金 ◎		56
674	甕	残高 7.0	胴部は丸い。	㊍ヨコナデ ㊥ ハケ(8本/cm)→ナデ	㊍㊤ナデ ㊥下 ケズリ	橙色	石・長(1~2) 褐色粒 ◎		55
675	手捏	底径 3.0 残高 7.0	器壁は厚く底部は平底。	ナデ(指頭痕あり)	㊥上 ナデ ㊥下㊦ 工具によるナデ(指頭痕あり)	灰白色 灰黄色	微砂粒 ◎		56
676	手捏	口径 5.3 底径 5.0 器高 5.9	指おさえ痕が、顕著。	ナデ指おさえ	指ナデ(指頭痕あり)	灰白色	長(1) ◎		56
677	手捏	口径 5.4 底径 2.5 器高 4.6	ミニチュア土器。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	灰白色	長(1~3) ◎		56
678	手捏	口径 3.7 底径 1.0 器高 3.6	ミニチュア土器。	ナデ(指頭痕あり)	指ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	長(1) ◎		56
679	甑	口径(28.8) 残高 22.6	口縁端面は強いナデにより凹む。	㊐㊥ ハケ(5本/cm)→ナデ ㊧ ナデ	㊐ ヨコナデ ㊥ ナデ	にぶい黄橙色	石(1~2) 長(1~6) ◎		56
680	甑	残高 8.0	貫通する1ヶ所の穿孔と下面に4ヶ所の穿孔痕を残す。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	浅黄色	石・長(1~2) ◎		56

表75　SR401下層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
681	石包丁	一部欠損	層灰岩	(20.1)	6.3	0.5	111.05		57
682	石包丁	未製品	結晶片岩	9.0	4.2	0.9	57.63		57 58
683	石包丁	未製品	結晶片岩	13.4	6.4	1.8	187.72		57 58
684	扁平片刃石斧	欠損	頁岩	(10.3)	(3.3)	2.3	138.82		57 58

SR401下層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
685	扁平片刃石斧	欠損	頁岩	(6.5)	3.2	1.1	44.89		57 58
686	砥石	欠損	砂岩	(12.5)	10.7	9.1	1850.00		
687	砥石	欠損	砂岩	(8.0)	(3.8)	3.6	84.19		
688	砥石	欠損	砂岩	(8.3)	(4.9)	(3.3)	156.28		
689	台石	欠損	砂岩	21.8	(19.5)	13.0	7700.00		
690	台石	欠損	砂岩	(22.5)	19.0	10.2	6300.00		
691	敲石	一部欠損	砂岩	10.8	9.5	9.1	1190.00		57
692	敲石	完形	砂岩	8.8	5.7	4.0	254.70		57
693	石錘	完形	砂岩	11.4	9.3	2.8	454.00		57 58
694	石鏃	完形	赤色チャート	3.4	1.8	0.6	3.32		57 58
695	スクレイパー	完形	サヌカイト	5.7	2.0	1.1	8.45		58
696	スクレイパー	欠損	サヌカイト	4.4	2.3	1.5	12.10		
697	スクレイパー	完形	頁岩	4.2	5.5	0.7	20.71		58
698	スクレイパー	完形	赤色チャート	2.5	2.0	0.5	2.62		
699	スクレイパー	完形	サヌカイト	2.5	2.4	0.6	2.95		
700	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.5	3.5	0.9	11.95		

表76　SR401下層出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
701	小玉	完形	ガラス 淡い水色	0.2	0.3	0.1	0.023		60

表77　SR401下層出土遺物観察表　木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
702	杭	欠損	ヒサカキ属	77.8	3.7	4.4	—			59
703	杭	欠損	—	(38.5)	6.2	5.8	—			59
704	杭	欠損	ヒノキ	40.0	2.6	1.8	—			59
705	杭	欠損	コウヤマキ	(33.9)	2.7	1.4	—			59
706	杭	欠損	—	(17.2)	4.9	4.7	—			59

SR401下層出土遺物観察表　木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
707	杭	欠損	ヤブツバキ	(15.0)	4.1	3.7	—			59
708	杭	欠損	サカキ	(17.7)	2.6	3.2	—			59
709	杭	欠損	—	(28.1)	2.9	2.5	—			59
710	不明	欠損	ヒノキ	57.7	3.2	1.7	—			59
711	加工材	欠損	—	(13.8)	7.5	6.7	—			59
712	加工材	欠損	—	(9.5)	4.0	3.2	—			59
713	曲物 (底板)	欠損	ヒノキ	13.0	5.0	0.6	13.2			60
714	モリ状加工材	ほぼ完形	—	(24.3)	1.3	1.2	—			59

表78　SR401中層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
715	坏蓋	口径 13.2 器高 4.3	やや扁平な天井部から内湾気味に垂下する口縁。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(1) 密 ◎		60
716	坏蓋	口径 (12.8) 器高 4.0	やや凹んだ天井部から、段をなして口縁部は垂下する。口縁端部は凹面をなす。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~2) 密 ◎		
717	坏蓋	口径 (13.6) 器高 5.0	扁平な天井部からなだらかな弧を描き口縁部付近で段をなす。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~2) 密 ◎		
718	坏身	口径 (11.0) 受部径(13.6) 残高 4.7	内傾して立ち上がり、端部は内傾する凹面をなす。受部は水平にのび、上面に沈線状の凹みあり。	㊐回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	微砂粒 密 ◎		
719	坏身	口径 (13.2) 受部径(15.5) 残高 3.0	短く内傾して立ち上がる。受部は上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) 密 ◎		
720	坏身	口径 (13.2) 受部径(15.1) 残高 2.7	短く立ち上がる口縁。口縁端部は尖り気味。受部は上外方に短くのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1) 密 ◎		
721	坏身	受部径(15.1) 底径 (9.5) 残高 2.5	短く水平にのびる受部。	㊐回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) 密 ◎		
722	坏	底径 (6.4) 残高 2.8	平底。底部より外傾して立ち上がる。器壁が薄い。	㊋ヨコナデ ㊎ナデ	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
723	坏	底径 (7.0) 残高 1.9	平高台。	㊋ヨコナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	灰白色	長(1) ◎		
724	坏	底径 5.8 残高 2.8	平高台。底部内面は強いナデにより凸凹がある。	㊋ヨコナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	淡黄色 灰黄色	微砂粒 ◎		
725	坏	底径 (6.3) 残高 1.9	平高台。	㊋ヨコナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	灰色 黄灰色	長(1) ◎		
726	坏	底径 (6.5) 残高 1.6	平高台。	㊋ヨコナデ ㊎回転ヘラ切り (板状圧痕あり)	ヨコナデ	灰黄褐色	微砂粒 ◎		

表79　SR401中層出土遺物観察表　玉類

番号	品種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
727	臼玉	完形	滑石 淡いうぐいす色	0.2	0.4	0.2	0.055		60
728	小玉	完形	ガラス 紺色	0.5	0.7	0.2	0.372		60

表80　SR401上層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
729	甕	口径(23.0) 残高 3.7	内面に稜をもって外傾する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ(指頭痕あり)	ナデ	黒色 浅黄橙色	微砂粒 金 ◎		
730	甕	口径(25.0) 残高 3.8	外反する口縁部片。口縁端部は外方に丸く肥厚する。	(口端)ナデ (口)ハケ(5本/cm)→ナデ (頸)ヨコナデ	ナデ	灰黄褐色 浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ◎		
731	壺	口径(14.0) 残高 4.0	外反する口縁部片。口縁端部は面をもつ。	(口端)ナデ (口)(頸)ハケ(8本/cm)→ナデ	(口)ナデ (頸)ハケ(8本/cm)→ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
732	壺	口径(17.3) 残高 2.2	外反する口縁部片。口縁端面は強いナデにより凹む。	ナデ	ナデ	淡黄色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
733	壺	残高 1.6	口縁端部は外下方に垂下する。6条の波状文が施される。	ナデ→施文	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
734	坏蓋	口径(13.0) 残高 2.9	内湾気味に垂下する口縁。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	微砂粒 密 ◎		
735	坏蓋	口径(14.2) 残高 3.0	段をなして口縁部は垂下する。口縁端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~2) 密 ◎		
736	坏蓋	口径(10.8) 残高 2.0	口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(4) 密 ◎		
737	坏	底径 (6.7) 残高 4.2	平高台。底部より外傾して立ち上がる。	(胴)摩滅の為不明 (底)回転ヘラ切り	ヨコナデ	灰白色 明黄褐色	微砂粒 ◎		
738	坏	底径 (7.2) 残高 1.6	平高台。底部内面中央が丸く凸む。	(胴)ヨコナデ (底)回転ヘラ切り	ヨコナデ	灰白色	長(1~3) ◎		
739	坏	底径 (8.2) 残高 3.3	平高台。底部より内湾気味に立ち上がる。	(胴)ヨコナデ (底)摩滅の為不明	ヨコナデ	灰色	長(1) ◎		
740	坏	底径 (6.6) 残高 1.7	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 灰黄褐色	石・長(1~2) ◎		
741	坏	底径 (5.9) 残高 1.8	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 黄褐色	石・長(1) ◎		
742	坏	底径 (6.5) 残高 2.3	平高台。	(胴)ヨコナデ (底)回転ヘラ切り	ヨコナデ	褐灰色 暗灰色	石・長(1~2) ◎		
743	坏	底径 (6.0) 残高 2.3	平高台。	(胴)摩滅の為不明 (底)回転ヘラ切り	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
744	坏	底径 (7.8) 残高 1.9	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色 淡黄色	微砂粒 ◎		
745	坏	底径 (6.3) 残高 1.7	平高台。	(胴)摩滅の為不明 (底)回転ヘラ切り	ナデ	淡橙色	微砂粒 ◎		
746	坏	底径 (6.0) 残高 3.2	平高台。	(胴)ヨコナデ (底)摩滅の為不明	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 ◎		
747	坏	底径 (7.1) 残高 2.3	平高台。	摩滅の為不明	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 褐色粒 ◎		
748	坏	底径 (7.2) 残高 1.6	平高台。	(胴)ヨコナデ (底)摩滅の為不明	ヨコナデ	灰色	微砂粒 ◎		
749	坏	底径 (5.7) 残高 1.5	平高台。底部片	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
750	坏	底径 (7.2) 残高 2.0	平高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		
751	椀	底径 (6.4) 残高 1.3	輪高台。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	にぶい黄橙色	微砂粒 褐色粒 ◎		
752	椀	底径 (5.9) 残高 3.1	黒色土器。高台付。底部より内湾気味に立ち上がる。	摩滅の為不明	(胴)摩滅の為不明 (底)ヘラミガキ	灰白色 暗灰色	微砂粒 ◎		
753	椀	残高 1.4	黒色土器。	摩滅の為不明	ヘラミガキ	橙色 灰色	微砂粒 褐色粒 ◎		

SR401上層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
754	椀	底径 (7.4) 残高 2.0	黒色土器。	㊥ヨコナデ ㊦ナデ	工具によるナデ →ヘラミガキ	淡黄色 黒色	微砂粒 ◎		
755	椀	底径 (7.0) 残高 2.6	黒色土器。	ナデ	ヘラミガキ	褐灰色 黒色	微砂粒 ◎		
756	坏	底径 7.2 残高 1.8	平底の底部より外傾して立ち上がる。	㊥ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	石(2) ◎		
757	坏	底径 (7.0) 残高 1.5	底部より内湾気味に立ち上がる。	㊥ナデ ㊦回転糸切り	摩滅の為不明	灰褐色 にぶい赤橙色	微砂粒 ◎		
758	羽釜	口径(19.2) 残高 2.7	内傾して立ち上がる口縁部片。口縁にやや垂下した隆帯が貼付される。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
759	羽釜	口径(32.0) 残高 3.5	直口気味に立ち上がる口縁部片。口縁にやや垂下した隆帯が貼付される。	ナデ	ハケ(6本/cm) →ナデ	にぶい橙色	石・長(1~3) 多 ◎		
760	羽釜	残高 9.7	土師質。脚部片。	ナデ	――	にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
761	甕	残高 7.1 口径(29.4)	亀山焼。外面に格子タタキが施される。	格子タタキ	ナデ	灰色 灰白色	微砂粒 ◎		
762	鉢	残高 10.2	東播系こね鉢。外傾して立ち上がり、口縁付近で短く上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~3) 多 ◎		
763	青磁碗	残高 3.2	胴部片。	ナデ→施釉	回転ナデ →施釉	暗オリーブ	微砂粒 密 ◎		60

表81　SR401上層出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
764	天聖元寶	1023	25	7	1.1	0.5	1.38	順読	60

表82　SR401上層出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
765	鉄滓	実存	鉄製	5.4	2.8	1.7	35.34		
766	鉄滓	実存	鉄製	4.7	3.9	2.9	45.23		
767	鉄滓	実存	鉄製	5.6	3.7	2.8	20.76		
768	鉄滓	実存	鉄製	4.0	3.1	2.0	2.35		
769	鉄滓	実存	鉄製	3.2	2.2	1.6	17.72		
770	鉄滓	実存	鉄製	2.7	1.6	1.4	28.88		
771	鉄滓	実存	鉄製	2.7	2.8	1.7	16.76		

表83　SP411出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
772	皿	口径 8.7 底径 6.0 器高 1.6	平底。外傾する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	㊥ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 明黄褐色	微砂粒 金 ◎		60
773	皿	口径 9.0 底径 5.6 器高 1.7	平底。外傾する口縁。	㊥ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	橙色	微砂粒 金 ◎		60

表84　SP411出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
774	不明	不明	鉄製	(9.2)	0.6	0.6	13.45			60

表85　出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
775	椀	底径 (6.1) 残高 2.3	高台付。高台端部は尖りながら丸く仕上げる。黒色土器。	㊥ヨコナデ ㊦ナデ	ヘラミガキ	灰白色 暗灰色	微砂粒 ◎		
776	椀	底径 (7.1) 残高 1.9	高台付。黒色土器。	摩滅の為不明	ヘラミガキ	灰黄色 黒色	微砂粒 ◎		
777	坏	底径 (6.0) 残高 1.3	平底。底部端がわずかに外方向に突出する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
778	羽釜	残高 3.2	やや内傾する口縁部片。丸味をおびた隆帯を貼付する。。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎		
779	甕	底径(18.2) 残高 3.1	平底。	㊥タタキ ㊦ナデ	ナデ	灰色	微砂粒 ◎		

第１１章

桑原遺跡4次調査地

－５区の調査－

第11章　５区の調査

１．調査の経緯

市道中村桑原線道路改良工事第１工区内における６回目の調査地となる５区は、４区の東側に接し、松山市指定埋蔵文化財包蔵地『No.82　東本遺物包含地』内の中央部に位置する。５区の南側は、市道桑原23号線が東西に延びる。調査地はほぼ正方形で、長さ32m、幅22m、対象面積は約700m²である。調査区は、試掘調査データを基に遺構が確認された箇所を中心に設定した。また、周縁地を安全対策兼排土置き場として使用したために、調査面積は152m²余りとなった。

以下、調査工程を略記する。

平成13年６月15日～18日：松山市道路建設課職員の立ち会いのもとに調査地を確認後、試掘調査を実施した。

８月22日～23日：２日をかけ、重機により表土の剥ぎ取りを行う。また、調査区の周りには近隣住宅地へ砂埃が飛散することを防ぐために高さ５mのネットを設置した。遺構検出作業は現代層及び現代坑の除去に多くの時間を割いた。

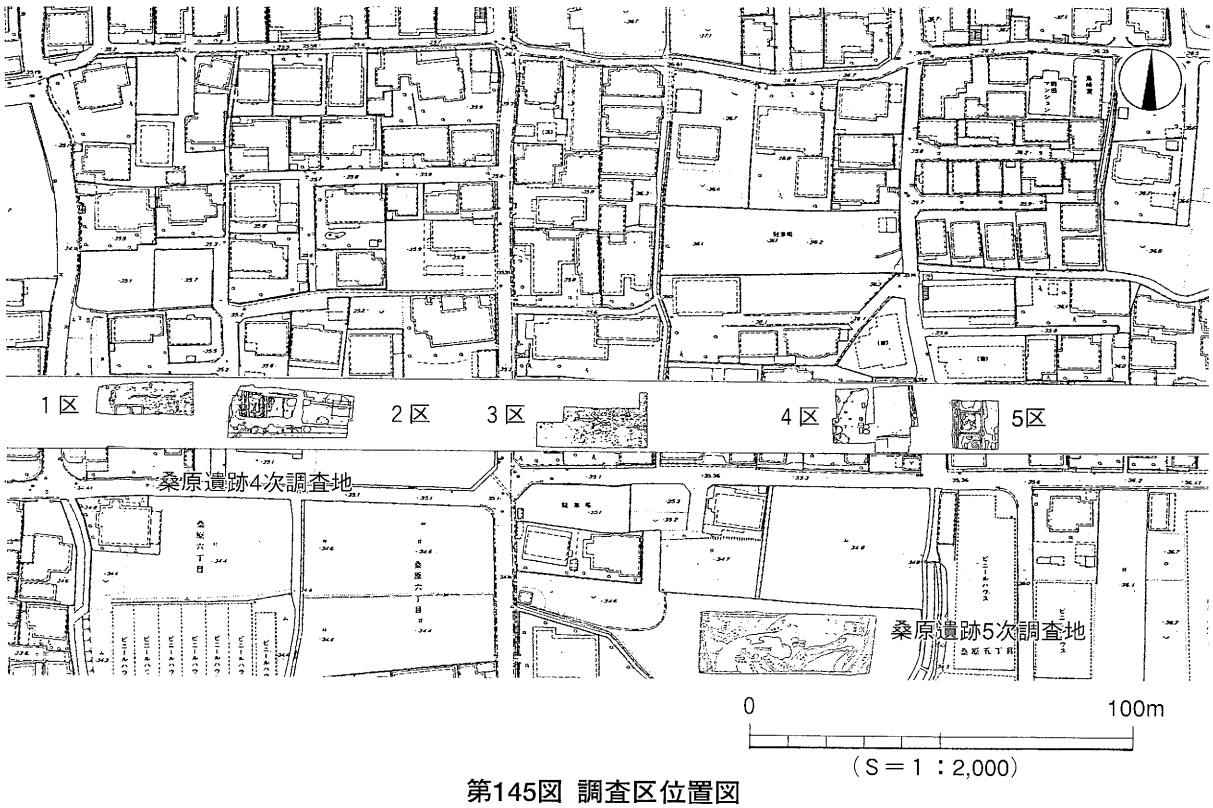
25日：近接する桑原遺跡５次調査地をメインとした現地説明会を実施。

27日：調査区内にグリッドを設定する。

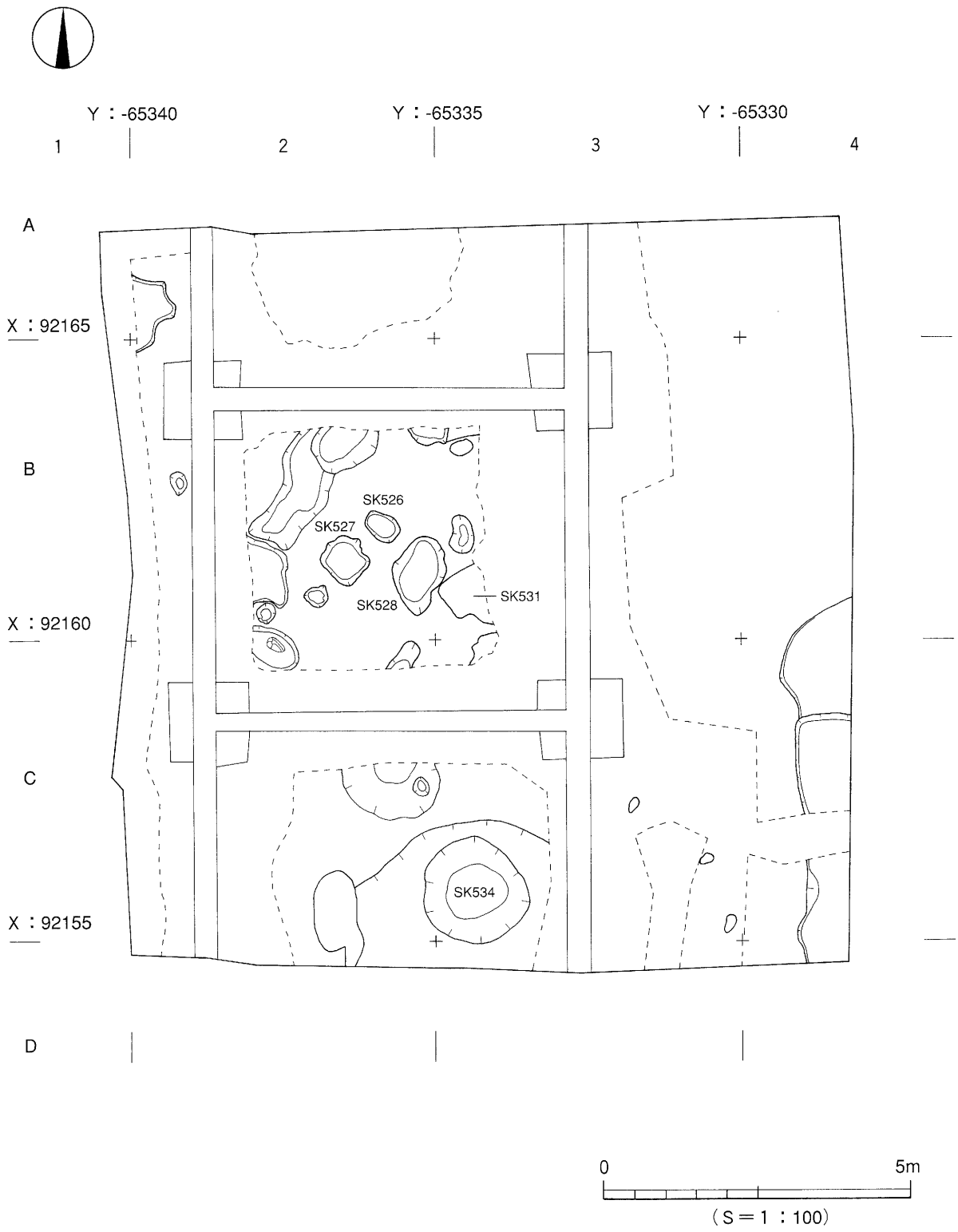
９月４日：遺構検出状況の写真撮影（１回目）。

18日：遺構検出状況の写真撮影（２回目）。

18日～25日：ＳＫを中心とした遺構の掘り下げ・測量。



第145図 調査区位置図


Y：-65340
Y：-65335
Y：-65330
1
2
3
4
A
B
C
D
X：92165
X：92160
X：92155
SK526
SK527
SK528
SK531
SK534
0
5m
（S＝1：100）

第146図 遺構配置図

25日：遺構完掘状況の写真撮影。
27日：重機により埋め戻し作業を開始し、出土遺物・発掘用具の撤収を行う。
28日：現場事務所を撤去し、野外調査を終える。

2．層位（第147図、図版62-1）

本調査区には、直前まで鉄筋コンクリート4階建のマンションが2棟建っていた。調査開始までに階層部は撤去されたが、基礎部分については残るという結果となった。基礎下部は遺構検出面以下まで達しており、完全撤去した場合、残存する遺構まで失う恐れがあった。そのため現状での調査を行う事とした。調査区の標高は35.8mを測る。

本区の基本層序は第Ⅰ層：造成土（真砂土）、第Ⅱ層：旧水田（耕作）層、第Ⅲ層：淡黄白色粘質土、第Ⅳ層：暗灰色砂質土、第Ⅴ層：黄茶色粗砂、第Ⅵ層：青白色土である。遺構の検出は、第Ⅲ層上面で行ったが、部分的に第Ⅲ層が欠如している箇所がある。その場合、第Ⅳ層上面検出とした。

第Ⅰ層－瓦礫を多く含む真砂土で、マンション建設時及び撤去時に係る造成土である。

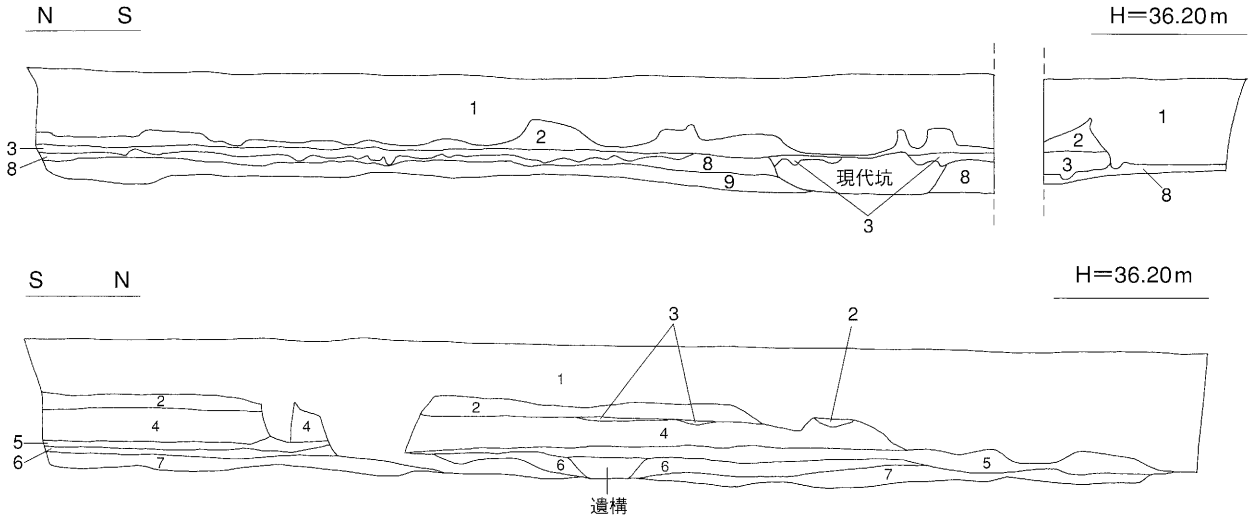
第Ⅱ層－第Ⅰ層造成以前の旧水田層である。耕作土部分にあたるⅡa層と床土部分のⅡb層に細別できる。Ⅱa層は暗灰色土である。Ⅱb層は暗灰茶色土でⅡa層と比べやや粘度が高い。

第Ⅲ層－粘土質土の層である。砂礫を含まず、パサパサとして土のしまりがない土層である。

第Ⅳ層－色調は暗灰色から褐色を呈し、砂礫を含む砂質層である。

第Ⅴ層－茶色から黄茶色の砂礫層で、白色、茶色の1～3mm前後の砂礫を多く含む。

第Ⅵ層－局部的に土質、色調が異なり、青白色、青灰色を呈する土層が見られる。



第Ⅰ層 ―1 造成土（真砂土）
第Ⅱa層―2 暗灰色土（旧耕作土）
第Ⅱb層―3 暗灰茶色土（旧水田床土）
第Ⅲ層 ―4 淡黄白色粘質土
第Ⅳ層 ―5 暗灰色砂質土
第Ⅴ層―6 黄茶色粗砂
第Ⅵ層―7 青白色粘土
8 青灰色砂質土
9 青灰色粘質微砂

0 4m
（S＝1：80）

第147図 東壁・西壁 土層図

３．遺構と遺物

検出した主な遺構は、土坑12基（ＳＫ524～535）、柱穴５基（ＳＰ5693～5697）である。

〔１〕中世

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ526（第148図）

調査区西側のＢ２区に位置する。平面形は楕円形、断面形はレンズ状を呈する。検出規模は、長軸58cm、短軸43cm、深さ13.5cmを測る。埋土は縁灰色砂質土である。出土遺物は、図化はできないものの土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物と埋土から中世以降と考える。

ＳＫ527（第148図）

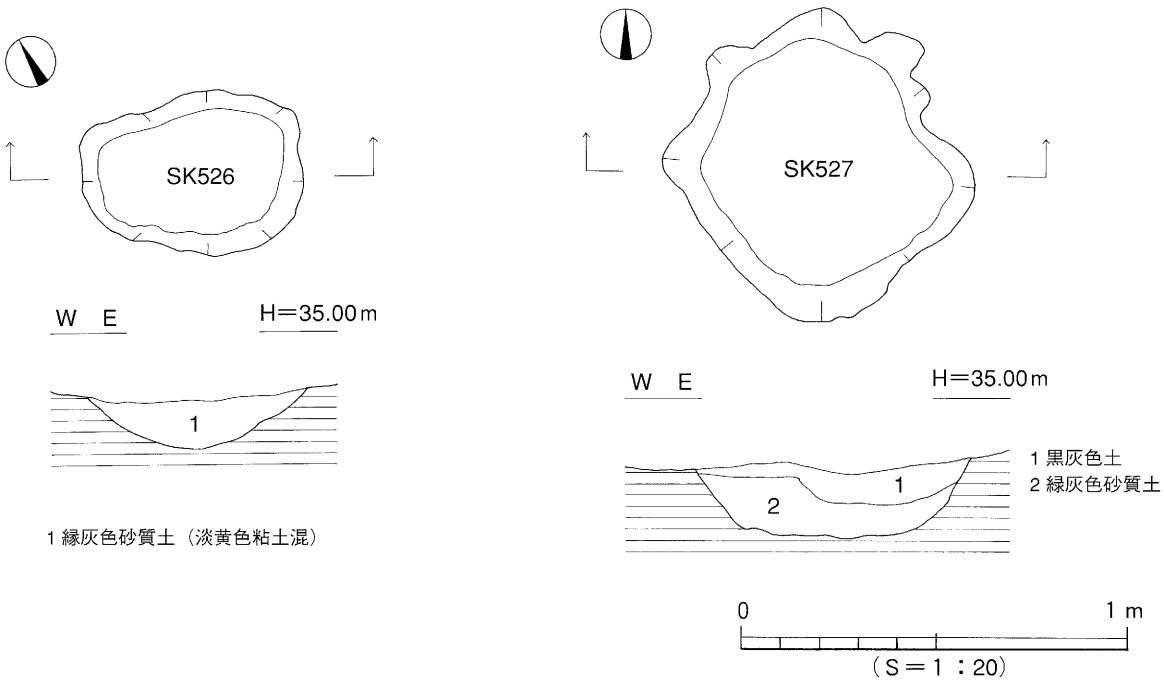
調査区西側のＢ２区に位置する。平面形は方形、断面形はレンズ状を呈する。検出規模は、長軸84cm、短軸81cm、深さ18cmを測る。埋土は黒灰色土、縁灰色砂質土である。出土遺物は、図化はできないものの土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物と埋土から中世以降と考える。

ＳＫ528（第149図）

調査区西側のＢ２区に位置する。平面形は楕円形、断面形はレンズ状を呈する。検出規模は、長軸131cm、短軸86cm、深さ21.5cmを測る。ベースの埋土は縁灰色砂質土で淡黄色粘土が混じる。出土遺物は、図化はできないものの土師質土器の小片が出土している。

時期　出土遺物と埋土から中世以降と考える。



第148図　SK526・SK527測量図

ＳＫ531（第150図）

調査区中央部のＢ３区に位置する。平面形は楕円形、断面形はレンズ状を呈する。検出規模は、長軸91cm、短軸83cm、深さ27cmを測る。埋土は黒灰色土である。出土遺物は、図化はできないものの土師質土器の小片及び杯が出土している。

出土遺物（第151図）

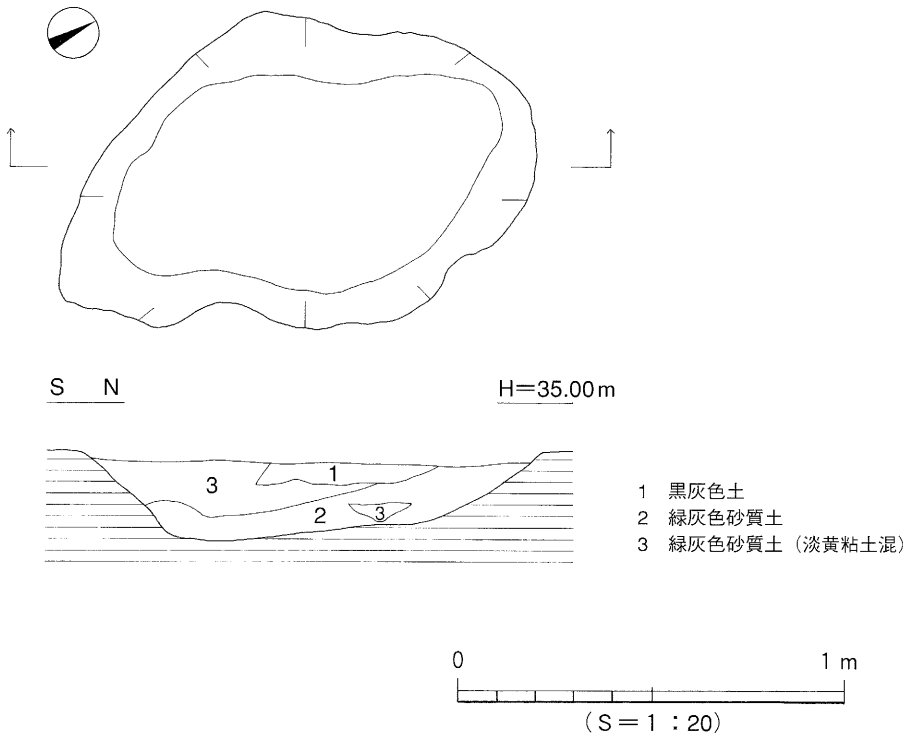
780は土師質土器の杯である。平底を呈する底部から緩やかに内湾気味に立ち上がる体部を持つと思われる。底部切り離し技法は、回転糸切りによる。

時期　出土遺物と埋土から中世以降と考える。

ＳＫ534（第152図・図版62-2）

調査区南側中央のＣ３区に位置する。平面形は円形、断面形はレンズ状を呈する。検出規模は、長軸183cm、短軸168cm、深さ33cmを測る。埋土は暗灰色粗砂質土である。出土遺物は、図化はできないものの土師質土器の小片と木の枝が出土している。木の枝には加工痕跡は認められず、出土状態から流木と考えられるものである。

時期　出土遺物と埋土から中世以降と考える。



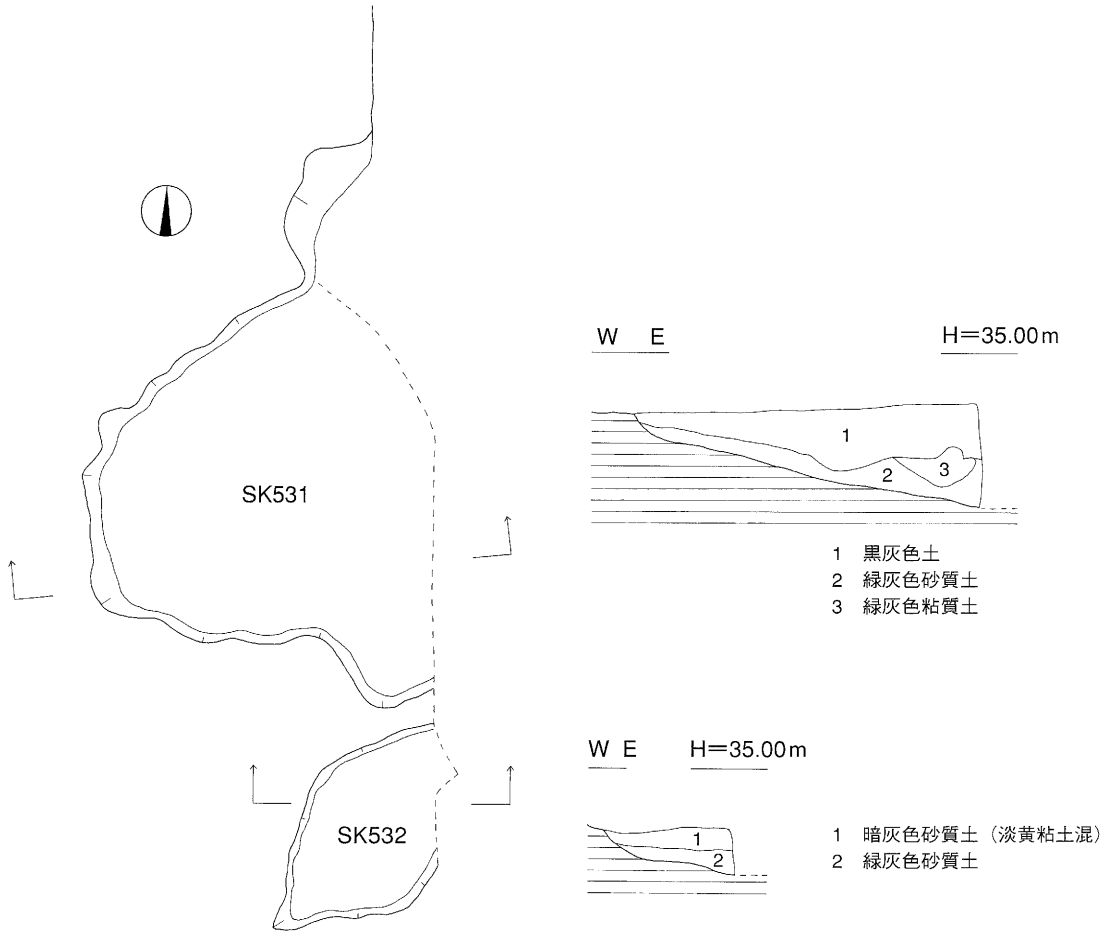
第149図 SK528測量図

〔2〕その他の出土遺物

1）グリッド内出土遺物

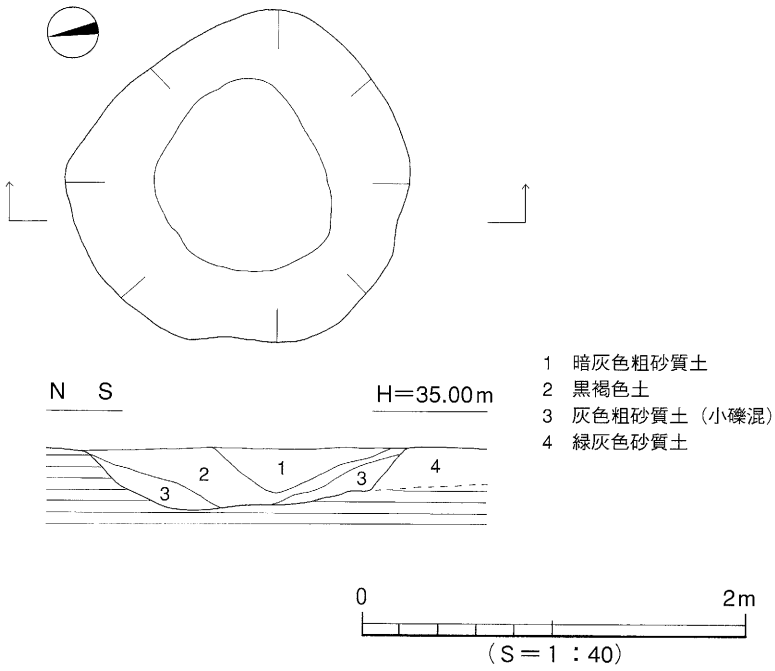
出土遺物（第153図）

781はＣ２出土の須恵器坏蓋である。口縁部は直線的にやや開き、端部は丸く収められる。稜の張り出しは弱く、丸みを帯びる。口縁部外面には、緑白色を呈す霜降り状の自然釉が付着する。ＴＫ209段階に比定されるものである。782はＣ３、783はＢ２から出土した共に東播系中世須恵器のこね鉢で14世紀後半～15世紀前葉に位置付けられるものである。782は薄手のつくりで、口縁部に粘土を巻き付けるように貼り付け、ナデ調整を施している。体部内外は強いナデ調整により所々稜をなす。



第150図 SK531 測量図

第151図 SK531 出土遺物実測図



第152図 SK534 測量図

783の口縁部は粘土を貼り付け、口唇部を上下に拡張する。器面の荒れが著しい。784はＢ３から出土した土師質土器羽釜の脚接合部である。外面上部に煤が付着する。785はＣ２、786はＣ３から出土した土師質土器の杯で、底部切り離し技法は回転糸切りである。786の底面には糸切り痕跡の他、指状痕跡と板状圧痕が看取される。787はＣ４出土の棒状鉄片である。788はＡ２出土の鉄片である。789は開元通寶（かいげんつうほう、初鋳年621年）である。背面下には、月の文様が入る。

２）出土地点不明遺物

出土遺物（第154図）

790は須恵器で有蓋高坏の坏蓋つまみ部である。ナデにより窪みが形成され、中心部は僅かに突出する。頂上部のみに灰緑色の自然釉が薄く残る。ＴＫ47段階に比定されるものである。791は土師質土器の杯である。底部切り離し技法は糸切りである。15世紀後半～16世紀前半に位置付けられるものである。792は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に緩く立ち上がる。高台は、高さが約1.2cmと高く、断面長方形の輪高台が貼り付けられている。内外面共、器面の荒れが著しい。

４．小　結

桑原遺跡４次調査地５区では、中世～近世にかけての遺構・遺物を検出した。

（１）立地・層位

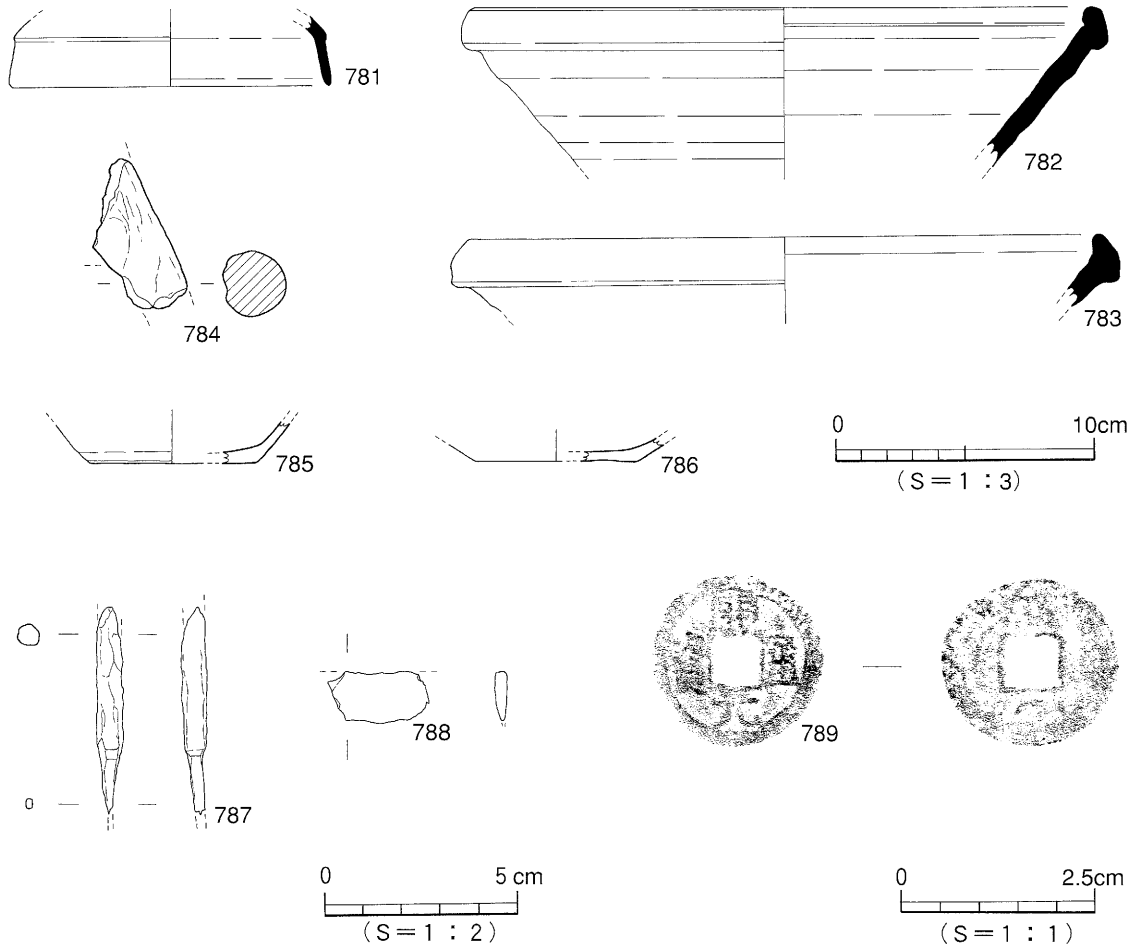
現在の石手川扇状地は、松山市石手寺付近（標高約50m）を扇頂とする半径約４km、標高約20m

までとし、石手川左岸のうち、古期扇状地を「畑寺面」、低位段丘を「東野面」、現世の扇状地を「中村面」の３つに分類される。また、洪積世の最終氷期最盛期の約２万年～1.8万年前頃の最大海水面低下期には、石手川は現在の城北地区を通り、堀江低地へ流下していたと推定されている。従って石手川左岸では、洪積世の最末期から完新世にかけて、本流による激しい洪水に襲われることはなく、安定した地形環境であったと推定される［1988・1989　平井］。その後、現石手川の河道が人工的に現在の位置に固定されたのは、江戸時代初期ことであり、以後、左岸は度々洪水氾濫の影響を受けている［1988　清水］。本調査区は中村面のほぼ中央に位置する。

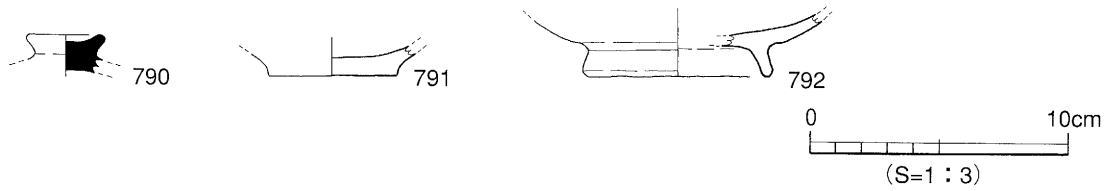
①本調査区で確認された土層のうち、第Ⅰ・Ⅱ層は近現代層、第Ⅲ層は粘土質土の層である。周辺の遺跡（樽味・桑原地区）において検出される弥生時代や古墳時代の遺構検出面は、本来、第Ⅱ層と第Ⅲ層の間にあると思われるが、本調査区では確認されていない。また本区第Ⅲ層以下は、西方50mに位置する桑原遺跡４次調査地３区の第Ⅵ層以下に相当すると思われ、同区では確認されたＡＴ火山灰の１次堆積層及び２次堆積層も確認されていない。

②本調査区内で確認された遺構は、主に中世以降のものと考えられ、脆弱且つ不安定な第Ⅲ・Ⅳ層上面で検出された。従って大半の遺構は、本来上部にあったであろう比較的堅固な基盤層から掘り込まれたものと考える。

立地と①・②及びＳＫ534内出土の流木から、本調査区は、近世以降に石手川（段丘化した扇状地上を流れる小河川も含む）の洪水氾濫の影響を受けた可能性がある。



第153図 グリッド出土遺物実測図



第154図 出土地点不明遺物実測図

（2）遺物

本調査区から出土した遺物は、概ね中世後期までに収まるものが多い。以下、主要な遺物について記す。

銭貨：789は背面下に月の文様が入る開元通寶である。字体は明瞭で、判読は容易である。土圧のよるものか表面を凸面状に湾曲している。開元通寶は大小様々な銭形があり、書体の変化が多く、背面の模様も多種複雑である（1996　永井）。

東播系須恵器：狭小な調査面積ながら本区から2点のこね鉢が出土した。近接する他区からもコンスタントに数点出土している。これらは、「東播系鉢が広域分布品として12世紀末～13世紀に急増し、15世紀に“どこでも”出土するようになる（2003　池澤）」を裏付けるものである。

本調査区は、検出された遺構・遺物の数量が他の調査区と比較して少なく、遺跡的に希薄なエリアとなっている。これは本来、造成土下に存在すべき土層の欠如であり、二つの原因を考える。一つは前項にも記した洪水氾濫である。792は土師質土器の椀で12世紀代に位置付けられるものである。しかし、その器面の著しい荒れから他地域より流れてきたものと思われる。したがって12世紀以降に本区が洪水氾濫の影響を受けた可能性がある。

※参考文献はP.242を参照

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺物観察表は武正良浩、村上真由美、岩本美保が作成した。

（2）遺物観察表の記載について。
　　法　量　欄　（　）：推定値復元。
　　調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部
　　胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。
　　（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（1～3）→「1～3mmの砂粒・長石を含む」である。
　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表86　SK531出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面)(内面)			
780	杯	底径 (6.7) 残高 1.3	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	横ヨコナデ 底回転糸切り	摩滅の為不明	浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		

表87　グリッド出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面)(内面)			
781	坏蓋	口径(12.6) 残高 2.7	口縁部は開き気味に下り端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ灰色 灰色	微砂粒 ◎	自然釉 C2	
782	こね鉢	口径(24.6) 残高 6.3	外反する口縁部。端部は上下に拡張する。東播系。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	石・長(1) 金 ◎	C3	
783	こね鉢	口径(24.5) 残高 2.8	外反する口縁部片。端部は上下に拡張する。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	石・長(1~2) 金 ◎	B2	
784	羽釜	残高 5.9	土師質。脚部。	ナデ	———	淡赤橙色	石・長(1~3) ◎	煤付着 B3	
785	坏	底径 (6.6) 残高 1.6	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。	横ヨコナデ 底回転糸切	ヨコナデ	灰白色	微砂粒 ◎	C2	
786	坏	底径 (6.2) 残高 0.9	平底。	横ヨコナデ 底回転糸切り (板状圧痕あり)	ナデ	灰黄褐色	長(1) 微砂粒 ◎	C3	

表88　グリッド出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
787	棒状　鉄片	不明	鉄製	5.5	0.6	0.6	6.75	C4	
788	鉄片	不明	鉄製	2.7	1.3	0.4	1.89	A2	

表89　グリッド出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
789	開元通寶	唐621年	22.0	7.0	13.0	8.0	2.01	対読	

表90　出土地点不明遺物観察表　土製表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面	(外面)(内面)			
790	坏蓋	つまみ径3.0 残高 1.5	中央部が凹むつまみが付く。	回転ナデ	ナデ	灰緑色 灰白色	微砂粒 ◎		
791	坏	底径 (5.0) 残高 1.2	小さく突出する底部。	横回転ナデ 底糸切り	ナデ	灰白色	長(1) ◎		
792	椀	底径 (7.4) 残高 2.4	土師質。高台付き椀底部。「ハ」の字に付いている。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白色	微砂粒 ◎		

第12章　自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 東本遺跡６次調査１区における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、弥生時代後期後半の竪穴式住居ＳＢ102から採取された試料Ａ(焼土)、試料Ｂ(焼土)、試料Ｃ(埋土，黒褐色土)、試料Ｄ(埋土，黒褐色土)、試料Ｅ(床面)、試料Ｆ(床面)の６点である。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型（チマキザサ節・チシマザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第155図・第156図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（第157図）を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

（2）植物珪酸体の検出状況（第156図）

分析の結果、焼土（試料A，B）では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。埋土（試料C，D）や床面（試料E，F）でも、おおむね同様の結果であり、植物珪酸体の組成や密度に特に明瞭な差異は認められなかった。なお、埋土（試料C）と床面（試料F）では、イネが検出された。イネの密度は700～1,400個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともメダケ節型およびネザサ節型が優勢となっている。

5．考察

弥生時代後期後半の竪穴式住居ＳＢ102の埋土の堆積当時は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる比較的乾燥した草原的な環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

また、当時は調査区周辺で稲作が行われていたと考えられ、何らかの形で住居内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。このイネについては、屋根材や敷物などとして利用されていた可能性も示唆されるが、密度が低いことから確定的なことは言えない。なお、焼土については、燃料などとして利用された植物の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料 A	B	C	D	E	F
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)			7			14
キビ族型	Paniceae type	15				7	21
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	15	15	15	14		7
ススキ属型	*Miscanthus* type			15	14	22	14
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	22	15	44	36	22	28
ウシクサ族B	Andropogoneae B type			7			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	248	335	196	280	151	259
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	502	626	582	719	576	483
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	58	82	22	29	58	63
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	131	127	15	43	86	49
未分類等	Others	197	119	145	252	245	168
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin	15	37	29	22	7	7
棒状珪酸体	Rod−shaped	568	514	604	755	800	707
未分類等	Others	888	857	735	783	807	735
樹木起源	Arboreal						
その他	Others		7				
植物珪酸体総数	Total	2658	2734	2415	2947	2781	2556

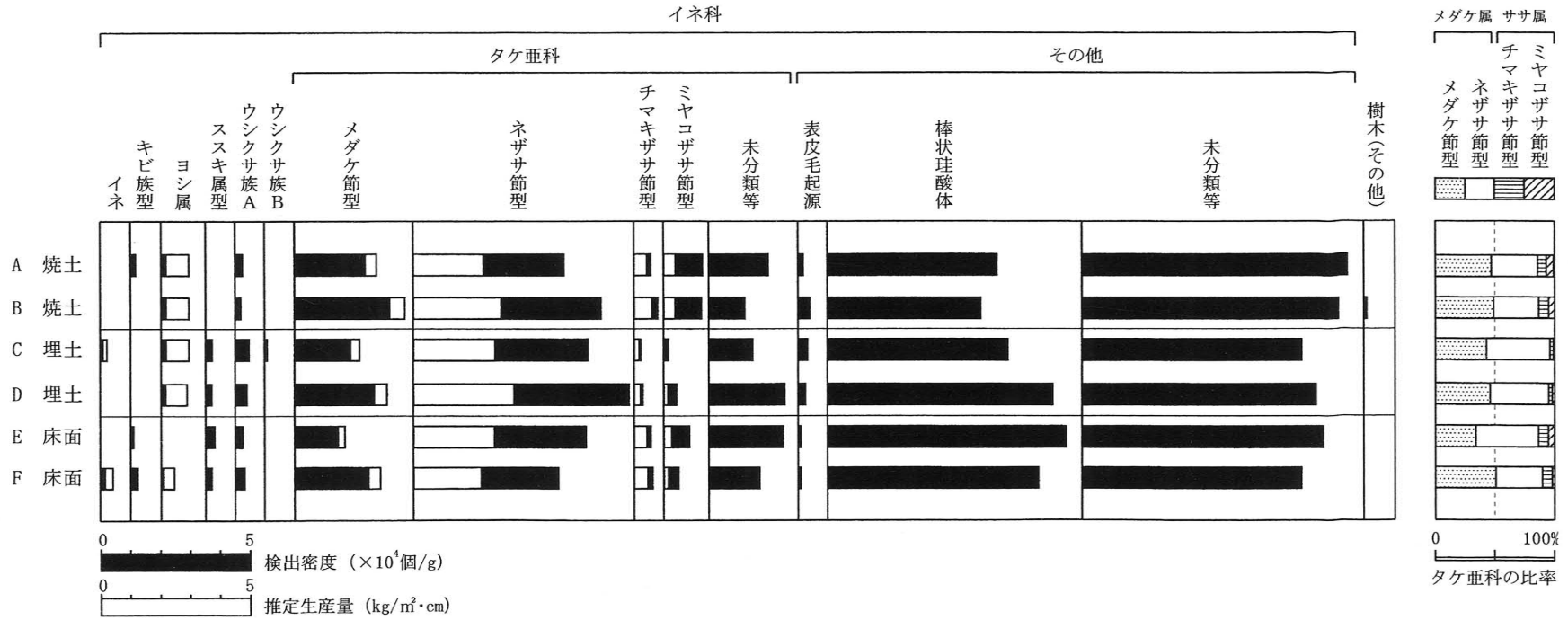
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)			0.21			0.41
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.92	0.94	0.92	0.91		0.44
ススキ属型	*Miscanthus* type			0.18	0.18	0.27	0.17
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	2.87	3.89	2.28	3.25	1.76	3.01
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	2.41	3.00	2.79	3.45	2.77	2.32
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.44	0.61	0.16	0.22	0.43	0.47
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.39	0.38	0.04	0.13	0.26	0.15

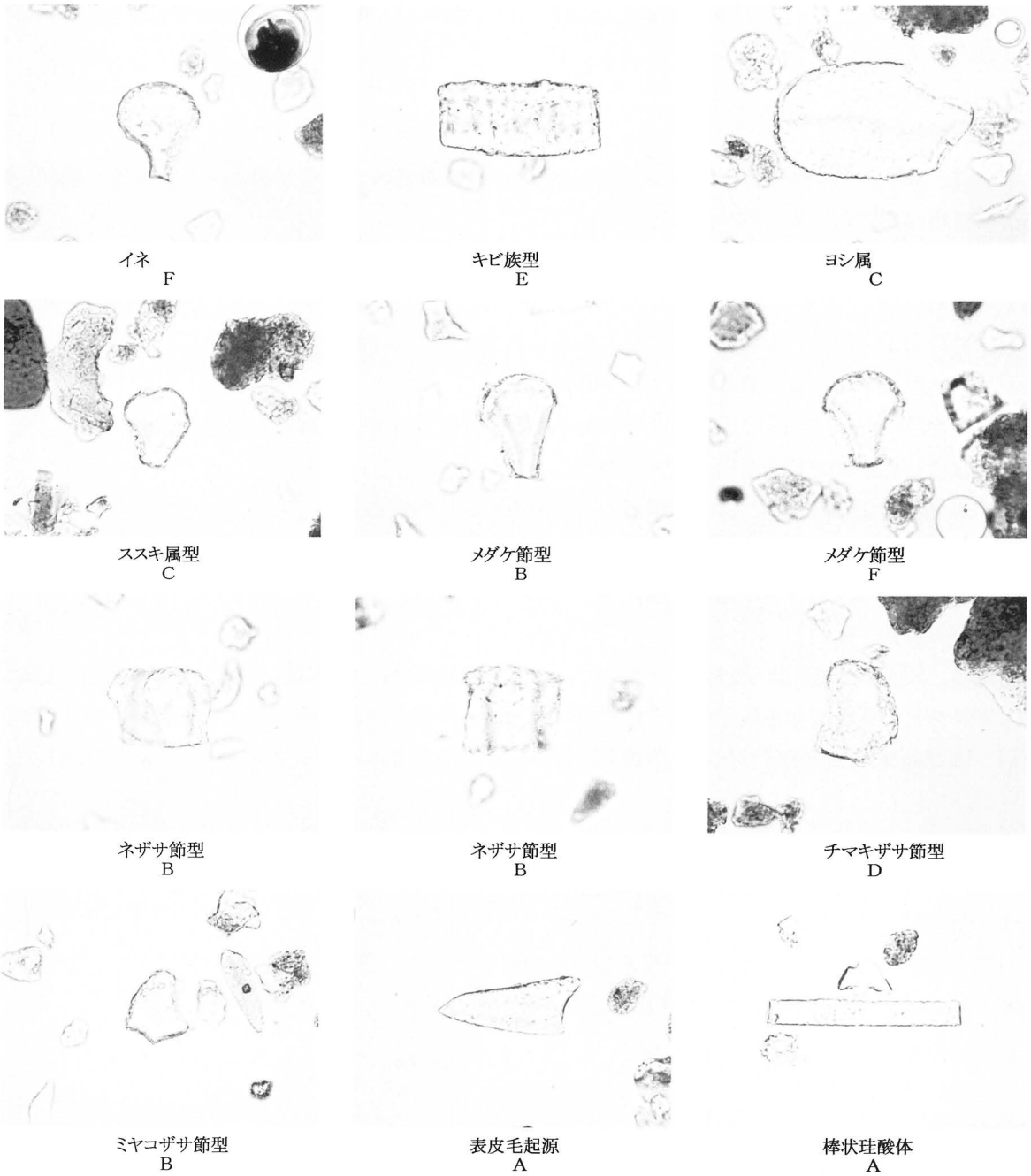
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	47	49	43	46	34	51
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	39	38	53	49	53	39
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	7	8	3	3	8	8
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	6	5	1	2	5	2

第155図　束本遺跡6次1区　SB102植物珪酸体分析結果（1）



第156図　束本遺跡６次１区　SB102植物珪酸体分析結果（２）



第157図　束本遺跡６次１区　SB102植物珪酸体分析結果（３）

Ⅱ．束本遺跡６次調査１区における花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

試料は、弥生時代後期後半の竪穴式住居ＳＢ102から採取された６点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉２、草本花粉２の計４である。分析結果を第158図に示し、主要な分類群を写真（第159図）に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

シイ属、トチノキ

〔草本花粉〕

キク亜科、ヨモギ属

（２）花粉群集の特徴

分析の結果、埋土（試料Ｃ、Ｄ）ではトチノキ、キク亜科、ヨモギ属、床面（試料Ｅ、Ｆ）ではシイ属、キク亜科が検出されたが、いずれも微量である。焼土（試料Ａ、Ｂ）では、花粉はまったく検

出されなかった。

5．考察

花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、当時の調査区周辺はキク亜科やヨモギ属などが生育する比較的乾燥した環境であった可能性が考えられる。これは、植物珪酸体分析で草原的な堆積環境が推定されていることと符合している。

花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。また、焼土については火を受けて花粉が分解されたことも想定される。

文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

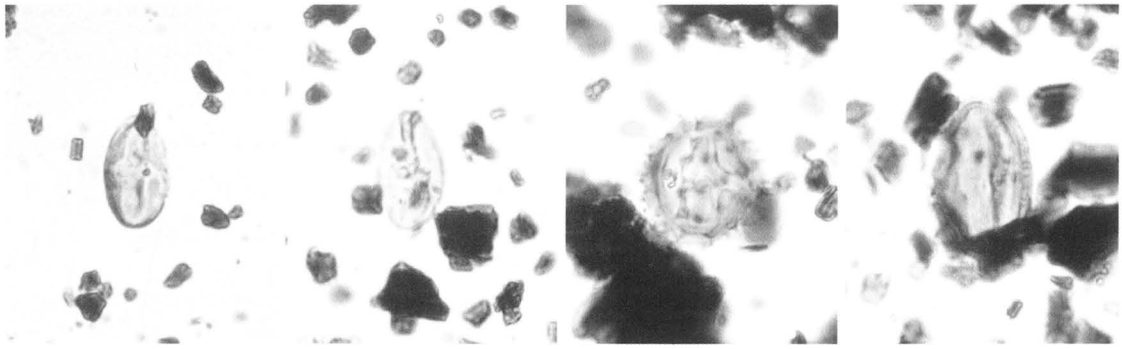
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

分類群							
学名	和名	A	B	C	D	E	F
Arboreal pollen	樹木花粉						
Castanopsis	シイ属					1	
Aesculus turbinata	トチノキ			1			
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Asteroideae	キク亜科			1	1		1
Artemisia	ヨモギ属			2			
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	1	0	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	3	1	0	1
Total pollen	花粉総数	0	0	4	1	1	1
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

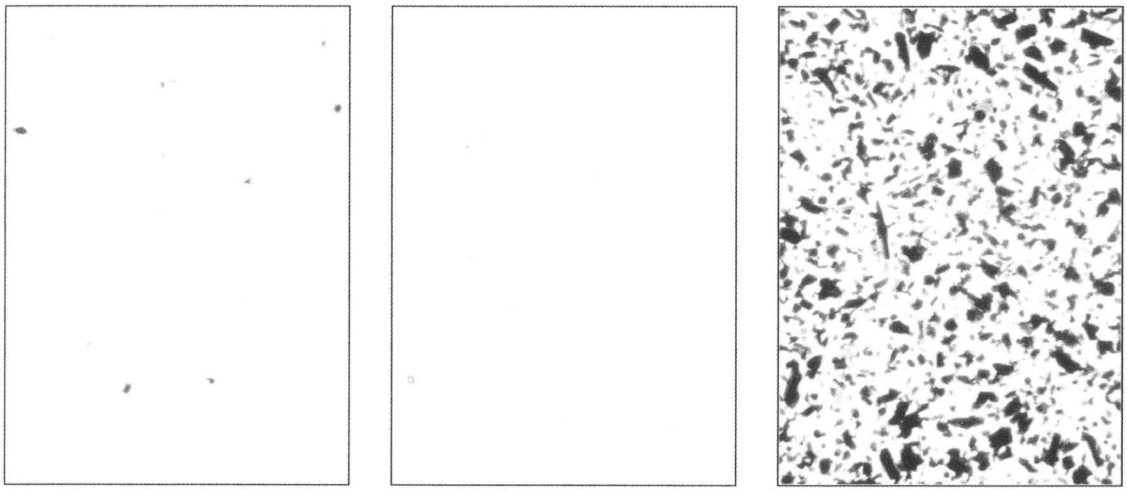
第158図　束本遺跡６次１区　SB102花粉分析結果（１）

束本遺跡６次調査の花粉

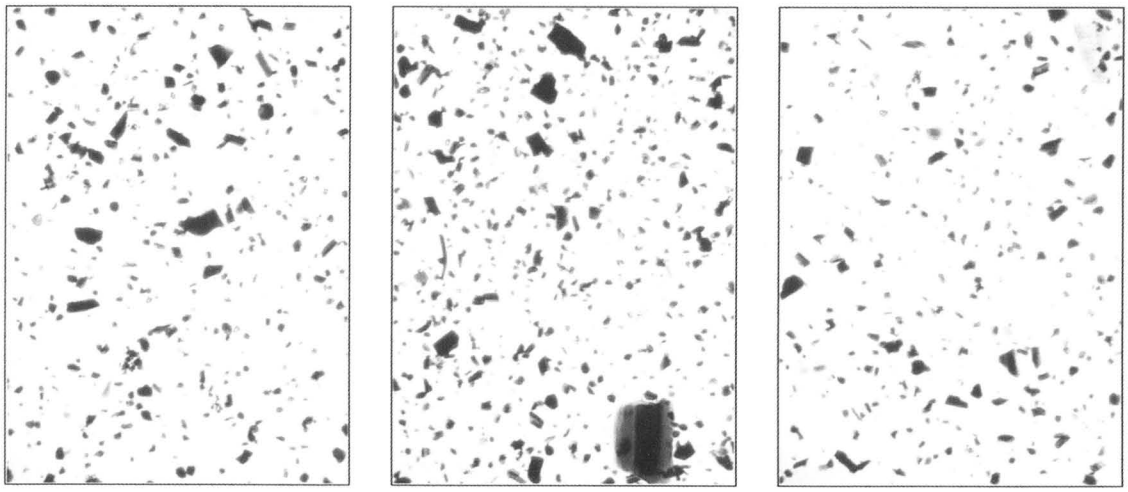


1　シイ属　　2　トチノキ　　3　キク亜科　　4　ヨモギ属

10 μm



5　試料A　　6　試料B　　7　試料C



8　試料D　　9　試料E　　10　試料F

100 μm

第159図　束本遺跡６次１区　SB102花粉分析結果（２）

Ⅲ．桑原遺跡４次調査４区における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、４区SP411から出土した土師皿内から採取された１点である。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型（チマキザサ節・チシマザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第160図・第161図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（第162図）を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

5．考察

分析の結果、土師皿内の試料からは、イネ、メダケ節型、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、海綿骨針も少量検出された。イネの密度は3,600個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。

以上のことから、SP411から出土した土師皿内には、何らかの形でイネの茎葉（藁）が入れられていた可能性が考えられるが、比較試料（土師皿周辺の土壌など）について検討が行われていないことから確定的なことは言えない。また、海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか，1979）が認められることから、海水や海産物に由来する何らかのものが存在した可能性も示唆されるが、海綿骨針は堆積環境との関係に未解明な点が多く、密度も低いことから、確定的なことは言えない。

当時の調査区周辺は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

文献

宇津川徹・細野衛・杉原重夫（1979）テフラ中の動物珪酸体 " Opal Sponge Spicules " について．ペドロジスト，第23巻 第2号，p.134-144.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，p.73-85.

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料 1
イネ科	Gramineae (Grasses)	
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	36
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	7
ススキ属型	*Miscanthus* type	7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	87
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	168
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	15
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	7
未分類等	Others	95
その他のイネ科	Others	
棒状珪酸体	Rod-shaped	146
未分類等	Others	539
(海綿骨針)	Sponge	7
植物珪酸体総数	Total	1115

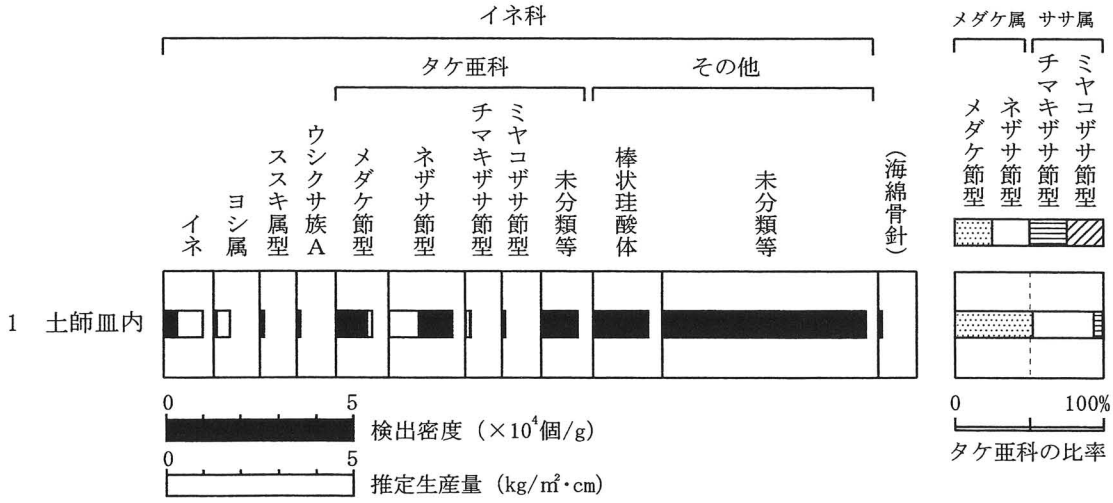
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.07
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.46
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	1.01
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.80
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.11
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02

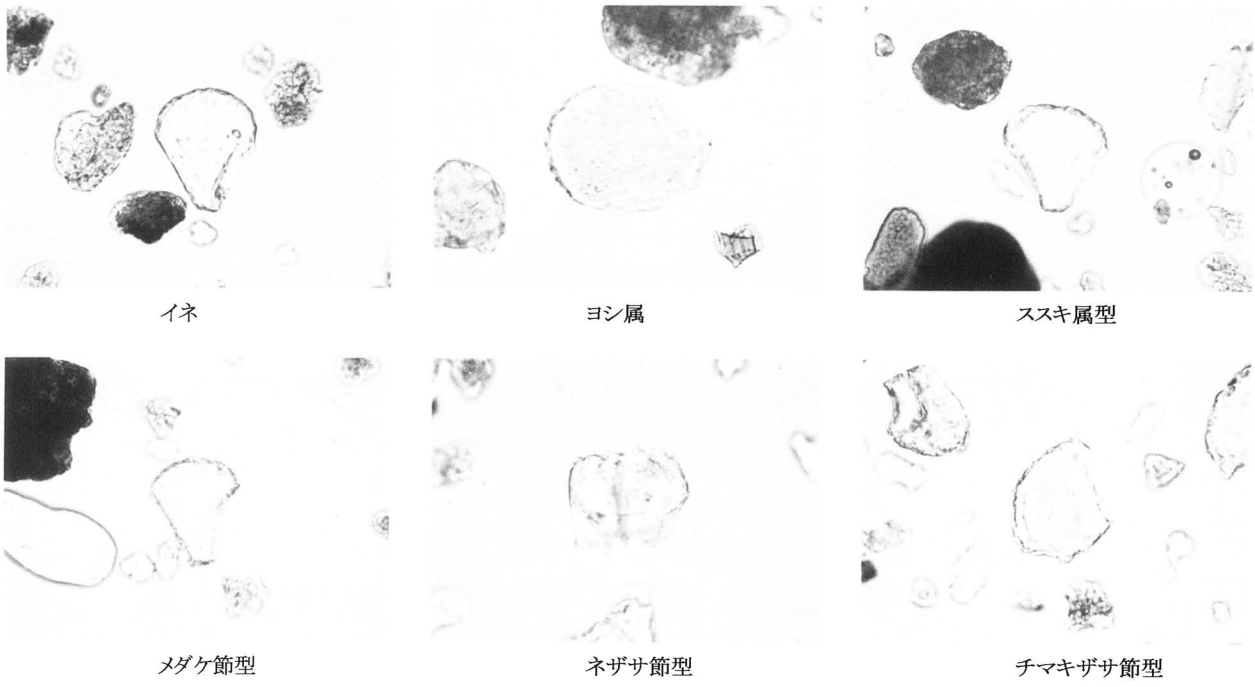
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	52
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	41
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	6
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	1

第160図　桑原遺跡４次４区　SP411土師皿内植物珪酸体分析結果（１）



第161図　桑原遺跡４次４区　SP411土師皿内植物珪酸体分析結果（２）



第162図　桑原遺跡４次４区　SP411土師皿内植物珪酸体分析結果（３）

Ⅳ．桑原遺跡４次調査４区における花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

試料は、４区SP411から出土した土師皿内から採取された１点である。これは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。なお、寄生虫卵および明らかな食物残渣にも注目して分析を行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

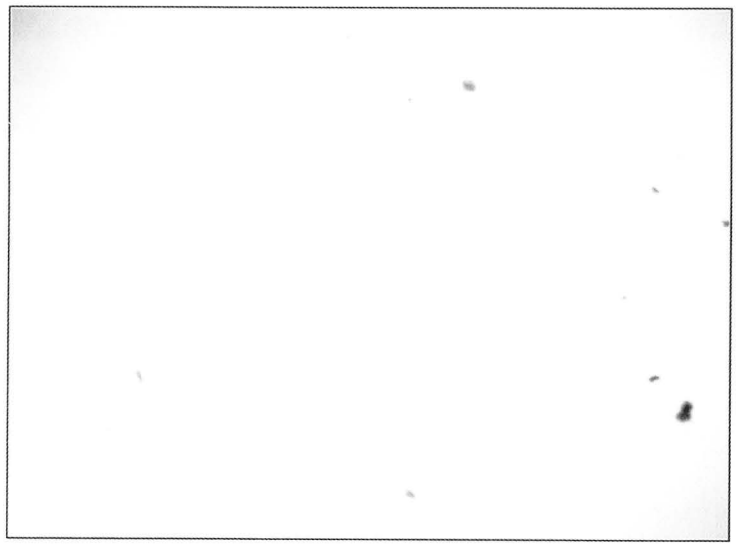
検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った（第163図）。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

分析の結果、花粉・胞子、および寄生虫卵、明らかな食物残渣は検出されなかった。花粉等が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

桑原遺跡４次調査の花粉分析顕微鏡写真



100 μm

第163図　桑原遺跡４次４区　SP411花粉分析結果

Ⅴ．桑原遺跡４次調査４区における種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、SR401から検出された計55点の種実である。試料の詳細を第164図に示す。

３．方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

（１）分類群

樹木８、草本１の計９分類群が同定された。学名、和名および粒数を第164図に、モモ核の計測値を第165図に示し、主要な分類群を写真（第166図）に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

種実同定

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平5角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ　*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.　核　ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　堅果片　ブナ科

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。

コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　堅果　ブナ科

基部は明灰褐色、上部は濃褐色で表面には縦線条が密に並ぶ。花柱基部の伏毛は淡褐色。光沢は弱い。

アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　堅果　ブナ科

堅果は長い卵型を呈す。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。なお、殻斗に輪状紋をもつコナラ属アカガシ亜属で基部から先端に向かって直線的な椀状を呈するものをイチイガシとした。イチイガシ（幼果）は黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。モモ核の計測値は、長さ18.0～34.3mm（平均23.6mm）、幅14.6～20.9mm（平均18.1mm）、厚さ7.0～16.5mm（平均14.3mm）であり、試料によって計測値の差異が大きい。

スモモ　*Prunus salicina* Lindley　核　バラ科

淡褐色で扁平楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。

エゴノキ　*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.　核　エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

〔草本〕

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　果皮　ウリ科

果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

（2）種実群集の特徴

1）4西区SR401・上層

モモ２が同定された。

２） ４東区SR401・中層

モモ15が同定された。

３） ４東区SR401・ベルト中層

モモ２が同定された。

４） ４西区SR401・下層

モモ８、クリ１、コナラ属クヌギ節１が同定された。

５） ４東区SR401・下層

モモ２が同定された。

６） ４東区SR401・下層

マツ属複維管束亜属１、ヤマモモ？１、クリ３、アカガシ１、モモ14、スモモ１が同定された。

７） ４東区SR401・上層

モモ１が同定された。

８） ４西区SR401・中層

エゴノキ１が同定された。

９） ４東区SR401・中層

ヒョウタン類１が同定された。

５．考察

分析の結果、モモ30、クリ４、コナラ属クヌギ節１、アカガシ１、スモモ１、エゴノキ１、ヤマモモ？１、マツ属複維管束亜属１、ヒョウタン類１が同定された。このうち、モモ、スモモ、ヒョウタン類は栽培植物であり、ヤマモモ？、クリ、コナラ属クヌギ節、アカガシは食用にもなる有用植物である。

最も多く検出されたモモは中国原産で、日本では弥生時代以降の遺跡から普通に出土し、古くより栽培されていた果樹である。金原（1996）によるモモ核の分類にあてはめると、丸く小孔のないA類（No. 6、9、10、13、14、16、20、21、22、23、24、29、44、49、50、51、52）、長く左右非対称なE類（№12、18、26、27、30、31、42、45、47、48）、最大幅が上半にあるB類（№39、43、46）などが認められる。やや時期幅のあるモモ核が混在していると考えられ、おおむね古代から中世にかかる様相である。なお、最も多いA類は縄文時代からも出土例があり、弥生時代から古墳時代を通して存在するモモ核である。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15-19.

種実同定

No.	出土遺構・層位	分類群 学名	和名	部位	個数	備考
1	４区西ＳＲ401・上層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
2		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
3	４区東ＳＲ401・中層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
4		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
5		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
6		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
7		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
8		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
9		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
10		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
11		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
12		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
13		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
14		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
15		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
16		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
17		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
18	４区東ＳＲ401・ベルト中層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
19		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(破片)	1	
20	４区西ＳＲ401・下層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
21		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
22		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
23		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
24		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
25		*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	堅果片	1	
26		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
27		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
28		*Quercus sect. Aegilops*	コナラ属クヌギ節	堅果片	1	
29		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
30	４区東ＳＲ401・下層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
31		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
32	４区東ＳＲ401・下層	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
33		*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	堅果片	3	
34		*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.	ヤマモモ？	核片	1	
35		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	堅果	1	
36		Prunus salicina Lindley	スモモ	核(半形)	1	
37	４区西ＳＲ401・下層					刺片１
38						刺片１
39	４区東ＳＲ401・下層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
40		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
41		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
42		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
43		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
44		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
45		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
46		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
47		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
48		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
49		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
50		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
51		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	齧歯類の噛跡有
52		*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
53	４区東ＳＲ401・上層	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
54	４区西ＳＲ401・中層	*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.	エゴノキ	核(完形)	1	
55	４区東ＳＲ401・中層	*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	果皮片	1	

第164図　桑原遺跡４次４区　SR401種実同定結果

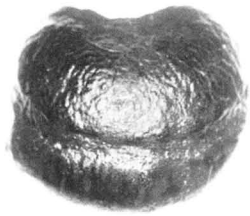
No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	19.51	15.53	6.99
3	23.07	17.85	14.63
4	20.60	18.76	14.75
5	21.28	-	13.44
6	23.27	-	13.82
9	22.79	18.49	14.36
10	18.02	16.81	11.31
11	25.11	-	14.92
12	28.56	20.47	16.07
13	21.65	-	13.89
14	23.70	-	14.72
16	24.23	19.19	-
18	22.07	16.66	12.16
20	23.51	20.56	15.99
21	18.03	16.62	-
22	24.72	20.25	16.17
23	24.74	20.13	14.90
24	-	17.18	-
26	25.09	19.72	-
27	21.41	14.56	-
29	21.96	19.91	-
30	22.96	16.80	13.50
31	26.27	19.77	-
39	22.52	20.35	15.64
40	25.95	-	14.09
41	22.25	16.67	12.92
42	30.17	18.49	13.28
43	27.37	22.55	16.48
44	20.18	18.27	13.65
45	34.29	20.86	16.53
46	25.20	19.50	14.84
47	26.11	17.57	15.11
48	25.43	20.28	14.69
49	26.52	21.43	15.40
50	21.16	18.40	15.20
51	23.54	-	13.81
52	17.97	16.74	-
53	21.11	17.29	-

	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
平均	23.58	18.05	14.25
最大	34.29	20.86	16.53
最小	17.97	14.56	6.99

第165図　桑原遺跡４次４区　SR401モモ核計測値

桑原遺跡４次調査の種実

1　マツ属複維管束亜属毬果



2　コナラ属クヌギ節堅果片

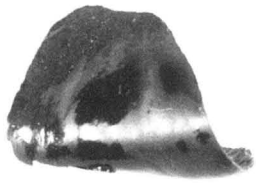
3　同左

4　アカガシ堅果

5.0mm

5　クリ堅果片

6　同左



7　クリ堅果片

8　同左

5.0mm

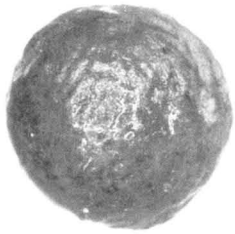
9　モモ核

10　モモ核

11　モモ核

12　モモ核

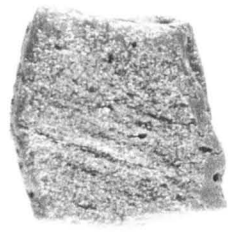
5.0mm



13　スモモ核

14　エゴノキ核

15　ヒョウタン類果皮



16　同左

5.0mm　2.0mm　5.0mm

第166図　桑原遺跡４次４区　SR401出土種実

Ⅵ．桑原遺跡４次調査４区における樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、弥生時代後期から古代末頃に埋没した自然流路のSR401から採取された計19点である。

３．方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果を第167図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第168図～第170図）を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科（第168図－１）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科（第168図－２）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑

高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科（第168図－３）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科（第169図－４）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヒノキ科　Cupressaceae

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び１分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科（第169－５）

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科（第169図－６）

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ヤブツバキ　*Camellia japonica* Linn.　ツバキ科（第170図－７）

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は８～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ５～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科（第170図－８）

横断面：小型の道管が、単独ないし２個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ８～10m、径20～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ヒサカキ属　*Eurya*　ツバキ科（第170図－９）

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

５．所見

分析の結果、ヒノキ９点、マツ属複維管束亜属２点、スギ１点、コウヤマキ１点、ヒノキ科１点、ヤナギ属１点、コナラ属アカガシ亜属１点、ヤブツバキ１点、サカキ１点、ヒサカキ属１点が同定された。ヒノキが最も多く利用されており、主要な用材であったと考えられる。これは近畿地方中央部から瀬戸内沿岸地域の古墳時代以降における傾向であり、木材が流通によりもたらされた可能性が考

えられる。

薪がやや多く、また切りくず（チップ）もあることから、ヒノキ材をはじめマツ（マツ属複維管束亜属）材、カシ（コナラ属アカガシ亜属）材が近隣で加工された可能性が示唆される。杭は、コウヤマキ、ヒノキ、ヤナギ属、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ属と多様であり、近隣に生育していた樹木が利用されていたと推定される。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

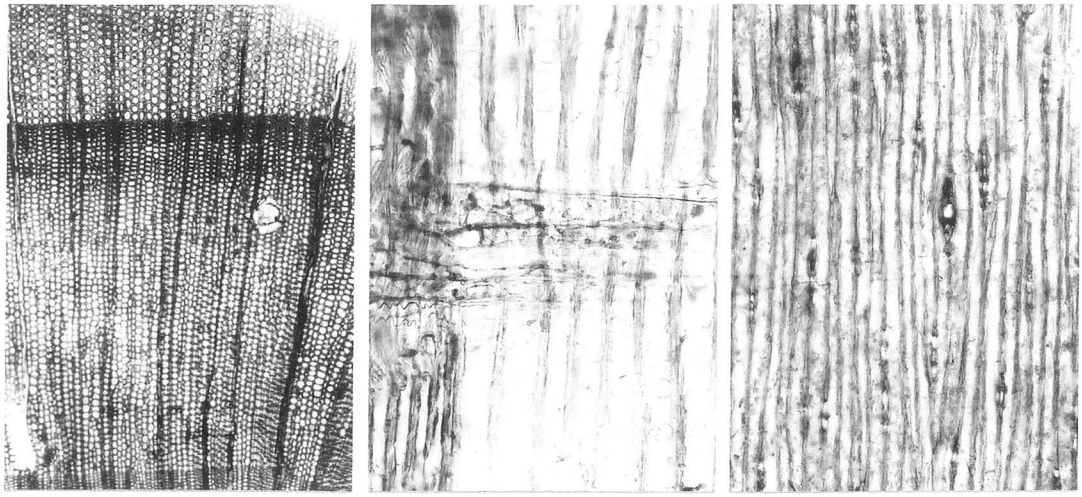
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p.242

試料	器種・種類	出土遺構・層位	報告書No.	結果（学名／和名）	
1	杭	SR401 下層	702	*Eurya*	ヒサカキ属
2	不明	SR401 下層	710	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
3	薪	SR401 下層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
4	薪	SR401 下層		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
5	板材	SR401 下層		*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
6	杭	SR401 下層	704	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
7	杭	SR401 下層	707	*Camellia japonica* Linn.	ヤブツバキ
8	薪	SR401 下層		Cupressaceae	ヒノキ科
9	板材	SR401 下層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
10	薪	SR401 上層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
11	曲物(底板)	SR401 下層	713	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
12	薪	SR401 中層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
13	薪	SR401 中層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
14	薪	SR401 中層		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
15	杭	SR401 中層	708	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
16	杭	SR401 中層		*Salix*	ヤナギ属
17	切りくず(チップ)	SR401 下層		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
18	杭	SR401 下層	705	*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
19	薪	SR401 下層		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ

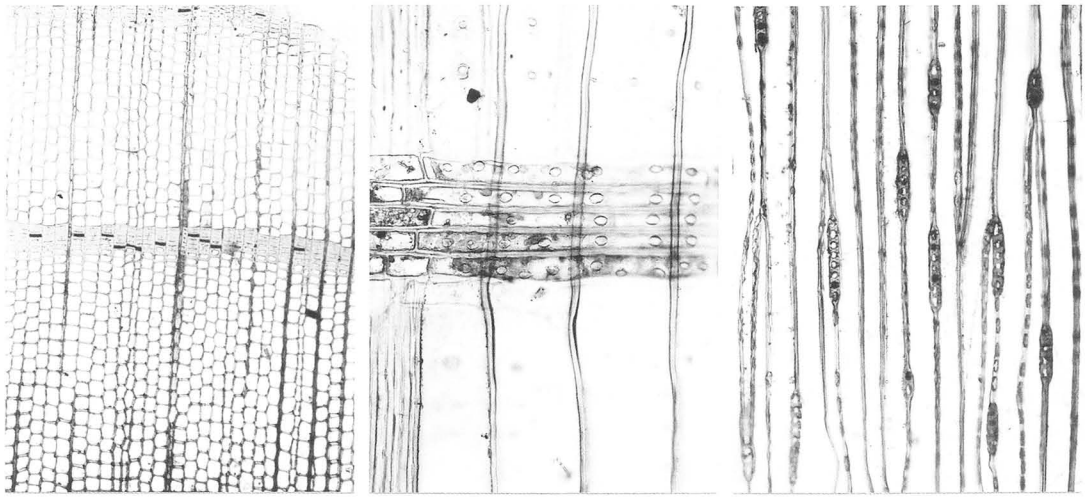
第167図　桑原遺跡4次4区　SR401樹種同定結果（1）

桑原遺跡４次調査の木材 I



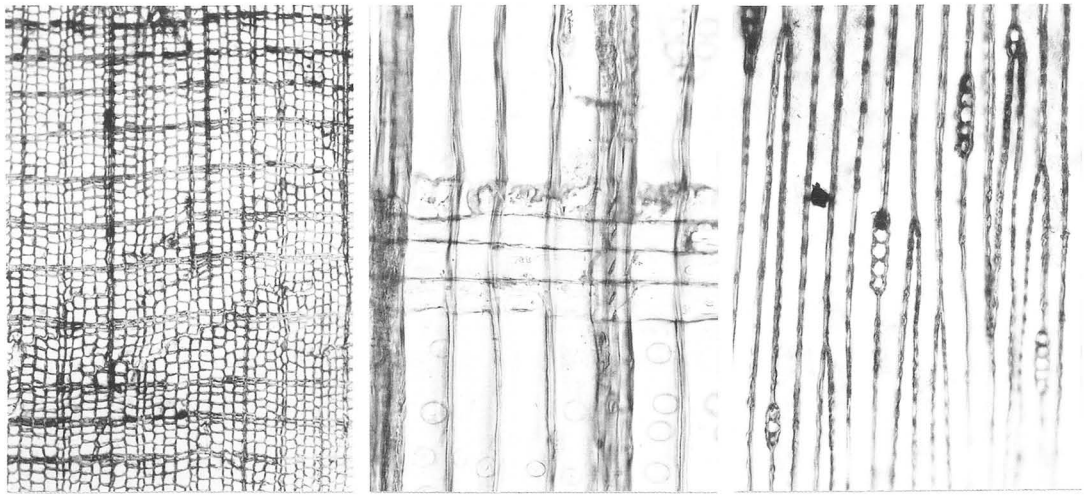
横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.1mm　接線断面 ——— : 0.2mm

1．サンプルNo. 4　薪　マツ属複維管束亜属



横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.05mm　接線断面 ——— : 0.2mm

2．サンプルNo. 5　板材　スギ

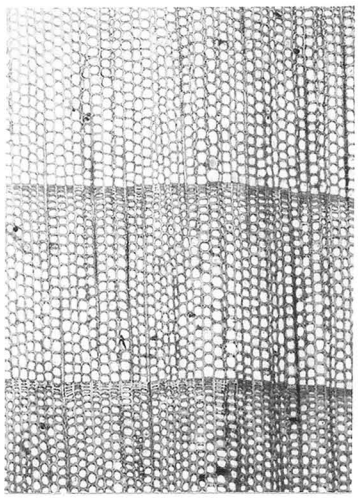


横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.1mm　接線断面 ——— : 0.2mm

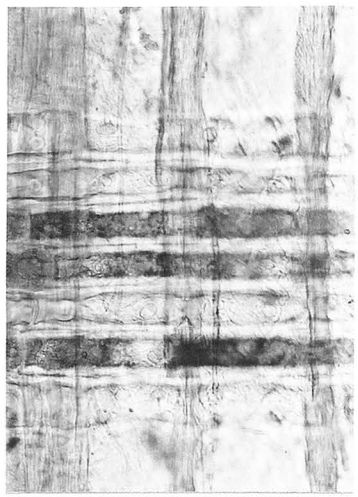
3．サンプルNo.18　杭　コウヤマキ

第168図　桑原遺跡４次４区　SR401樹種同定結果（２）

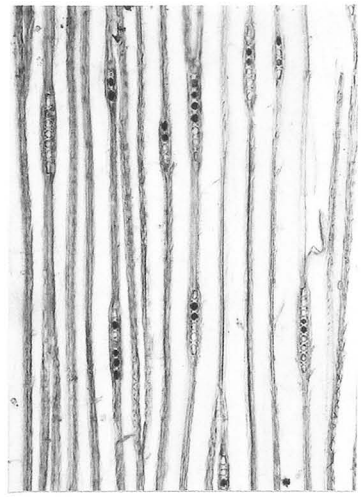
桑原遺跡４次調査の木材 II



横断面 ——— : 0.5mm

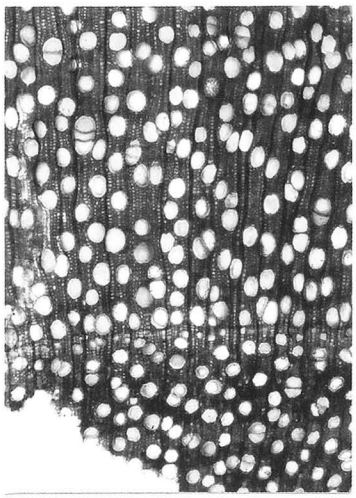


放射断面 ——— : 0.05mm



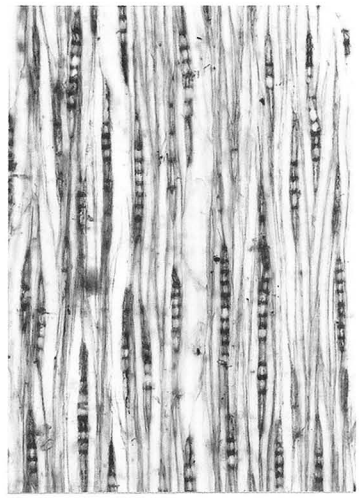
接線断面 ——— : 0.2mm

４．サンプルNo. 2　ヒノキ



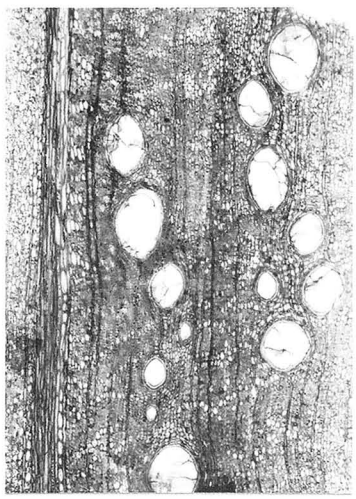
横断面 ——— : 0.5mm

放射断面 ——— : 0.2mm

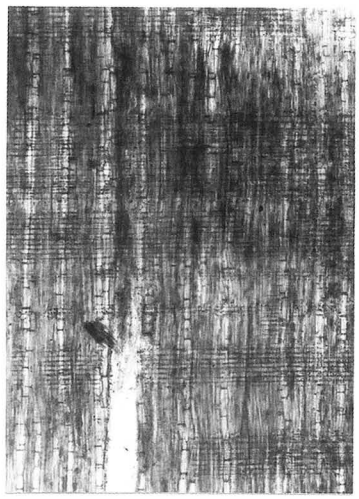


接線断面 ——— : 0.2mm

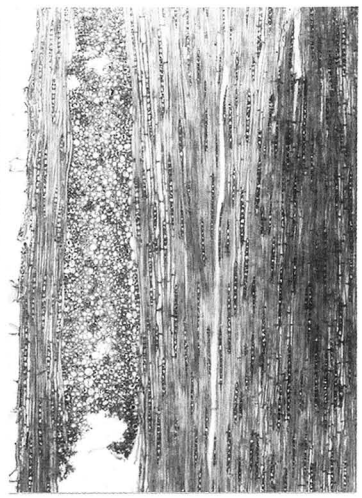
５．サンプルNo.16　杭　ヤナギ属



横断面 ——— : 0.5mm



放射断面 ——— : 0.5mm

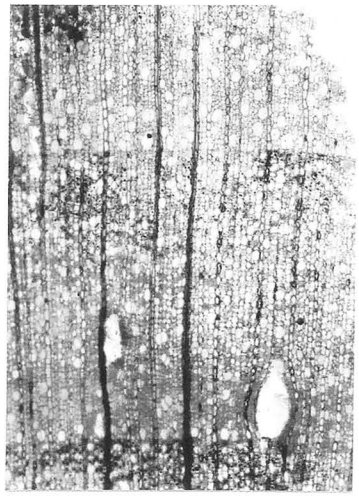
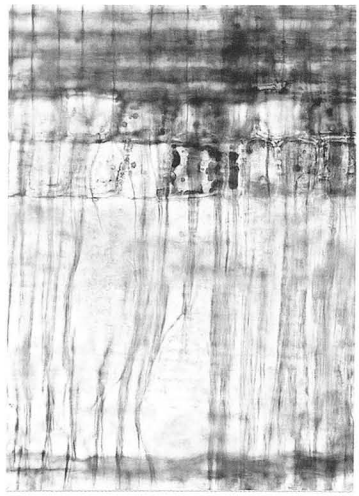
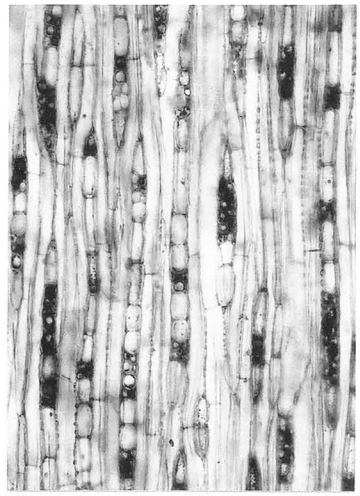


接線断面 ——— : 0.5mm

６．サンプルNo.17　切りくず(チップ)　コナラ属アカガシ亜属

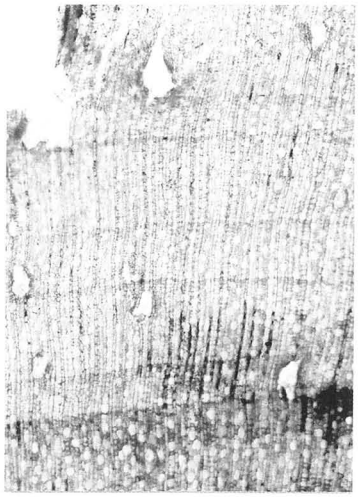
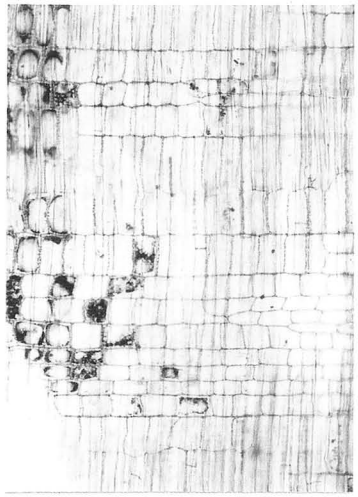
第169図　桑原遺跡４次４区　SR401樹種同定結果（３）

桑原遺跡４次調査の木材 III

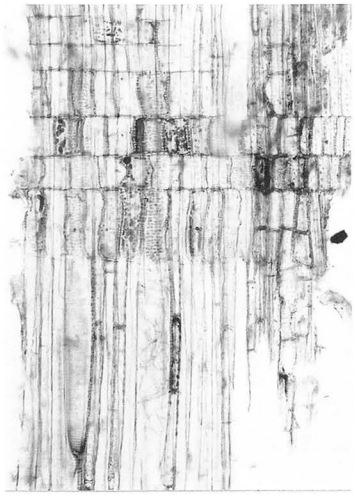
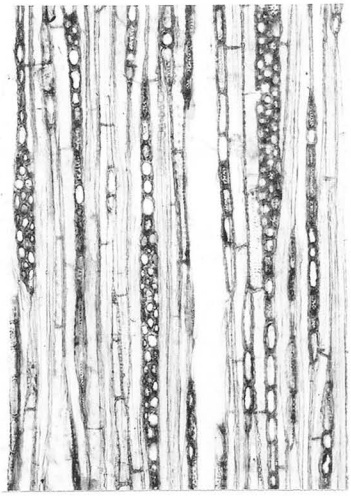
横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.1mm　接線断面 ——— : 0.2mm

7．サンプルNo. 7　杭　ヤブツバキ

横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.2mm　接線断面 ——— : 0.2mm

8．サンプルNo.15　杭　サカキ

横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.2mm　接線断面 ——— : 0.2mm

9．サンプルNo. 1　杭　ヒサカキ属

第170図　桑原遺跡４次４区　SR401樹種同定結果（４）

13章　ま　と　め

今回の調査では弥生時代、古墳時代～古代、中世～近世の遺構と遺物を検出した。

（1）土層

調査地一帯は、アカホヤ火山灰とＡＴ火山灰が広範に確認されている地域である。これらの火山灰は、平成5年に調査された束本遺跡4次調査において詳しく分析され、ＡＴ火山灰層が1次堆積層と2次堆積層からなる事が報告されている。この調査結果をもとに、本調査においても、これらの火山灰の検出に努めた。束本遺跡4次調査に隣接する束本遺跡6次調査地（以下、6次調査)の1区では、アカホヤ火山灰層とＡＴ火山灰層を検出した。アカホヤ火山灰層は、6次調査の1区のみの検出であり、他の調査地では削平のためか検出はしていない。

ＡＴ火山灰層は、6次調査と桑原遺跡4次調査地（以下、4次調査）の1区と3区で検出した。この成果は、束本遺跡4次調査より東方の、ＡＴ火山灰の堆積状況と分布域を知る上で貴重な資料となるものである。

（2）弥生時代

本調査では、弥生時代後期末に比定される竪穴式住居址2棟を検出している。大型（直径及び一辺が7ｍ以上）の円形住居址1棟と中型（直径及び一辺が4ｍ以上）の方形住居址1棟である。

大型の円形住居址は、6次調査1区で検出した周堤帯を伴うＳＢ101がある。周堤帯については、当初ベッド状遺構として調査を行った。しかし、6次調査1区の西に隣接する束本遺跡4次調査の大型円形住居址ＳＢ203で検出された周堤帯の検出状況や構造とを比較検討した結果、ほぼ同じ様な状況であると判断して、本調査地検出のものを周堤帯とした。このＳＢ101とＳＢ203は、炉の形態を同じとするが柱構造に違いがみられた。束本遺跡4次調査のＳＢ203は、主柱穴が住居床面に掘られるのに対し、ＳＢ101は周堤帯を切って掘られている。

方形の住居址は、ＳＢ102がある。ＳＢ102からは、大量の焼土と共に鉄器製作の最終工程で生じる三角状鉄片などが出土している。このことからＳＢ102は、鉄器の製作工房と考えられる。

次に集落の立地について考える。6次調査の1区東端で検出されたＳＢ102の東10ｍには自然流路ＳＲ201がある。ＳＲ201は川幅が37ｍを測る大きな流路である。出土遺物から遅くとも弥生時代後期には出現しているものと考えられる。この流路を境にして東側では、住居址を検出していない。このことから、束本遺跡一帯の弥生時代後期後葉～末葉の集落はＳＲ201の西岸に立地し、集落の東限をＳＲ201に求めることができるものと考える。つまり、鉄器製作工房と考えられるＳＢ102は、集落の東縁辺部に立地する事になる。

遺物ではＳＢ102から、石材が京都鳴滝産と考えられる砥石が出土し、桑原遺跡4次調査（以下、4次調査）の4区で検出された自然流路ＳＲ401からは、北部九州方面で産出される石材を使用した大型の石包丁が出土している。これらの出土例は、石器や石材の流通を考える上で貴重な資料となる。

（3）古墳時代～古代

この時期の遺構には、4次調査の2区で検出した古墳時代前期に比定される土坑ＳＫ211だけとなる。明確な遺構は少ない地域となっている。

遺物はＳＲ201、ＳＲ401より古墳時代と古代末の遺物が出土しており付近にこの時期の集落が展開するものと考えるが、今後の周辺域の調査に期待したい。

（４）中世～近世

この時期の遺構には掘立柱建物址、土坑、柱穴、溝などがある。

本調査で検出した掘立柱建物は、どれも柱間と柱穴規模は小さい事から小規模な建物である。この時期の柱穴は４次調査の３区に集中する。

土坑は桑原遺跡２次調査（以下、２次調査）のＳＫ１、４次調査２区のＳＫ207、６次調査２区のＳＫ201がある。ＳＫ１からは13世紀に比定される土師器、瓦器などが出土しており、一括出土遺物として良好な資料となるものである。土坑墓と考えられるＳＫ201や炭窯と考えられるＳＫ207は、松山平野や他地域の資料収集を行い、今後の研究課題としたい。

柱穴は６次調査のＳＰ183、４次調査３区のＳＰ3476、４次調査４区のＳＰ411がある。ＳＰ183は15世紀後半～16世紀前半、ＳＰ3476は14世紀後半、ＳＰ411は18世紀に比定される。それぞれの柱穴内からは、埋納されたと考えられる遺物が出土しており、柱穴内祭祀の一例となる。

溝は２次調査のＳＤ１がある。ＳＤ１からは、土師器、瓦器など13世紀に比定される遺物が出土している。出土した遺物は、当該期の遺物を考える上で良好な資料となる。

中世の桑原地区は、河野氏の支配下にあったと考えられており、今後は文献史学との比較検討による中世桑原地区の集落構造解明が課題である。

【参考文献】

宮本一夫編　『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989

田崎博之編　『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1993

高尾和長編　『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1996

村上恭通　『倭人と鉄の考古学』青木書店　1998

吉岡和哉編　『桑原遺跡５次調査地』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター　2004

※

清水真紀　『足立重信の石手川改修工事－教育実習における反省から－』『「社会科」学研究、15,57-68.』　1988

永井久美男ほか『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会　1996

池澤俊幸ほか　『各地域における土器研究の現状－四国－』『シンポジウム中世土器研究の今日的課題－土器編年と中世史研究－（第22回中世土器研究会資料）』日本中世土器研究会　2003

写　真　図　版

束本遺跡6次調査地

－１区の調査－

写真図版例言

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	白　黒　プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
	カラー　エクタクロームEPP・RDPⅢ		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS　240㎜　F5.6他
ストロボ	コメット／CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

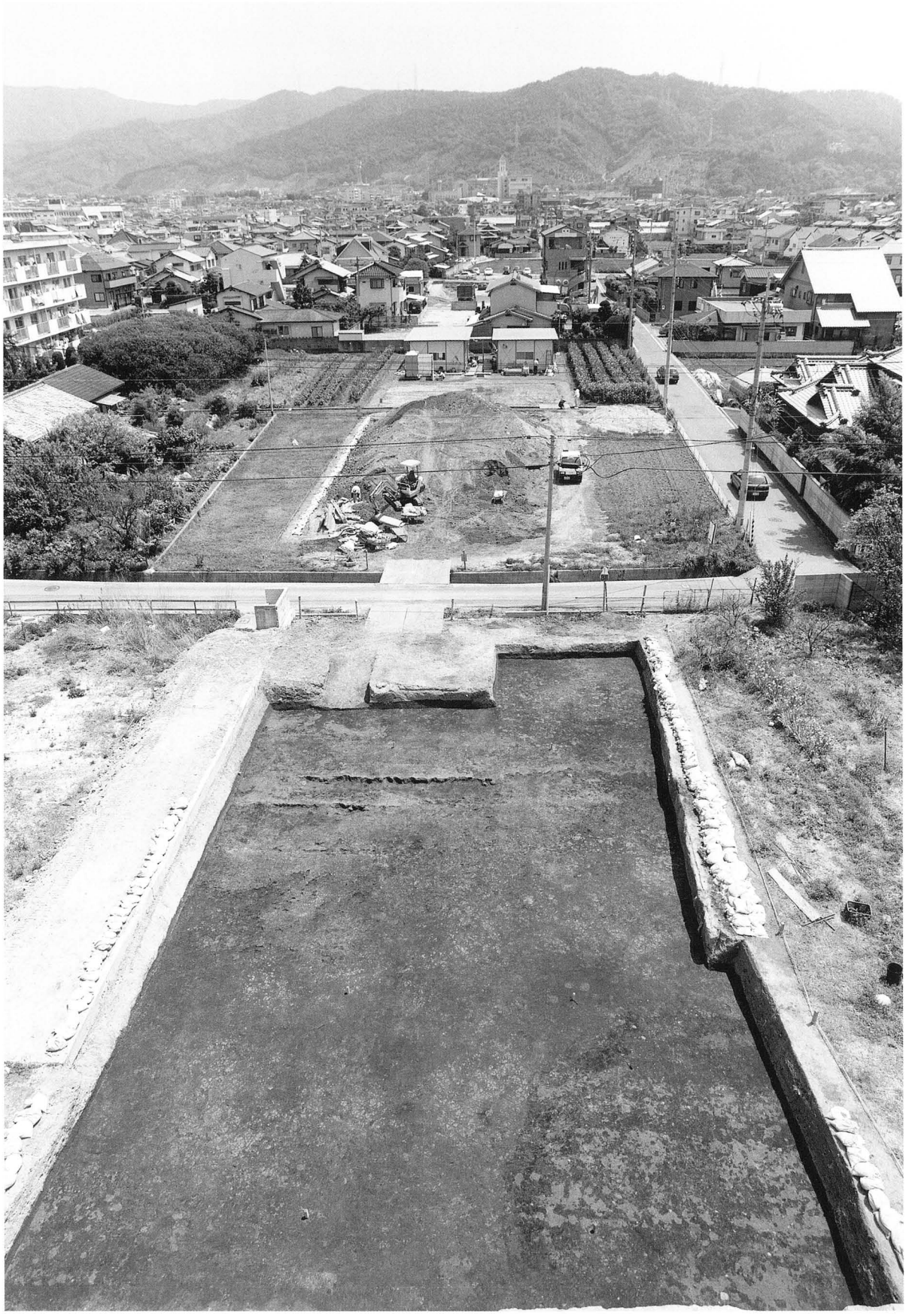
使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜　F5.6A・50㎜　F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　RCペーパー

4. 製　版　　写真図版175線
印　刷　　オフセット印刷
用　紙　　マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol. 1～15　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］



1． 1区、2区全景（西より）

図版二

1．遺構検出状況（西より）

1． 北壁土層（南より）

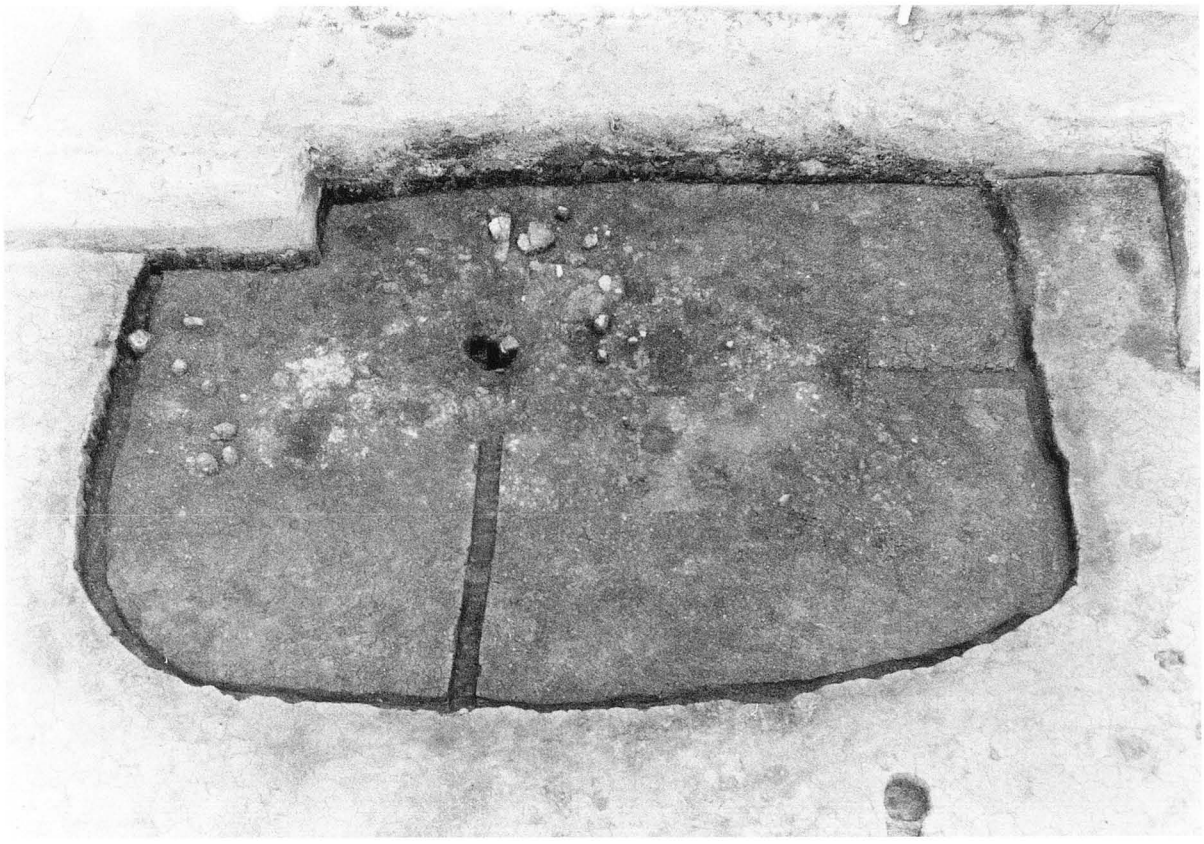
2． SB101検出状況（北より）

図版四

1． SB101遺物、炉検出状況（北東より）

2． SB101炉内遺物出土状況（北より）

1． SB101完掘状況（北東より）



2． SB102遺物出土状況（西より）

図版六

1． SB102焼土検出状況（北より）

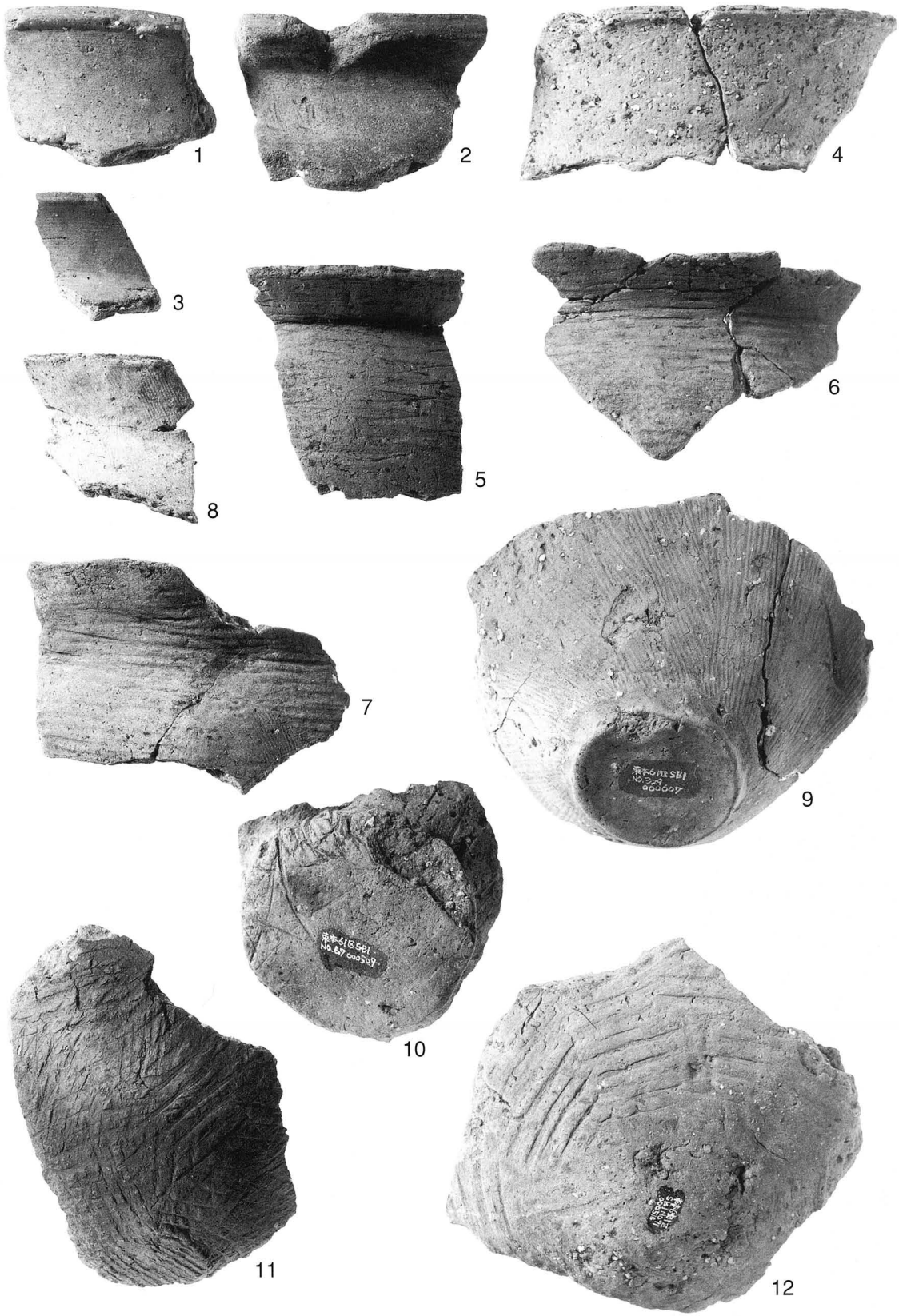
2． SB102完掘状況（北東より）

1． SB102内SK102土層（南より）

2． SP183遺物出土状況（東より）

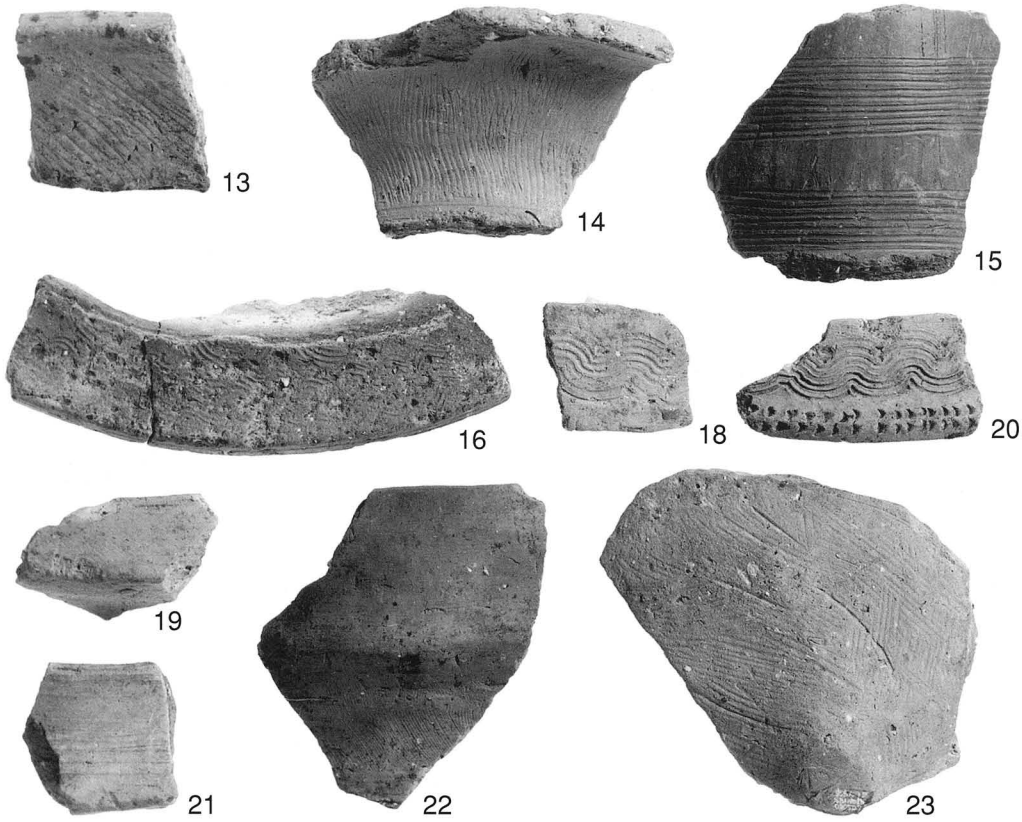
図版八

1．　1区完掘状況（西より）



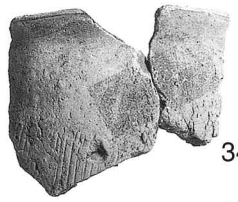
1． SB101出土遺物①

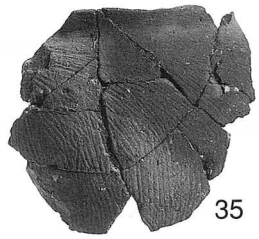
図版一〇



1．SB101出土遺物②

24

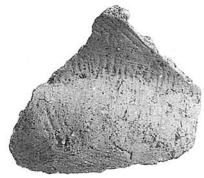

34


35

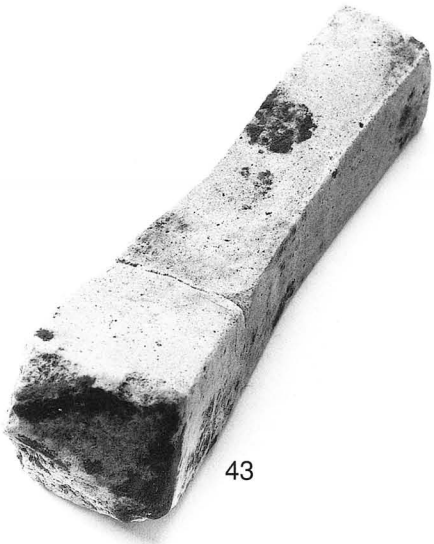
31

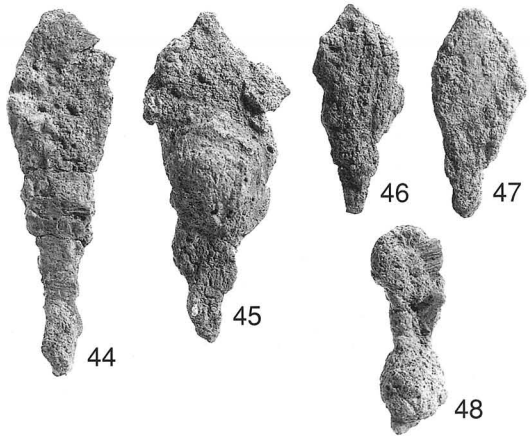
27

33


36

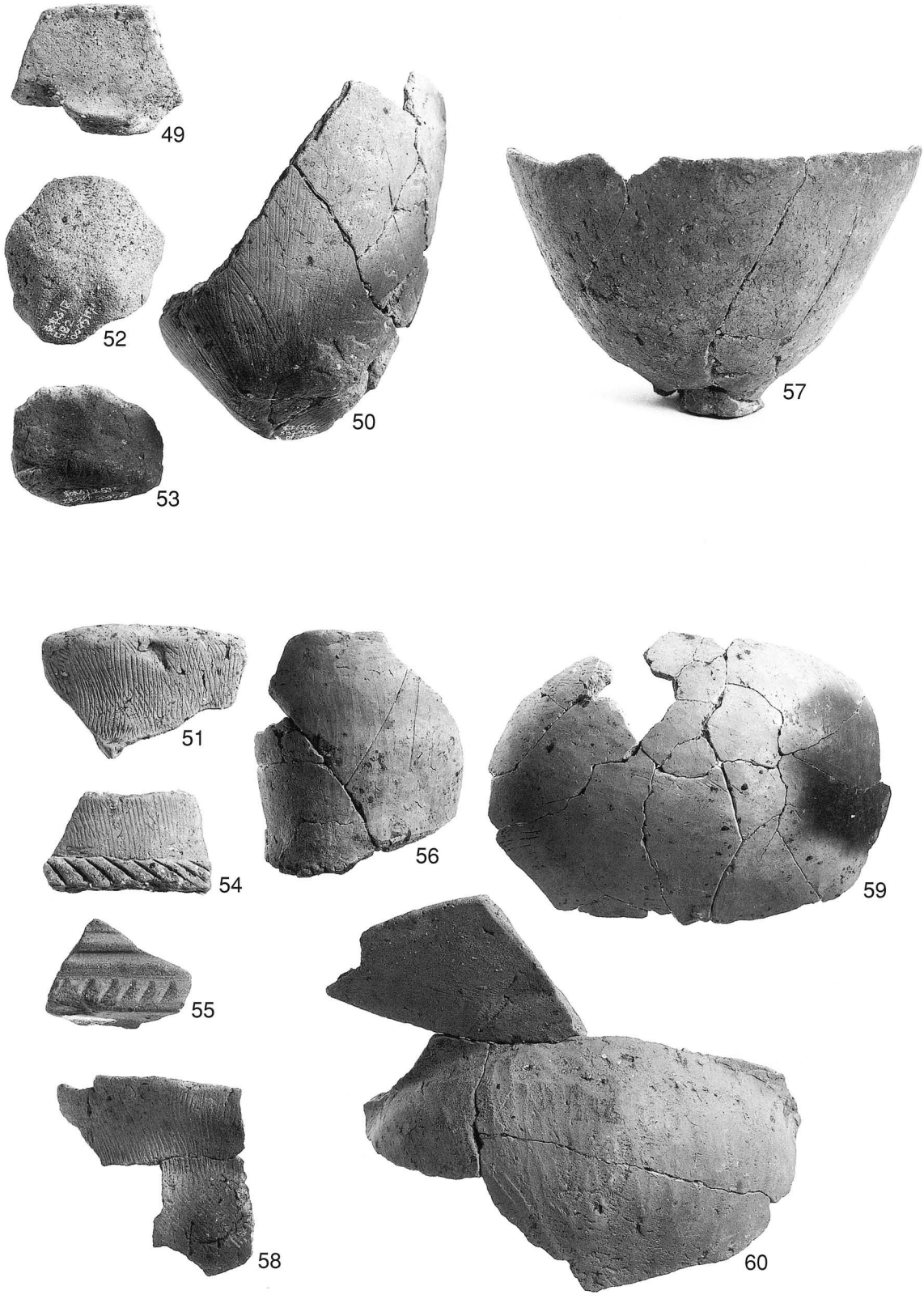
42


43

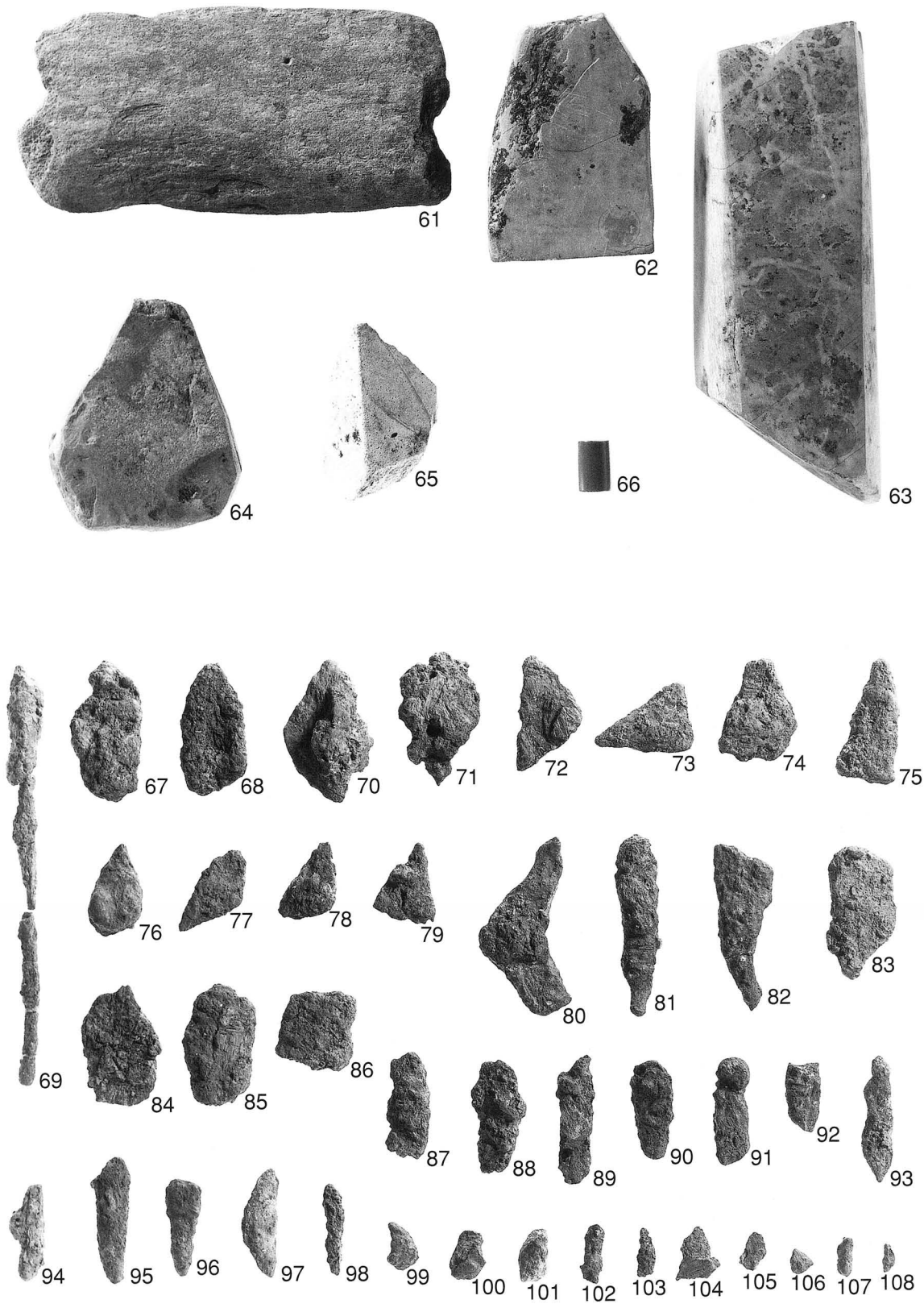

44 45 46 47 48

1． SB101出土遺物③

図版一二

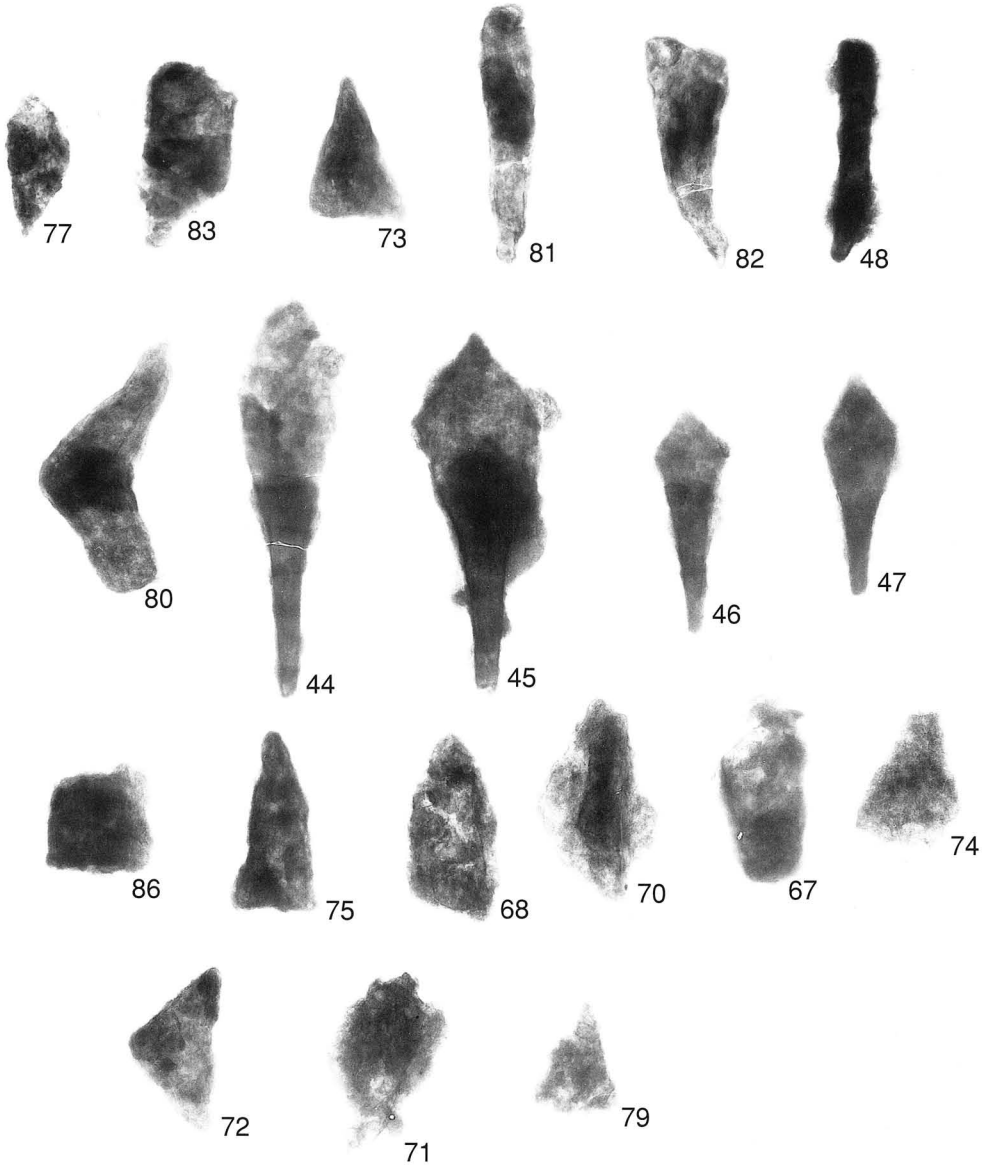


1．SB102出土遺物①



1． SB102出土遺物②

図版一四



1．　SB102出土鉄器X線写真、SP183（109）出土遺物

束本遺跡6次調査地

－２区の調査－

1． 2区遺構検出状況（東より）

2． 2西区SR201検出状況（東より）

図版一六

1．SK201遺物出土状況（東より）

2．中世以降の遺構完掘状況（東より）

1． SR201掘削状況（東より）

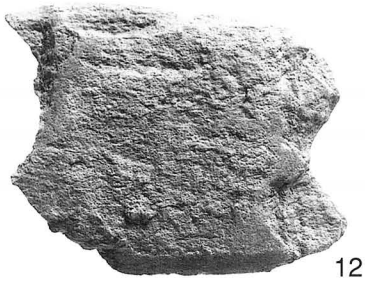
2． SR201土層（南東より）

図版一八

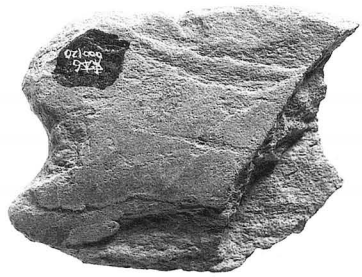
118

119

120



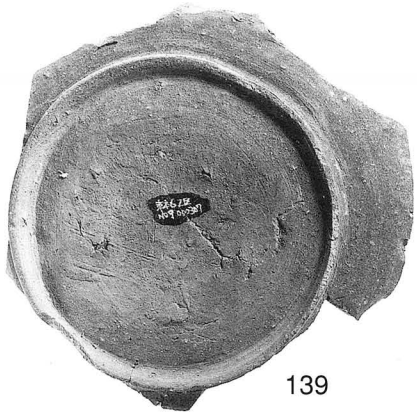
121

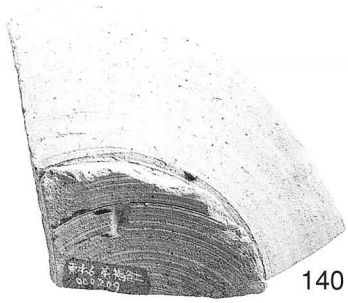


122

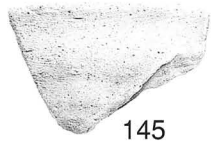
123

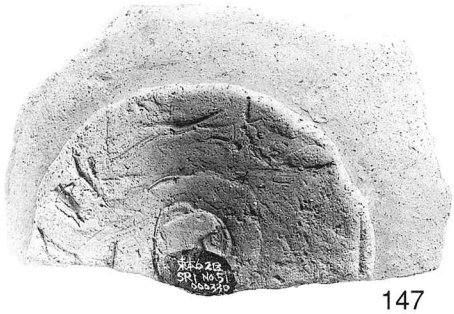
1．SR201 3層出土遺物


139


140

144

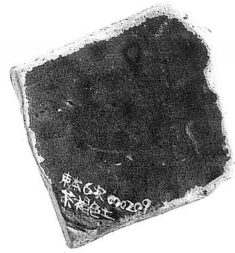

145


147

148

146

142

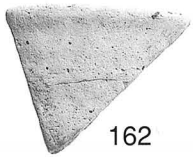


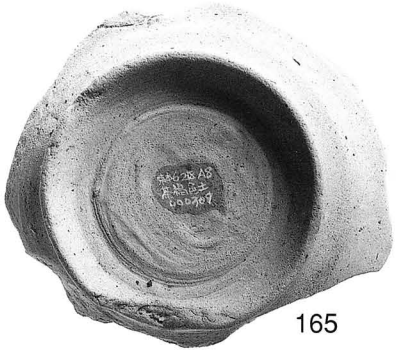
143

157

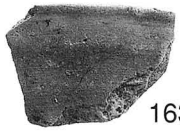
159

1． SR201 2層出土遺物

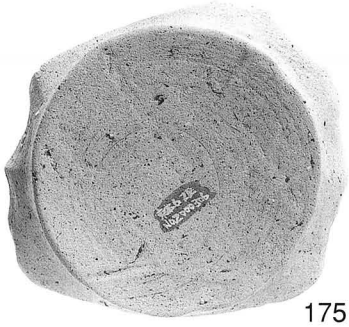

162


165

171

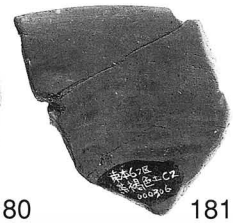

163

164

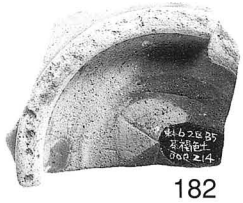

175

179

180


181

198


182

183

204

205

199

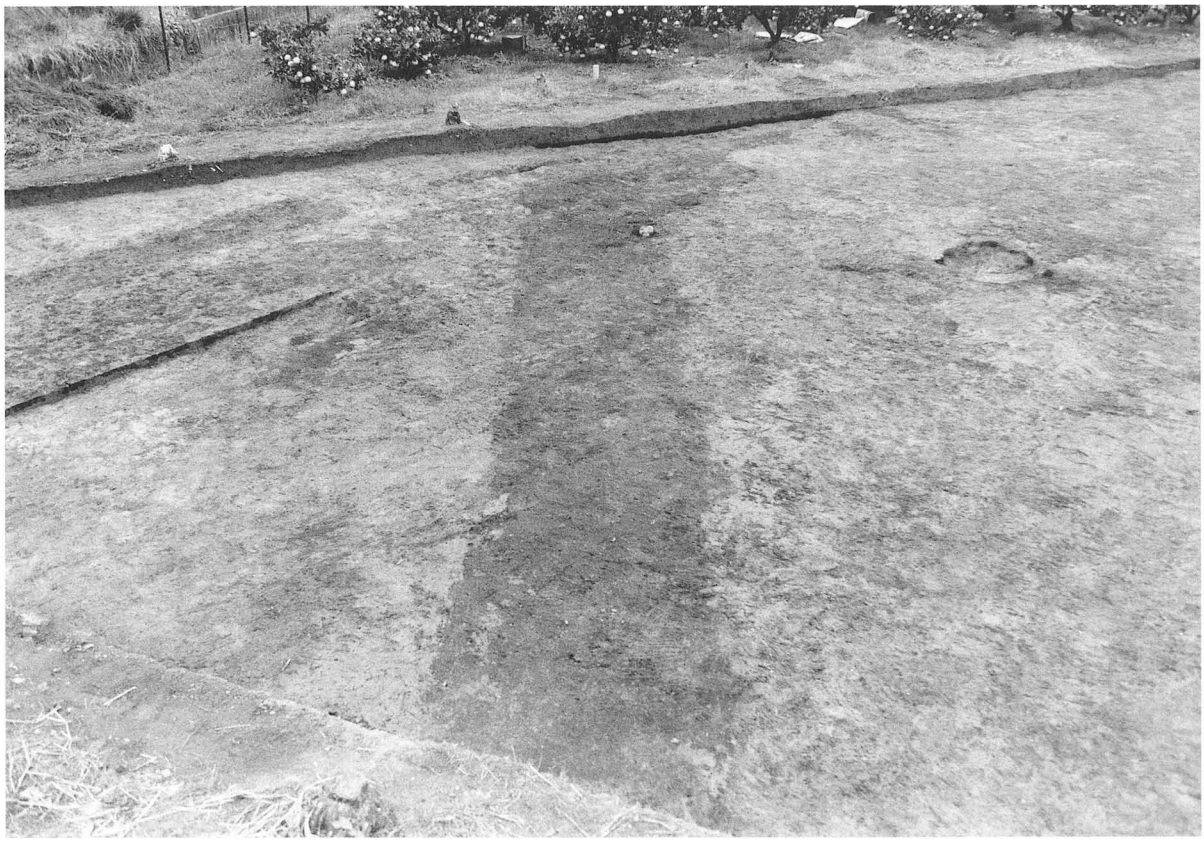
1．SR201 2層出土遺物（162.163.164.165.171.175.179）、SR201 1層出土遺物（180.181.182.183）
SK201出土遺物（198.199）、SP218出土遺物（204）、SK202出土遺物（205）

桑原遺跡2次調査地

１．　調査前風景（南東より）

２．　遺構検出状況（南東より）

図版二二



1．SD１、SK２検出状況（東より）

2．SD１遺物出土状況（東より）

１．SD１南壁土層（北東より）

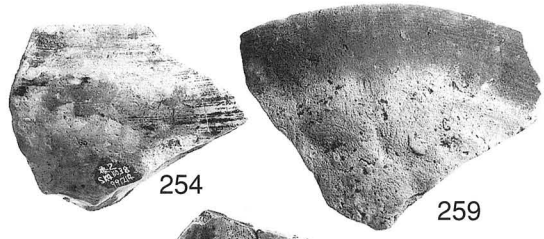
２．SK２遺物出土状況（南より）

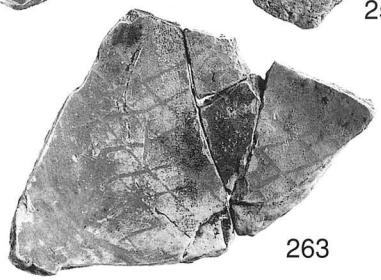
図版二四

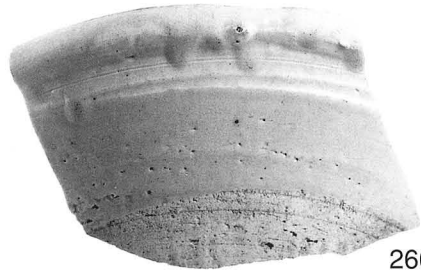
１．　SD１、SK２完掘状況（南より）

２．　完掘状況（東より）

253


254 259

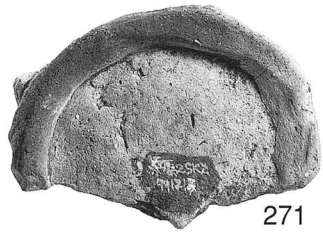

263


266

267

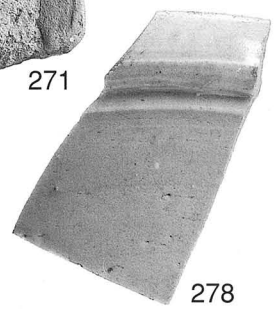
270

268


271

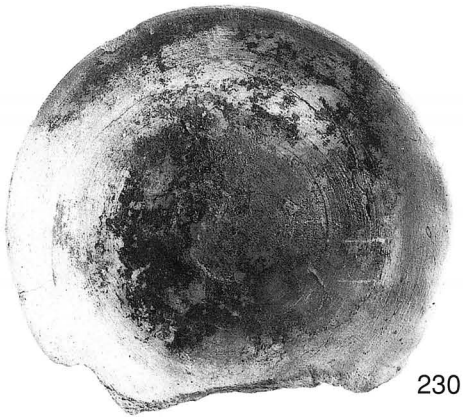
272

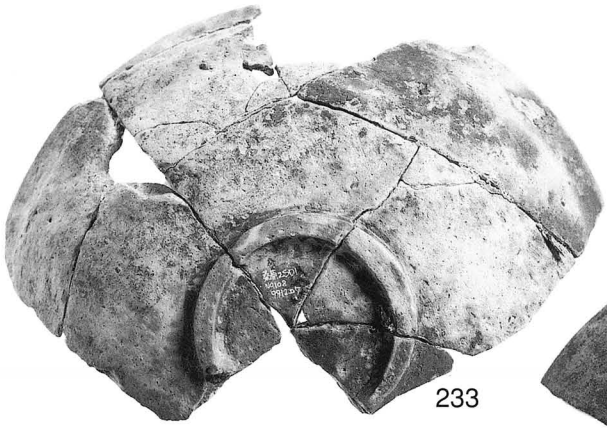
277

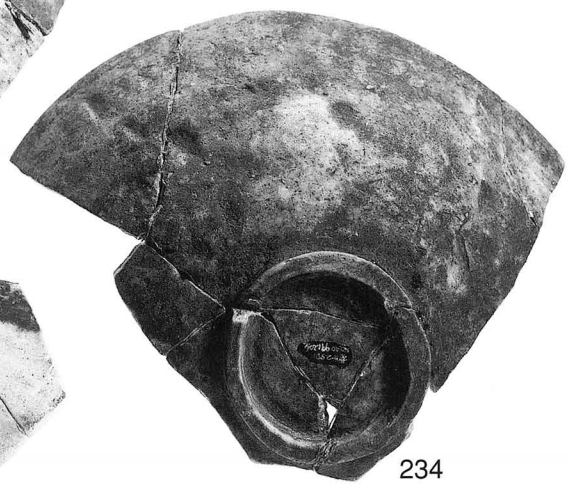

278

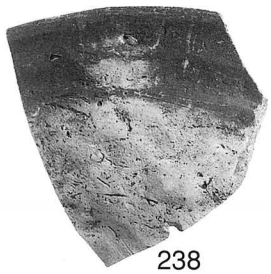
1．　SK２出土遺物（253.254.259.263.266）、SX１出土遺物（267.268.270.271.272.277.278）

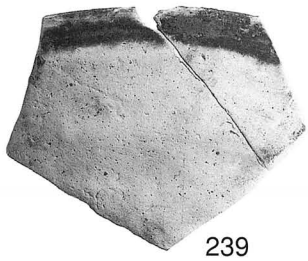
図版二六


230

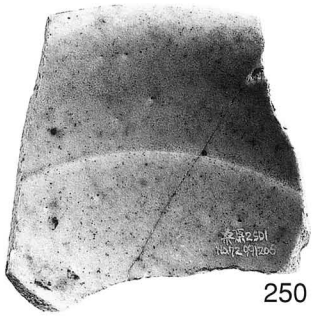

233


234


238


239

249


250

252

1．SD１出土遺物

桑原遺跡4次調査地

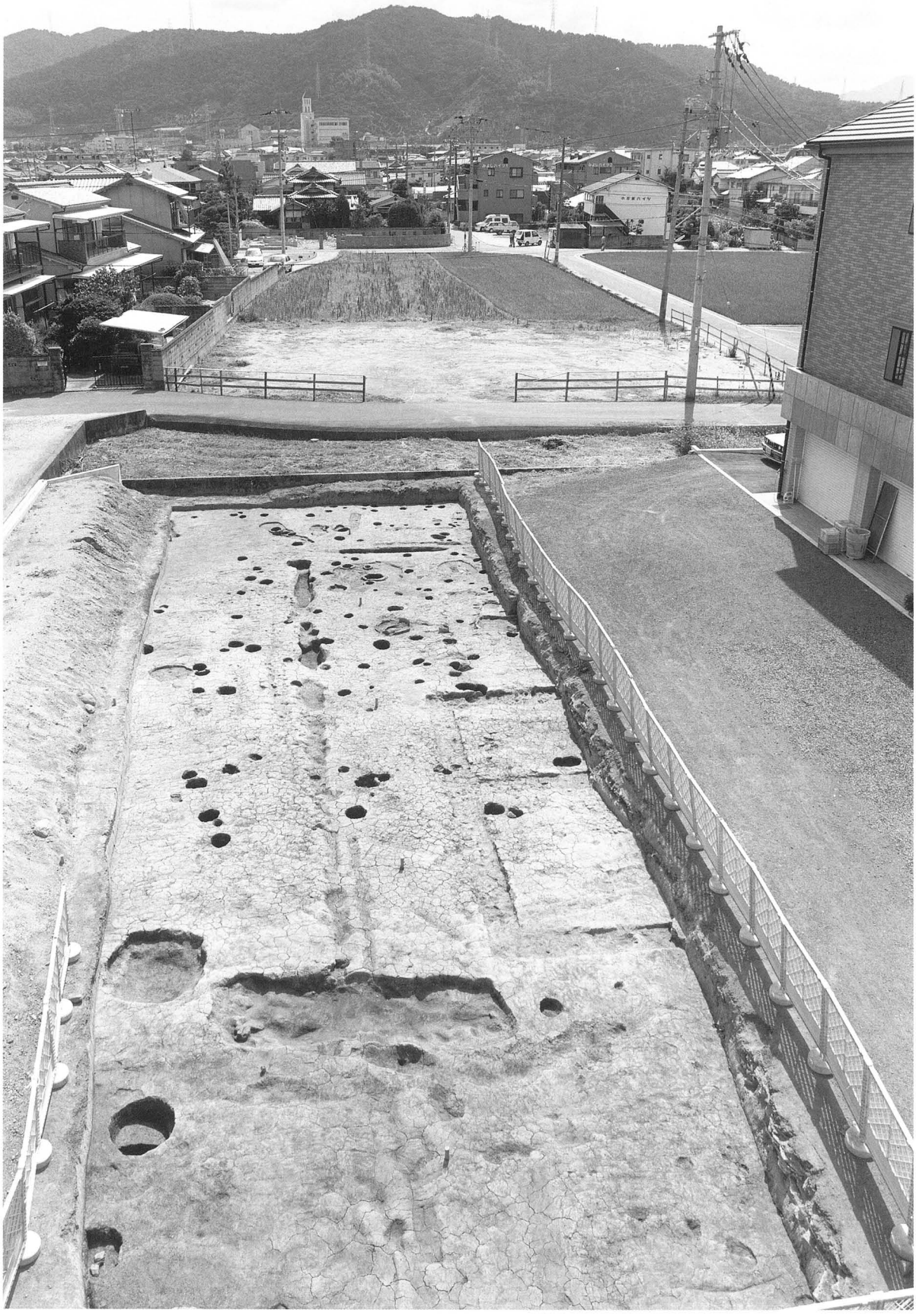
－１区の調査－

1． 調査前風景（西より）

2． 北壁土層（南より）

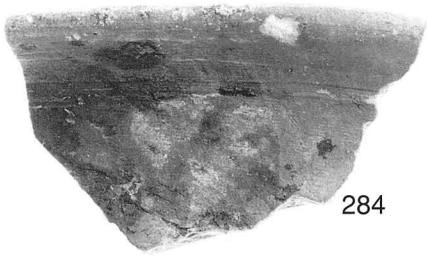
図版二八

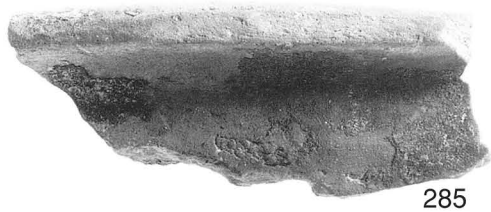
1．遺跡検出状況（西より）

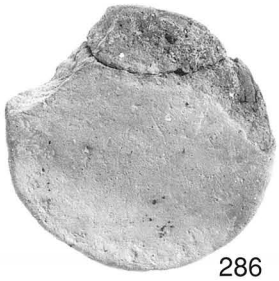


1． 遺跡完掘状況（西より）

図版三〇


284

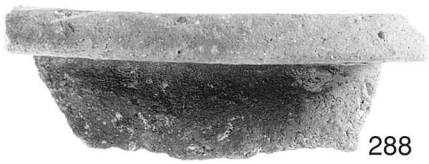

285


286

287

289

290


288

1．SK101出土遺物（284～287）、SK103出土遺物（288～290）

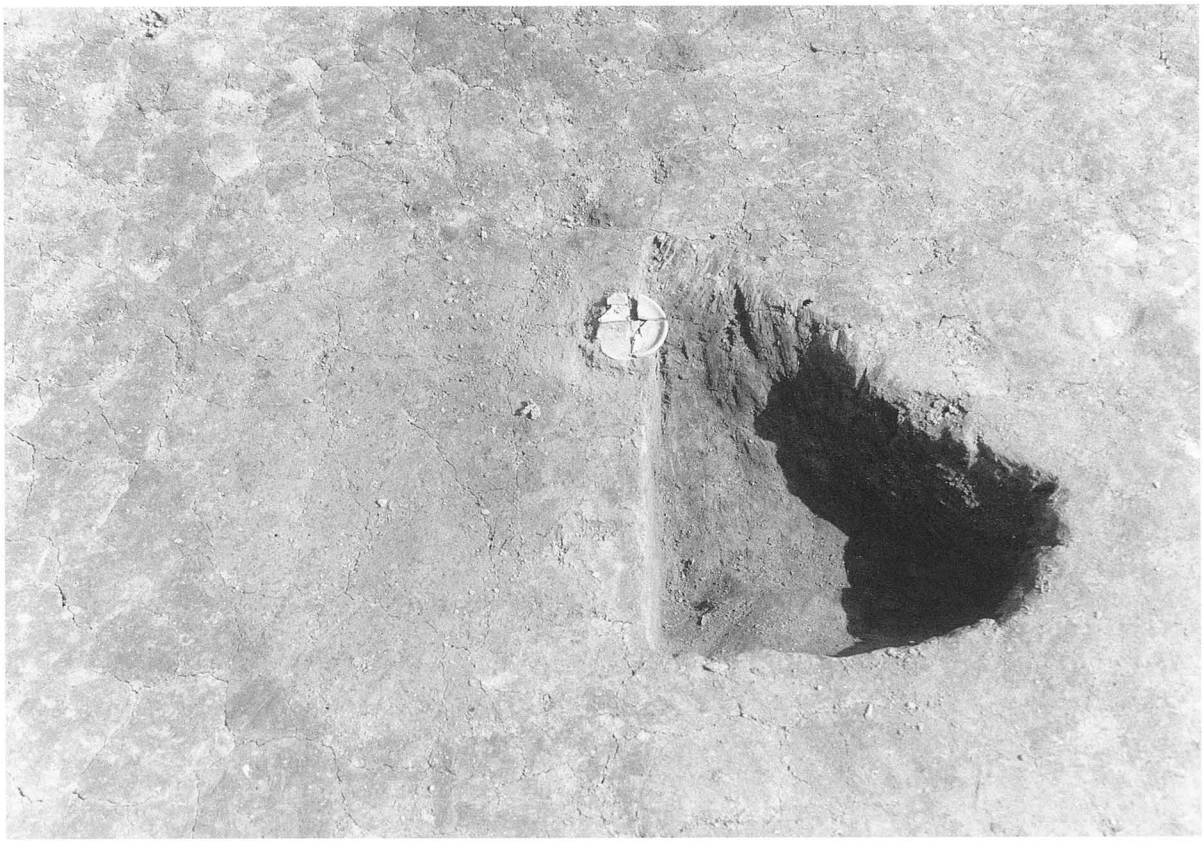
桑原遺跡4次調査地

－２区の調査－

1． 調査前風景（西より）

2． 第Ⅴ層上面遺構検出状況（西より）

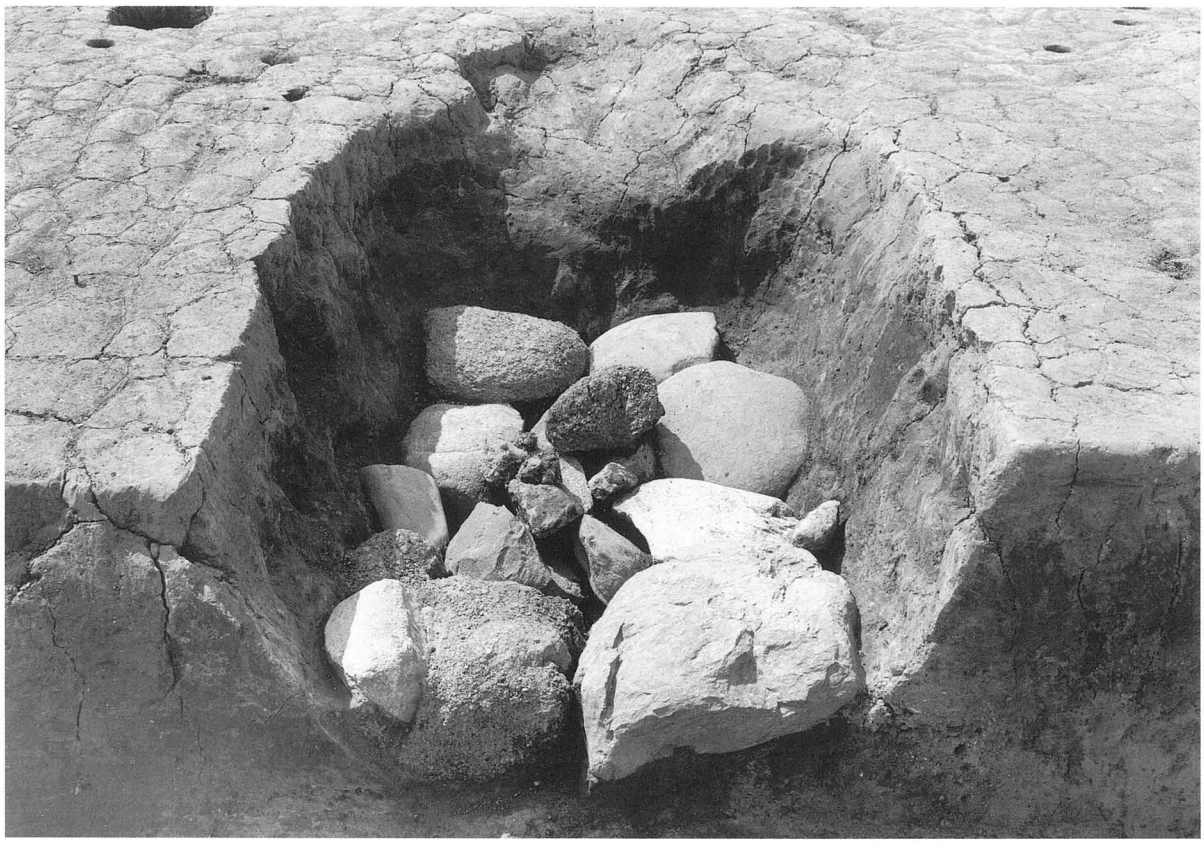
図版三一



1．SK208遺物出土状況（南より）

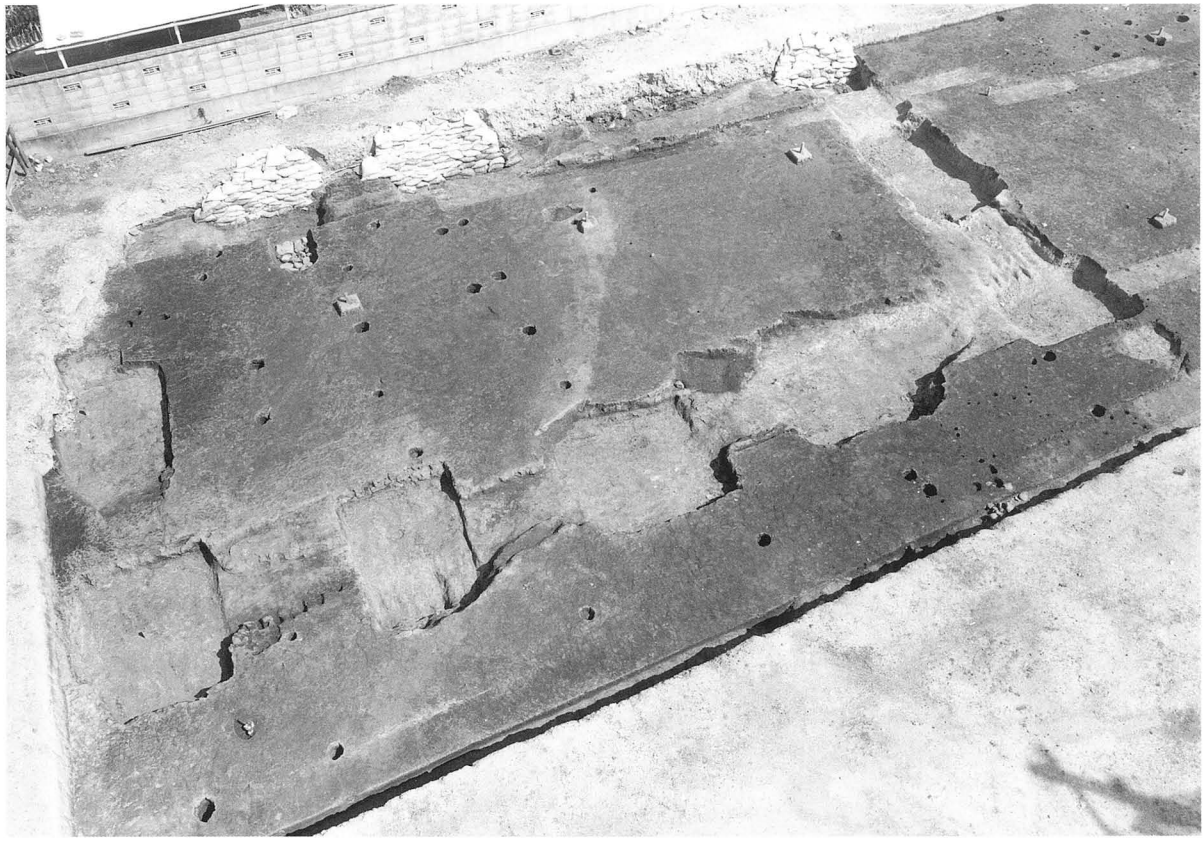
2．SK207検出状況（東より）

1． SK207土層（北より）



2． SK207完掘状況（北より）

図版三四



1．遺構完掘状況（中世）と第Ⅵ層上面SD201検出状況（南より）

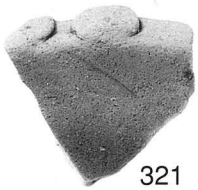
2．SK211遺物出土状況（西より）

1． SD201完掘状況（南より）

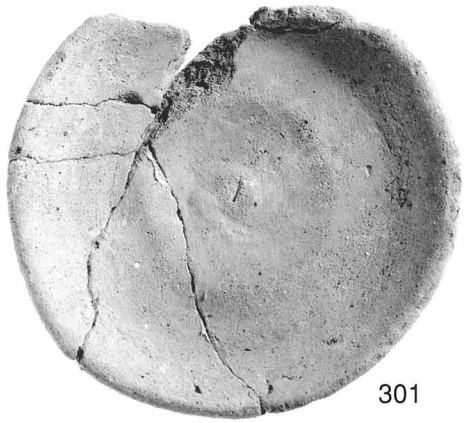
2． 完掘状況（西より）

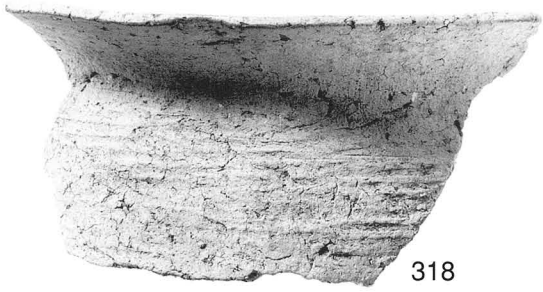
図版三六

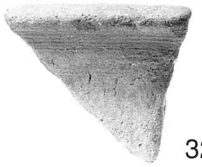
317


321

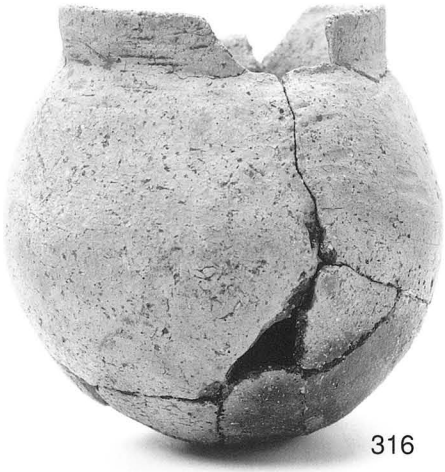
322

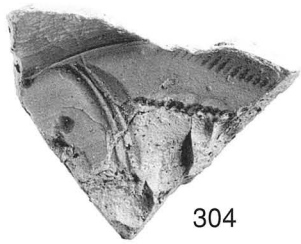

301


318


323

326


316


304

1．SD201出土遺物（317.318.321.322.323.326）、SP2169出土遺物（301）、SK207出土遺物（304）
SK211出土遺物（316）

桑原遺跡4次調査地

－３区の調査－

1． 調査前風景（南東より）

2． 遺構検出状況（東より）

図版三八

1．SK316完掘状況（北より）

2．SK319完掘状況（北より）

1． SP3476遺物出土状況（南より）

2． 完掘状況（東より）